鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（115）

南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（XXI）

（鹿児島西IC～伊集院IC間）

前山（まえやま）遺跡

２００７年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

前山遺跡とその周辺（手前 A地区，奥 B地区）

前山遺跡AT上位の石器

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島西ＩＣ～伊集院ＩＣ間）建設に伴って，平成７年度から平成８年度にかけて実施した鹿児島市（旧日置郡松元町）に所在する前山遺跡の発掘調査の記録です。

前山遺跡は，松元ＩＣ料金所の南側台地に位置し，東側約500ｍには仁田尾遺跡，谷を挟んで北側には枦堀遺跡があります。

本遺跡は，旧石器時代を中心に，縄文時代早期から後期，古墳時代の複合遺跡です。特に，旧石器時代の遺物は，台形様石器・ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・細石刃などの複数の時期の多様な石器が出土しています。また，シラスが厚く堆積している県本土において，シラス下位の石器群も出土しており，南九州の旧石器時代を考える上で，大変貴重な資料を提供しています。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に利用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及の一助になれば幸いです。

最後に，調査にあたりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所や旧東市来町教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　宮　原　景　信

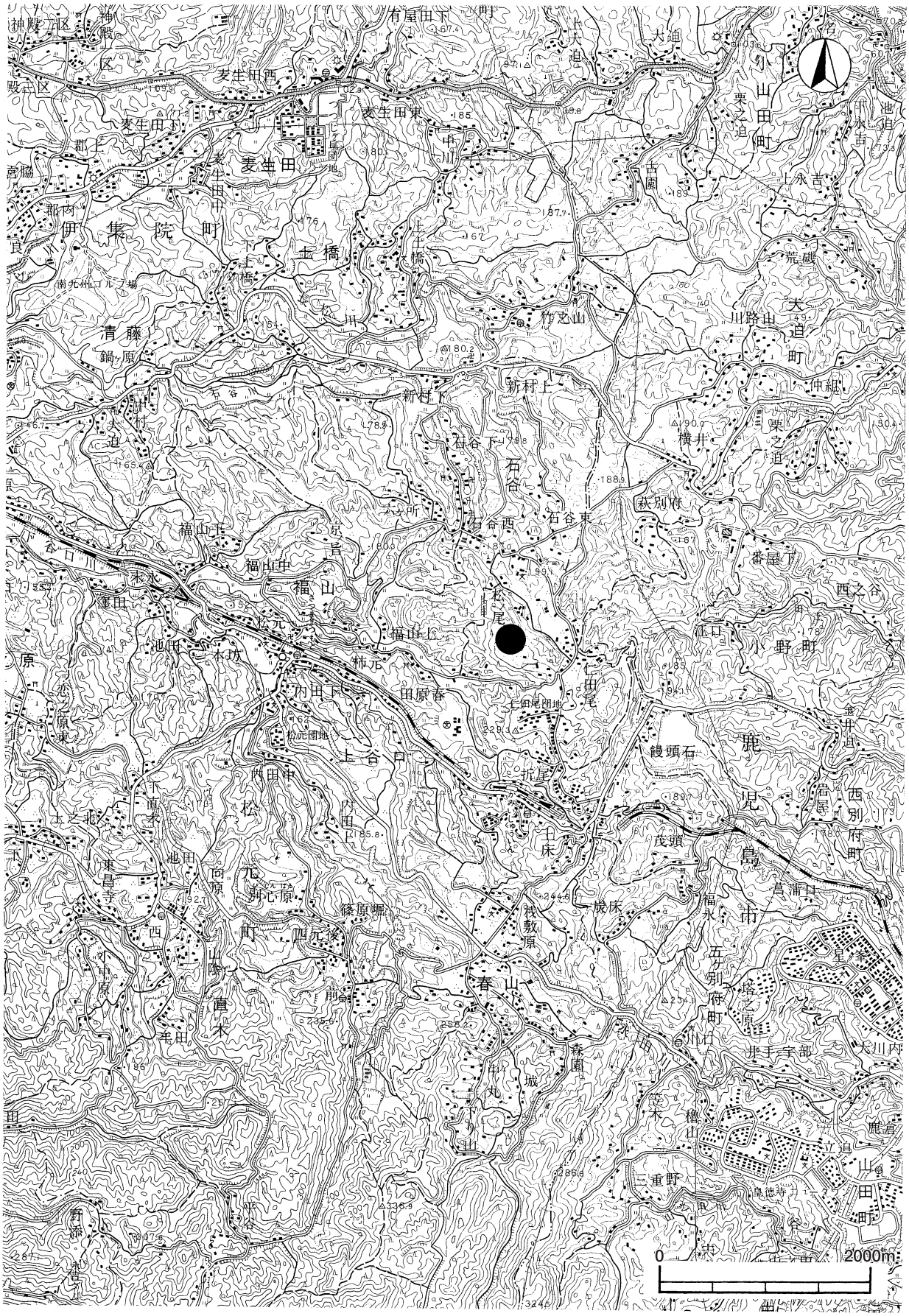
報 告 書 抄 録

ふりがな	まえやまいせき
書名	前山遺跡
副書名	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	ＸＸＩ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	115
編集者名	寒川　朋枝・宮田　栄二・相美　伊久雄・内村　光伸
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡ 0995－48－5811
発行年月日	西暦2007年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
まえやまいせき 前山遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 いしたにちょう 石谷町 まえやま 前山	463647	3108	31° 36′ 12″	130° 27′ 38″	確認調査 1991.7 1994.2 本調査 1995.4.24 ～ 1996.9.26	9,600㎡	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
前山遺跡	包含地	旧石器時代 第Ⅰ～Ⅳ文化層 縄文時代 早～後期 古墳時代	礫群，ブロック 集石，土坑 土坑	小型剥片石器，台形様石器，台形石器，剥片尖頭器，三稜尖頭器，ナイフ形石器，細石刃核，細石刃，掻器，削器，敲石 貝殻条痕文土器，吉田式，桑ノ丸式土器，轟Ｂ式，曽畑式，凹線文系土器，指宿式 成川式土器

前山遺跡は，旧石器時代を中心に，縄文時代早期から前期，古墳時代の遺構・遺物が出土した。旧石器時代では，AT下位のナイフ形石器文化期から細石刃文化期の５つの文化層が確認された。Ⅸ層の遺物は，A地区で約700点出土し，台形様石器主体のものも含む。Ⅷ層の遺物は，AB両地区で約8500点確認され，剥片尖頭器・三稜尖頭器・両面加工尖頭器・台形石器・ナイフ形石器など豊富な組成を示しており，国府型ナイフ形石器も含まれている。遺構は，礫群が1基検出されている。Ⅶｂ層の石器群は，B地区のみで約70点確認され，小型の三稜尖頭器がみられる。Ⅶｂ～Ⅶａ層の石器群は，A・B地区で約6500点確認され，ブロック・礫群のほか，小型ナイフ形石器・台形石器・折断剥片などが出土している。Ⅶａ層の石器群は，AB地区で約5000点確認され，細石刃核・細石刃・石鏃が出土している。シラス下位の石器群では，台形様石器群とは異なる類例のない石器群が出土し，注目される。



麦生田
麦生田西
麦生田東
伊集院町
上橋
清藤
鍋ヶ原
竹之山
新村上
新村下
石谷
石谷下
石谷西
石谷東
福山
福山下
福山中
福山上
松元
松尾
内田下
内田中
内田上
上谷口
松元町
春山
鹿児島市
小野町
大迫町
小山田町
荒磯
仲組
横井
萩別府
番屋下
西之谷
西別府町
五ヶ別府町
鰻頭石
茂頭
菖蒲口
福永
炭床
桟敷原
森園
城
三重野
鹿倉
立迫
山田町
0
2000m

遺跡位置図

例　　言

1　本書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島西ＩＣ～伊集院西ＩＣ間）建設に伴う前山遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県鹿児島市石谷町（旧日置郡松元町石谷）字前山に所在する。

3　発掘調査は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査事業は，平成７年４月24日～平成８年３月17日，平成８年４月22日～９月27日まで実施し，整理作業及び報告書作成は，平成14・15年度と平成18年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。

5　遺物番号は，通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。また，遺物取上番号は，通し番号ではなく各地区ごとに№１から付けられており，本報告書ではそのままそれを使用する。なお，取上地区と実際の座標上での地区が異なっている場合には，修正を行っている。また，Ⅲ～Ⅴ層遺物の取上番号はそれのみで通し番号になっており，そのまま遺物取上番号として表示する。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。石器の挿図縮尺は，Ⅶ層遺物は１分の１，Ⅲ～Ⅴ・Ⅷ層遺物は４分の３，Ⅸ層遺物は１分の１もしくは４分の３を基本とする。

7　本書で用いたレベル数値は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面の作成，写真の撮影は，調査担当者の鶴田静彦，橋口勝嗣，元田順子，桑波田武志が行った。空中写真撮影は，株式会社スカイサーベイに委託した。

9　遺構実測図のトレースは，整理作業員の協力を得て寒川朋枝が行った。

10　土器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て元田・寒川が行った。

11　石器の実測・トレースは，平成14年度は株式会社九州文化財研究所，平成15年度は国際航業株式会社，平成18年度は株式会社パスコ・株式会社九州文化財研究所に委託し，監修は牛ノ濵修・寒川・宮田栄二が行った。

12　テフラの分析，放射性炭素年代測定，植物珪酸体分析は，株式会社古環境研究所に委託した。

13　遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

14　本書の執筆は，第Ⅰ・Ⅱ章を牛ノ濵，Ⅲ・Ⅵ章を寒川，Ⅴ・Ⅶ章を宮田・寒川，Ⅳ章を宮田，Ⅷ・Ⅸ章を相美伊久雄・寒川，Ⅺ章を宮田・相美が担当し，旧石器時代の監修は宮田栄二が行った。編集は寒川・内村光伸が行った。

15　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，前山遺跡の遺物注記の略号はMYA（Ａ地区），MYB（Ｂ地区）である。

目　　次

巻頭図版

序文

抄録

例言

目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　西回り自動車道建設に伴う発掘調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　前山遺跡発掘調査の経緯 …… 6
　第３節　調査の組織 …… 6
　第４節　調査の経緯（日誌抄） …… 9
第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 12
　第１節　自然・地理的環境 …… 12
　第２節　歴史的環境 …… 12
第Ⅲ章　発掘調査の概要 …… 17
　第１節　発掘調査の方法 …… 17
　第２節　遺跡の層序 …… 17
第Ⅳ章　第Ⅰ文化層の調査 …… 23
　第１節　旧石器時代の概要と石材 …… 23
　第２節　第Ⅰ文化層の石器群 …… 25
第Ⅴ章　第Ⅱ文化層の調査 …… 51
　第１節　概要 …… 51
　第２節　遺構 …… 51
　第３節　第Ⅱ文化層Ａ地区の石器群 …… 57
　第４節　第Ⅱ文化層Ｂ地区の石器群 …… 86
第Ⅵ章　第Ⅲ文化層の調査 …… 106
　第１節　概要 …… 106
　第２節　遺構 …… 106
　第３節　第Ⅲ文化層Ａ地区の石器群 …… 119
　第４節　第Ⅲ文化層Ｂ地区の石器群 …… 133
第Ⅶ章　第Ⅳ文化層の調査 …… 164
　第１節　調査の概要とブロック …… 164
　第２節　第Ⅳ文化層Ａ地区の石器群 …… 168
　第３節　第Ⅳ文化層Ｂ地区の石器群 …… 174
第Ⅷ章　縄文時代の調査 …… 190
　第１節　調査の概要と遺構 …… 190
　第２節　縄文時代の土器 …… 194
　第３節　縄文時代の石器 …… 204
第Ⅸ章　古墳時代の調査 …… 205
　第１節　調査の概要 …… 205
　第２節　遺構 …… 205
　第３節　出土遺物 …… 209
第Ⅹ章　分析・同定 …… 215
　第１節　土層とテフラの分析 …… 215
　第２節　放射性炭素年代測定結果 …… 218
　第３節　植物珪酸体分析 …… 219
第Ⅺ章　発掘調査のまとめ …… 226
　第１節　旧石器時代各文化層の石器群 …… 226
　第２節　旧石器時代における石器石材の層位的変化 …… 232
　第３節　三稜尖頭器の変遷と小型化 …… 234
　第４節　前山遺跡と南九州の旧石器時代 …… 234
　第５節　縄文時代以降の土器について …… 236

写真図版

あとがき

挿　図　目　次

第１図　南九州西回り自動車道鹿児島西IC～伊集院IC間遺跡位置図 …… 5
第２図　前山遺跡の位置及び周辺遺跡 …… 15
第３図　遺跡周辺の地形図 …… 16
第４図　前山遺跡土層模式柱状図 …… 17
第５図　前山遺跡調査地域とグリッド配置図… 18
第６図　Ａ地区土層図（1） …… 19
第７図　Ａ地区土層図（2） …… 20
第８図　Ｂ地区土層図（1） …… 21
第９図　Ｂ地区土層図（2） …… 22
第10図　第Ⅰ文化層ブロック位置図 …… 27
第11図　第Ⅰ文化層遺物出土分布図 …… 28・29
第12図　第Ⅰ文化層１・２・６・７ブロック主要石器出土分布図 …… 30
第13図　第Ⅰ文化層１・２・７ブロック石器群器種別出土分布図 …… 31
第14図　第Ⅰ文化層１ブロック出土石器（1）… 32
第15図　第Ⅰ文化層１ブロック出土石器（2）… 33
第16図　第Ⅰ文化層３～５・８～10ブロック主要石器出土分布図 …… 34
第17図　第Ⅰ文化層３～５ブロック石器群器種別出土分布図 …… 35
第18図　第Ⅰ文化層１～４ブロック出土石器… 36
第19図　第Ⅰ文化層４・５・８ブロック出土石器 …… 38
第20図　第Ⅰ文化層１・３・５・７・８ブロック出土石器 …… 39
第21図　第Ⅰ文化層８～10ブロック石器群器種別出土分布図 …… 40
第22図　第Ⅰ文化層９･10ブロック出土石器… 41
第23図　第Ⅰ文化層10ブロック出土石器 …… 42
第24図　第Ⅰ文化層11・12ブロック主要石器出土分布図 …… 43
第25図　第Ⅰ文化層11・12ブロック石器群器種別出土分布図 …… 44
第26図　第Ⅰ文化層11・12ブロック出土石器… 45
第27図　第Ⅰ文化層12ブロック出土石器 …… 46
第28図　第Ⅰ文化層ブロック外出土石器（1）… 47
第29図　第Ⅰ文化層ブロック外出土石器（2）… 48
第30図　第Ⅰ文化層ブロック外出土石器（3）… 49
第31図　第Ⅱ文化層１号礫群 …… 51
第32図　１号礫群重量別分布図 …… 51
第33図　第Ⅱ文化層のブロックと礫群位置図 …… 52
第34図　第Ⅱ文化層Ａ地区遺物出土分布図 …… 54・55
第35図　第Ⅱ文化層１～３ブロック（Ｕ１）主要石器出土分布図 …… 56
第36図　第Ⅱ文化層１～３ブロック（Ｕ１）石器群器種別出土分布図 …… 57
第37図　第Ⅱ文化層１～３ブロック出土石器… 59
第38図　第Ⅱ文化層３ブロック，Ｕ１ブロック外出土石器 …… 60
第39図　第Ⅱ文化層４～13ブロック（Ｕ２）主要石器出土分布図 …… 62
第40図　第Ⅱ文化層４～13ブロック（Ｕ２）石器群器種別出土分布図 …… 63
第41図　第Ⅱ文化層４ブロック出土石器 …… 63
第42図　第Ⅱ文化層５～８ブロック出土石器… 64
第43図　第Ⅱ文化層９～10ブロック出土石器… 66
第44図　第Ⅱ文化層10～11ブロック出土石器… 67
第45図　第Ⅱ文化層Ｕ２ブロック外出土石器（1） …… 68
第46図　第Ⅱ文化層Ｕ２ブロック外出土石器（2） …… 69
第47図　第Ⅱ文化層14～25ブロック（Ｕ３）主要石器出土分布図 …… 71
第48図　第Ⅱ文化層14～25ブロック（Ｕ３）石器群器種別出土分布図 …… 72
第49図　第Ⅱ文化層14ブロック出土石器 …… 73

第50図　第Ⅱ文化層15・17・18ブロック出土石器 …… 74
第51図　第Ⅱ文化層19ブロック出土石器 …… 76
第52図　第Ⅱ文化層20ブロック出土石器 …… 77
第53図　第Ⅱ文化層20・21ブロック周辺礫状況 …… 77
第54図　第Ⅱ文化層21ブロック出土石器 …… 79
第55図　第Ⅱ文化層22～25ブロック出土石器 … 80
第56図　第Ⅱ文化層Ｕ３ブロック外出土石器（1） …… 81
第57図　第Ⅱ文化層Ｕ３ブロック外出土石器（2） …… 82
第58図　第Ⅱ文化層Ｂ地区出土石器分布図 …… 84・85
第59図　第Ⅱ文化層26～30ブロック（Ｕ４）主要石器出土分布図 …… 87
第60図　第Ⅱ文化層26～30ブロック（Ｕ４）石器群器種別出土分布図 …… 88
第61図　第Ⅱ文化層26ブロック出土石器 …… 88
第62図　第Ⅱ文化層26・27ブロック出土石器 … 90
第63図　第Ⅱ文化層28ブロック出土石器 …… 91
第64図　第Ⅱ文化層28・29ブロック出土石器 … 92
第65図　第Ⅱ文化層30ブロック，Ｕ４ブロック外出土石器 …… 93
第66図　第Ⅱ文化層Ｕ４ブロック外出土石器 … 94
第67図　第Ⅱ文化層31～35ブロック（Ｕ５）主要石器出土分布図 …… 95
第68図　第Ⅱ文化層31～35ブロック（Ｕ５）石器群器種別出土分布図 …… 97
第69図　第Ⅱ文化層31ブロック出土石器 …… 97
第70図　第Ⅱ文化層32ブロック出土石器 …… 98
第71図　第Ⅱ文化層33ブロック出土石器 …… 99
第72図　第Ⅱ文化層34ブロック，Ｕ５ブロック外出土石器 …… 101
第73図　第Ⅱ文化層ブロック外石器群器種別出土分布図 …… 102
第74図　第Ⅱ文化層ブロック外出土石器 …… 102
第75図　第Ⅲ文化層のブロックと礫群位置図 … 107
第76図　第Ⅲ文化層２号礫群 …… 108
第77図　第Ⅲ文化層３号礫群 …… 109
第78図　第Ⅲ文化層４～６号礫群 …… 110
第79図　第Ⅲ文化層２～５号礫群重量別分布図 …… 111
第80図　第Ⅲ文化層７・８号礫群 …… 112
第81図　第Ⅲ文化層６号礫群重量別分布図 …… 112
第82図　第Ⅲ文化層９号礫群 …… 113
第83図　第Ⅲ文化層７～10号礫群重量別分布図 …… 114
第84図　第Ⅲ文化層10号礫群 …… 115
第85図　第Ⅲ文化層Ａ地区遺物出土分布図 …… 116・117
第86図　第Ⅲ文化層１ブロック石器群出土分布図 …… 118
第87図　第Ⅲ文化層１ブロック，１ブロック周辺出土石器 …… 119
第88図　第Ⅲ文化層２～５ブロック主要石器出土分布図 …… 121
第89図　第Ⅲ文化層２～５ブロック石器群器種別出土分布図 …… 122
第90図　第Ⅲ文化層２・３ブロック出土石器 … 123
第91図　第Ⅲ文化層４ブロック出土石器（1） … 124
第92図　第Ⅲ文化層４ブロック出土石器（2） … 125
第93図　第Ⅲ文化層５ブロック出土石器 …… 126
第94図　第Ⅲ文化層６～９ブロック主要石器出土分布図 …… 127
第95図　第Ⅲ文化層６～９ブロック石器群器種別出土分布図 …… 128
第96図　第Ⅲ文化層６・７ブロック出土石器 … 129
第97図　第Ⅲ文化層８・９ブロック出土石器 … 131
第98図　第Ⅲ文化層６・７ブロック，ブロック外出土石器 …… 132
第99図　第Ⅲ文化層ブロック外出土石器 …… 133
第100図　第Ⅲ文化層Ｂ地区石器群出土分布図 …… 134・135

第101図　第Ⅲ文化層10ブロック石器群器種別出土分布図 …… 137
第102図　第Ⅲ文化層10ブロック出土石器 …… 137
第103図　第Ⅲ文化層11ブロック主要石器（ナイフ形石器・台形石器）出土分布図 …… 138
第104図　第Ⅲ文化層11ブロック・ブロック外主要石器出土分布図 …… 139
第105図　第Ⅲ文化層11ブロック石器群器種別出土分布図 …… 140
第106図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（1）… 141
第107図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（2）… 143
第108図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（3）… 144
第109図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（4）… 145
第110図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（5）… 146
第111図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（6）… 147
第112図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（7）… 148
第113図　第Ⅲ文化層12ブロック主要石器出土分布図 …… 150
第114図　第Ⅲ文化層13～15ブロック主要石器出土分布図 …… 151
第115図　第Ⅲ文化層12～15ブロック石器群器種別出土分布図 …… 152
第116図　第Ⅲ文化層12ブロック出土石器（1）… 153
第117図　第Ⅲ文化層12ブロック出土石器（2）… 154
第118図　第Ⅲ文化層13･14ブロック出土石器… 156
第119図　第Ⅲ文化層14・15ブロック，ブロック外出土石器 …… 157
第120図　第Ⅲ文化層ブロック外出土石器（1）… 158
第121図　第Ⅲ文化層10・11・13ブロック，ブロック外出土石器（2） …… 159
第122図　第Ⅲ文化層ブロック外出土石器（3）… 160
第123図　第Ⅳ文化層のブロック位置図 …… 165
第124図　第Ⅳ文化層Ａ地区遺物出土状況 …… 166・167
第125図　第Ⅳ文化層１ブロックとその周辺石器群出土分布図 …… 169
第126図　第Ⅳ文化層１ブロック及びその周辺出土石器 …… 169
第127図　第Ⅳ文化層２ブロック主要石器 …… 170
第128図　第Ⅳ文化層２ブロック出土石器 …… 171
第129図　第Ⅳ文化層Ｂ地区遺物出土分布図 …… 172・173
第130図　第Ⅳ文化層３・４ブロック石器群出土分布図 …… 175
第131図　第Ⅳ文化層３ブロック出土石器 …… 175
第132図　第Ⅳ文化層４ブロック出土石器 …… 176
第133図　第Ⅳ文化層５・６ブロックとその周辺石器群出土分布図 …… 176
第134図　第Ⅳ文化層５・６ブロック出土石器 …… 177
第135図　第Ⅳ文化層７ブロック主要石器 …… 179
第136図　第Ⅳ文化層７ブロック石器群出土分布図 …… 180
第137図　第Ⅳ文化層７ブロック，ブロック外出土石器（1） …… 180
第138図　第Ⅳ文化層７ブロック，ブロック外出土石器（2） …… 181
第139図　縄文時代検出遺構分布図 …… 190
第140図　縄文時代１・２号集石 …… 191
第141図　縄文時代３・４号集石 …… 192
第142図　縄文時代５～７号集石 …… 193
第143図　土器一括出土状況 …… 194
第144図　縄文時代土器出土分布図 …… 195
第145図　縄文土器Ⅰ・Ⅱ類 …… 196
第146図　縄文土器Ⅱ～Ⅴ類 …… 197
第147図　Ｆ－27区縄文時代土器出土分布図… 197
第148図　縄文土器Ⅵ類 …… 198
第149図　縄文土器Ⅵ～Ⅸ類 …… 200
第150図　縄文時代石器出土分布図 …… 202
第151図　縄文時代の石器１ …… 203
第152図　縄文時代の石器２ …… 204
第153図　古墳時代の遺構・土坑（1） …… 205
第154図　古墳時代の遺構・土坑（2） …… 206

第155図　土坑内出土遺物１ …… 207
第156図　土坑内出土遺物２ …… 208
第157図　古墳時代の遺構分布図 …… 208
第158図　古墳時代遺物出土状況図 …… 210
第159図　古墳時代出土土器 …… 211
第160図　前山遺跡調査範囲と残存部分 …… 214
第161図　Ⅰ－15区南壁土層柱状図 …… 217
第162図　Ⅰ－15区南断面の植物珪酸体分析結果 …… 222
第163図　前山遺跡旧石器時代石器群の編年 … 231
第164図　旧石器時代各層の石材別重量比グラフ …… 233

表　目　次

第１表　南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表 …… 4
第２表　前山遺跡周辺遺跡一覧表 …… 14
第３表　第Ⅰ文化層石器観察表 …… 50
第４表　第Ⅱ文化層石器観察表（1） …… 103
第５表　第Ⅱ文化層石器観察表（2） …… 104
第６表　第Ⅱ文化層石器観察表（3） …… 105
第７表　第Ⅲ文化層石器観察表（1） …… 161
第８表　第Ⅲ文化層石器観察表（2） …… 162
第９表　第Ⅲ文化層石器観察表（3） …… 163
第10表　第Ⅳ文化層石器観察表（1） …… 182
第11表　第Ⅳ文化層石器観察表（2） …… 183
第12表　細石刃計測表（1） …… 183
第13表　細石刃計測表（2） …… 184
第14表　細石刃計測表（3） …… 185
第15表　細石刃計測表（4） …… 186
第16表　細石刃計測表（5） …… 187
第17表　細石刃計測表（6） …… 188
第18表　細石刃計測表（7） …… 189
第19表　縄文土器観察表（1） …… 200
第20表　縄文土器観察表（2） …… 201
第21表　縄文時代石器観察表 …… 203
第22表　古墳時代遺構内出土土器観察表 …… 213
第23表　古墳時代包含層出土土器観察表 …… 213
第24表　前山遺跡のテフラ検出分析結果 …… 216
第25表　Ⅰ－15区南壁断面の植物珪酸体分析結果 …… 222
第26表　旧石器時代各層の石材別重量表 …… 233

図　版　目　次

図版１　調査区周辺（調査前・南東より）／調査区全景（北より）
図版２　Ⅰ－15・16区南壁／Ⅰ－15区地質調査地点土層／北東部より調査区を仰ぐ／発掘調査風景／Ａ地区西部岩盤露出状況
図版３　第Ⅱ文化層１号礫群検出状況／第Ⅲ文化層２～６号礫群検出状況
図版４　第Ⅲ文化層７～10号礫群検出状況／Ｇ－19区第Ⅰ文化層遺物出土状況／Ⅰ－16区台形石器出土状況
図版５　Ｇ－14区第Ⅰ文化層１ブロック遺物出土状況／Ⅰ－15区南端第Ⅰ文化層遺物出土状況／Ⅰ－17区第Ⅱ文化層ナイフ形石器出土状況／Ｈ－18区第Ⅱ文化層剥片尖頭器出土状況／Ｇ－14区第Ⅰ文化層台形石器出土状況
図版６　Ｈ－18区Ⅷ下層遺物出土状況／Ｈ－18区Ⅷ層遺物出土状況／Ｈ・Ⅰ－17区第Ⅱ文化層３ブロック国府型ナイフ出土状況／Ｇ－15区第Ⅱ文化層21ブロック遺物出土状況

図版７　Ｇ－15区第Ⅱ文化層２ブロック遺物出土状況／Ｆ－26区第Ⅱ文化層剥片尖頭器出土状況／Ｅ－27区Ⅶ～Ⅷ層遺物出土状況／Ｄ－28区Ⅶｂ～Ⅷ層遺物出土状況／Ｅ・Ｆ－27・28区第Ⅳ文化層７ブロック遺物出土状況
図版８　Ｆ－23区第Ⅳ文化層３ブロック遺物出土状況／Ｆ－16区第Ⅳ文化層遺物出土状況／Ｇ・Ｈ－19区第Ⅳ文化層２ブロック遺物出土状況／調査風景
図版９　３～６号集石検出状況／Ｆ－24区縄文土器出土状況／土坑内成川式土器出土状況／現地説明会風景
図版10　第Ⅰ文化層石器群
図版11　第Ⅰ文化層石器群
図版12　第Ⅰ文化層石器群
図版13　第Ⅰ文化層石器群
図版14　第Ⅰ文化層石器群
図版15　第Ⅰ文化層石器群
図版16　第Ⅰ文化層石器群
図版17　第Ⅰ文化層石器群
図版18　第Ⅱ文化層１～３ブロック石器群
図版19　第Ⅱ文化層３～７ブロック石器群
図版20　第Ⅱ文化層８～11ブロック石器群
図版21　第Ⅱ文化層Ｕ２内／14ブロック石器群
図版22　第Ⅱ文化層15～19ブロック石器群
図版23　第Ⅱ文化層20～25ブロック石器群
図版24　第Ⅱ文化層Ｕ３内出土三稜尖頭器
図版25　第Ⅱ文化層Ｕ３内石器群
図版26　第Ⅱ文化層26・27ブロック石器群
図版27　第Ⅱ文化層28～30ブロック石器群
図版28　第Ⅱ文化層Ｕ４内，31・32ブロック石器群
図版29　第Ⅱ文化層Ｕ４内出土三稜尖頭器
図版30　第Ⅱ文化層33・34ブロック，Ｕ５内石器群
図版31　第Ⅲ文化層１～４ブロック石器群
図版32　第Ⅲ文化層４・５ブロック石器群
図版33　第Ⅲ文化層６～９ブロック石器群
図版34　第Ⅲ文化層６・７ブロック，ブロック外石器群
図版35　第Ⅲ文化層10・11ブロック石器群
図版36　第Ⅲ文化層11ブロック石器群
図版37　第Ⅲ文化層11ブロック石器群
図版38　第Ⅲ文化層12ブロック石器群
図版39　第Ⅲ文化層14・15ブロック，ブロック外石器群
図版40　第Ⅲ文化層10・11・13ブロック，ブロック外石器群
図版41　第Ⅳ文化層１～６ブロック石器群
図版42　第Ⅳ文化層７ブロック石器群
図版43　縄文土器１・石器
図版44　縄文土器２
図版45　成川式土器１
図版46　成川式土器２

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　西回り自動車道建設に伴う発掘調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内に埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化課が平成２年８月に鹿児島西ＩＣ～伊集院ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を行ったところ，23ヶ所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて，平成３年度から平成15年度にかけて，毎年度，計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお，事業区間内（鹿児島西ＩＣ～伊集院ＩＣ）の遺跡の概要については，以下の通りである。

１　山ノ中　　鹿児島市西別府町山ノ中に所在し，標高100～133ｍの急峻な地形に立地する。山頂には中世城館の一つである小田城跡が良好な状態で残っている。調査面積は9,200㎡で，縄文時代後期前の竪穴住居跡17基が検出された。出土土器は，指宿式土器に先行する土器が主体となり南福寺式や磨消縄文，それに指宿式土器が少量出土した。また，高知県でみられる松ノ木式土器もみつかった。石器も石斧・石皿・磨石が多量に出土した。その他，弥生時代の磨製石鏃や古墳時代の成川式土器，平安時代の土師器・須恵器・墨書土器が出土した。中世では古道跡が検出され，陶磁器や古銭も出土した。

２　宮尾　　鹿児島市石谷町宮尾に所在し，仁田尾の割合に狭小な台地から東に張り出した標高約200ｍの小台地端部に立地する。調査面積は8,400㎡である。旧石器時代ではナイフ形石器文化期のブロック１ヶ所，縄文時代では早期の集石４基と平栫式・塞ノ神式・条痕文土器，石鏃・石匙・石皿などが出土したほか，後期と推定される落し穴を主とする土坑101基が検出された。その他，奈良～平安時代の土師器・須恵器と古代の掘立柱建物跡１棟が焼土域７ヶ所や土師器とともに検出された。

３　仁田尾　　鹿児島市石谷町仁田尾・高塚に所在し，標高約190ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は55,000㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化），縄文時代（草創期～晩期），平安時代の遺構・遺物が発見された。ナイフ形石器文化はシラス直上から43ヶ所のブロック，56基の礫群と２万点を越える遺物が出土している。遺物はナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・掻器・削器・彫器・石錐・敲石等が出土している。細石刃文化は薩摩火山灰層の下位

から68ヶ所のブロック，6基の礫群，16基の落し穴と9万点を上回る遺物が出土した。縄文時代では，遺構が集石10基（早期4，前～後期6），土坑11基（早期7，晩期4），落し穴2基（晩期）が検出され，また，アカホヤ火山灰層の上面で晩期の掘立柱建物跡が検出された。土器は（草創期）無文土器，（早期）前平式・吉田式・手向山式・押型文土器，（前期）轟式・曽畑式・深浦式土器，（中期）船元式土器，（後期）指宿式・市来式土器，（晩期）黒川式土器の浅鉢・深鉢や布目圧痕土器・丹塗土器が出土した。石器は石鏃・石匙・削器・石斧・磨石・石皿等が出土した。平安時代では掘立柱建物跡・溝・土坑等の遺構が土師器・須恵器・陶磁器と一緒に検出された。

4　西ノ原Ｂ　鹿児島市石谷町西ノ原に所在し，仁田尾遺跡の隣接地で，小さな谷を挟んだ北側に突出した標高約190ｍの痩せ尾根上の台地に立地する。調査面積は1,600㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化から細石刃文化と古墳時代の遺物が出土した。旧石器時代では礫群1基と14ヶ所のブロックが検出され，ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃・細石刃核・スクレイパーが出土した。古墳時代の遺物は成川式土器であった。

5　前山　鹿児島市石谷町前山に所在し，標高約200ｍの台地北側に立地する。調査面積は9,600㎡である。遺跡は，Ａ・Ｂ地区に分かれ，旧石器時代が主体である。ナイフ形石器文化期の時期と細石刃文化期の遺構・遺物が発見された。シラスの腐植土層の下位から台形石器・ナイフ形石器・スクレイパーが出土し，上位からはナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形石器や敲石などが出土し，2基の礫群が検出された。細石刃文化期からは細石刃・細石刃核・スクレイパー等が4基の礫群とともに出土した。縄文時代では，早期の吉田式土器と集石，前期の轟式土器が出土し，古墳時代では成川式土器が出土した。

6　柊堀　鹿児島市石谷町柊堀に所在し，標高約195ｍのシラス台地縁辺部に立地する。谷を隔てた台地には前山遺跡がある。調査面積は5,900㎡である。旧石器時代では細石刃文化期のブロックが19ヶ所検出され，遺物は三稜尖頭器・台形石器・スクレイパー・細石刃・細石刃核が出土した。縄文時代では早期の集石，晩期の土坑と溝状遺構が検出され，遺物は岩本式・前平式・平栫式・轟式・阿高式・黒川式土器等が出土し，石器は石鏃・石匙・磨石・砥石等が出土した。また，古墳時代の成川式土器や古代～中世の須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁が出土した。

7　前原　鹿児島市福山町前原・鬼ヶ迫上に所在し，標高は約180ｍの舌状を呈するシラス台地先端部に立地する。調査面積は53,200㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化），縄文時代（草創期・早期・前期・晩期）の遺構・遺物が発見されたが，主体は縄文時代早期前半である。この時期の遺構はＡ・Ｂ・Ｃの三地区に分けられる。（Ａ）12基の竪穴住居跡が2支群に分かれ，連穴土坑を含む土坑約130基と集石14基が，前平式・石坂式土器と検出された。（Ｂ）竪穴住居

跡13基，連穴土坑35，土坑45，集石４，祭祀遺構１と幅1.5～２ｍの道路跡２条が前平式・吉田式・石坂式土器と検出された。（Ｃ）竪穴住居跡３基，土坑131，落し穴１基が吉田式・石坂式土器と検出された。石器は，石斧・石皿・磨石・削器・石鏃・軽石製品・剣・砥石等が出土した。縄文早期後半では，塞ノ神式土器が落し穴２基，溝１条と出土し，押型文土器・手向山式土器も出土した。また，縄文時代晩期の黒色研磨土器・組織痕土器を主体に，少量の曽畑式土器も出土した。

8　フミカキ　鹿児島市福山町フミカキに所在し，標高約170ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は7,200㎡で縄文時代を主とする遺跡である。早期の連穴土坑２基・集石10基が検出され，早期の吉田式・石坂式・政所式・押型文・中原式土器や前期の曽畑式・轟式，晩期の黒川式土器が出土した。晩期では平織りの組織痕土器が出土した。また，弥生時代後期の土器や平安時代の須恵器も少量出土した。

9　山下堀頭　鹿児島市福山町山下堀頭に所在し，シラス台地に囲まれた開析谷の標高約133ｍの台地裾部に立地する。調査面積は5,500㎡で，縄文時代前期の曽畑式土器と後期の土器が少量出土した。弥生時代後期では竪穴住居が３基検出され，遺物は中津野式土器や鉄剣等が出土した。住居内からは軽石製品が出土し，周辺からは磨製石鏃も10数点出土している。平安時代末頃の方形周溝状遺構が１基検出され，主体部からはなにも出土しなかったが，周溝から小型の軽石製石塔の笠石片が出土した。

※　刊行報告書

「杤堀遺跡・西ノ原Ｂ遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（30）　2002.3

「宮尾遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（73）　2004.3

「フミカキ遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（74）　2004.3

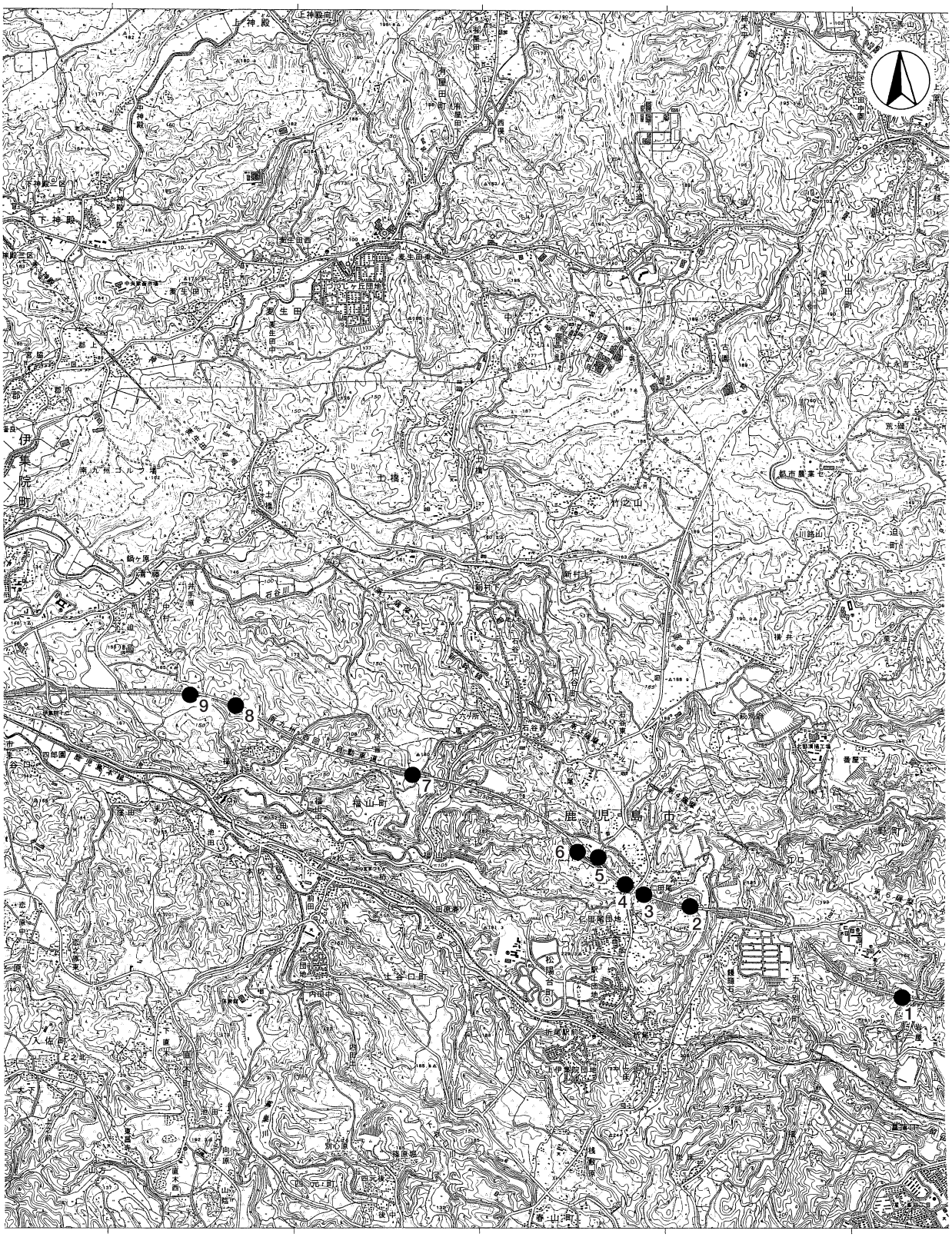
「山下堀頭遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（95）　2005.3

「山ノ中遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（102）　2006.3

「前原遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（107）　2007.1

第１表　南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表（鹿児島西IC～伊集院IC）

番号	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	調査期間	調査員	時　代	概　　要
1	山下堀頭	福山町	5500	H6.6～10	東 菅牟田	縄文 弥生 平安	曽畑式土器 住居跡，鉄剣・石鏃・軽石製品 周溝墓，須恵器 県埋文センター報告書92（2005）
2	フミカキ	福山町	7200	H6.10～7.3 H7.5～6	東 菅牟田 西園	縄文 平安	集石，石坂式・押型文・黒川式土器 須恵器 県埋文センター報告書74（2004年）
3	前　　原	福山町	53200	H3.10～H5.11 H6.1～H8.10	牛ノ濵 新町・前迫 前村・元田 東・園田 菅牟田	旧石器 縄文	礫群，台形石器・三稜尖頭器・細石刃 竪穴住居跡・道跡・連穴土坑・集石 前平式・吉田式・石坂式・押型文・黒川式 石槍・石皿・磨石・石鏃・石斧 県埋文センター報告書107（2007）
4	杉　　堀	石谷町	5900	H4.12～H5.3 H5.4～6	牛ノ濵 新町 元田	旧石器 縄文 平安	細石刃核・細石刃 溝，前平式・平栫式・轟式・黒川式・石槍 砥石・青磁・須恵器・土師器・石鍋 県埋文センター報告書30（2001）
5	**前　　山**	**石谷町**	**9600**	**H7.5～H8.3** **H8.4～9**	**鶴田** **桑波田** **橋口** **元田**	**旧石器** **縄文** **古墳**	**礫群・ブロック，台形様石器・ナイフ** **剥片尖頭器・削器・掻器・細石刃核・細石刃** **貝殻文系土器・吉田式・轟式** **成川式土器** **県埋文センター報告書115（本報告書）**
6	西ノ原Ｂ	石谷町	1600	H.6.10～11	牛ノ濵 園田	旧石器 古墳	礫群，ナイフ・三稜尖頭器・細石刃核 成川式土器 県埋文センター報告書30（2001）
7	仁田尾	石谷町	55000	H5.4～H6.3 H6.4～H7.3 H7.7～H8.3	池畑・宮田 今村・寺原 園田・前村 牛ノ濵 常田・繁昌 三垣	旧石器 縄文 古墳～平安	礫群・落し穴・ブロック ナイフ・尖頭器・台形石器・細石刃核・細石刃 掘立柱建物跡・溝・集石・落し穴・土坑 前平式・吉田式・轟式・曽畑式・黒川式土器 掘立柱建物跡，須恵器・土師器
8	宮　　尾	石谷町	8400	H5.12～H6.3 H8.4～9	牛ノ濵 東 繁昌 三垣	旧石器 縄文 奈良・平安	剥片 集石・落し穴・土坑，条痕文・塞ノ神式土器 掘立柱建物跡・溝，須恵器・土師器 県埋文センター報告書73（2004）
9	山ノ中	西別府町	9200	H6.4～6 H7.6～H8.3	東 菅牟田 西園	縄文 弥生 平安 中世近代	住居跡・土坑・炉跡，南福寺式・出水式 指宿式・磨消縄文・下剥峯式・石鏃・石匙 石核・玉類・石斧・敲石・磨石・軽石製品 中津野式土器 土坑，須恵器・土師器 陶磁器・古銭 県埋文センター報告書103（2005）



1　山ノ中遺跡　　2　宮尾遺跡　　3　仁田尾遺跡
4　西ノ原Ｂ遺跡　　5　前山遺跡　　6　杁堀遺跡
7　前原遺跡　　8　フミカキ遺跡　　9　山下堀頭遺跡

第１図　南九州西回り自動車道鹿児島西IC～伊集院IC間遺跡位置図

第2節　前山遺跡発掘調査の経緯

第1節で述べたように，建設省（国土交通省）九州建設局による鹿児島～市来間の南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設計画に伴い，平成2年8月に鹿児島西ＩＣ～伊集院ＩＣ間の埋蔵文化に関わる分布調査が行われた。その結果，23ヶ所の遺跡散布地及び確認調査が必要な地点が所在することが判明した。

前山遺跡については，平成3年7月と平成6年2月に確認調査を行い，遺跡の範囲や性格等を把握した。これを受けて平成7年4月24日から平成8年9月26日まで（実働日）発掘調査を実施し，報告書作成を平成10・15・18年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。調査面積は9,600㎡である。

第3節　調査の組織

平成3年度（確認調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	向山　勝貞
企画・調整	鹿児島県教育庁文化課	主任文化財研究員	
		兼埋蔵文化財係長	吉元　正幸
発掘調査担当	鹿児島県教育庁文化課	主査	牛ノ濵　修
	〃	文化財調査員	新町　正
調査事務担当	鹿児島県教育庁文化課	主幹兼係長	濱﨑　琢也
	〃	主査	枇杷　雄二
	〃	主事	新屋敷由美子

平成5年度（確認調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	大久保　忠昭
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	水口　俊雄
	〃	主任文化財主事	
		兼調査課長	戸﨑　勝洋
発掘調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	牛ノ濵　修
	〃	文化財研究員	東　和幸
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	下園　勝一
	〃	主事	中村　和代

平成７年度（発掘調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	内村　正弘
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	川原　信義
	〃	主任文化財主事	
		兼調査課長	戸﨑　勝洋
発掘調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	鶴田　静彦
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財調査員	桑波田　武志
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	成尾　雅明
	〃	主事	追立　ひとみ
調査指導者	別府大学文学部教授		橘　昌信
	鹿児島県考古学会会長		河口　貞徳
	同志社大学助教授		松藤　和人

平成８年度（発掘調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	尾﨑　進
	〃	主任文化財主事	
		兼調査課長	戸﨑　勝洋
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課長補佐	新東　晃一
	〃	主任文化財主事	
		兼第三調査係長	池畑　耕一
発掘調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	鶴田　静彦
	〃	文化財調査員	桑波田　武志
	〃	文化財研究員	橋口　勝嗣
	〃	〃	元田　順子
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	前屋敷　裕徳
	〃	主事	追立　ひとみ
調査指導者	鹿児島短期大学学長		三木　靖

平成10年度（整理作業）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
整理主体者	鹿児島県教育委員会		
整理責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永　和人
整理企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長	尾﨑　進
〃		主任文化財主事 兼調査課長	戸﨑　勝洋
〃		調査課長補佐 兼第一調査係長	新東　晃一
〃		主任文化財主事 兼第二調査係長	立神　次郎
整理担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	元田　順子
整理事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	前屋敷　裕徳
〃		主査	政倉　孝弘
〃		主事	溜池　佳子

平成15年度（整理作業）

事業主体者	国土交通省鹿児島国道事務所		
整理主体者	鹿児島県教育委員会		
整理責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原　俊孝
整理企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中　文雄
〃		主任文化財主事 兼調査課長	新東　晃一
〃		調査課長補佐	立神　次郎
〃		主任文化財主事 兼第三調査係長	牛ノ濵　修
整理担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事 兼第三調査係長	牛ノ濵　修
整理事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	平野　浩二
〃		主査	脇田　清幸
〃		主事	池　珠美
〃		主事	福山　恵一郎

平成18年度（報告書作成作業）

事業主体者	国土交通省鹿児島国道事務所		
作成主体者	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	上今　常雄（～7月31日）
			宮原　景信（8月1日～）
作成企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	牛ノ濵　修
	〃	主任文化財主事	宮田　栄二
作成担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事	宮田　栄二
	〃	文化財調査員	寒川　朋枝
作成事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務課係長	寄生田　正秀
	〃	主査	蒲池　俊一

報告書作成検討委員会　平成18年12月15日　宮原所長ほか12名
報告書作成指導委員会　平成18年12月14日　新東次長ほか3名
企画担当者　鶴田靜彦，黒川忠広

第4節　調査の経緯（日誌抄）

平成3年度確認調査

STA318とSTA319の南側境界杭を基準に10mグリッドを設定した。その区間に沿って，7ヶ所のトレンチ（1～7トレンチ：Ⅰ－7・10，G～Ⅰ－12，F～H－15，G・H－19区）を設定し，確認調査を行った。その結果，Ⅴ層黒褐色土層から縄文時代早期の集石が検出され，Ⅶ層の粘質層からは旧石器時代の遺物が出土した。

平成5年度確認調査

平成3年度確認調査地点より，約30m東側の台地中央部（B地区周辺）に任意に20m×2mのトレンチを2ヶ所設定し（8・9トレンチ：E・F－24・25，G－25区），確認調査を行った。その結果，Ⅲ層の黄褐色火山灰層から轟式土器が，Ⅳ層の暗褐色火山灰土から円筒形土器が出土した。また，Ⅶ層の暗茶褐色粘質火山灰土から石英質の剥片が出土し，少なくとも旧石器時代から縄文時代までの複合遺跡であることが確認された。

平成７年度調査

平成７年４・５月

４月24日（月）より作業開始。Ａ地区Ｆ・Ｇ・Ｈ－14区Ⅴ層上面まで，Ｆ・Ｇ・Ｈ－16・17区Ⅳ層掘り下げ。Ⅰ－14～17区表土剥ぎ終了。遺構は，Ｇ－14区Ⅲａ層より６号集石，Ｆ－14区Ⅶ層（後に横転による岩盤層の持ち上がりと判明），Ｇ－16区Ⅶ層より礫群検出。Ⅰ－15区Ⅳ層ピット検出。Ｆ－17区Ⅲａ層よりほぼ完形の成川式土器出土。Ⅲ・Ⅳ層より成川式土器，縄文早期・前期土器出土。

平成７年６月

Ａ地区Ⅰ－14～17区Ⅴ層上面検出。Ｆ・Ｇ・Ｈ－16・17区Ⅴ層検出。Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ⅰ－14～16区Ⅶ層上面まで重機による掘り下げ終了。Ⅰ－15・16区ピット検出，写真撮影。Ｇ－16区Ⅲ層より成川式土器片，轟式土器片，焼土確認。Ｆ・Ｇ－16・17区に横転確認。

平成７年７月

Ａ地区Ｆ～Ⅰ－14～17区のⅦａ・Ⅶｂ層掘り下げ。Ⅶａ層上面より細石刃破片とチップ，Ⅶａ層下面より剥片尖頭器１点とスクレイパー１点出土。全体的に出土状況はまばらである。

平成７年８月

Ａ地区Ｆ～Ⅰ－14・15区のⅦ・Ⅷ層の掘り下げ及びⅨ層の確認。Ｆ～Ｈ－16・17区の２ヶ所でⅨ層遺物（黒曜石・頁岩の剥片数点，石核，ナイフ，スクレイパー）を確認。Ⅶ～Ⅷ層では黒曜石の剥片・チップ，剥片尖頭器，スクレイパー出土。９日，串木野高校成尾英仁先生来跡。

平成７年９月

Ｆ～Ⅰ－14～17区のⅦａ層検出終了。Ｆ－17区において礫群と細石刃のブロックを検出。Ｆ～Ⅰ－14・15区のⅦｂ～Ⅷ層検出。５ヶ所のナイフの時期を含むブロック検出。さらにⅨ層で２ヶ所のブロック確認。９月27・28日，別府大学教授橘昌信先生現地指導。

平成７年10月

Ａ地区Ｆ～Ⅰ－14～17区ＡＴ上位の調査終了。13区以西は再度確認調査を行った結果，遺物の出土はみられなかった。Ｆ～Ⅰ－17～19区Ⅴ層まで掘り下げ。Ｇ－18区Ⅲ層集石検出，実測。ピット，成川式土器確認。Ｅ－15～17区掘り下げ，Ｅ－17区成川式土器検出土坑１基確認。

平成７年11月

Ａ地区Ｆ～Ｈ－17・18区Ⅶａ層調査。工事の関係上，Ｂ地区Ｃ～Ｅ－27・28区Ⅴ層まで調査終了，Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。Ⅲ層より成川式・吉田式出土，Ⅴ層より集石検出。９日，文化庁主任調査官岡村道雄先生来跡。20日，神奈川県立埋蔵文化財センター白石浩之氏ほか来跡。

平成７年12月

Ｂ地区Ｃ～Ｅ－27・28区Ⅶ～Ⅸ層の調査。出土遺物は細石刃核・細石刃など数点。

平成８年１月

Ｂ地区Ｃ～Ｅ－27・28区調査終了。ＡＴ下位は出土遺物なし。細石刃期のブロック４ヶ所，ナイフ形石器期のブロック２ヶ所，縄文時代は吉田式，集石遺構１基検出。Ａ地区Ｆ～Ⅰ－17～20区Ⅶａ～Ⅷ層掘り下げ。18日，九州大学助手西健一郎先生，22日，鹿児島大学助教授渡辺芳郎

先生，23日，奈良文化財研究所玉田芳英先生，24日，川内純心大学教授下野敏見先生，31日，愛媛県犬飼徹夫先生来跡，現地指導。

平成８年２月

Ｅ～Ｉ－17～20区Ⅶｂ～Ⅷ層調査。第一トレンチ，第二トレンチ確認調査。２日，鹿児島県考古学会会長河口貞徳先生現地指導，７日，広島大学文学部助手藤野次史先生，20日，岡山理科大学教授小林博昭先生来跡，27日，同志社大学教授松藤和人先生現地指導，28日，京都大学文学部助手千葉豊先生来跡。

平成８年３月

Ａ地区東側Ⅶａ層掘り下げ。Ｂ地区Ｃ～Ｆ－24～26区Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ。５日，熊本大学助教授木ノ下尚子先生，同大学助教授小畑弘己先生，12日，ノートルダム清心女子大学教授高橋護先生来跡。18日に平成７年度の調査終了。

平成８年度調査

平成８年４・５月

４月22日より作業開始。５月23日よりトータルステーションによる遺物取り上げ開始。Ａ地区はⅨ層上面で面揃え。Ｂ地区はＤ～Ｇ－25・26区Ⅶａ層まで調査終了。細石刃，細石刃核，石鏃，台形石器，折断剥片，スクレイパー，尖頭器など出土。礫群４基検出。

平成８年６月

Ａ地区Ｅ～Ｇ－17～19区，Ｃ～Ｆ－25・26区のⅨ層調査。Ｇ－19区でブロック１ヶ所検出。Ｂ地区はＤ～Ｇ－25・26区Ⅶ～Ⅷ層を調査。細石刃，細石刃核，三稜尖頭器，削器など出土。5日，鹿児島短期大学学長三木靖先生現地指導。

平成８年７月

Ａ地区東側半分Ⅸ層までほぼ終了。黒曜石・チャートのフレーク・チップ約50点のブロック検出。ＡＴ下位掘り下げ。西側Ｅ～Ｈ－14・15区Ⅸ層調査。ブロック２ヶ所検出。Ｂ地区西側Ｄ～Ｆ－23～26区Ⅶ～Ⅷ層調査。18日台風のため，事務所・休憩室のガラス戸破損。

平成８年８月

Ａ地区Ｆ～Ｉ－17区以外ほぼⅨ層まで調査終了。Ｆ～Ｉ－17区についてはトラフ及び表土を除去し，Ⅷａ層調査。Ⅸ層では玉髄系や頁岩を中心とするブロック５ヶ所検出。Ｂ地区は調査区東側３分の２終了。西側Ｄ～Ｇ－23・24区Ⅷ層まで調査。29日，熊本県文化課木崎康弘氏・中国吉林大副教授陳國慶先生来跡。

平成８年９月

Ａ地区Ｆ～Ｉ－17区掘り下げ。Ｂ地区西側掘り下げ。26日調査終了。

整理・報告書作成

平成10・15年度に整理作業と石器実測委託，平成18年度に報告書作成作業を行った。

整理作業従事者：伊藤ひとみ，蔵元真奈美，末原涼子，徳重貴子，日高千津子（50音順，敬称略）

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境

第１節　自然・地理的環境

前山遺跡は，鹿児島県鹿児島市石谷町（旧松元町）に所在する。

旧松元町は，1889年（明治22）４月上谷口・福山・春山・直木・入佐・石谷の６か村を統合，上伊集院村として発足，1960年（昭和35）４月町制を施行，日置郡松元町と改称した。2004年11月１日には１市５町で市町村合併を行うこととなり，鹿児島市に編入された。

石谷町は，薩摩半島の中部に位置し，東部は鹿児島市，北西部は伊集院町，南部は吹上町・日吉町に接し，鹿児島市の中心地からわずか13㎞の距離にあるため，近年，鹿児島市のベッドタウンとして人口増加が著しいところである（平成７年　10,916人，平成16年　12,698人）。

春山の八の久保（標高391.7ｍ）を最高峰とし，概して150～200ｍのシラス台地とその浸食谷による多数の渓谷からなっている。集落は河川の沖積平野と台地の縁辺部に立地している。河川は吹上浜に流入する神之川水系の上谷口川・石谷川・福山川などと，鹿児島湾に流入する新川系の河川があるが一般に小規模な河川である。この地域は薩摩半島の鞍部となって東西交通の要路となっている。概ね平坦な台地で畑作地帯となっており，茶畑が卓越している。松元町の先史時代の遺跡はシラス台地縁辺部にあり，湧水源の周辺にあることが多い。

前山遺跡は，標高約200ｍの台地北側にあり，谷を隔てた北側の台地には柊堀遺跡がある。

第２節　歴史的環境

石谷町周辺では，昭和20年代後半に河口貞徳氏により，木ヶ暮遺跡や東昌寺遺跡の発掘調査が行われたのみで，昭和59年度発行の遺跡地名表では松元町の15ヶ所が紹介されているのみであったが，平成３年度から始まった南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査等が行われたこと等により，遺跡数が一気に増加し，現在では57ヶ所の遺跡が周知されている。そこで，周辺遺跡と併せて主な遺跡を時代順に紹介したい。

旧石器時代

旧松元町では，南九州西回り自動車道建設が始まるまでは，旧石器時代の遺跡は発見されていなかったが，今では全国から注目される遺跡が数多く発見され，県内でも有数の旧石器時代遺跡群となっている。特に，仁田尾台地には大規模な遺跡群が多くみられる。

仁田尾遺跡は，遺跡の規模・出土遺物の多さで西日本最大規模の旧石器時代の遺跡といわれている。ナイフ形石器文化と細石刃文化の２文化層から約12万点を超える遺物が，ブロックを形成して出土した。遺構としては，礫群を伴い細石刃文化では，現在日本で一番古いだろうといわれている逆茂木をもつ落し穴が検出された。遺物は，ナイフ形石器・尖頭器・台形石器・細石刃核・細石刃等が出土している。仁田尾遺跡から南側約0.5㎞にある仁田尾中Ｂ遺跡では，20万点を超える遺物が出土し，遺構は礫群が100基以上検出している。柊堀遺跡では，細石刃文化期の19ヶ所のブロックが検出され，細石刃核・細石刃・三稜尖頭器・台形石器・スクレイパー等が出土した。柊堀遺跡の隣接地の宮ヶ迫遺跡では，ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・細石刃核・細石刃が出土している。旧石器時代の細石刃と縄文時代草創期の土器や石鏃が供伴した横井竹ノ山遺跡や瀬戸頭遺跡

も隣接している。

縄文時代

前原遺跡では，縄文時代早期の集落が発見された。住居跡20数基，道跡２本や連穴土坑，集石，土坑などが検出され，集落構成や生活用具の移り変わりを知る上で貴重な遺物が出土した。遺物は前平式・吉田式・石坂式・押型文・岩崎式・黒川式土器などが石槍・石皿・磨石・石鏃・石斧等と出土している。その他，縄文時代早期の層から砥石と磨製石剣や磨製石鏃が出土して注目されている。仁田尾遺跡も旧石器だけでなく縄文時代の遺構・遺物も多数見つかった。草創期の土器や石鏃，早期の前平式・吉田式，前期の轟式・曽畑式土器が出土した。また，晩期の黒川式土器に伴って掘立柱建物跡（２間×３間）が検出されている。フミカキ遺跡では，集石と石坂式・押型文・黒川式土器が，木ヶ暮遺跡は，1952年（昭和27）に河口貞徳氏が調査した遺跡で，指宿式土器の単純遺跡の様相を示し，ごく少量の市来式土器がその上部から発見された。遺物は台地上から谷に向かって投棄したものが斜面に堆積したものである。石皿や敲石も出土している。その他，鹿児島市の山ノ中遺跡では後期の住居跡が傾斜面に検出され，指宿式・中原式土器が出土している。特筆すべきは高知県で出土する松ノ木式土器が出土し，縄文時代の交易を知る上で貴重な遺跡となった。

弥生時代

松元町は，台地が多いせいか弥生時代の遺跡は少ないが，1952年（昭和27）に河口貞徳氏が調査した東昌寺遺跡は標高137m，水田からの比高差は７mで，谷頭の舌状台地に立地している。県内で最初に発見された弥生前期の遺跡である。甕形土器に特徴があり，口縁がわずかに外反し頸部の突帯とともに刻目を施すもの，口縁部と頸部に刻目突帯を巡らすもの，頸部に段を有し，口縁部と頸部に刻目を施すものがある。底部はいずれも平底である。また，山下堀頭遺跡では，中津野式土器の時期の住居跡が３基検出された。住居内からは鉄剣や軽石製品が出土し，周辺からは磨製石鏃も10数点出土している。

古墳時代

古墳時代の遺跡は，集落等は発見されていないが，成川式土器が前山遺跡や仁田尾遺跡・前原遺跡などで出土している。また，西ノ原遺跡では小型壺の完形品が以前見つかっている。地名表では弥生時代の後期になっているが，成川式土器であり，古墳時代に入るものと思われる。

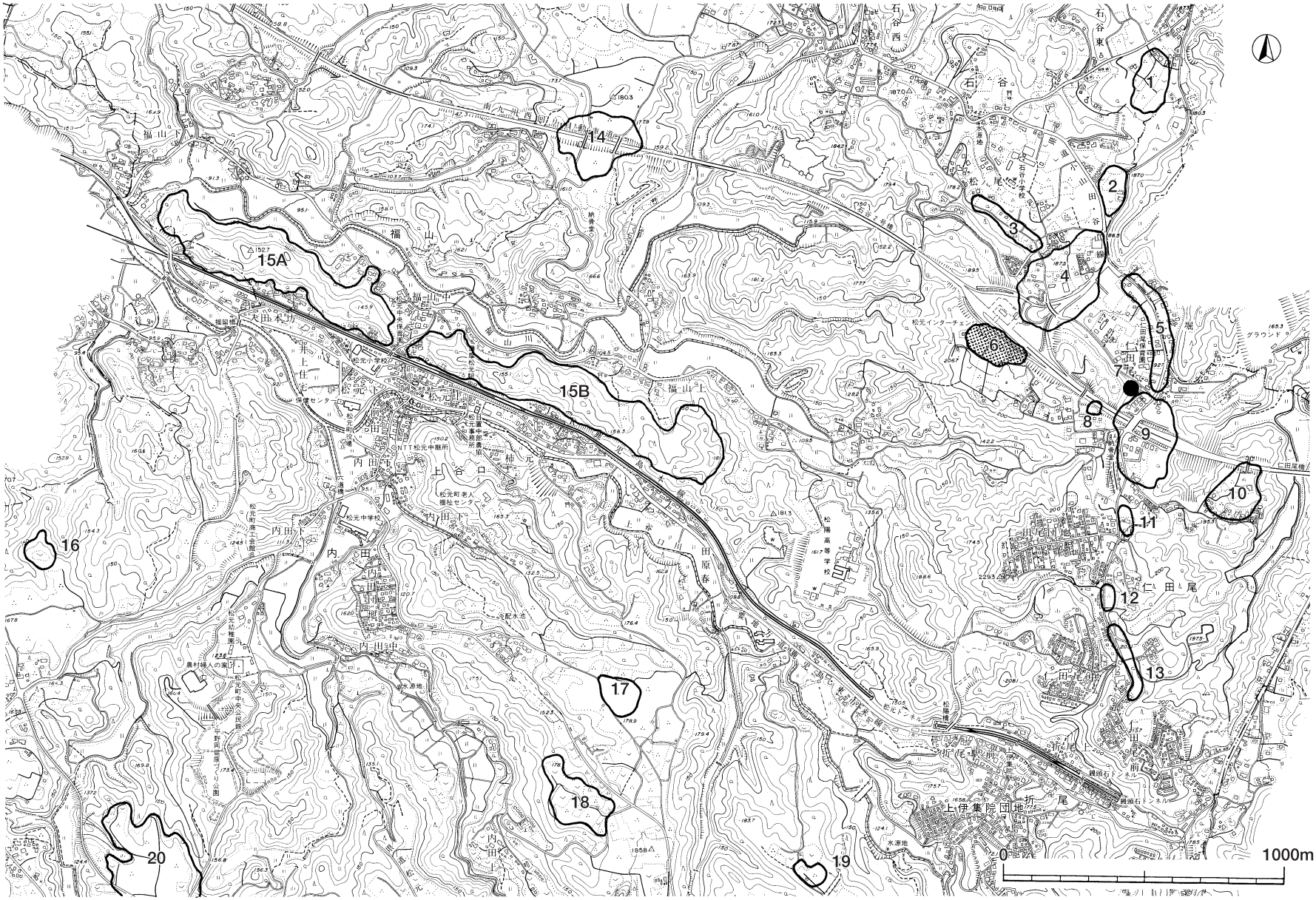
古代～中世

古代から中世にかけては，宮尾遺跡や仁田尾遺跡・フミカキ遺跡などで須恵器や土師器・陶磁器などが出土している。山下堀頭遺跡では，平安時代の方形周溝状遺構が１基検出され，周溝から小型の軽石製石塔の笠石片が出土した。また周辺からは，須恵器・土師器・陶磁器等も出土している。

第２表　前山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時　代	遺物・備考	文　献
1	伏野	鹿児島市石谷町	旧石器	ナイフ形石器・細石刃・剥片・連結土坑	①
2	隠迫	鹿児島市石谷町	旧石器 縄文	ナイフ形石器・三稜尖頭器・細石刃・石核 手向山式・曽畑式・指宿式土器・石匙等	① ②
3	宮ヶ迫	鹿児島市石谷町	旧石器	ナイフ形石器・台形石器・尖頭器等 細石刃・細石刃核・石鏃等	②
4	杁堀Ａ	鹿児島市石谷町	旧石器 縄文 平安	礫群，台形石器・三稜尖頭器等 細石刃・細石刃核・石槍等 溝・集石，前平式・平栫式等 青磁・土師器・須恵器等	①
5	杁堀Ｂ	鹿児島市石谷町	旧石器	細石刃 晩期土器・石斧・石鏃・磨石・石皿等	①
6	**前山**	**鹿児島市石谷町**	**旧石器** **縄文** **古墳**	**台形様石器・使用跡がある石器** **剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器** **細石刃・細石刃核・石鏃** **集石，前平式・轟式土器等** **成川式土器**	**本報告書**
7	西ノ原Ａ	鹿児島市石谷町	古墳	成川式土器（小型壺完形）	
8	西ノ原Ｂ	鹿児島市石谷町	旧石器 古墳	礫群，ナイフ形石器・尖頭器・台形石器等 成川式土器	③
9	仁田尾	鹿児島市石谷町	旧石器 縄文 古墳～平安	礫群，ナイフ形石器・剥片尖頭器・台形石器・ 落し穴・集石デポ，細石刃核等 掘立柱建物跡・溝・集石・落し穴 前平式・吉田式・轟式・市来式・黒川式等 掘立柱建物跡・溝，須恵器・土師器等	①
10	宮尾	鹿児島市石谷町	縄文 奈良・平安	集石・落し穴，塞ノ神式・条痕文土器等 掘立柱建物跡，須恵器・土師器等	
11	御仮屋跡	鹿児島市石谷町	旧石器	三稜尖頭器・剥片尖頭器・台形石器・細石刃核等	①
12	仁田尾中Ａ	鹿児島市石谷町	旧石器 縄文	ナイフ形石器・尖頭器・細石刃核等 集石，曽畑式・石鏃等	平成14・15 年度本調査
13	仁田尾中Ｂ	鹿児島市石谷町	旧石器 縄文	礫群，三稜尖頭器・彫器・ナイフ形石器・ 敲石・台石・細石刃・細石刃核等 集石，石坂式・轟式・曽畑式・指宿式等	平成12～15 年度本調査
14	前原	鹿児島市福山町	旧石器 縄文	礫群，台形石器・三稜尖頭器 細石刃・細石刃核 住居跡・道跡・連穴土坑・集石・土坑等 前平式・吉田式・石坂式・晩期土器等 石剣・石槍・石皿・磨製石鏃・石皿等	
15 A B	谷口城跡 （上栫城） （下栫城）	 鹿児島市上谷口町 鹿児島市福山町	 室町後期 室町後期	 空堀 空堀	
16	喜次郎岡	鹿児島市上谷口町	古墳～平安	土器片　　3分布	
17	谷頭原	鹿児島市上谷口町	縄文～古墳	土器片　　3分布	
18	詰土原	鹿児島市上谷口町	古墳	8分布	
19	大堀原	鹿児島市上谷口町	縄文・古墳	7確認	
20	向原	鹿児島市直木町	縄文	3分布	

参考文献
① 鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006　「伏野・隠迫・杁堀・仁田尾・御仮屋遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書　101
② 松元町教育委員会　2000　「宮ヶ迫遺跡」松元町埋蔵文化財発掘調査報告書　3
③ 鹿児島県立埋蔵文化財センター　2001「杁堀遺跡・西ノ原Ｂ遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書　30



第２図　前山遺跡の位置及び周辺遺跡

第３図　遺跡周辺の地形図

第Ⅲ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の方法

発掘調査は，設計図面をもとにして10m×10mのグリッドを設定した。グリッドは西から東へ１・２・３・・列，北から南へＡ・Ｂ・Ｃ・・列として地区を設定した。調査区は，浅い谷を隔てて二ヶ所に分かれているため，便宜上西側調査区をＡ地区，東側調査区をＢ地区として調査を行った。発掘調査は，Ａ地区，Ｂ地区を並行して伐採，重機による表土の除去を行い，時代ごとに調査し，発掘調査終了と同時に建設省へ引き渡しを行った。

第２節　遺跡の層序

本遺跡の基本的な層序を柱状図で示す。なお，Ⅰ－15区南壁でテフラの検出・分析を行っており，詳細はＸ章を参照されたい。

Ⅰ層　灰茶褐色をし，細かい軽石を含む層で，現耕作土である。

Ⅱ層　やや水分を含んだ黒色腐植土である。前山遺跡では耕作等によって削平され，部分的に存在する。

Ⅲａ類　暗橙色をしたアカホヤ火山灰の腐植土である。上部は耕作等により削平されているところが多い。縄文時代前期から古墳時代の遺物を含む層である。

Ⅲｂ層　Ⅲａ層の下部にブロック状に堆積した橙色の軽石層である。鬼界カルデラの爆発による火砕流である。

Ⅳ層　暗黄褐色でやや硬質の土層で，下部に縄文時代早期の遺物を含む。

Ⅴ層　黒色硬質の土層で，上部に縄文時代早期の遺物を含む。

Ⅵ層　黄橙色軽石層で，一般にサツマ火山灰層と呼ばれている層である。Ⅵ層以下，安山岩質の礫・巨石を多く含んでいる。

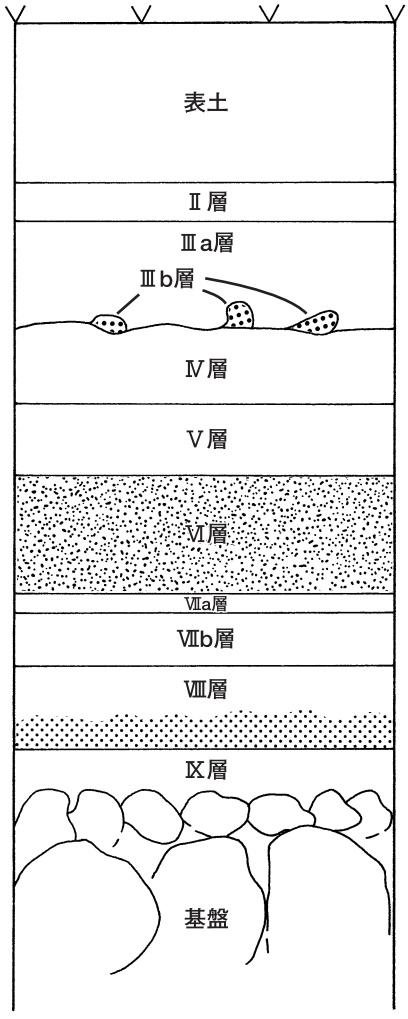
Ⅶａ層　暗茶褐色粘質土で，主に細石器文化期の遺物を含む。

Ⅶｂ層　乳茶褐色粘質土で，細石刃文化期及びナイフ形石器文化期の遺物を含む。Ⅶ層はいわゆるチョコ層と呼ばれるものである。

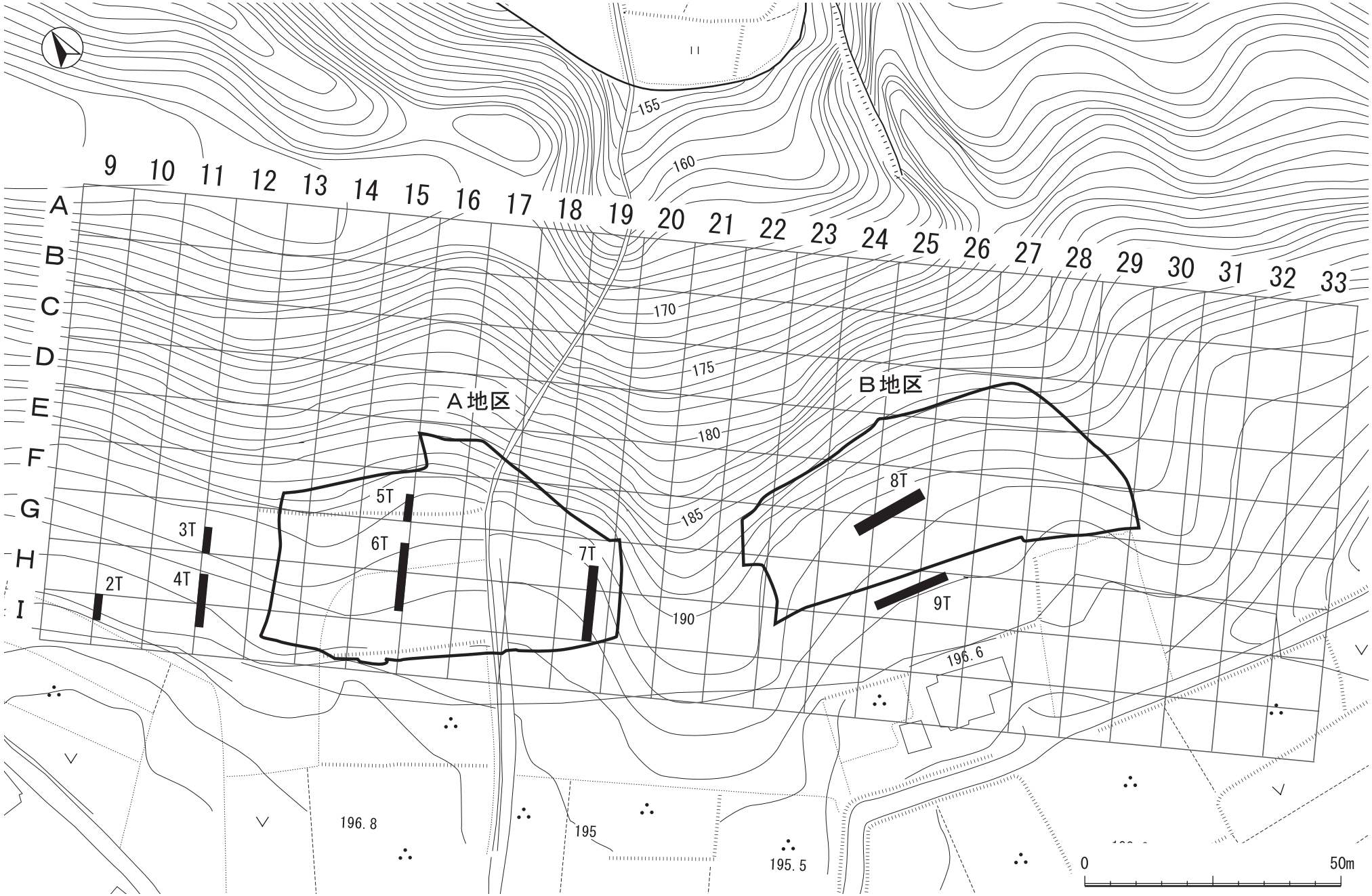
Ⅷ層　明茶褐色粘質土で，ナイフ形石器文化期の遺物を含む。シラスの腐植土である。

Ⅸ層　暗紫色粘質土で，下部には小礫を含む凝灰角礫の風化土層である。Ａ地区のみ遺物が確認された。

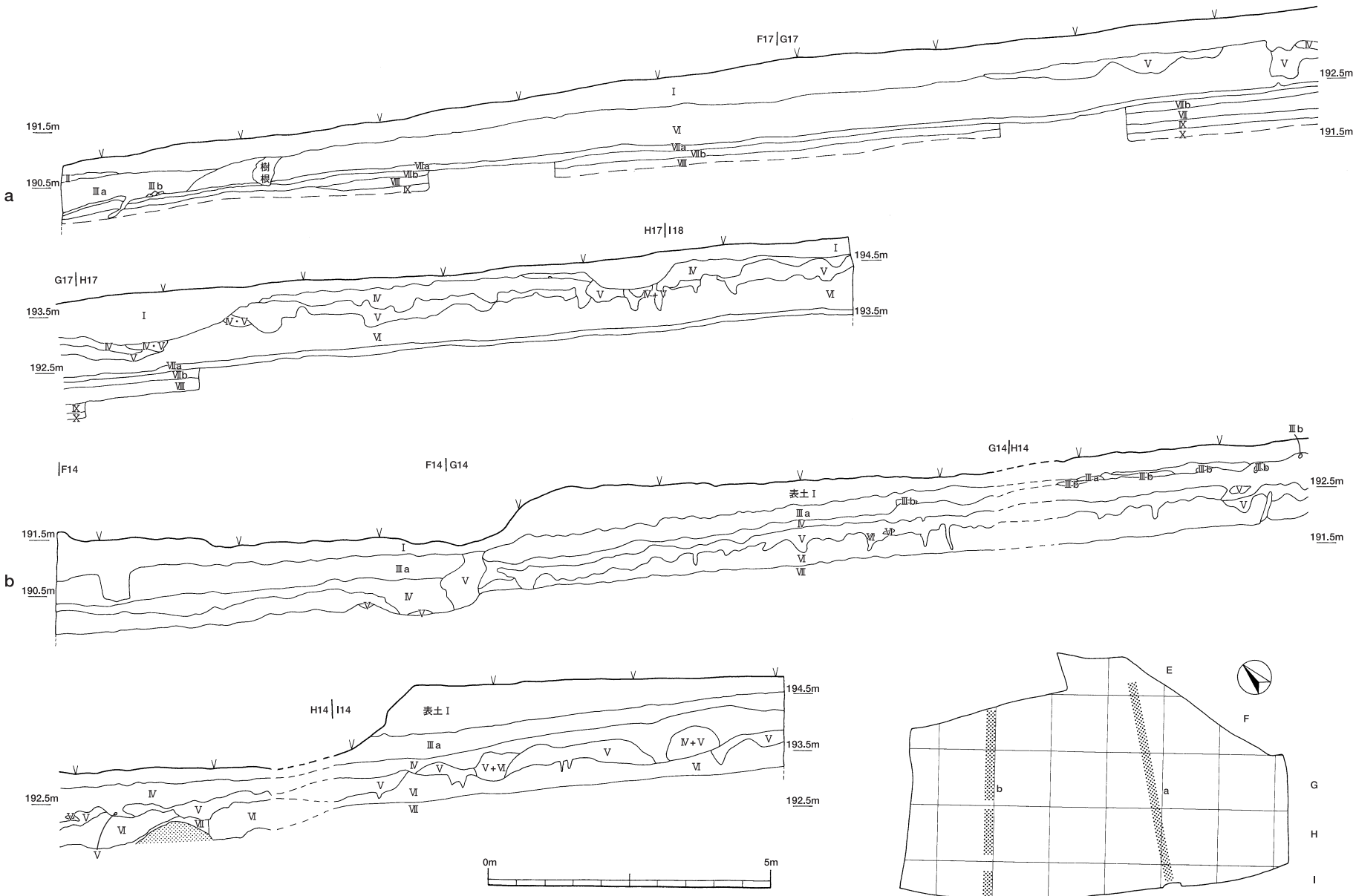
基盤　岩盤



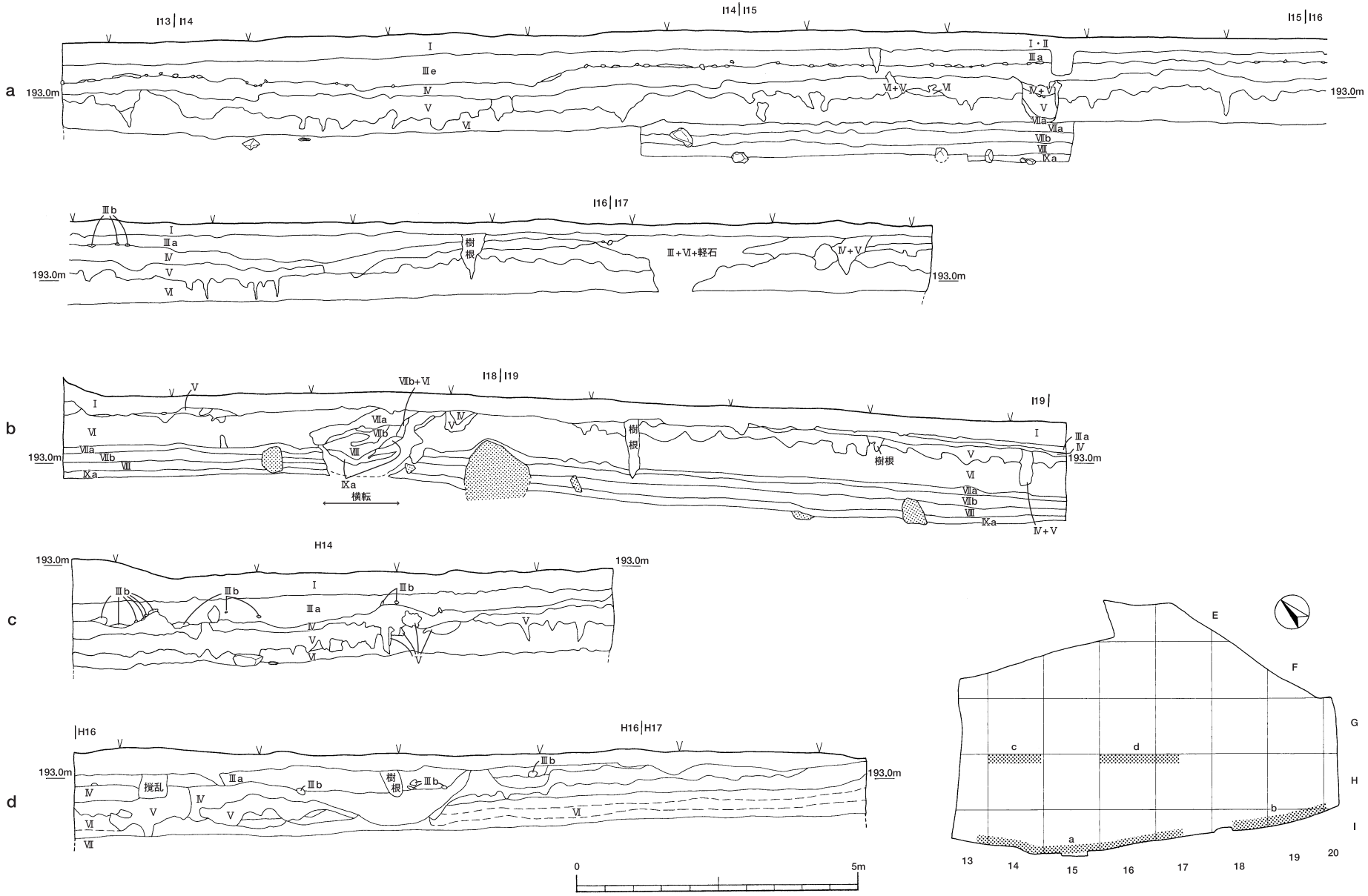
第４図　前山遺跡土層模式柱状図



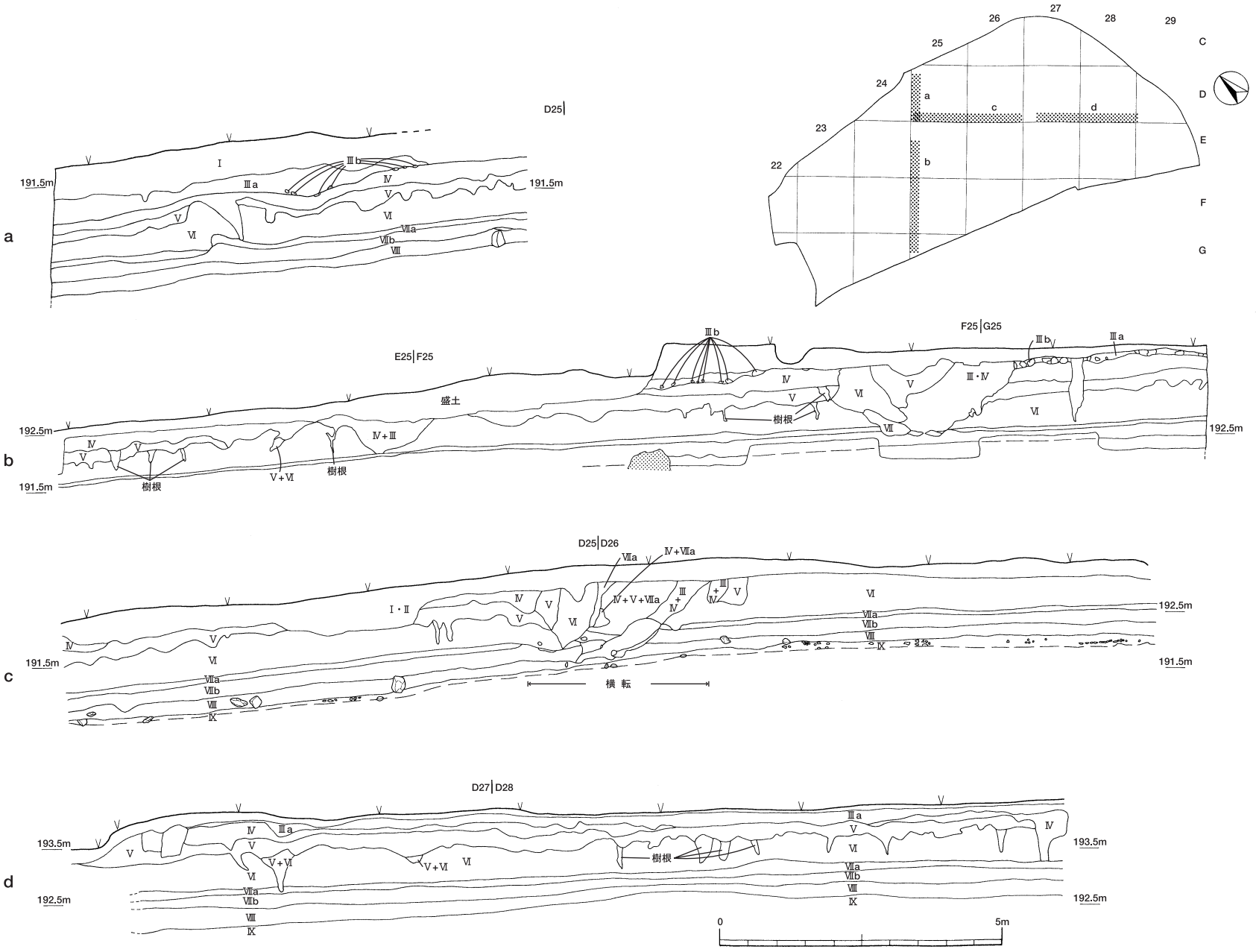
第５図　前山遺跡調査地域とグリッド配置図


a
F17|G17
191.5m
190.5m
192.5m
樹根
H17|I18
G17|H17
194.5m
193.5m
192.5m
b
F14
F14|G14
G14|H14
表土Ⅰ
191.5m
190.5m
192.5m
H14|I14
194.5m
193.5m
192.5m
0m
5m
E
F
G
H
I
b
a
13
14
15
16
17
18
19
20

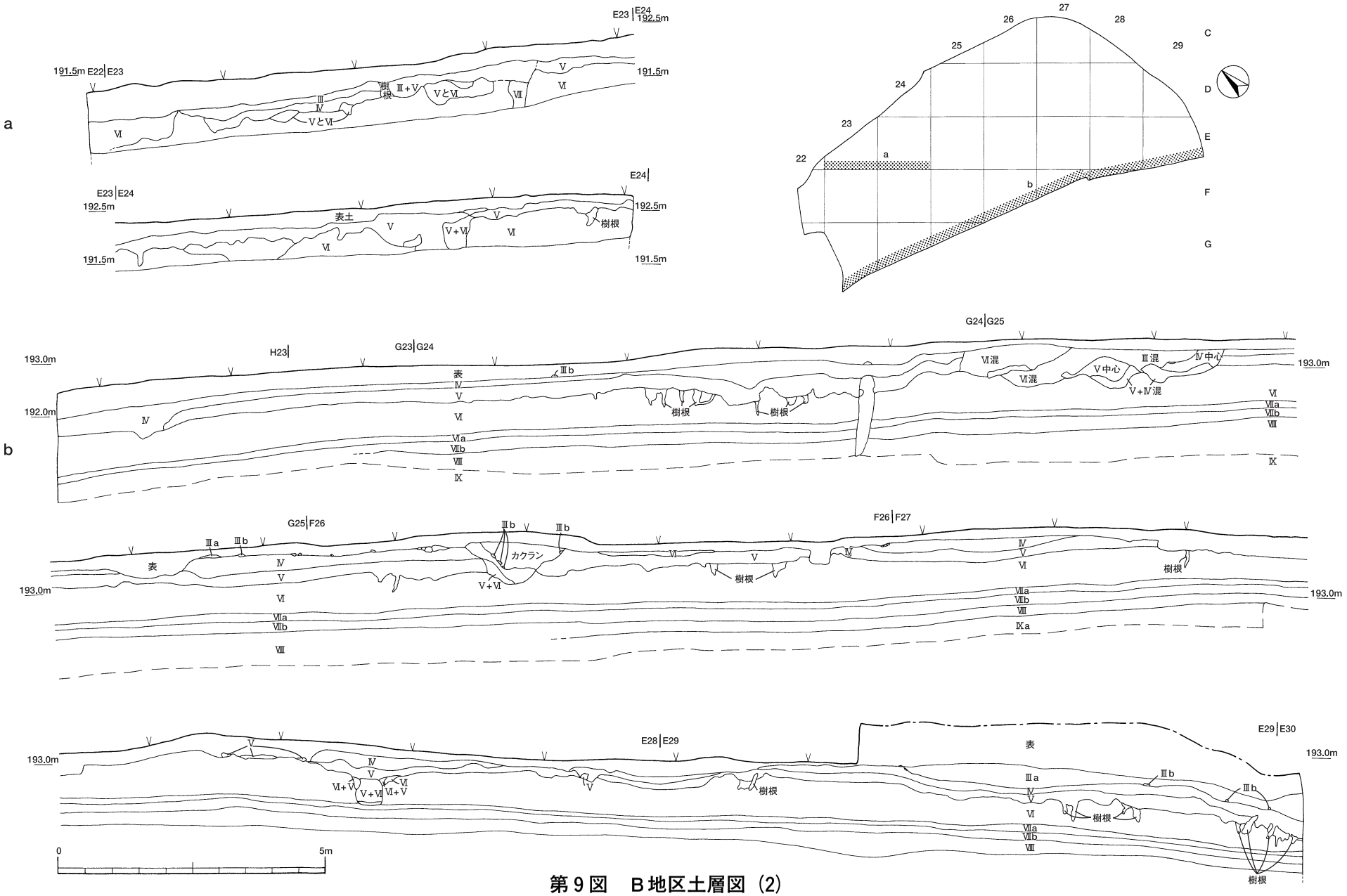
第6図　A地区土層図（1）


a
I13 | I14
I14 | I15
I15 | I16
193.0m
I
Ⅲe
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅰ・Ⅱ
Ⅲa
Ⅵ+Ⅴ
Ⅵ
Ⅳ+Ⅴ
Ⅶa
Ⅶb
Ⅷ
Ⅸa
I16 | I17
Ⅲb
樹根
Ⅲ+Ⅵ+軽石
b
I18 | I19
Ⅶb+Ⅵ
Ⅶa
横転
I19 |
c
H14
d
H16
H16 | H17
撹乱
E
F
G
H
I
13
14
15
16
17
18
19
20
0
5m

第７図　Ａ地区土層図（2）


a
D25
191.5m
191.5m
Ⅰ
Ⅲb
Ⅲa
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶa
Ⅶb
Ⅷ
22
23
24
25
26
27
28
29
C
D
E
F
G
a
b
c
d
b
E25|F25
F25|G25
盛土
樹根
Ⅳ+Ⅲ
V+Ⅵ
Ⅲ・Ⅳ
192.5m
191.5m
c
D25|D26
Ⅶa
Ⅳ+Ⅶa
Ⅰ・Ⅱ
Ⅳ+Ⅴ+Ⅶa
横 転
192.5m
191.5m
d
D27|D28
193.5m
192.5m
0
5m

第8図　B地区土層図（1）


a
E23 E24
192.5m
191.5m E22 E23
191.5m
樹根
Ⅲ+Ⅴ
ⅤとⅥ
Ⅶ
Ⅵ
Ⅴ
Ⅳ
Ⅲ
E24
E23 E24
192.5m
表土
Ⅴ
Ⅴ+Ⅵ
Ⅵ
樹根
191.5m
C
D
E
F
G
22
23
24
25
26
27
28
29
a
b
b
193.0m
192.0m
H23
G23 G24
G24 G25
表
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅵa
Ⅶb
Ⅷ
Ⅸ
樹根
Ⅵ混
Ⅲ混
Ⅳ中心
Ⅴ中心
Ⅴ+Ⅳ混
Ⅶa
G25 F26
F26 F27
Ⅲa
カクラン
Ⅴ+Ⅵ
Ⅸa
E28 E29
E29 E30
Ⅵ+Ⅴ
Ⅵ+Ⅴ
0
5m

第９図　Ｂ地区土層図（2）

第Ⅳ章　第Ⅰ文化層の調査

第１節　旧石器時代の概要と石材

第Ⅵ層薩摩火山灰（P14）層の下位は，旧石器時代から縄文時代草創期の該当層であり，Ⅶ層茶褐色粘土層は上部の暗茶褐色土（Ⅶa 層：第Ⅳ文化層）と，中位～下位の乳茶褐色土層（Ⅶb 層：第Ⅲ文化層）に区分できる。その下層はシラスの二次堆積腐食土層である明茶褐色粘質土層（Ⅷ層：第Ⅱ文化層）である。さらにその下位のⅨ層暗紫色粘質土層は基盤である凝灰岩の風化土層である。

このⅨ層はＡＴ下位に相当する層位であり，基盤である凝灰岩が標高的に高く盛り上がった部分であるため，近接する仁田尾遺跡などでは通常100ｍ以上堆積するシラスがみられず，わずかに風化土壌が存在するという極めて恵まれた条件にあることから認められるものである。

第Ⅸ層からの遺物はＡ地区からのみ出土しており，第Ⅰ文化層とした。

遺構は，礫群がⅧ層検出のものがＡ地区で１基，Ⅶｂ層上面からⅦａ層下面検出の礫群がＡ地区で３基，Ｂ地区で５基，Ⅶａ層下面検出のものがＢ地区で１基確認された。

１．前山遺跡の文化層とブロック

ＡＴ下位と上位の調査中及び調査直後の層位と石器群との認識は以下のとおりであった。

Ⅶａ　　細石刃文化石器群
Ⅶａ～ｂ　小型ナイフと小型台形石器を主体とする石器群
Ⅶｂ　　小型三稜尖頭器を主体とする石器群（Ｂ地区のみ）
Ⅷ　　剥片尖頭器と大型三稜尖頭器の石器群
Ⅸ　　台形石器と切出し形ナイフ形石器を主体とする石器群

今回報告書作成整理作業において，出土遺物の層位別出土分布及び石材別出土分布図を作成した結果，以下のような事柄が指摘できる。

① わずか４～５㎝程度の層厚しかないⅦａ層に出土区によってはⅦ層のもののみが多く出土している区が存在すること。

② 上記の区ではⅦｂ層の取り上げ番号が無く，その下は直接Ⅷ層になっており，その部分の遺物は石材・石器とも，先にⅦａで取り上げた遺物と共通していることから本来はⅦｂ層に該当すると考えられる。これらのことから，一部には層区分が困難な部分があったと考えられる。

③ 遺物の上下移動は少なからず存在するものであるが，遺物集中部においては，当然のことながら遺物数も多く，特に中心部は下位に残存することが分かっている。この残存部を下位の層のブロックと認定することは基本的に間違いである。ただし，ブロック区分においては調査中の出土層位を尊重し，記述を進めることにした。

これらを総合的に検討した結果，本報告書ではＡＴ上位の文化層とブロック認定について以下のように取り扱った。

Ⅳ文化層（Ⅶａ層）　細石刃文化層。ブロックの中心については，Ⅶｂ層まで落込み残存しているが，明らかに細石刃文化と判断できる器種とその同一母岩の遺物についてはここで取り扱う。

Ⅲ文化層（Ⅶｂ層）　調査中及び調査直後の認識では，Ⅶａ～Ⅶｂ文化とⅦｂ文化の時期の異

なる文化とされていたが，層位的には明確に区分できないことから，本報告書ではⅦｂ文化層として取り扱う。Ⅶｂ文化層も一部の区ではⅧ層の浮き上がりやⅦａ層の沈みとなっている区があり部分的に補正を行った。なお，総括的なまとめにおいてⅦａ～ｂ文化とⅦｂ文化は区分可能であるなら区別する。

Ⅱ文化層（Ⅷ層）　一部の礫群についてⅧ層とされた礫群の礫がⅦ層礫群の礫と接合しており，この礫群は本来Ⅶ層の礫群と判断できる。この区も層の色調や性質が類似しており，層位的な区分が困難であったことが推定され，その近辺の遺物もⅦｂ層がⅧ層とされていた可能性がある。以上のようなことから，石材や器種等を総合的に検討してブロックの認定を行った。

Ⅰ文化層（Ⅸ層）　台形様石器を特徴とする石器群であるが，石材ごとの集中ブロックの差異がみられ，石材分布を加味してブロック認定を行った。

２．出土石器石材の区分

石器石材は多種の黒曜石，安山岩類，頁岩類などであり，それぞれ色調，自然面の状況，風化の程度などの肉眼的観察で以下のように分類した。

ＯＢ１：新しい割れ面は漆黒で光を通さないが，外観は消し炭状に風化した特徴的なものであり，上牛鼻（薩摩川内市樋脇町）産もしくは平木場（日置市市来町）産と判断できる黒曜石である。

ＯＢ２：ガラス質が強く，光沢・透明感があり，不純物を多く含むものである。なかには，薄い灰色で透明感の無い部分や，灰色や赤みがかった縞状の不透明な部分もある。三船（鹿児島市）産と考えられる黒曜石である。

ＯＢ３：アメ色で透明感があり，不純物の少ないものである。以前には桑ノ木津留産とされていたが，近年大口市上青木で広い散布域が確認された黒曜石である。いわゆる霧島系と呼ばれる黒色でわずかに不純物をもつものも本報告書ではこれに含む。ごく一部，腰岳産の可能性があるものについてもこの種類に含めた。

ＯＢ４：青灰色を呈し，ガラス状で不純物は少ない。針尾（長崎県佐世保市）産もしくは淀姫産黒曜石に類似する。

ＡＮ１：表面は風化して灰～暗灰色を呈しているが，内面は黒色である。石英粒が入る。いわゆる黒色安山岩である。

ＡＮ２：灰色～暗灰色で斑晶がわずかにみられる安山岩である。サヌカイトや西北九州産のものを含む。

ＡＮ３：斑晶組織を有し，主に磨石・敲石などに利用される安山岩。

ＱＵ：石英。微晶質で不透明または一部透明で，光沢をもつものもあり，白色または不純物による着色もある。結晶した石英は，しばしば結晶面がよく発達して六角柱状の水晶（**ＱＲ**）となる。不透明で赤色のものは鉄石英（**ＦＱ**）とした。

ＣＣ：広く玉髄系を含む。石英のうち比較的均質なもので，淡褐色～灰色のものが最も多く，半透明のものは脂光沢をもつ。蛋白石や，縞状の赤色・黄色など色々な色を帯びた瑪瑙もこれに含む。

ＳＨ：頁岩もしくは泥岩（細粒砂岩）と呼ばれるものである。粘土や泥土が堆積して固まったもので，節理面にそって薄くはがれやすい性質がある。大きく５種類に分類した。

ＳＨ１Ａ・Ｂ：色は淡灰色～青灰色，暗灰色を呈し，節理面がみられ緻密で硬い。珪質分の多いものは珪質頁岩とも呼ばれる。ＳＨ１Ａは光沢があるものもあり，ＳＨ１Ｂは粒状感があるものを主に含む。

ＳＨ２：淡黄色～淡灰色を呈する良質なシルト質頁岩である。内部に節理面がみられる。

ＳＨ３：暗灰色で節理の発達が弱く，光沢はない。主に剥片尖頭器などに使用される。

ＳＨ４：熱変成作用をうけたホルンフェルスである。風化しもろくなっているものが多い。

ＳＨ５：節理が発達し，扁平な形状で，風化面は赤茶褐色を呈する。いわゆる粘板岩である。

ＣＨ：チャート。灰白色～青緑色を帯び，部分によっては縞状の節理がみられ，光沢がある。

ＳＡ：中粒～粗粒砂岩。風化したものは黄褐色を呈する。

第２節　第Ⅰ文化層の石器群

第Ⅰ文化層は岩盤直上にあることから，大小の凝灰岩角礫が散在しており，その間を掘りながら，あるいは礫や岩を取り除きながらの調査を実施した。

第Ⅰ文化層の出土遺物は，黒曜石や頁岩を石材とした台形様石器を主体とする石器群と，玉髄を石材とし縁辺にわずかな使用痕が認められる石器群とがあり，両者は異なるブロックを形成していることから区別できる。ただし出土層位的に玉髄製のものがより下位に認められながらも，層的には同一層であることから，ここでは便宜的に両者とも第Ⅰ文化層として説明していく。

１．ブロックの認定

第Ⅰ文化層では，頁岩，上牛鼻産黒曜石，三船産黒曜石，玉髄，石英などを石材とする遺物が多く出土しており，各々の石材はほぼ集中したブロックを形成している。ここでは計12基のブロックを認識した。各ブロックと出土石材については以下のとおりである。なお，第Ⅰ文化層全体のブロックと石材別分布については第11図に示した。

第１ブロック

長径×短径が約14ｍ×８ｍを測り，全ブロックの中で最大面積を有するもので北西端に位置する。出土している石材は頁岩が圧倒的に多く，次に三船産黒曜石と上牛鼻産黒曜石となる。頁岩製の台形様石器と石核接合資料が特徴的である。

第２ブロック

第１ブロックの東側に接し，約８ｍ×６ｍの広がりをもつ。東側の玉髄が集中する部分と西側に石英や頁岩が少量混じった部分，そして中央に径１ｍほどの上牛鼻産黒曜石が集中した部分を一括した。この上牛鼻産黒曜石が集中した部分の上位（Ⅷ層）にはこの石材が集中した25ブロックが存在していることから，この部分はⅧ層第Ⅱ文化層25ブロックに帰属するものと判断される。

第３ブロック

約８ｍ×３ｍの長楕円形の広がりを有し第２ブロックの約５ｍ南東に位置する。玉髄石材がほとんどを占め，西側に集中した部分が認められる。玉髄製石器が多い。

第４ブロック

径約３ｍほどのほぼ円形に玉髄製石器が集中したブロックである。玉髄製の小型石器が特徴的に

出土した。

第5ブロック

第3ブロックの西側に接し，一部重複するものである。約7ｍ×４ｍの楕円形の広がりをもつが遺物そのものは集中せず散在している。出土石材は上牛鼻産黒曜石が多く，上層Ⅷ層第Ⅱ文化層の16・17・18ブロックの下位に位置し（第33図参照），それらのブロック石材が上牛鼻産黒曜石であることから，第Ⅱ文化層の残存部である可能性を注意する必要がある。

第6ブロック

第１・第２ブロックに接した位置にあり，径６ｍ×３ｍの楕円形の広がりを有する。出土した石材は石英がほとんどである。

第7ブロック

Ｈ－15区に位置しており，径約４ｍの円形の中に散在している。出土石材は上牛鼻産黒曜石が多い。同様の石材のブロックが，位置がわずかにずれるものの上位の第Ⅱ文化層に位置しており，注意が必要である。

第8ブロック

第８・９・10ブロックの位置はＡ区の西側で標高の高い場所であり，また上位Ⅷ層第Ⅱ文化層にブロックが存在しないことから，第Ⅰ文化層以外の混在は少ないと判断される。

第８ブロックはⅠ－15区に位置し，約４ｍ×３ｍの楕円形の中に集中している。出土石材は玉髄が主体であり，わずかに三船産黒曜石や頁岩が含まれる。

第9ブロック

径約８ｍの円形に出土分布が認められ，第８ブロックの東側に近接する。出土石材は玉髄を主体とし，三船産黒曜石が次に多い。第８ブロックと同様に石英と頁岩もわずかに出土している。玉髄製の石核が特徴的に出土している。

第10ブロック

第９ブロックの南東に近接した位置にあり，径約４ｍの円形に広がりをもつ。出土石材は第８・９ブロックと同様に玉髄が主体を占めるが，ここではわずかに三船産黒曜石のほかに上牛鼻産黒曜石と砂岩が含まれる。上牛鼻産黒曜石の石核や砂岩製のスクレイパーが出土しており注意を要する。

第11ブロック

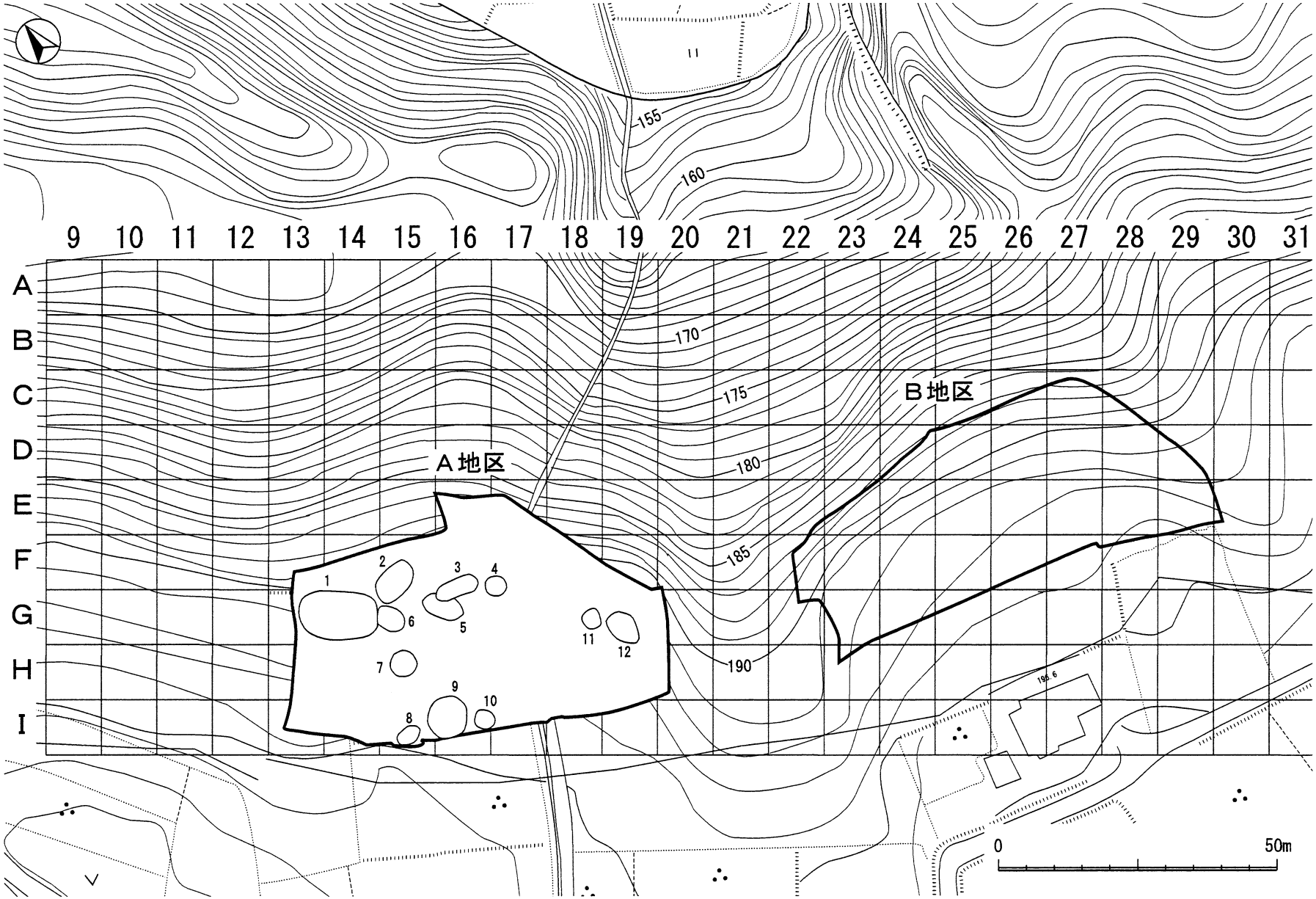
Ｇ－19区に位置しており，径４ｍの範囲の中に小さい集中部分がみられる。出土石材のほとんどは上牛鼻産黒曜石である。上層に第Ⅱ文化層の２ブロックが近接しており，その石材が大部分上牛鼻産黒曜石であることから注意を要する。

第12ブロック

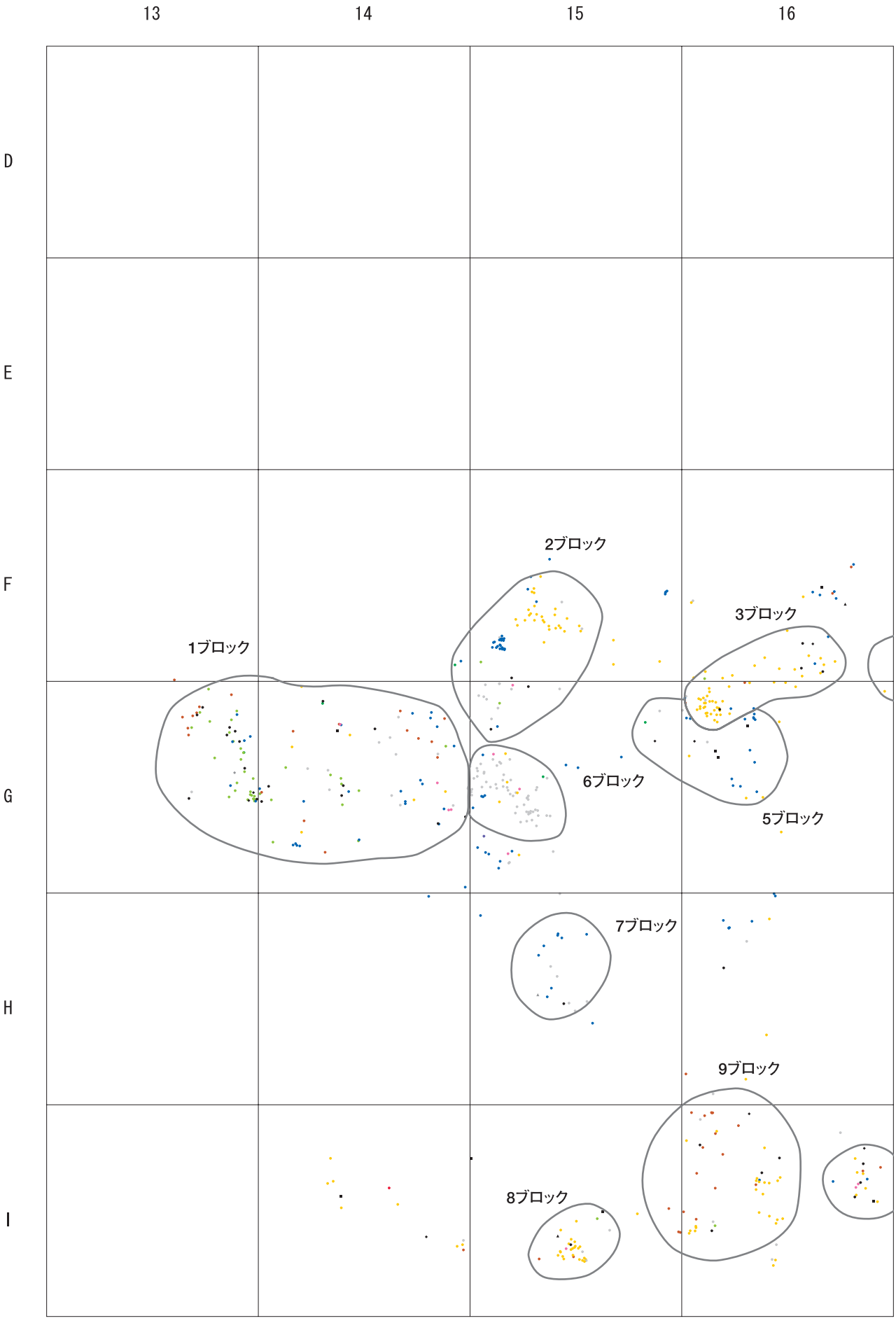
第11ブロックの南側で近接した位置にある。約６ｍ×４ｍの楕円形の範囲に玉髄・石英を主体とした集中部が認められる。

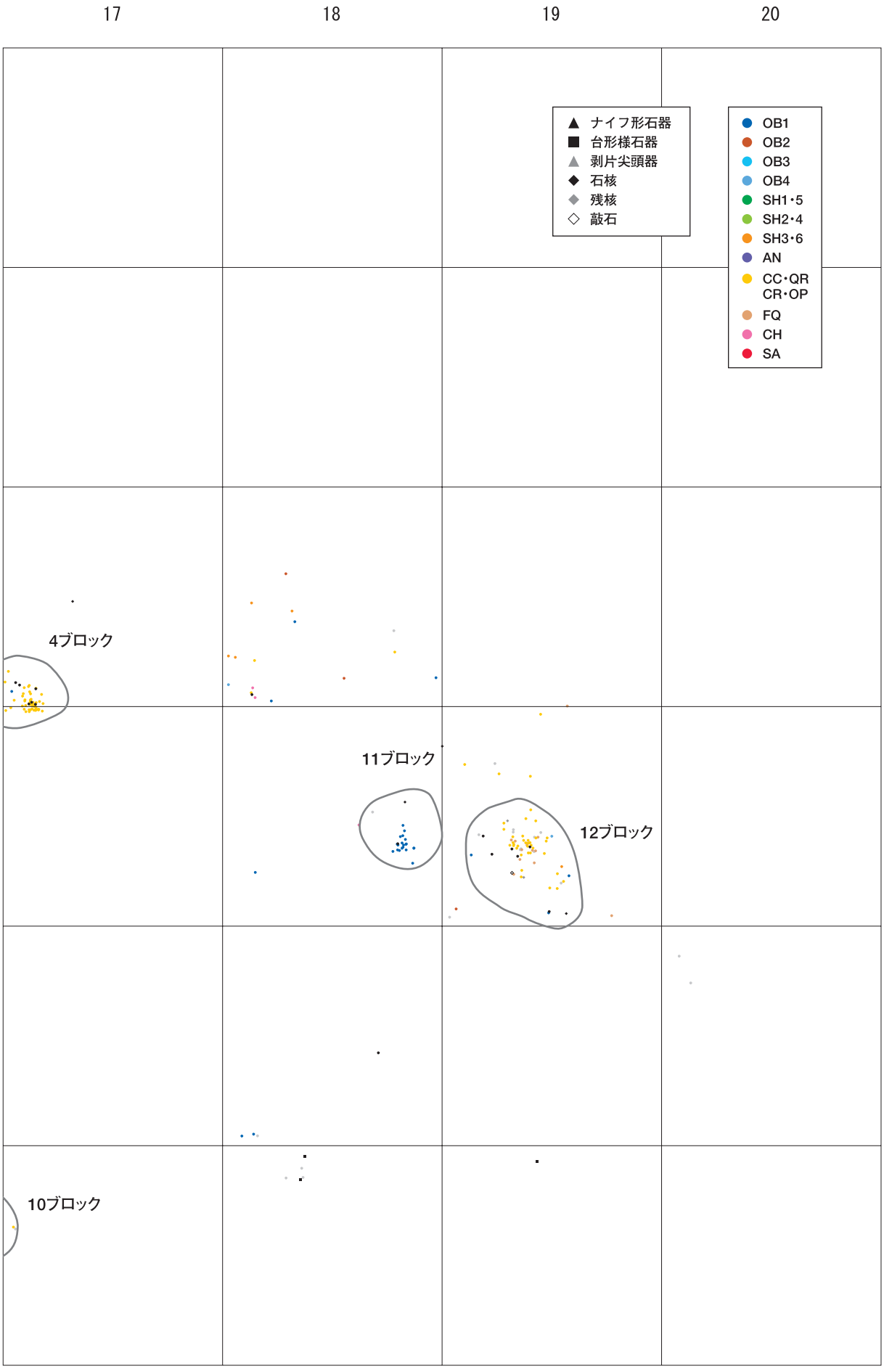
ブロック外

上記のブロックは，遺物が10点以上近接したものを識別したものであり，近接する遺物が10点以下のものについてはブロック外として取り扱った。

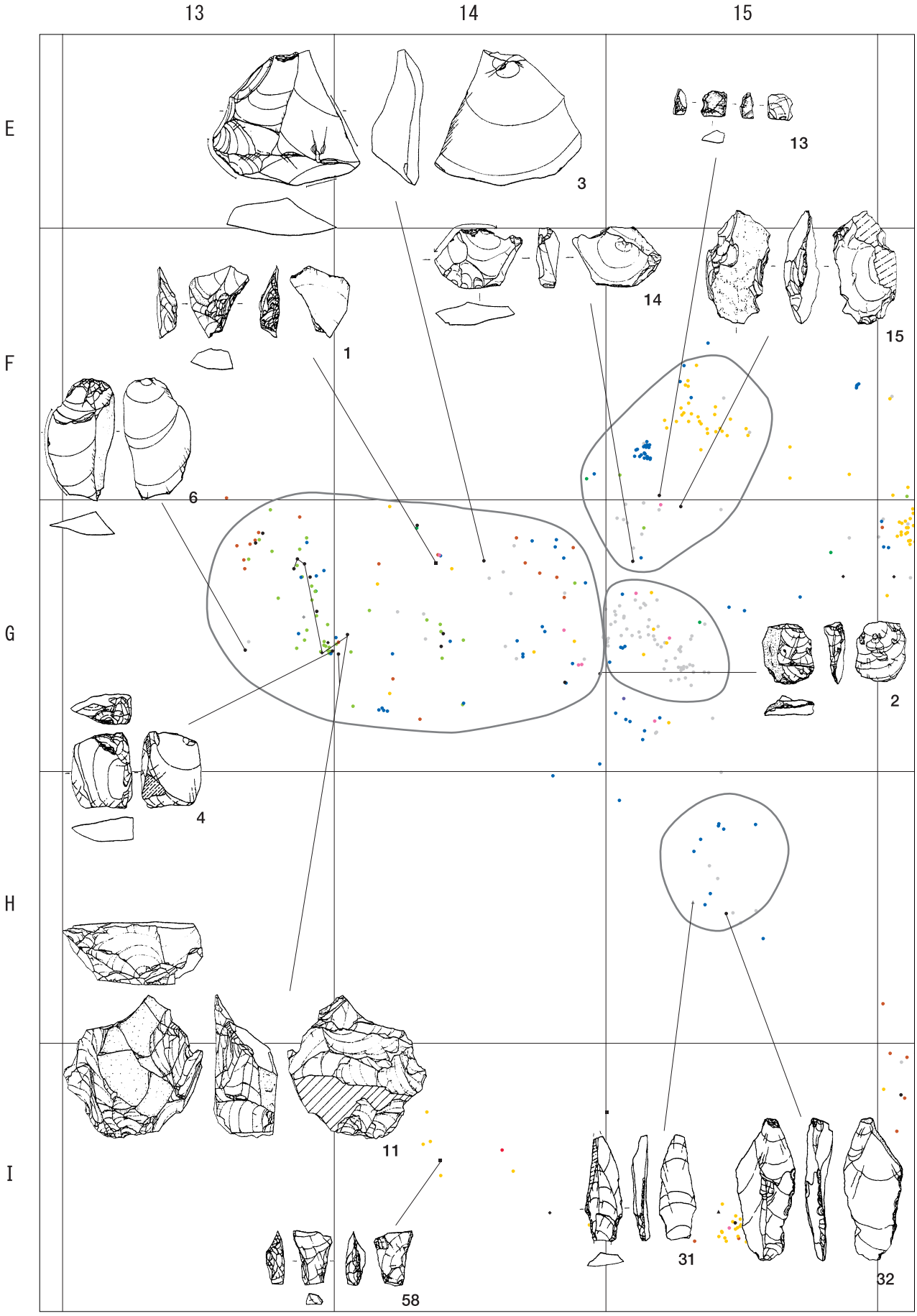


第10図　第Ⅰ文化層ブロック位置図


13
14
15
16
D
E
F
G
H
I
1ブロック
2ブロック
3ブロック
5ブロック
6ブロック
7ブロック
8ブロック
9ブロック



第11図　第Ⅰ文化層Ａ地区遺物出土分布図



第12図　第Ⅰ文化層１・２・６・７ブロック主要石器出土分布図

２．各ブロックの出土石器群

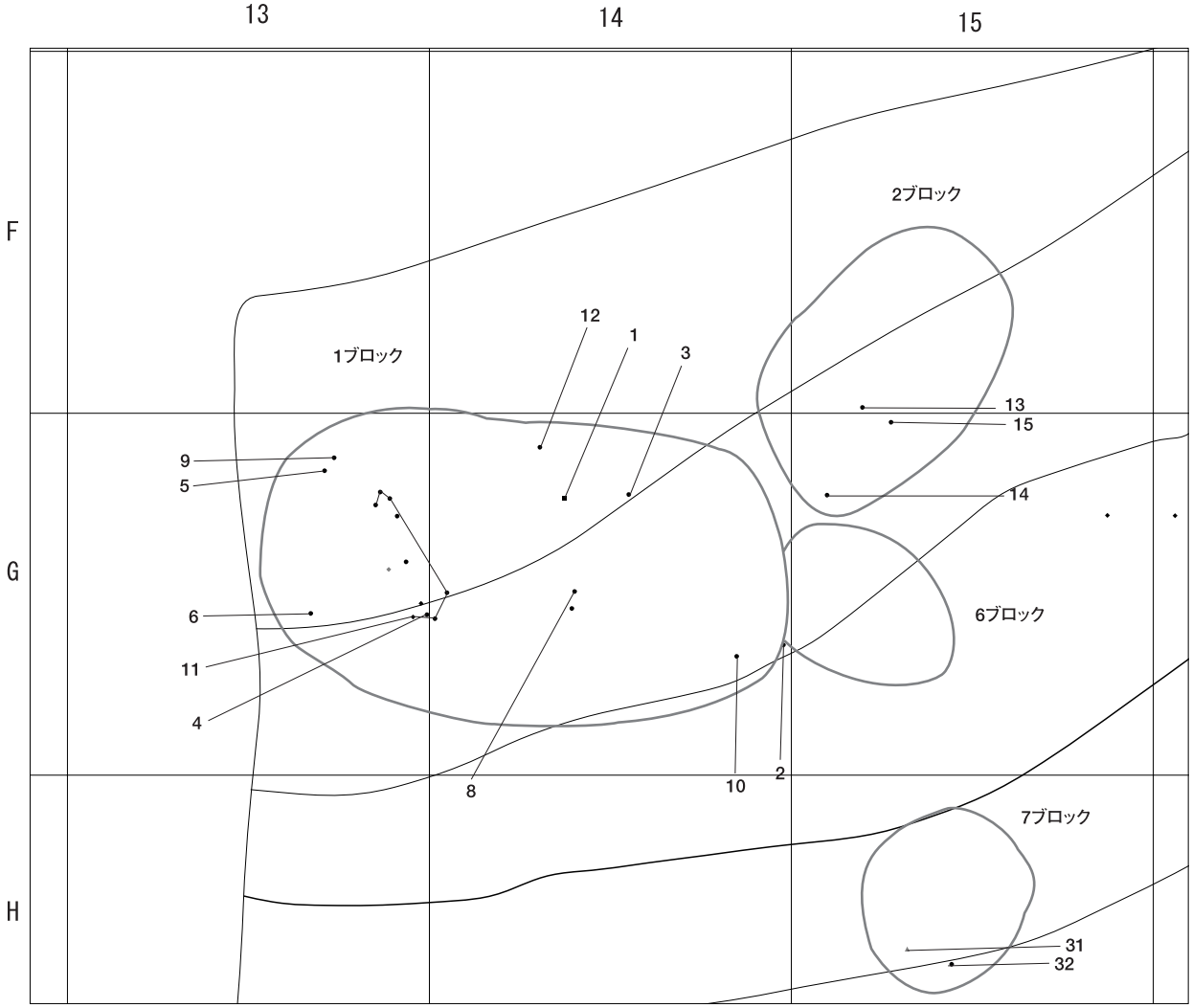
第１ブロック

第１ブロックと近接する第２・６・７ブロックの主要石器については第12図で示し，それらの出土石器群全体の位置は第13図で示した。第１ブロックは主要石材が良質の頁岩であり，それによる石核と剥片の接合資料を含めた石器が特徴的である。

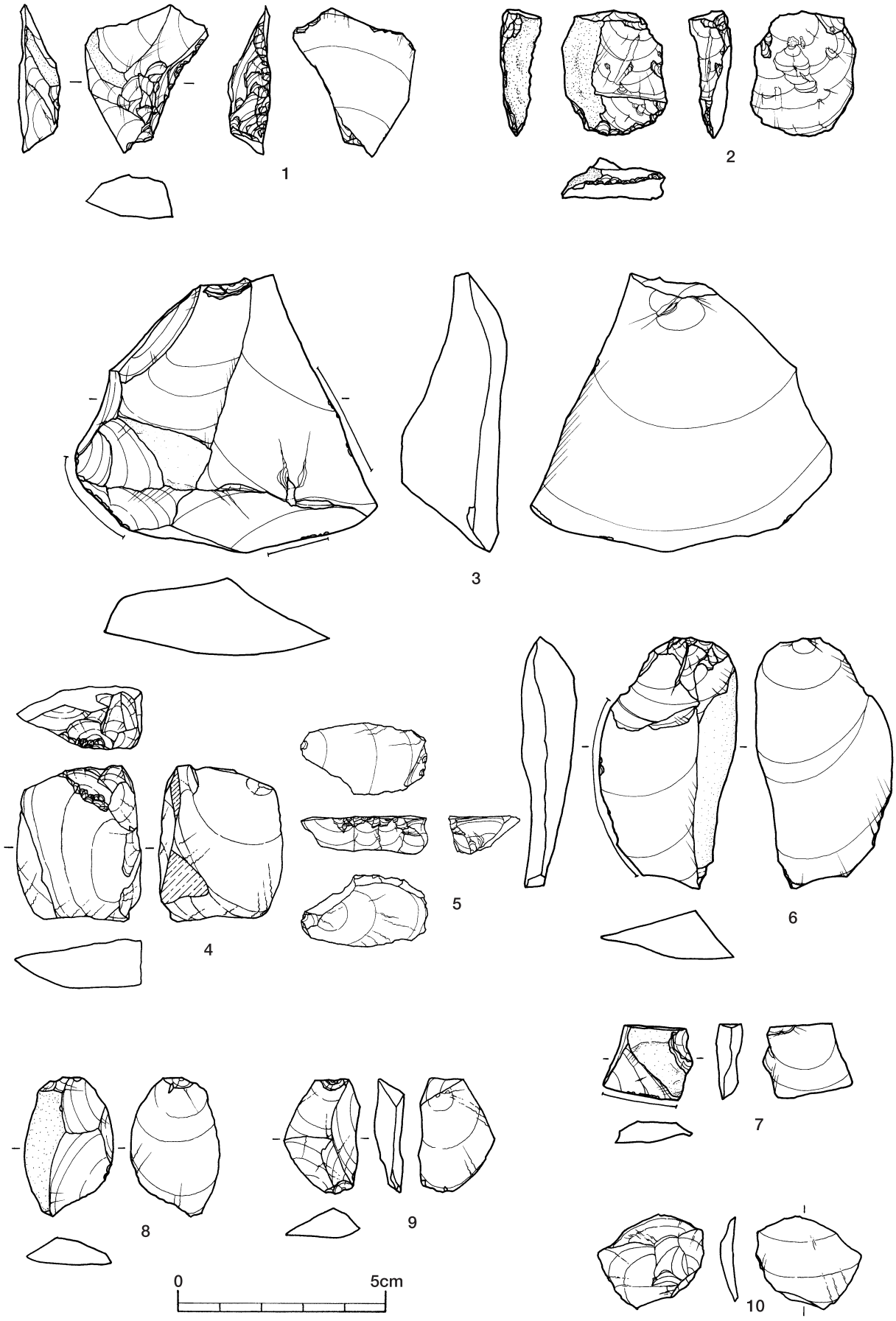
第14図１は台形様石器である。頁岩製の幅広剥片を素材とし，剥片の打面を取り除くように腹面から急傾斜のブランティングを施し，その後に背面に平坦剥離を行っている。刃部には使用痕が著しい。２は三船産黒曜石の自然面が一部残る剥片を素材とするもので，剥片末端部に細かい二次加工を施し半円状の刃部とした掻器である。右側の鋭利な縁辺にも使用痕が観察される。

３～10も１と同様の良質頁岩製であり，同一母岩によるものと判断されるものである。３は大型で厚みのある幅広剥片である。打面から判断すると平坦打面から剥離されたものであり，背面の剥離面構成から求心状の石核から剥離されたものと推定される。図の左側縁辺と，鋭利な右側縁辺には著しい使用痕が認められる。

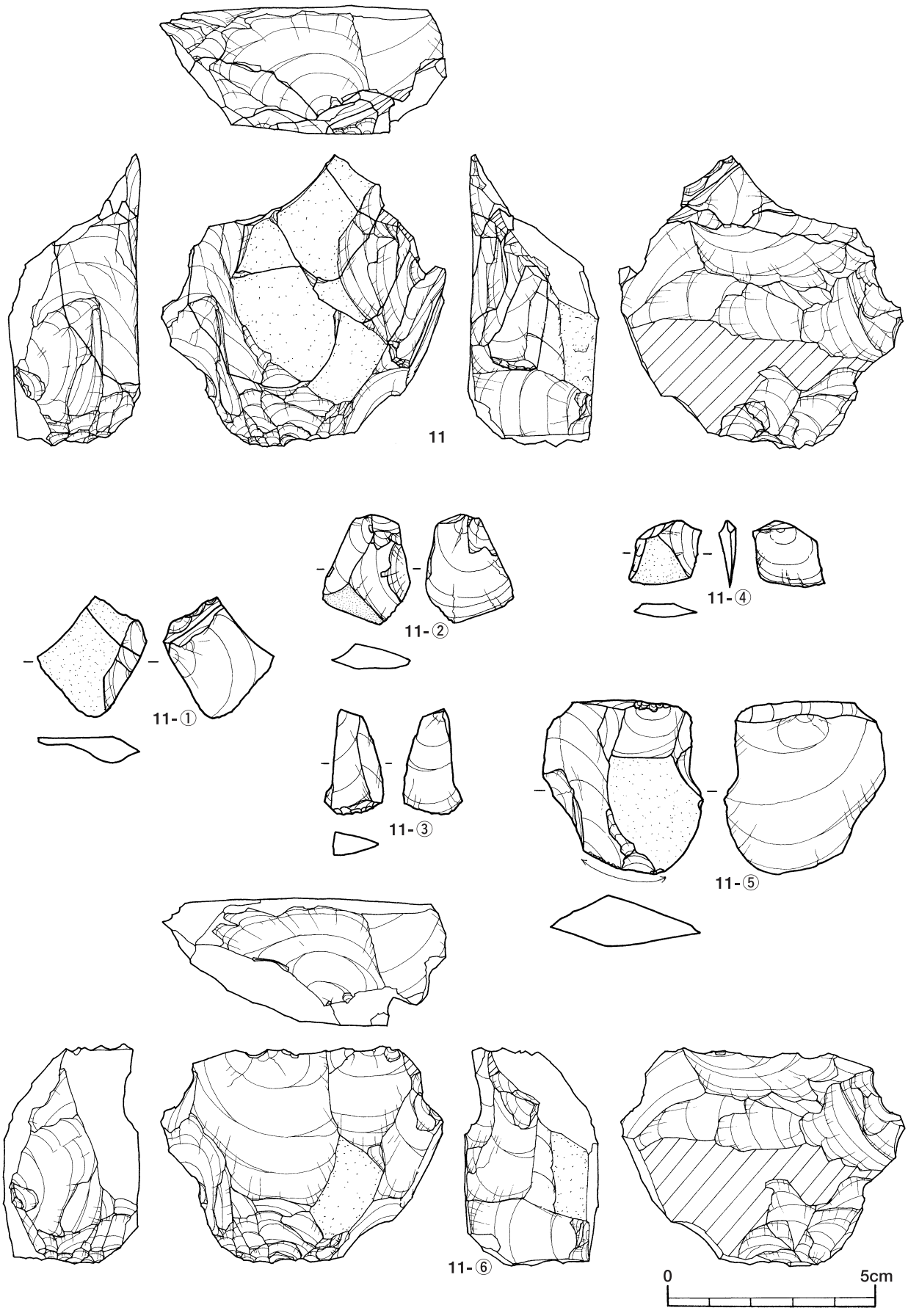
４の剥片は打面の位置と背面の剥離面の打点の位置が異なり，剥離された石核が固定打面でないことが判断できる資料である。５は片側に複数の剥離面が認められることから打面再生剥片である可能性が高い。この剥片自体は元の石核の側面方向から剥離されている。６は縦長剥片であり，打



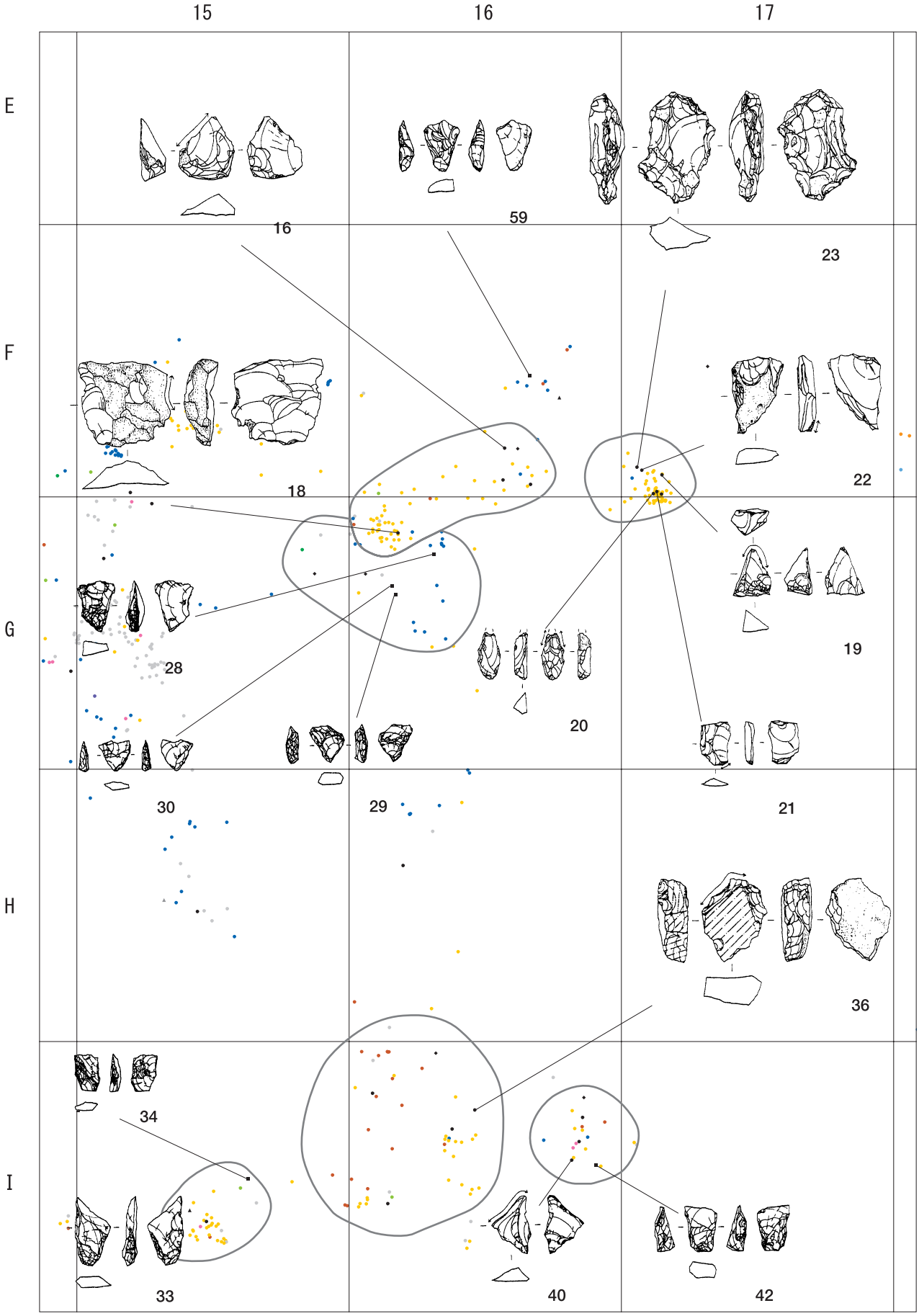
第13図　第Ⅰ文化層１・２・７ブロック石器群器種別出土分布図



第14図　第Ⅰ文化層１ブロック出土石器（1）



第15図　第Ⅰ文化層１ブロック出土石器（2）



第16図　第Ⅰ文化層３～５・８～10ブロック主要石器出土分布図

面は小さい。鋭い左側縁辺には著しい使用痕が観察される。先端は欠損するが，先端近くの右側縁には二次加工が認められる。 7 は四角形を呈する剥片であり，二次加工は全く施されていないが，直線状の鋭利な末端には著しい使用痕が観察される。 8 ～10は剥片である。使用痕などは認められない。

11は接合資料である。良質の頁岩製であり石核と 5 点の剥片が接合した。頁岩そのものは第13図の台形様石器や使用痕剥片と同質であり，同一母岩である可能性が高い。石核は裏面に節理面をもつ板状の礫で周縁から求心状に剥片をとり全体形を整えている。平坦な打面（図の a 面の右側部分）から①と②を連続して剥離している。いずれも小剥片で使用されていない。③も同じ打面から剥離されている。その後，打面 a の左側部分の幅広剥片を剥ぎ取っているが遺跡には残っていない。そして，新たな打面から剥片④と⑤を順次剥いでいる。⑤は幅広で比較的大型の剥片であり，鋭利な先端部には使用痕が認められる。⑥は剥片を取った状態の石核である。

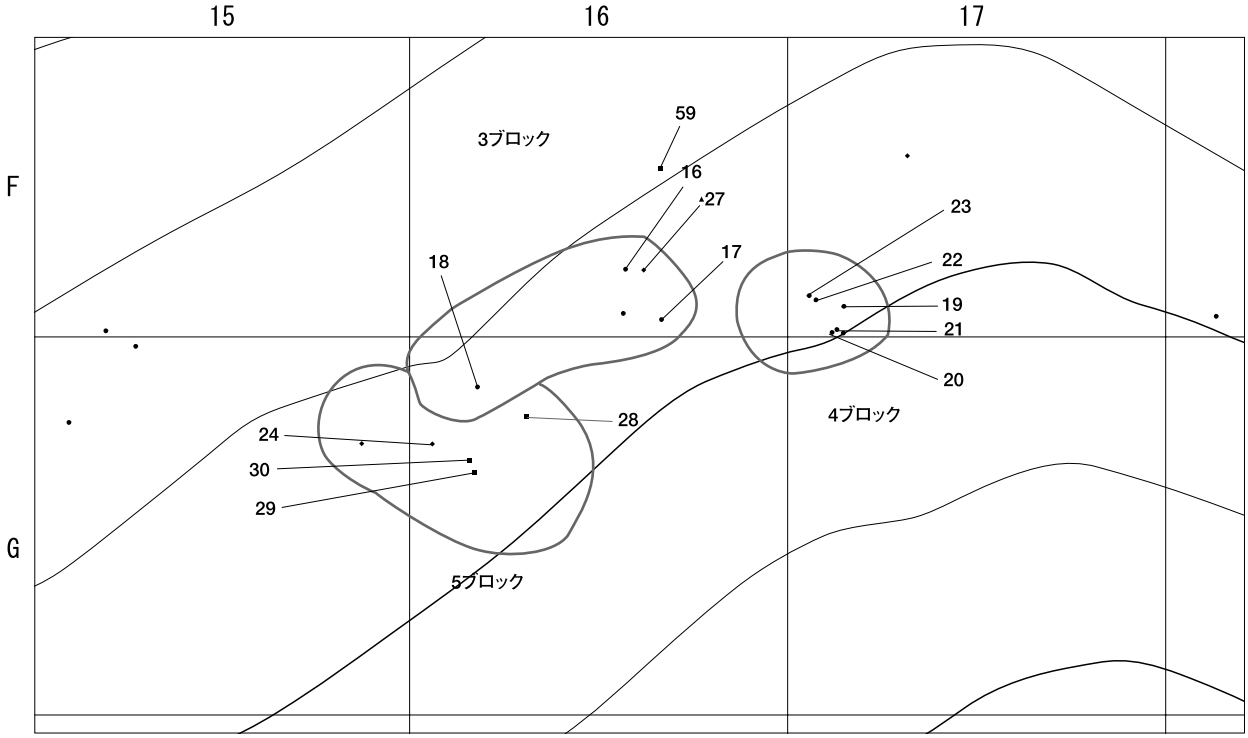
第18図12は節理面に分割された角礫状を呈する石英質の石材に，片側縁辺に粗い二次加工が施されたものである。第20図26は上牛鼻産黒曜石円礫を使用した石核である。打面と作業面を入れ替えながら剥離作業を行っている。

第 2 ブロック（第18図13～15）

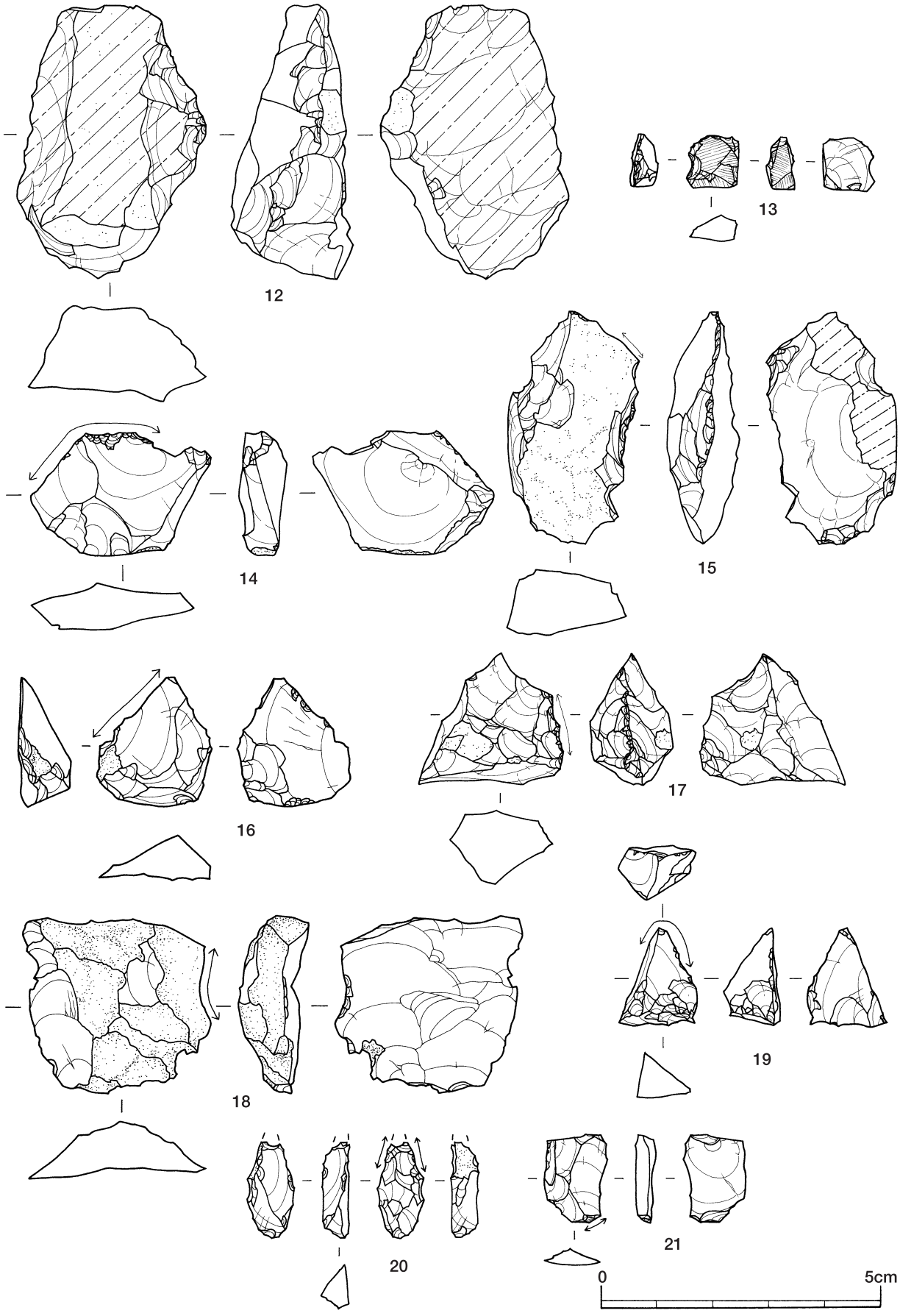
玉髄石器が主である。13は透明で小さな水晶を分割し，一縁辺に細かい二次加工を施したものである。14は剥片の打面に位置する比較的尖った部分と近接する縁辺に細かい二次加工が認められるものである。なお，通常使用痕が認められるべき剥片の鋭い側縁部には使用痕は全く認められない。15は剥片の縁辺の一部に二次加工が施されたものである。また縁辺の一部には使用痕が観察される。

第 3 ブロック（第18図16～18，第20図27）

第 3 ～ 5 ブロック主要出土石器は第16図で示し，全遺物の出土位置は第17図で示した。玉髄製石器を主とする。16は剥片の縁辺に微細な使用痕が認められるものである。17や比較的厚みのある剥



第17図　第Ⅰ文化層 3 ～ 5 ブロック石器群器種別出土分布図



第18図　第Ⅰ文化層１～４ブロック出土石器

片の片側に二次加工が施されたものである。二次加工は図の下半では裏面から，上位では正面から施され交互剥離状となる。加工部位には使用痕が認められる。18は背面に広く自然面が残る幅広剥片の縁辺の一部に内湾状に微細な剥離痕をもつ使用痕が認められるものである。第20図27は上牛鼻産黒曜石製の石核の一部と考えられ，平坦な打面とそこからの連続した剥離面が認められる。

第４ブロック（第18図19～21，第19図22・23）

４ブロックは玉髄が集中したブロックである。19は断面三角形の小さな剥片であり，尖った先端部分とそこにつながる一縁辺に細かい使用痕が観察されるものである。20は腹面側の両縁辺に細かい二次加工と使用痕が認められる。先端部を欠損する。21は明瞭な打面及び主要剥離面のバルブが存在する小剥片の末端に，微細剥離痕をもつ使用痕が観察されるものである。22も明瞭な打面及びバルブが認められる剥片であり，先端は厚みがあるものの下の縁辺に著しい使用痕が観察される。23は剥片の周辺に二次加工が認められるものである。二次加工は急角度の部分や45度程度のものがみられるが一定せず，規則的な刃部形成とするには程遠い感がある。

第５ブロック（第19図24，第20図28～30）

５ブロックは主に上牛鼻産黒曜石が散在したブロックである。24は玉髄製の節理面で分割され角礫状を呈するもので，平坦な自然面もしくは節理面から小さな剥片を剥離した石核である。

第20図28は三船産黒曜石製の台形様石器もしくは台形石器である。幅広剥片を素材とし，打面部を除去するように腹面側から急角度のブランティングを施している。剥片末端は折断の後に腹面側から細かいブランティングを施している。基部背面には旧打面から平坦剥離を施している。

29は両側縁を腹面側からの急角度でブランティングを施すことにより，全体形状を三角形に整えた台形石器である。石材は三船産黒曜石である。30は剥片の末端に近い部分を刃部とするもので，腹面側から細かいブランティングを施した側面部があり，片側側縁部は欠損しているが台形石器と考えられる。石材は同様に三船産黒曜石である。29・30については技術的にも形態的にもＡＴ上位のものが沈み込んだ可能性が高いと考えられる。

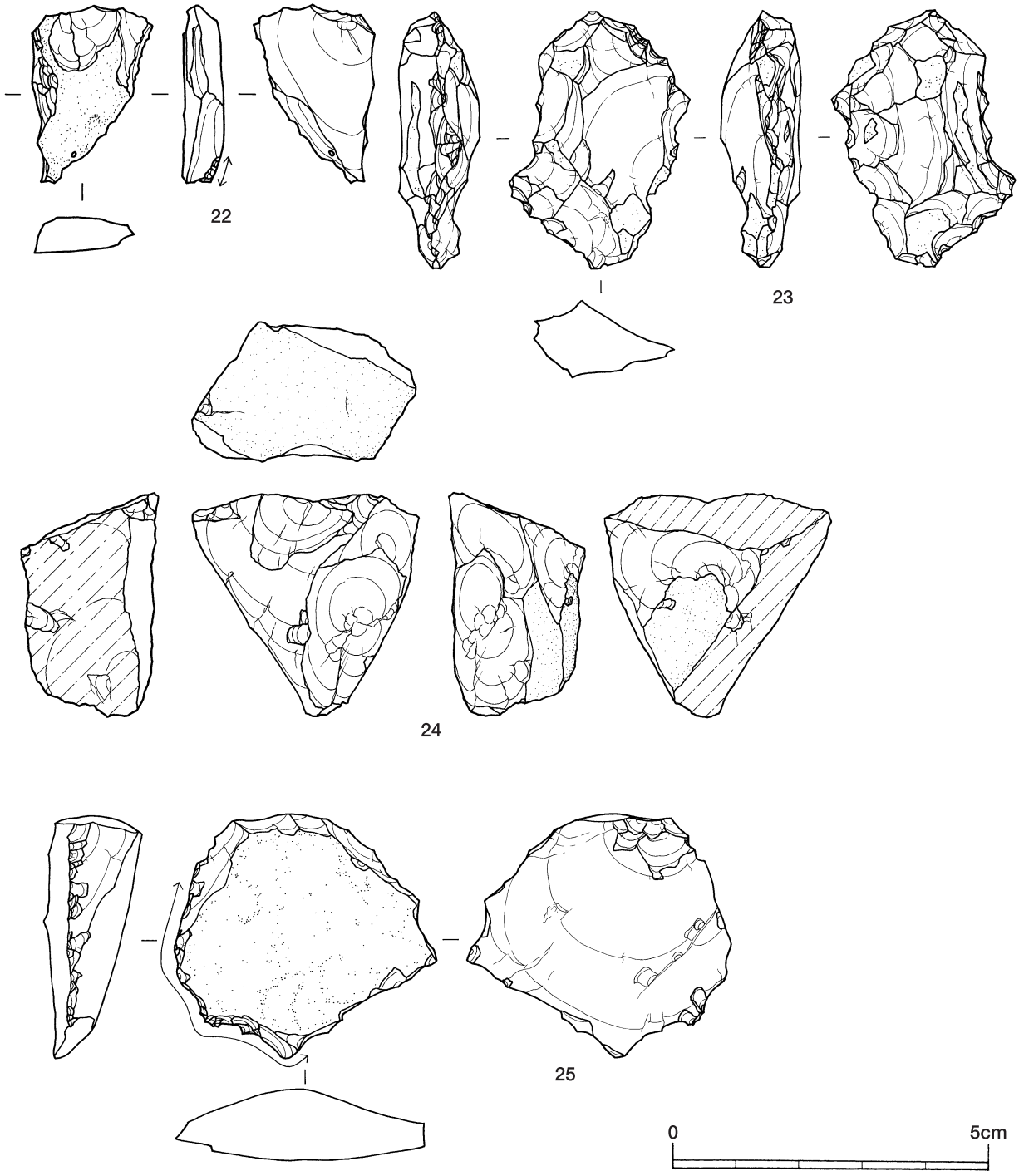
第６ブロック

石材の出土分布は第13図に示しているように，石英質の剥片と細片が大部分であり，明確な石器は出土していない。

第７ブロック（第20図31・32）

第13図にブロック図を示しているが，上牛鼻産黒曜石剥片を主とする散在したブロックである。ブロック認定の項でも指摘したように，ＡＴ上位の第Ⅱ文化層のブロックの残存部である可能性が高いと考えられる。

31は砂岩製であり先細りの縦長剥片を利用し，打面近くの両側縁に細かい二次加工を施したものであり，剥片尖頭器の範疇に入る。しかし，打面部は厚みがなく極めて薄く，かつ欠損しており，基部の二次加工についてもノッチ状と言うより直線状に近いことから，基部加工ナイフ形石器に近いものである。基部に近い右側縁部には使用痕が認められる。先端部もわずかに欠損している。32は安山岩製の縦長剥片を素材としたものであり，二側縁に細かい連続した二次加工を施し刃部を形成している。スクレイパーとした。打面は自然面の平坦面で，打面近くの片側は節理面で欠損している。

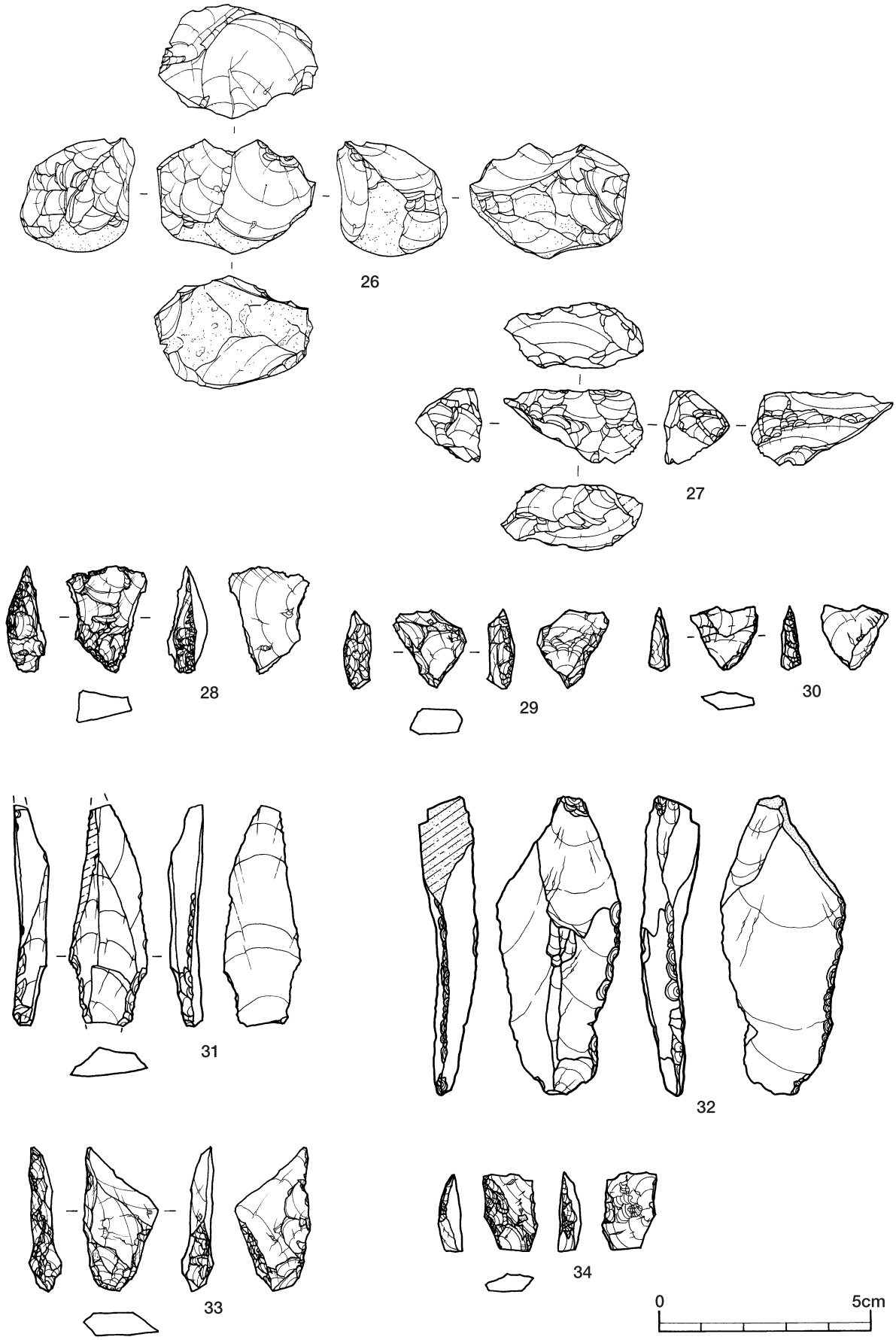


第19図　第Ⅰ文化層４・５・８ブロック出土石器

第８ブロック（第19図25，第20図33・34）

玉髄を主とするブロックであり，わずかに黒曜石や頁岩を含む。25は背面に広い自然面をもつ打面と，主要剥離面のバルブが明確な幅広剥片を利用したものであり，剥片末端に二次加工をノッチ状に施し尖端部を形成した石器である。なお，これは他のブロック出土の玉髄製石器と異なり，整形の意図が認められる。尖端部とその近くの縁辺には著しい使用痕が観察される。

第20図33・34は台形様石器である。33は幅広剥片の打面部を折断しその後腹面側から急角度のブ



第20図　第Ⅰ文化層１・３・５・７・８ブロック出土石器

ランティングを施し，対辺の縁辺は交互剥離状に背面と腹面に平坦加工を施し整形したものである。基部背面にも平坦剥離が施され，全体形状は切出形となっている。石材は三船産黒曜石である。34も三船産黒曜石製の幅広剥片を素材としたものであり，両側縁と基部は折断により形状を整え，その後両側縁とも平坦剥離を施している。

第９ブロック（第22図35～39）

玉髄及び石英を主とするブロックである。35～38はいずれも玉髄製のものである。35は背面に自然礫皮面が残り，腹面は節理面がみられる薄い剥片であり，縁辺の一部に細かい微細剥離が集中した使用痕が認められるものである。36も平坦に近い自然面と摂理面をもつ板状の剥片であるが，尖った部分の縁辺に二次加工と使用痕が観察されるものである。37も自然礫皮面と摂理面をもつ剥片であり，尖った先端部に微細な剥離が集中した使用痕が認められるものである。ただし，その下位の鋭利な縁辺には全く使用痕は認められず，尖端部のみを使用したものと考えられる。38は自然礫皮面もしくは節理面をもつもので，剥片というより石核的な剥離面をもつものである。図のｂ面には多くの敲打した痕跡が認められ，ｃ面の左側下部には二次加工があり，また，ａ面の左上部側縁部には使用痕が観察される。

39は石英質の石材であり，35～38の玉髄とは異なる。風化と石質のため自然面と剥離面が明確でない部分もあるが，正面の作業面と打面を交互に剥いでいるものと判断される。

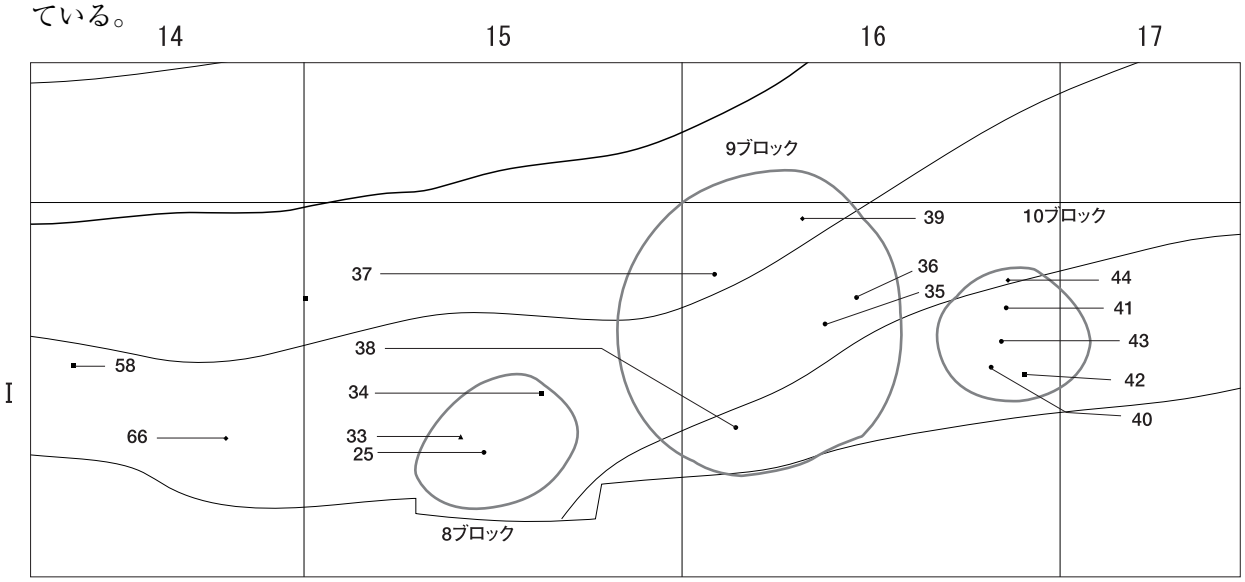
第10ブロック（第22図40・41，第23図42・43）

頁岩，三船産黒曜石，上牛鼻産黒曜石，玉髄など多種の石材がみられる小さなブロックである。

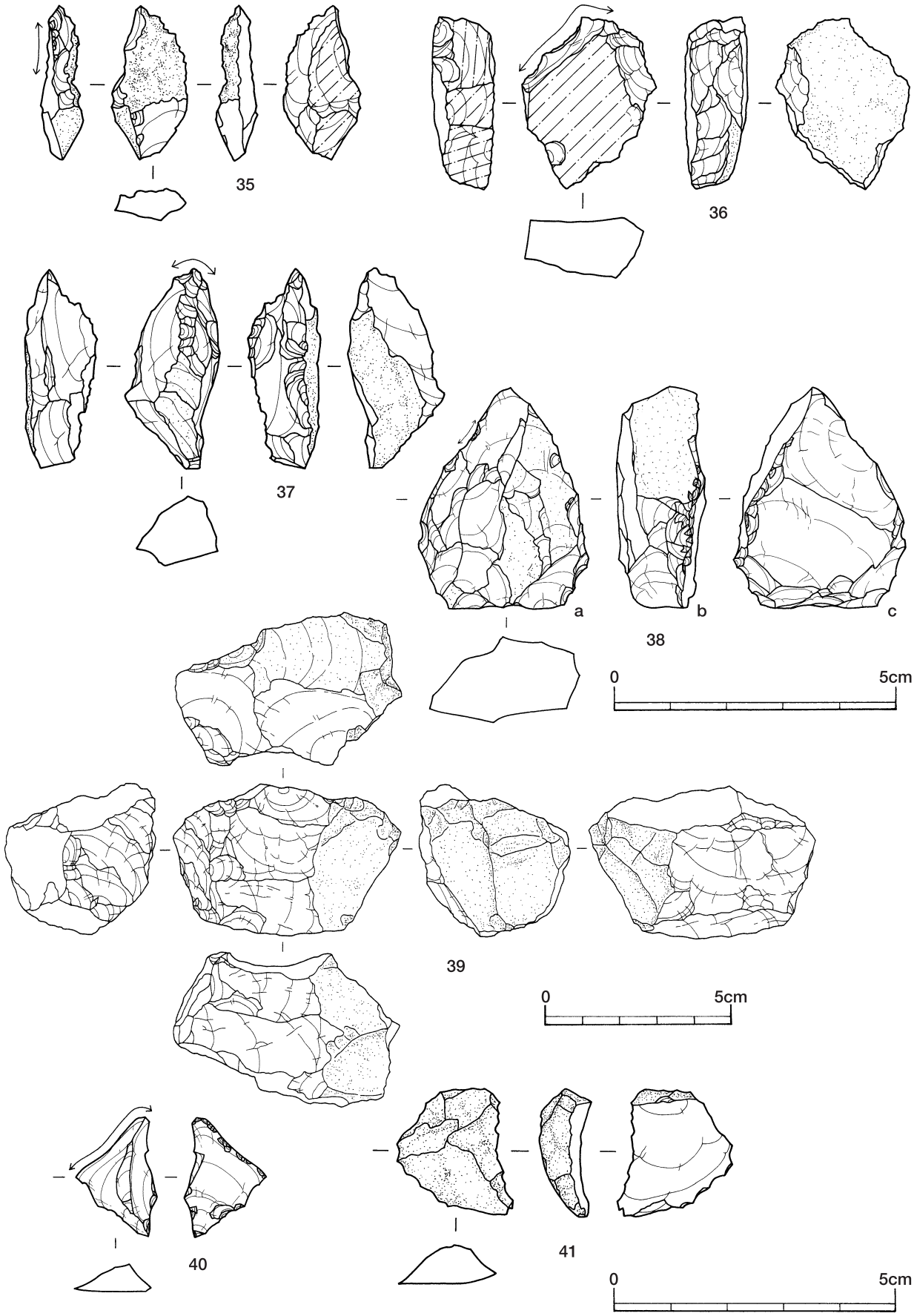
第22図40は玉髄製の三角形状を呈する薄い剥片の，鋭利な末端の縁辺に微細な使用痕が観察されるものである。使用痕である微細な剥離は腹面側のみに認められる。

41は40と同様に玉髄製の剥片である。背面は全て自然礫面であり，角礫状の石核から角の部分を剥離したことが分かる。打面とバルブが明確である。使用痕は無い。

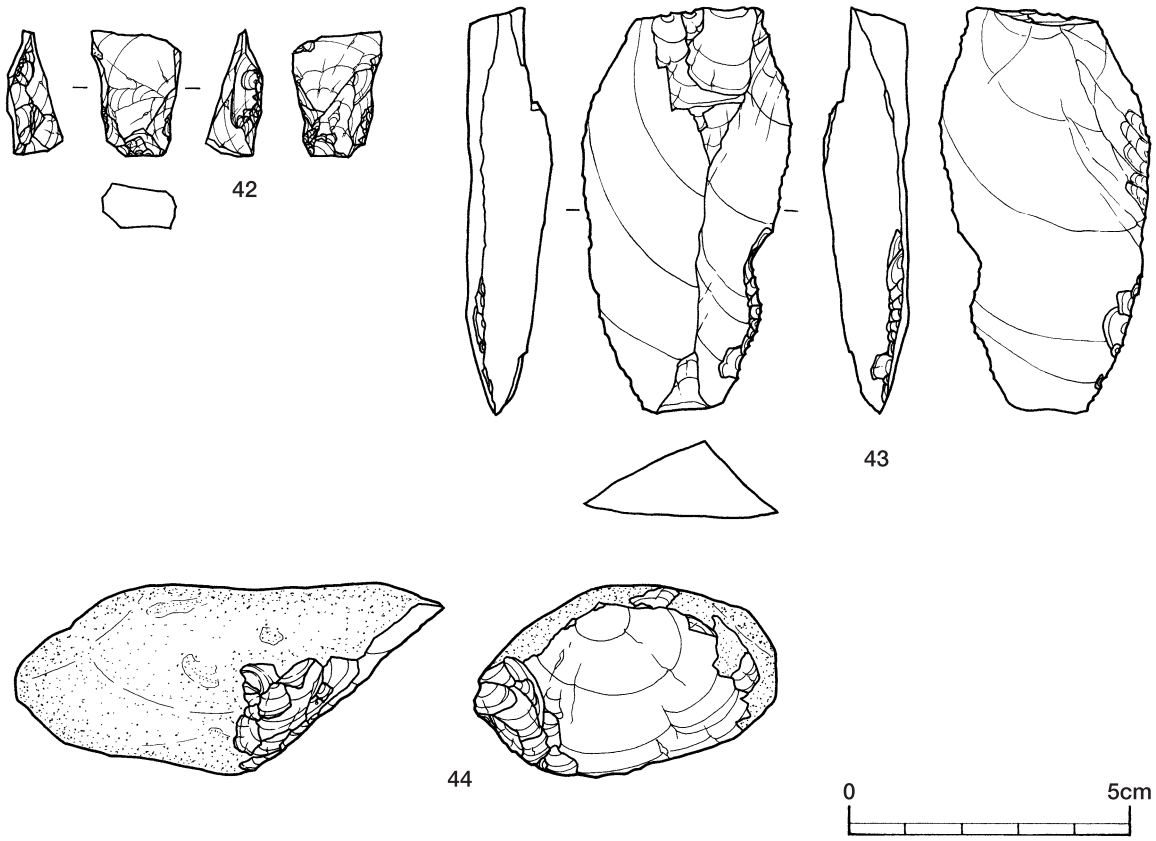
42は三船産黒曜石を石材とし，幅広剥片の末端を刃部とした台形様石器である。右側縁は折断の後に腹面からの粗く急角度のブランティングが施され，左側縁も急角度の粗いブランティングが施されている。基部端部も腹面から二次加工が施されており，腹面の基部近くには平坦剥離が施されている。



第21図　第Ⅰ文化層８～10ブロック石器群器種別出土分布図



第22図　第Ⅰ文化層 9 ・10ブロック出土石器



第23図　第Ⅰ文化層10ブロック出土石器

43は砂岩製で比較的大型の縦長剥片を使用したスクレイパーである。この剥片は頭部調整が顕著に施されており，打面は平坦な自然面である。二次加工は背面右側縁辺にノッチ状に施している。また左側縁辺には腹面側に二次加工を施している。先端部をわずかに欠損する。

44は上牛鼻産黒曜石のやや扁平な円礫を使用した石核である。丸味のある自然礫皮面を打面にして，長軸の一端から円形に近い形状の剥片を剥いでいる。

第11ブロック（第26図45・46）

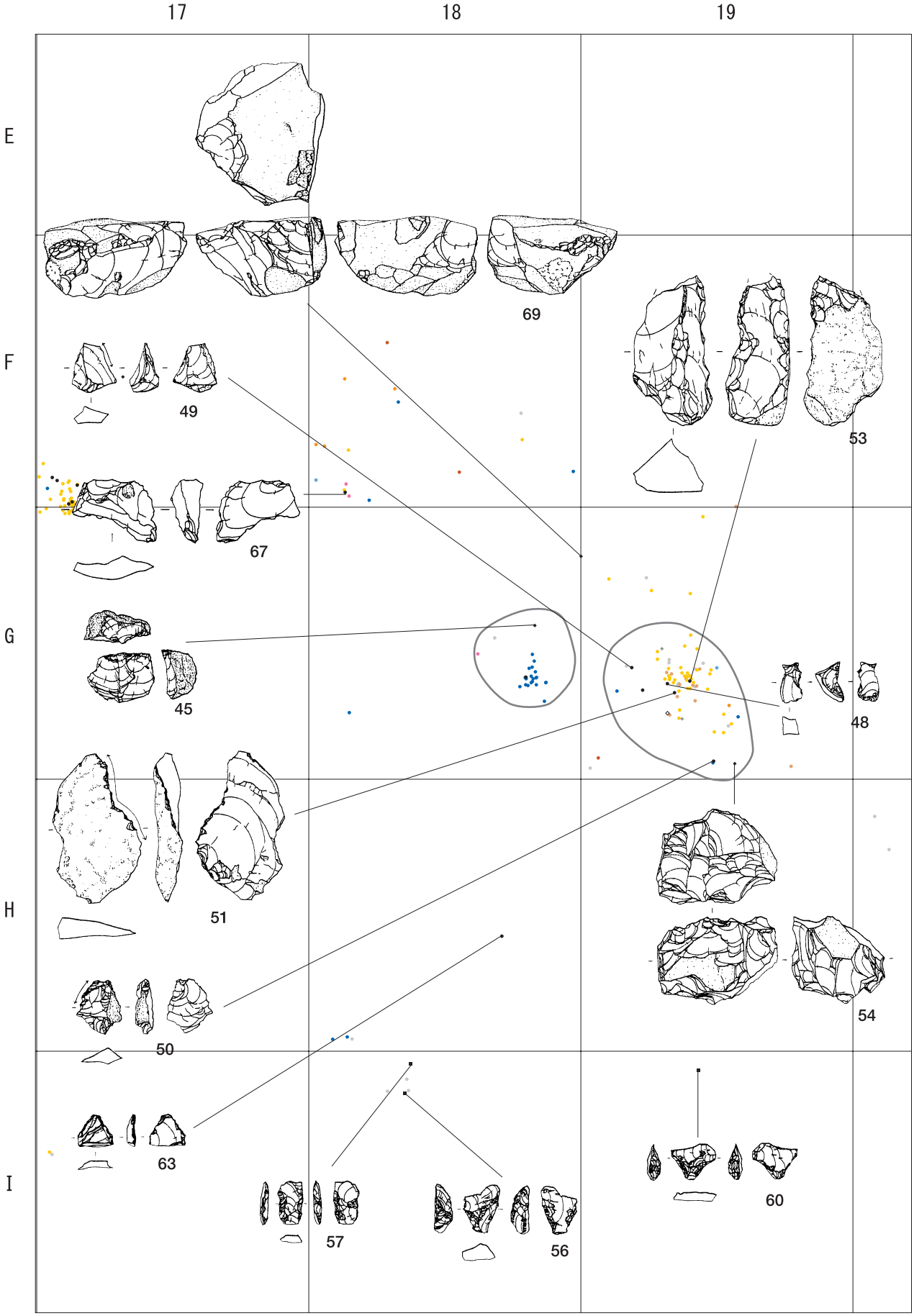
第11・12ブロックの主要石器と石材は第24図で示し，全出土石器は第25図で提示した。

上牛鼻産黒曜石を主体とするブロックである。45は上牛鼻産黒曜石の石核である。小角礫が使用され，平坦な剥離面を打面にして比較的小さな剥片が連続して剥がされている。46は砂岩製の縦長剥片を使用したスクレイパーである。剥片は平坦な自然面を打面にしたもので，剥片の右側縁辺に連続した二次加工を施し刃部としている。左側縁辺には腹面側に二次加工が施されている。先端部をわずかに欠損している。

第12ブロック（第26図47，第27図48～54）

出土した石材は玉髄が主であり，三船産黒曜石などがわずかに含まれる。

47は砂岩製の敲石である。扁平に近い形状であり，長軸の両端に著しい敲打痕が認められ，機能部は平坦化している。第27図48～51は玉髄製の石器である。48は剥辺の二縁辺に細かい鋸歯状の二次加工を施し，角の部分には尖った部分をつくり出したものである。49は不定形剥片の鋭利な一縁



第24図　第Ⅰ文化層11・12ブロック主要石器出土分布図

辺の一部に使用痕が観察されるものである。50も同様に剥片の縁辺に使用痕が認められるものである。51は背面にローリングを受けた自然礫面のある比較的大型の玉髄剥片であり，鋭利な縁辺に使用痕が観察されるものである。

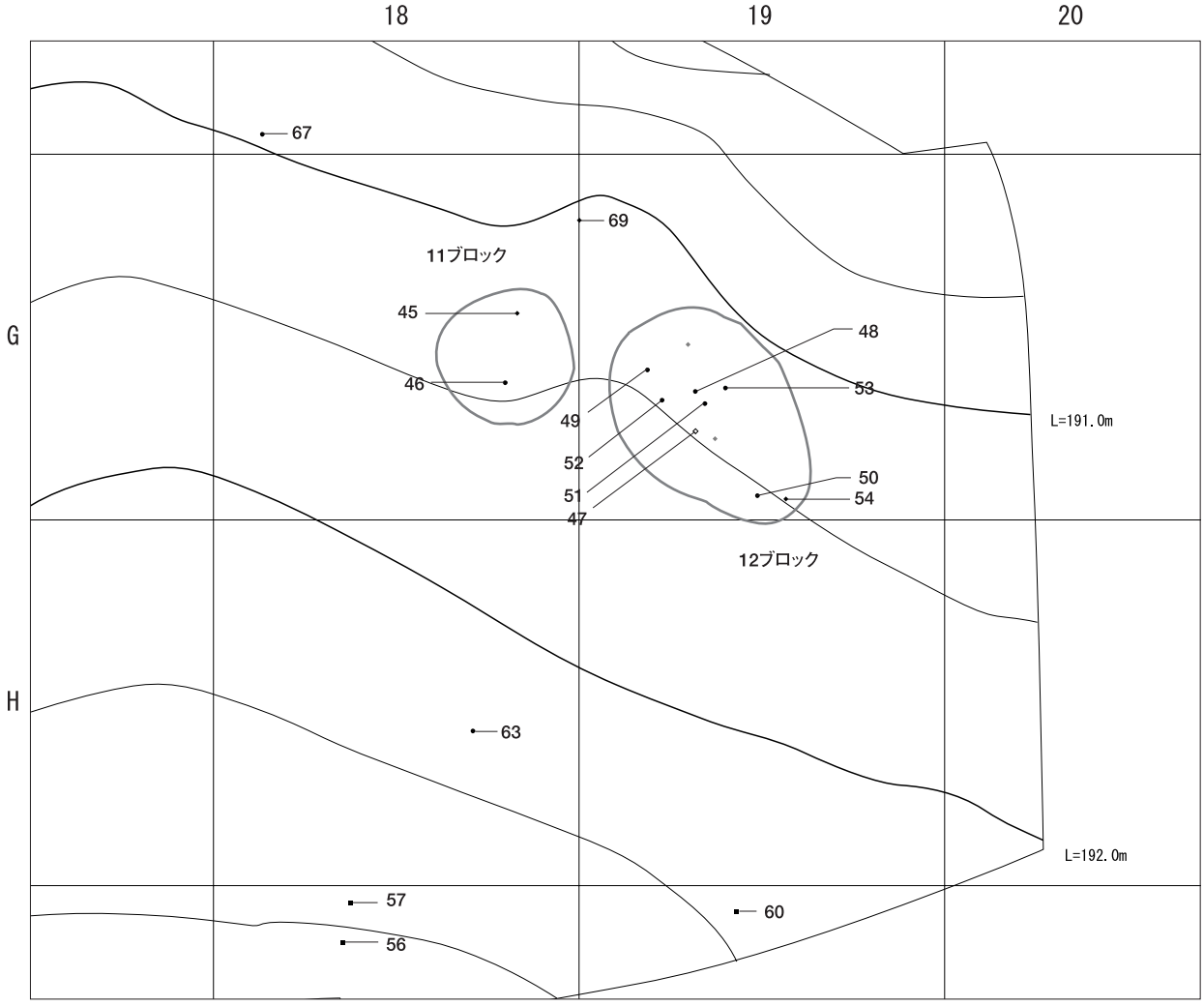
52は赤褐色を呈する鉄石英製であり，縁辺に連続する二次加工が施して刃部を形成するスクレイパーである。明確な刃部形成の二次加工が認められるのは本例のみであり，石材も鉄石英であることから他の玉髄製石器とは時期などの性格が異なる可能性が高い。53は玉髄製でローリングを受けた自然面をもつ。a 面左側の広い剥離面は節理面状の剥離面で，b 面が主要剥離面である。先端付近に粗い二次加工が施されている。

54は玉髄製の石核である。左右両側面にローリングを受けた自然平坦面が残存しており，角礫使用であると分かる。打面と作業を転移しながら，回転するように剥離面を変えて剥離している。

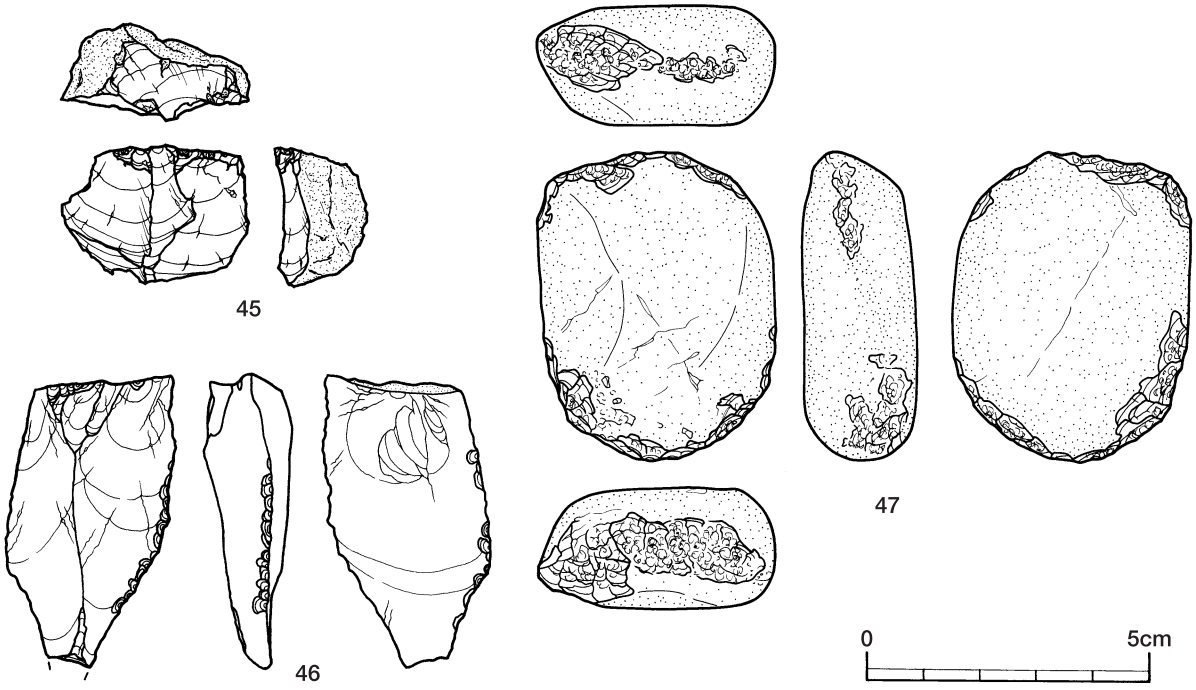
ブロック外の石器（第28図55～第30図69）

ブロック外の出土石器の位置については，第21・25図で示した。

55～60は台形様石器である。55は幅広剥片を素材とし先端部近くは腹面側からの急角度のブランティングが施され，基部付近は平坦剥離が施されている。56も腹面側に平坦剥離を施して基部を整形したものである。57は折断と平坦剥離及び傾斜のあるブランティングを施したものである。58は



第25図　第Ⅰ文化層11・12ブロック石器群器種別出土分布図



第26図　第Ⅰ文化層11・12ブロック出土石器

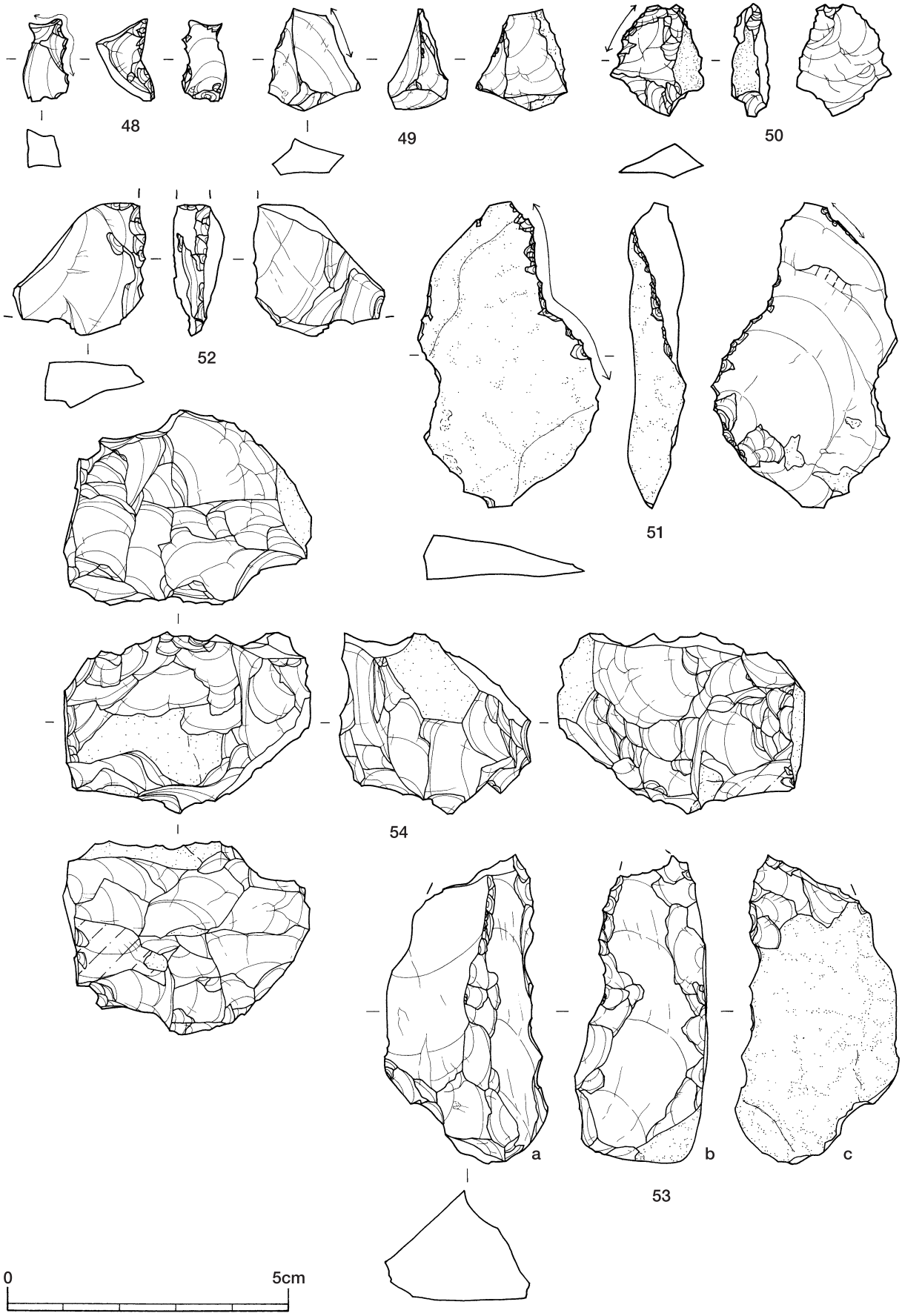
腹面側から急角度のブランティングを施し，その後に基部を平坦剥離したものである。59は側縁部にわずかな二次加工が施され，60も折断とブランティングが施された台形様石器である。このうち55，58が三船産黒曜石，他は上牛鼻産黒曜石が使用されている。61は三船産黒曜石を使用した掻器の一部である。62は上牛鼻産の扁平に近い円礫を使用した石核である。打面は平坦剥離面を利用し，石核形状により横長剥片を剥いでいる。

63は玉髄製で扁平で薄い剥片の周縁に使用痕が認められる。64も玉髄製で正面の剥片を剥いだ後の右側縁辺に著しい使用痕が観察される。65は凝灰岩質の石材であり，鋭利な縁辺に使用痕が観察されるものである。

66は節理面を表裏にもつ板状の玉髄製石核である。作業面はｂ面であり，打面は平坦に近い節理面のｃ面である。67は横長に近い形状の玉髄製剥片である。打面と主要剥離面のバルブが明瞭である。

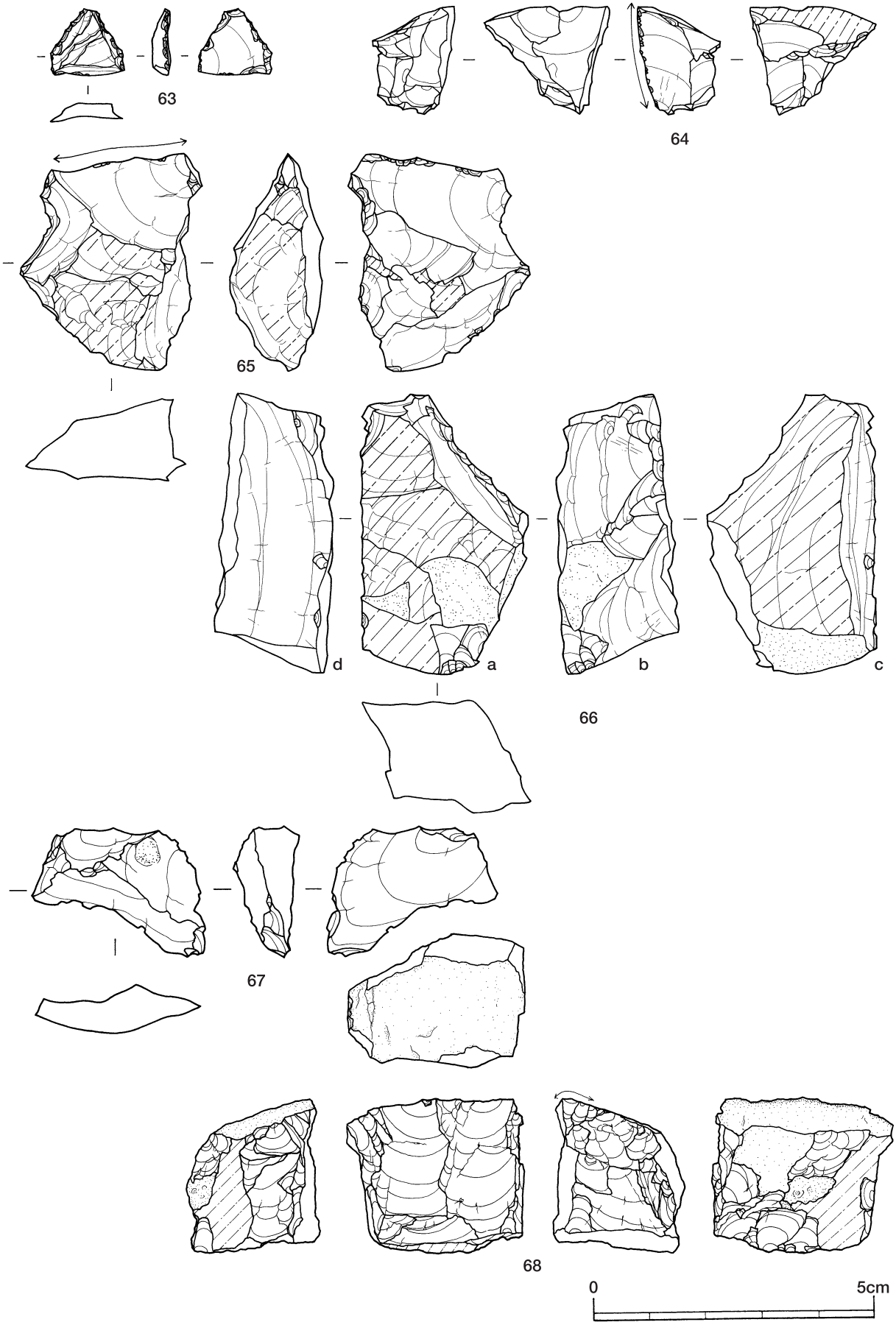
68は玉髄製の角礫を使用した石核である。打面はローリングを受けた平坦な自然礫面であり，そこから正面及び左右両面が作業面となっている。縦長に近い剥片が連続して剥離されている。打面の角の部分には使用痕が認められる。

69は玉髄製の石核である。礫はローリング面のある角礫が使用され，正面の角の部分と打面の左側が一回剥離されている。なお丸みのある後端には敲打痕が多く認められ，敲石として使用されたと考えられる。

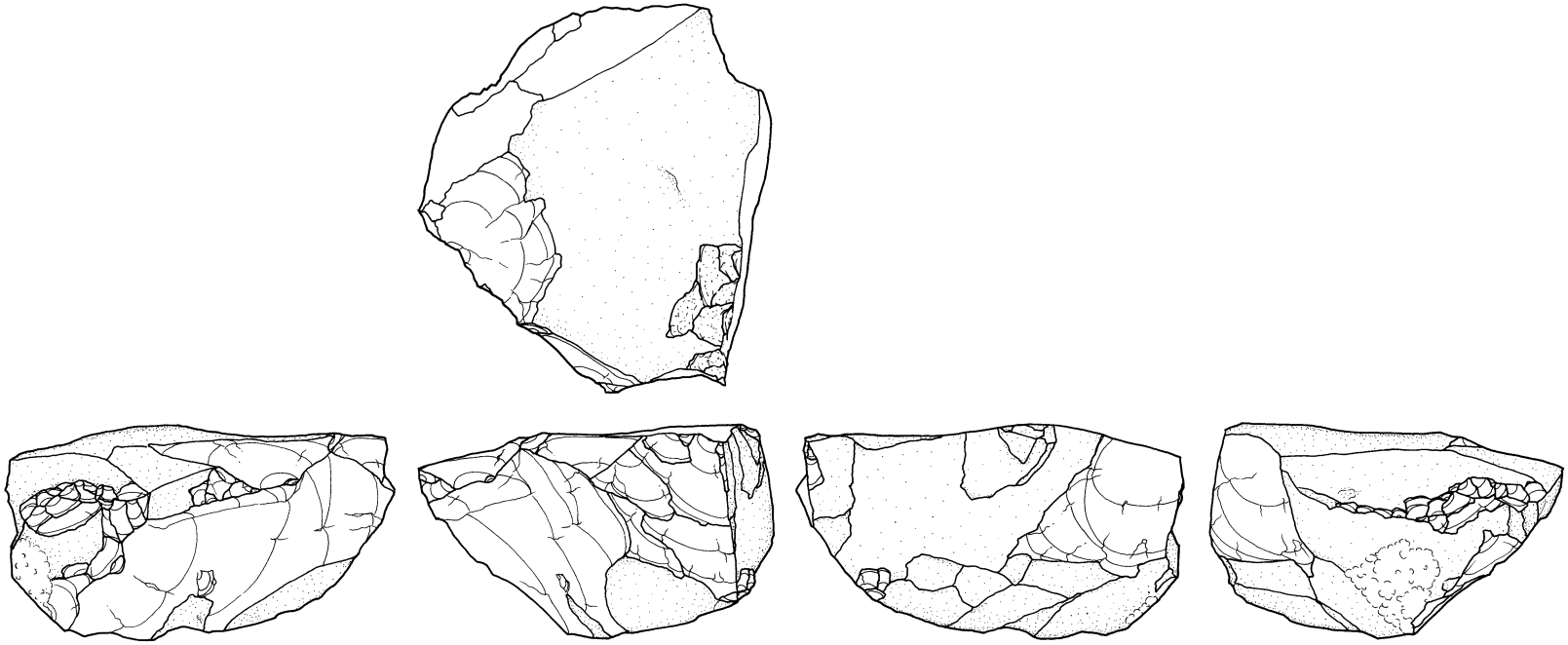


第27図　第Ⅰ文化層12ブロック出土石器

第28図　第Ⅰ文化層ブロック外出土石器（1）



第29図　第Ⅰ文化層ブロック外出土石器（2）



69

0 5cm

第30図　第Ⅰ文化層ブロック外出土石器（3）

第３表　第Ⅰ文化層石器観察表

挿図番号	番号	ブロック	器　種	分類	石材	区	層	遺物番号	標高	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	備考
14	1	1	台形石器		SH2	G14	Ⅸa	187	189.928	7.42	3.5	2.9	1.0	
	2	1	スクレイパー		OB2	G14	Ⅸa	152	190.396	5.34	3.0	2.4	1.0	
	3	1	使用痕剥片		SH2	G14	Ⅸa	123	189.996	85.65	6.7	7.25	2.6	
	4	1	剥片		SH2	G13	Ⅸa	1	189.895	16.7	3.8	3.0	1.4	
	5	1	打面再生剥片		SH2	G13	Ⅸa	18	189.585	3.76	2.99	1.68	1.02	
	6	1	使用痕剥片		SH2	G13	Ⅸa	44	189.916	17.97	6.0	3.25	1.3	
	7	1	使用痕剥片		SH2	G14	Ⅸa	169	190.138	2.03	1.8	2.15	0.65	
	8	1	剥片		SH2	G14	Ⅸa	168	190.043	4.3	3.3	2.1	0.8	
	9	1	剥片		SH2	G13	Ⅸa	13	189.52	2.6	2.8	1.7	0.7	
	10	1	剥片		SH2	G14	Ⅸa	153	190.474	1.8	2.5	1.9	0.3	
15	11	1	接合資料		SH2	G13	Ⅸa	41ほか	—	141.01	7.0	6.75	3.05	
	①		剥片		SH2	G14	Ⅸa	188	189.89	3.21	2.59	2.12	0.86	
	②		剥片		SH2	G14	Ⅸ	22	189.86	3.2	2.4	2.0	0.7	
	③		剥片		SH2	G13	Ⅸa	23	189.652	1.52	2.48	1.38	0.59	
	④		剥片		SH2	G13	Ⅸa	26	189.68	0.8	2.0	1.4	0.4	
	⑤		使用痕剥片		SH2	G13	Ⅸa	24	189.698	19.03	4.09	3.68	1.4	
	⑥		石核		SH2	G13	Ⅸa	41	190.028	113.25	5.05	6.77	2.87	
18	12	1	二次加工剥片		CC	G14	Ⅸa	183	189.589	30.96	4.9	3.4	2.2	
	13	2	二次加工剥片		CR	G15	Ⅸa	1870	190.068	0.52	1.0	0.9	0.5	
	14	2	使用痕剥片		CC	G15	Ⅸa	1879	190.185	3.79	2.2	3.2	0.9	
	15	2	二次加工剥片		CC	G15	Ⅸa	1880	190.185	10.65	4.2	2.3	1.3	
	16	3	使用痕剥片		CC	F16	Ⅸa	319	190.704	3.17	2.3	2.0	1.0	
	17	3	二次加工剥片		CC	G16	Ⅸa	384	190.863	6.55	2.3	2.6	1.5	
	18	3	使用痕剥片		CC	G16	Ⅸa	372	190.574	10.32	3.1	3.4	1.2	
	19	4	使用痕剥片		CC	F17	Ⅸa	382	190.919	1.38	1.7	1.4	1.0	
	20	4	使用痕剥片		CC	G17	Ⅸa	55	190.928	0.52	1.7	0.8	0.5	
	21	4	使用痕剥片		CC	G17	Ⅸa	153	190.948	0.58	1.6	1.1	0.4	
19	22	4	使用痕剥片		CC	F17	Ⅸa	386	190.854	3.03	2.8	1.9	0.7	
	23	4	二次加工剥片		CC	F17	Ⅸa	375	190.86	10.66	4.1	2.8	1.3	
	24	5	石核		CC	G16	Ⅸa	181	190.618	21.78	3.52	3.57	2.2	
	25	8	二次加工剥片		CC	I15	Ⅸa	48	192.802	20.52	3.9	4.1	1.6	
20	26	1	石核		OB1	G13	Ⅸ	4	189.881	23.98	2.7	3.7	2.6	
	27	3	石核		OB1	F16	Ⅸa	324	190.717	5.96	1.7	3.3	1.5	
	28	5	台形石器		OB2	G16	Ⅸa	390	190.693	2.75	2.5	1.9	0.7	
	29	5	台形石器		OB2	G16	Ⅸa	394	190.782	1.6	1.7	1.4	0.6	
	30	5	台形石器		OB2	G16	Ⅸa	183	190.788	0.7	1.5	1.3	0.4	
	31	7	剥片尖頭器		SA	H15	Ⅸa	61	191.456	5.9	5.1	1.8	0.7	
	32	7	スクレイパー		AN2	H15	Ⅸa	16	191.44	18.94	6.95	2.4	1.3	
	33	8	台形様石器		OB2	I15	Ⅸa	28	192.887	2.91	3.4	1.8	0.5	
	34	8	台形様石器		OB2	I15	Ⅸa	37	192.65	1.0	1.8	1.3	0.4	
22	35	9	使用痕剥片		CC	I16	Ⅸa	39	192.872	2.0	2.7	1.4	0.7	
	36	9	使用痕剥片		CC	I16	Ⅸa	27	192.885	8.66	3.0	2.9	1.1	
	37	9	使用痕剥片		CC	I16	Ⅸa	35	192.506	5.15	3.5	1.7	1.3	
	38	9	二次加工剥片		CC	I16	Ⅸa	80	193.124	18.12	3.9	3.0	1.6	
	39	9	石核		CC	I16	Ⅸa	33	192.518	89.32	4.0	6.0	4.0	
	40	10	使用痕剥片		CC	I16	Ⅸa	69	193.184	0.81	2.1	1.5	0.5	
	41	10	使用痕剥片		CC	I16	Ⅸa	46	193.123	3.03	2.3	2.1	0.9	
23	42	10	台形石器		OB2	I16	Ⅸa	70	193.187	2.64	2.2	1.6	0.8	
	43	10	スクレイパー		SA	I16	Ⅸa	65	193.178	36.2	7.2	3.5	1.4	
	44	10	石核		OB1	I16	Ⅸa	48	193.068	131.25	7.5	3.4	3.5	
26	45	11	石核		OB1	G18	Ⅸa	148	191.332	11.83	3.3	2.4	1.7	
	46	11	スクレイパー		AN2	G18	Ⅸa	160	191.459	17.01	5.1	2.6	1.5	
	47	12	敲石		SA	G19	Ⅸa	720	191.422	66.6	5.4	4.1	1.9	
27	48	12	二次加工剥片		CC	G19	Ⅸa	710	191.249	0.89	1.5	0.8	1.0	
	49	12	使用痕剥片		CC	G19	Ⅸa	699	191.412	0.66	1.8	1.6	1.0	
	50	12	使用痕剥片		CC	G19	Ⅸa	756	191.434	1.43	2.0	1.7	0.7	
	51	12	使用痕剥片		CC	G19	Ⅸa	728	191.43	13.5	5.5	3.2	1.0	
	52	12	二次加工剥片		FQ	G19	Ⅸa	724	191.357	3.89	2.6	2.4	0.9	
	53	12	二次加工石器		CC	G19	Ⅸa	730	191.232	32.22	5.5	2.9	2.3	
	54	12	石核		CC	G19	Ⅸa	755	191.456	480	3.2	4.3	3.2	
28	55		台形石器		OB2	I14	Ⅸa		—	3.39	2.7	2.0	0.95	
	56		台形様石器		OB1	I18	Ⅸa	47	192.91	2.72	2.5	1.7	1.0	
	57		台形様石器		OB1	I18	Ⅸa	44	192.839	1.17	2.1	1.2	0.4	
	58		台形石器		OB2	I14	Ⅸa	18	192.587	4.01	2.3	2.4	0.95	
	59		台形石器		OB1	F16	Ⅸa	306	190.539	2.2	2.5	1.6	0.7	
	60		台形石器		OB1	I19	Ⅸa	6	192.367	1.8	2.2	1.8	0.4	
	61		掻器		OB2	H16	Ⅸa	169	191.75	3.48	2.3	1.5	1.25	
	62		石核		OB1	G15	Ⅸa	1918	190.619	69.46	5.77	5.01	2.8	
29	63		使用痕剥片		CC	H18	Ⅸa	456	192.254	0.48	1.2	1.3	0.4	
	64		使用痕剥片		CC	F16	Ⅸa	317	190.786	4.48	1.9	2.2	1.5	
	65		使用痕剥片		SH	I15	Ⅸa	59	—	13.83	3.9	3.2	1.6	
	66		石核		CC	I14	Ⅸa	22	192.769	34.37	5.0	3.0	2.2	
	67		使用痕剥片		CC	F18	Ⅸa	97	190.863	4.56	2.3	3.1	1.2	
	68		石核		CC	F17	Ⅸa	425	190.711	26.55	5.77	5.01	2.8	
30	69		石核		CC	G19	Ⅸa	315	191.05	1250	8.1	7.37	4.04	

第Ⅴ章　第Ⅱ文化層の調査

第１節　概要

旧石器時代第Ⅱ文化層は，本遺跡では基本土層Ⅷ層から出土した石器群である。ＡＢ両地区で出土したものであり，ナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器などを主体とする石器群である。一部の遺物については，調査段階でⅦ層として取上られたものも含まれる。

土層の検討の結果，検出された火山ガラスから，Ⅷ層は姶良入戸火砕流堆積物の風成再堆積層の可能性が高く，火砕流の堆積層準はⅧ層下部付近と考えられる。そこで，第Ⅱ文化層石器群の該当する時期はＡＴより上位と判断される。

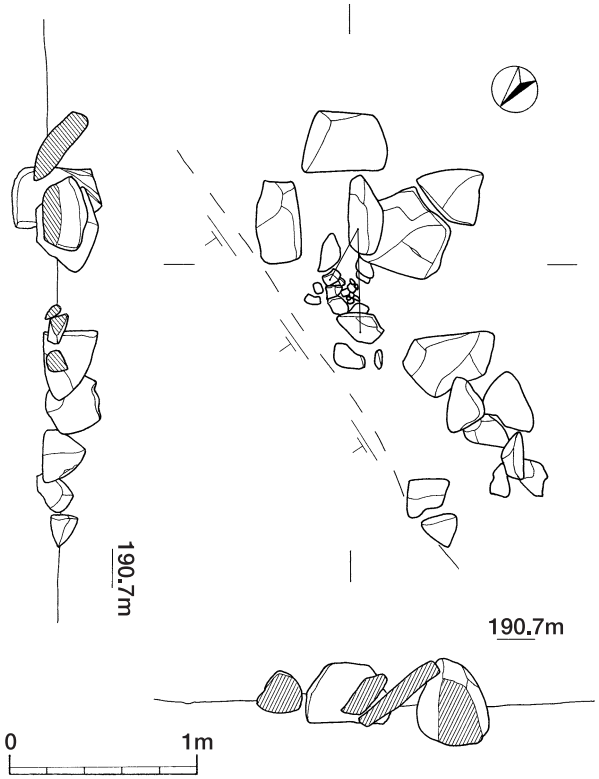
遺構は，Ｆ－16区から礫群が1基検出された。また，遺物の集中した区域から合計35ブロックを識別し，石材との関連を考慮して６ユニットとしてとらえた。

第２節　遺構

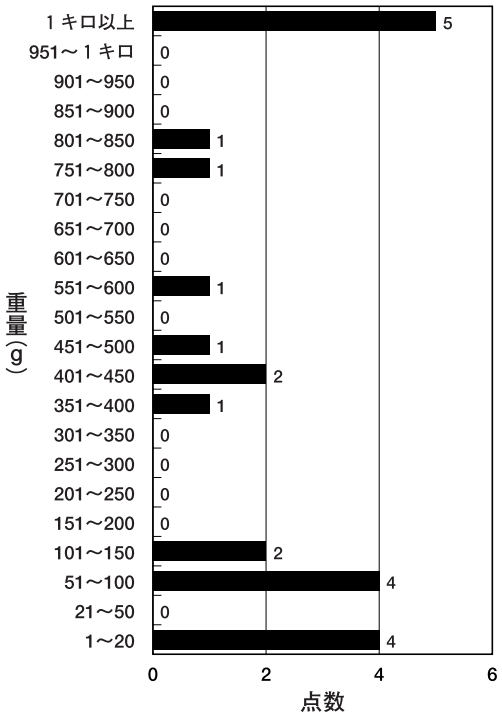
１．礫群

１号礫群

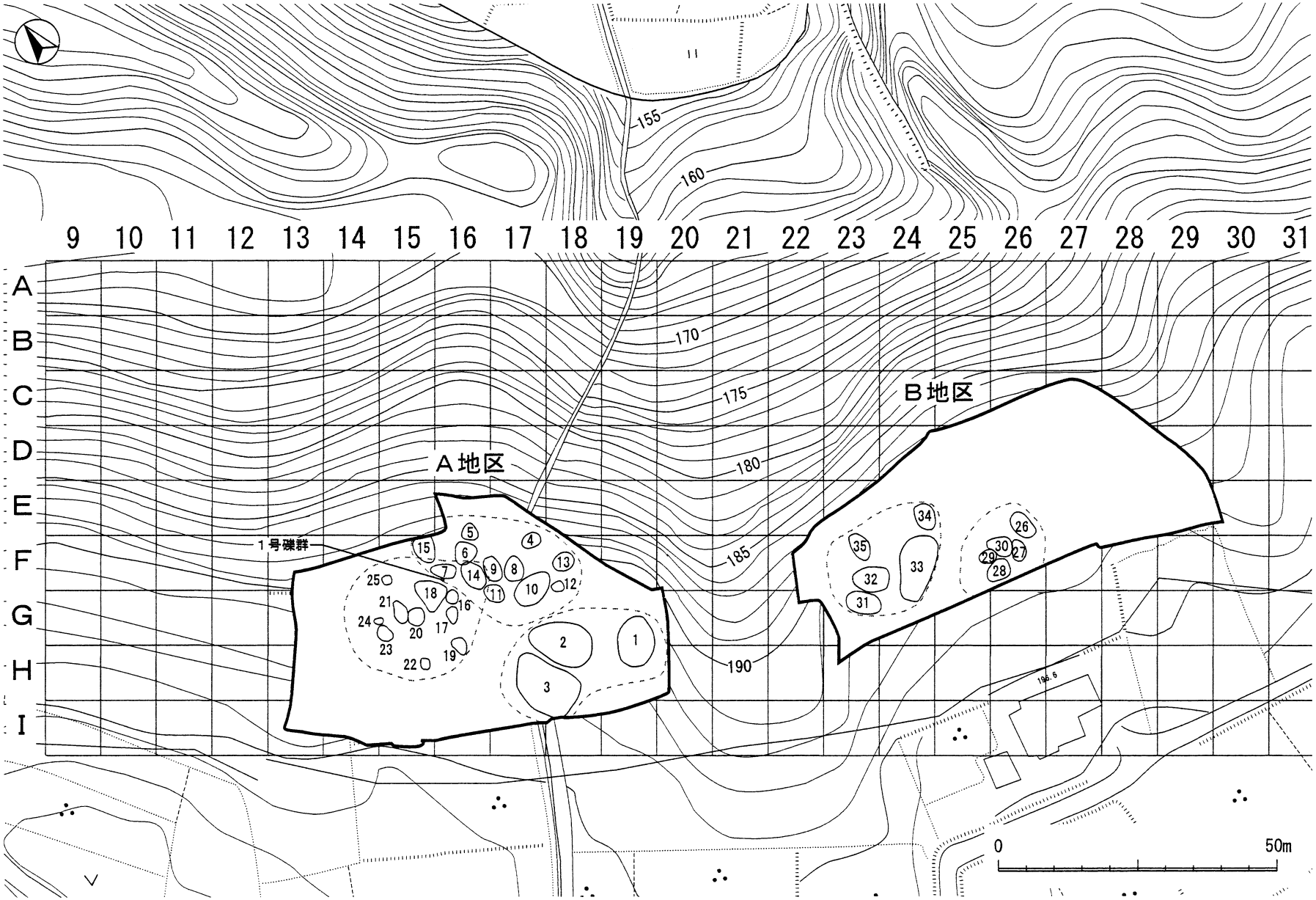
Ｆ－16区Ⅷ層で検出された礫群である。径約１ｍの範囲に分布しているが，北側は削平されている。中心部には数㎝の小礫がまとまり，周辺部には径10～20㎝の大きめの礫がめぐる。特に中心部の礫は熱を受けて破砕しており，炭化物も出土している。礫総数は34個で，１個体が接合している。中心部に明確な掘り込みは検出されていない。礫群については，出土した炭化物の放射性炭素年代測定により約22000年前という年代が得られた。



第31図　第Ⅱ文化層１号礫群



第32図　１号礫群重量別分布図



第33図　第Ⅱ文化層のブロックと礫群位置図

2．ユニット・ブロック群

第Ⅱ文化層出土の石器群は，発掘調査時にⅧ層出土石器群として取り上げられたものを主とする。地区によっては堆積層が薄いため，なかにはⅨ層の浮き上がり，もしくはⅦ層の沈みと思われる石器群もあるが，それらについては各々で説明を加える。各石器群は，集中して出土する状況がみられ，その集中部の最小単位をブロックとして捉えた。さらに，近接するブロックの出土石材分布を考慮した一定のまとまりを便宜的にユニットとして捉えた。

各石器群の分布について述べる。A地区では大きく3つの分布のまとまりが抽出できる。ひとつは，南部G～I－17～19のOB1・SHを中心とする分布がある。G・H－19区のやや散在したまとまりを1ブロック，H－18区のOB1の集中する部分を中心とする2ブロック，H・I－17・18区に分布するOB1とSHのまとまりを3ブロックとする。これら1～3ブロックのまとまりを1ユニットとする。石器群としては，剥片尖頭器・国府型ナイフなどが出土している。

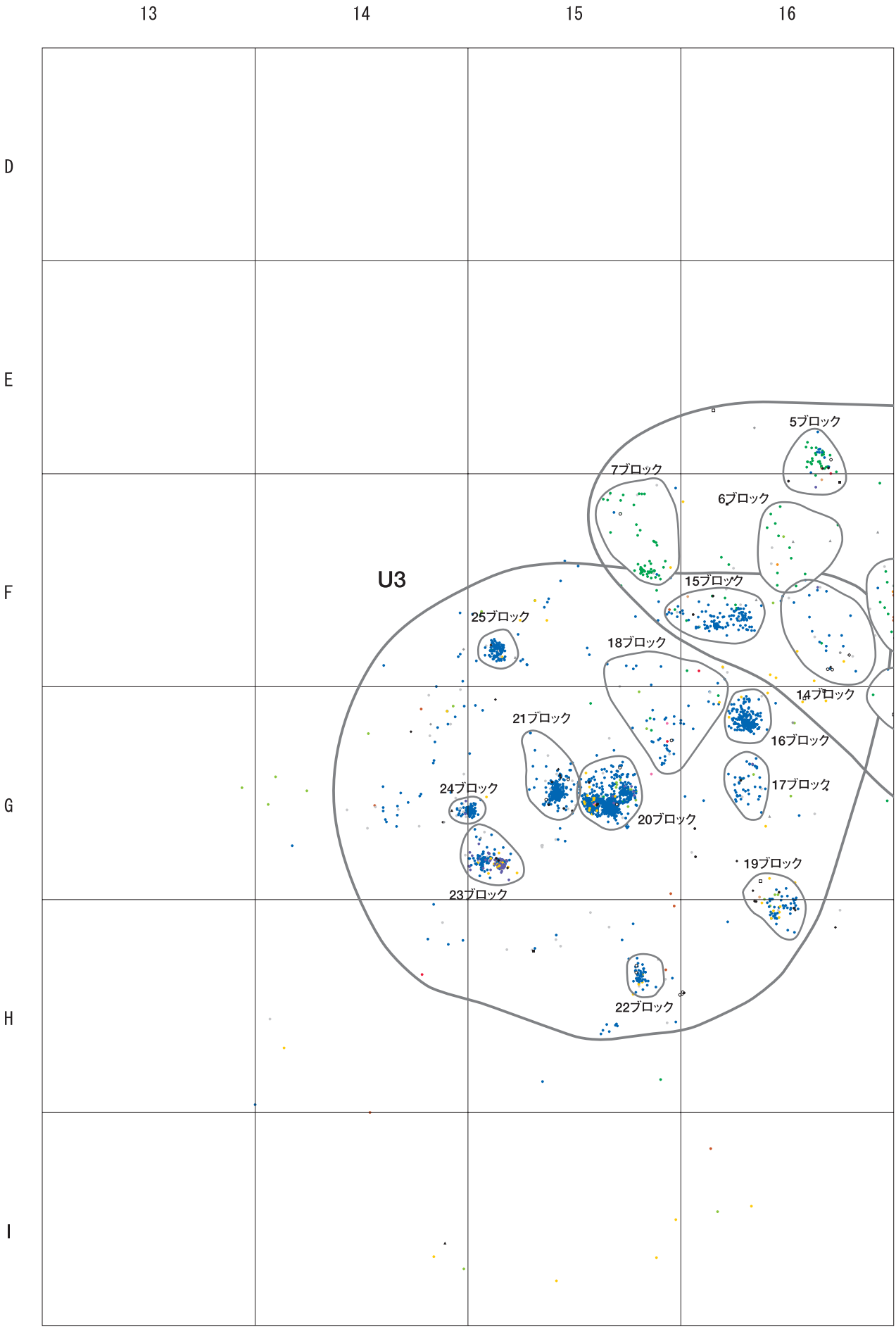
また，A地区北東部E～G－15～18区には，SHを主体とし他にOB2やCCといった石材を使用する石器群の分布があり，また西部F～H－14～16区には，OB1を中心とする石器群の出土分布のまとまりがある。北東部のE～G－15～18区の石器群は，その集中部ごとに4～13ブロックとし，そのまとまりを2ユニットとした。そのうち，E－16区のSHを主体とする5ブロックは，発掘調査時はⅧ層として取り上げられているが，Ⅶa層でも同じ位置にSHを主体とするブロック（第Ⅲ文化層2ブロック）がみられ，むしろⅦ層の沈みと考えた方がよいと思われる三稜尖頭器が出土しているが，この文化層で掲載した。

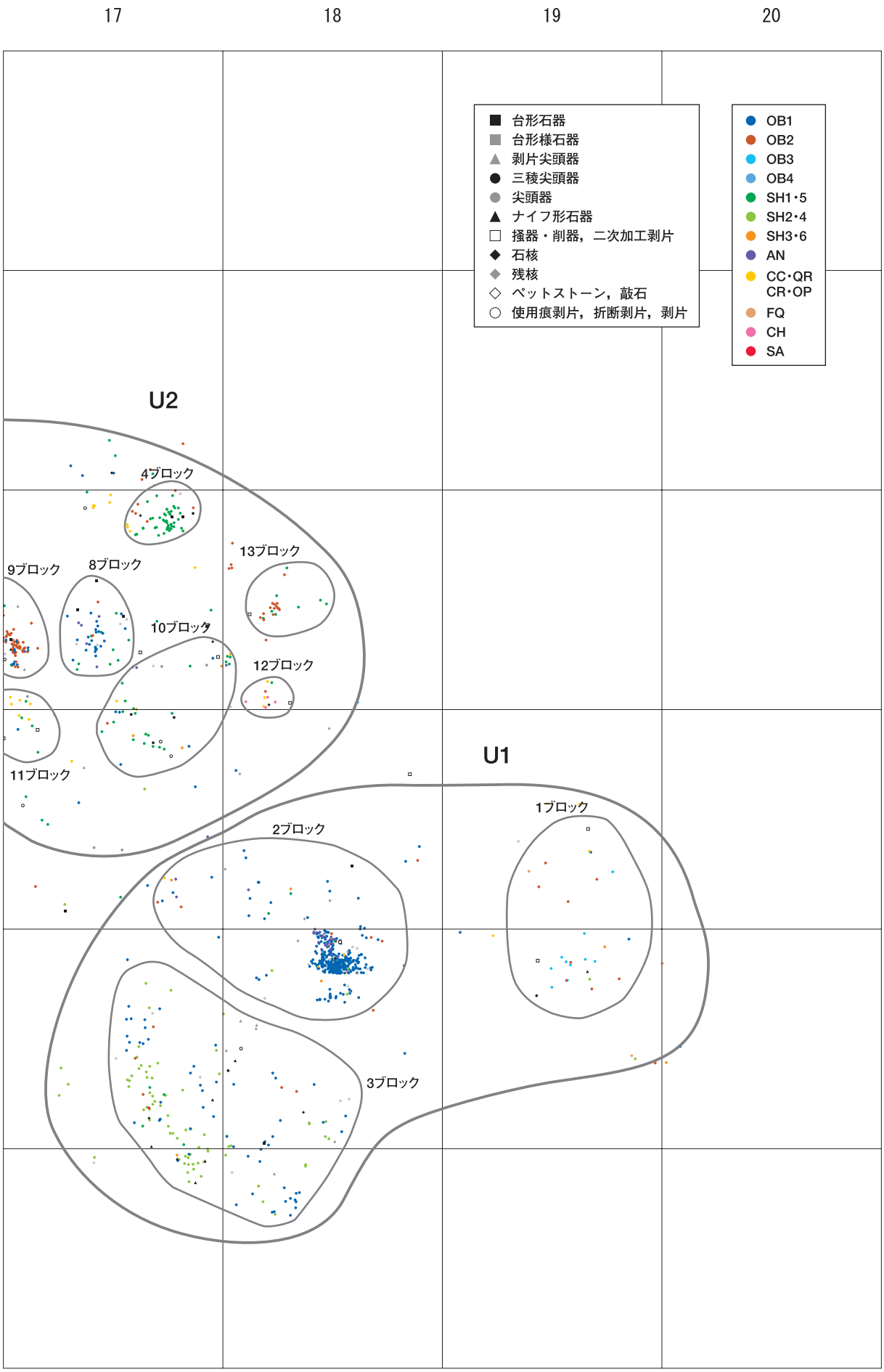
また，OB1を主体とし，その他CCやCHが分布する西部F～H－14～16区の石器群は，その分布の集中から14～25ブロックとした。その分布のまとまりは径約20mの環状であり，3ユニットとした。3ユニットで特徴的な石器群としては，14・21ブロックなどから大型の三稜尖頭器が出土している。また剥片尖頭器も数点出土しているが，ブロックの集中部から外れたところから出土している。

B地区では，南西部に分布が集中している。E－26区，F－25・26区の集中部は，26～30ブロックとし，それらのまとまりを4ユニットとした。特にF－25・26区の集中部は，石材によってF－26区中心部OB2の石材を中心とする27ブロック，同じくF－26区北西部のOB2を主体とする28ブロック，F－25・26区にまたがるOB2を主体とする29ブロック，F－26区のOB1・SHを主体とする30ブロックとした。

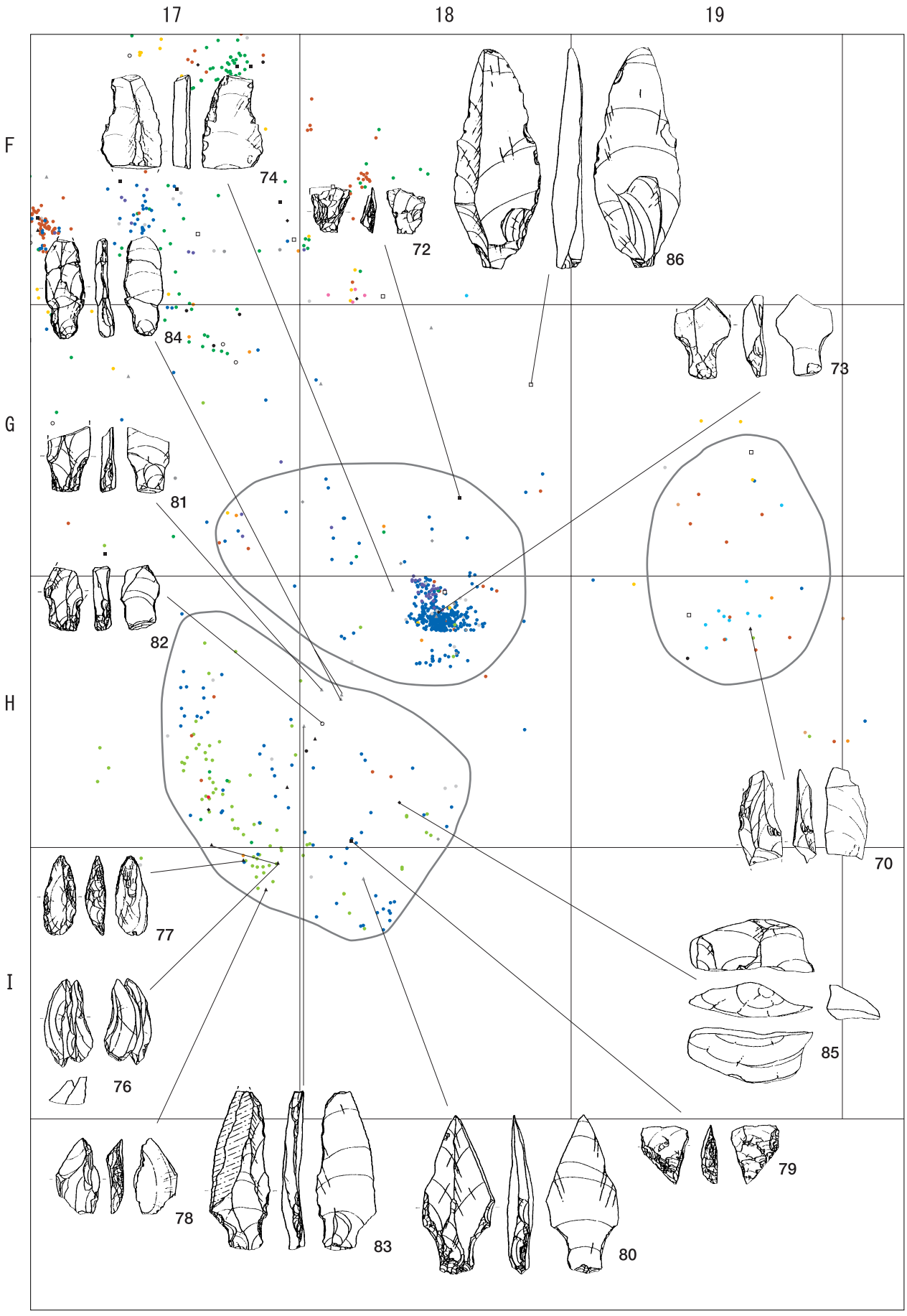
E～G－23～24区にはやや散在する分布があり，5ユニットとした。G－23区はOB1を主体とする分布であり，31ブロックである。F－23～24にわたる散在した分布域からは，剥片尖頭器や大型の三稜尖頭器が出土している。また，F－23区北側のOB2を主体とする集中部は，第Ⅳ文化層のブロックの落ち込みと判断した。

また，D・E－27区にはOB1・OB2・SHを主体とする石器群の分布集中域があるが，第Ⅲ文化層（Ⅶb層）のブロックの落ち込みと判断し，出土遺物も第Ⅲ文化層の遺物として掲載している。D－28区のOB2の集中部も同様にⅦ層のブロックの落ち込みと判断した。

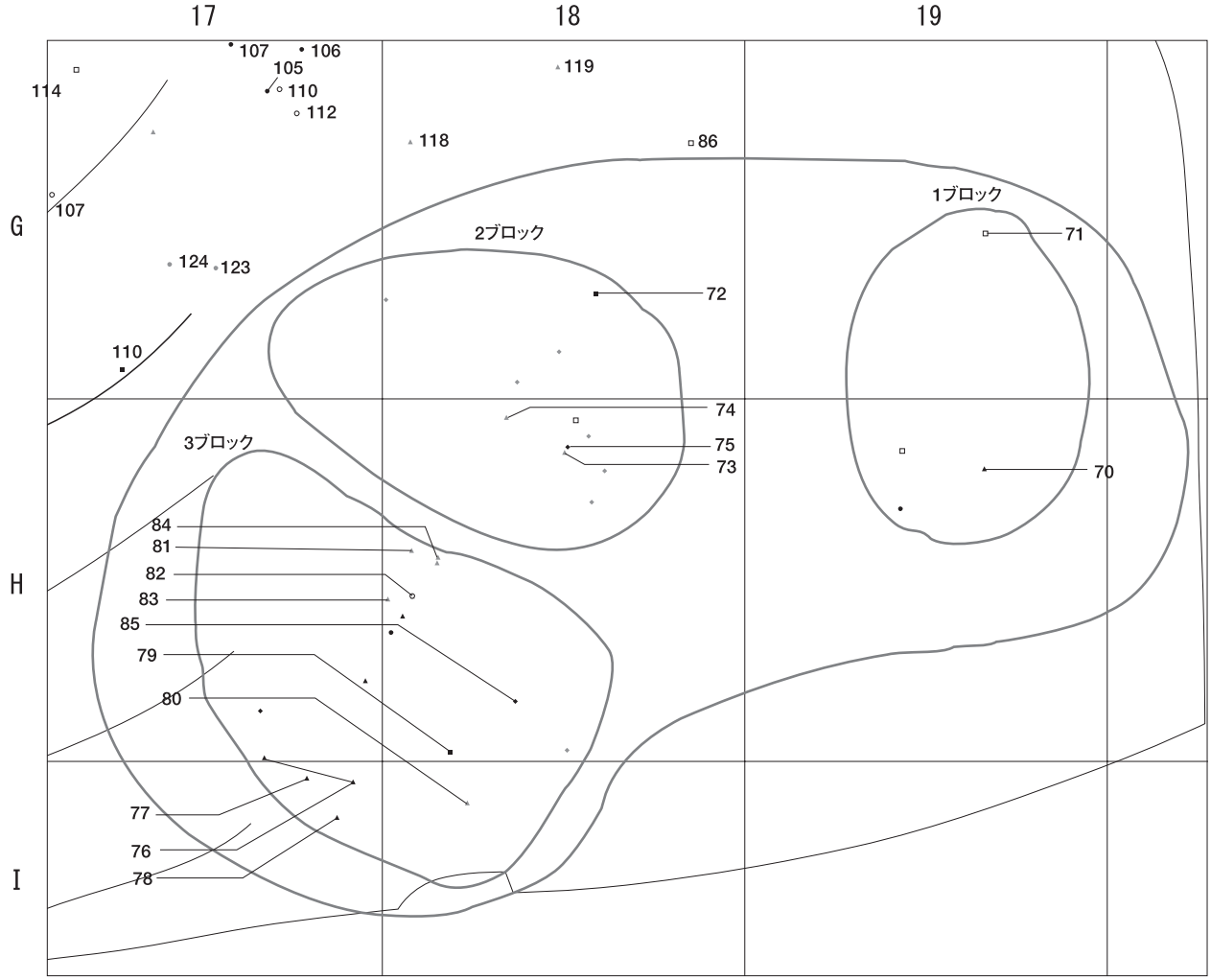

13
14
15
16
D
E
F
G
H
I
U3
5ブロック
7ブロック
6ブロック
15ブロック
25ブロック
18ブロック
14ブロック
21ブロック
16ブロック
24ブロック
17ブロック
20ブロック
19ブロック
23ブロック
22ブロック



第34図　第Ⅱ文化層Ａ地区遺物出土分布図



第35図　第Ⅱ文化層１～３ブロック（U1）主要石器出土分布図



第36図　第Ⅱ文化層１～３ブロック（U1）石器群器種別出土分布図

第３節　第Ⅱ文化層Ａ地区の石器群

多数の遺物が出土した。

１ユニット（第35～38図）

１ユニットは，Ａ地区東方のＧ～Ｉ－17～19区にまたがる約30×20ｍの範囲に１～３ブロックを内包するまとまりである。ここでは剥片尖頭器が特徴的に出土した。

１ブロック（第37図70・71）

Ｇ・Ｈ－19区に径約10×７ｍの範囲内に30点余りが分布する散在したブロックである。石材はＯＢ３，ＯＢ２，ＦＱなどである。

ナイフ形石器　70は左側縁上部に二次加工がみられるナイフ形石器である。右側縁に使用痕がみられ，基部と先端部が欠損しているが，折れた先端部裏面には使用痕が認められる。

掻器　71は鉄石英製の掻器である。左側縁と下部に急角度の二次加工が施されている。

２ブロック（第37図72～75）

Ｇ・Ｈ－17・18区にまたがる径約８×12ｍのブロックで，Ｈ18区北方に約２×２ｍの範囲内に集中部がある。石材はＯＢ１が主体を占める。台形石器，剥片尖頭器など４点を図化した。

台形石器　72は台形石器であり，貝殻状の剥片を素材としており，両側縁には急角度でないスクレ

イパーエッヂ状のブランティングが施される。刃部は左半分が欠損している。

剥片尖頭器　73は砂岩で摩滅が激しいが，両側からノッチ状に基部が整形され，剥片尖頭器の基部である。上半部は欠損している。74は片側腹面に二次加工がみられ，岩清水型削器と呼ばれるスクレイパーの可能性があるが，ここでは剥片尖頭器の折れた上部として分類した。

石核　75は上牛鼻産黒曜石の自然小円礫を利用し，自然面を打面として連続して剥片剥離を行い，貝殻状の剥片をとっている石核である。

３ブロック（第37・38図76～85）

Ｈ・Ｉ－17・18区にまたがる径約10×12mのやや散在したブロックである。石材はＯＢ１とＳＨ類が多く，特にＨ・Ｉ－17区にＳＨ４の集中部がみられる。

接合資料

ＳＨ４を用いて，瀬戸内技法で横長剥片を連続して剥離した接合資料が76である。小型であるが，丸みのあるポジ面を底面とする特徴的な剥片である。打面は作業面方向からの調整により山形の頂部が形成され，そこから連続して２点の剥片が剥がされている。

ナイフ形石器

類似する石材であるＳＨ４の横長剥片を用いたナイフ形石器は，77・78・87である。77・87は左側基部と右側縁に加工が施されている。78は一側縁加工のナイフである。ＳＨ４の85は，横長剥片を剥いだと思われる石核である。石質は接合資料と同一である。底面は剥片のポジ面であり，打面は二回の剥離により山形の頂部が形成されている。

剥片尖頭器

剥片尖頭器は５点出土している。石材は砂岩もしくは安山岩である。80は先細りの縦長剥片を素材とし，打面付近にはノッチ状に基部加工が施されているものである。83も縦長剥片を素材とし，基部と右側縁の先端部にも二次加工が施されたされたもので，石材が砂岩のため使用痕は確認できない。先端部はわずかに欠損し，背面左側縁側には節理面が残る。81・82・84も縦長剥片を素材とした剥片尖頭器である。打面を残して基部加工が施されているが摩滅しており，いずれも先端部が欠損している。

台形石器

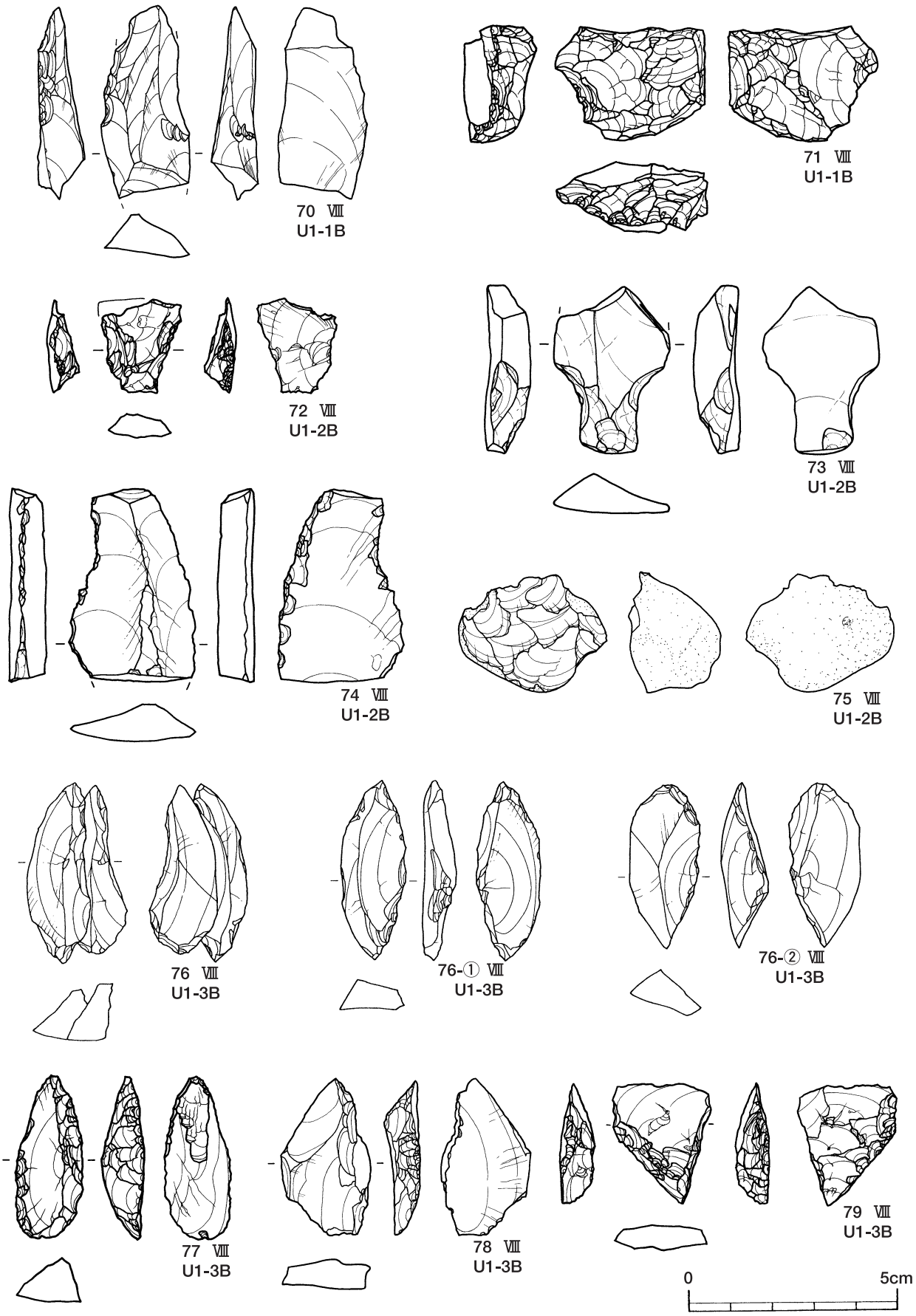
上牛鼻産黒曜石製の79が１点出土している。左側縁には折断面が残り，そこから腹面基部に平坦剥離が施されている。右側縁には急角度のブランティングが施されている。

ブロック外の遺物（第38図86）

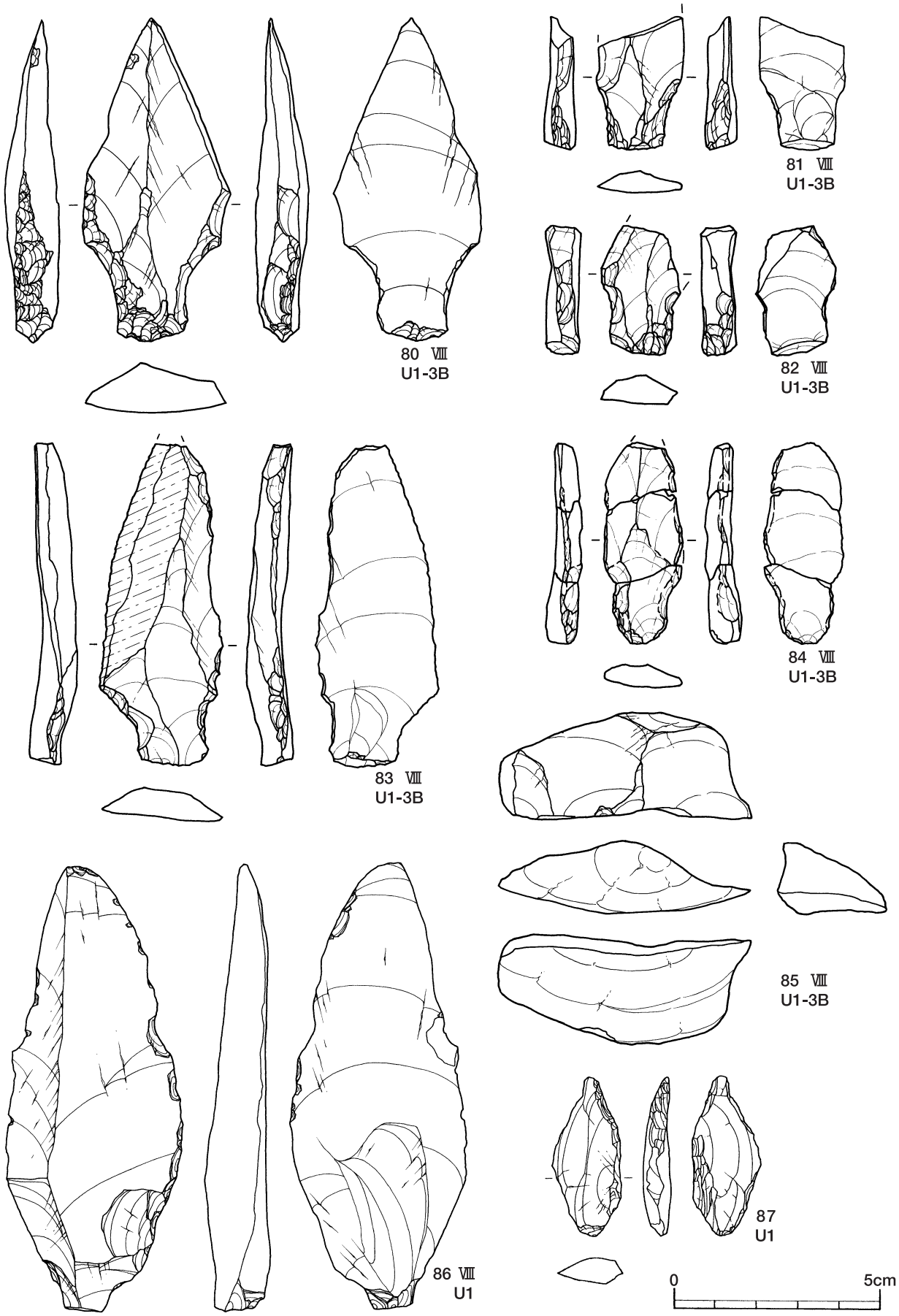
スクレイパー　86はスクレイパーとした。安山岩製で大型かつ先細りの縦長剥片が使用され，右側縁の下半部に二次加工がみられる。摩滅しているが側縁と先端部には使用痕が認められる。

２ユニット（第40～46図）

Ａ地区北方のＥ～Ｇ－15～18区にまたがる径約20×30mの範囲に，４～13ブロックの石器群のまとまりを２ユニットとした。主体となる石材はＳＨ，ＯＢ２である。各ブロックごとに述べる。



第37図　第Ⅱ文化層１～３ブロック出土石器



第38図　第Ⅱ文化層３ブロック，Ｕ１ブロック外出土石器

4ブロック（第41図88～91）

Ｆ－17区北方に径２×３ｍの範囲に分布する総数約60点のブロックである。頁岩を主体とし，他にＯＢ２，ＣＣを含む。台形石器３点，尖頭器１点を図化した。石材は全て頁岩である。

台形石器　88は薄い横長剥片を使用し，腹面の基部には平坦剥離，左側縁と基部に丁寧な細かいブランティングが施されている。89は2㎝弱の小型の台形石器である。素材は縦長剥片が折断された可能性が高く，両側縁には，丁寧に急角度の細かいブランティングが施されている。90は，右側縁に二次加工が施された後，厚みを減じるため腹面に平坦剥離が施されている。また左側縁には細かいブランティングが施されている。基部にも二次加工が施される。

尖頭器　91は尖頭器とした。横長剥片が使用され，基部端は折断により直線状に整形され，そこから表裏両面に平坦剥離が施される。両側縁に整形のための二次加工が施され，先端部を尖らせている。腹面には丁寧に二次加工を施し，バルブを除去し，着柄が意識されている。

5ブロック（第42図92～95）

Ｅ－16区南方２×２ｍの範囲に分布する約40点のブロックである。頁岩を主体とし，台形石器・三稜尖頭器が出土している。

先述した通り，第Ⅱ文化層５ブロックは第Ⅲ文化層２ブロックと石材・地点ともに重なっており，発掘調査時点ではⅧ層として取り上げているが，Ⅶｂ層の石器群である可能性が高いブロックである。

台形石器　92は台形石器である。素材剥片の打面を右側に設定し，打面の平坦部がそのまま残り，右背面には頭部調整痕がみられ，その後，平坦剥離が行われた可能性もある。左側縁は背面からノッチ状にブランティングが施されている。

三稜尖頭器　３点とも，石材は頁岩である。93は整形加工のチップが接合した接合資料である。幅広剥片を素材とし，腹面からの二次加工により形を整えており，先端部にわずかに稜上調整がみられる。先端部付近はノッチ状に加工され，やや細くなる。94も腹面から二次加工が施されているが，急角度のブランティングに近く，台形石器の可能性もある。95は，基部付近に腹面の平坦剥離が施され，上部は欠損している。また，腹面からの二次加工と稜上加工が見られる。腹面の二次加工は最後に施されている。

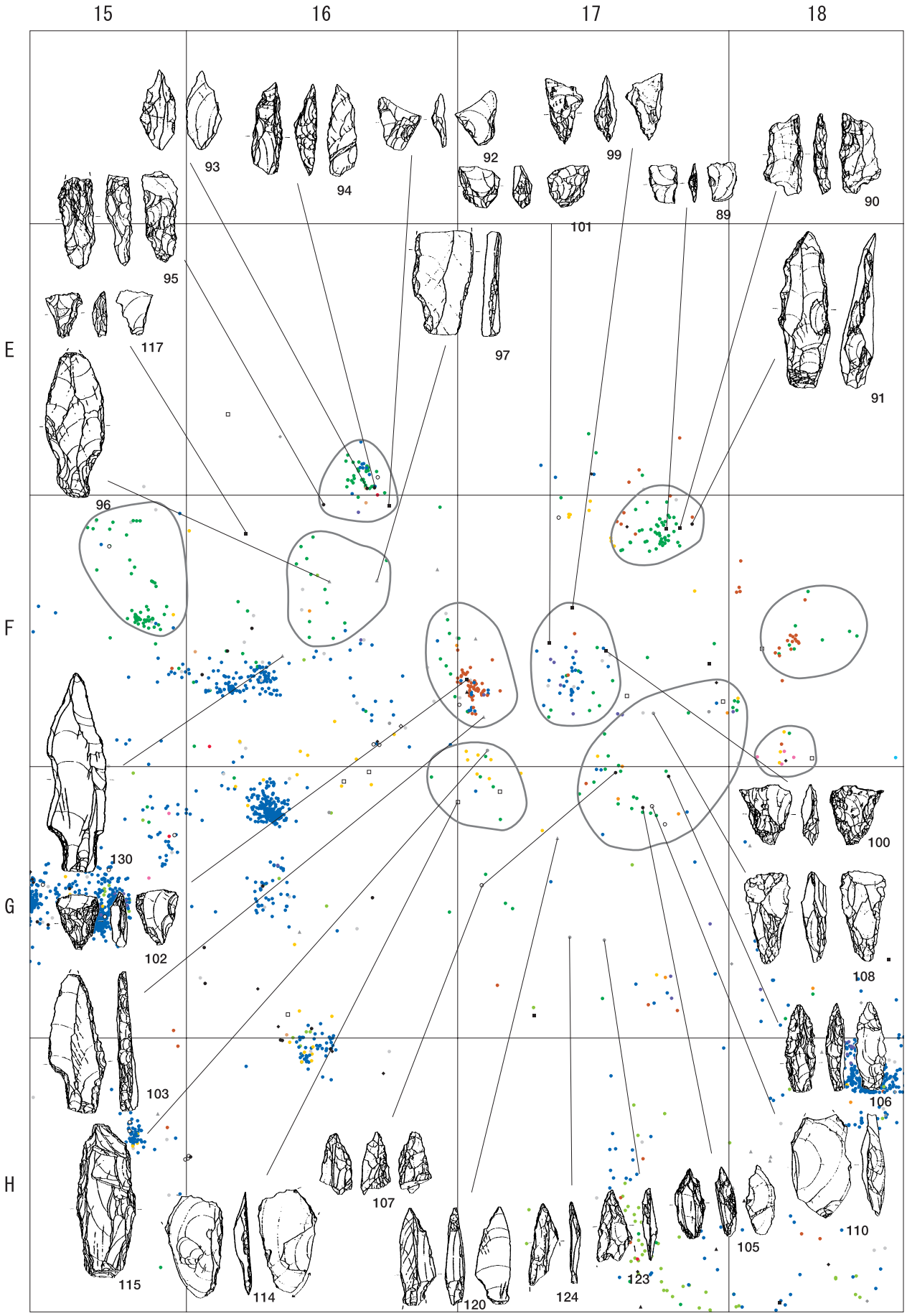
6ブロック（第42図96・97）

Ｆ－16区で約４×４ｍの範囲にやや散在に広がる20点のブロックである。頁岩を主体とし，ＯＢ１も含む。

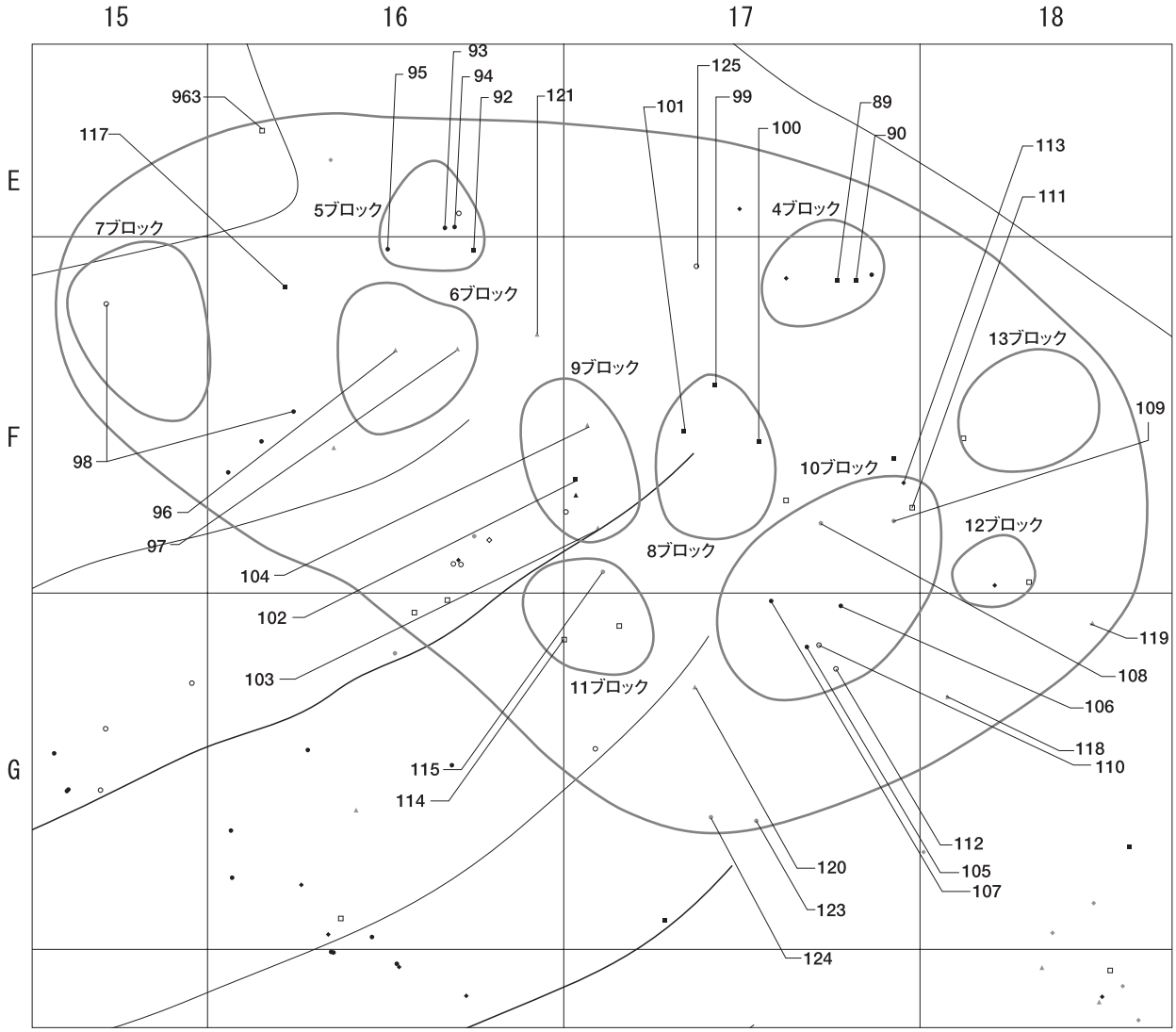
剥片尖頭器　96・97ともに風化が激しいものの，打面近くにノッチ状の基部加工が施されている。いずれも平坦な打面が残る。97はノッチ状の基部加工は片側のみであり，上半部を欠損する，96もわずかに先端部が欠損している。

7ブロック（第42図98）

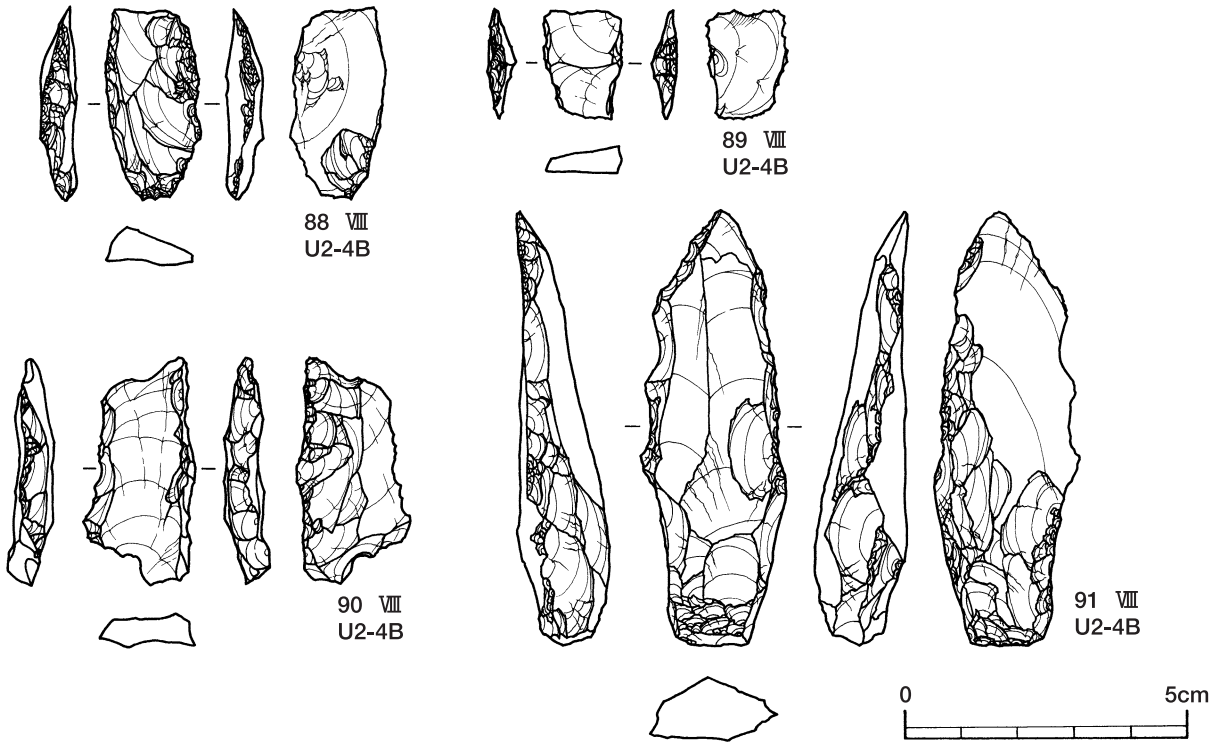
Ｆ－15区で約５×４ｍの範囲に広がる約50点のブロックである。南側にやや密集しているが，分



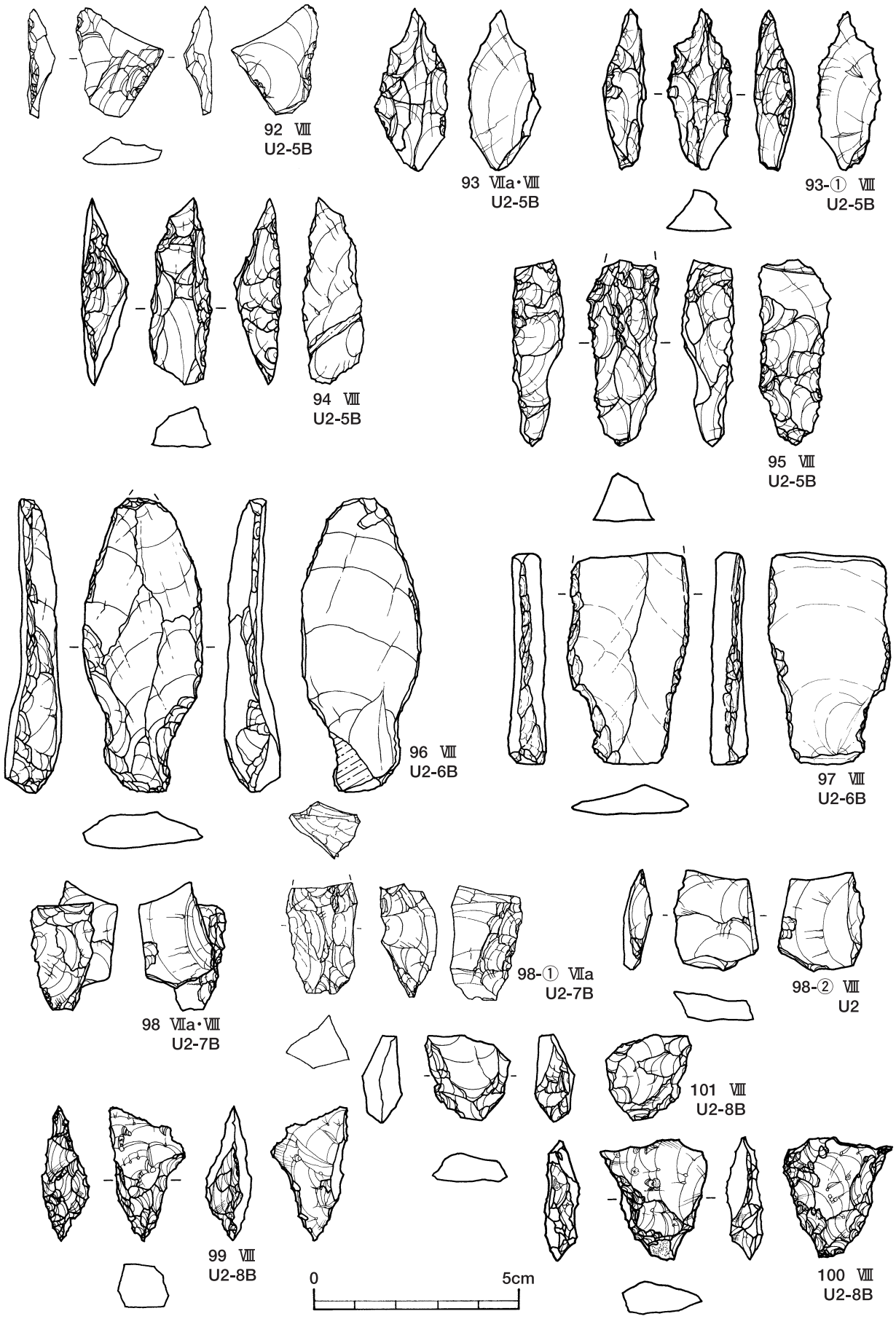
第39図　第Ⅱ文化層４～13ブロック（U2）主要石器出土分布図



第40図　第Ⅱ文化層 4 ～13ブロック（U2）石器群器種別出土分布図



第41図　第Ⅱ文化層 4 ブロック出土石器



第42図　第Ⅱ文化層５～８ブロック出土石器

布はやや散在である。石材は頁岩を主体とする。

接合資料　98は三稜尖頭器の腹面と台形石器の背面が接合している資料である。石材はＳＨ１である。台形石器は折断した剥片の一部に，わずかにブランティングが施されているものである。また，三稜尖頭器は稜上加工により整形されたものであり，両側縁からの二次加工は施されていない。腹面には平坦剥離が施されている。先端部は欠損している。

８ブロック（第42図99～101）

Ｆ－17区中心部に径約５×４ｍの範囲に広がる約50点のブロックである。主体となる石材はＯＢ１で，他に安山岩，頁岩，ＯＢ２などを含む。

台形石器　99は幅広で厚みのある横長剥片を素材とし，鋭利な刃部には使用痕が確認できる。左側縁には腹面と背面から直線状に，右側縁は腹面からノッチ状に急角度の細かいブランティングが施される。基部を尖らす形態と片側のノッチ状のブランティングからいわゆる「狸谷型ナイフ」の可能性が考えられる。100は基部にわずかに自然面を残す折断剥片を利用した台形石器である。腹面の両側縁，背面の一側縁は平坦剥離が施されており，いわゆる「台形様石器」の範疇であり，技術的にはＡＴ下位に所属する可能性が高い。三船産黒曜石が使用されている。101は上牛鼻産黒曜石であり，腹面に平坦剥離を施されたものである。刃部は一部欠損している。

９ブロック（第43図102～104）

Ｆ－16・17区にまたがる約５×４ｍのブロックである。主体となる石材はＯＢ２で，その他頁岩，ＯＢ１から構成される。南寄りにＯＢ２の集中部がある。

台形石器　102は上牛鼻産黒曜石製の台形石器である。打面部は粗い二回の二次加工の後，背面に平坦剥離が施され，末端部は折断して，そこから背面に平坦剥離が施されている。

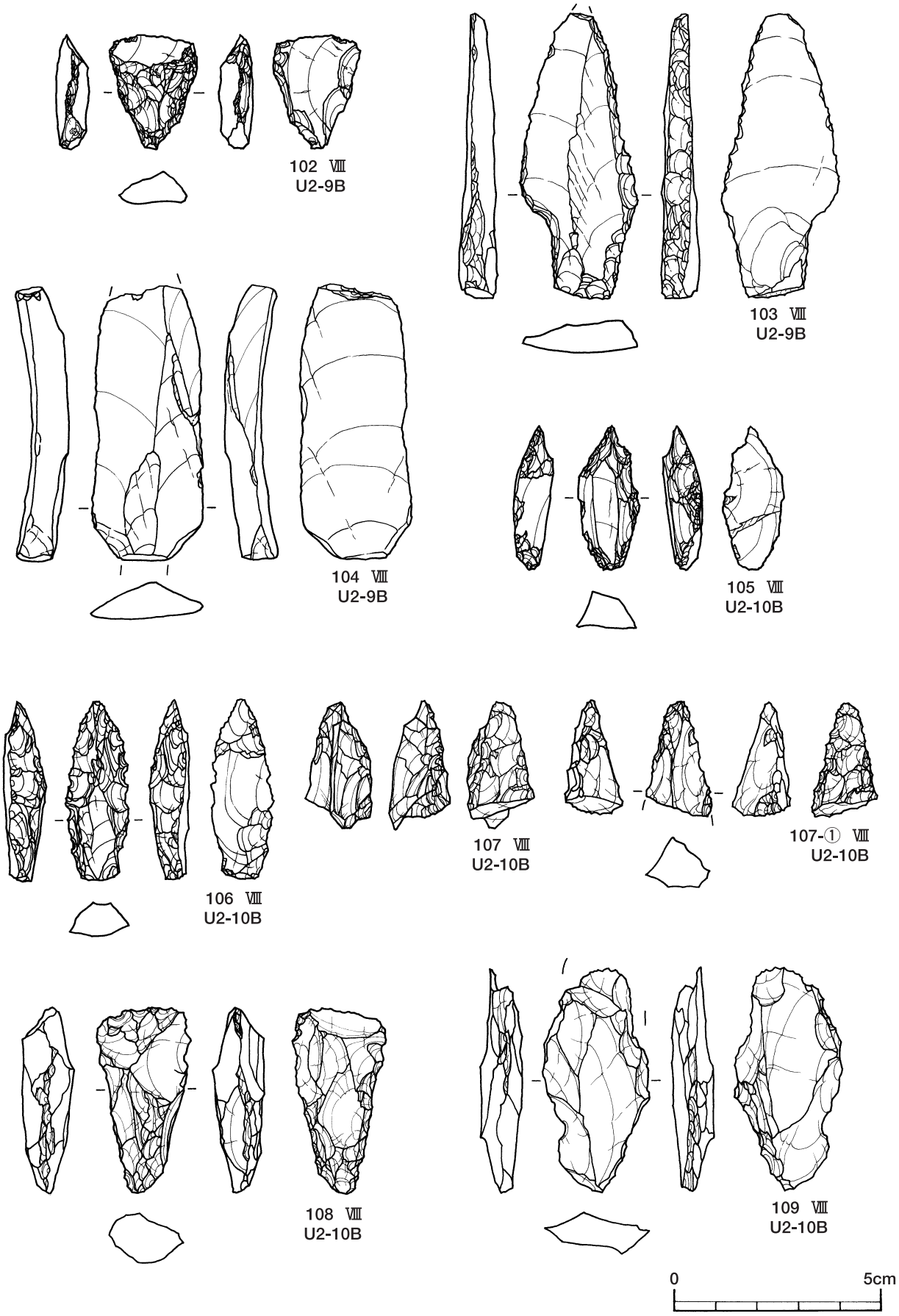
剥片尖頭器　103は打面近くの左側縁にノッチ状の基部加工が施されるが，右側縁は整形のため二次加工が先端まで施されている。左側縁には使用痕が確認できる。先端部はわずかに欠損している。104は砂岩製のもので摩滅しており，基部を欠損しているが，両側縁にノッチ状の基部加工が確認できる。先端部も欠損する。

10ブロック（第43・44図105～113）

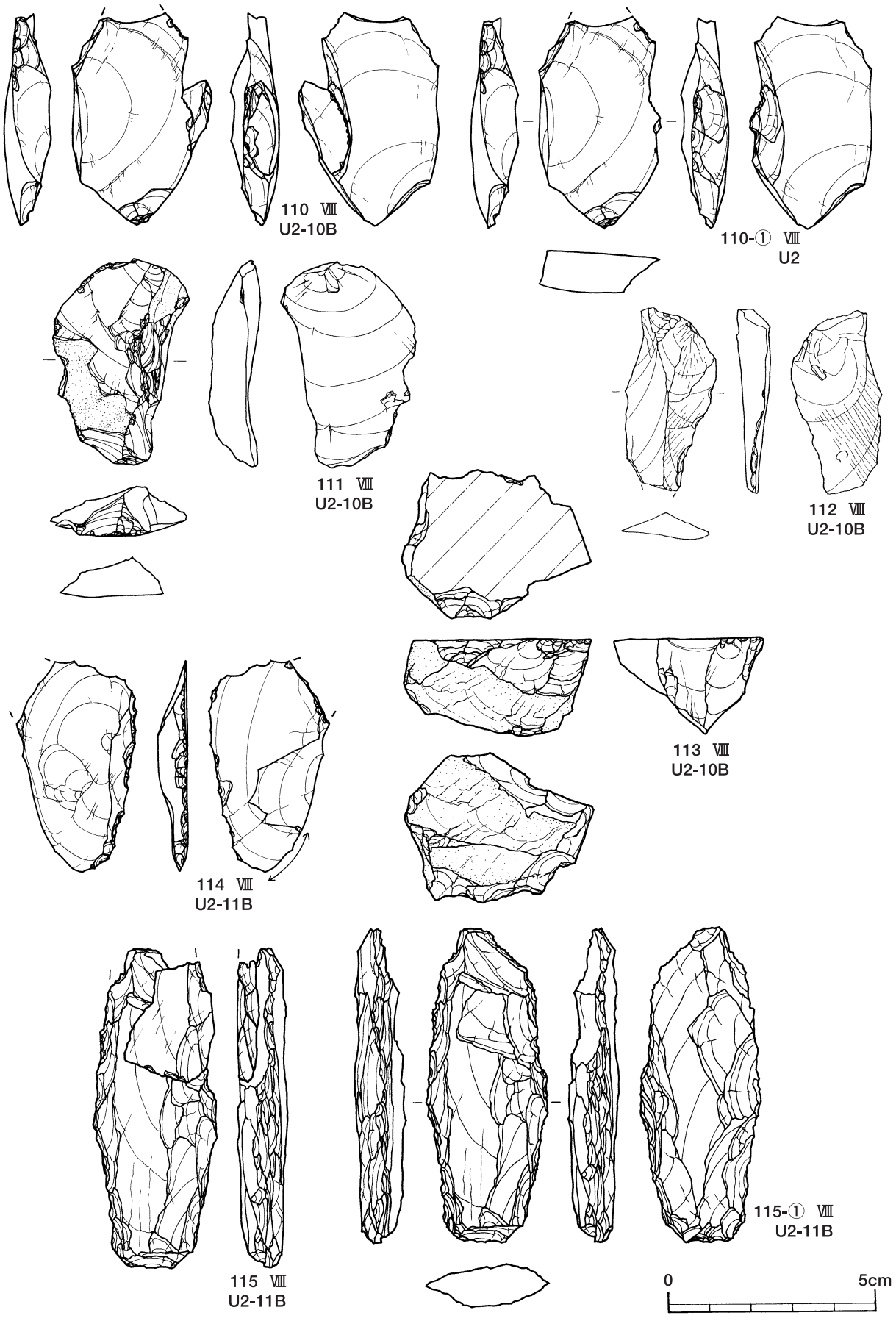
Ｆ・Ｇ－17区の径７×６ｍの範囲にまたがる，やや散在した約45点のブロックである。石材はＳＨ１を主体とし，ＯＢ１，安山岩などがわずかに含まれる。ＳＨ１を素材とする三稜尖頭器・スクレイパーが出土している。

三稜尖頭器

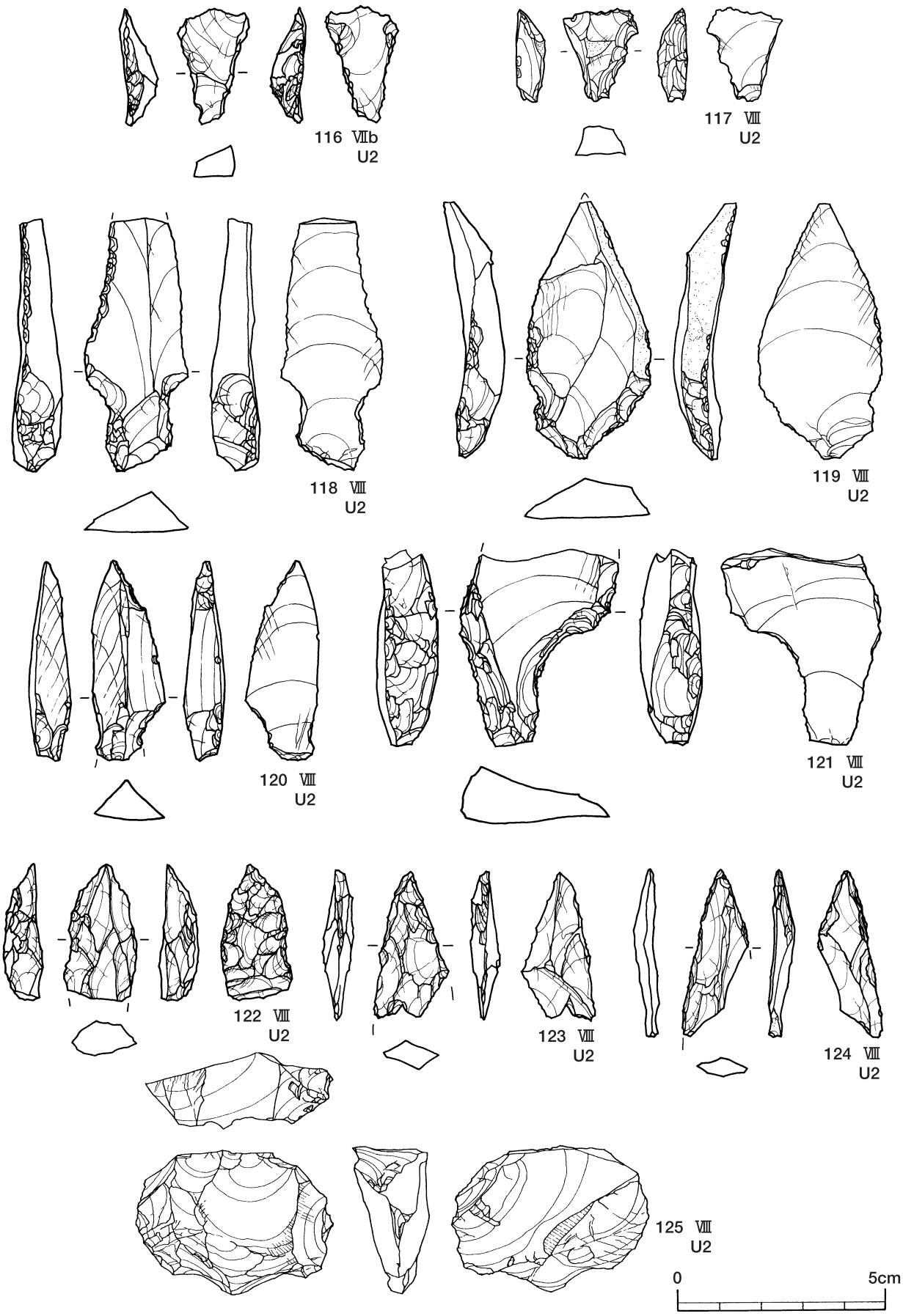
105はＳＨ１を素材とする小型の三稜尖頭器である。左側縁に平坦な剥離面を残す横長剥片を素材としている。腹面から二次加工が施される。先端部は，尖るようにノッチ状の加工が施されている。断面形状は台形となる。106はＳＨ１を素材とする三稜尖頭器である。腹面から二次加工が施され，先端部にはわずかに稜上加工が施される。腹面には先端部と左側縁に平坦剥離がわずかに施される。107は三稜尖頭器とその整形剥片の接合資料である。接合した剥片は，左側縁からの剥離の



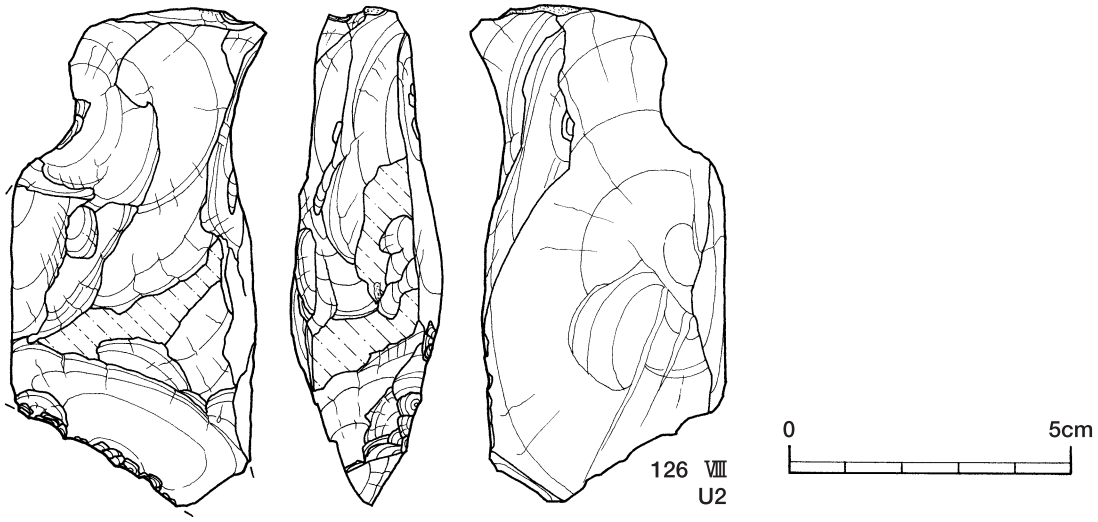
第43図　第Ⅱ文化層 9 ～10ブロック出土石器



第44図　第Ⅱ文化層10～11ブロック出土石器



第45図　第Ⅱ文化層Ｕ２ブロック外出土石器（1）



第46図　第Ⅱ文化層Ｕ２ブロック外出土石器（2）

のち右側縁の腹面から剥離されたものである。三稜尖頭器は，下半部が欠損している。腹面には平坦剥離が施され，腹面からの二次加工により整形されている。

尖頭器

108は両側縁の二次加工により整形されている基部部分である。上半が欠損した後，その割れ面に二次加工を施し，再利用を行っていると考えられる。

109は粘板岩製の尖頭器片である。両側縁に二次加工を施し，基部付近左側縁にはノッチ状の加工がみられる。先端部は欠損している。

接合資料

110は台形石器とブランティングチップの接合資料である。右側縁の剥片は背面より剥離され，右側縁と左側縁の一部にブランティングがわずかに施されている。なお，ここで剥がされた剥片は二次加工が施され，ドリル状の石器となっている。

掻器

111はＣＨを素材とする掻器である。縦長剥片を利用し，先端部には細かい二次加工を施し丸く刃部を作り出している。左側縁にも使用痕が観察される。

剥片　112は縦長剥片である。右側縁には使用痕かと思われるわずかな欠損がみられるが，摩滅しており明瞭ではない。

石核

113は珪質頁岩製で，節理面の平坦な面を打面とし，作業面を回して変えながら剥片を剥離している。

11ブロック（第44図114・115）

Ｆ・Ｇ－16・17にまたがる約３×４ｍの範囲に17点が散在したブロックである。石材は玉髄系のものとＳＨ１を主体とする。玉髄は９層の浮き上がりと思われる。

削器　114はＳＨ１の横長剥片を利用したスクレイパーである。背面より右側縁に二次加工が施される。

尖頭器　115は粘板岩製の両面加工尖頭器である。先端部欠損後，リダクションを施し，それに伴う剥片が接合している資料である。

12ブロック

Ｆ－18区の径２×２ｍの範囲にまとまる11点のブロックである。剥片や細片のみの出土である。

13ブロック

Ｆ－18区西方に約４×４ｍの範囲にやや散在してまとまる25点のブロックである。ＯＢ２とＳＨから構成される。

Ｕ２内ブロック外遺物（第45・46図116～126）

台形石器　116は上牛鼻産の黒曜石を使用した台形石器である。両側縁に丁寧にブランティングが施されている。117はＳＨ１を使用した台形石器である。小型であるが厚みのある剥片を用い，左側縁には大きな剥離面を殆どそのまま残し，右側縁に粗いブランティングが施されている。また，刃部には使用痕かと思われる微細剥離痕が確認できる。

剥片尖頭器　Ｇ－18区で２点，Ｇ－17区で１点，Ｆ－16区で１点出土している。118は打面近くに基部加工，左側縁に二次加工が施されている。先端部は欠損している。119の石材はＳＨ２であり，８層最下の出土である。縦長剥片を素材とし，基部は欠損しており，基部加工の抉りは明瞭ではないが，剥片尖頭器に入れた。右側縁は先端部まで二次加工または使用痕が確認できる。先端部はごくわずか欠損している。120は長さ５㎝に満たない小型の剥片尖頭器である。ノッチ状の基部加工がみられる右側縁に対して，左側縁は直線的な加工になっている。右側縁の先端部に二次加工が施されている。121は先端部が欠損している剥片尖頭器の基部として分類した。素材となる縦長剥片の打面近くに基部加工が施され，右側縁部の抉りは深く，それに対して左側縁は直線的である。

三稜尖頭器　122は主として腹面の平坦剥離を施すことにより整形したものであり，それ以前の側縁の整形剥離は粗い。下半は欠損している。

尖頭器　123・124は粘板岩製の両面加工尖頭器片であり，厚み・形状ともに類似する。両側縁に細かく二次加工が施され，先端部が尖る。図上では先端部としているが，基部の可能性もある。

削器　126はＳＨ１の厚みのある剥片を利用したスクレイパーである。左側縁には素材剥片の平坦な打面が残る。左側縁上部にノッチ状の加工が施され，右側縁と下部に二次加工が施される。右側縁下部と左側縁は欠損している。

剥片　125はＳＨ１を素材とする剥片である。平坦な面を打面として剥片を剥いでいる。

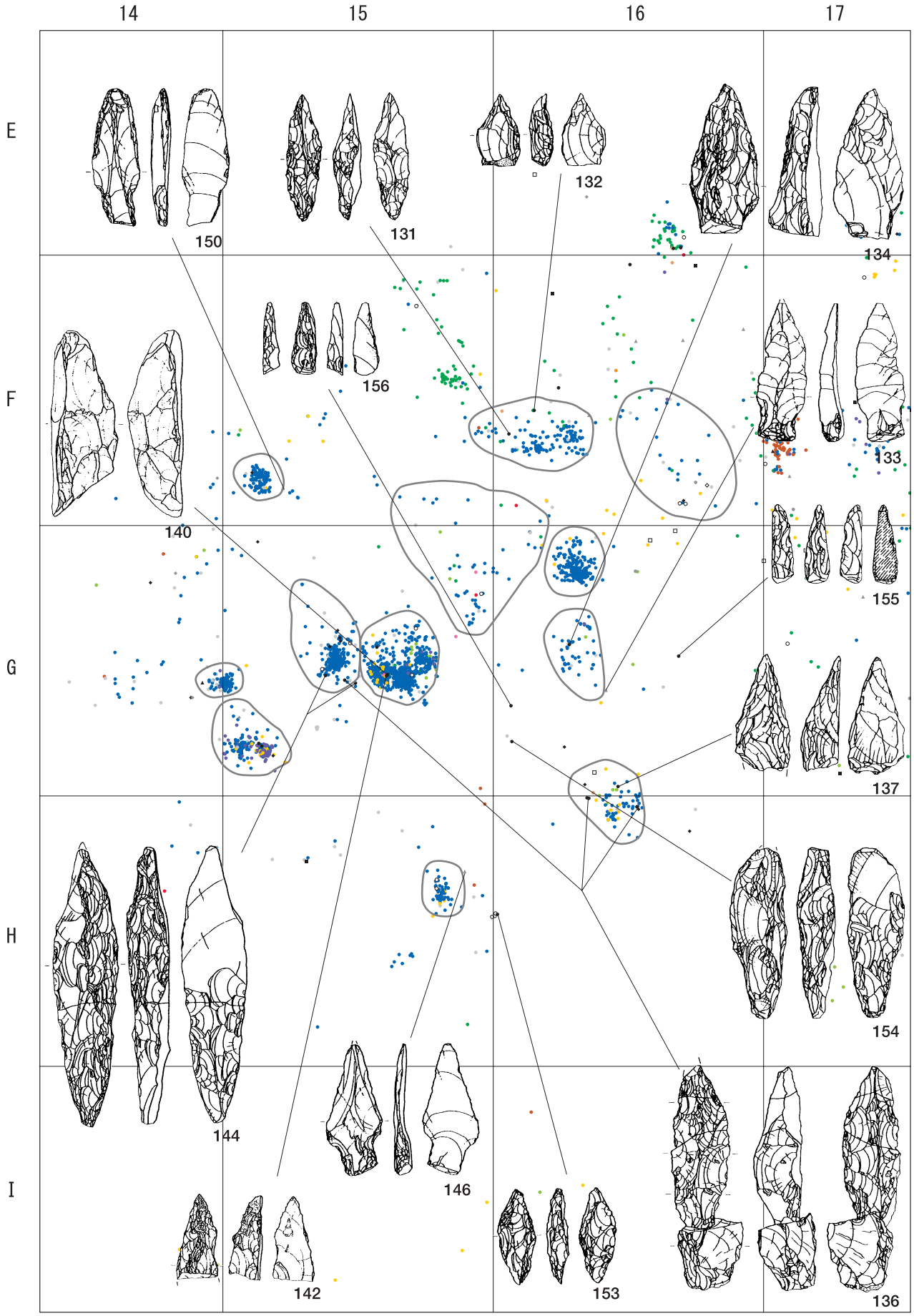
３ユニット（第47～57図）

３ユニットはＡ地区西方のＦ～Ｈ－14～16区にまたがる，約24×25ｍの範囲に14～25ブロックを内包するまとまりである。ＯＢ１を主体とするブロックが多い。

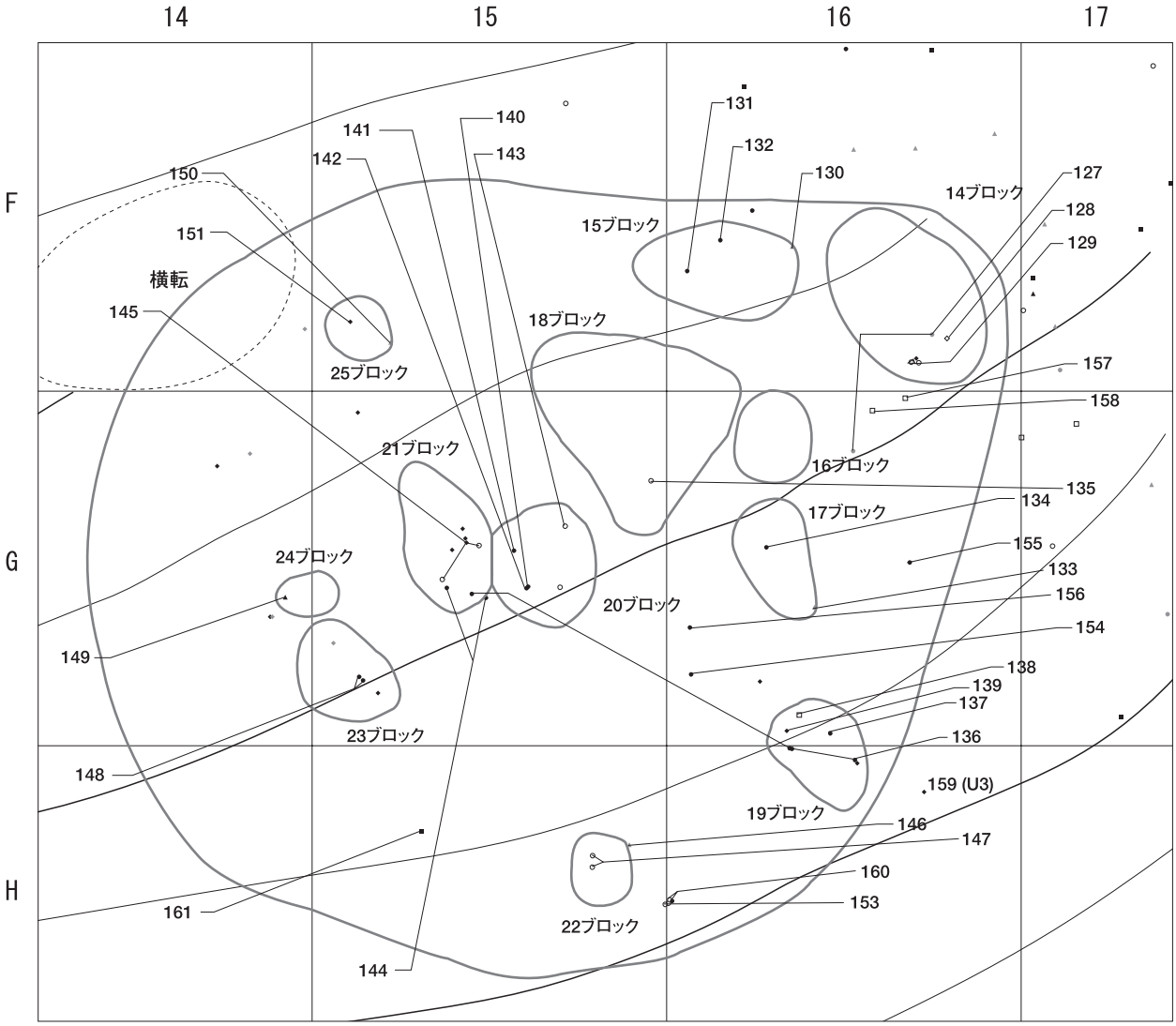
14ブロック（第49図127～129）

Ｆ－16区南方の径５×５ｍのやや散在する総数約30点のブロックである。石材はＯＢ１を主体とし，一部Ｆ・Ｇ－16区に玉髄系の分布がみられるがⅨ層の浮き上がりと思われる。

尖頭器　127は長さ10㎝を超える大型尖頭器である。両面加工が施されていると思われるが，風化が激しい。４ｍ離れた16ブロック付近から出土した先端部と接合した。



第47図　第Ⅱ文化層14～25ブロック（U3）主要石器出土分布図



第48図　第Ⅱ文化層14～25ブロック（U3）石器群器種別出土分布図

ペットストーン　128は泥岩と思われ，海岸でローリングを受け丸くなっている。部分的に剥落し，敲打痕は観察されない。

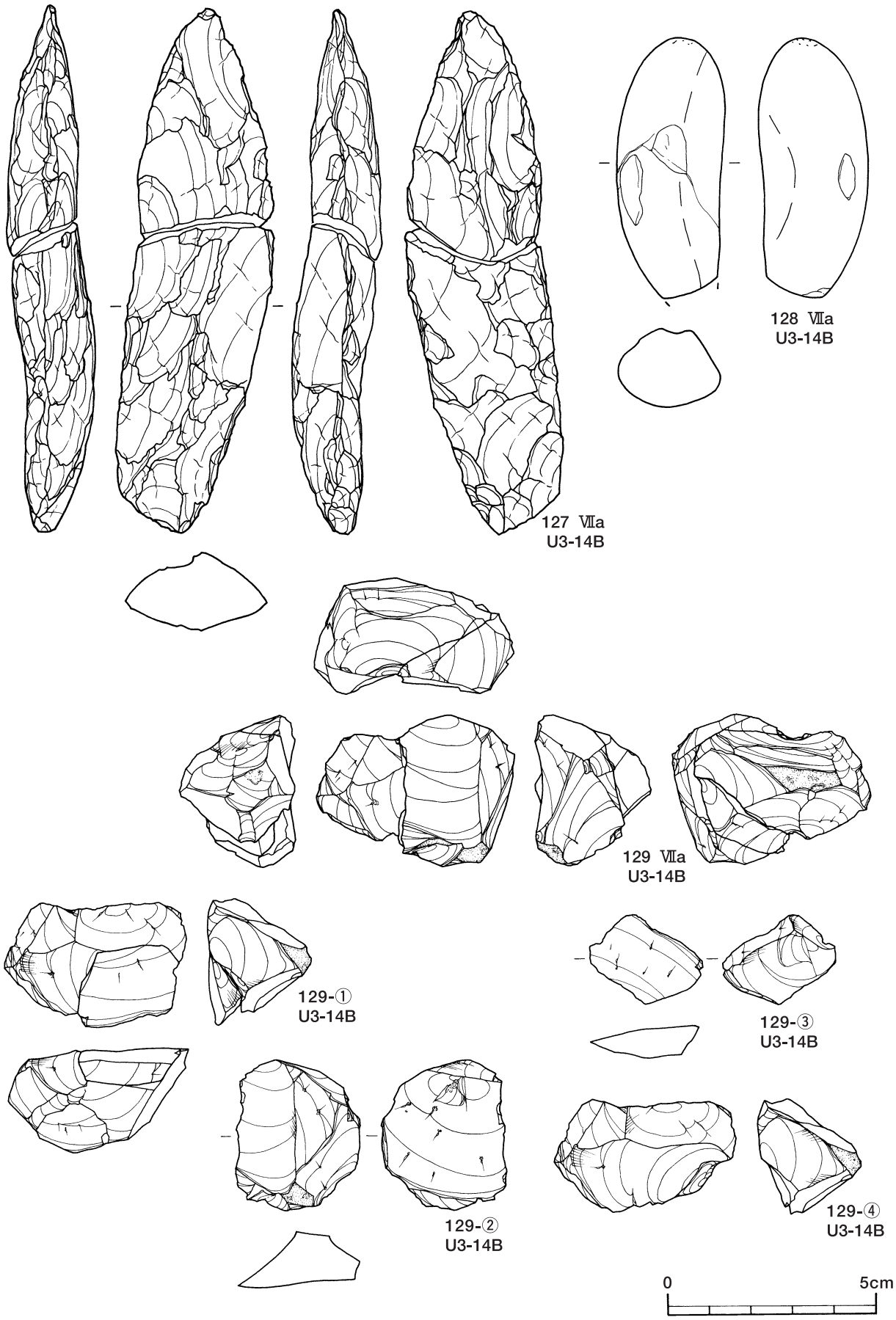
接合資料　129は上牛鼻産黒曜石の接合資料である。打面と作業面を交互に変えながら剥片を剥いでいる石核と剥片の接合資料である。

15ブロック（第50図130～132）

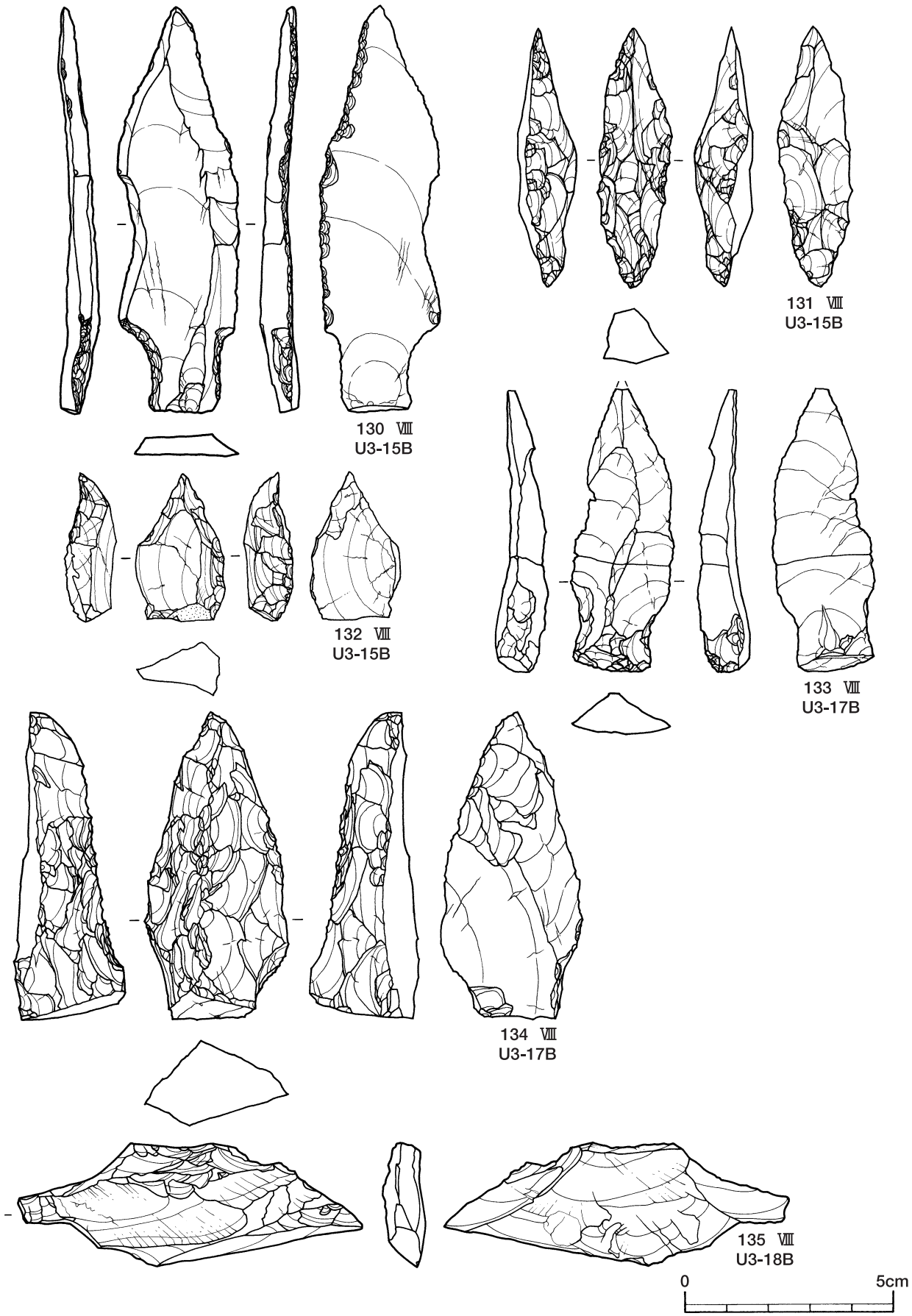
Ｆ－15・16区の径約２×５ｍの範囲に広がるブロックである。ＯＢ１を主体とし，ＳＨ・ＣＣを含む。図化した遺物は３点であるが，いずれもブロックの主体をなすＯＢ１素材のものではなく，ブロックの中心からもやや外れている。

剥片尖頭器　130は，先細りの縦長剥片を素材とする剥片尖頭器である。打面は薄く，打面付近の基部加工の抉りは，右側縁の方が左側縁に比べ直線的である。右側縁には，背面からの二次加工が施される。

三稜尖頭器　131はＳＨ１を素材とする三稜尖頭器である。基部付近の腹面の平坦剥離と腹面から



第49図　第Ⅱ文化層14ブロック出土石器



第50図　第Ⅱ文化層15・17・18ブロック出土石器

の二次加工により整形されている。132は大きな節理面を残す平坦な横長剥片を素材としている。右側縁と左側縁上部に急角度の二次加工を施し，整形している。三稜尖頭器としたが，スクレイパー的な性格をもつと考えられる。

16ブロック

Ｇ－16区に径約２×２ｍの範囲に密集する，ＯＢ１を主体とするブロックである。少数のＣＣも分布している。

17ブロック（第50図133・134）

Ｇ－16区に分布し，径約４×２ｍの範囲に広がる総点約40点のブロックである。ＯＢ１を主体とする。少数のＳＨ・ＣＣも分布する。

剥片尖頭器　ブロックの中心部から外れて，133の剥片尖頭器が出土している。先細りの縦長剥片を素材とし，打面付近にノッチ状の基部が作り出される。先端部はわずかに欠損している。

三稜尖頭器　134は上牛鼻産黒曜石を素材とする三稜尖頭器である。厚みのある幅広剥片を素材とし，稜上調整も行われている。下半は両側縁に幅を狭くする二次加工が施され，基部が意識されている。

18ブロック（第50図135）

Ｆ・Ｇ－15・16区にまたがる約６×６ｍの範囲に広がる総点約55点のブロックである。ＯＢ１を主体とし，ＳＨとＣＣを少数含む。

剥片　横長剥片を１点図化した。平坦な打面と底面に平坦面が残り，板状の石核から剥離されている特徴は，瀬戸内技法にも類似する。

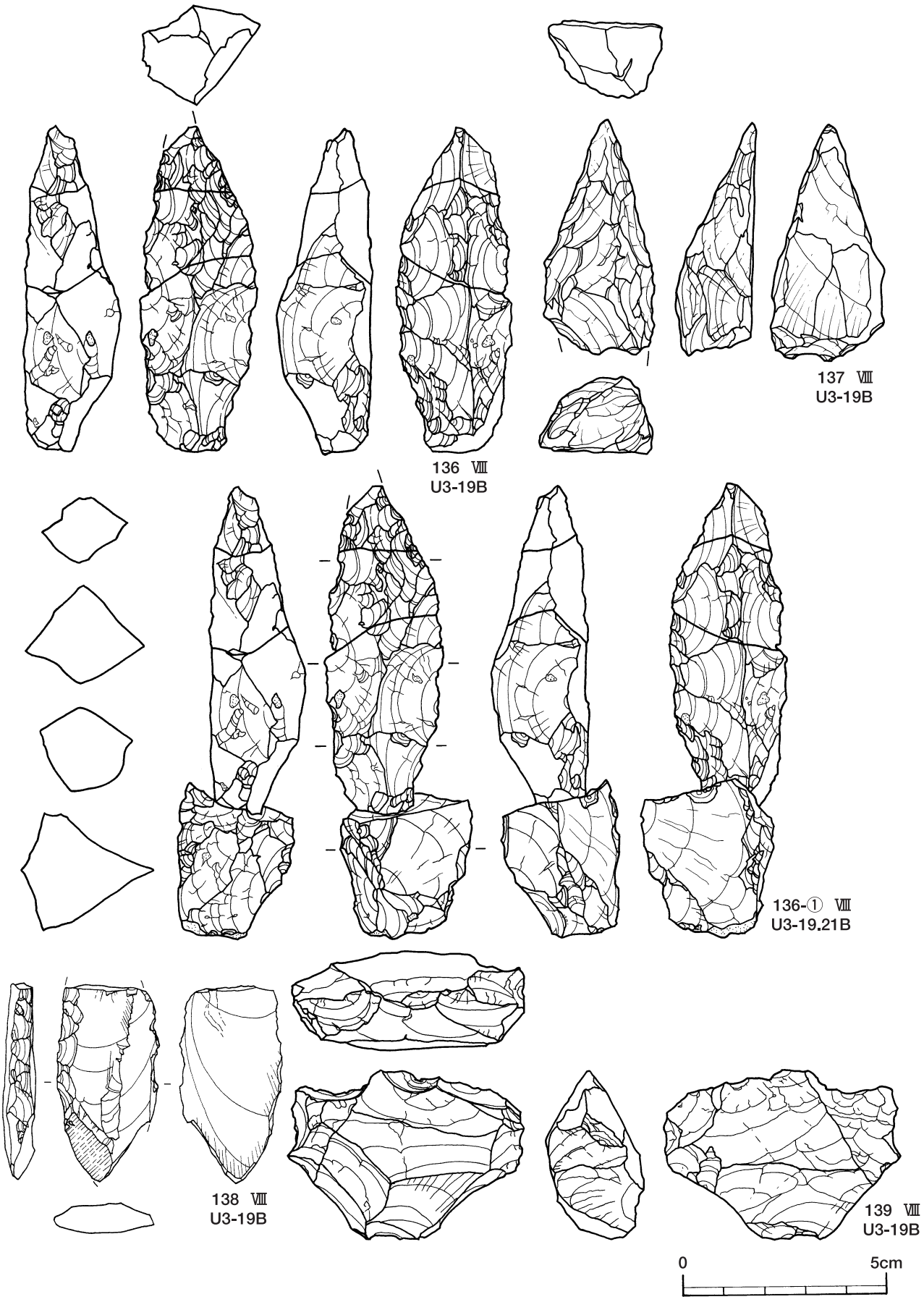
19ブロック（第51図136～139）

Ｇ・Ｈ－16区にまたがる約３×３ｍの範囲に分布する約55点のブロックである。ＯＢ１を主体とし，ＣＣ，ＳＨが分布する。

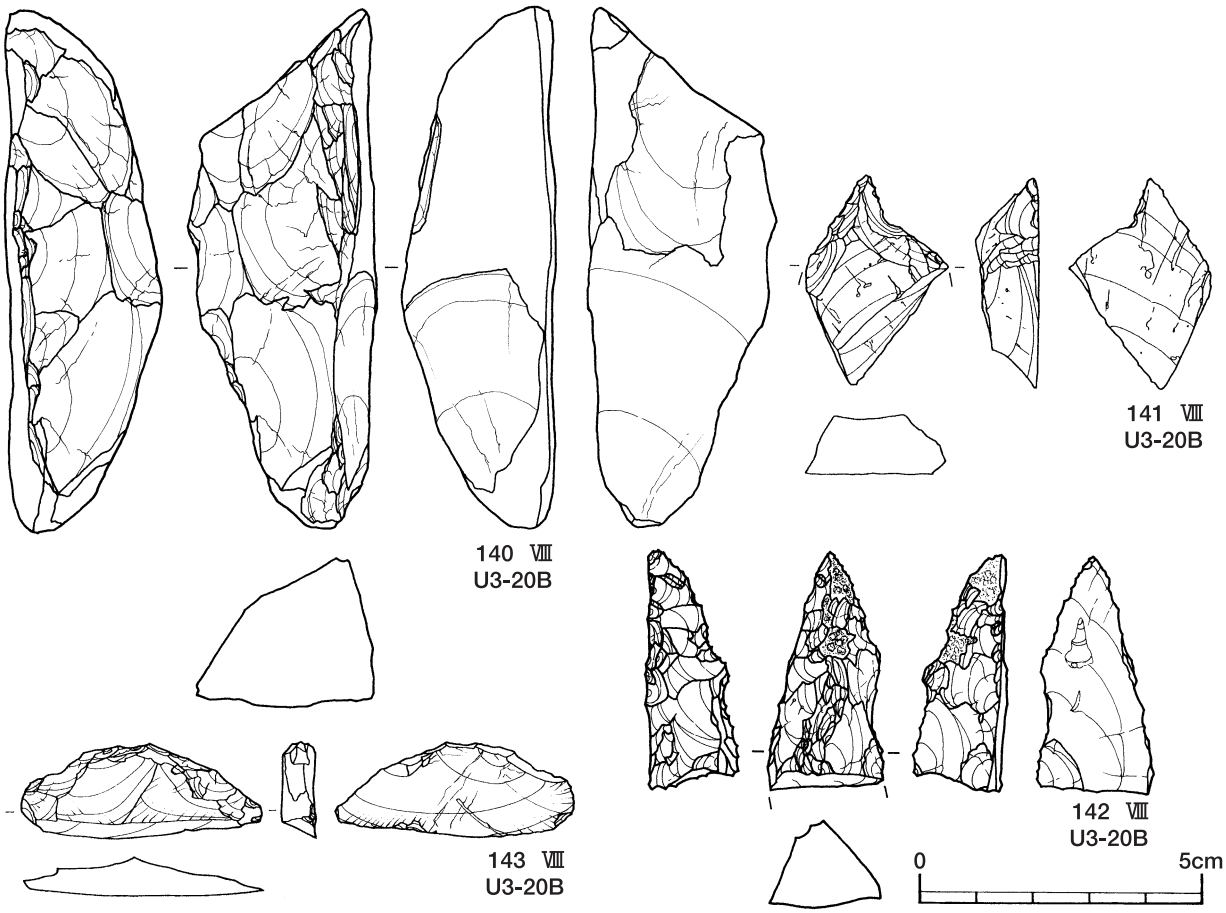
三稜尖頭器　136は三稜尖頭器のリダクション過程がうかがえる接合資料である。136は側縁から二次加工によって整形された両面加工の三稜尖頭器で，断面形は菱形に近い形になっている。136－①は136の三稜尖頭器を作る前の欠損した剥片が接合したものである。136の三稜尖頭器は19ブロックで，三稜尖頭器に接合した欠損部は21ブロックから出土していることも注目される。137は腹面と稜上からの剥離が施された大型三稜尖頭器と思われるものである。風化が激しく一部剥落している。下部は欠損している。

削器　138は縦長剥片を素材とし，左側縁に二次加工を施した石器である。ナイフ形石器の可能性があるが，ここでは削器とした。

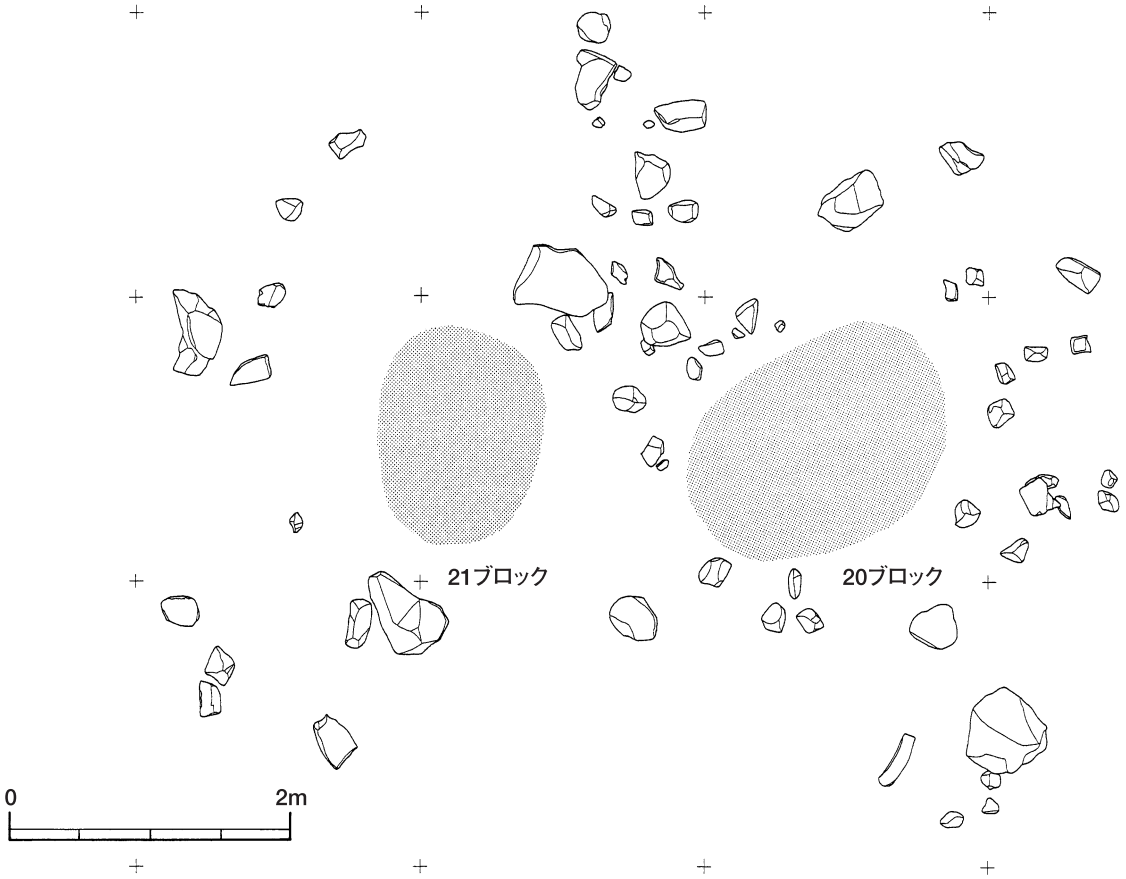
石核　139は求心状に周囲から剥片剥離を行う石核である。石材は砂岩であることから石核ではなく，大型三稜尖頭器の破損した部分の可能性もある。



第51図　第Ⅱ文化層19ブロック出土石器



第52図　第Ⅱ文化層20ブロック出土石器



第53図　第Ⅱ文化層20・21ブロック周辺礫状況

20ブロック（第52図140～143）

Ｇ－15区の中央部に分布する径約３×３ｍのブロックである。ＯＢ１を主体とし，ＳＨなどを含む。第53図は，20・21ブロック周辺の岩盤礫の状況である。転石状の礫がとりまいている間の空白部分にブロックが形成されている。

三稜尖頭器　140は三稜尖頭器であるが，風化が激しく一部剥落している。図の空白部は剥落部である。厚みのある縦長剥片を素材とし，左側縁は腹面と稜上から粗い調整剥離が行われている。141は背面に広い剥離面を残す尖頭器である。右側縁にノッチ状に抉りが入り，先端部が尖る。スクレイパーの可能性もある。142は下半部が欠損した三稜尖頭器である。また，両側面には腹面からの二次加工と稜上からの加工がみられ，断面三角形に整形されている。先端部ではなく，基部の可能性も考えられる。

剥片　143は頁岩を素材とする横長剥片である。底面は平坦な剥離面である。瀬戸内技法に関連する剥片の可能性も考えられる。

21ブロック（第54図144・145）

Ｇ－15区の中心部に径約4.5×３ｍの範囲に分布し，南方に集中部をもつブロックである。主体となる石材はＯＢ１である。

三稜尖頭器　144は安山岩製の大型の三稜尖頭器である。最大長13㎝を超えるもので，大型の幅広剥片を素材としている。両側縁の粗い二次加工と，細かい稜上調整により整形されている。基部は腹面の二次加工が丁寧に施され，着柄が意識されている。先端部から左側縁には樋状剥離のようにみえるが全く異なり，接合の結果，稜上からの広めの剥離であり，その後，先端部の稜上調整が行われている。このことから先端部のリダクションの可能性が考えられる。145は上牛鼻産黒曜石の円礫が使用された接合資料である。縦長剥片（145－①）を剥いだのち，打面転移して下面の剥片を剥いでいる。そして，その剥離面を打面にして②が剥がされている。

22ブロック（第55図146・147）

Ｈ－15区に径約２×２ｍの範囲に分布する，ＯＢ１を主体とするブロックである。少数のＣＣも分布する。

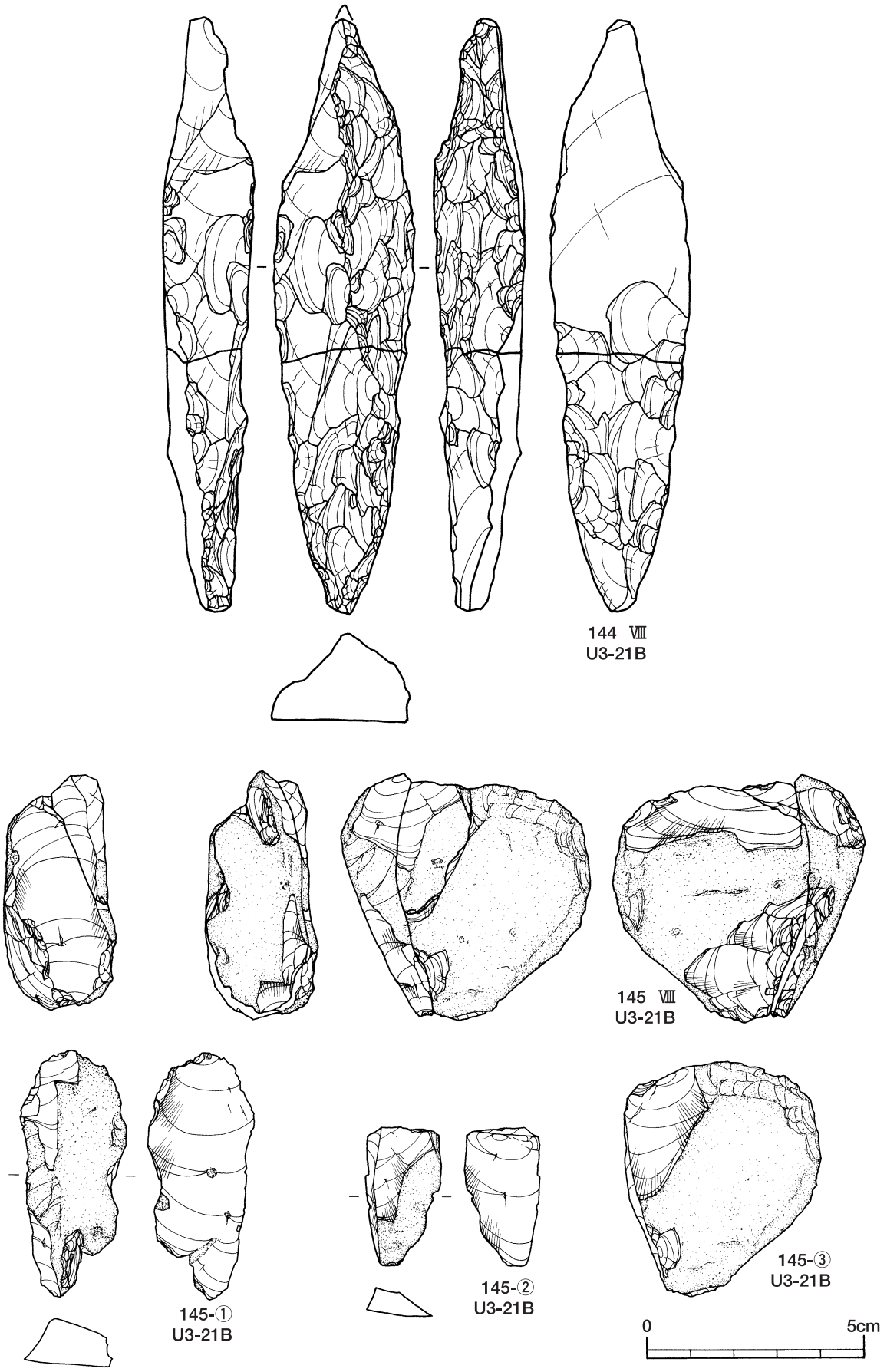
剥片尖頭器　146は先細りの剥片を利用した小型の剥片尖頭器である。ノッチ状に基部が作り出される。打面は平坦な自然礫が利用されている。先端部はわずかに欠損している。22ブロックの集中部からはやや外れて出土している。

接合資料　147は玉髄系の石材を使用した，剥片の接合資料である。折断された図の下のものは台形石器として利用された可能性もある。

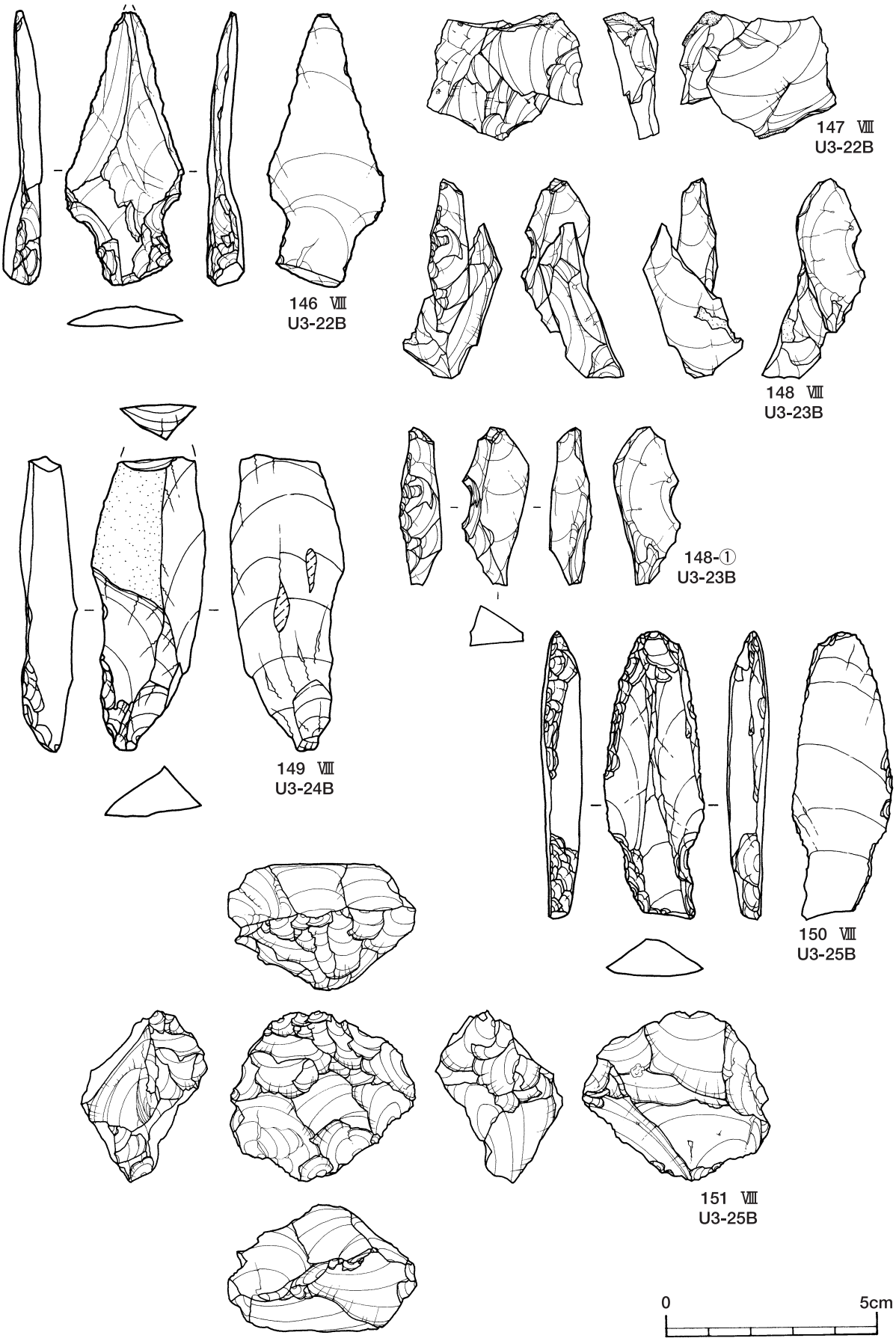
23ブロック（第55図148）

Ｇ－15区西方に径３×３ｍの範囲に分布するブロックである。石材はＯＢ１を主体とし，ＣＣ，安山岩である。

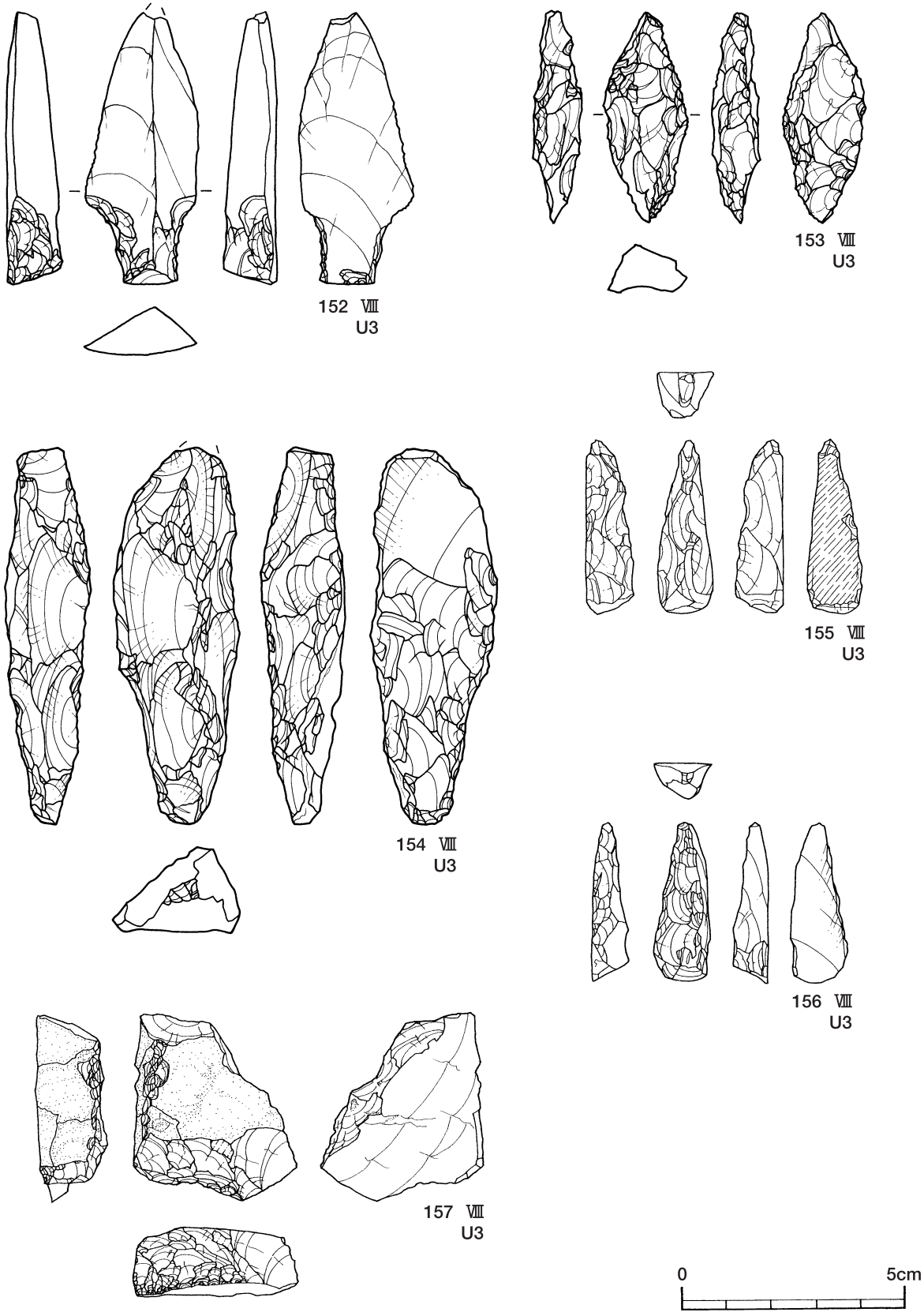
接合資料　148は剥片の接合資料である。148－①は左側縁に微細剥離痕がみられ，三稜尖頭器の未



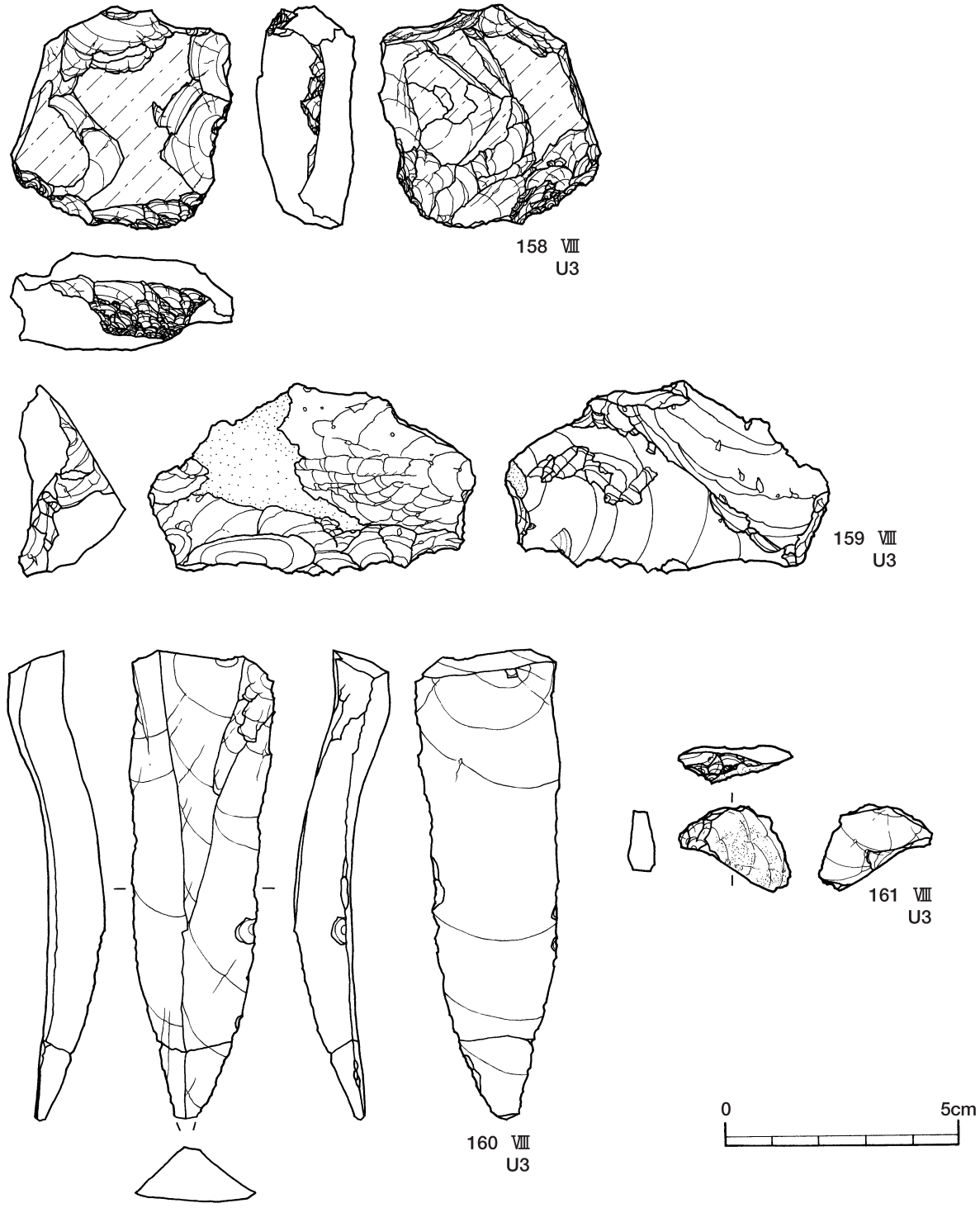
第54図　第Ⅱ文化層21ブロック出土石器



第55図　第Ⅱ文化層22～25ブロック出土石器



第56図　第Ⅱ文化層Ｕ３ブロック外出土石器（1）



第57図　第Ⅱ文化層Ｕ３ブロック外出土石器（2）

製品かとも思われたが，左側面の大きな二次加工は剥片が剥がされる前の剥離であるため，使用痕のある剥片とした。

24ブロック（第55図149）

Ｇ－14・15区にまたがる径約1.5× 2 mの範囲に分布する，上牛鼻産黒曜石を主体とするブロッ

クである。

ナイフ形石器　149は縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。左側縁基部に腹面からの二次加工が施され，上半部は欠損している。

25ブロック（第55図150・151）

Ｆ－15区西方に径1.5×1.5ｍの範囲に分布するブロックである。石材は上牛鼻産黒曜石を主体とする。

剥片尖頭器　150は基部にノッチ状の抉りが施され，左側縁上部にスクレイパーエッヂ状の二次加工が施される。先端部はまるくなっている。基部は長いが，打面は欠損している。

石核　151は求心状に剥片剥離が行われている石核である。

３ユニットのブロック外遺物（第56・57図152～161）

剥片尖頭器

152は，先細りの縦長剥片を素材とする剥片尖頭器である。ノッチ状に基部加工が施されている。基部は比較的長く，基部端を欠損する。

三稜尖頭器

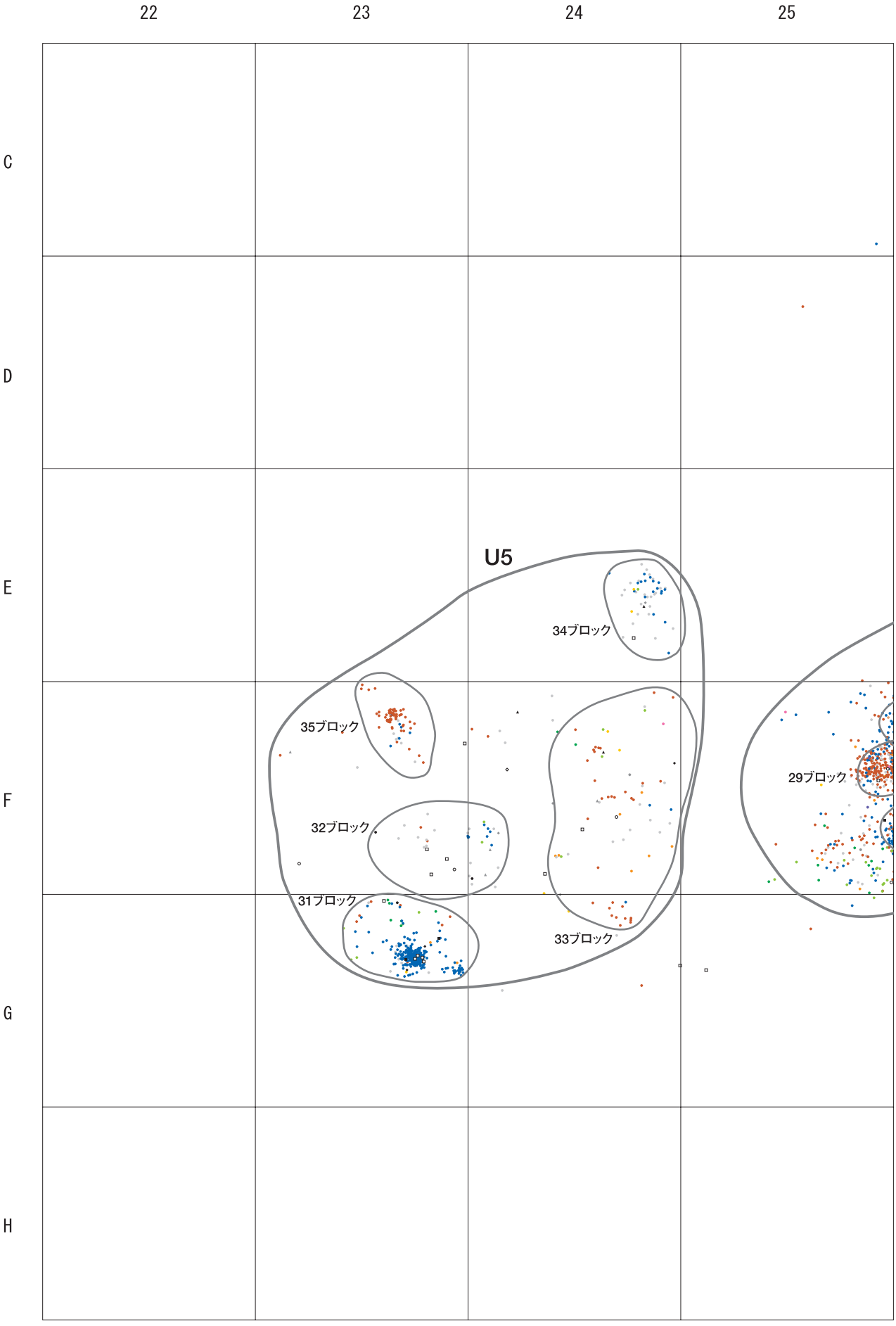
153は，腹面にも平坦剥離が施された三面加工の三稜尖頭器である。腹面からの二次加工と稜上加工が施される。154は横長剥片が使用され，先端部が欠損した三稜尖頭器である。腹面からの二次加工後，稜上加工が施されている。また，着柄のため腹面基部付近には平坦剥離が施されている。155・156も154と同じ石材であるＳＨ４を用いた三稜尖頭器の端部である。155は稜上加工が施されている。156は右側面に広く剥離面，左側縁には腹面からの二次加工がみられる。また，稜上加工が細かく施されている。

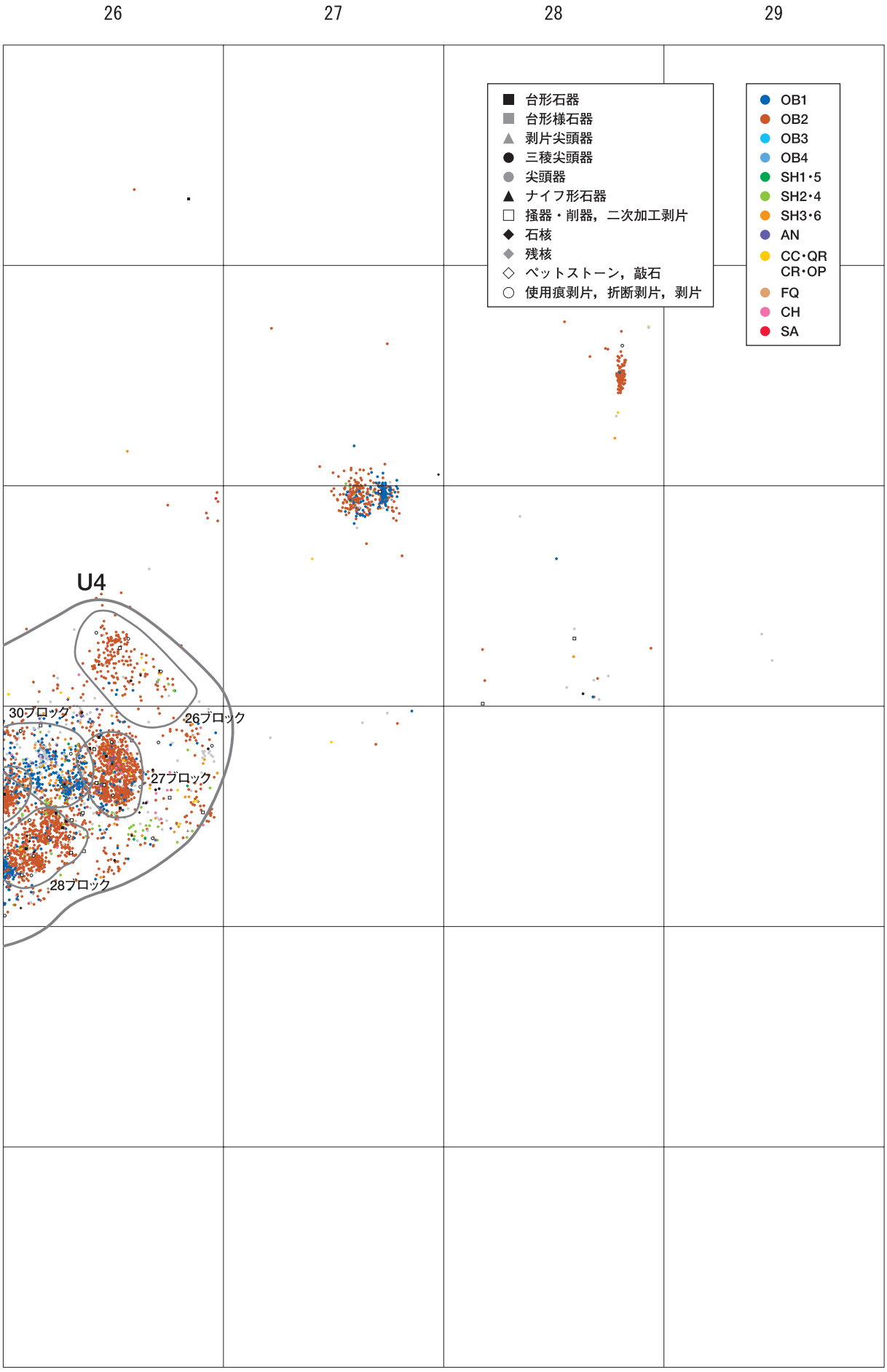
掻器

157・158はＣＣを素材とする掻器である。157は板状の節理面による剥片が利用され，折断による整形後に刃部は急角度の丁寧な二次加工が行われている。158は周縁に粗い二次加工による整形と，急角度の丁寧な二次加工により刃部がつくられている特徴的な掻器である。159は上牛鼻産黒曜石を素材とする掻器である。下側縁に粗い二次加工が施されている。

剥片

160・161は剥片である。160は剥片尖頭器と共通する石材の良質な縦長剥片である。石核の出土もないことから，素材剥片として持ち込まれたものであろう。161は折断面の残る剥片である。


22
23
24
25
C
D
E
F
G
H
U5
34ブロック
35ブロック
32ブロック
31ブロック
33ブロック
29ブロック



第58図　第Ⅱ文化層Ｂ地区出土石器分布図

第４節　第Ⅱ文化層Ｂ地区の石器群

第Ⅱ文化層Ｂ地区の石器群は，10ブロックを識別した。

最も石器群の集中した分布がみられるのは，Ｅ・Ｆ－25・26区である。石材はＯＢ２を主体とし，ＯＢ１，ＳＨなどが1.5～４ｍのまとまりをもって重なりあうように分布している。これらの集中域を26～30ブロックの５ブロックとして分け，これらのまとまりを４ユニットとする。

また，Ｅ～Ｇ－23・24区にはやや散在した分布がみられる。分布の集中域に従い５ブロックにわけ，31～35ブロックとし，これを５ユニットとする。

４ユニット（第61～66図）

Ｅ・Ｆ－25・26区に密集して分布する集中域である。主体となる石材はＯＢ２，その他ＯＢ１，ＳＨも多く，ＣＣ，ＣＨも少数含まれる。

26ブロック（第61・62図162～167）

４ユニットの最も北側に位置し，Ｅ－26区南方に，径約５×３ｍの範囲に分布するブロックである。Ｆ－26区に比べ，分布の集中はやや散在するが，石材は三船産黒曜石を主体とし，ＣＣ，ＳＨも含む。

ナイフ形石器　162は縦長剥片を素材とした基部加工ナイフ形石器である。鋭い側縁には使用痕が確認される。基部の腹面に平坦剥離が施される。先端部はわずかに欠損している。163は右側面は折断され，左側面には腹面からの二次加工，腹面には平坦剥離が施される。技術的にはＡＴ下位の台形様石器に類似する。

三稜尖頭器　164は両面加工の施された三稜尖頭器である。腹面は両側縁から平坦剥離が施され，背面は腹面からの二次加工と部分的に稜上加工が施される。先端部と基部がわずかに欠損している。

使用痕剥片　165は使用痕剥片である。素材となる幅広剥片を剥ぎ取る際の頭部調整が左背面に施されている。右側縁は一部欠損しているが，使用痕が確認できる。

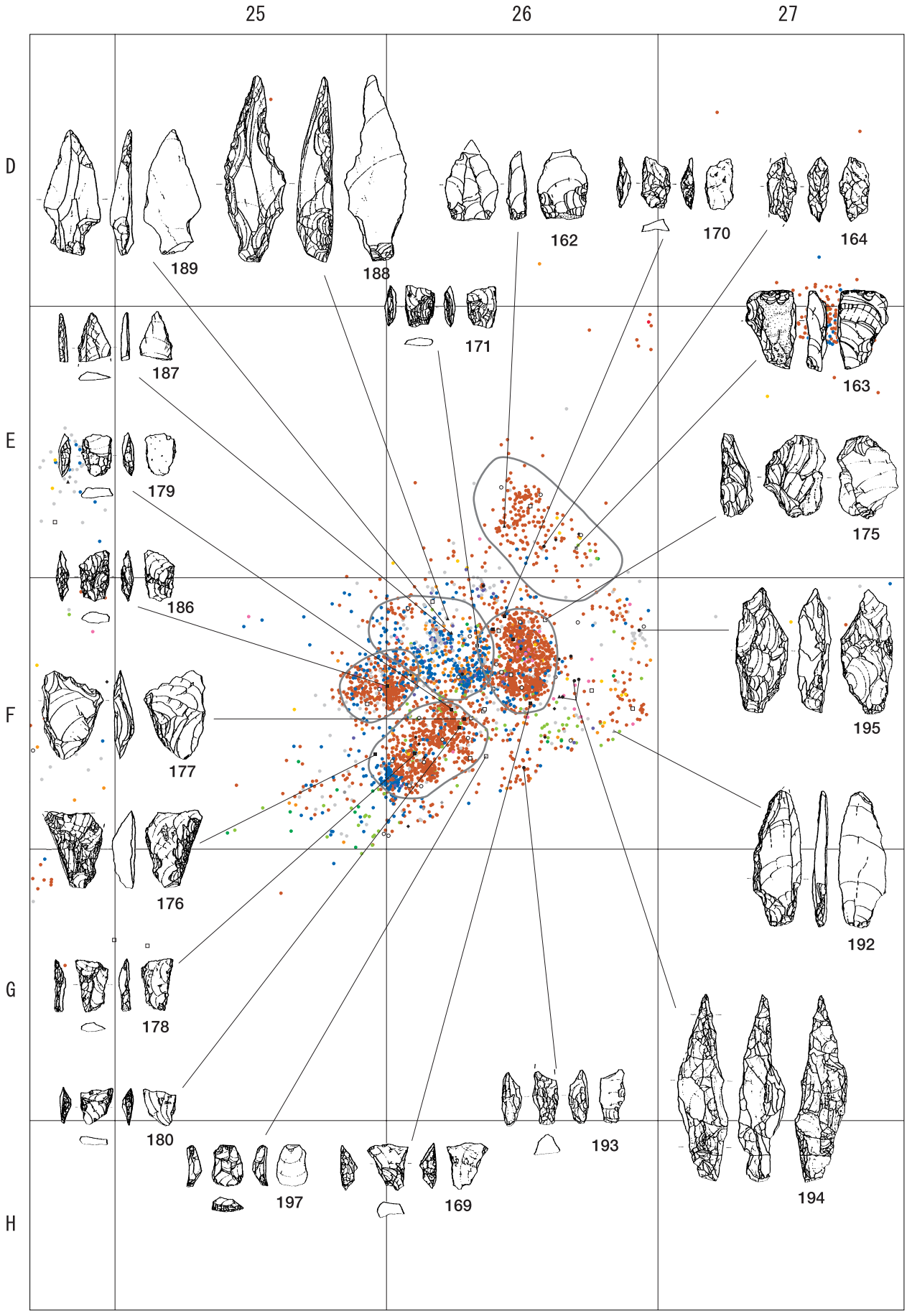
石核　166は平坦な打面から剥片を剥離していく石核である。Ａ面では平坦な打面から剥片を剥ぎ，また横方向・下方向からも剥いでいる。Ｂ面では横方向・下方向から幅広の剥片を剥いでいる。167は打面を転移させながら剥片を剥いでいるサイコロ状の石核である。

27ブロック（第62図168～175）

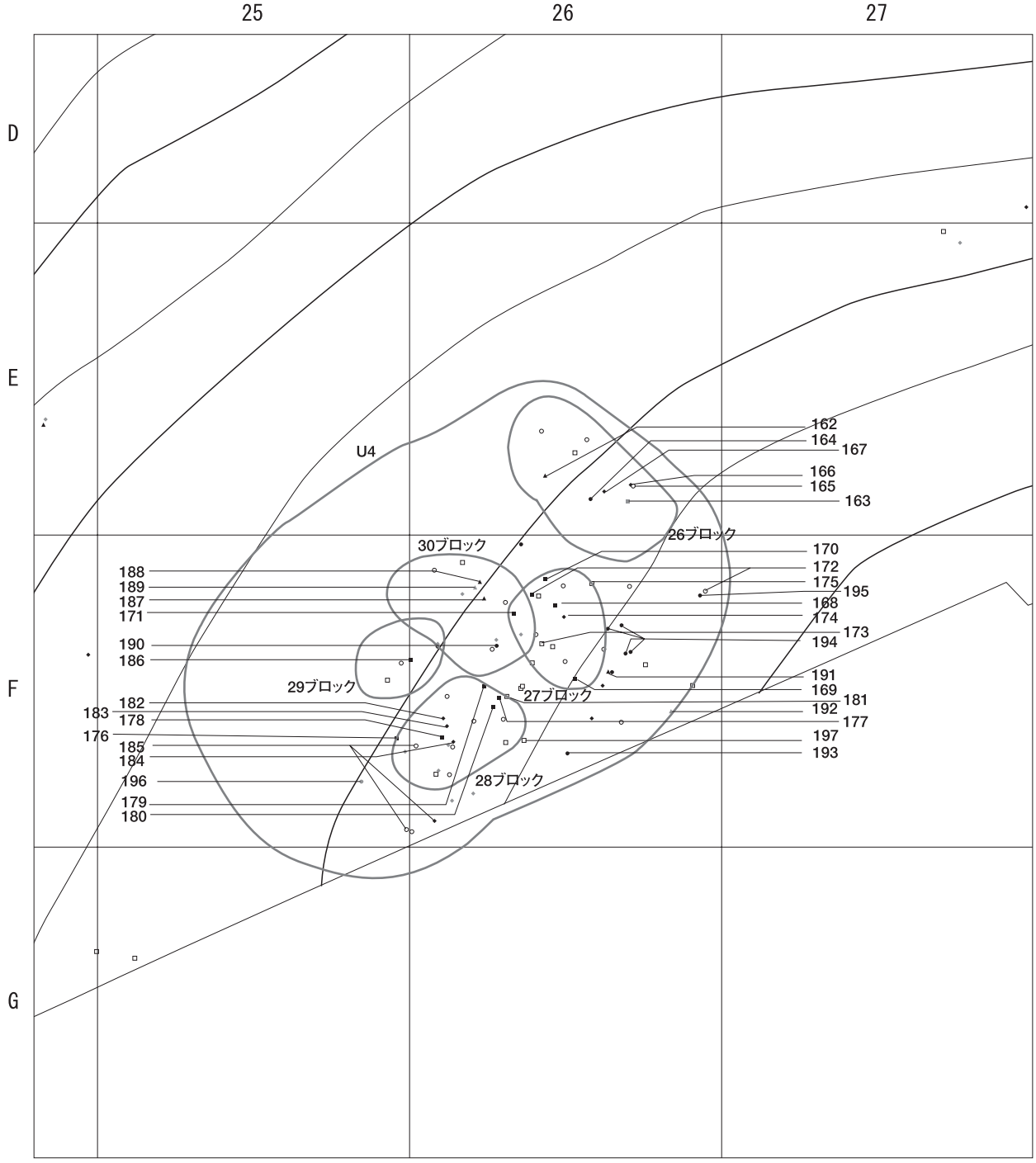
Ｆ－26区の分布集中部の東側，ＯＢ２を主体とする径約４×2.5ｍの範囲に分布する。その他，ＳＨ，ＣＣ，ＣＨなども含む。４ユニット内で，最も分布が密集しているブロックである。

台形石器　台形石器は４点図化した。168は折断剥片を素材とする台形石器である。刃部は欠損している。右側縁には腹面から急角度のブランティングが施されている。169は腹面から両側縁に急角度のブランティングを施した台形石器である。刃部には使用痕が確認できる。170も両側縁に急角度のブランティングが施された台形石器である。171は縦長剥片を素材とし，打面を右側縁に設定している台形石器である。素材剥片を剥ぎ取る際の頭部調整が，右側縁に確認できる。左側縁に折断面がみられ，そこには部分的であるが丁寧なブランティングが施されている。

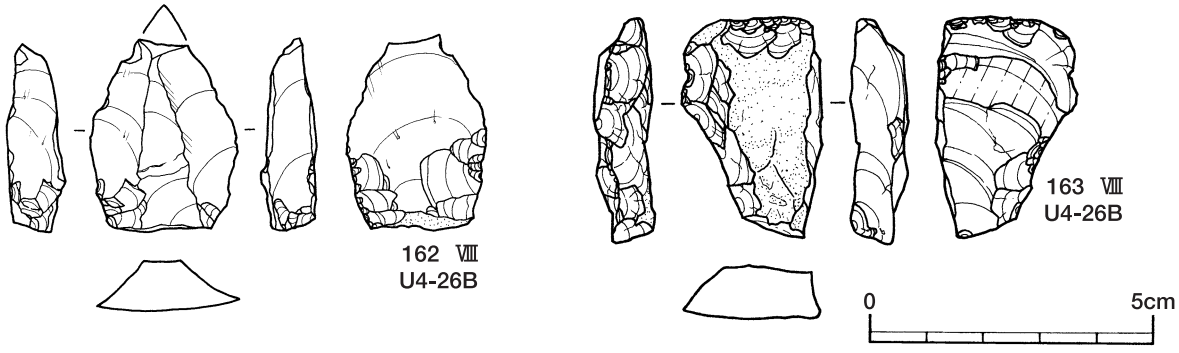
接合資料　172はOB2を素材とする二つの剥片の接合資料である。172－①は，素材となる剥片の右側縁に，打面の頭部調整が確認できる。左側縁は折断しており，鋭利な刃部には使用痕が認められる。



第59図　第Ⅱ文化層26～30ブロック（U4）主要石器出土分布図



第60図　第Ⅱ文化層26～30ブロック（U4）石器群器種別出土分布図



第61図　第Ⅱ文化層26ブロック出土石器

削器・掻器　173は幅広剥片を素材とする削器である。下半部は欠損するが，右側縁には二次加工が施され，左側縁と先端部には使用痕が確認される。175は半円状の刃部を形成した掻器である。
石核　174は求心状に剥片を剥ぎ，その結果，亀甲状を呈する石核である。

28ブロック（第63・64図176～185）

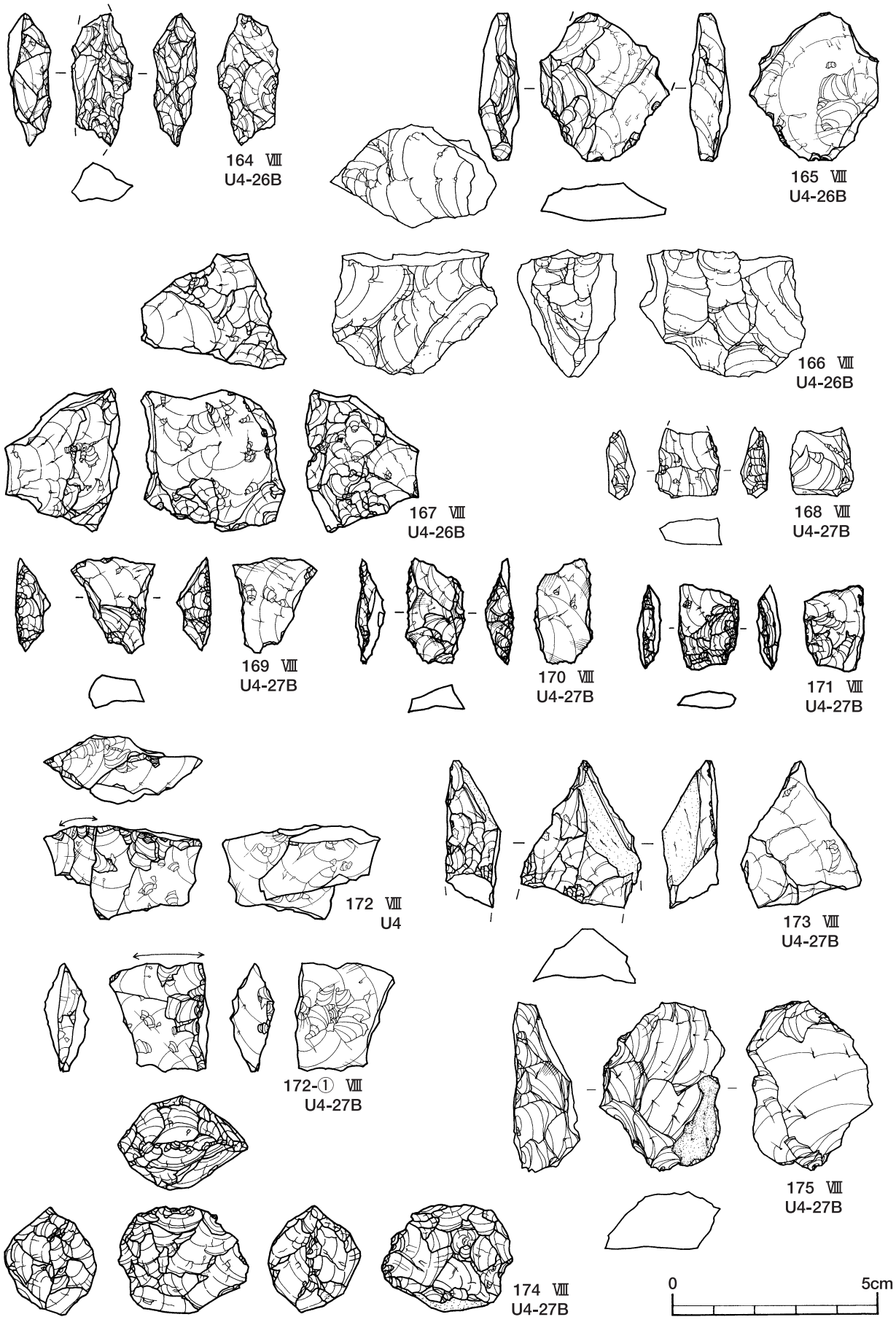
Ｅ・Ｆ－26区に分布する，径約4.5× 4 ｍの三船産黒曜石を主体とするブロックである。その他石材は，西側に上牛鼻産黒曜石が径約１ｍの範囲に分布し，東側にはＳＨが散在して分布し，ＣＣも少数含まれる。
台形石器　176～180は台形石器である。176は幅広剥片を素材とし，左側縁を折断してそこから腹面と背面に平坦剥離を施し，撥状に整えられている。技術的には台形石器というよりＡＴ下位の大型の台形様石器である。177は頁岩素材で，右側縁が摩滅した打面で，左側縁は腹面からの急角度のブランティングが施される。また刃部には鋸歯状に二次加工が施されている。178は薄手の折断剥片を素材とし，左側縁には腹面から急角度のブランティングが施された台形石器である。179は両側縁に腹面からブランティングが施された台形石器である。180は縦長剥片の折断剥片を素材とし，腹面から急角度のブランティングが施された小型の台形石器である。
掻器　181は剥片の末端に急角度の二次加工を施している掻器である。
石核　182は打面調整を施した平坦面から剥片を剥いでいる石核である。183は表裏両面に求心状に剥離した石核である。184は平坦な剥離面を打面として剥片を剥いでいる石核である。
接合資料　185は接合資料である。平坦な打面から幅広の剥片を求心状に剥いでいる石核と，その剥片の接合である。

29ブロック（第64図186）

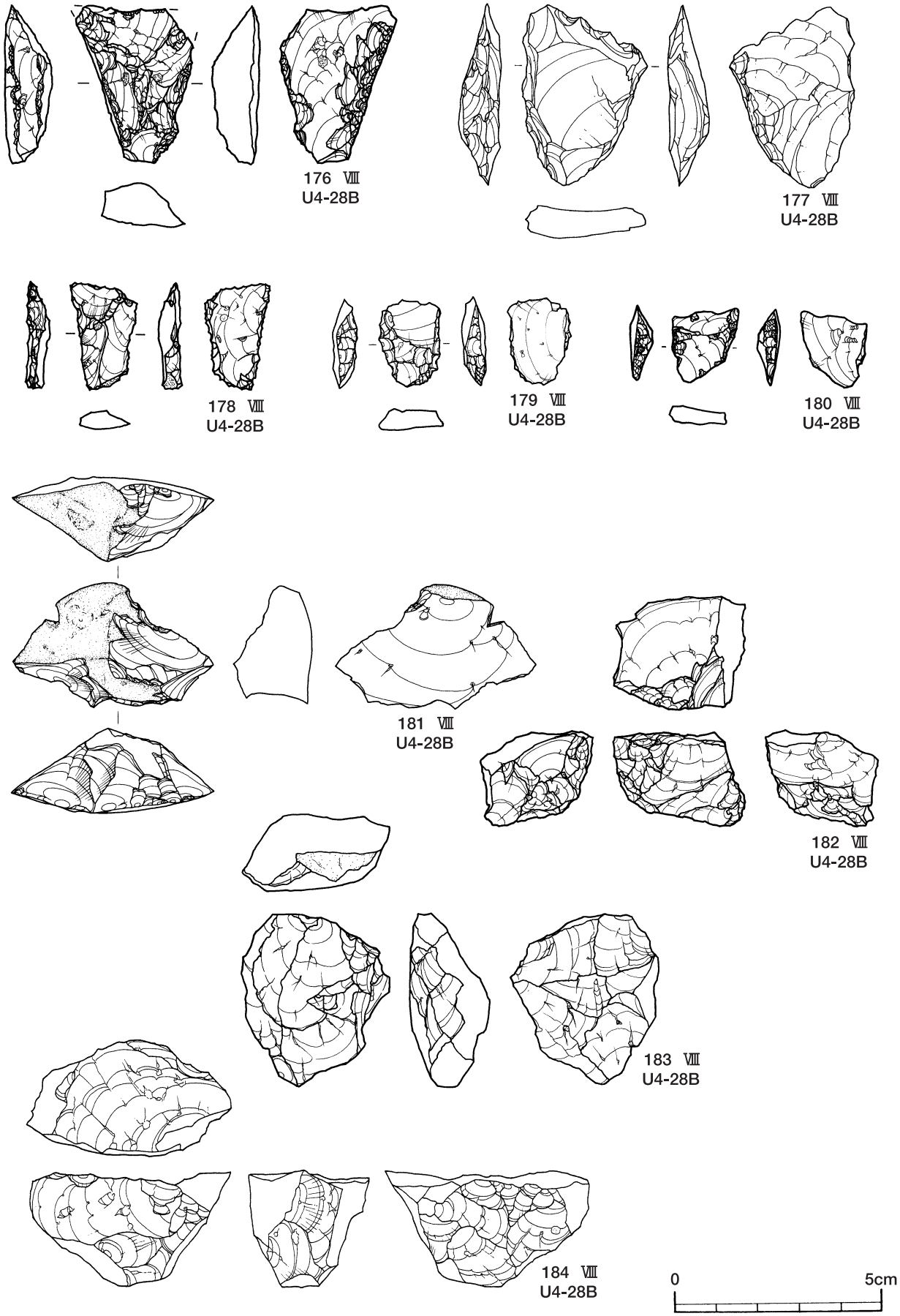
Ｅ・Ｆ－26区に分布する，径約2.5× 3 ｍのＯＢ２を主体とするブロックである。その他，ＳＨ，ＯＢ１，ＣＣなどの石材も分布する。
台形石器　186は右側縁に折断面を残す台形石器である。折断後，そこから背面に平坦剥離が施されている。左側縁は両面に平坦剥離が施されている。技術的にはＡＴ下位の台形様石器である。

30ブロック（第65図187～190）

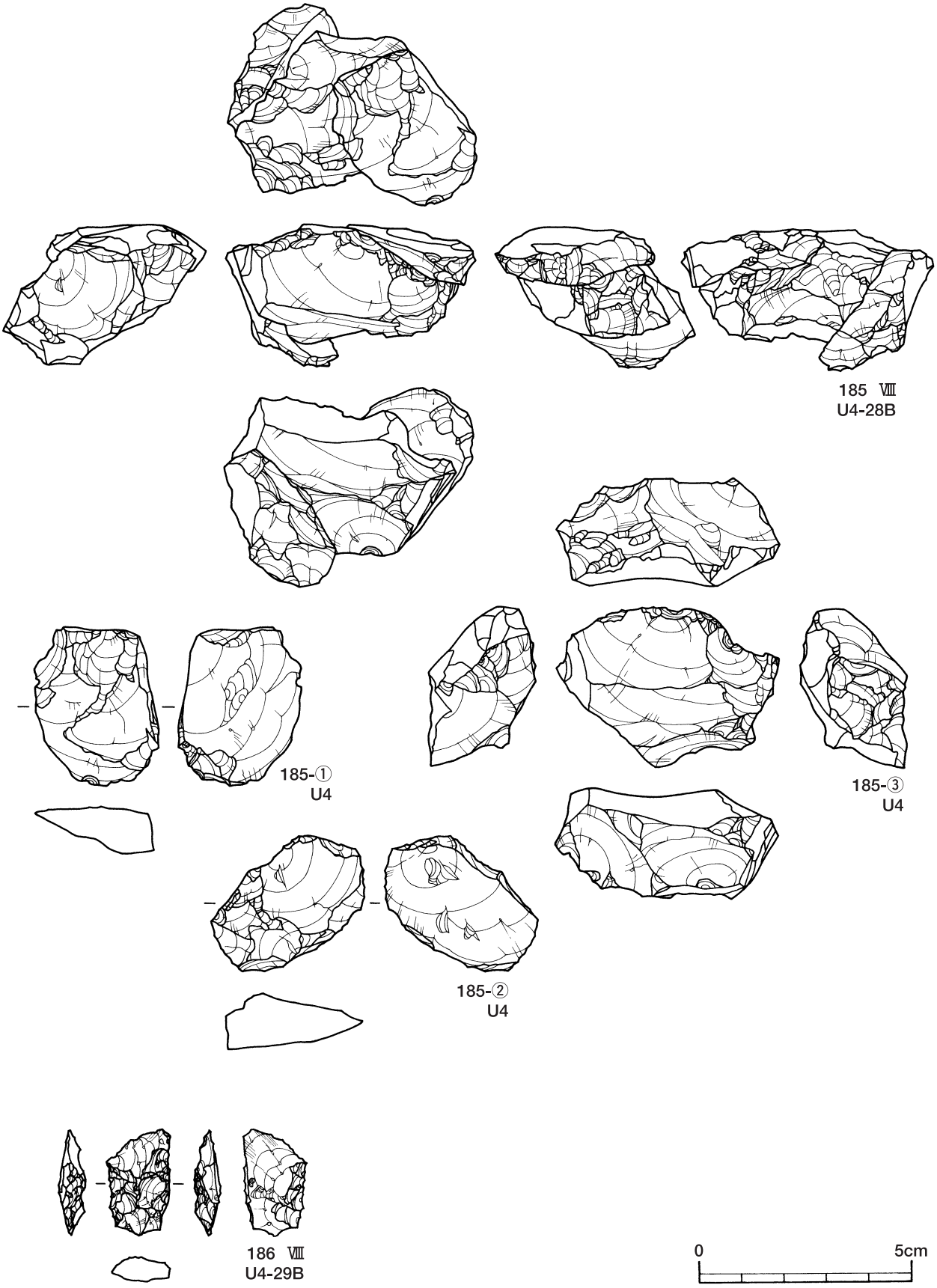
27・29ブロックに挟まれる形でＦ－26区に分布するブロックである。主体となる石材は，南側に分布が集中しているＳＨとＯＢ１である。そのほか，ＯＢ２，ＣＣが含まれる。
ナイフ形石器　187はナイフ形石器の先端部である。左側縁に二次加工が施されている。188は縦長剥片を素材とし，基部加工が施されたナイフ形石器である。打面付近の腹面には，平坦剥離も施される。左側縁には先端部まで二次加工が施され，先端付近は稜上からの調整も施される。右側縁にも鋸歯状の二次加工がみられる。
剥片尖頭器　189は剥片尖頭器である。縦長剥片を素材とし，打面付近をノッチ状に加工して基部を作り出している。右側縁先端部に二次加工が施され，両側縁には先端部まで使用痕が確認される。



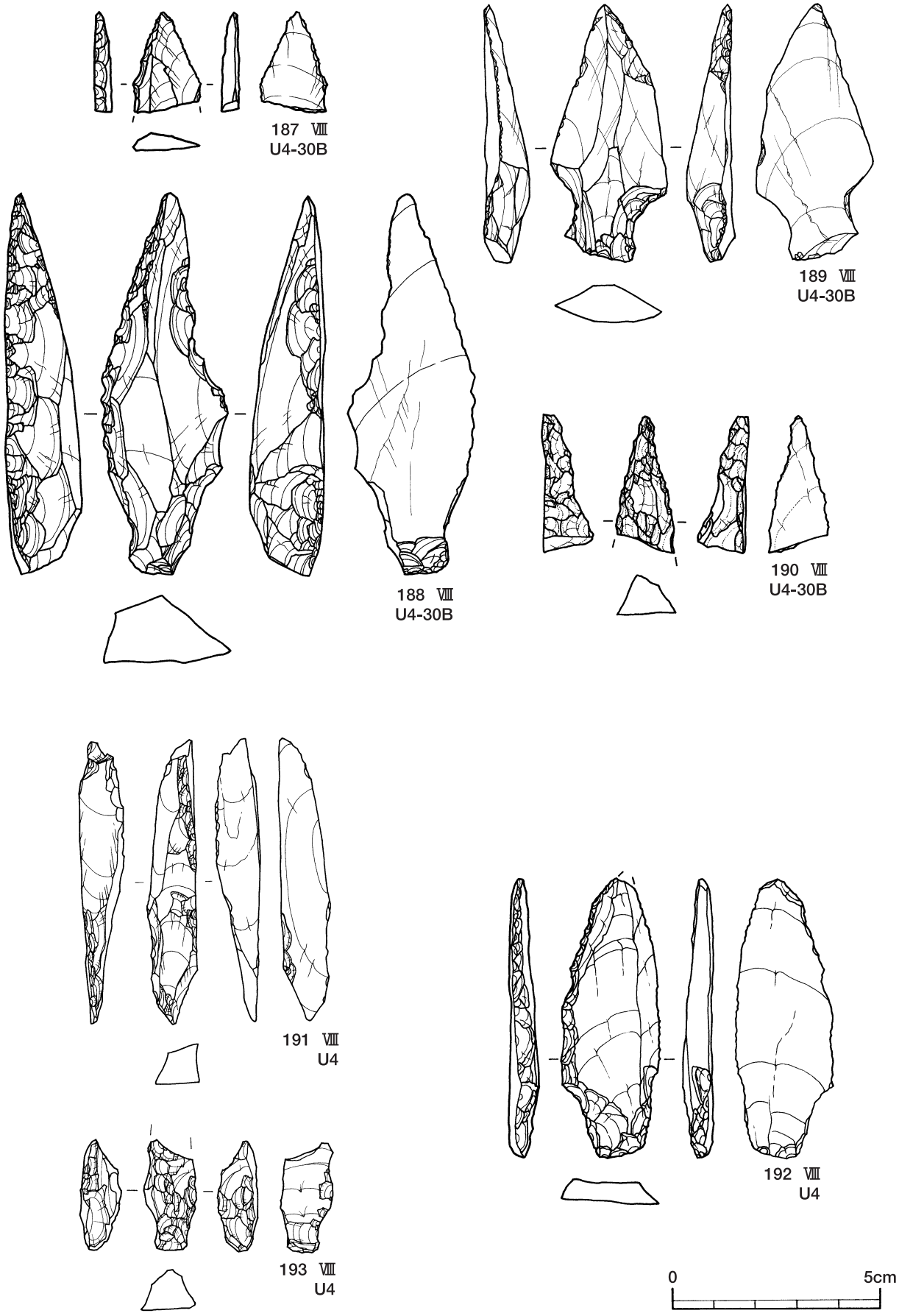
第62図　第Ⅱ文化層26・27ブロック出土石器



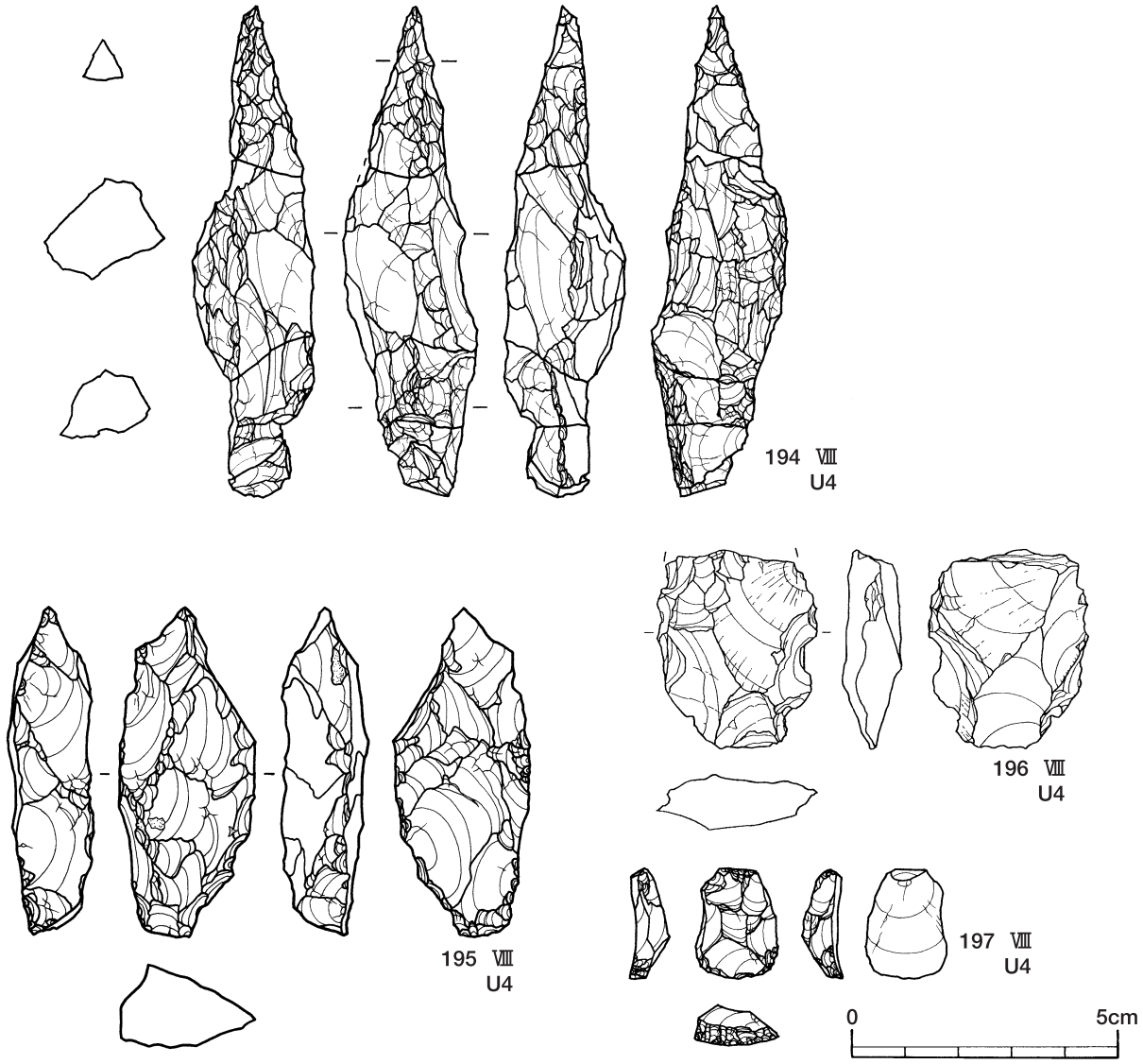
第63図　第Ⅱ文化層28ブロック出土石器



第64図　第Ⅱ文化層28・29ブロック出土石器



第65図　第Ⅱ文化層30ブロック，U 4 ブロック外出土石器



第66図　第Ⅱ文化層Ｕ４ブロック外出土石器

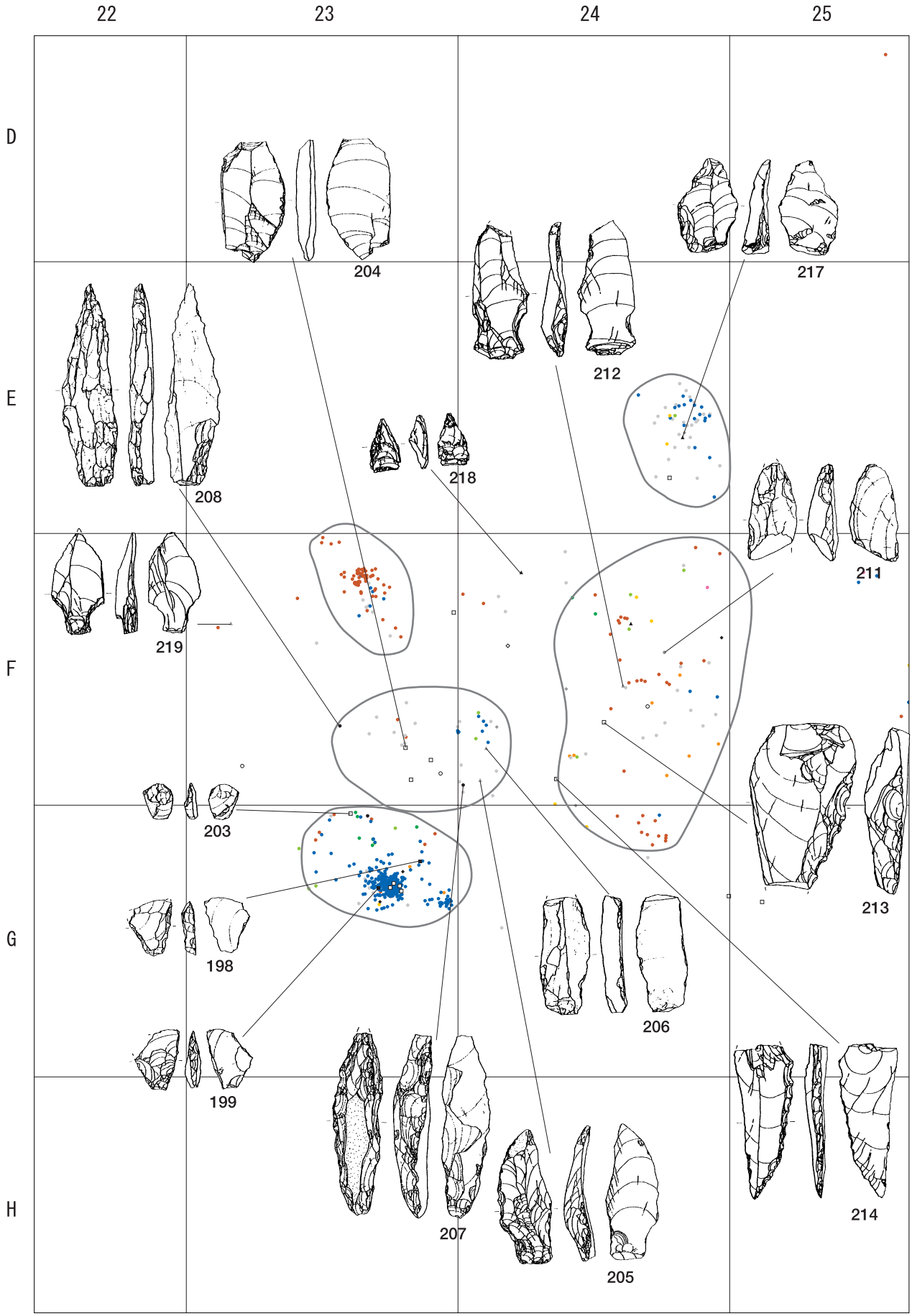
三稜尖頭器　190は三稜尖頭器である。下部は欠損している。腹面は剥離面をそのまま残し，腹面からの二次加工と部分的に稜上加工が施されている。

Ｕ４ブロック外（第65・66図191～197）

ナイフ形石器　191はナイフ形石器である。横長剥片を素材とし，左側縁の基部加工と右側縁の先端部の二次加工が施されている。

剥片尖頭器　192は剥片尖頭器である。縦長剥片を素材とし，打面付近に基部加工が行われており，打面も取り除いている。左側縁には先端部まで二次加工が施されている。先端部はわずかに欠損している。

三稜尖頭器　193は三稜尖頭器である。腹面にはわずかに基部付近に平坦剥離が施されている。腹面からの二次加工と，稜上加工により形態が整えられている。先端部は欠損している。194は三面加工の三稜尖頭器である。27ブロックに近接する地点で出土している。側縁から二次加工，稜上からの二次加工も施され，断面は菱形に近い形になっている。石材はチャートである。195は腹面からからの二次加工の後，腹面に平坦剥離が施され，そして稜上からの二次加工から施された三稜尖頭



第67図　第Ⅱ文化層31～35ブロック（U5）主要石器出土分布図

器である。196は尖頭器の基部で，先端部は欠損している。両面に二次加工が施されている。

掻器　197は２㎝弱の小型の掻器である。縦長剥片を素材としている。刃部は急角度の二次加工が施され，丸く刃部が作り出されている。

５ユニット（第69～72図）

Ｅ～Ｇ－23・24区に分布する31～35ブロックのまとまりである。

31ブロック（第69図198～203）

Ｇ－23区に径約４×６ｍの範囲に分布するブロックである。主体となる石材はＯＢ１で，その他は少数のＯＢ２，ＳＨから構成される。特にＯＢ１は，径１ｍの範囲に密集する分布を示す。

台形石器　198は幅広剥片を素材とし，両側縁と基部に丁寧にブランティングを施している。刃部は両端部が欠損している。199は両側縁にブランティングを施し，背面には基部付近に平坦剥離を施している。左側縁の端部は欠損しており，刃部には使用痕が確認できる。200～202は，やや厚みのある剥片を使用した幅の狭い台形石器である。200は両側縁に丁寧なブランティングが施されている。201は両側縁に腹面からブランティングが施されている。202も，両側縁には腹面からブランティングが丁寧に施されている。背面には基部付近を中心に右側縁より平坦剥離がみられる。

削器　203は上部～右側縁にかけて二次加工が施された，小型のスクレイパーである。

32ブロック（第70図204～209）

Ｆ－23・24区にわたる径約４×７ｍの範囲に分布する，総数約35点の散在したブロックである。石材はＯＢ１，ＳＨ，ＯＢ２から構成される。

ナイフ形石器　204は左側縁先端付近に二次加工が確認されるナイフ形石器である。

剥片尖頭器　205は先細りの縦長剥片を素材とし，左側縁には先端部まで二次加工が施される。基部は打面付近にノッチ状に加工が施され，右側縁は左側縁に比べ直線的である。206は縦長剥片を素材とし，基部加工がわずかに施されている。先端部は欠損しているが，右側縁上部に細かい二次加工が施されている。

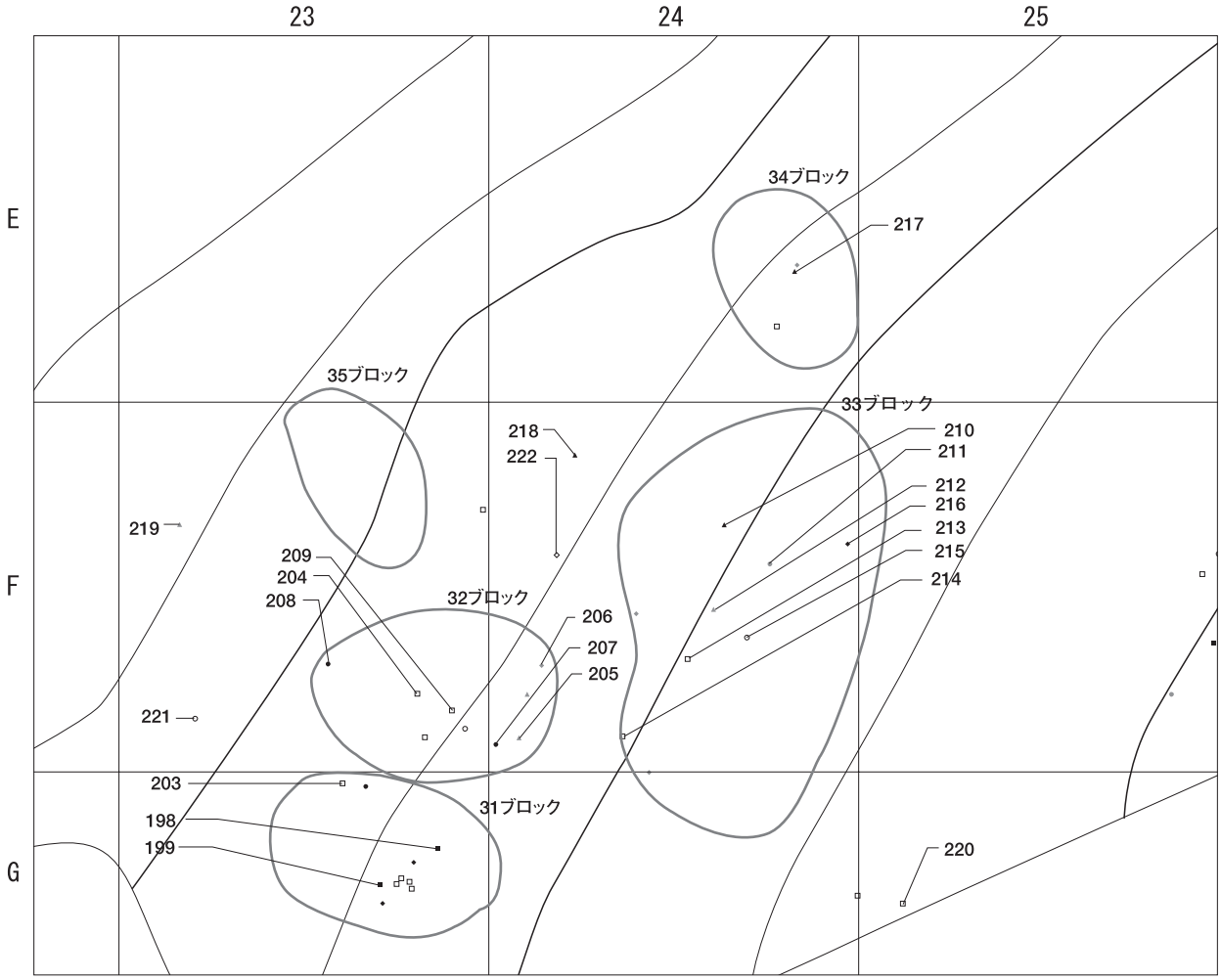
三稜尖頭器　207は先端部がわずかに欠損する三稜尖頭器である。先端部付近は断面三角形で稜上加工も施されているが，基部から中心部までは断面は台形である。腹面からの側面加工と稜上調整により整形されている。基部のみ三角加工となる。208は粘板岩製の三稜尖頭器である。基部端を欠損する。縦長剥片を素材とし，腹面からの二次加工により整形されている。基部付近の腹面には平坦剥離が施されている。

削器　209は左側縁と上部が欠損しているが，スクレイパーである。右側縁に二次加工がみられる。

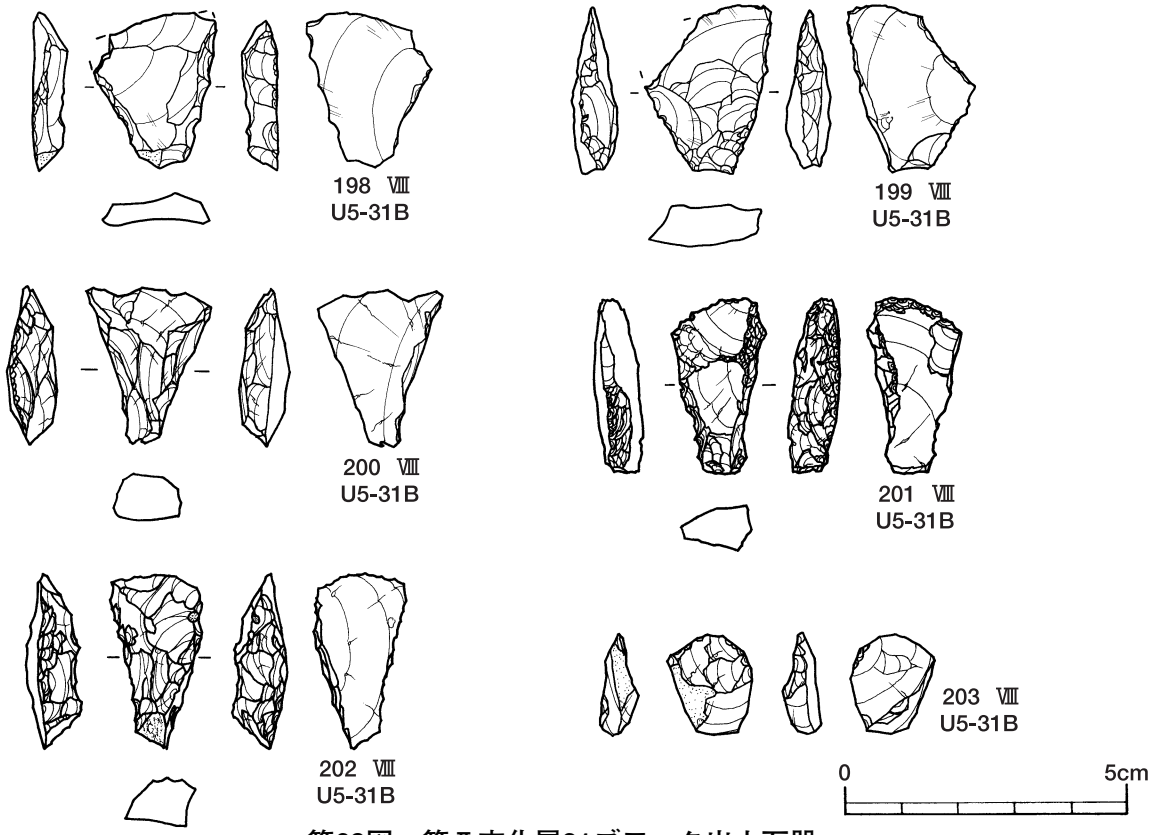
33ブロック（第71図210～216）

Ｆ・Ｇ－24区にわたる径約12×６ｍの範囲に分布する，総数約70点の散在したブロックである。石材はＯＢ２，ＳＨを主体とし，ＯＢ２はやや集中した分布がみられる。

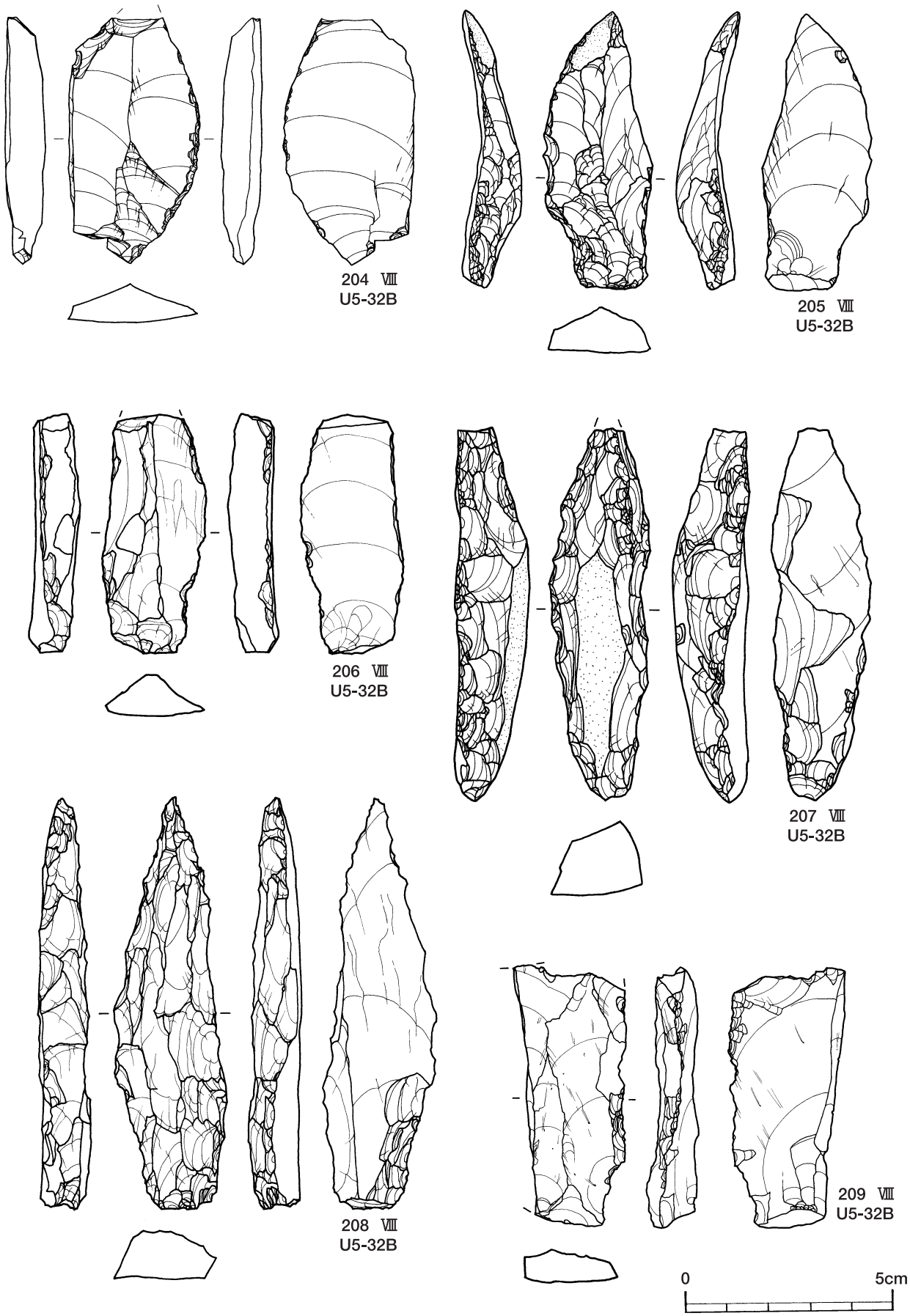
ナイフ形石器　210は下半部は欠損しているが，ナイフ形石器である。左側縁には腹面から，右側縁には腹面と背面からの細かい二次加工が施されている。



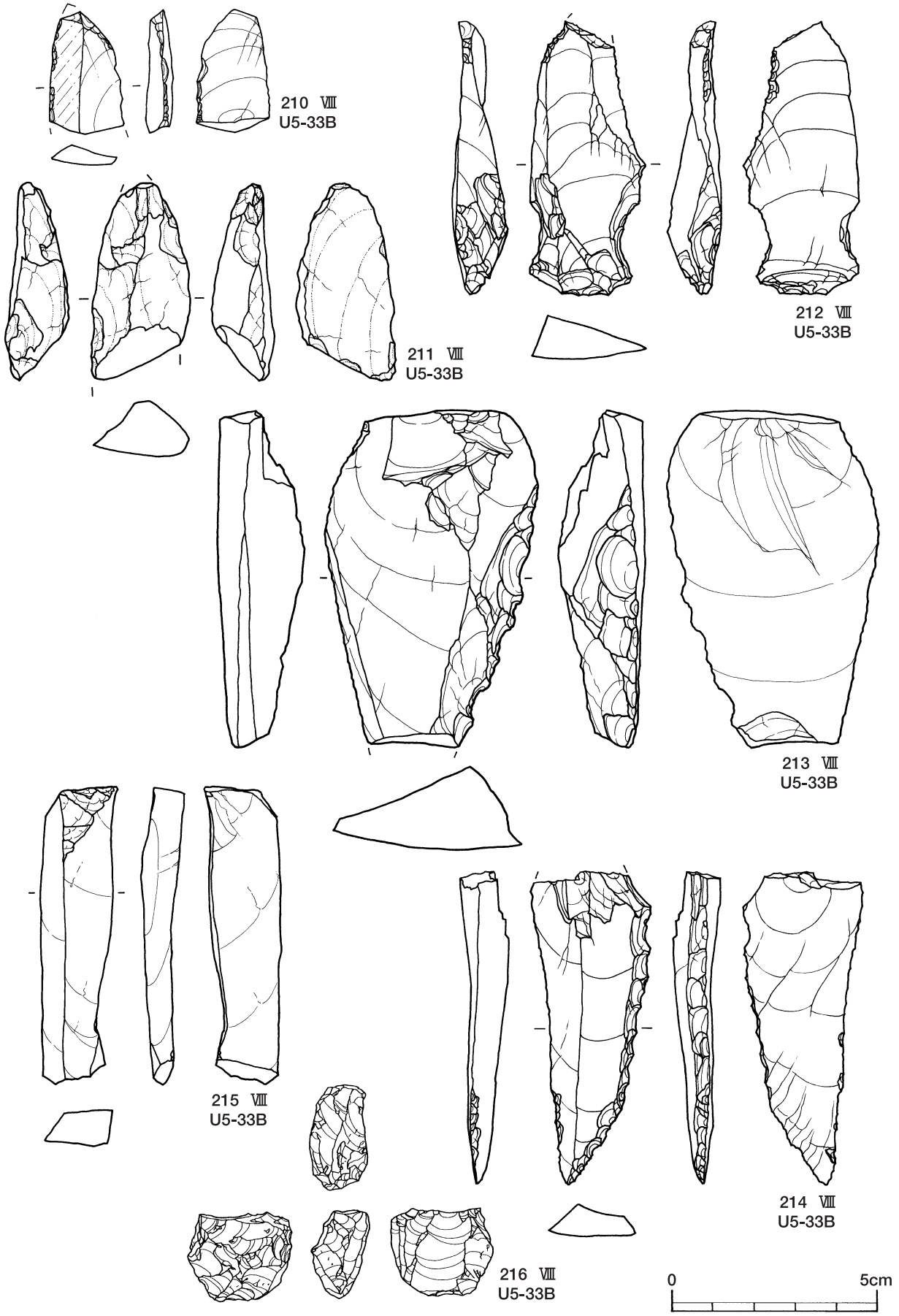
第68図　第Ⅱ文化層31～35ブロック（U5）石器群器種別出土分布図



第69図　第Ⅱ文化層31ブロック出土石器



第70図　第Ⅱ文化層32ブロック出土石器



第71図　第Ⅱ文化層33ブロック出土石器

尖頭器　211は尖頭器であるが，下半部は欠損している。横長剥片を素材とし，腹面からの二次加工によって整形されていると思われるが，風化が激しい。

剥片尖頭器　212は剥片尖頭器である。縦長剥片を素材とし，左側縁上部には腹面から，右側縁には背面から二次加工が施されている。打面付近に基部加工が施されており，本来の定義からは外れている。213は砂岩製で，厚みのある縦長剥片を素材とするスクレイパーである。剥片の先端部は欠損しているが，右側縁には二次加工が施されている。

削器　214は先細りの縦長剥片を素材とするスクレイパーである。右側縁の先端付近と左側縁全体には二次加工が施されている。

剥片　215は安山岩の良質な縦長剥片である。

石核　216は平坦な剥離面を打面として，小型の剥片を剥いでいる石核である。

34ブロック（第72図217）

Ｅ－24区の径約4.5×3.5ｍの範囲に広がる，ＯＢ１を主体とするブロックである。

ナイフ形石器　217は縦長剥片を素材とした基部加工ナイフ形石器である。鋭い側縁には使用痕が確認される。基部付近にはスクレイパーエッヂ状の二次加工が施される。

35ブロック

Ｆ－23区の北方に径約５×２ｍの範囲に分布するブロックである。ＯＢ２を主体としている。Ⅶｂ・Ⅶａ層でも同じ地点にＯＢ２の集中部があり，第Ⅳ文化層３ブロックの沈み込みの可能性が高い。

Ｕ５ブロック外（第72図218～222）

５ユニット内のブロック外遺物は５点図化した。

ナイフ形石器　218は日東産黒曜石を素材としたナイフ形石器である。

剥片尖頭器　219は安山岩製で小型の剥片尖頭器である。打面付近にノッチ状に基部加工が施される。先端部をわずかに欠損する。

削器　220は縦長剥片を素材とするスクレイパーである。石材は三船産黒曜石である。左側縁は細かい急角度の二次加工を施している。

使用痕剥片　221は，幅広剥片を用いた使用痕剥片である。左側縁に使用痕が確認できる。

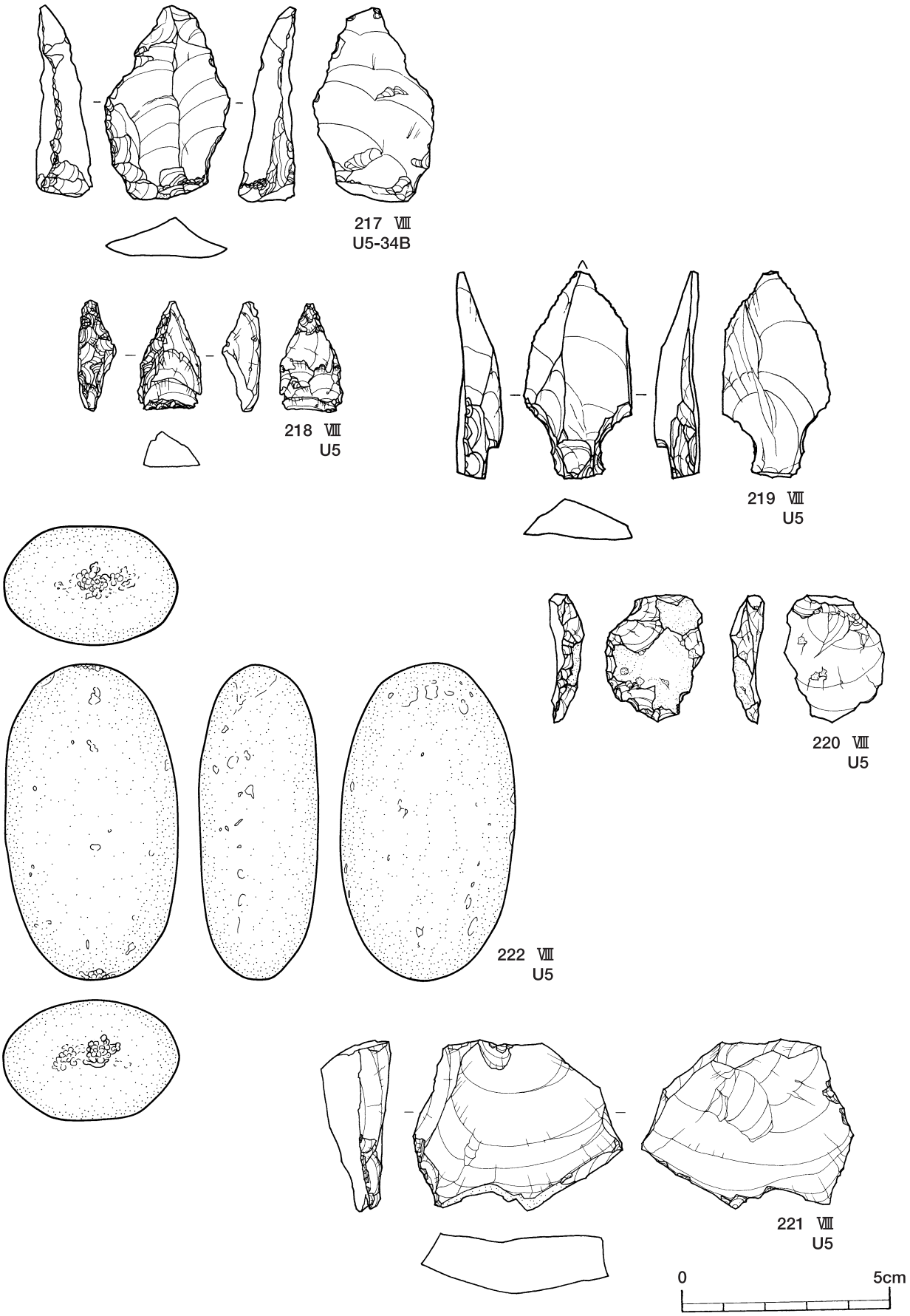
敲石　222は敲石である。長軸の両端に敲打痕が観察できる。

その他ブロック外（第74図223～225）

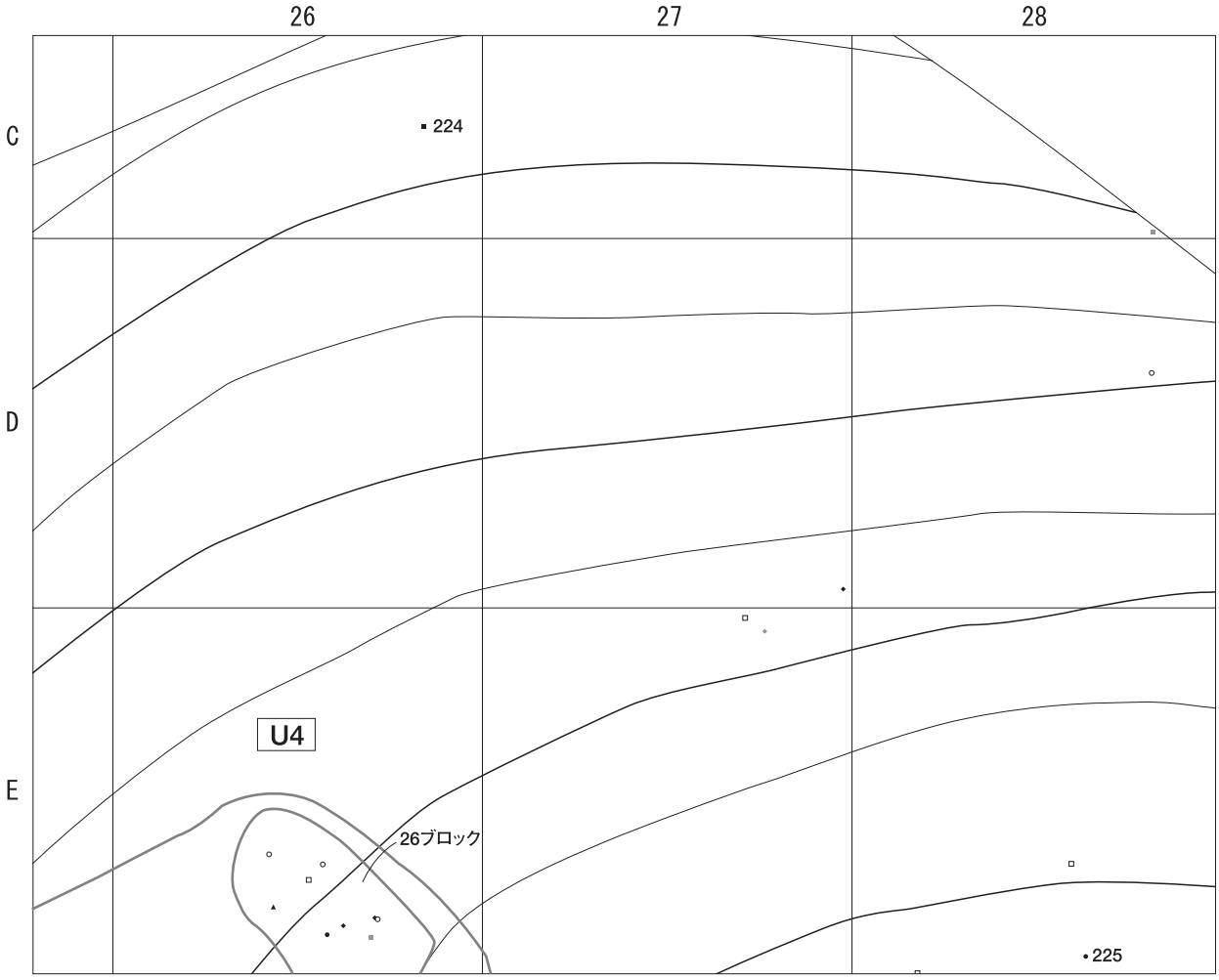
その他ブロック外の遺物を３点図化した。

台形石器　223・224は台形石器である。223はＤ－28区出土であり，右側縁に打面が残る。右側縁の打面から腹面に平坦剥離が施されている。224は三船産黒曜石を使用している。右側縁には丁寧にブランティングが施され，左側縁には背面と腹面両方から平坦剥離が施されており，Ⅸ層からの浮き上がりである台形様石器の可能性もある。

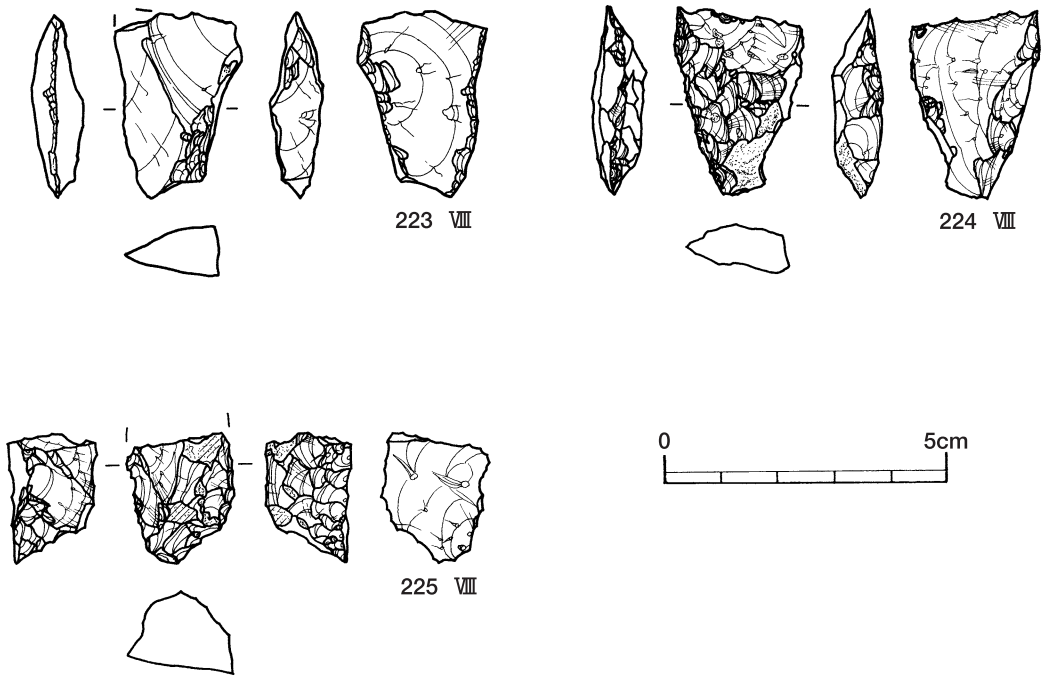
三稜尖頭器　225は三稜尖頭器である。先端部が欠損している。



第72図　第Ⅱ文化層34ブロック，U５ブロック外出土石器



第73図　第Ⅱ文化層ブロック外石器群器種別出土分布図



第74図　第Ⅱ文化層ブロック外出土石器

第４表　第Ⅱ文化層石器観察表（1）

挿図番号	番号	ユニット	ブロック	器　種	石材	区	層	標高	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
37	70	U1	1	ナイフ形石器	SH3	G-19	Ⅷ	191.667	333	4.6	2.1	1.0	8.08	
	71	U1	1	掻器	FeQU	H-19	Ⅷ	190.819	526	3.5	2.7	1.7	16.32	
	72	U1	2	台形石器	OB1	G-18	Ⅷ	191.902	111	2.2	1.5	0.6	2.5	
	73	U1	2	剥片尖頭器	SA	H-18	Ⅷ	192.045	370	4.0	2.8	1.0	9.5	
	74	U1	2	剥片尖頭器	SH3	H-18	Ⅷ	192.083	43	4.6	3.0	0.9	12.2	
	75	U1	2	石核	OB1	H-18	Ⅷ	192.058	164	2.8	3.5	2.2	22.15	
	76	U1	3	ナイフ形石器	SH1B	G-17	Ⅷ	—	128・142	4.2	2.5	1.4	9.8	
	76-①	U1	3	ナイフ形石器	SH4	H-17	Ⅷ	193.108	128	4.2	1.5	1.1	4.7	
	76-②	U1	3	ナイフ形石器	SH4	I-17	Ⅷ	193.100	142	4.0	1.6	1.0	5.1	
	77	U1	3	ナイフ形石器	SH4	I-17	Ⅷ	193.103	130	3.9	1.5	1.0	5.1	
	78	U1	3	ナイフ形石器	SH4	I-17	Ⅷ	193.223	149	3.7	2.1	0.7	4.76	
	79	U1	3	台形石器	OB1	H-18	Ⅷ	192.930	105	2.9	2.3	0.7	4.5	
38	80	U1	3	剥片尖頭器	AN2	I-18	Ⅷ	192.929	49	7.7	3.4	1.2	26.4	
	81	U1	3	剥片尖頭器	AN2	H-18	Ⅷ	192.565	93	3.2	2.0	0.5	4.7	
	82	U1	3	剥片尖頭器	AN2	H-18	Ⅷ	192.678	96	3.1	1.9	0.7	5.1	
	83	U1	3	剥片尖頭器	SA	H-18	Ⅷ	192.582	100	7.7	2.9	0.8	19.8	
	84	U1	3	剥片尖頭器	AN2	H-18	Ⅷ	192.511	94	4.8	1.9	0.6	6.1	
								192.500	95					
	85	U1	3	石核	SH4	H-18	Ⅷ	192.793	80	6.1	1.7	1.7	21.8	
	86			スクレイパー	AN1	G-18	Ⅷ	191.236	140	10.8	4.3	1.6	57.38	
	87	U1		ナイフ形石器	SH4			—	—	3.8	2.7	0.5	3.6	
41	88	U2	4	台形石器	SH1A	F-17	Ⅷ	191.108	290	3.4	1.7	0.7	3.29	
	89	U2	4	台形石器	SH1B	F-17	Ⅷ	190.392	286	1.9	1.4	0.5	1.3	
	90	U2	4	台形石器	SH1B	F-17	Ⅷ	190.419	298	4.0	2.0	0.6	5.6	
	91	U2	4	三稜尖頭器	SH1B	F-17	Ⅷ	191.200	300	7.6	2.5	1.5	26.6	
42	92	U2	5	台形石器	CC	F-16	Ⅷ	190.178	59	2.7	1.9	0.6	2.1	
	93	U2	5	接合資料	SH1B	E-16	Ⅷ	190.160	100	3.9	1.7	1.0	5.8	接合
				剥片	SH1B	E-16	Ⅶa	190.110	29					
	93-①	U2	5	三稜尖頭器	SH1B	E-16	Ⅷ	190.160	100	3.9	1.6	1.0	5.0	
	94	U2	5	三稜尖頭器	SH1A	E-16	Ⅷ	190.135	101	4.5	1.4	1.0	5.9	
	95	U2	5	三稜尖頭器	SH1A	F-16	Ⅷ	190.243	58	4.5	1.5	1.2	10.0	
	96	U2	6	剥片尖頭器	SA	F-16	Ⅷ	190.350	56	7.1	2.9	0.9	22.1	
	97	U2	6	剥片尖頭器	SA	F-16	Ⅷ	190.283	232	5.1	2.3	0.7	14.6	
	98	U2	7	接合資料	SH1A	F-15・16		—	—	3.1	2.1	1.8	8.1	
	98-①	U2	7	三稜尖頭器	SH1A	F-16	Ⅶa	190.622	13	2.6	1.4	1.1	4.8	接合
	98-②	U2		台形石器	SH1A	F-15	Ⅷ	189.930	197	2.4	2.1	0.7	3.3	
	99	U2	8	台形石器	OB2	F-17	Ⅷ	190.643	576	3.3	1.2	1.1	4.0	
	100	U2	8	台形石器	OB2	F-17	Ⅷ	190.961	466	2.9	2.6	0.8	5.0	
	101	U2	8	台形石器	OB1	F-17	Ⅷ	190.970	426	2.4	2.0	0.8	3.6	
43	102	U2	9	台形石器	OB1	F-17	Ⅷ	190.882	159	2.6	2.1	0.9	4.08	
	103	U2	9	剥片尖頭器	AN2	F-17	Ⅷ	190.621	170	6.8	2.7	0.8	14.7	
	104	U2	9	剥片尖頭器	SA	F-17	Ⅷ	190.685	169	6.6	2.7	0.9	19.3	
	105	U2	10	三稜尖頭器	SH1B	G-17	Ⅷ	191.496	100	3.3	1.3	0.8	3.9	
	106	U2	10	三稜尖頭器	SH1B	G-17	Ⅷ	191.304	13	4.3	1.4	0.8	5.7	
	107	U2	10	接合資料	SH1B	G-17	Ⅷ	191.570	90	2.8	1.5	1.2	5.7	接合
				剥片		G-17	Ⅷ	191.343	41					
	107-①	U2	10	三稜尖頭器	SH1B	G-17	Ⅷ	191.570	90	2.8	1.5	1.2	3.7	
	108	U2	10	尖頭器	AN1	F-17	Ⅷ	191.084	352	4.4	1.8	1.2	10.5	
	109	U2	10	両面加工尖頭器	SH5	F-17	Ⅷ	191.035	350	5.4	2.5	1.0	11.5	
44	110	U2	10	接合資料	SH1B	G-17	Ⅷ	191.788	7	5.1	3.4	1.1	20.28	接合
				剥片		G-17	Ⅷ	191.322	98					
	110-①	U2		台形石器	SH1B	G-17	Ⅷ	191.788	7	5.1	2.9	1.1	18.89	
	111	U2	10	掻器	CH	F-17	Ⅷ	190.842	349	4.9	3.3	0.9	14.89	
	112	U2	10	剥片	SH3	G-17	Ⅷ	191.419	24	4.3	2.0	0.6	4.6	
	113	U2	10	石核	SH1A	F-17	Ⅷ	190.907	320	4.3	3.6	2.1	33.9	
	114	U2	11	スクレイパー	SH1B	G-17	Ⅷ	191.322	36	5.1	2.9	0.7	9.28	
	115	U2	11	尖頭器・接合資料	SH5	F-17	Ⅷ	191.470	107	7.5	2.9	1.1	28.1	接合
		U2	11	剥片	SH5		Ⅷ	—	546	7.5	2.9	1.1	30.1	
	115-①	U2	11	尖頭器	SH5	F-17	Ⅷ	191.470	107	7.5	2.9	1.1	28.1	
45	116	U2		台形石器	OB1	F-17	Ⅷ	—	515	2.8	1.7	0.8	2.8	
	117	U2		台形石器	SH1A	F-16	Ⅷ	190.208	91	2.2	1.9	0.7	2.81	
	118	U2		剥片尖頭器	SA	G-18	Ⅷ	191.280	88	6.0	2.4	1.0	13.5	
	119	U2		剥片尖頭器	SH2	G-18	Ⅷ	190.921	171	6.2	3.0	0.9	16.6	
	120	U2		剥片尖頭器	AN2	G-17	Ⅷ	191.405	111	4.8	1.7	1.0	6.9	
	121	U2		剥片尖頭器	SH3	F-16	Ⅷ	190.495	280	4.7	3.6	1.4	21.3	

第５表　第Ⅱ文化層石器観察表（2）

挿図番号	番号	ユニット	ブロック	器　種	石材	区	層	標高	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
45	122	U2		三稜尖頭器	SH1B	F-17	Ⅷb	—	568	3.3	1.6	0.8	5.1	
	123	U2		尖頭器	SH3	G-17	Ⅷ	191.869	113	3.5	1.3	0.7	2.4	
	124	U2		尖頭器	SH3	G-17	Ⅷ	191.800	114	4.0	1.2	0.5	1.9	
	125	U2		石核	SH1B	F-17	Ⅷ	190.432	499	4.8	3.3	1.4	29.8	
46	126	U2		スクレイパー	SH1A	E-16	Ⅷ	189.652	75	8.8	4.5	2.7	108.97	
49	127	U3	14	尖頭器	SH4	G-16	Ⅷ	190.985	76	12.6	3.4	1.8	85.3	
				尖頭器	SH4	F-16		190.950	62					
	128	U3	14	ペットストーン		F-16	Ⅷ	190.866	298	6.3	2.6	1.9	45.77	
	129	U3	14	接合資料	OB1	F-16	Ⅷ	—	138･139･141	4.8	3.7	3.5	44.78	接合
	129-①	U3	14	接合資料	OB1	F-16	Ⅷ	—	138･141	4.4	3	3.5	27.1	接合
	129-②	U3	14	剥片	OB1	F-16	Ⅷ	190.830	139	3.6	3	1.5	17.69	接合
	129-③	U3	14	剥片	OB1	F-16	Ⅷ	190.793	141	2.7	2.2	0.8	3.53	接合
	129-④	U3	14	石核	OB1	F-16	Ⅷ	190.830	138	4.7	2.8	3	23.56	接合
50	130	U3	15	剥片尖頭器	AN2	F-16	Ⅷ	190.358	61	9.6	2.7	0.5	18.8	
	131	U3	15	三稜尖頭器	SH1B	F-16	Ⅷ	190.406	22	6.2	1.6	1.4	10.1	
	132	U3	15	三稜尖頭器	SH1A	F-16	Ⅷ	190.423	147	3.6	2.1	1.2	8.34	
	133	U3	17	剥片尖頭器	AN2	G-16	Ⅷ	191.133	430	6.8	2.3	1.0	13.8	
	134	U3	17	三稜尖頭器	OB1	G-16	Ⅷ	191.010	400	7.3	3.44	2.0	46.8	
	135	U3	18	剥片	SH4	G-15	Ⅷ	190.717	878	8.1	2.9	1.0	18.5	
51	136	U3	19・21	三稜尖頭器	OB1	H-16	Ⅷ	—	—	7.9	2.9	2.5	50.1	
	136-①	U3	19	接合資料	OB1	H-16	Ⅷ	191.371	5	11.1	3.3	2.9	77.1	接合
	136-①		19	接合資料	OB1	H-16	Ⅷ	191.358	6					
	136-①		19	接合資料	OB1	H-16	Ⅷ	191.550	32					
	136-①	U3	21	接合資料	OB1	G-15	Ⅷ	190.697	424					
	137	U3	19	三稜尖頭器	SH4	G-16	Ⅷ	191.405	88	5.9	2.7	1.8	25.4	
	138	U3	19	二次加工石器	SH4	G-16	Ⅷ	191.248	325	4.7	2.5	0.8	11.4	
	139	U3	19	石核	SA	G-16	Ⅷ	191.370	136	5.9	3.7	2.4	59.0	
52	140	U3	20	三稜尖頭器	SH4	G-15	Ⅷ	190.727	1301	9.2	3.8	2.6	77.25	
	141	U3	20	三稜尖頭器	OB1	G-15	Ⅷ	190.719	182	2.4	2.1	1.1	8.3	
	142	U3	20	三稜尖頭器	OB1	G-15	Ⅷ	190.736	1302	4.2	2.0	1.5	11.4	
	143	U3	20	剥片	SH4	G-15	Ⅷ	190.670	807	6.2	2.2	0.9	13.9	
54	144	U3	21	三稜尖頭器	AN2	G-15	Ⅷ	190.746	300	13.1	3.2	2.1	77.3	
						G-15		190.729	149					
	145	U3	21	接合資料	OB1	G-15	Ⅷ	—	161･562･600	5.8	5.7	2.6	96.46	
	145-①	U3	21	剥片	OB1	G-15	Ⅷ	190.582	600	3.2	1.8	0.7	4.17	接合
	145-②	U3	21	剥片	OB1	G-15	Ⅷ	190.622	562	5.7	2.4	1.1	15.8	接合
	145-③	U3	21	石核	OB1	G-15	Ⅷ	190.599	161	5.4	4.5	2.6	76.56	接合
55	146	U3	22	剥片尖頭器	AN2	H-15	Ⅷ	191.672	4	6.5	2.7	0.5	9.4	
	147	U3	22	折断剥片	CC	H-15	Ⅷ	191.439	110	3	3.7	1.3	10.07	
				折断剥片	CC	H-15	Ⅷ	191.367	71					
	148	U3	23	接合資料	CC	G-15	Ⅷ	190.740	853	4.7	2.4	2.3	10.89	接合
						G-15	Ⅷ	190.709	854					
	148-①	U3	23	使用痕剥片	CC	G-15	Ⅷ	190.709	854	3.7	1.6	1	4.66	接合
	149	U3	24	ナイフ形石器	SH3	G-14	Ⅷ	190.700	51	6.9	2.5	1.2	18.45	
	150	U3	25	剥片尖頭器	AN2	F-15	Ⅷ	190.090	114	6.7	2.3	0.9	15.1	
	151	U3	25	石核	CC	F-15	Ⅷ	189.938	59	4	4.4	2.9	35.84	
56	152	U3		剥片尖頭器	AN2	H-15	Ⅷ	—	25	6.1	2.5	1.1	14.9	
	153	U3		三稜尖頭器	OB1	H-16	Ⅷ	191.666	72	4.7	1.8	1.1	8.0	
	154	U3		三稜尖頭器	SH4	G-16	Ⅷ	191.165	360	8.3	3.8	2.0	39.8	
	155	U3		三稜尖頭器	SH4	G-16	Ⅷ	191.434	87	3.8	1.1	1.0	4.8	
	156	U3		三稜尖頭器	SH4	G-16	Ⅷ	191.145	358	3.5	1.0	0.8	3.3	
	157	U3		掻器	CC	G-16	Ⅷ	190.997	80	4.2	3.6	1.6	26.26	
57	158	U3		掻器	CC	G-16	Ⅷ	190.917	79	4.7	3.9	2.1	48.08	
	159	U3		掻器	OB1	H-16	Ⅷ	191.819	4	7.1	3.6	1.8	52.9	
	160	U3		剥片	AN2	H-16	Ⅷ	191.640	73	10	2.6	1.2	36.2	
				剥片		H-16	Ⅷ	191.612	77					
	161	U3		台形石器	OB1	H-15	Ⅷ	191.175	45	22.4	1.9	0.6	2.4	
61	162	U4	26	ナイフ形石器	OB1	E-26	Ⅷ	192.796	1164	4	3.6	0.9	8.84	
	163	U4	26	台形様石器	CC	E-26	Ⅷ	192.974	1200	3.9	2.4	0.9	10.02	
62	164	U4	26	三稜尖頭器	OB2	E-26	Ⅷ	192.942	1175	3.1	1.5	0.9	3.9	
	165	U4	26	使用痕剥片	OB2	E-26	Ⅷ	192.946	1203	3.5	3.1	1	8.59	
	166	U4	26	石核	OB2	E-26	Ⅷ	192.940	1201	4	2.9	1.3	24.82	
	167	U4	26	石核	OB2	E-26	Ⅷ	192.881	1310	4.2	3.5	0.9	28.44	
	168	U4	27	台形石器	OB2	F-26	Ⅷ	192.897	2620	1.6	1.5	0.7	2.0	
	169	U4	27	台形石器	OB2	F-26	Ⅷ	193.012	2160	2.3	2	0.8	2.29	

第６表　第Ⅱ文化層石器観察表（3）

挿図番号	番号	ユニット	ブロック	器　種	石材	区	層	標高	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
62	170	U4	27	台形石器	OB2	F-26	Ⅷ	192.832	1989	2.5	1.3	0.7	2.2	
	171	U4	27	台形石器	OB2	F-26	Ⅷ	192.894	1279	2	1.4	0.4	1.35	
	172	U4		折断剥片	OB2	F-26	Ⅷ	193.067	1193	3.8	2.3	1.7	9.97	接合
			27	台形石器		F-26	Ⅷ	192.891	2346					
	172-①	U4	27	台形石器	OB2	F-26	Ⅷ	192.891	2346	2.6	2.4	1	5.27	接合
	173	U4	27	スクレイパー	OB2	F-26	Ⅷ	192.819	3545	3.5	2.8	1.3	8.69	
	174	U4	27	石核	OB2	F-26	Ⅷ	192.960	1912	2.7	2.4	1.5	14.59	
	175	U4	27	削器	OB1	F-26	Ⅷ	192.937	1360	4.1	3.1	1.5	17.3	
63	176	U4	28	台形石器	OB2	F-25	Ⅷ	192.752	1540	4.7	2.6	1.1	9.4	
	177	U4	28	台形石器	SH4	F-26	Ⅷ	192.859	2850	4.3	3.0	0.9	11.7	
	178	U4	28	台形石器	OB2	F-26	Ⅷ	192.966	1742	2.6	1.6	0.5	2.0	
	179	U4	28	台形石器	OB2	F-26	Ⅷ	192.854	2117	2.1	1.5	0.6	1.65	
	180	U4	28	台形石器	OB2	F-26	Ⅷ	192.833	3319	1.8	1.6	0.4	1.14	
	181	U4	28	掻器	OB1	F-26	Ⅷ	192.811	3580	4.8	3	2.1	20.94	
	182	U4	28	石核	OB2	F-26	Ⅷ	192.876	1580	3.3	2.6	0.8	19.16	
	183	U4	28	石核	OB2	F-26	Ⅷ	192.825	3000	4.2	3.6	1.9	25.15	
	184	U4	28	石核	OB2	F-26	Ⅷ	192.953	1750	2.8	1.7	0.4	32.9	
64	185	U4	28	接合資料（石核）	OB2	F25・26	Ⅷ	—	1820･1681･2980	5.7	5.7	2.9	60.62	接合
	185-①	U4		剥片	OB2	F-25	Ⅷ	192.881	1681	3.1	3.6	1.3	11.58	接合
	185-②	U4	28	剥片	OB2	F-26	Ⅷ	192.858	2980	3.8	2.9	1.1	10.71	接合
	185-③	U4		石核	OB2	F-26	Ⅷ	192.966	1820	5.2	4.7	2.5	38.32	接合
	186	U4	29	台形石器	OB2	F-26	Ⅷ	192.683	2742	2.5	1.4	0.6	2.2	
65	187	U4	30	ナイフ形石器	SA	F-26	Ⅷ	192.747	1950	2.4	1.1	0.4	1.4	
	188	U4	30	ナイフ形石器	SH3	F-26	Ⅷ	192.607	3880	9.1	2.9	1.8	40.8	
	189	U4	30	剥片尖頭器	SH3	F-26	Ⅷ	192.612	3740	6.1	2.8	1.1	13.5	
	190	U4	30	三稜尖頭器	AN2	F-26	Ⅷ	192.785	2455	3.3	1.4	1.0	3.6	
	191	U4		ナイフ形石器	SH3	F-26	Ⅷ	192.998	2930	6.8	1.3	1	7.89	
	192	U4		剥片尖頭器	SA	F-26	Ⅷ	193.119	1700	6.7	2.4	0.6	11.2	
	193	U4		三稜尖頭器	OB1	F-26	Ⅷ	193.191	1800	2.6	1.3	0.9	2.83	
66	194	U4		三稜尖頭器	CH	F-26	Ⅷ	192.816	1525	9.2	2.6	1.9	34.5	接合
						F-26	Ⅷ	192.929	2705					
						F-26	Ⅷ	193.047	1522					
						F-26	Ⅷ	192.879	3259					
						F-26	Ⅷ	192.918	4200					
	195	U4		三稜尖頭器	OB1	F-26	Ⅷ	193.108	2375	6.1	2.4	1.4	23.2	
	196	U4		尖頭器	SH4	F-25	Ⅷ	192.758	1564	3.7	2.9	1.1	12.5	
	197	U4		掻器	CC	F-26	Ⅷ	192.970	1790	2.0	1.5	0.7	2.1	
69	198	U5	31	台形石器	OB1	G-23	Ⅷ	191.115	239	2.7	2.2	0.6	2.77	
	199	U5	31	台形石器	OB1	G-23	Ⅷ	191.079	289	2.9	2.2	0.8	4.08	
	200	U5	31	台形石器	OB1	G-23	Ⅷ	—	一括	2.8	2.2	1.8	3.6	
	201	U5	31	台形石器	OB1	G-23	Ⅷ	—	不明	3.1	0.8	1.6	3.6	
	202	U5	31	台形石器	OB1	G-23	Ⅷ	—	一括	3.1	1.6	0.9	3.7	
	203	U5	31	スクレイパー	OB1	G-23	Ⅷ	190.999	329	1.8	1.5	0.7	1.48	
70	204	U5	32	スクレイパー	SH3	F-23	Ⅷ	191.046	2100	5.9	3.2	1	20.84	
	205	U5	32	剥片尖頭器	SH3	F-24	Ⅷ	191.227	349	6.6	2.5	1.3	17.6	
	206	U5	32	剥片尖頭器	SH3	F-24	Ⅷ	191.246	360	5.7	2.4	1.0	16.3	
	207	U5	32	三稜尖頭器	SH3	F-24	Ⅷ	191.203	350	8.8	2.1	1.6	39.5	
	208	U5	32	三稜尖頭器	SH5	F-23	Ⅷ	190.763	2095	9.9	2.4	1.2	35.5	
	209	U5	32	スクレイパー	AN1	F-23	Ⅷ	191.016	2107	6.3	2.8	0.5	17	
71	210	U5	33	ナイフ形石器	SH1B	F-24	Ⅷ	191.695	263	2.8	1.8	0.6	3.25	
	211	U5	33	尖頭器	SH4	F-24	Ⅷ	191.763	280	4.8	2.3	1.3	15.0	
	212	U5	33	剥片尖頭器	AN2	F-24	Ⅷ	191.765	275	6.6	2.7	1.1	19.4	
	213	U5	33	スクレイパー	SA	F-24	Ⅷ	191.774	305	8.0	4.5	2.0	76.8	
	214	U5	33	スクレイパー	SH2	F-24	Ⅷ	191.484	368	7.5	2.1	0.8	18.3	
	215	U5	33	剥片	AN	F-24	Ⅷ	191.841	310	7.2	1.7	1	14.74	
	216	U5	33	石核	OB1	F-24	Ⅷ	192.044	268	2.5	2.1	0.9	7.93	
72	217	U5	34	ナイフ形石器	AN1	E-24	Ⅷ	191.247	115	4.6	2.8	0.9	12.34	
	218	U5		ナイフ形石器	OB2	F-24	Ⅷ	191.270	222	2.6	1.5	0.9	2.08	
	219	U5		剥片尖頭器	AN2	F-23	Ⅷ	190.268	13	4.9	2.6	1.0	9.2	
	220	U5		スクレイパー	OB2	G-25	Ⅷ	192.488	58	3	2.3	0.8	4.41	
	221	U5		使用痕剥片	SH2	F-23	Ⅷ	190.755	2104	4.1	5.1	1.7	24.85	
	222	U5		敲石	KA	F-24	Ⅷ	191.275	345	7.6	4.2	2.7	128.2	
74	223			台形様石器	OB1	D-28	Ⅷ	191.660	275	3.3	2.2	0.8	4.83	
	224			台形石器	OB2	C-26	Ⅷ	190.446	50	3.3	2.3	0.9	5.6	
	225			三稜尖頭器	OB2	E-28	Ⅷ	193.953	817	2.3	1.9	1.5	6.2	

第Ⅵ章　第Ⅲ文化層の調査

第１節　概要

旧石器時代第Ⅲ文化層は，Ⅶａ～Ⅶｂ層から出土した石器群であり，その主体はⅦｂ層である。出土した石器は中型～小型の三稜尖頭器と小型ナイフ形石器及び台形石器などが特徴である。

遺構として礫群が検出された。礫群は，Ⅶａ層下面～Ⅶｂ層上面で検出され，Ａ地区で３基，Ｂ地区で６基みられた。また，３号礫群と４号礫群の礫が１個体のみ接合している。出土遺物の集中域であるブロックは，Ａ地区で９ヶ所，Ｂ地区で６ヶ所みられ，それぞれ１～９ブロック，10～15ブロックとした。

第２節　遺構

１．礫群

２号礫群

Ｆ－17区Ⅶａ層下面で検出された。径４×４ｍの範囲にやや散在して広がる礫と，それから北方に１ｍほど離れた２個の礫からなる。ほとんどのものが熱を受けた安山岩の扁平な角礫で，径10～20㎝のものが多い。重量は，１kg以上のものが多く，次いで20～100ｇのものが多い。また，総数は72個で11個体の接合がみられ，接合後の総数は51個となった。

３号礫群

Ｆ－17区Ⅶａ層で検出された。礫が密に集中する部分と，近接するやや散在した礫から構成される。密に集中する部分は径約1m，全体では径約3×2mの範囲に分布している。大半のものが熱を受けた安山岩の角礫で，径60㎝程の礫も含むが，径10～20㎝のものが多い。礫総数は160個で，16個体の接合がみられた。また，そのうち１個は４号礫群と接合している。接合後の個体数は131個となった。

４号礫群

Ｆ－17区Ⅷ層で検出された。径70×50㎝の大きさである。ほとんどのものが熱を受けた安山岩の角礫で，総数は31個である。４個体が接合しており，そのうち１個が3号礫群と接合している。

５号礫群

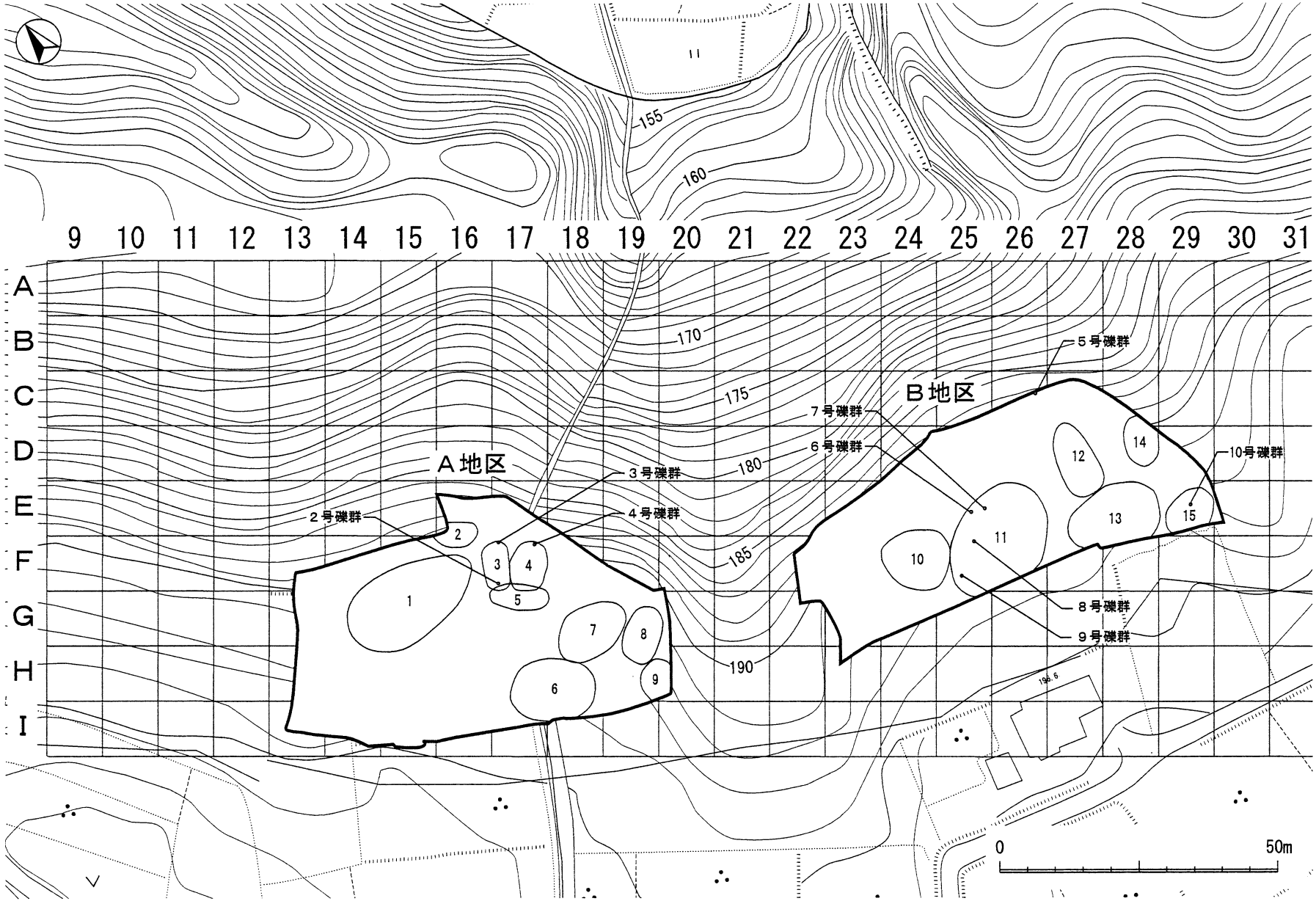
Ｃ－26区Ⅶｂ層上面で検出された。北東方向の傾斜に沿って形成されている。径1.8×１ｍの大きさで，安山岩を主体とする。礫は径10㎝弱のものがほとんどで，大半のものは熱を受けている。礫総数は45個で，２個体が接合している。重量は101～200ｇのものが半数近くを占める。

６号礫群

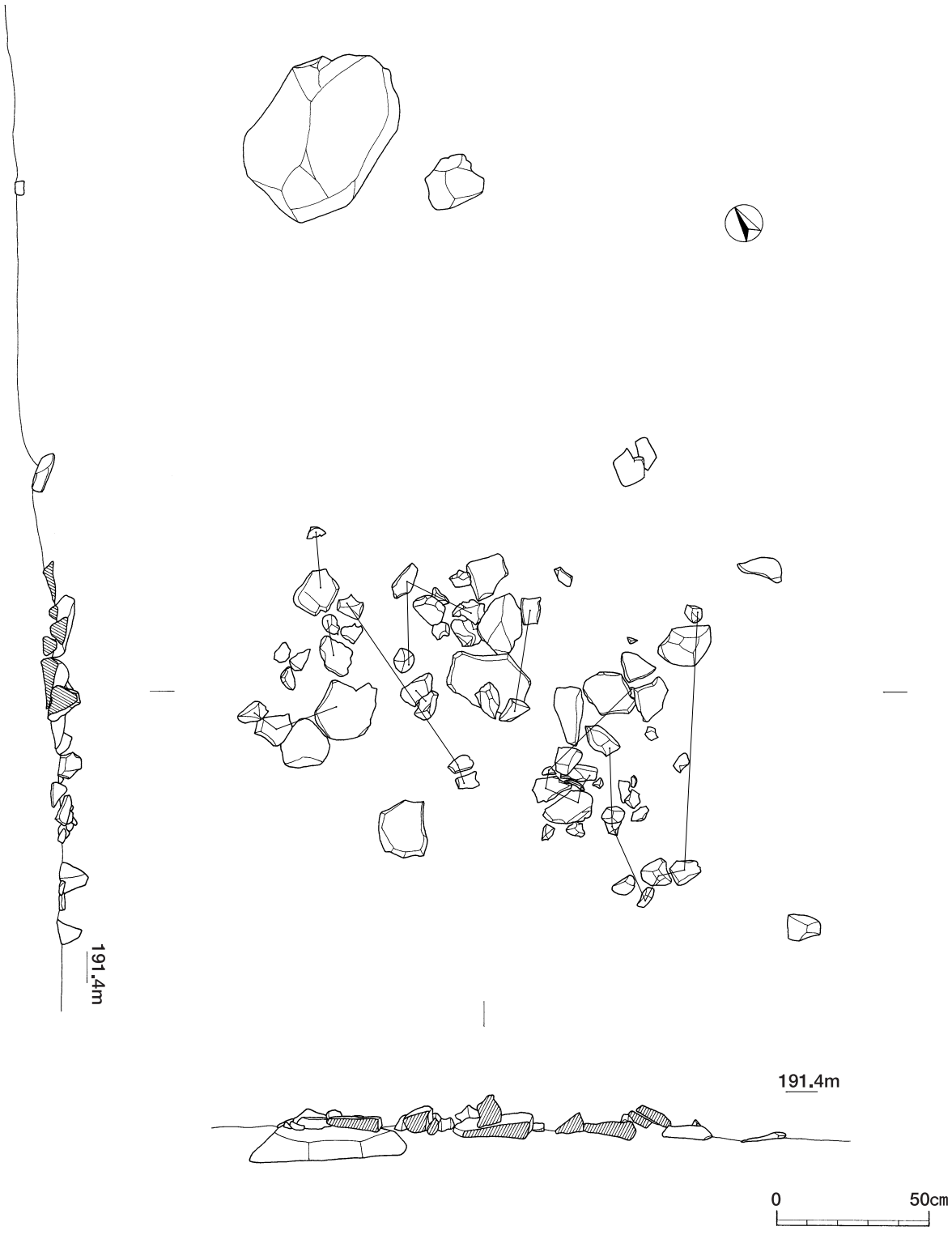
Ｅ－25区Ⅶａ層で検出された。北方に向かってやや傾斜している。径１×0.5ｍの範囲にまとまっており，安山岩角礫を主体とし，一部凝灰岩がみられる。熱を受けたものが大半である。掘り込みはみられない。礫総数は20個で，４個体が接合している。

７号礫群

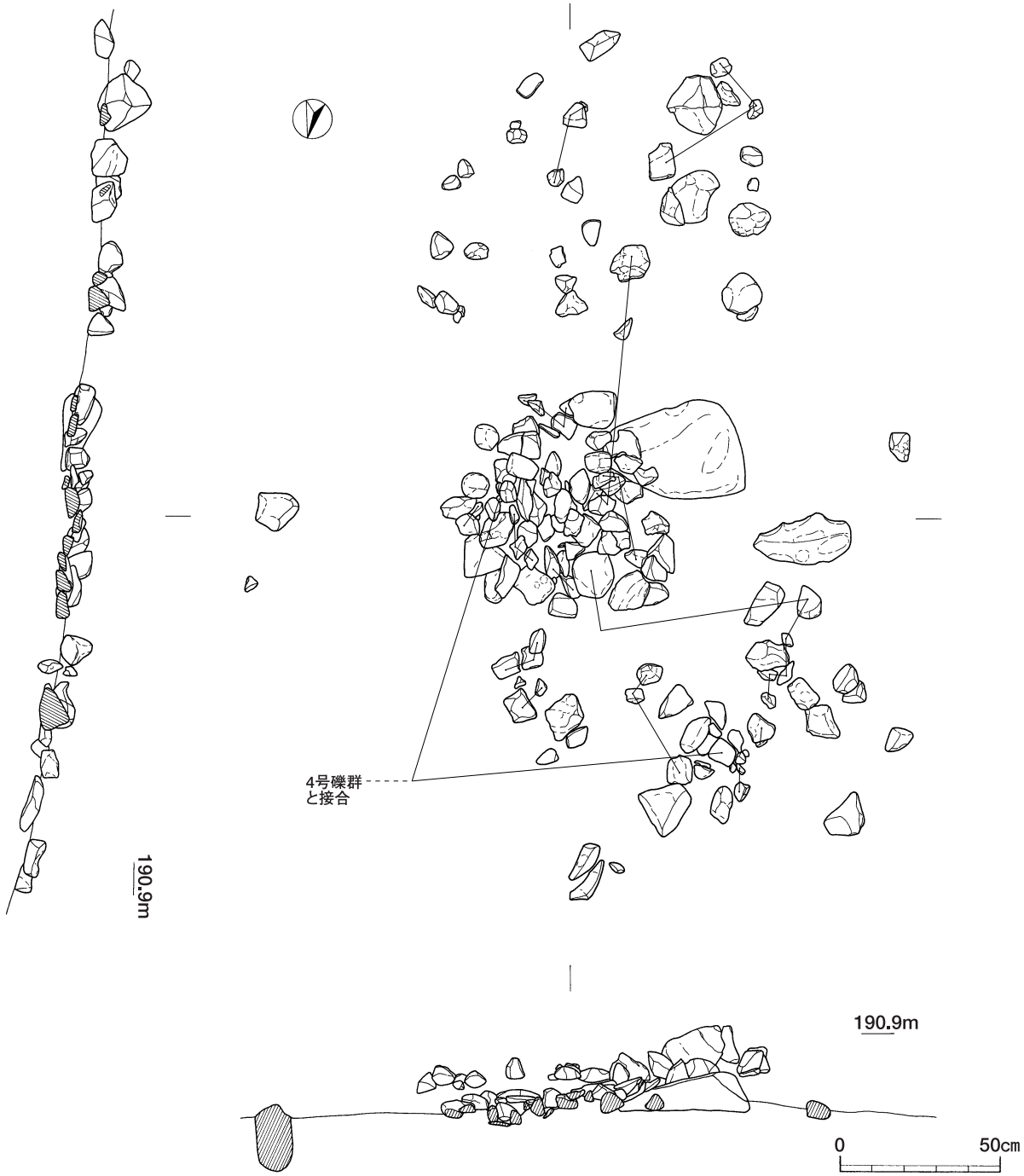
Ｅ－25区Ⅶａ層で検出された。径1.6×1.3ｍの範囲に散在した礫群であるが，中心部にはややまとまりをもつ。安山岩の角礫を主体とし，熱を受けたあとがあるが掘り込みはみられない。北方に向かって緩やかに傾斜している。礫総数は23個で，重量は51～150ｇのものが主体を占める。



第75図　第Ⅲ文化層のブロックと礫群位置図



第76図　第Ⅲ文化層２号礫群



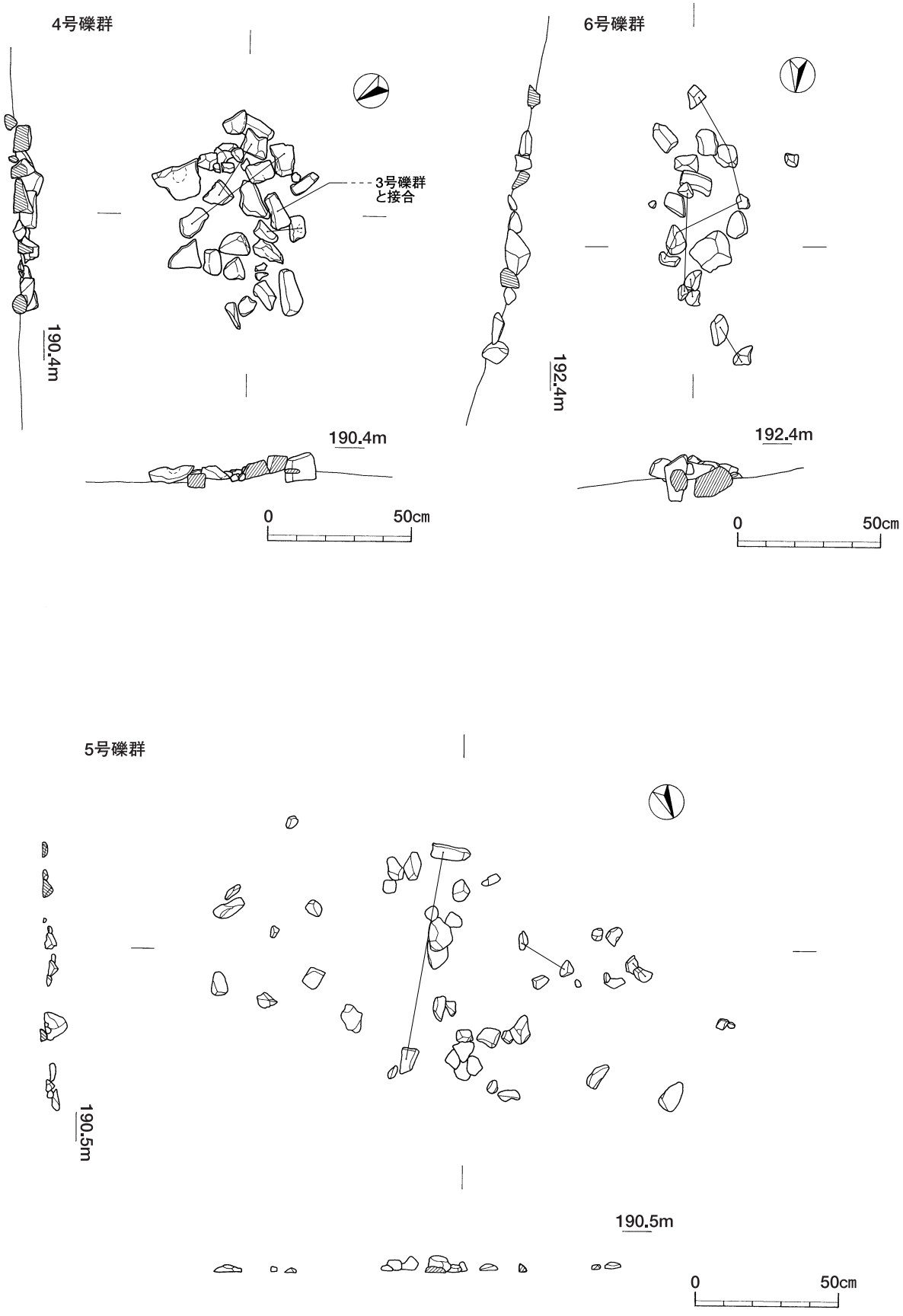
第77図　第Ⅲ文化層 3 号礫群

8 号礫群

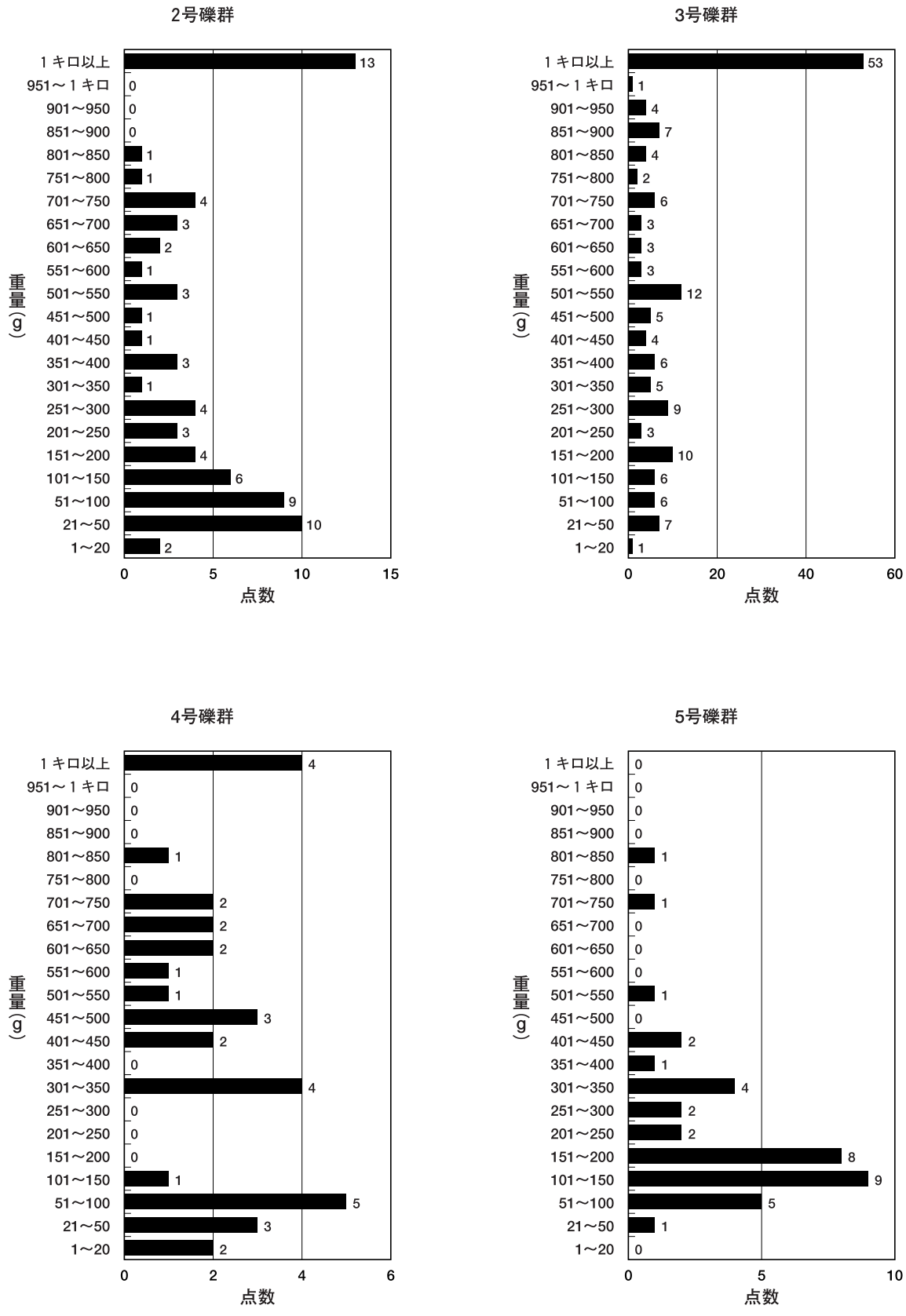
Ｆ－25区Ⅶｂ層上面で検出された礫群である。径0.9×0.6ｍの大きさである。礫総数は22個で，5 個体が接合しており，そのほとんどが熱を受けている。

9 号礫群

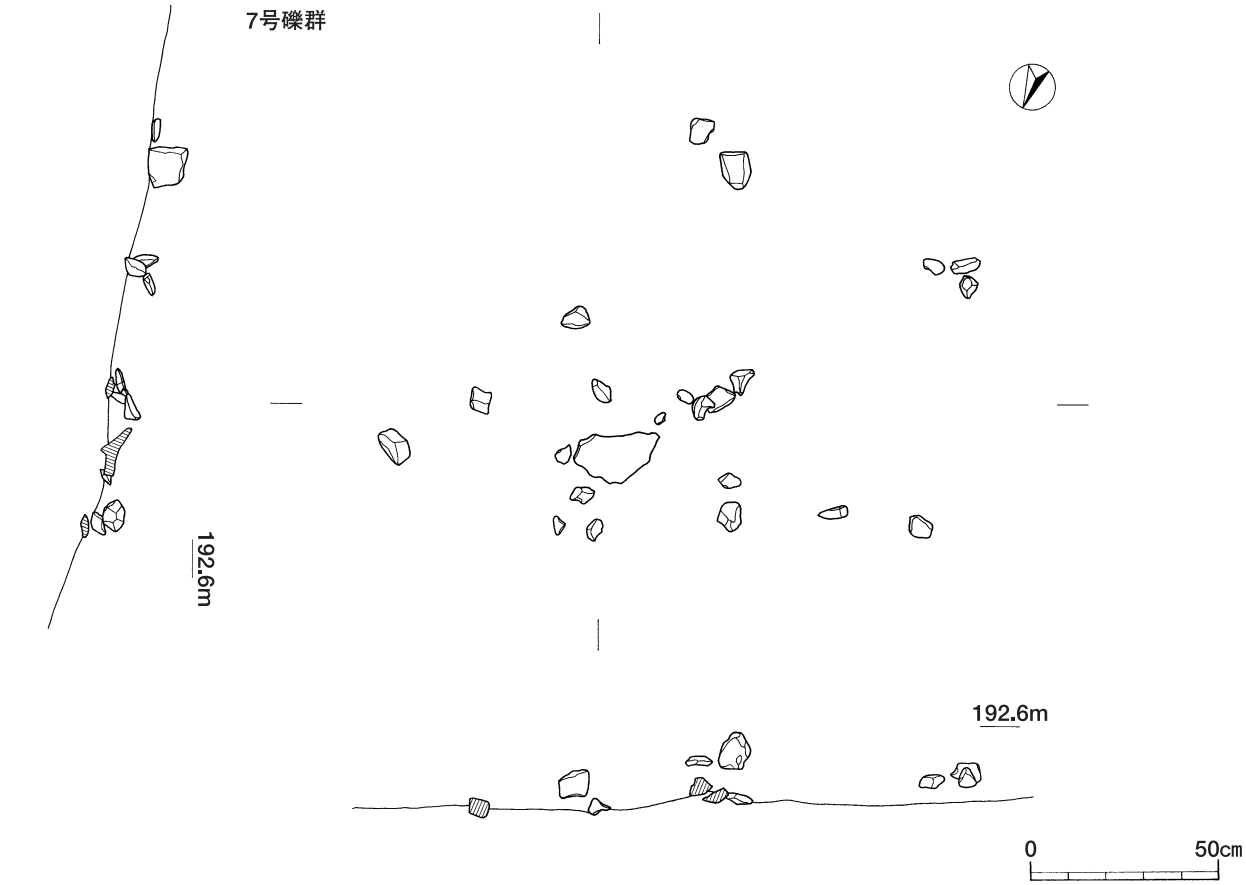
Ｆ－25区Ⅶａ層下面で検出された礫群である。径 3 ×2.3ｍの範囲に広がり，中央部にはややまとまりをもち，北方に向かってやや散在している。径10㎝未満の角礫と，径20㎝前後のやや大きい角礫が混在する。安山岩と凝灰岩がみられ，熱を受けた礫が多くみられる。重量は，51～150ｇが

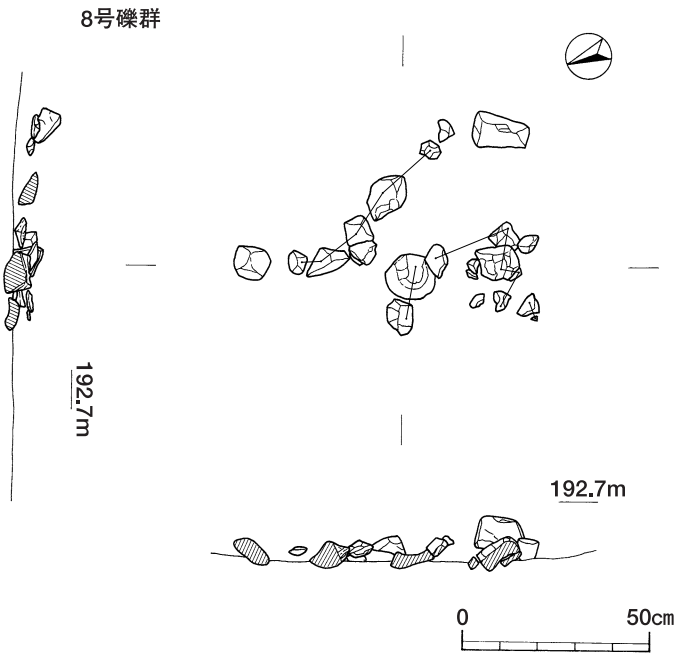


第78図　第Ⅲ文化層 4 ～ 6 号礫群

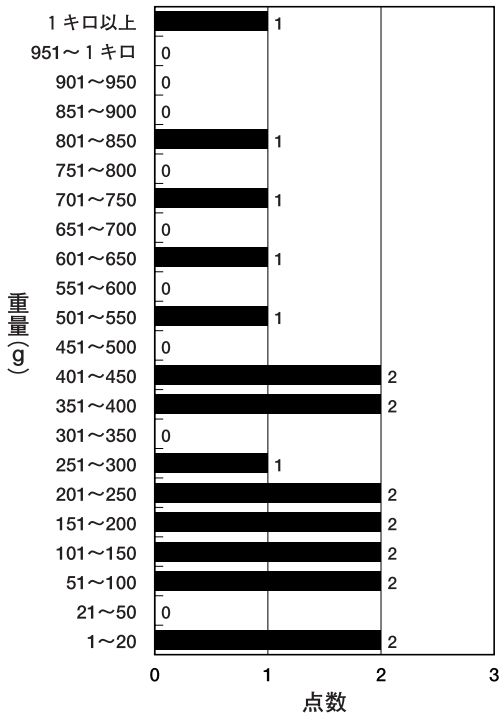


第79図　第Ⅲ文化層２～５号礫群重量別分布図

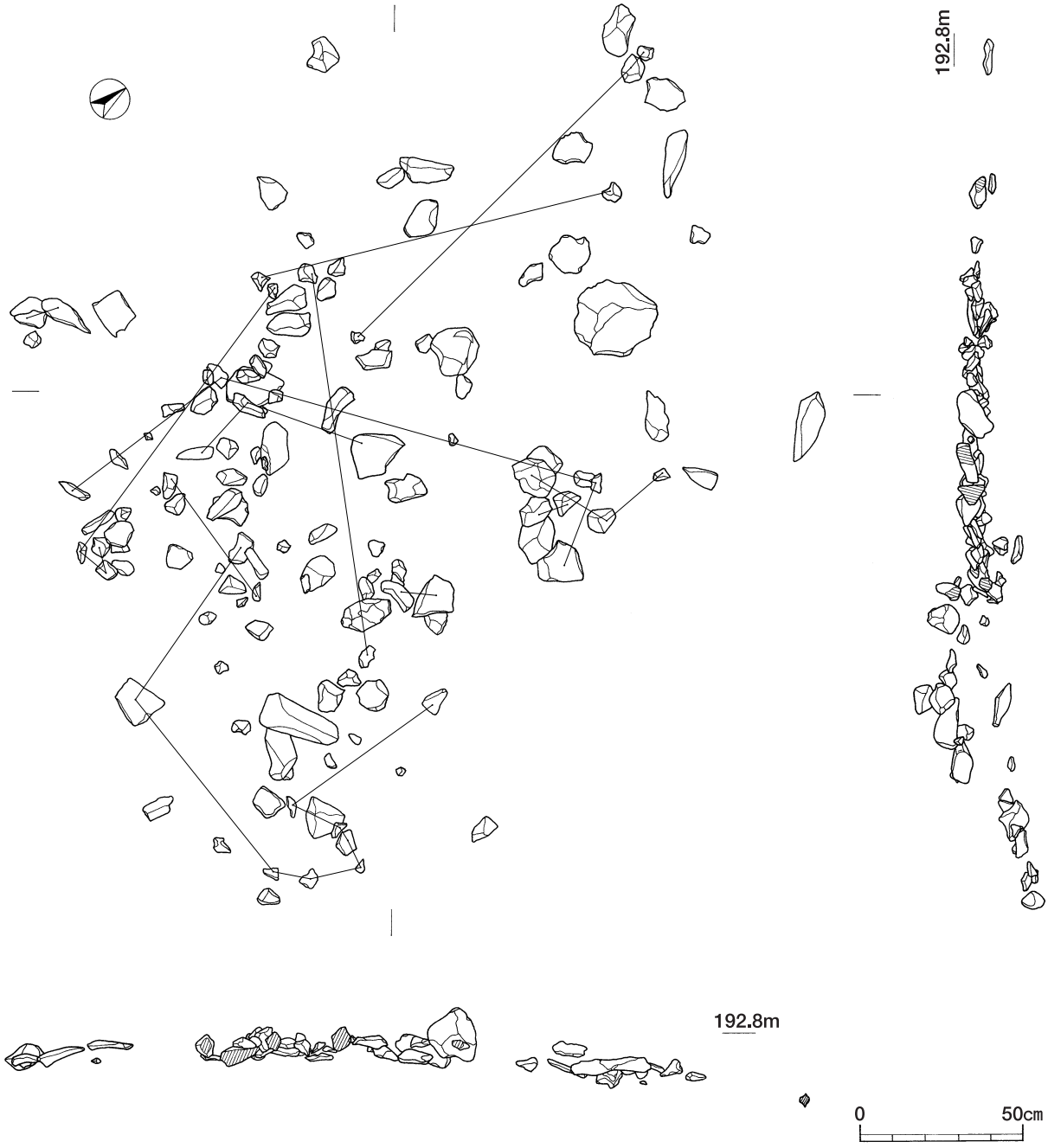




第80図　第Ⅲ文化層 7 ・ 8 号礫群



第81図　第Ⅲ文化層 6 号礫群重量別分布図

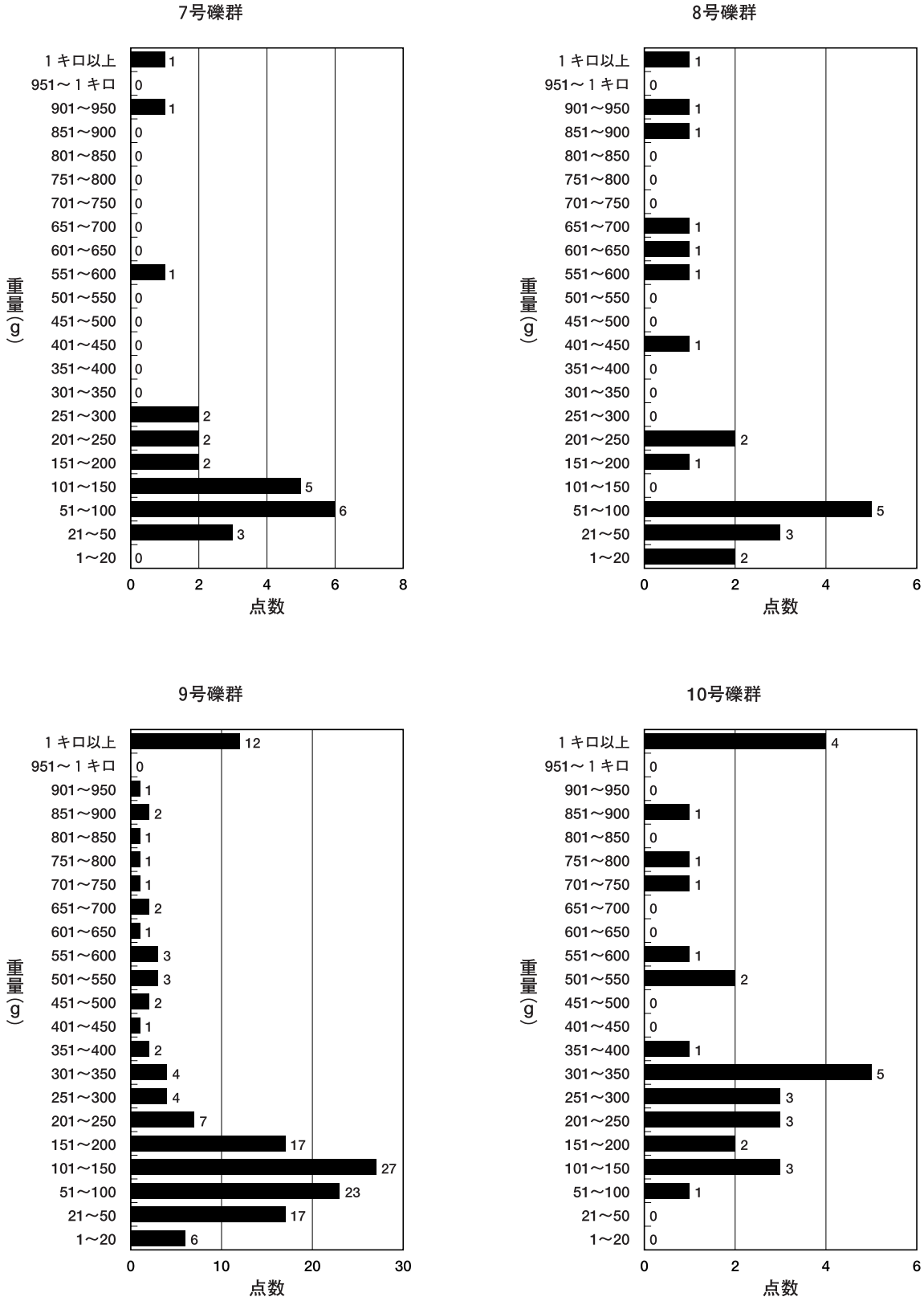


第82図　第Ⅲ文化層９号礫群

半数近くを占める。黒曜石のチップが数点出土している。礫総数は137個で，そのうち15個体が接合している。

10号礫群

Ｂ地区最東端のＥ－29区Ⅶｂ層上面で検出された礫群である。これより約東へ５ｍで谷となる。径1.8×1.6ｍの大きさで，径10～20㎝の安山岩角礫を主体とする。熱を受けたものが半数ほどみられる。西から東へ傾斜に沿って検出されている。また，礫総数は28個，そのうち２個体が接合している。



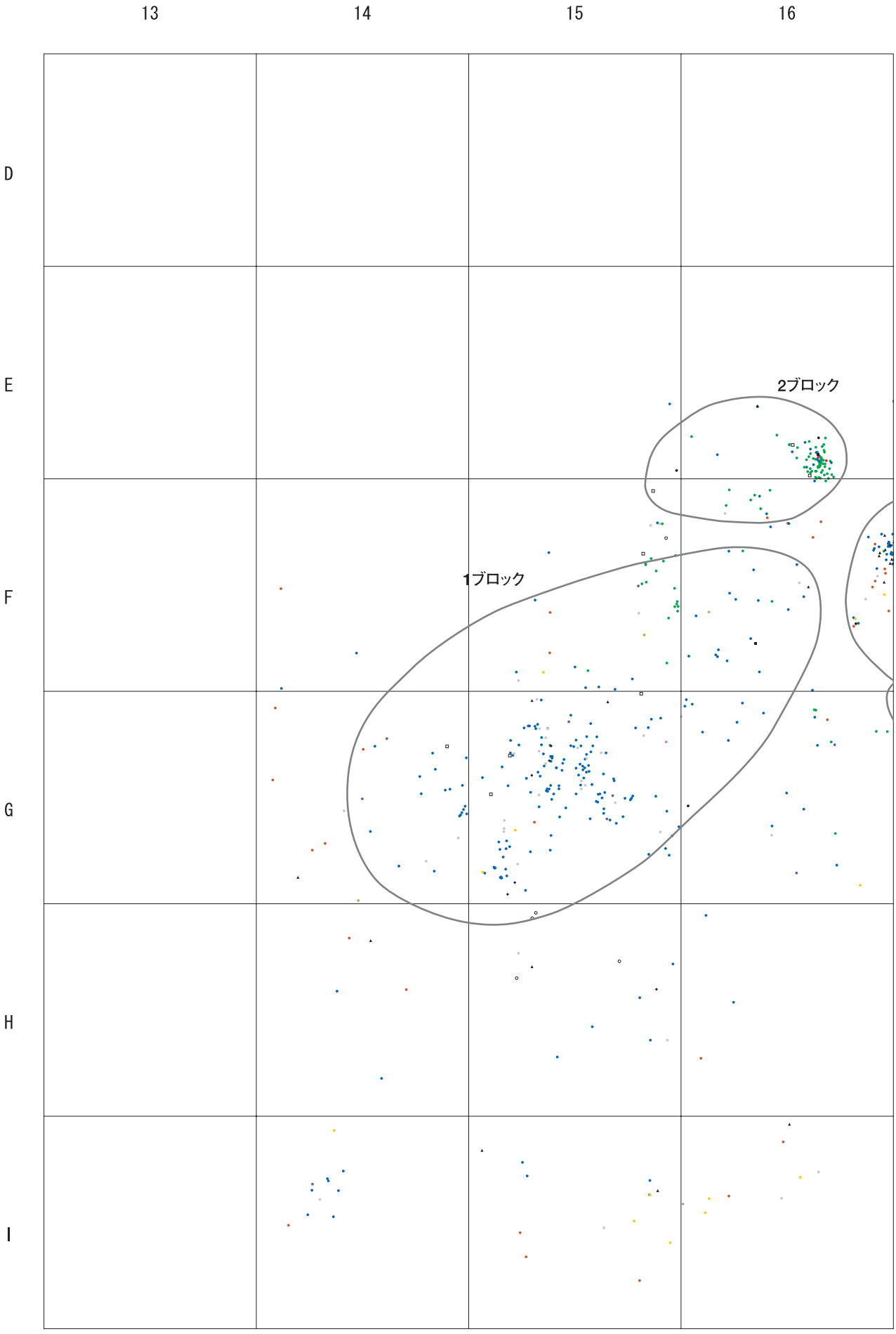
第83図　第Ⅲ文化層７～10号礫群重量別分布図

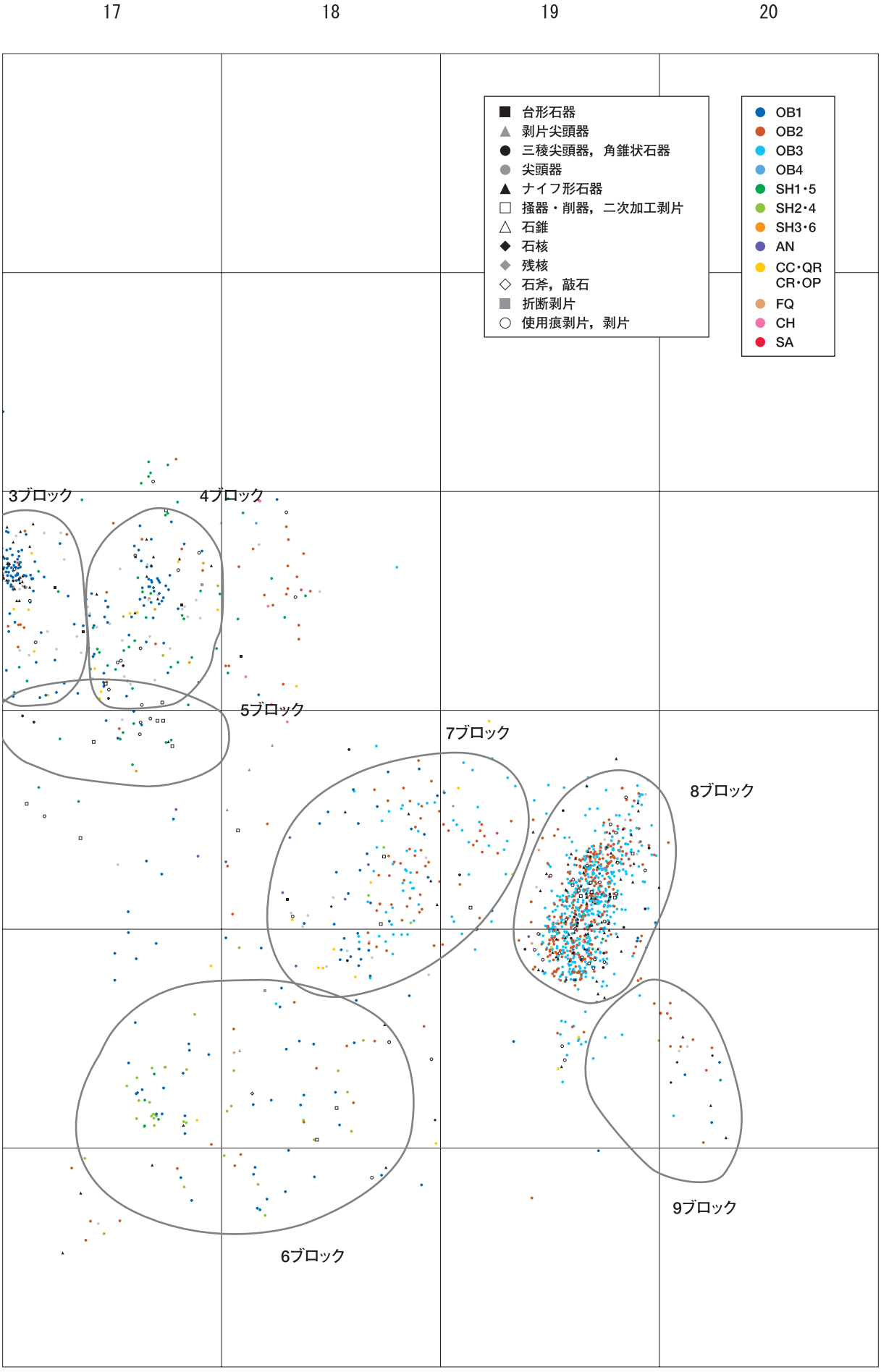
第84図　第Ⅲ文化層10号礫群

2．ブロックとその認定

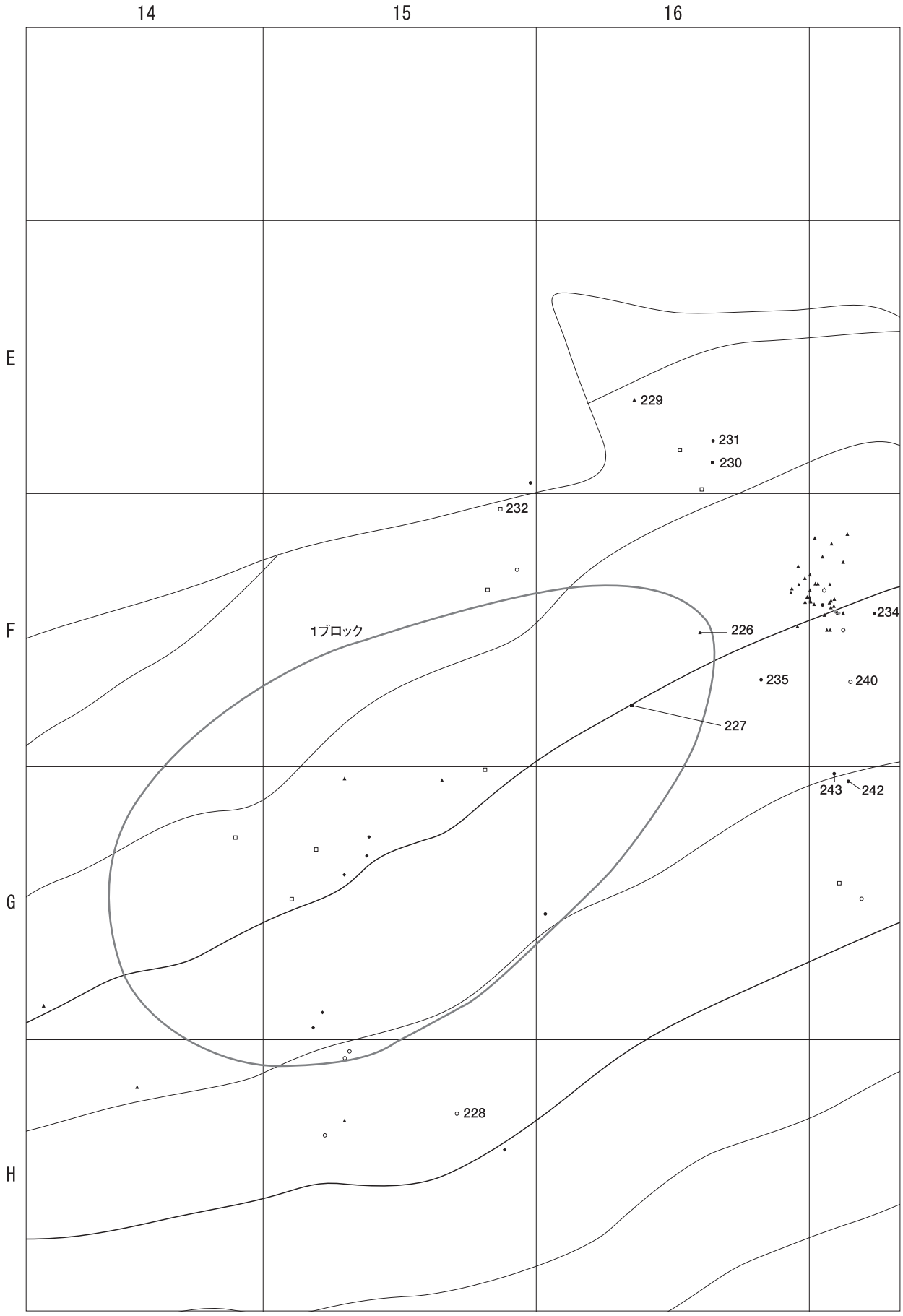
ブロック認定については，第Ⅳ章第１節で触れたように，出土遺物の層位的分布と石材別出土分布を考慮して行った。第Ⅲ層文化層は，調査中及び調査直後における文化層の認識としての，Ⅶａ～Ⅶｂ層：小型ナイフと小型台形石器の文化層，そしてⅦｂ層：小型三稜尖頭器の文化層を含むものである。Ⅶａ層の細石刃文化石器群を第Ⅳ文化層とすることから，この第Ⅲ文化層は基本的にⅦｂ層を主体とするものである。ただし，遺物の上下移動や，ブロック中心部の遺物量の多さからくる浮き上がりや沈み込みなど，あるいは調査中の層の認識が十分に行われていたかなどを十分に検討する必要があるため，ここではⅦａ層で取り上げた遺物とⅦｂ層として取り上げた遺物の，それぞれの石材と石器器種の慎重な検討を行い，Ⅶｂ層を中心とする石器群として第Ⅲ文化層のブロックを認識した。

以上のような検討の結果，Ａ地区で９ヶ所，Ｂ地区で６ヶ所の石器集中ブロックを識別し，各々１～９ブロックと，10～15ブロックとした。

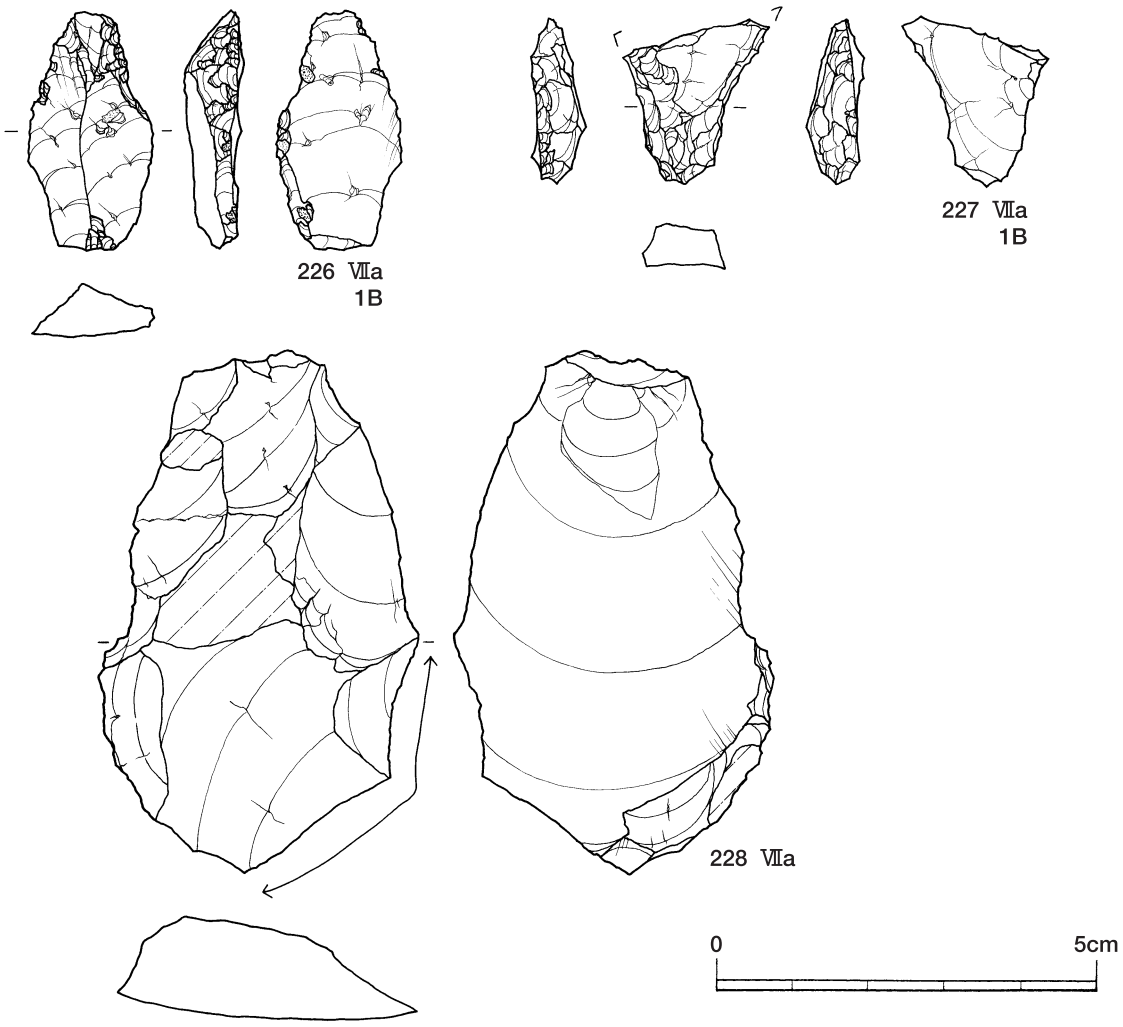

13
14
15
16
D
E
F
G
H
I
2ブロック
1ブロック



第85図　第Ⅲ文化層Ａ地区遺物出土分布図



第86図　第Ⅲ文化層１ブロック石器群出土分布図



第87図　第Ⅲ文化層１ブロック，１ブロック周辺出土石器

第３節　第Ⅲ文化層Ａ地区の石器群

１ブロック（第87図226・227）

Ｆ・Ｇ－14～16区で東西方向に分布する径約13×24mのブロックである。石材はＯＢ１を主体とし，ＳＨ，ＡＮ，ＯＢ２，ＣＨなどから構成される。

ナイフ形石器　226は縦長剥片を素材とする部分加工ナイフ形石器である。右側縁の上半部にブランティングが施されており，左側縁には使用痕が認められる。基部を欠損する。

台形石器　227は上牛鼻産黒曜石を利用し，両側縁には急角度のブランティングを施している。

ブロック外（第87図228）

使用痕剥片　228はブロック外のＨ－15区から出土した使用痕剥片である。縦長剥片を素材とし，鋭い剥片端部には使用痕が確認できる。石材は玉髄系である。

２ブロック（第90図229～232）

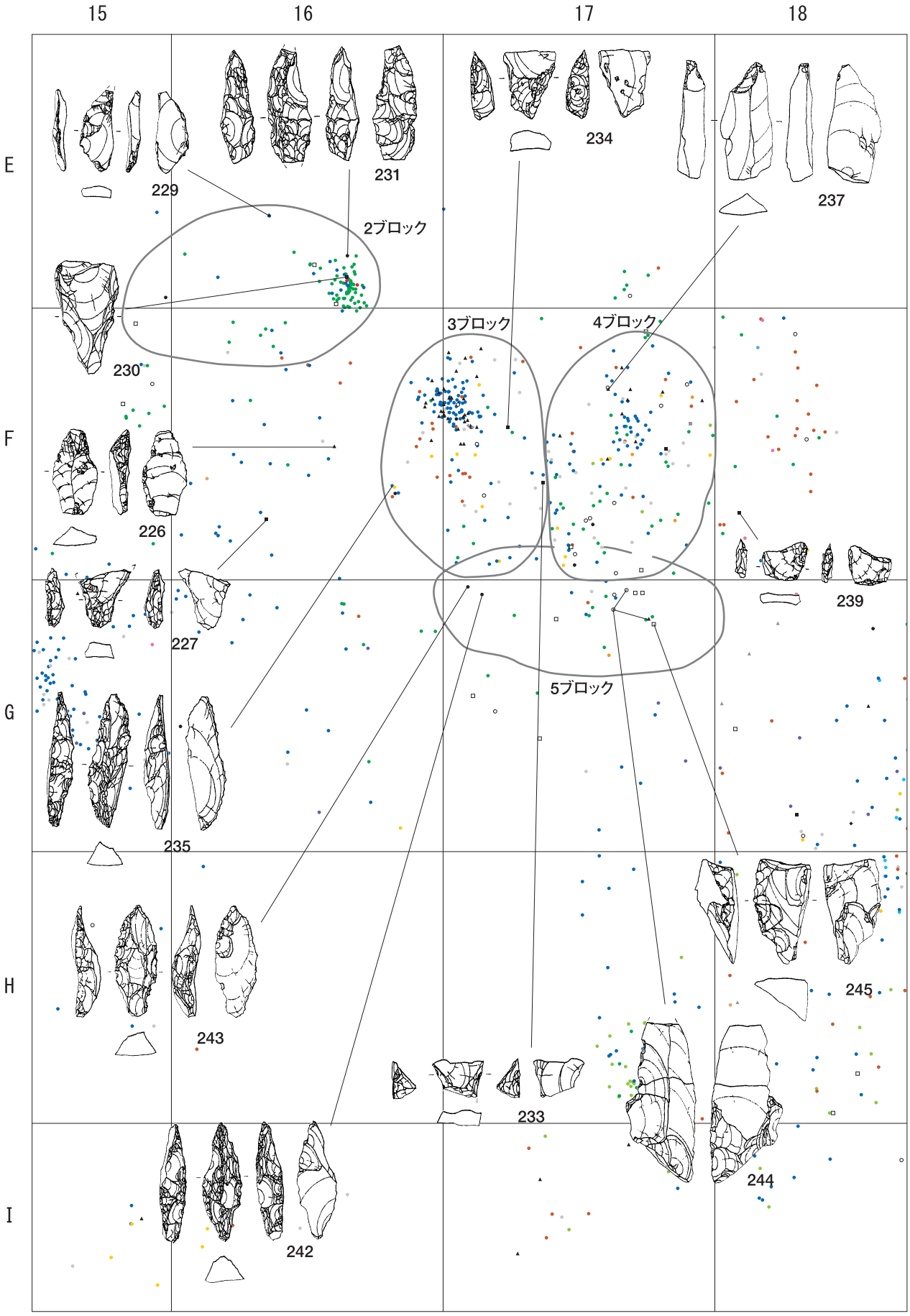
Ｅ・Ｆ－15・16区にわたり，北西～南東方向に分布する径約８×５ｍの大きさのブロックである。

ＳＨを主体とし，Ｅ－16区に径約２×1.5mの範囲に集中域がある。その他，ＯＢ１が少数分布する。
ナイフ形石器　229は基部を加工したナイフ形石器である。素材の横長剥片は，底面に平坦な剥離面が残存し，先端部はわずかに欠損している。ブランティングチップを利用した可能性が高い。
台形石器　230は大型の台形石器で，石材はＳＨ１である。両側縁には粗い二次加工を施して基部を整形し，その後，左側縁に丁寧なブランティングが施されている。
三稜尖頭器　231は基部両側面に腹面からの二次加工と，稜上加工により形が整えられている。先端部は腹面に平坦剥離が施され整形されている。上下とも端部が欠損している。
掻器　232はＳＨ１の板状剥片が使用され，粗い二次加工により鋸歯状の刃部がつくられている。

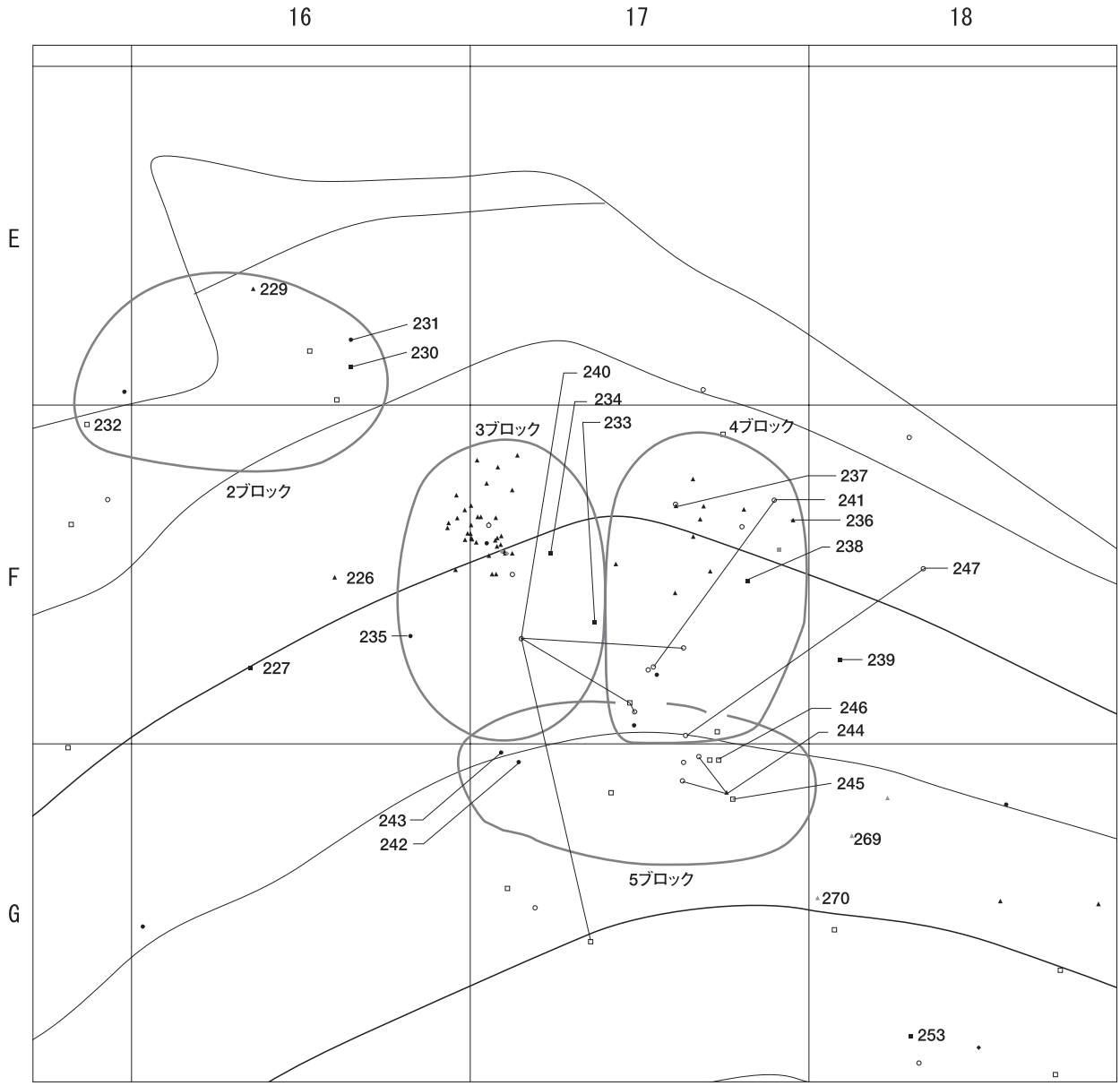
３ブロック（第90図233～235）
Ｆ－16・17区にわたる径９×５ｍの範囲に分布するブロックである。径約2.5×２ｍの範囲にＯＢ１を主体とする集中域がある。その他，ＯＢ２，ＣＣ，ＳＨなどの石材が分布する。
台形石器　233は基部が欠損した台形石器である。腹面から急角度のブランティングが施されている。234も類似する形態の台形石器である。左側縁は腹面から比較的粗いブランティングが施されている。右側縁は背面からブランティングが施されている。
三稜尖頭器　235は三稜尖頭器である。腹面は剥離面をそのまま残し，背面は腹面からの二次加工と稜上加工によって整形される。先端付近は細かい二次加工が施されている。

４ブロック（第91・92図236～241）
３ブロックの東に隣接し，Ｆ－17区に分布する径約９×７ｍのやや散在したブロックである。石材は，ＯＢ１を主体とする集中部があり，ＳＨ，ＣＣ，ＯＢ２が散在して分布している。
ナイフ形石器　236はやや厚みのあるＣＣの剥片を素材とした小型のナイフ形石器である。左側縁は基部から下半部にかけて二次加工が施され，右側縁は急角度の二次加工が腹面と背面から施されている。237はＣＣの縦長剥片を素材とする部分加工ナイフ形石器である。先端部にのみ二次加工が施されている。
台形石器　238は薄手の横長剥片を素材とする台形石器で，石材はＳＨ１である。両側縁に丁寧にブランティングが施されている。刃部には微細剥離痕がみられる。239は石材ＯＢ２を用いた台形石器である。左側縁には折断面が残り，右側縁には腹面からの急角度のブランティングを施す。
削器　240は幅広剥片を素材とした削器である。刃部形成の調整剥片が３点接合している。左側縁に２点，右側縁に１点接合しているが，全て腹面からの剥離である。
接合資料　241は上方から①と②を剥いだ後，90度回転させて③の一部を打ち欠き，さらに90度回転させて①と②を剥いだ方向と180度反対方向から③と④を剥片として剥いでいる。

５ブロック（第93図242～247）
Ｆ・Ｇ－17区にわたり径約５×10mの範囲に分布するブロックである。ＳＨ，ＯＢ１を主体とし，ＣＣ，ＯＢ２なども分布する。図化した６点の石材は全てＳＨ１である。
三稜尖頭器　242・243は三稜尖頭器である。242の先端は欠損している可能性もある。しかし，そ



第88図　第Ⅲ文化層２～５ブロック主要石器出土分布図



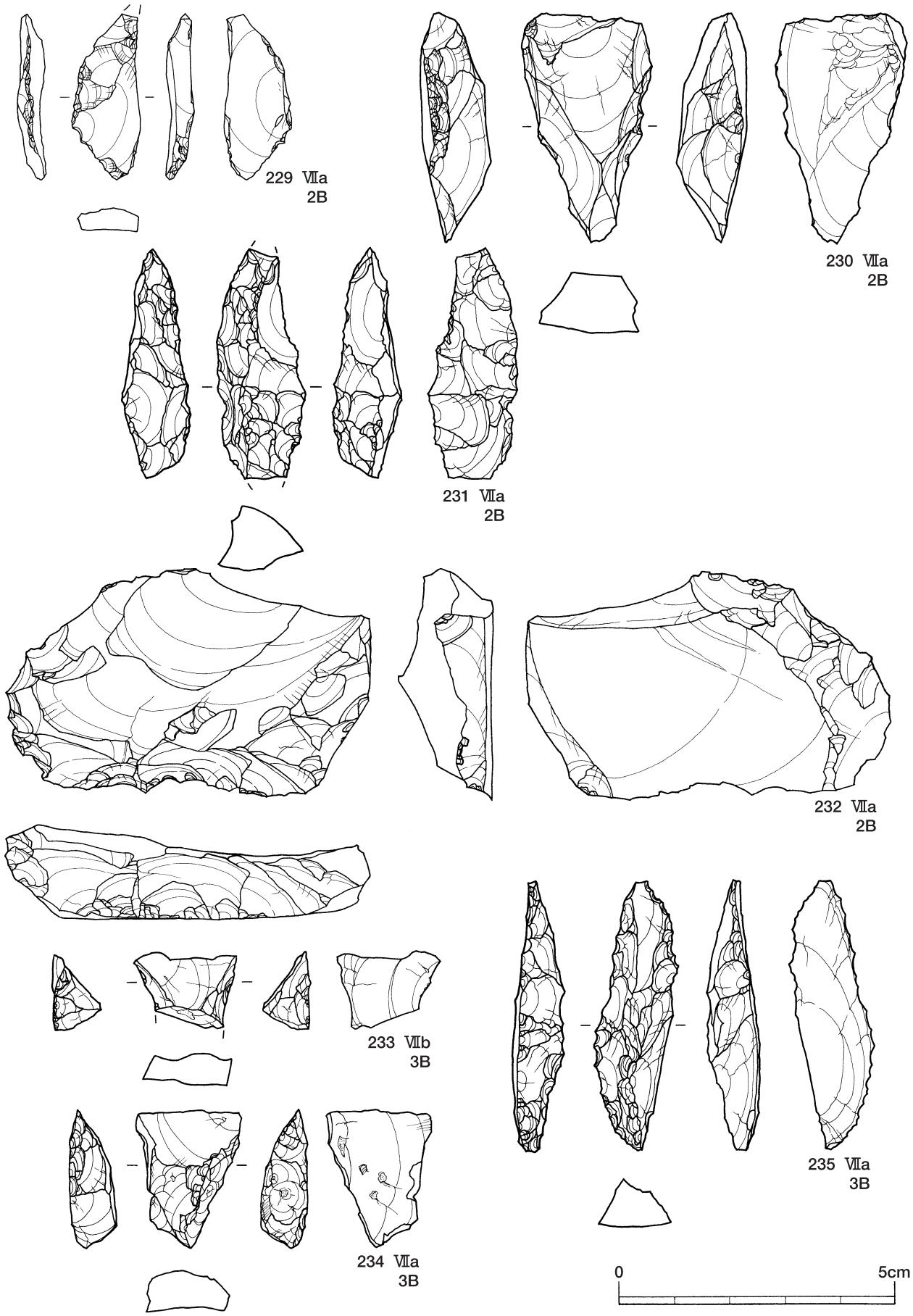
第89図　第Ⅲ文化層 2 ～ 5 ブロック石器群器種別出土分布図

の後わずかに調整している部分も認められる。243は腹面の打面バルブに平坦剥離が部分的に施され厚みを減じている。2 点とも腹面からの二次加工により整形され，稜上調整も施されているが，242は顕著に施されている。

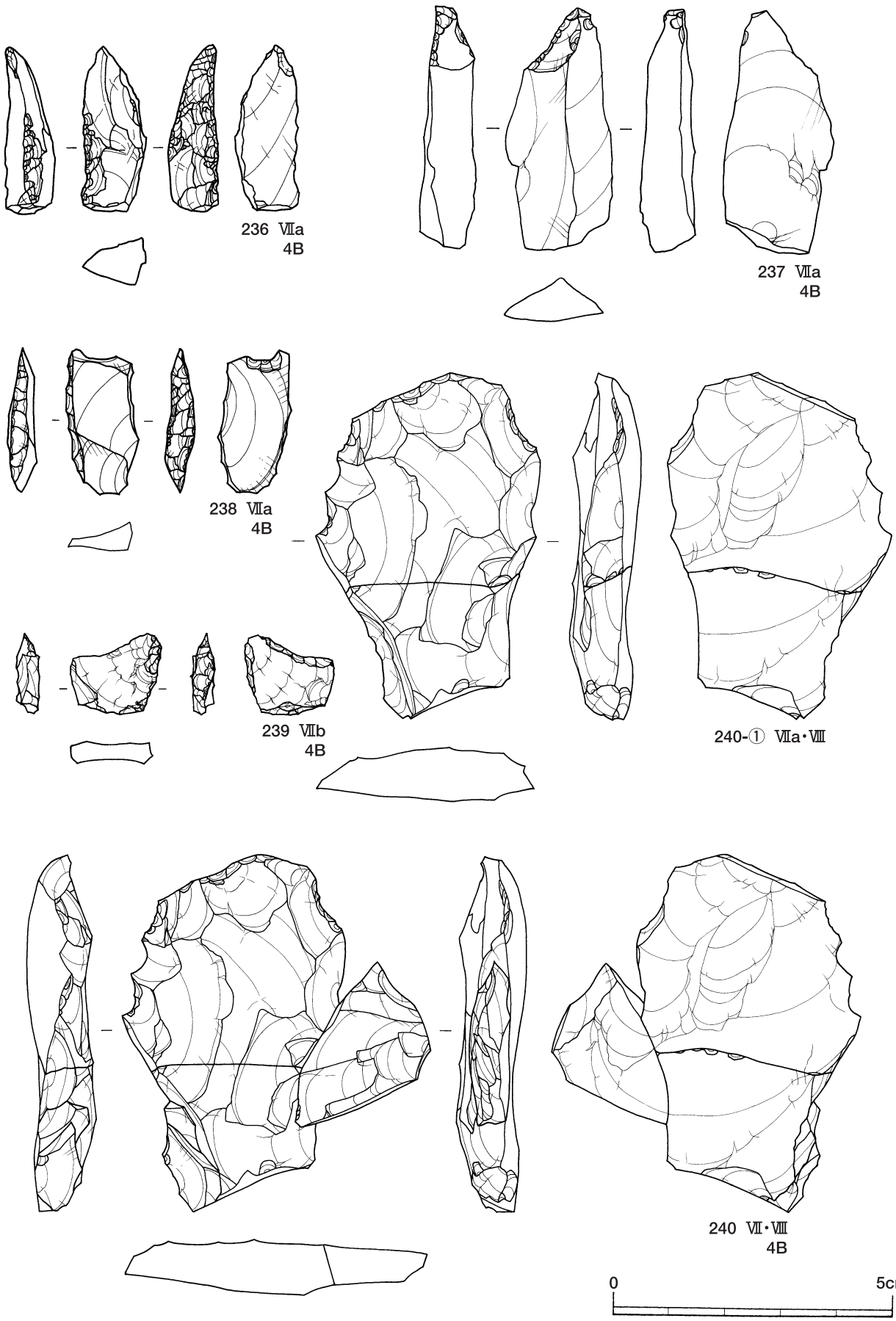
ナイフ形石器　244はナイフ形石器であり，左側面の調整剥片が接合している資料である。縦長剥片を素材としている。基部は腹面に二次加工が施されている。左側縁には使用痕が認められる。先端部が欠損している。

掻器　245は左側縁に二次加工が施されて刃部となっている。刃部形成の調整剥片が 2 点接合している資料である。246も掻器である。右側縁上部に調整剥片が接合している。左側縁に急角度の二次加工を施し，刃部としている。

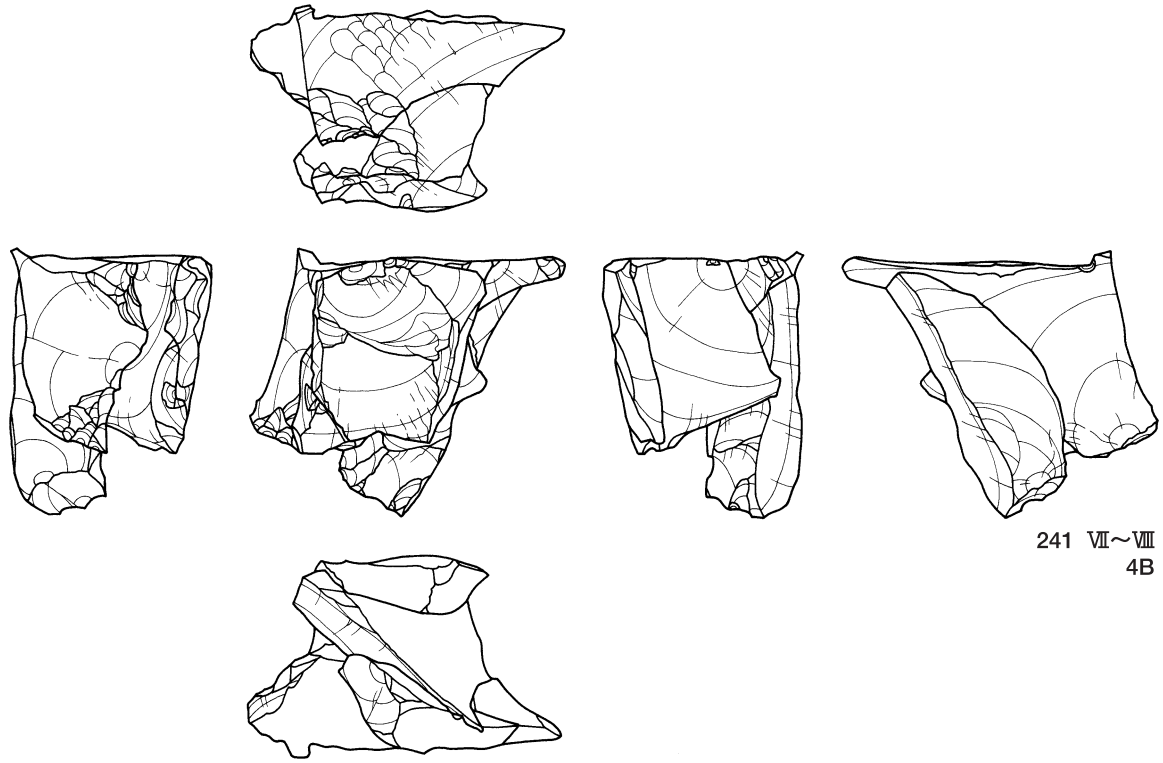
接合資料　247は 3 点の横長剥片の接合資料である。底面は平坦な剥離面を残し，剥ぎ取られた剥片はいわゆる瀬戸内技法の翼状剥片に類似するが，ブランティングチップの可能性も考えられる。

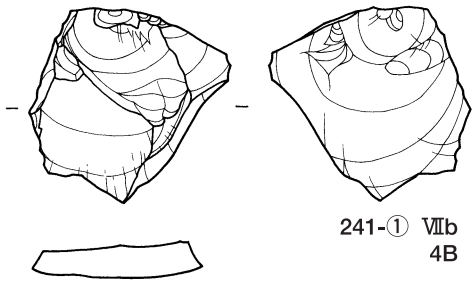


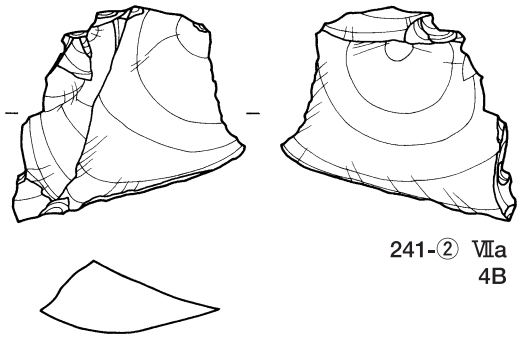
第90図　第Ⅲ文化層２・３ブロック出土石器

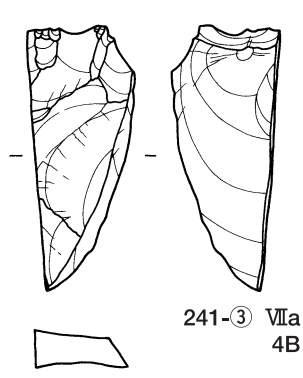


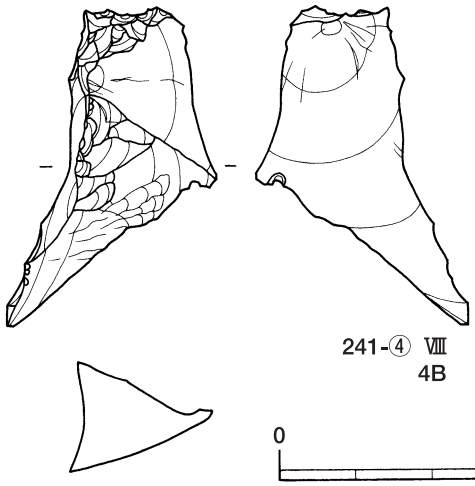
第91図　第Ⅲ文化層 4 ブロック出土石器（1）

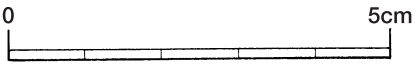




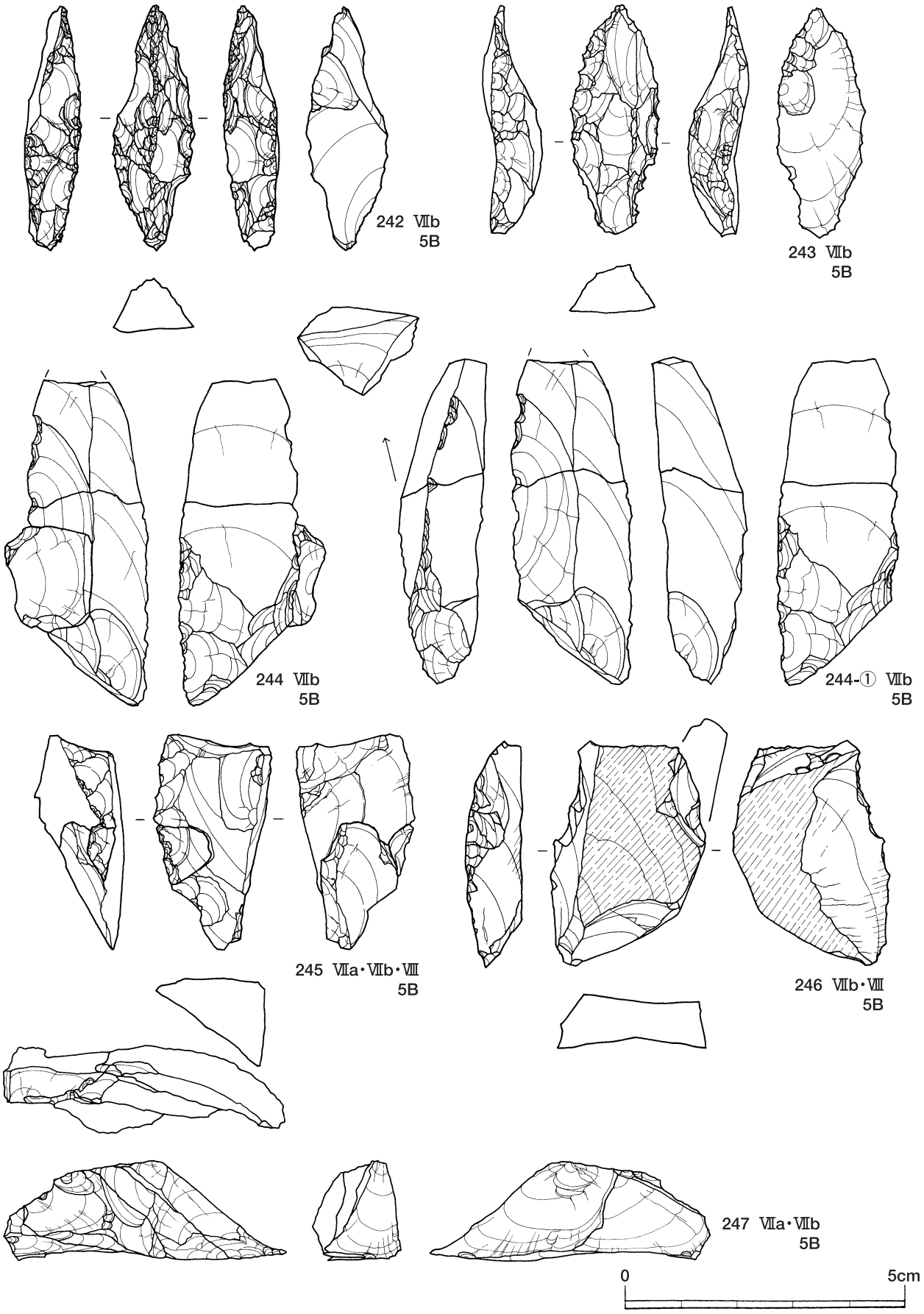




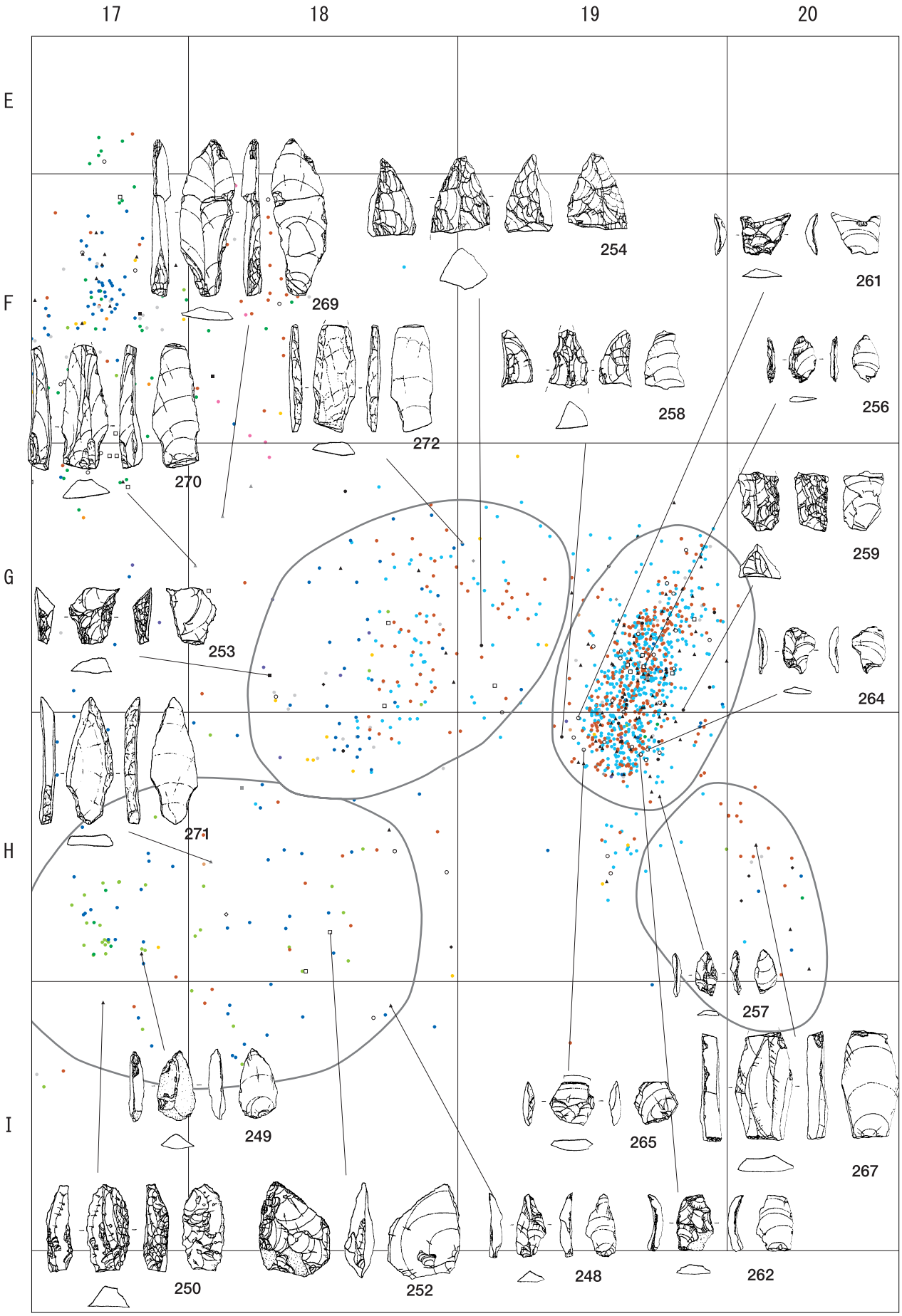




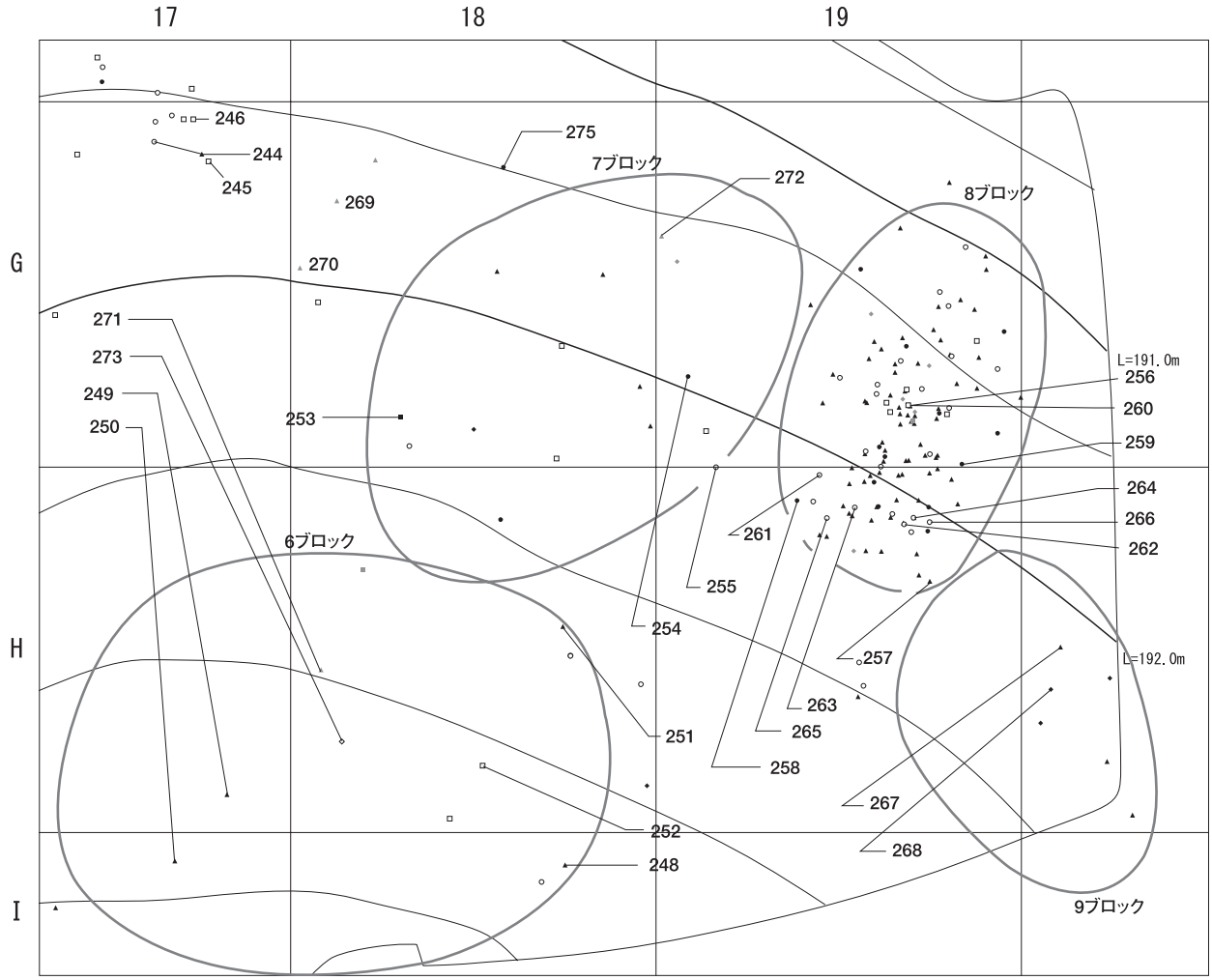
第92図　第Ⅲ文化層４ブロック出土石器（2）



第93図　第Ⅲ文化層5ブロック出土石器



第94図　第Ⅲ文化層 6 ～ 9 ブロック主要石器出土分布図



第95図　第Ⅲ文化層６～９ブロック石器群器種別出土分布図

６ブロック（第96・98図248～252・271・273）

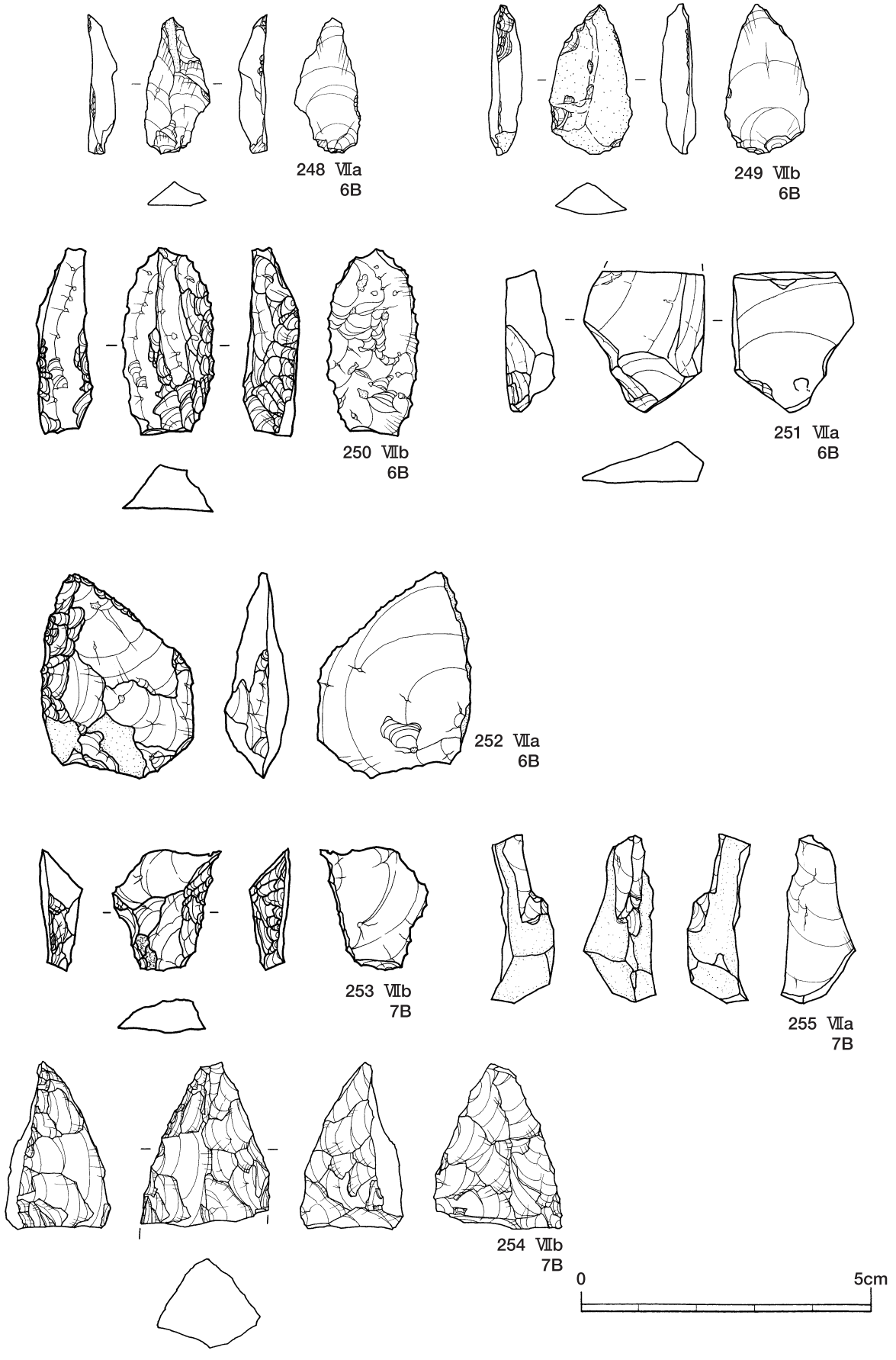
Ｈ・Ｉ－17・18区にわたり，径約11×15ｍの範囲に分布するやや散在したブロックである。ＳＨ・ＯＢ１のほか，ＯＢ２が分布する。

ナイフ形石器　248・249は小型ナイフである。２点とも玉髄系のいわゆるたんぱく石の縦長剥片を素材とする。248は打面を残置し，基部の一部と先端部にわずかなブランティングを施したものである。249も同様に打面を残し，基部と左側縁先端部に二次加工を施したものである。右側縁には使用痕が顕著に認められる。表面には自然面が残る。

250は横長剥片を素材とし，背面左側には剥片のポジ面が残っており，三船産黒曜石を利用した瀬戸内技法による典型的な国府型ナイフ形石器である。右側縁に丁寧なブランティングが施されている。左側縁には使用痕が確認できる。251は縦長剥片を素材とする砂岩製のナイフ形石器である。左側基部に二次加工が施される。上部は欠損している。

剥片尖頭器　第98図271は縦長剥片を素材とし，右側縁には二次加工が施されている。打面付近にノッチ状に基部加工が施されている。二次加工は基部まで及び，打面は残在していないため剥片尖頭器の定義からはずれるが，使用石材が剥片尖頭器特有のものを使用しており，打面欠損後転用した可能性も考えられるため，ここでは剥片尖頭器の範疇とした。

削器　252は横長剥片を用いた削器である。左側縁の平坦加工は剥片の頭部調整の可能性が高い。右側縁刃部には使用痕と思われる微細剥離が確認できる。



第96図　第Ⅲ文化層 6 ・ 7 ブロック出土石器

敲石　第98図273は砂岩製の敲石である。残存する長軸端部の両側面と左側縁側に約３㎝の範囲で敲打痕がみられる。表裏面に平坦な面があるが，明瞭な擦痕は確認できない。

７ブロック（第96・98図253～255・272）

Ｇ・Ｈ－18・19区の径約９×14ｍの範囲に分布する。ＯＢ１・ＯＢ２・ＯＢ３が分布する。

台形石器　253は幅広剥片を素材とし，両側縁に丁寧にブランティングが施される。

剥片尖頭器　第98図272は縦長剥片を素材とし，打面と先端部は欠損している。石材は砂岩で，風化が激しいが，基部加工も施されている。

三稜尖頭器　254はＡＮ１を素材とする三稜尖頭器である。下部は欠損している。腹面からの二次加工により整形され，また腹面にも平坦剥離が施されており，断面形状は，やや菱形になっている。いわゆる三面加工尖頭器である。

二次加工剥片　255は自然面が多い剥片である。剥片末端には二次加工があり使用痕も認められる。

８ブロック（第97図256～266）

Ｇ・Ｈ－19区にまたがり，径約６×11ｍの範囲に分布するブロックである。ＯＢ２とＯＢ３を主体とし，ＯＢ１・ＣＣ・ＣＨが少数分布する。第Ⅳ文化層２ブロックとほぼ重なっており，分離することは困難であったが，第Ⅲ文化層の遺物のみここで取り上げる。

ナイフ形石器　256・257は小型ナイフ形石器で，石材はＯＢ３である。縦長剥片を素材としている。256は基部付近と先端部に細かい二次加工が施される。257は素材の打面部を先端側に設定している。左側縁の腹面には先端まで微細剥離が観察できる。

三稜尖頭器　258・259は幅広剥片もしくは縦長剥片状の素材を利用した三稜尖頭器である。258は下半部とわずかに先端部が欠損している。腹面からの二次加工により整形されている。259は先端部が欠損している。258と同様に腹面からの二次加工により整形されている。両者は左側面が粗い加工で，右側面は丁寧な加工が施されており，接合しないが石材的にも同じであり，同一石器の可能性も考えられる。

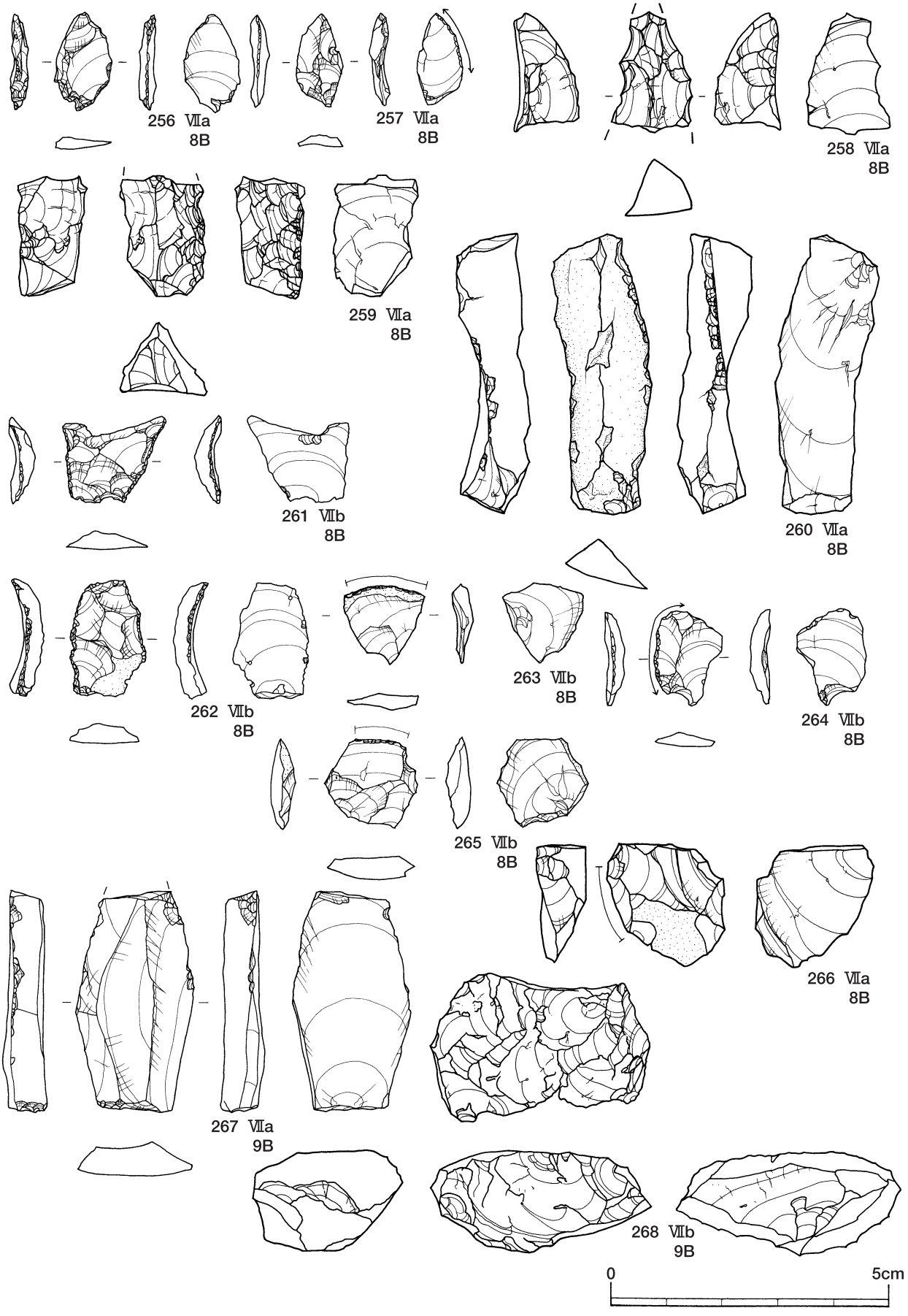
スクレイパー　260は良質な縦長剥片を素材とし，両側縁に連続した二次加工が施されたスクレイパーである。

使用痕剥片　261～266は２・３㎝の小さな剥片を素材とし，側縁に使用痕と考えられる連続した微細な剥離痕がみられる剥片類である。261は不定形剥片を素材とし，両側縁に細かい使用痕が確認される。262は素材の打面部分以外の周縁に細かい使用痕が確認できる。264・266は一側縁に使用痕が確認できる。また，263・265は鋭い剥片の先端部に使用痕が確認できる。

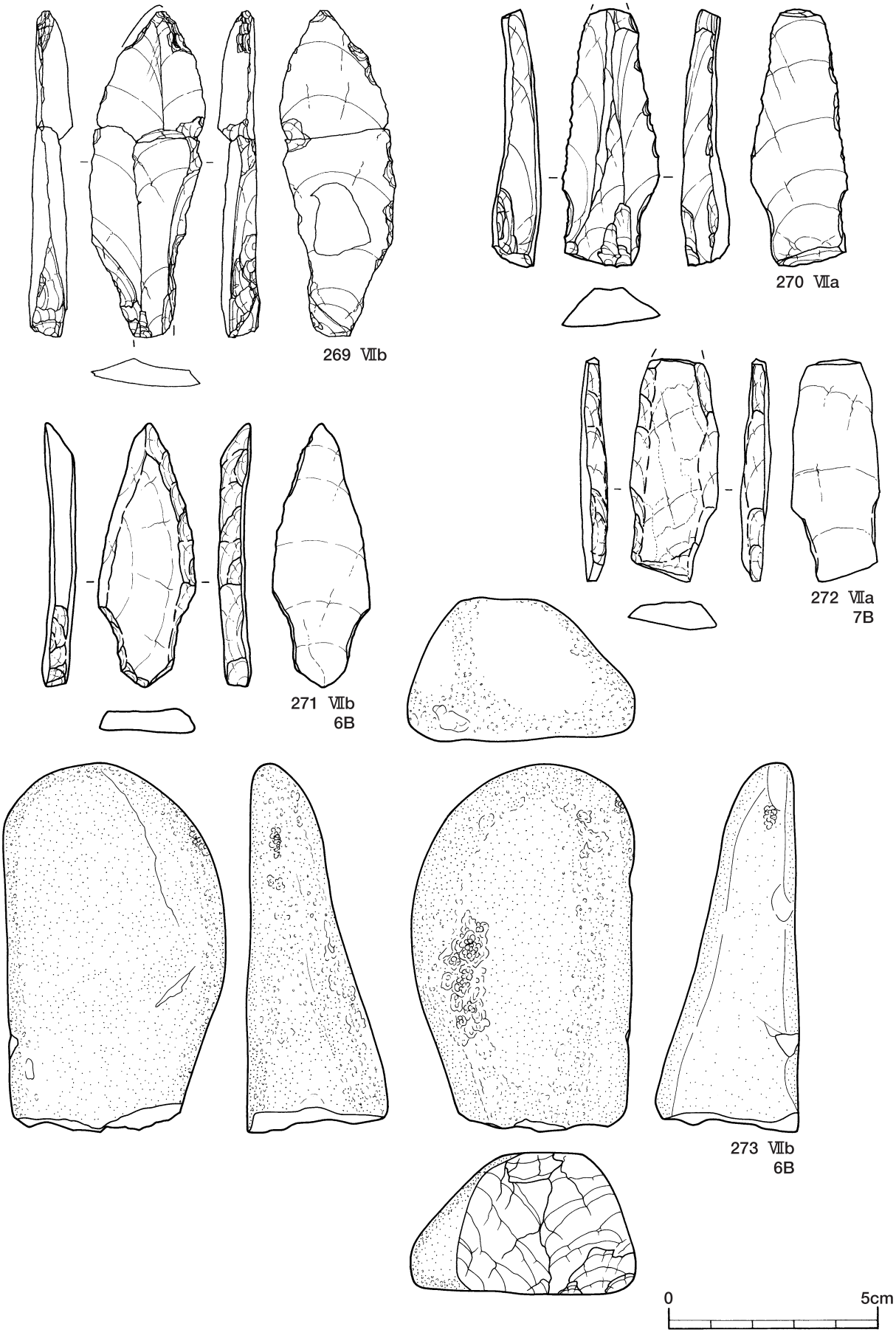
９ブロック（第97図267・268）

Ｈ・Ｉ－19・20区の，径約10×７ｍの範囲に散在して分布する。ＯＢ２，ＯＢ１，ＳＨなどが含まれるブロックである。

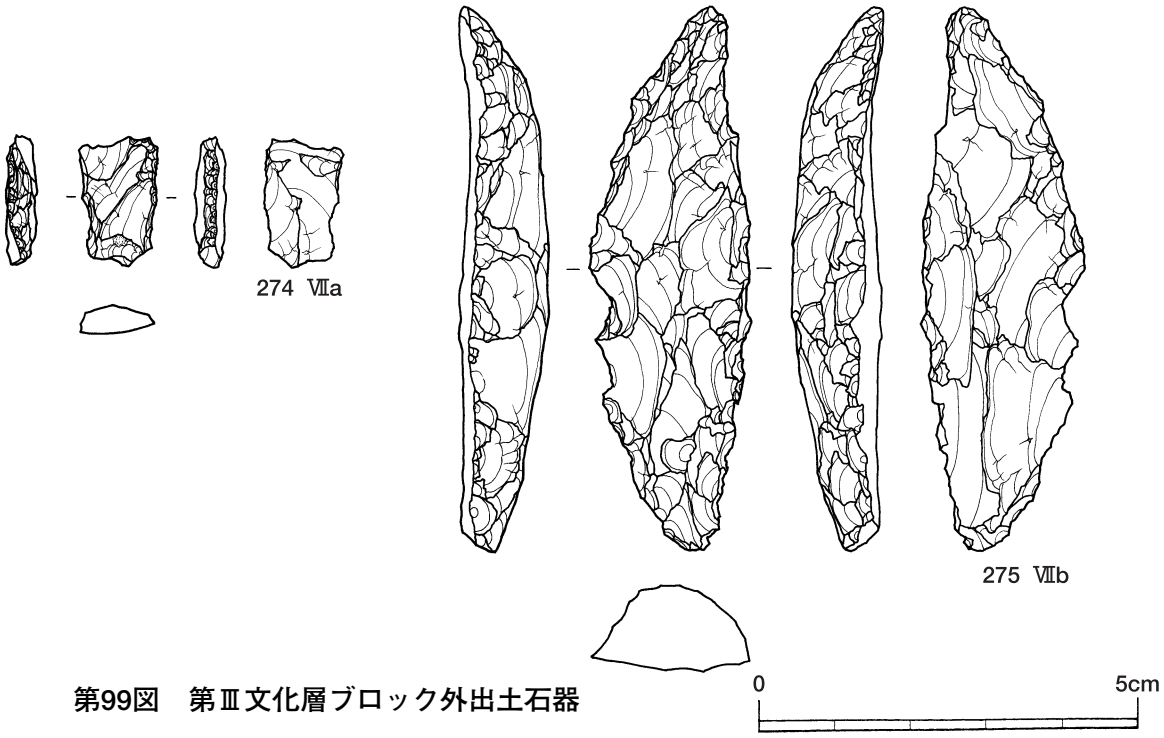
ナイフ形石器　267は縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。先端部は欠損しているが，基部の打点付近に二次加工が施されている他，右側縁先端部にブランティングが施されている。左側縁



第97図　第Ⅲ文化層 8 ・ 9 ブロック出土石器



第98図　第Ⅲ文化層６・７ブロック，ブロック外出土石器



第99図　第Ⅲ文化層ブロック外出土石器

には細かい使用痕が観察できる。

石核　268は平坦に近い剥離面を打面とした剥片素材の石核であり，正面と左側の打面方向の２方向から剥片を剥いでいる石核である。ただし，三稜尖頭器の未製品の可能性も考えられる。

ブロック外（第98・99図269・270・274・275）

Ｇ～Ｉ－17～20区のブロック外遺物は，４点図化した。

台形石器　274は２㎝弱の台形石器である。両側縁は，丁寧なブランティングが施されている。

三稜尖頭器　275は三稜尖頭器である。素材剥片は側面の形状から横長剥片ではなく，幅広剥片が使用された可能性が高い。両側面は腹面からの二次加工により整形されているが，その前に腹面も平坦剥離により先端部まで丁寧に整形される。先端部は右側に反っている。稜上調整がみられない。

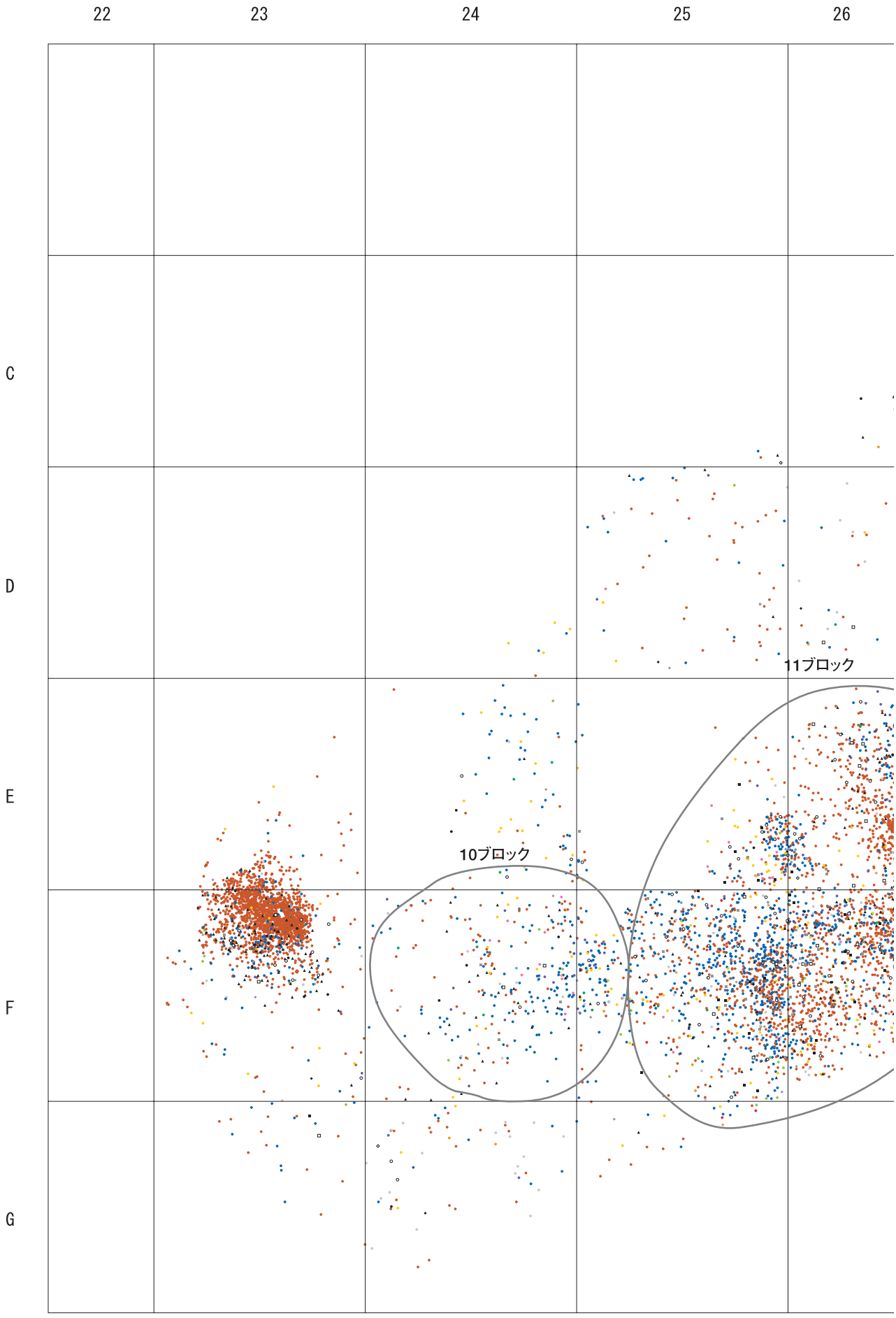
剥片尖頭器　269・270は剥片尖頭器である。269は石材はＳＨ４で，縦長剥片を素材とし，打面付近に基部加工が施されている。右側縁の基部は左側縁に比べ直線的である。先端部右側面には二次加工が施されている。左側縁の基部近くに著しい使用痕が認められる。基部と先端部を欠損する。270は風化しているが，素材となる縦長剥片の打面付近にノッチ状の基部加工が施されている。基部は右側に比べ，左側の方が直縁的である。明瞭ではないが，右側縁には腹面・背面ともに使用痕と思われるわずかな剥離痕がみられる。先端部は欠損している。

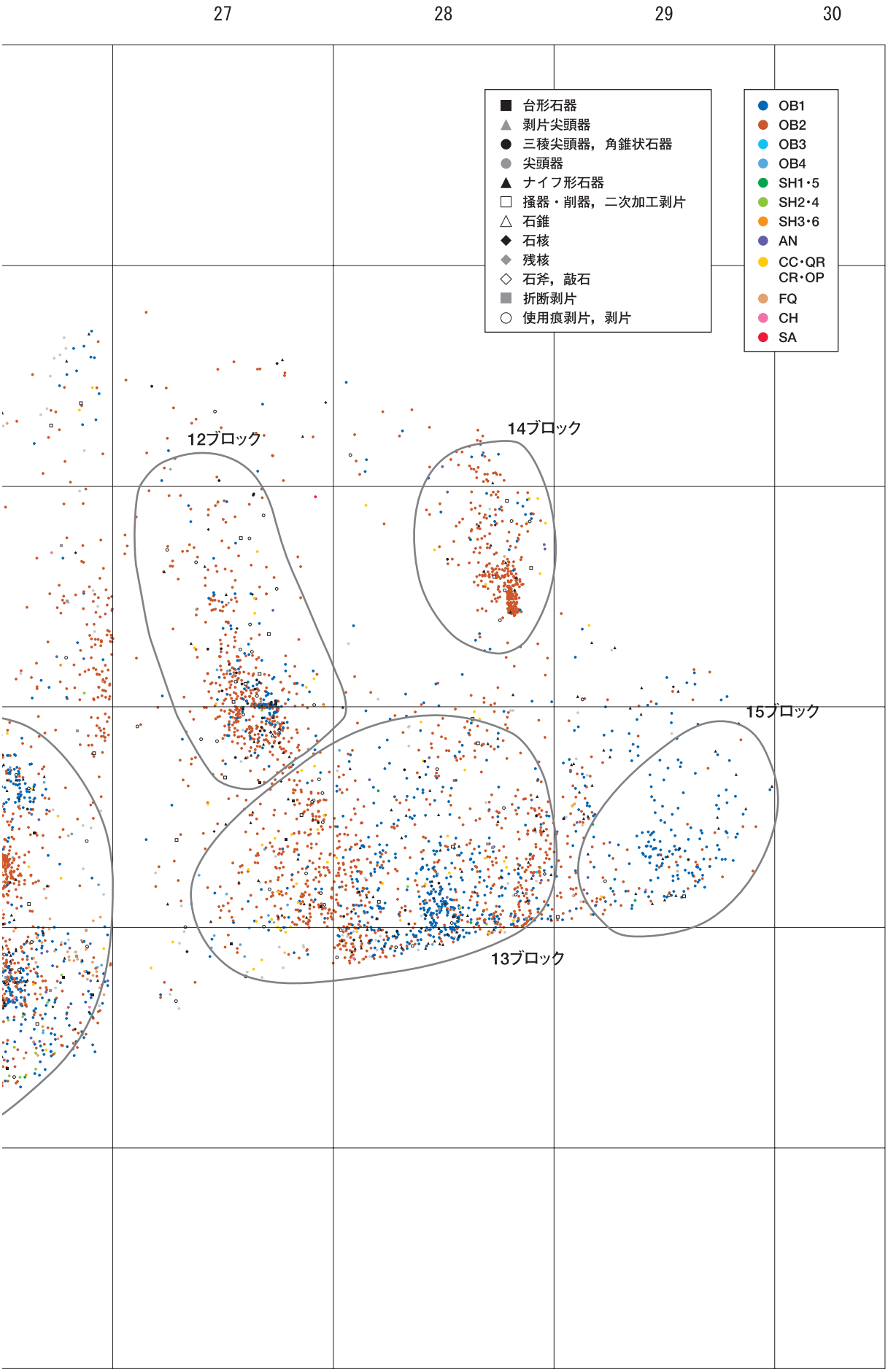
第４節　第Ⅲ文化層Ｂ地区の石器群

第Ⅲ文化層Ｂ地区のブロックは，石器群の出土状況より，集中域は７ヶ所で，10～15ブロックとした。Ｅ・Ｆ－23区のＯＢ２を主体とする集中域は，出土遺物より第Ⅳ文化層３ブロックの浮き上がりと判断したため，第Ⅲ文化層のブロックとしては除外した。

10ブロック（第102・121図276～279・404）

Ｅ・Ｆ－24・25区に径約12×12ｍの範囲に分布する。石材はＯＢ１を主体とするが，ＯＢ２，Ｃ


22
23
24
25
26
C
D
E
F
G
10ブロック
11ブロック



第100図　第Ⅲ文化層Ｂ地区石器群出土分布図

Ｃ，ＣＨも分布する。

ナイフ形石器　276は石材が玉髄系のいわゆるたんぱく石である。裏面には節理面，右側面には自然面が残る。左側縁部上半部に急角度の丁寧なブランティングが施されている。また，先端は細かい二次加工により尖らせている。

台形石器　277は背面に自然面を残し，両側縁に腹面からのブランティングが施されている。刃部幅は器長と比較して狭い。

剥片尖頭器　第121図404は縦長剥片を素材とし，打面側を基部とし基部加工が施される。右側の基部は左側に比べて抉りが深い。背面には一部自然面が残る。右側縁には部分的に鋸歯状になる二次加工が施され，左側縁にも微細剥離が確認される。

三稜尖頭器　278は小型の三稜尖頭器である。横長剥片が使用され，腹面からの二次加工，加えて基部と先端部付近は，稜上加工により整形されている。

削器　279は左側縁に先端部まで比較的粗い二次加工が施され，鋸歯状の刃部となっている。

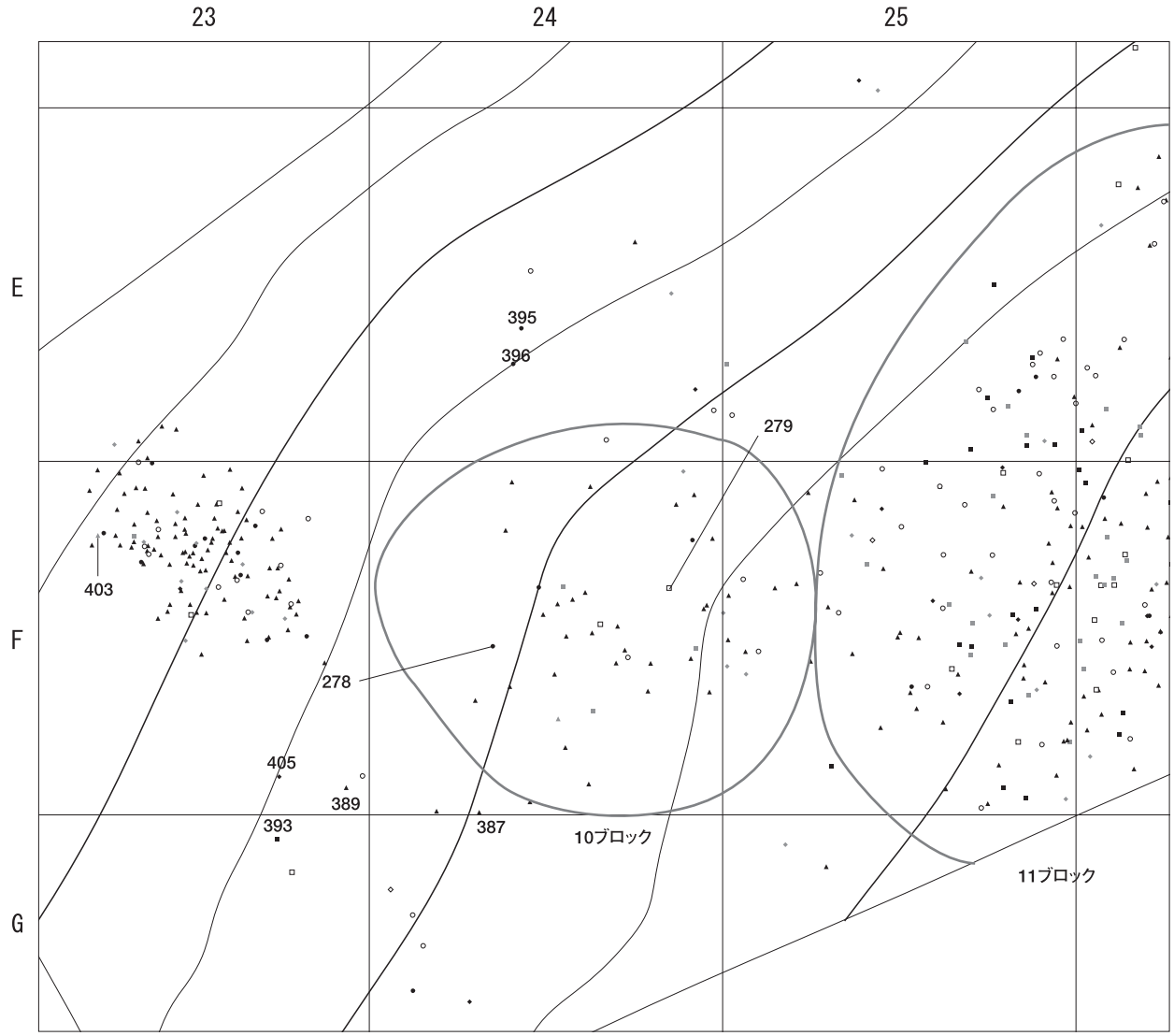
11ブロック（第106～112・121図280～349・400・402）

Ｅ・Ｆ－25・26区の径約18×17ｍの範囲に分布するブロックである。Ｅ－26区に径２×２ｍのＯＢ２の集中域，Ｆ－25・26区にＯＢ１・ＯＢ２の集中域などがみられるが，周囲の密な分布状況と分離することが困難であったため，ここでは広く11ブロックとして取り扱った。石材は，ＯＢ１・ＯＢ２を主体とし，ＣＣ，ＣＨ，ＳＨもわずかに分布している。

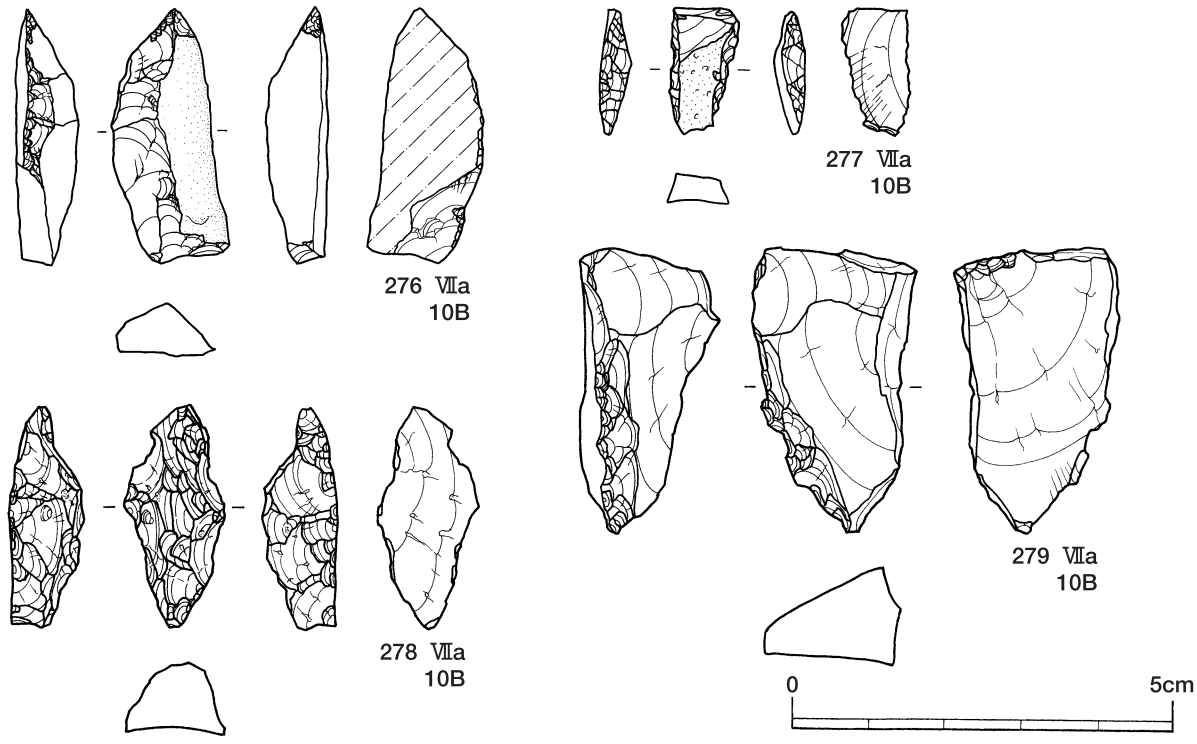
ナイフ形石器　280～293はナイフ形石器である。280～286は小型ナイフ形石器である。280は，斜軸剥片を素材とし，打面部を基部側に設定している。右側縁に先端部まで丁寧にブランティングが施されている。長さは５㎝にも満たない小型である。281は縦長剥片を素材とした二側縁加工ナイフ形石器である。右側縁には先端部まで丁寧にブランティングが施される。左側縁には基部付近にブランティングが施されている。282は縦長剥片を素材としたナイフである。左側縁基部と右側縁にスクレイパーエッヂ状のブランティングが施されている。283・284は縦長剥片を素材としたものである。283は右側基部にはスクレイパーエッヂ状に，左側縁には表裏両面から丁寧にブランティングが施されている。先端部は欠損している。284は平坦な打面を少し残して，右側縁の一部と左側縁に丁寧にスクレイパーエッヂ状のブランティングが施されている。先端部は欠損している。285は幅広剥片を素材とし，両側縁は丁寧にブランティングが施され，切出形を呈する。これのみ三船産黒曜石を使用しており，他は上牛鼻産黒曜石が利用されている。286は左側縁にブランティングを施している。右下半部は欠損している。同様に切出形のナイフ形石器である。

287は下半部が欠損したナイフ形石器である。上半部も欠損しているが，欠損後の使用痕と思われる微細剥離痕が観察される。左側縁には二次加工が施されている。288は上半・下半部の欠損したナイフ形石器である。右側縁に部分的に二次加工がみられる。

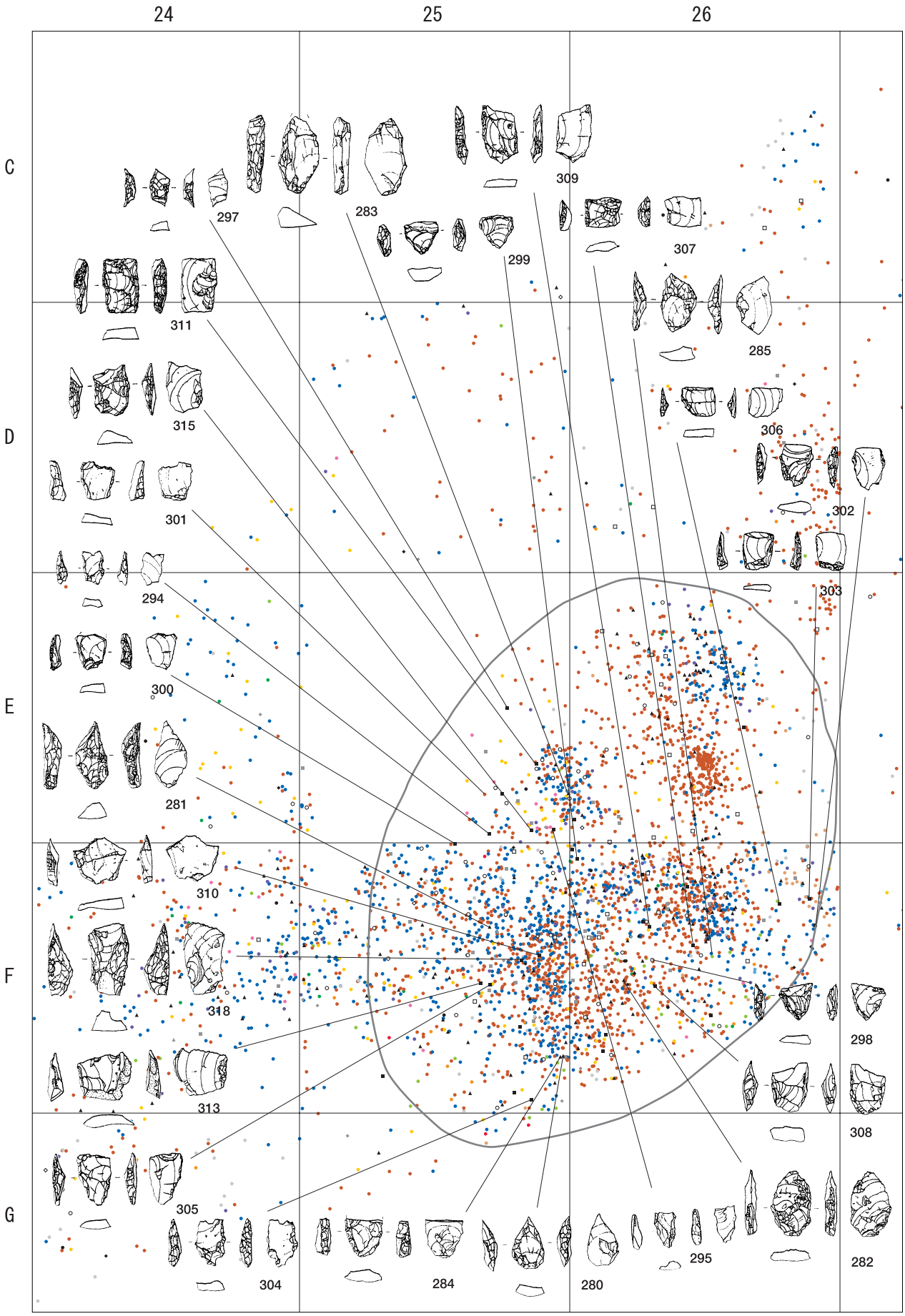
289～291は縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。289は良質なＳＨ２の縦長剥片を素材とする基部加工ナイフである。上半部は欠損している。右側縁基部にスクレイパーエッヂ状の二次加工が施され，両側縁には使用痕と考えられる微細剥離が確認できる。290の石材はＯＢ３である。背面に自然面を残す。左側縁はブランティングが丁寧に先端部まで施される。右側縁には使用痕と



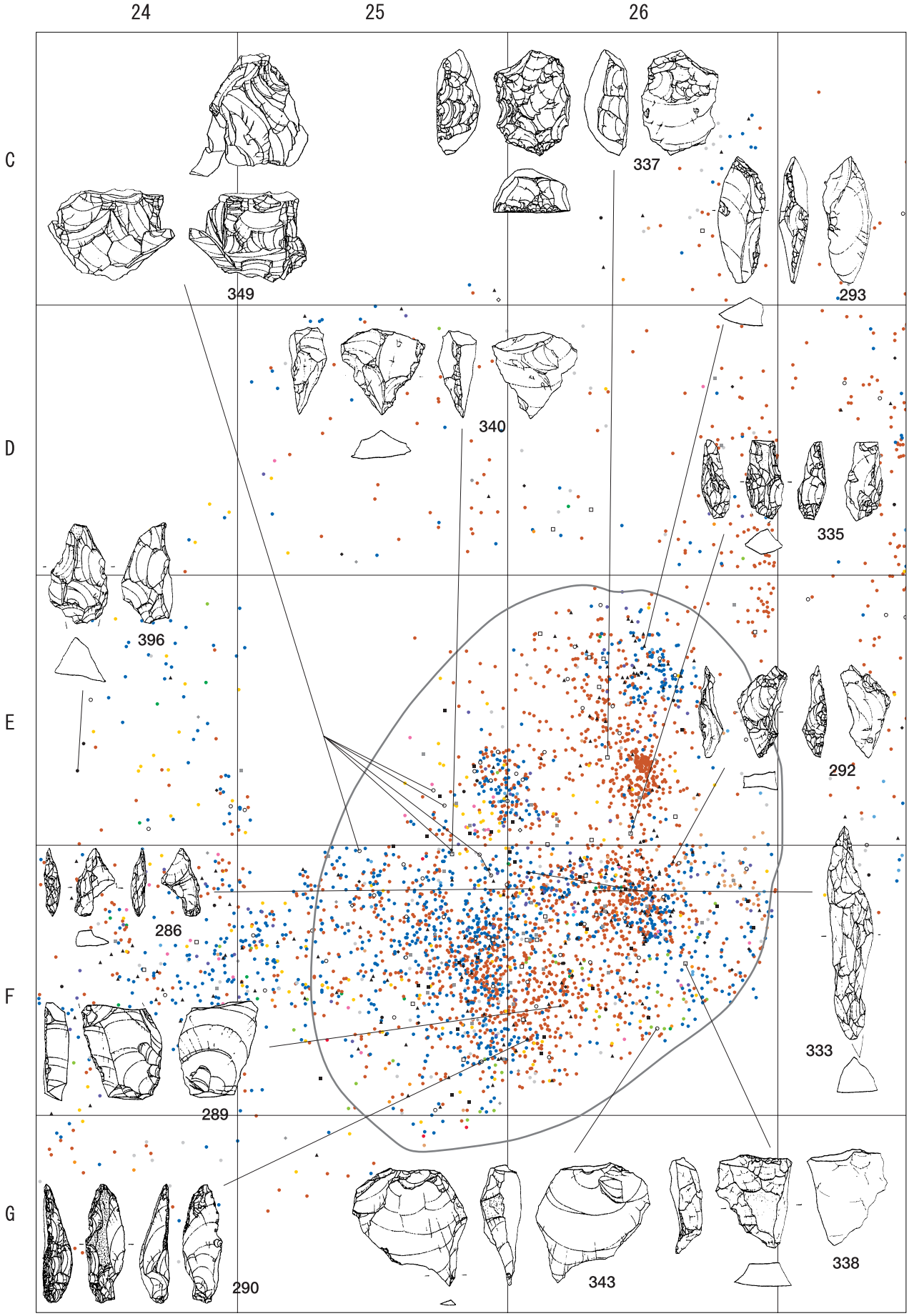
第101図　第Ⅲ文化層10ブロック石器群器種別出土分布図



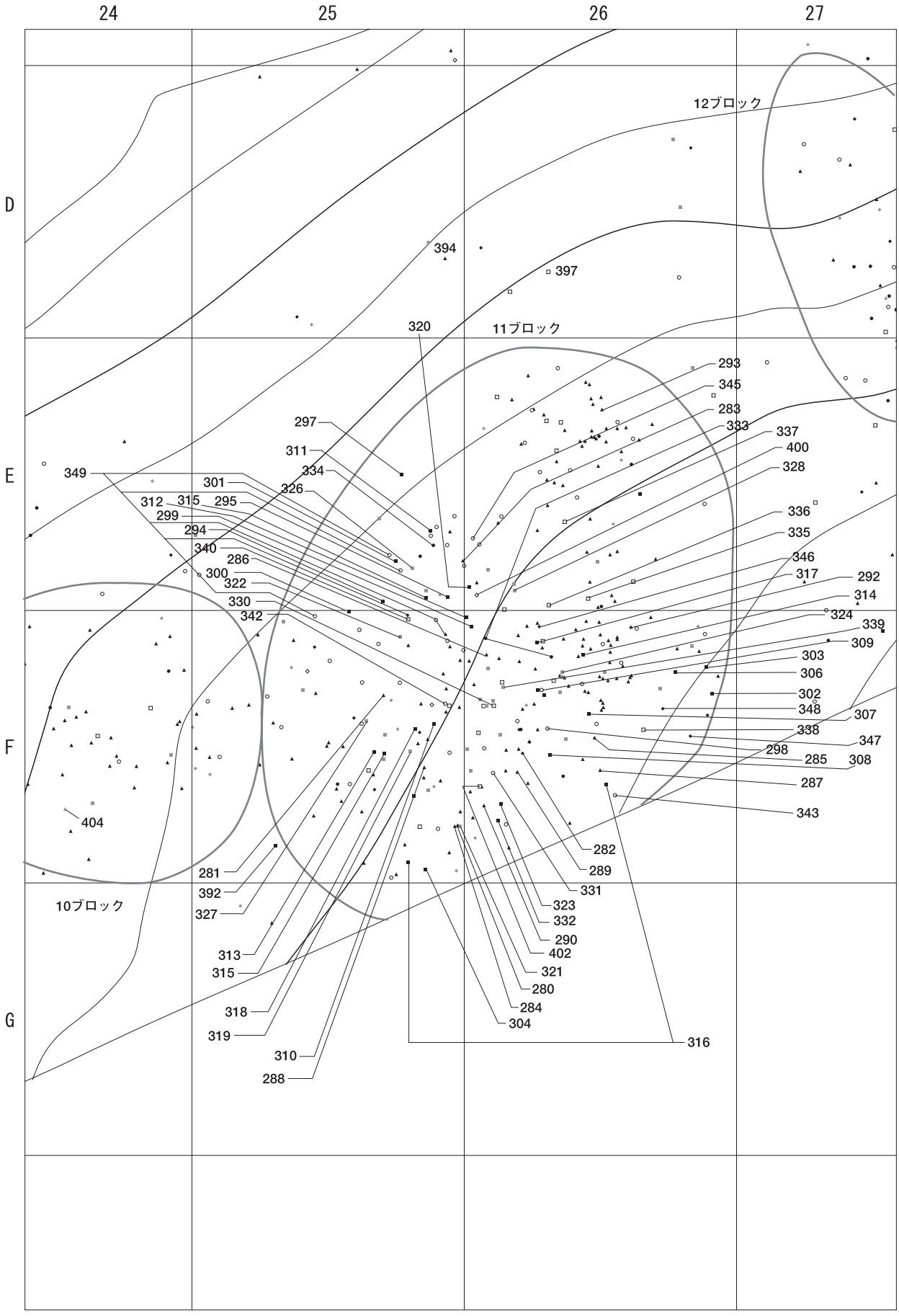
第102図　第Ⅲ文化層10ブロック出土石器



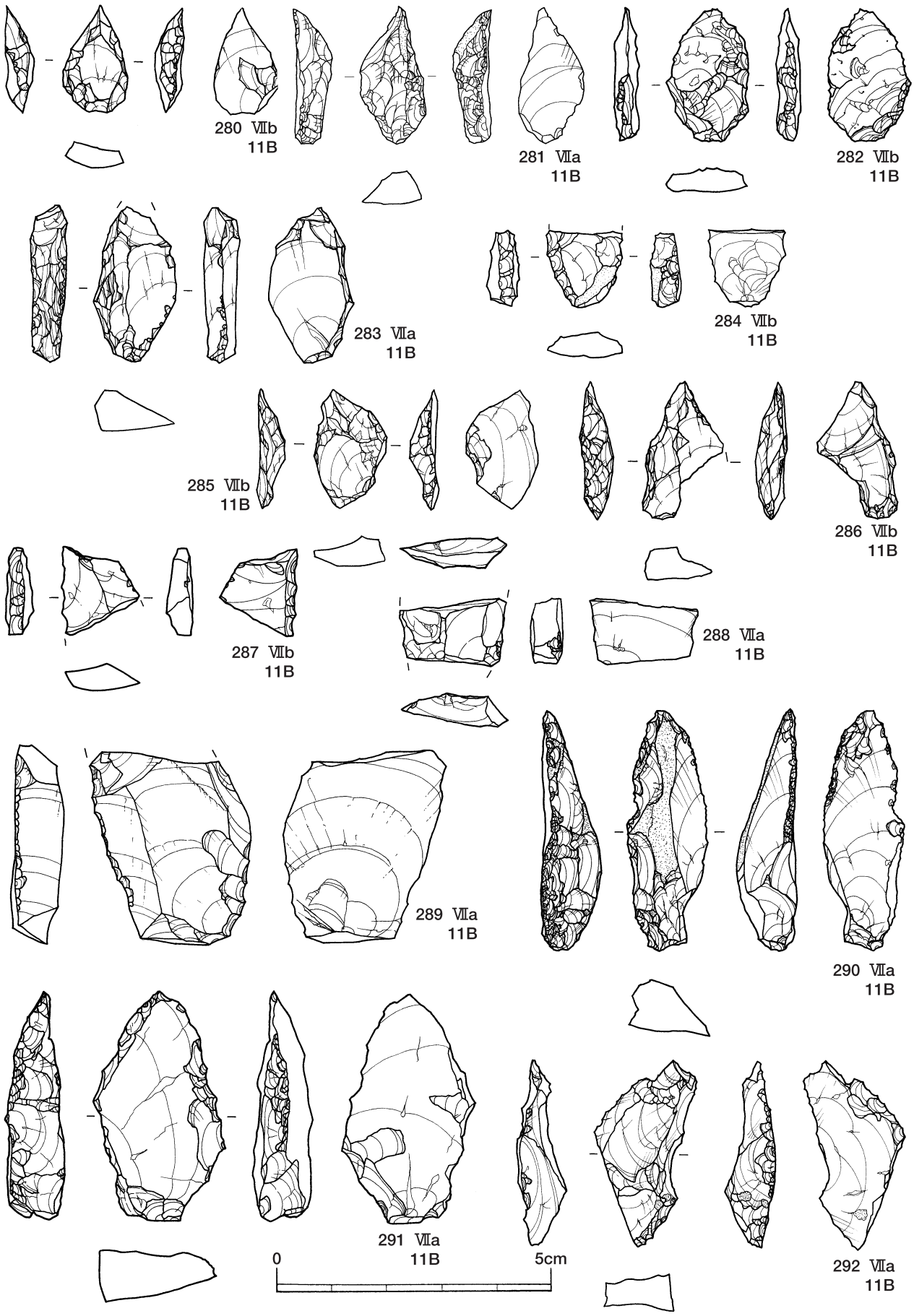
第103図　第Ⅲ文化層11ブロック主要石器（ナイフ形石器・台形石器）出土分布図



第104図　第Ⅲ文化層11ブロック・ブロック外主要石器出土分布図



第105図　第Ⅲ文化層11ブロック石器群器種別出土分布図



第106図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（1）

思われる微細剥離がみられる。291の石材はＡＮ１である。左側縁は腹面から急角度のブランティングが施されるが，右側縁は整形的な二次加工が施されている。なお，基部については背面から二次加工が行われている。

292は横長剥片を素材とするナイフ形石器である。側面に大きな剥離面を残し，特に右側縁には丁寧にブランティングが施されている。293は横長剥片を素材とする一側縁加工のナイフ形石器である。瀬戸内技法の剥片剥離方法に似る。打面側である右側縁に，腹面から二次加工が施されている。基部と先端部との位置関係は明確でない。

台形石器　294～318は台形石器である。形態的に刃部幅が１㎝未満の超小型のもの（294～297）や，基部を尖らせて三角形状にするもの（298・299・305），あるいは全体を長方形に整形するもの（303・311）など多様である。両側縁にブランティング加工を施すものが殆どであるが，なかには一側縁を中心にブランティングを施し，一側縁は折断面を残すもの（306～310），あるいは片側に打面を残すもの（312）もみられる。ブランティングは主に腹面から急角度に施されているが部分的に背面から施されたもの（302・304）もみられる。使用石材は主として三船産黒曜石，上牛鼻産黒曜石が多く，303は鉄石英である。また，313はＯＢ４で嬉野産黒曜石に類似するものである。

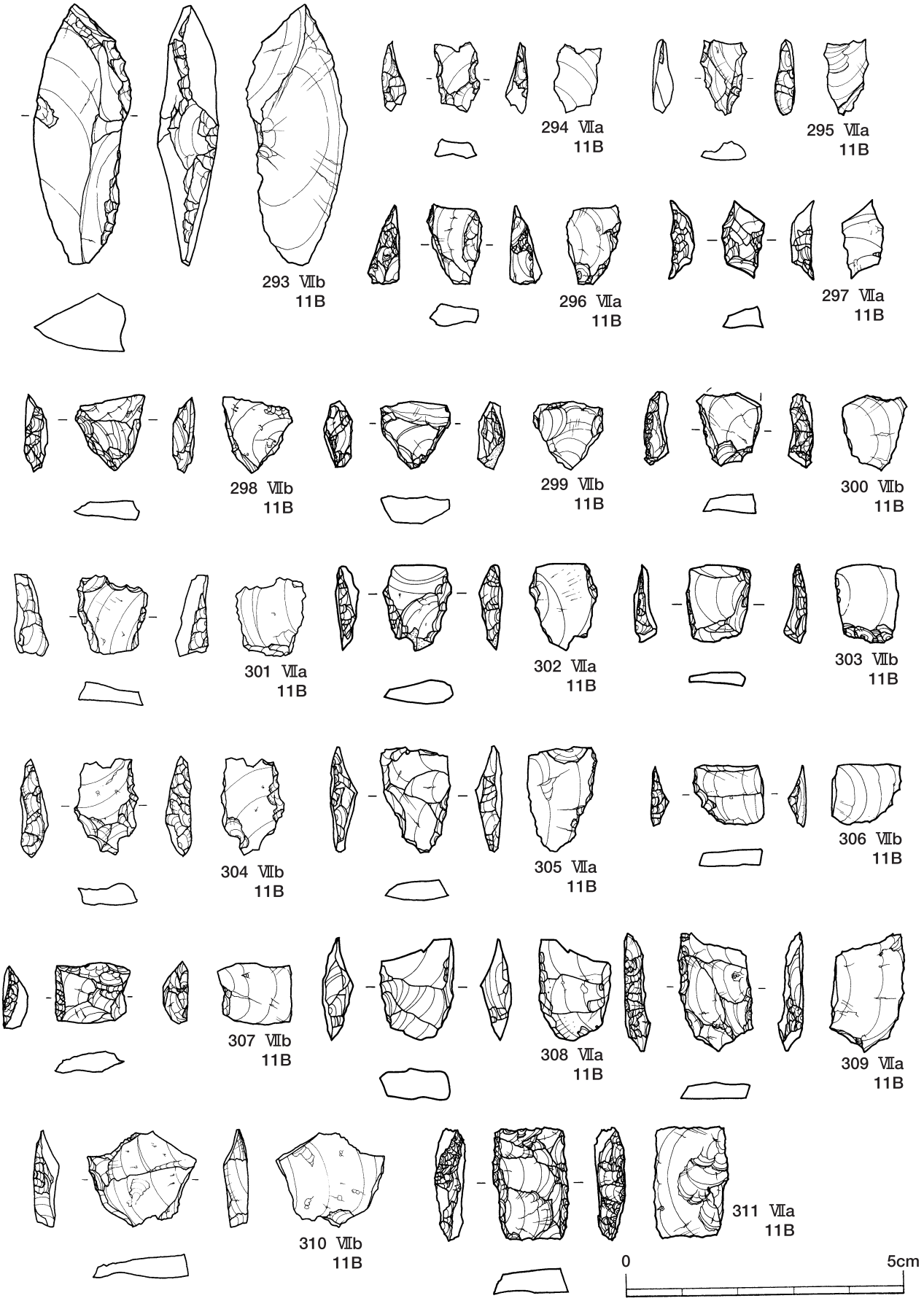
折断剥片　319～332は折断剥片である。このうち319～321は鋭い縁辺部に使用痕が観察されるもので，ブランティングは施されてないが，台形石器として使用されたと思われる。また他の切断剥片は，縦長剥片の打面部や末端部が多く，このことは残されてない中間部を台形石器として利用したことが考えられる。ちなみに，先述した使用痕があるものは全て中間部である。326はＯＢ４の嬉野産黒曜石に類似する剥片である。

三稜尖頭器　333は縦長剥片もしくは幅広剥片を素材とするもので，二次加工は稜上剥離により行われ，先端部付近のみ腹面から行われている。

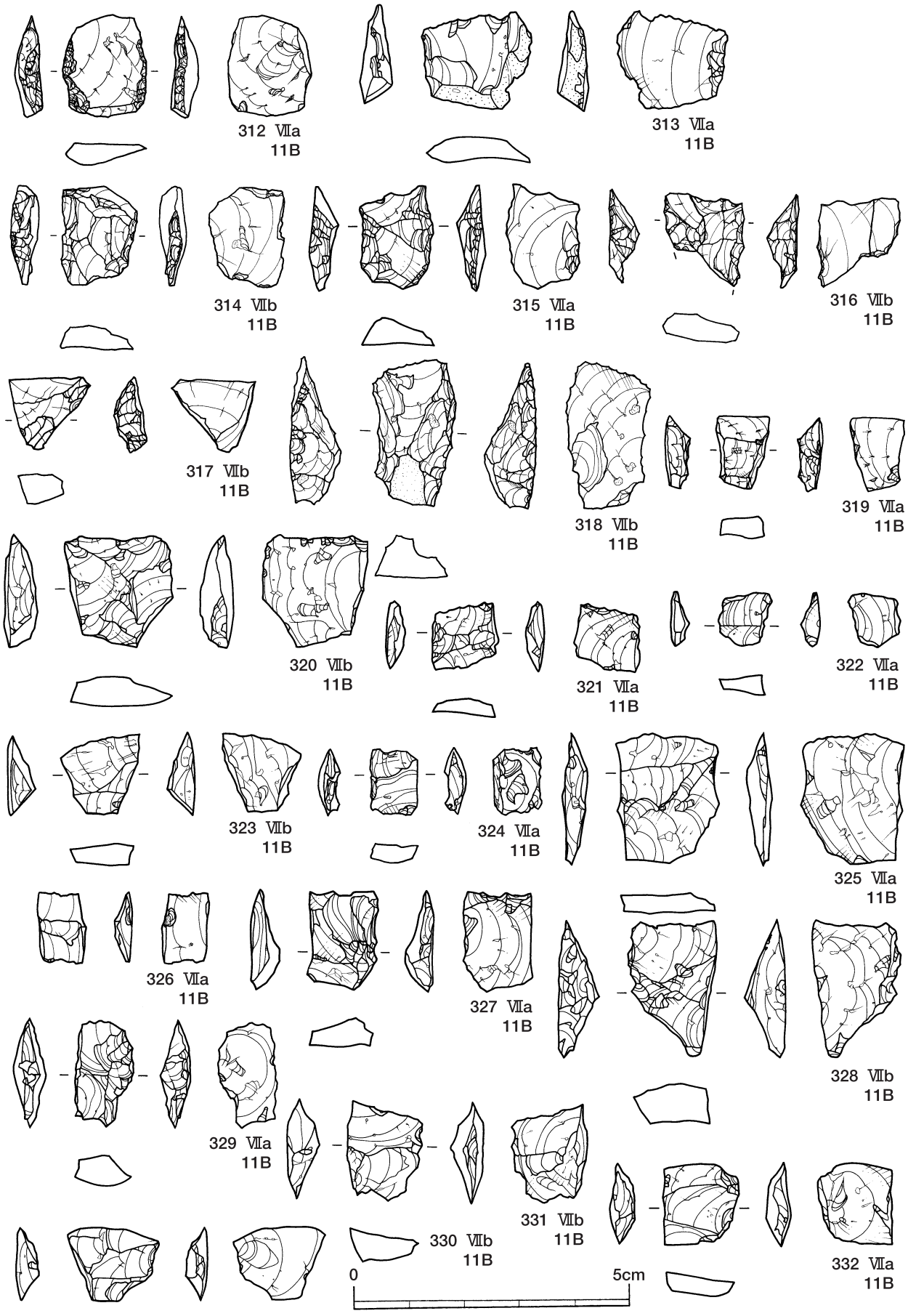
334は縦長剥片を素材とし，一部，二次加工があるが，未製品の可能性が高い。335は左側縁の腹面基部付近に二次加工が施され，また右側面は二次加工により整形されている。先端部はわずかに欠損している。

掻器・削器　336・337はラウンドスクレイパーである。336は厚みのある剥片が利用され，周縁，特に左側縁から下部にかけては丁寧に二次加工が施され，丸く刃部が作り出されている。337の石材はＡＮ１である。上部は欠損しているが，急角度の二次加工が施されている。

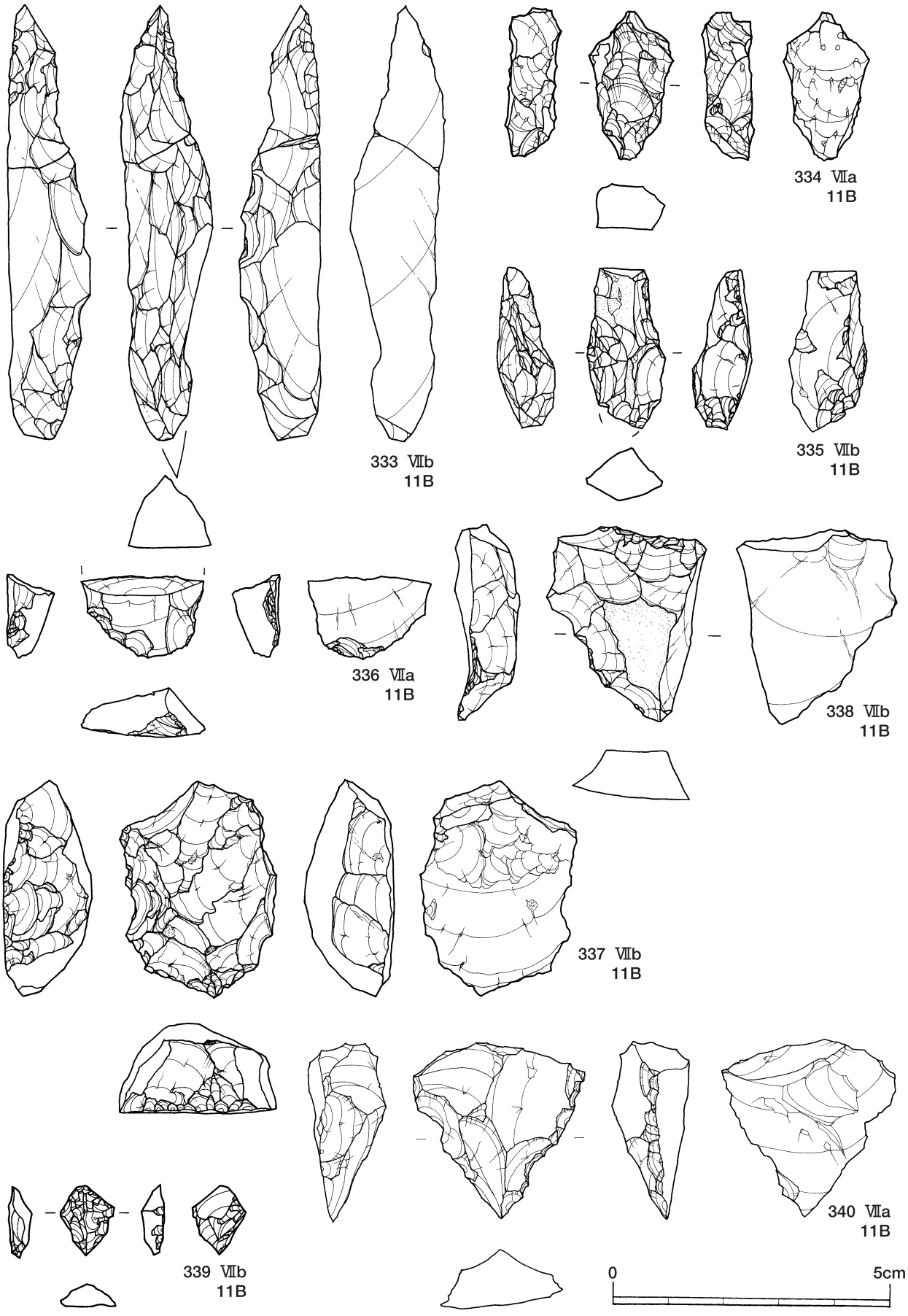
338～343は削器である。338はＦＱの縦長剥片を素材とする。左側縁は尖った先端部まで粗い二次加工が鋸歯状に施される。また，素材剥片の打面側には頭部調整がみられる。背面には自然面を残す。339は周縁に二次加工を施す小型の削器である。340は先細り剥片を使用したスクレイパーである。両側縁に二次加工が施され，先端部は尖っている。341はＳＨ２の良質な縦長剥片を素材とするスクレイパーである。両側縁に丁寧に二次加工が施されている。先端部は欠損している。342は，玉髄系のたんぱく石を利用し，両側縁は折断が行われ，その後右側縁上部に細かい急角度のブランティングと，腹面には平坦剥離が施されたものであり，ＡＴ下位の台形様石器と判断される。上部の鋭い剥片端部には使用痕が観察できる。343は，玉随製の使用痕剥片である。一部に使用痕が観察でき，また先端部はドリル状に尖っている。第121図402は，砂岩の厚手の縦長剥片を素材としている。右側縁には先端部まで二次加工が施されている。



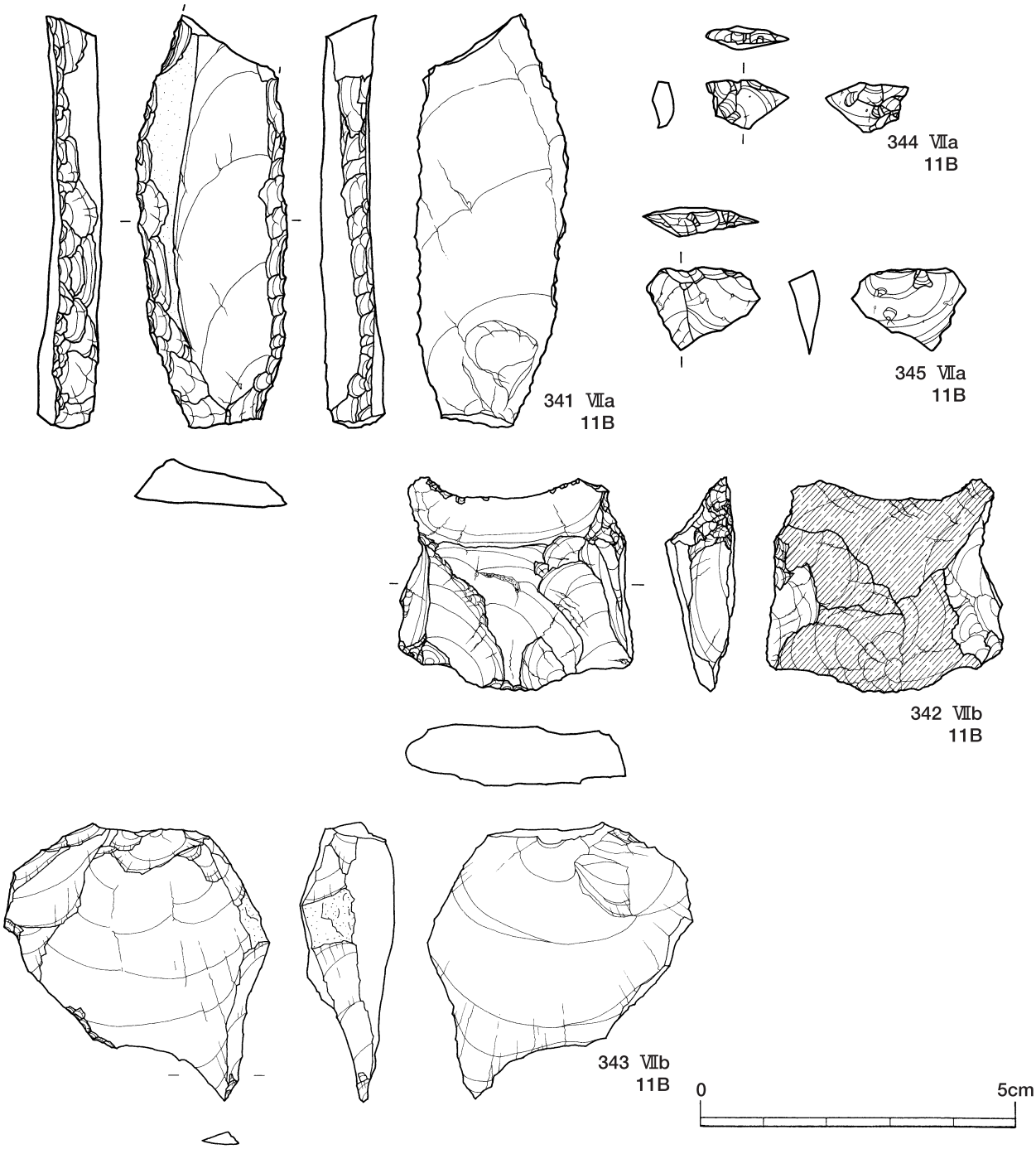
第107図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（2）



第108図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（3）



第109図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（4）

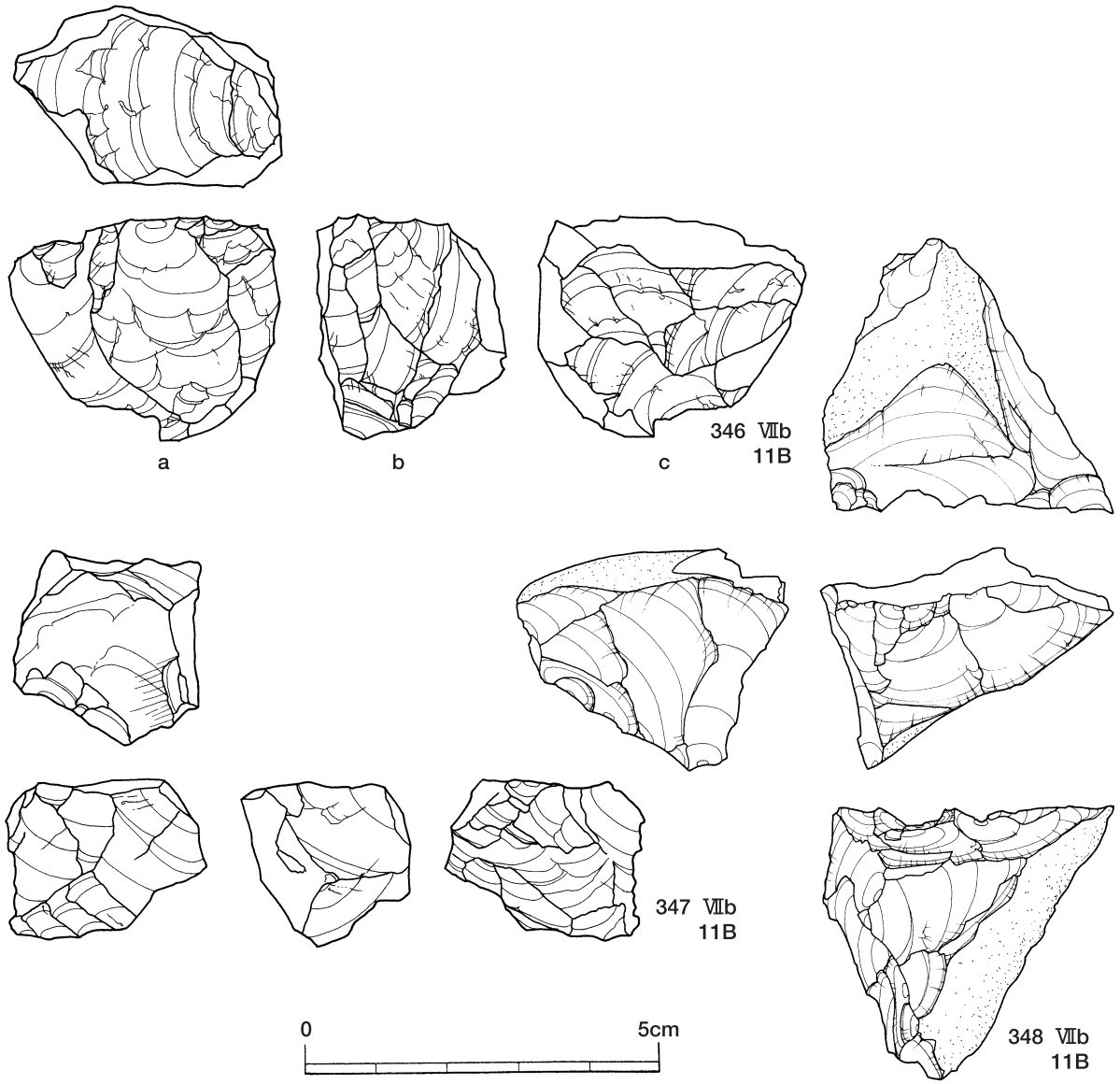


第110図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（5）

剥片　344・345は明瞭な使用痕は観察されない。

敲石　第121図400は砂岩製の敲石である。長軸の両端部に明瞭な敲打痕が認められ，一部欠損している。

石核　346は平坦な剥離面を打面として剥片を剥いでいる石核である。またそれ以前は，尾面を打面にして図のＣ面を剥いでいる。347は打面を転移しながら剥片剥離をしたサイコロ状の石核である。348は平坦面を打面とする石核である。上・下面の素材面が残る平坦面に，剥離前の調整を行い剥片を剥いでいる。主な打面は上下２面である。



第111図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（6）

接合資料

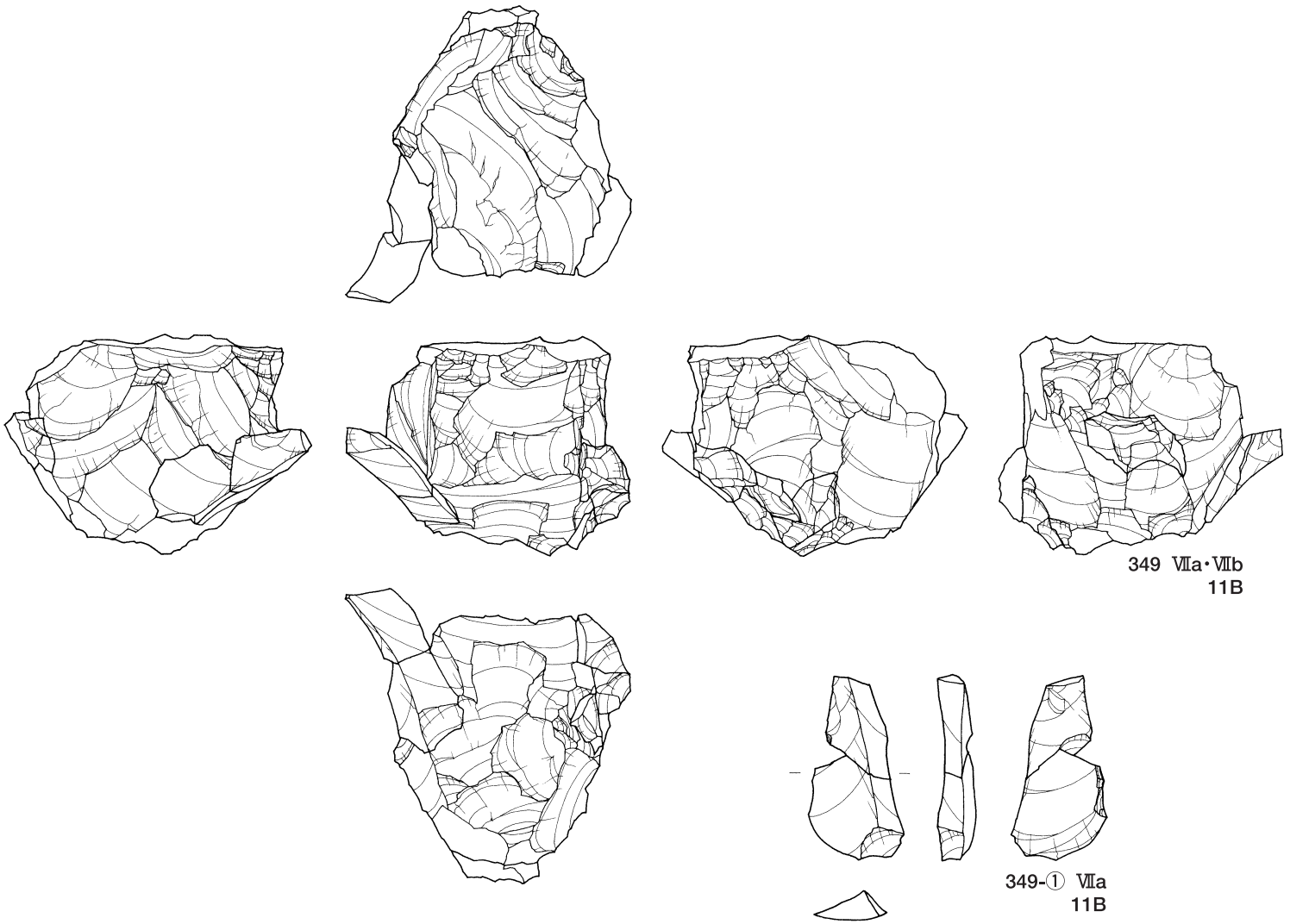
349は石核と剥片の接合資料である。石材は瑪瑙である。平坦面を打面として，打面を転移し，回転させながら剥片を剥いでいる。349－①は縦長剥片で，左側縁に使用痕が確認される。

12ブロック（第116・117図350～369）

Ｄ・Ｅ－27区に南北方向に分布する径約12× 6 mのブロックである。ＯＢ２を主体とし，ＯＢ１，ＣＣも少数分布する。南方に径４× ２ mの範囲に集中域があり，三稜尖頭器が主体となる。

ナイフ形石器　350は小型ナイフ形石器である。両側縁には急角度のブランティングが丁寧に施されている。352は一側縁加工のナイフ形石器である。不定形剥片が使用され，左側縁に腹面からと背面の稜上から二次加工がほどこされている。

台形石器　351は小型台形石器である。素材となる剥片の打面もブランティングにより除去してお



第112図　第Ⅲ文化層11ブロック出土石器（7）

り，両側縁に細かいブランティングが施されている。

三稜尖頭器　353～366は三稜尖頭器である。基本的に横長剥片が素材となるが，そのなかで裏面に基部加工のみられるもの（353・354），幅広剥片を素材としたことにより打面が左上方にあるもの（357～361），縦長剥片を素材とするもの（362）に区別できる。ただし，規格的な大きさは３～４㎝程度と共通している。353は両側縁からの二次加工と稜上加工により整形されている。354は両側縁からの二次加工がみられるが，剥離による平坦な面が残存しており断面は台形になっている。先端部は欠損している。355は両側縁からの二次加工により整形されている小型の三稜尖頭器である。石材はＳＨ４で，風化している。356～360は側縁からの二次加工と稜上からの調整により整形している。356はリダクションの可能性が高い。358・360は先端部，357は下半部が欠損している。363・364は横長剥片を素材としているが，未製品である。365は幅広の剥片を素材とし，周縁に二次加工が施され，先端部が尖っている。三稜尖頭器というよりスクレイパーに近いものといえよう。366は欠損品である。腹面に平坦剥離がうかがえ，基部加工の可能性がある。

尖頭器　368は上半部とわずかに基部が欠損しているが，木葉形になると思われる尖頭器である。基部は腹面に平坦な剥離がみられ，両側縁から二次加工が施されている。腹面のアミかけ部には擦れ痕がみられ，柄の装着痕である可能性がある。

石錐　367は自然面を残す剥片を素材とするドリルである。上半部が欠損している。

石核　369は自然面の残る平坦面を打面として剥片を剥いでいる石核である。

13ブロック（第118・121図370～380・401）

Ｅ・Ｆ－27・28区にまたがり，径約９×14ｍの範囲に分布するブロックである。Ｅ－27・28区にＯＢ２，Ｅ－28区にＯＢ１が分布しており，そのほかＣＣ，ＣＨが少数分布する。

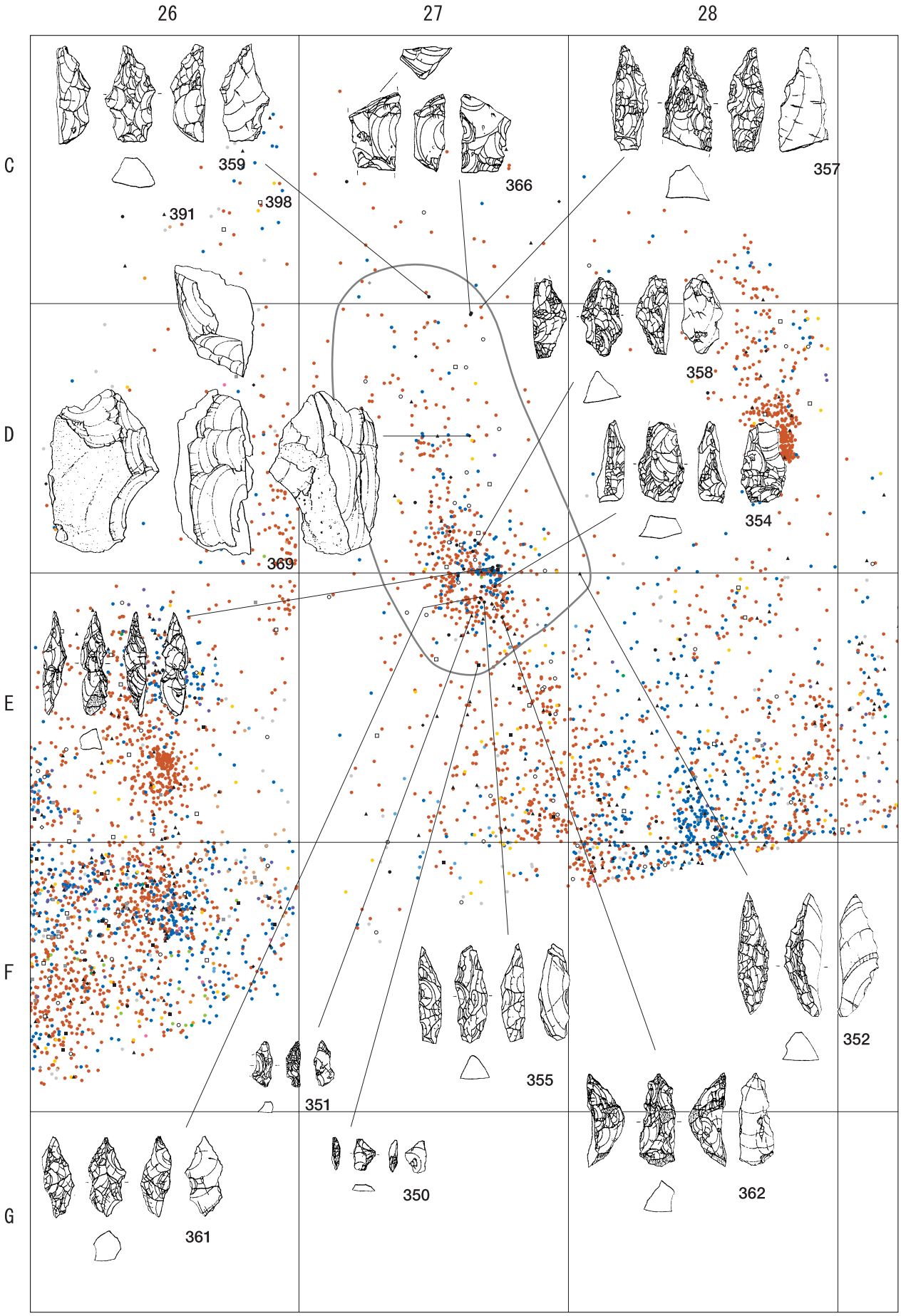
ナイフ形石器　370は両側縁に丁寧にブランティングが施されるが，左側縁は背面から施されている。371は打面を残して右側縁にブランティングが施されているもので，長さ１㎝に満たない超小型ナイフである。372は上半部が欠損したナイフ形石器の基部である。基部の右側縁にブランティングが施されている。373はブランティングチップを素材にした可能性が高く，右側縁に細かいブランティングが施されている。374は上半部が欠損している。石材はたんぱく石である。打面を残置し，打面近くの両側縁は背面から，そして右側縁は腹面からブランティングが施されている。

台形石器　375は厚みのある剥片を素材とする。両側縁に丁寧にブランティングが施されている。376は小型台形石器である。縦長剥片の折断剥片を素材とし，左側縁には折断面が残る。右側縁には腹面からのブランティングが施されている。

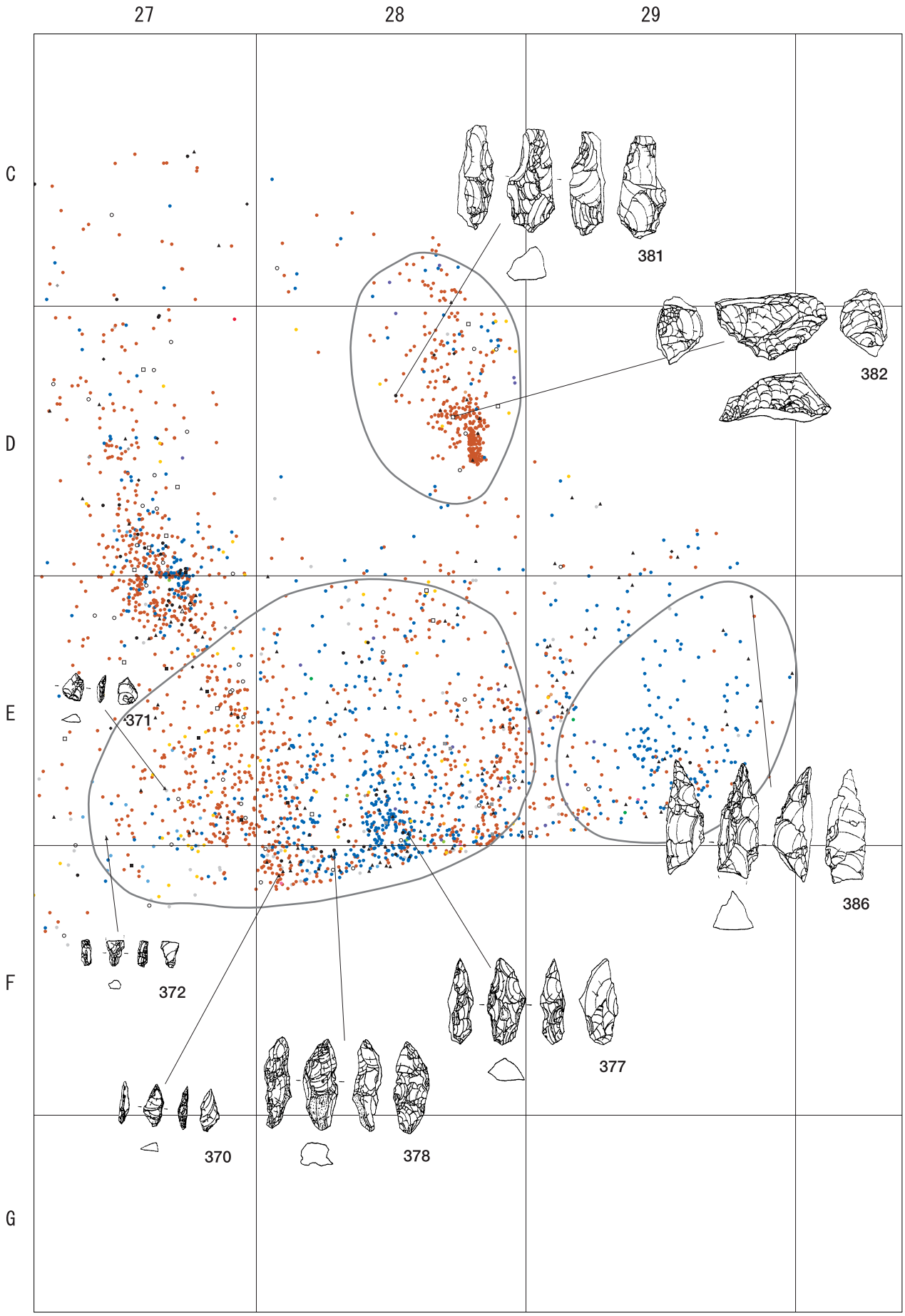
三稜尖頭器　377～379は三稜尖頭器である。377は横長剥片を素材とし，腹面からの二次加工により整形されている。腹面は基部付近に平坦剥離が施されている。378は腹面に二次加工が先端部と左側縁に施されている。右側縁先端には樋状の剥離がみられる。379は幅広の剥片を素材とし，腹面からの二次加工と稜上からの調整により整形されている。両端部は欠損している。

敲石　第121図401は長軸の一端（図の下）に敲打痕が認められる。

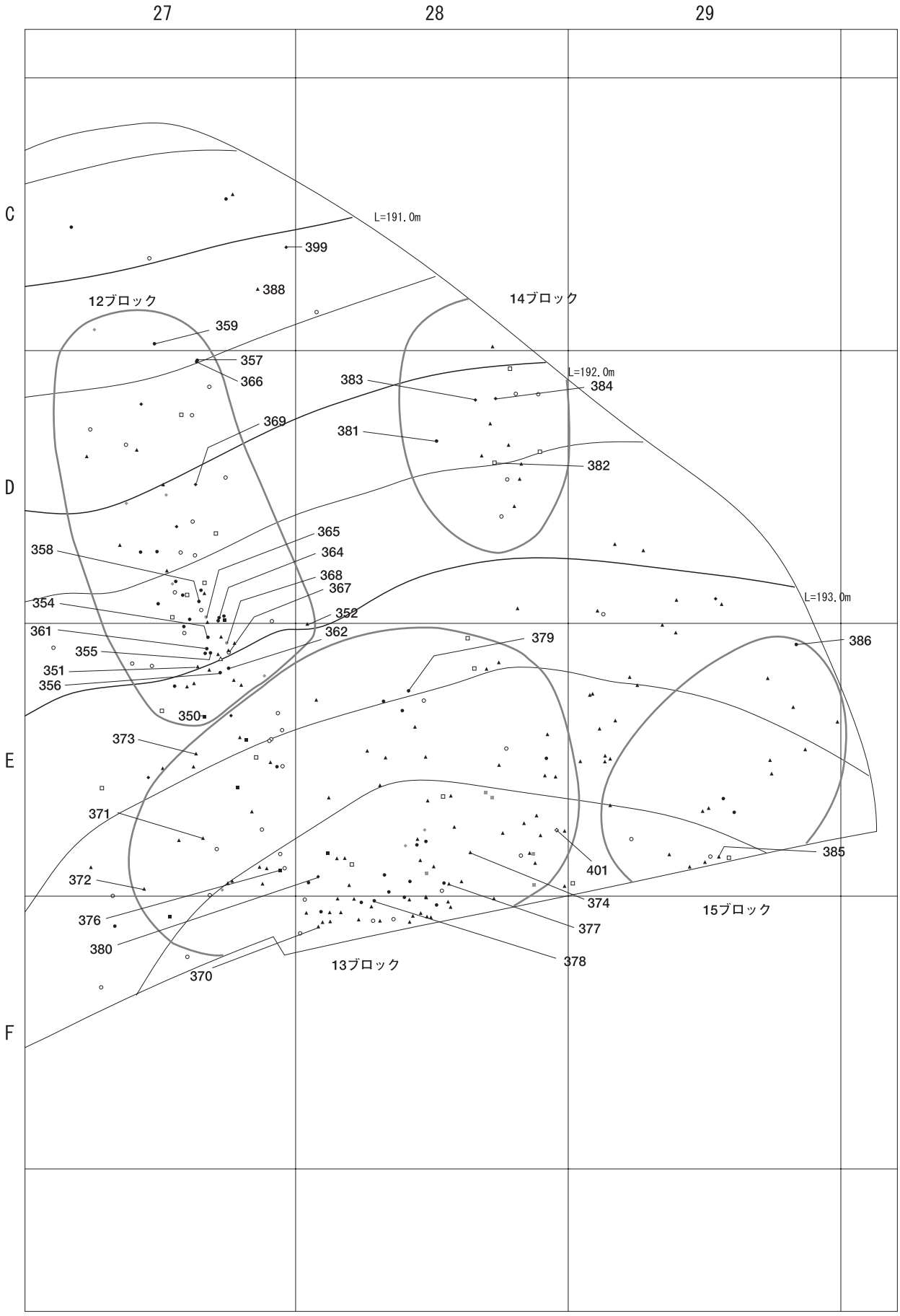
石核　380は平坦面から幅狭な縦長剥片を剥いでいる石核である。石材はＯＢ２である。



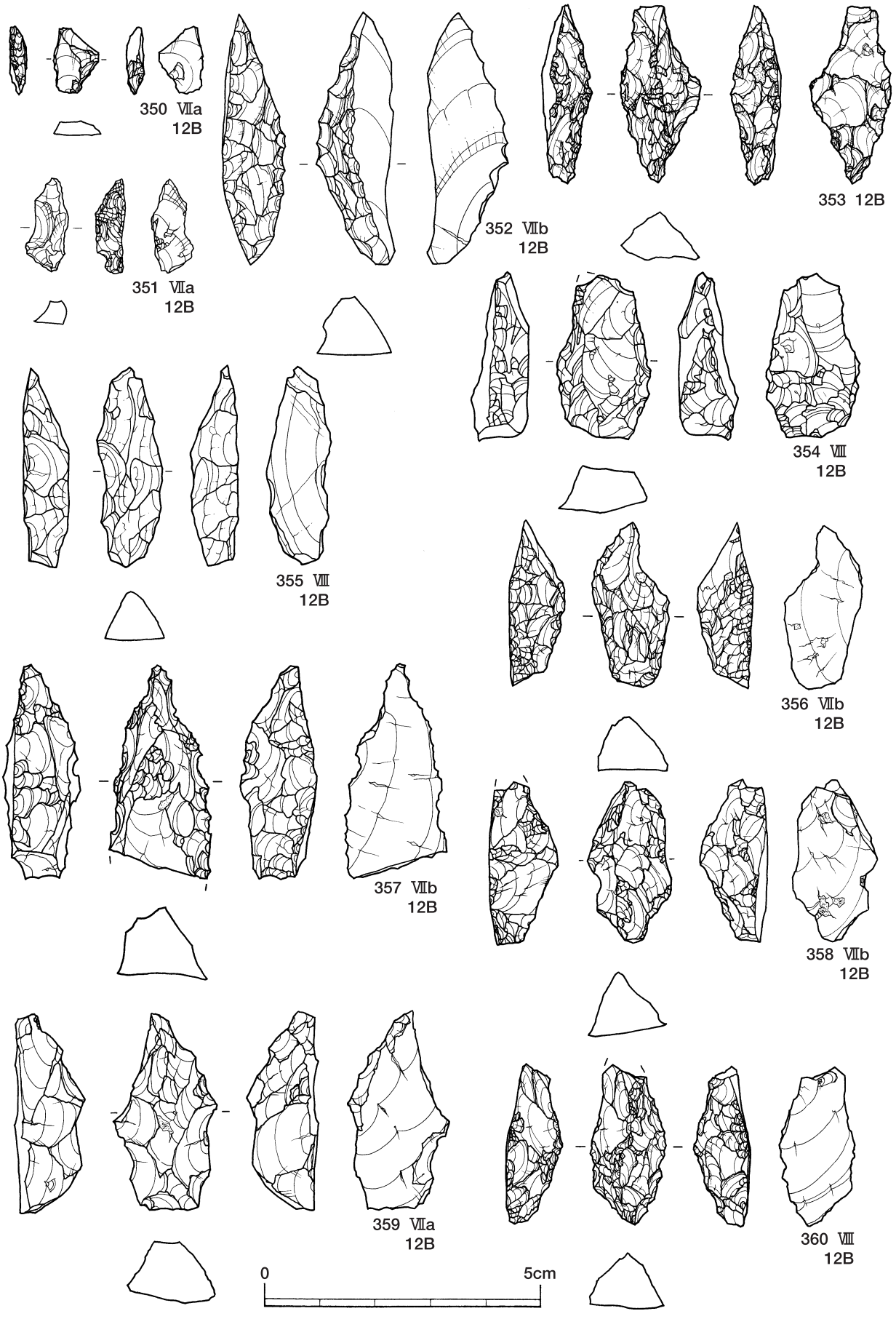
第113図　第Ⅲ文化層12ブロック主要石器出土分布図



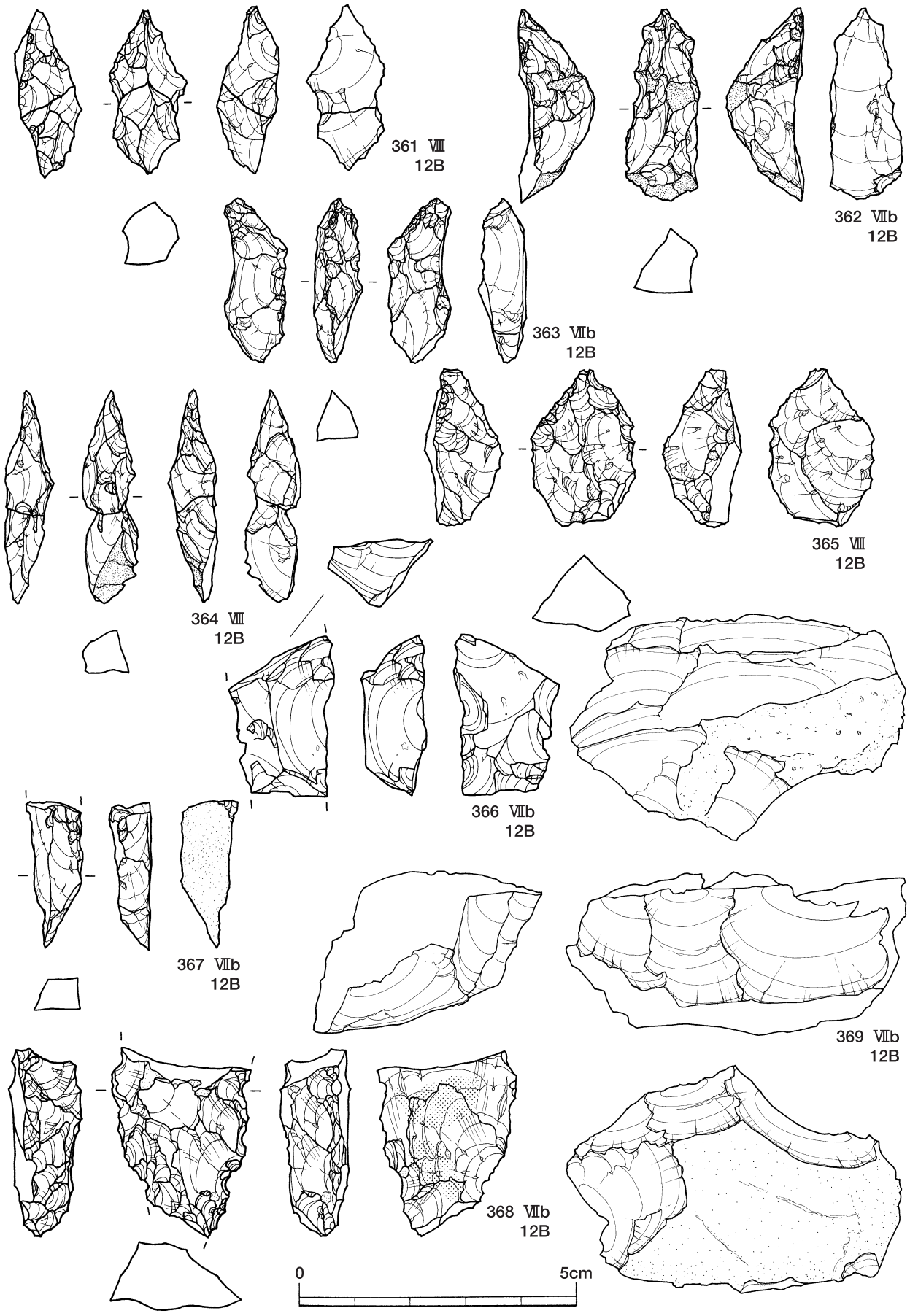
第114図　第Ⅲ文化層13～15ブロック主要石器出土分布図



第115図　第Ⅲ文化層12～15ブロック石器群器種別出土分布図



第116図　第Ⅲ文化層12ブロック出土石器（1）



第117図　第Ⅲ文化層12ブロック出土石器（2）

14ブロック（第118図381～384）

Ｃ・Ｄ－28区に径約８×４ｍの範囲に分布するブロックである。主体となる石材はＯＢ２で，少数ＯＢ１，ＣＣが含まれる。

三稜尖頭器　381は両側縁には腹面からの二次加工が施される。さらに稜上調整が施され，右側面には稜上からの大きな剥離がみられる。

掻器　382は周縁に急角度に二次加工が施され，上部は剥離面が残る。

石核　383は打面を転移させながら剥片を剥いでいる石核である。3方向から幅狭な剥片を剥いでいる。384は平坦面を打面とし，剥片を剥いでいる石核である。

15ブロック（第119図385・386）

Ｅ－29区に径約８×７ｍの範囲に分布するブロックである。主体となる石材は，ＯＢ１であり，ＯＢ２も分布している。

ナイフ形石器　385は薄い剥片を素材とする二側縁加工ナイフである。右側縁と基部にブランティングが施されている。先端部は欠損している。

三稜尖頭器　386は基部が欠損した三稜尖頭器である。先端部には，腹面からの細かい二次加工が施されている。右側面には腹面からの二次加工が施されている。稜上調整も施されているが，左側面には稜上からの大きな剥離がみられる。

ブロック外（第119～122図387～399・403・405）

ナイフ形石器　387～391はナイフ形石器である。387・388は横長剥片を素材とする。387は右側縁に腹面と背面からブランティングが施されている。刃部左先端部は欠損している。388は右側縁にブランティングが施されている。389は縦長剥片を素材とし，背面には自然面が残る。両側縁の基部と左側縁には腹面から二次加工，右側縁には腹面に二次加工が施されている。390は左側縁の先端部に二次加工が施されている。391は左側縁側に基部加工が施されている。上半部は欠損している。

台形石器　392・393は横長剥片を素材とする台形石器である。392は右側縁に腹面からのブランティングが施されている。刃部は欠損している。393は両側縁に折断面が残る折断剥片を素材としている。右側縁腹面にブランティングが部分的に施されている。

剥片尖頭器　第121図403は平坦な自然面を打面にして，基部は右側縁にノッチ状に加工が施されている。左側縁上半には部分的に二次加工が確認できる。先端部は欠損している。

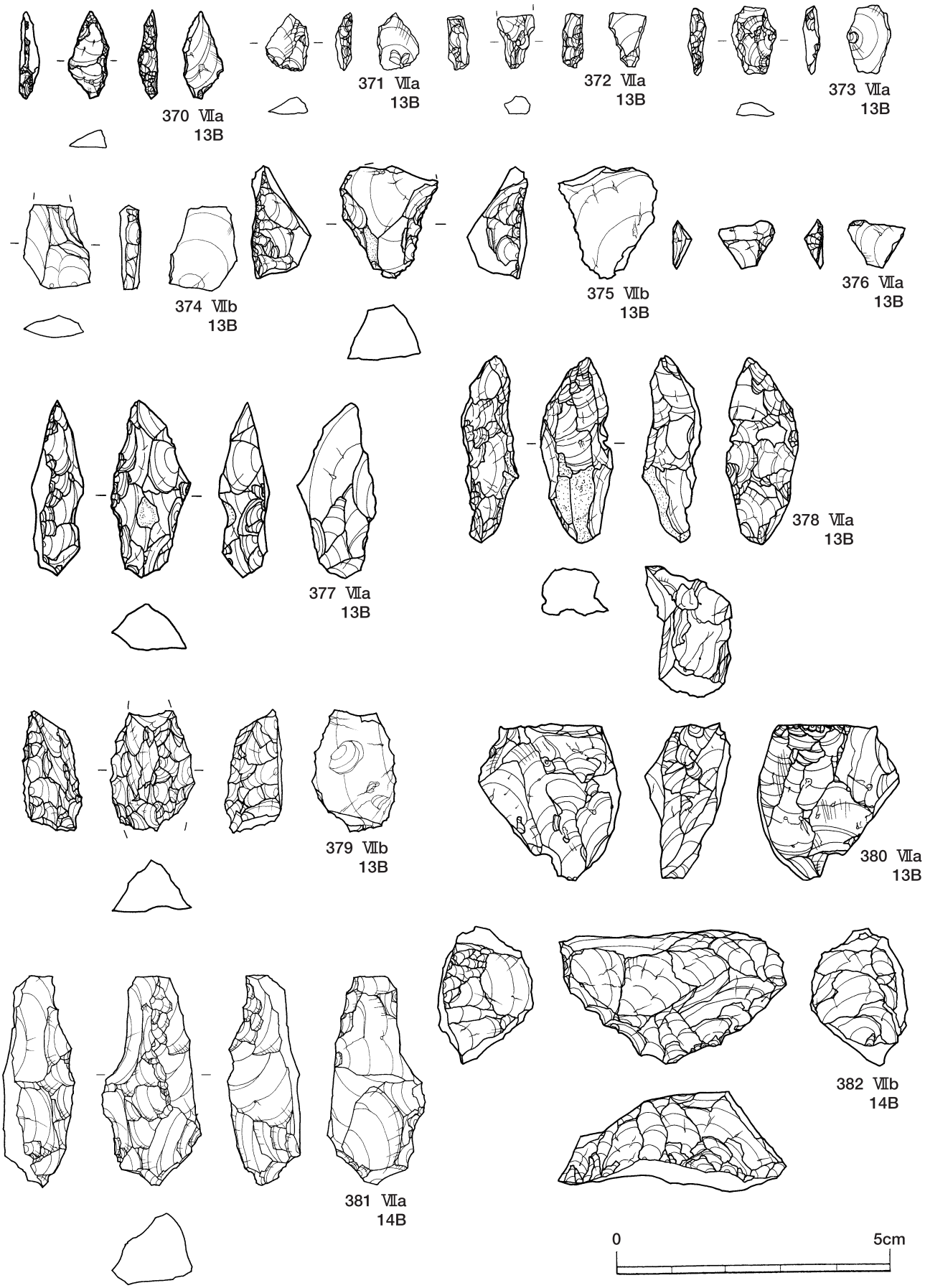
尖頭器　394は側縁からの二次加工により整形される。

三稜尖頭器　395は縦長剥片を素材とし，腹面からの二次加工により整形される。基部は欠損している。396は石材はＳＨ１である。側縁の二次加工，減厚のための腹面の平坦剥離により整形している。基部は欠損している。

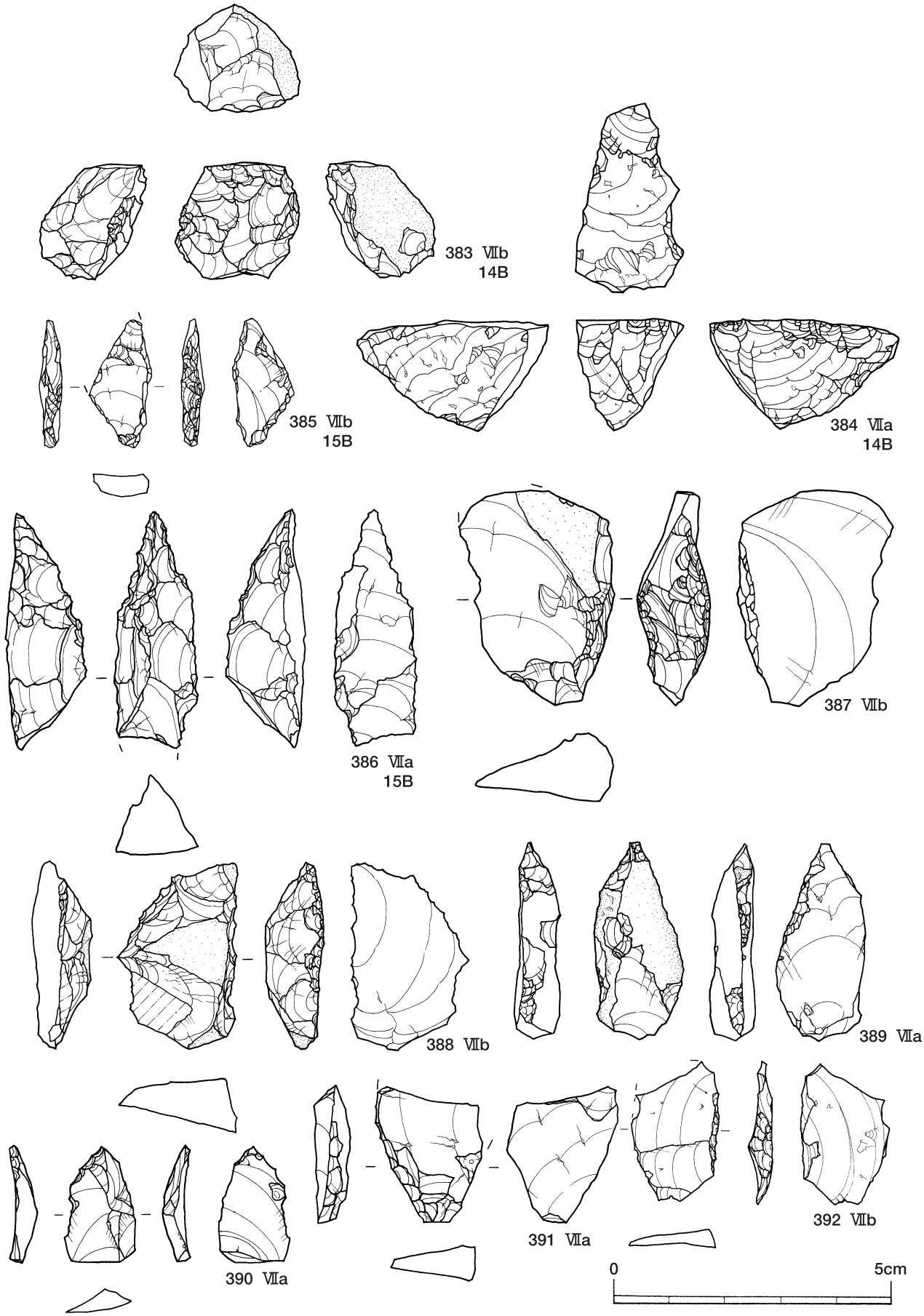
掻器　397・398は急角度の二次加工が施された掻器の一部である。

石核　399は平坦な面を打面とし，作業面を回転させながら剥片を剥いでいる石核である。

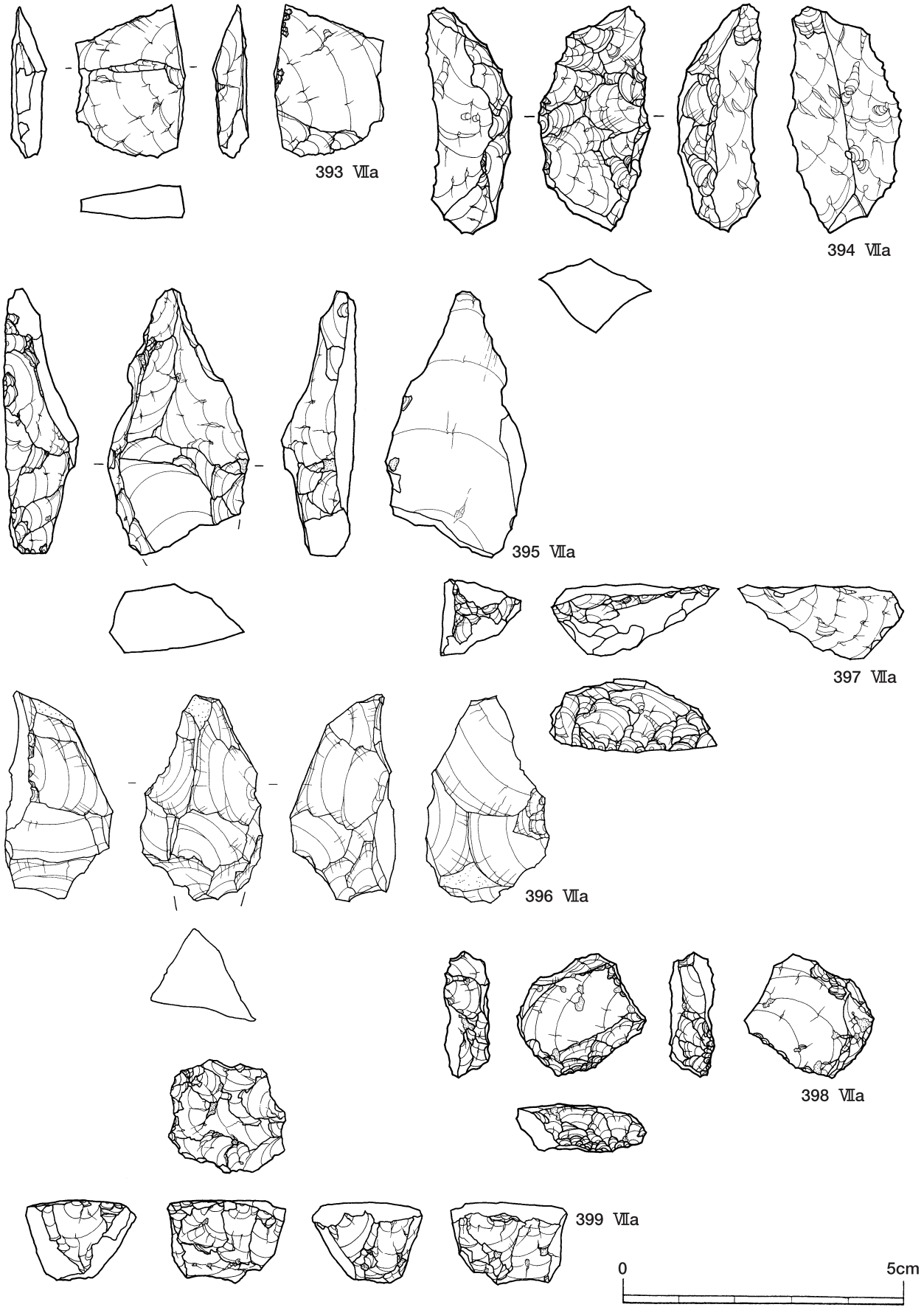
第122図405は玉髄礫使用の打面を回転させながら全ての面で剥片を剥いでいる石核である。



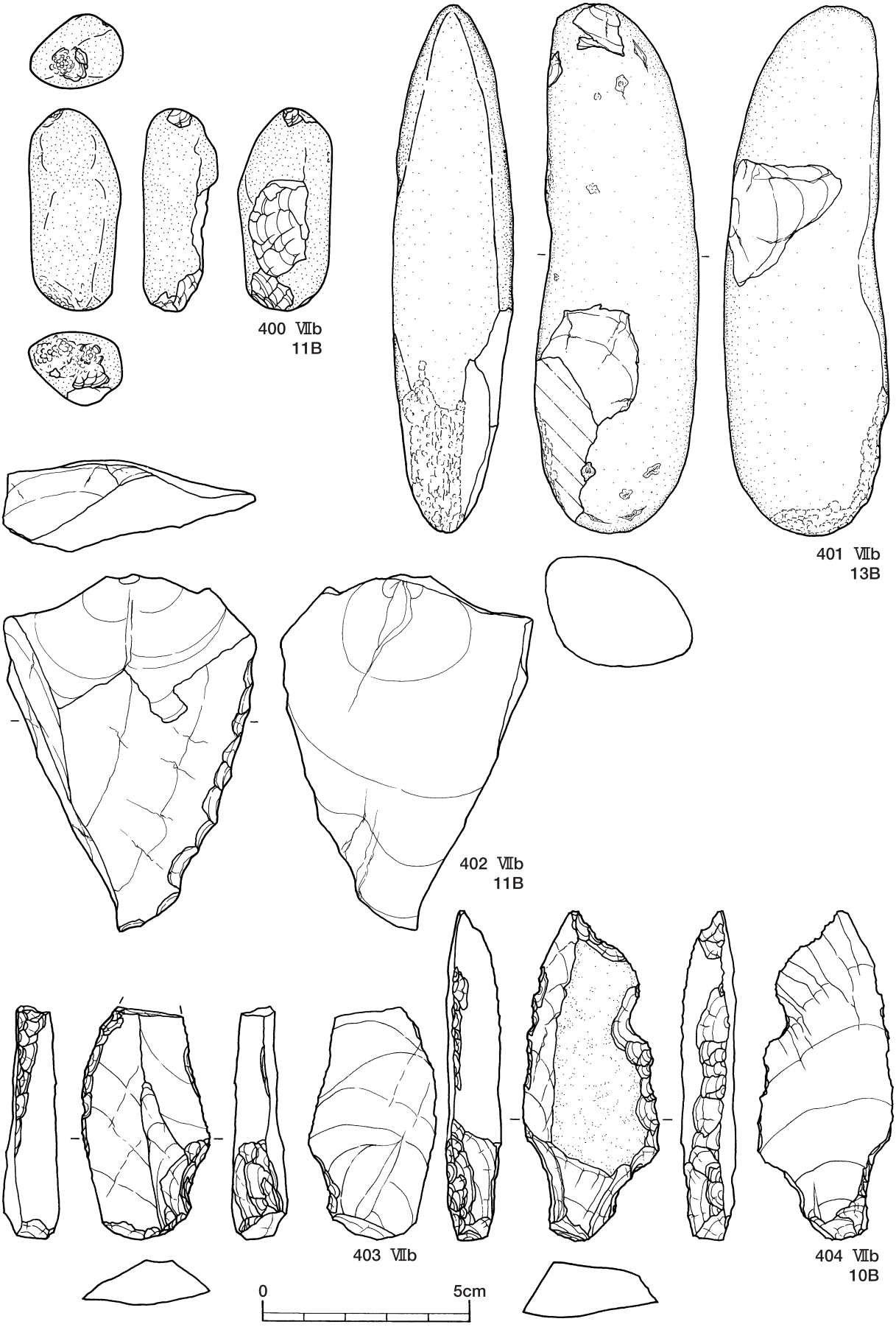
第118図　第Ⅲ文化層13・14ブロック出土石器



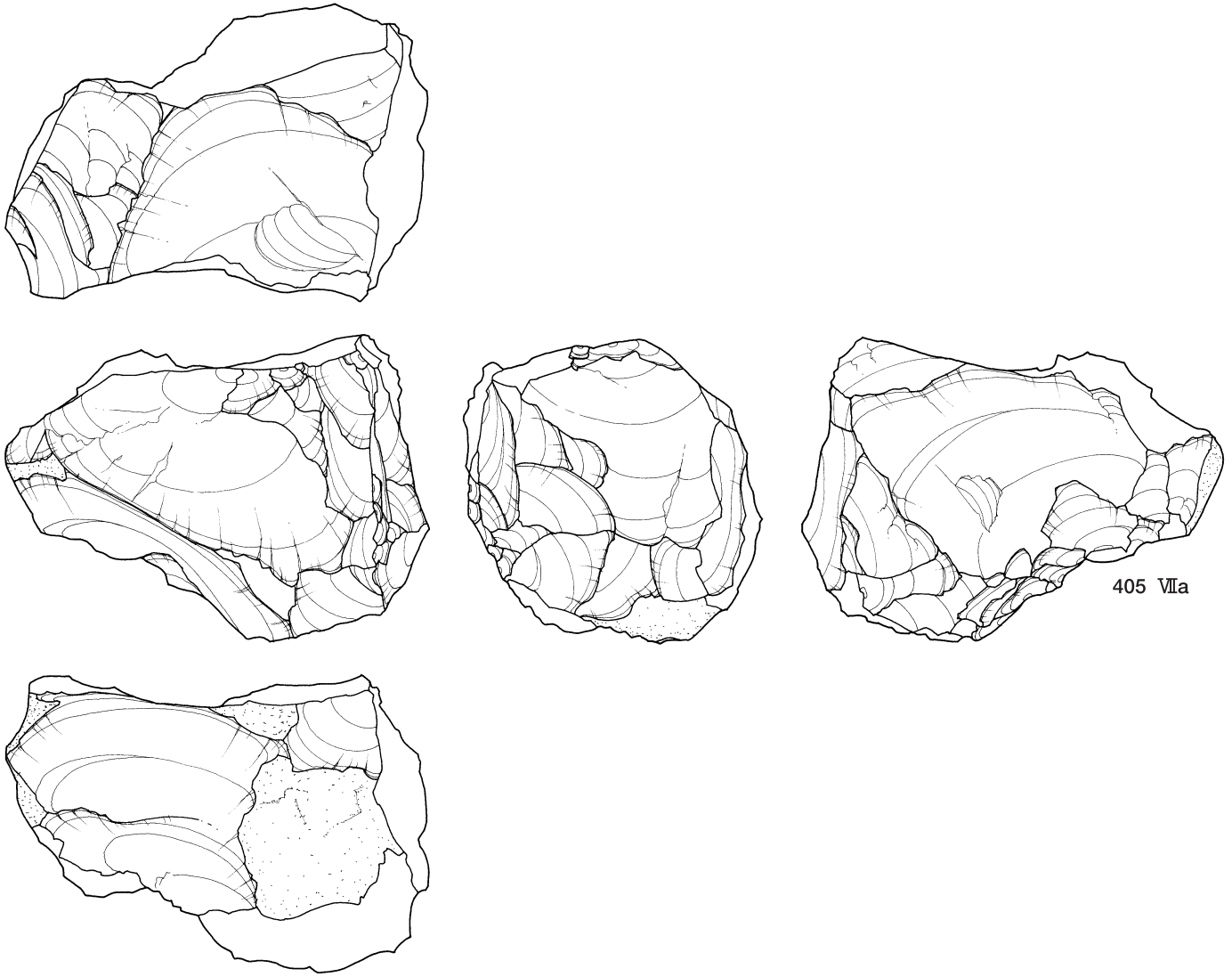
第119図　第Ⅲ文化層14・15ブロック，ブロック外出土石器



第120図　第Ⅲ文化層ブロック外出土石器（1）



第121図　第Ⅲ文化層10・11・13ブロック，ブロック外出土石器（2）



第122図　第Ⅲ文化層ブロック外出土石器（3）

第７表　第Ⅲ文化層石器観察表（1）

挿図番号	番号	ブロック	器　種	石材	区	層	標高	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
87	226	1	ナイフ形石器	OB2	F-16	Ⅶa	190.750	80	3.2	1.7	0.8	3.27	
	227	1	台形石器	OB1	F-16	Ⅶa	190.969	3	2.2	1.9	0.6	2.0	
	228		剥片	CC	H-15	Ⅶa	191.699	2	6.7	4.3	1.3	36.3	
90	229	2	ナイフ形石器	SH1B	E-16	Ⅶa	189.816	79	3	1.2	0.4	1.64	
	230	2	台形石器	SH1B	E-16	Ⅶa	190.167	64	4.1	2.2	1.2	10.5	
	231	2	三稜尖頭器	SH1A	E-16	Ⅶa	190.124	58	4.1	1.6	1.2	6.3	
	232	2	掻器	SH1B	F-15	Ⅶa	190.070	188	6.7	3.8	1.2	47.6	
	233	3	台形石器	OB1	F-17	Ⅶb	191.133	462	1.4	1.9	0.9	1.57	
	234	3	台形石器	OB1	F-17	Ⅶa	190.868	103	2.5	2	0.9	3.24	
	235	3	三稜尖頭器	SH1B	F-16	Ⅶa	190.857	86	4.9	1.3	0.9	5.4	
91	236	4	ナイフ形石器	CC	F-17	Ⅶa	190.828	250	2.9	1.1	0.7	2.6	
	237	4	ナイフ形石器	CC	F-17	Ⅶa	190.907	247	4.3	1.9	1	7.01	
	238	4	台形石器	SH1B	F-17	Ⅶa	191.055	200	2.6	1.3	0.5	1.75	
	239	4	台形石器	OB2	F-18	Ⅶb	190.615	53	1.8	1.2	0.3	0.9	
	240	4	削器・接合資料	SH1B	F・G-17	Ⅶ・Ⅷ	—	6・420他	6.2	5.5	1.3	33.88	接合
			剥片		F-17	Ⅶb	—	118					
			剥片		F-17	Ⅶa	—	406					
			剥片		F-17	Ⅶa	—	416					
	240-①	4	削器	SH5	F-17	Ⅶa	—	420	6.2	4	1.3	28.83	接合
	240-①	4	削器	SH5	G-17	Ⅷ	—	6					
92	241	4	接合資料	SH1B	F-17	Ⅶ・Ⅷ	—	518・479他	4.2	3.6	2.7	21.4	接合
	241-①	4	剥片	SH1B	F-17	Ⅶb	—	518	2.6	2.6	0.5	3.23	接合
	241-②	4	剥片	SH1B	F-17	Ⅶa	191.222	479	2.8	3	1	7.15	接合
	241-③	4	剥片	SH1B	F-17	Ⅶa	190.739	253	3.5	1.4	0.5	3.87	接合
	241-④	4	剥片	SH1B	F-17	Ⅷ	191.164	478	4.2	2.8	1.4	7.12	接合
93	242	5	三稜尖頭器	SH1B	G-17	Ⅶb	191.355	28	4.3	1.4	1.1	4.6	
	243	5	三稜尖頭器	SH1A	G-17	Ⅶb	191.360	27	4.1	1.5	0.9	5.3	
	244	5	接合資料		G-17	Ⅶb	191.413	15・76・93	5.8	2.6	1.6	17.1	
	244-①	5	ナイフ形石器	SH1B	G-17	Ⅶb	191.459	15	5.8	2.0	1.6	11.0	接合
					G-17		191.563	76					
	245	5	掻器	SH1B	G-17	Ⅶb	191.498	17	3.8	2.1	1.6	10.05	接合
			剥片		G-17	Ⅷ	191.548	40					
		5	剥片		F-17	Ⅶa	191.508	210					
	246	5	二次加工石器	SH1A	G-17	Ⅶb	191.458	11	4.7	3.6	1.1	15.39	
			剥片		G-17	Ⅷ	191.667	43					
	247	5	横長剥片	SH1B	F-18	Ⅶa	190.796	18	1.8	5	1.6	9.82	接合
			横長剥片		G-17	Ⅶb	191.406	92					
			横長剥片		G-17	Ⅶb	191.426	94					
96	248	6	ナイフ型石器	CC	I-18	Ⅶa	193.232	8	2.3	1.1	0.5	0.8	
	249	6	ナイフ型石器	CC	H-17	Ⅶb	193.095	106	2.6	1.4	0.6	1.72	
	250	6	ナイフ形石器	OB2	I-17	Ⅶb	193.326	17	3.2	1.6	0.8	4.4	
	251	6	ナイフ形石器	SA	H-18	Ⅶa	192.541	60	2.5	2.1	0.8	5.0	
	252	6	削器	OB3	H-18	Ⅶa	193.042	17	3.5	2.7	1	7.44	
	253	7	台形石器	OB1	G-18	Ⅶb	192.088	126	2.1	1.9	0.6	2.1	
	254	7	三稜尖頭器	AN1	G-19	Ⅶb	191.795	306	2.8	2.2	1.8	8.02	
	255	7	調整剥片	OB3	H-19	Ⅶa	192.109	7	2.9	1.3	2.2	2.53	
97	256	8	ナイフ型石器	OB3	G-19	Ⅶa	191.652	296	1.7	1	0.3	0.41	
	257	8	ナイフ型石器	OB3	H-19	Ⅶa	192.075	5	1.7	0.8	0.3	0.27	
	258	8	三稜尖頭器	OB3	H-19	Ⅶa	192.127	9	2.2	1.4	0.7	2.92	
	259	8	三稜尖頭器	OB3	G-19	Ⅶa	191.752	257	2.2	1.3	1.3	3.79	
	260	8	削器	OB3	G-19	Ⅶa	191.696	206	5	1.6	0.3	8.53	
	261	8	使用痕剥片	OB3	H-19	Ⅶb	191.749	292	1.5	1.9	0.3	0.67	
	262	8	使用痕剥片	OB3	H-19	Ⅶb	191.918	147	2.1	1.4	0.3	1.04	
	263	8	使用痕剥片	OB3	H-19	Ⅶb	191.825	274	1.4	1.4	0.4	0.34	
	264	8	使用痕剥片	OB3	H-19	Ⅶb	191.858	152	1.7	1.2	0.3	0.55	
	265	8	使用痕剥片	OB3	H-19	Ⅶb	191.953	209	1.6	1.7	0.5	1.01	
	266	8	使用痕剥片	OB3	H-19	Ⅶa	191.942	47	2.2	2.1	0.9	4.12	
	267	9	ナイフ形石器	SH1A	H-20	Ⅶa	192.148	6	4	2.1	0.8	7.48	
	268	9	石核	OB2	H-20	Ⅶb	192.037	30	4	1.9	0.9	18.4	
98	269		剥片尖頭器	SH4	G-18	Ⅶb	191.595	86	7.7	2.6	0.9	14.74	接合
				SH4	G-19	Ⅶb	191.464	113					
	270		剥片尖頭器	AN2	G-18	Ⅶa	191.997	7	6.1	2.3	0.9	13.6	
	271	6	剥片尖頭器	SA	H-18	Ⅶb	192.650	91	6.3	2.3	0.6	11.7	
	272	7	剥片尖頭器	SA	G-19	Ⅶa	191.587	5	5.3	2.1	0.7	8.8	
	273	6	敲石	SA	H-18	Ⅶb	192.906	65	8.2	5.4	2.8	192.9	
99	274		台形石器	OB2	G-17	Ⅶa	—	48	1.6	1	0.4	0.81	
	275		三稜尖頭器	OB2	G-18	Ⅶb	191.412	100	7.1	2.1	1.1	14.9	
102	276	10	ナイフ形石器	CC	F-24	Ⅶa	—		3.4	1.5	0.7	3.23	
	277	10	台形石器	CC	F-25	Ⅶa	—	631	1.6	0.8	0.3	0.5	

第８表　第Ⅲ文化層石器観察表（2）

挿図番号	番号	ブロック	器　種	石材	区	層	標高	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
102	278	10	三稜尖頭器	OB2	F-24	Ⅶa	191.768	70	2.9	1.2	0.9	2.7	
	279	10	スクレイパー	CC	F-24	Ⅶa	192.189	60	3.7	2.0	1.0	11.25	
106	280	11	ナイフ形石器	OB1	F-25	Ⅶb	192.933	1531	1.9	1.2	0.4	1.0	
	281	11	ナイフ型石器	OB1	F-25	Ⅶa	192.875	295	2.5	1.2	0.7	1.6	
	282	11	ナイフ形石器	OB2	F-26	Ⅶb	192.976	2093	2.4	1.5	0.4	1.6	
	283	11	ナイフ形石器	OB1	E-25	Ⅶa	192.913	28	2.8	1.5	0.7	3.0	
	284	11	ナイフ形石器	OB1	F-25	Ⅶb	192.933	1532	1.4	1.4	0.5	1.1	
	285	11	ナイフ形石器	OB2	F-26	Ⅶb	193.113	1670	2.1	1.3	0.5	1.2	
	286	11	ナイフ形石器	OB1	F-26	Ⅶb	192.920	500	2.6	1.3	0.6	1.6	
	287	11	ナイフ形石器	OB1	F-26	Ⅶb	193.248	833	1.5	1.5	0.5	1.1	
	288	11	ナイフ形石器	OB1	F-25	Ⅶa	192.913	773	2.0	1.0	0.6	1.6	
	289	11	ナイフ形石器	SH2	F-26	Ⅶa	193.198	345	3.5	2.9	0.6	10.17	
	290	11	ナイフ型石器	OB3	F-26	Ⅶa	193.165	430	4.4	1.4	1.0	5.22	
	291	11	ナイフ型石器	AN1	E-26	Ⅶa	—	432	4.2	2.4	0.9	9.73	
	292	11	ナイフ形石器	OB2	F-26	Ⅶa	193.265	137	3.4	1.3	0.6	3.3	
107	293	11	ナイフ形石器	AN1	E-26	Ⅶb	192.488	660	4.8	1.6	1.1	6.7	
	294	11	台形石器	OB1	E-25	Ⅶa	192.628	91	1.3	0.8	0.4	0.32	
	295	11	台形石器	OB1	E-25	Ⅶa	192.878	85	1.3	0.7	0.3	0.31	
	296	11	ナイフ形石器	OB2	F-25	Ⅶa	—	650	1.4	1.0	0.5	0.5	
	297	11	台形石器	OB2	E-25	Ⅶa	192.365	8	1.4	0.8	0.3	0.3	
	298	11	台形石器	OB2	F-26	Ⅶb	192.962	631	1.3	1.1	0.3	0.6	
	299	11	台形石器	OB3	F-26	Ⅶb	192.862	483	1.2	1.2	0.5	0.8	
	300	11	台形石器	OB1	F-25	Ⅶb	192.478	1352	1.4	1.2	0.4	0.61	
	301	11	台形石器	OB1	E-25	Ⅶa	192.659	52	1.4	1.2	0.6	0.86	
	302	11	台形石器	OB1	F-26	Ⅶa	193.508	308	1.5	1.2	0.4	0.7	
	303	11	台形石器	FeQU	F-26	Ⅶb	193.282	1527	1.3	1.1	0.3	0.5	
	304	11	台形石器	OB2	F-25	Ⅶb	192.981	1213	1.7	1.1	0.4	0.88	
	305	11	台形石器	OB1	F-25	Ⅶa	192.910	444	1.9	1.3	0.5	1.2	
	306	11	台形石器	OB1	F-26	Ⅶb	193.290	726	1.2	1.0	0.3	0.5	
	307	11	台形石器	OB2	F-26	Ⅶb	193.110	685	1.3	1.0	0.5	0.7	
	308	11	台形石器	OB1	F-26	Ⅶa	193.236	360	1.8	1.3	0.5	1.3	
	309	11	台形石器	OB2	F-26	Ⅶa	193.140	232	2.2	1.2	0.4	1.1	
	310	11	台形石器	OB2	F-25	Ⅶb	192.892	1076	1.7	1.9	0.4	1.34	
	311	11	台形石器	OB2	E-25	Ⅶa	193.014	185	2.0	1.3	0.5	1.6	
108	312	11	台形石器	OB2	F-26	Ⅶa	193.057	2326	1.7	1.4	0.4	1.2	
	313	11	台形石器	OB4	F-25	Ⅶa	192.959	446	1.9	1.9	0.5	1.8	
	314	11	台形石器	OB2	F-26	Ⅶb	193.070	552	1.8	1.3	0.4	1.2	
	315	11	台形石器	OB2	E-25	Ⅶa	192.884	73	1.9	1.3	0.4	1.0	
	316	11	台形石器	OB2	F-26	Ⅶb	193.193	1088	1.2	0.7	0.5	0.3	
		11	台形石器		F-25	Ⅶb	192.976	1312	1.7	1.0	0.5	0.58	
	317	11	台形石器	OB2	F-26	Ⅶb	192.984	529	1.3	1.5	0.6	0.87	
	318	11	台形石器	OB2	F-25	Ⅶb	192.830	1070	2.6	1.3	0.8	3.2	
	319	11	折断剥片	OB2	F-25	Ⅶa	192.997	507	1.3	0.9	0.4	0.6	
	320	11	台形石器	OB2	E-26	Ⅶb	192.867	813	2.0	1.9	0.6	2.6	
	321	11	折断剥片	OB2	F-25	Ⅶa	193.135	560	1.2	1.0	0.3	0.5	
	322	11	折断剥片	OB2	F-25	Ⅶa	192.815	73	0.8	1.0	0.3	0.3	
	323	11	台形石器	OB2	F-26	Ⅶb	193.046	869	1.4	1.3	0.5	0.8	
	324	11	折断剥片	OB2	F-26	Ⅶa	193.120	219	1.2	0.8	0.3	0.4	
	325	11	折断剥片	OB2	E-26	Ⅶa	—	355	2.3	1.7	0.5	2.0	
	326	11	折断剥片	OB4	E-25	Ⅶa	192.781	55	1.2	0.8	0.3	0.3	
	327	11	折断剥片	OB2	F-25	Ⅶa	192.896	430	1.8	1.2	0.5	1.1	
	328	11	折断剥片	OB2	E-26	Ⅶb	192.877	820	2.4	1.4	0.7	2.6	
	329	11	折断剥片	OB2	E-26	Ⅶa	—	400	1.9	1.1	0.5	0.9	
	330	11	折断剥片	OB1	F-26	Ⅶb	192.915	966	1.2	1.5	0.4	0.8	
	331	11	剥片	OB2	F-26	Ⅶb	193.003	1026	1.6	1.4	0.6	1.0	
	332	11	台形石器	OB2	F-26	Ⅶa	193.192	436	1.5	1.3	0.4	1.0	
109	333	11	三稜尖頭器	AN2	F-26	Ⅶb	192.908	940	7.9	1.6	1.3	15.45	接合
					F-26	Ⅶb	192.949	490					
	334	11	角錐状石器	OB2	E-25	Ⅶa	192.775	30	2.7	1.2	0.8	3.5	
	335	11	三稜尖頭器	OB2	E-26	Ⅶa	192.880	280	3.9	3.0	1.6	18.4	
	336	11	掻器	OB2	E-26	Ⅶb	193.084	843	2.9	1.4	1.0	3.8	
	337	11	掻器	AN1	E-26	Ⅶb	192.998	830	2.2	1.4	0.8	2.3	
	338	11	スクレイパー	FeQU	F-26	Ⅶb	193.189	840	3.5	2.8	0.8	10.28	
	339	11	スクレイパー	OB2	F-26	Ⅶb	192.913	607	1.2	0.9	0.4	0.4	
	340	11	スクレイパー	AN1	F-25	Ⅶa	192.818	70	3.2	3.1	1.4	7.99	
110	341	11	スクレイパー	SH2	E-26	Ⅶa	—	500	6.5	2.4	0.7	15.2	
	342	11	スクレイパー	CC	F-25	Ⅶb	192.848	970	3.4	3.74	1.1	14.47	
	343	11	使用痕剥片	CC	F-26	Ⅶb	193.297	1090	4.4	4.3	1.6	20.1	
	344	11	剥片	OB2	E-26	Ⅶa	—	576	1.3	0.7	0.3	0.3	

第９表　第Ⅲ文化層石器観察表（3）

挿図番号	番号	ブロック	器　種	石材	区	層	標高	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
110	345	11	剥片	OB2	E-26	Ⅶa	192.930	230	1.6	1.1	0.5	0.7	
111	346	11	石核	OB2	F-26	Ⅶb	192.962	530	3.6	3.2	1.0	32.26	
	347	11	石核	OB2	F-26	Ⅶb	193.292	1048	2.9	2.2	0.8	16.08	
	348	11	石核	CH	F-26	Ⅶb	193.261	1010	3.8	4.1	3.1	29.46	
112	349	11	接合資料	CC	F-25	Ⅶa	192.748	700	3.4	4.4	4.5	49.35	接合
			剥片		F-25	Ⅶb	192.460	812					
			剥片		F-25	Ⅶb	192.809	847					
			剥片		F-25	Ⅶb	192.813	829					
	349-①		使用痕剥片		E-25	Ⅶa	192.752	50	2.8	1.5	0.6	1.53	
					E-25	Ⅶa	192.656	53					
116	350	12	台形石器	OB2	E-27	Ⅶa	193.258	40	1.1	0.8	0.2	0.2	
	351	12	ナイフ型石器	OB2	E-27	Ⅶa	192.995	18	1.7	0.7	0.5	0.5	
	352	12	ナイフ形石器	SH3	E-28	Ⅶb	192.841	258	4.6	1.4	1.2	5.8	
	353	12	三稜尖頭器	OB2	—	—	—	不明	3.2	1.4	0.8	2.6	
	354	12	三稜尖頭器	OB1	E-27	Ⅷ	192.523	不明	3.0	1.6	0.9	5.0	
	355	12	三稜尖頭器	SH4	E-27	Ⅷ	192.628	550	3.5	1.0	0.9	3.8	
	356	12	三稜尖頭器	OB1	E-27	Ⅶb	192.679	470	2.9	1.3	1.1	3.2	
	357	12	三稜尖頭器	OB1	D-27	Ⅶb	191.400	190	3.8	1.6	1.3	8.3	
	358	12	三稜尖頭器	OB2	D-27	Ⅶb	192.395	281	2.8	1.4	1.2	3.7	
	359	12	三稜尖頭器	OB2	C-27	Ⅶa	191.290	23	3.6	1.9	1.2	5.43	
	360	12	三稜尖頭器	OB1	E-27	Ⅷ	192.448	330	2.9	1.3	1.0	3.3	
117	361	12	三稜尖頭器	OB1	E-27	Ⅷ	192.611	555	3.0	1.0	1.1	3.2	
	362	12	三稜尖頭器	OB2	E-27	Ⅶb	192.677	500	3.4	1.2	1.3	4.3	
	363	12	三稜尖頭器	OB2	D-27	Ⅶb	192.380	145	3.0	1.3	0.9	2.36	
	364	12	三稜尖頭器	OB1	D-27	Ⅷ	192.497	377	3.8	1.0	0.9	2.3	接合
					D-27	Ⅷ	192.445	379					
	365	12	尖頭器	OB2	D-27	Ⅷ	192.420	300	2.8	1.8	1.4	5.2	
	366	12	三稜尖頭器	OB1	D-27	Ⅶb	191.402	191	2.8	1.2	1.4	5.8	
	367	12	石錐	OB2	E-27	Ⅶb	192.658	490	2.6	0.9	0.6	1.8	
	368	12	尖頭器	OB2	E-27	Ⅶb	192.663	510	3.3	2.4	1.2	8.4	
	369	12	石核	CC	D-27	Ⅶb	191.917	183	6.0	4.1	2.9	66.41	
118	370	13	ナイフ形石器	OB3	F-28	Ⅶa	194.227	79	1.6	0.7	0.3	0.3	
	371	13	ナイフ型石器	OB2	E-27	Ⅶa	193.806	109	1.0	0.8	0.3	0.15	
	372	13	ナイフ型石器	OB2	E-27	Ⅶa	193.807	158	1.0	0.7	0.4	0.24	
	373	13	ナイフ型石器	OB2	E-27	Ⅶa	193.450	71	1.3	0.8	0.3	0.24	
	374	13	ナイフ型石器	CC	E-28	Ⅶb	194.088	717	1.5	1.2	0.4	0.8	
	375	13	台形石器	OB4	F-27	Ⅶb	193.738	33	2.1	1.9	1.1	2.58	
	376	13	台形石器	OB2	E-27	Ⅶa	194.025	204	1.0	0.8	0.3	0.2	
	377	13	ナイフ形石器	OB1	E-28	Ⅶa	194.264	300	3.1	1.4	0.9	2.9	
	378	13	三稜尖頭器	OB1	F-28	Ⅶa	194.341	40	3.3	1.3	0.7	3.5	
	379	13	三稜尖頭器	OB1	E-28	Ⅶb	193.384	194	2.1	1.5	0.9	3.5	
	380	13	石核	OB2	E-28	Ⅶa	194.136	270	2.8	2.6	0.8	8.32	
	381	14	三稜尖頭器	OB1	D-28	Ⅶa	192.255	133	3.8	1.8	1.2	6.7	
	382	14	掻器	OB2	D-28	Ⅶb	192.270	398	4.3	2.3	1.8	14.3	
119	383	14	石核	OB1	D-28	Ⅶb	192.012	273	2.5	2.1	1.5	8.35	
	384	14	細石刃核	OB2	D-28	Ⅶa	192.163	90	3.5	2.0	1.6	10.4	
	385	15	ナイフ型石器	OB2	E-29	Ⅶb	193.925	313	2.3	1.1	0.4	0.86	
	386	15	三稜尖頭器	OB1	E-29	Ⅶa	193.186	317	4.2	1.5	1.4	7.0	
	387		ナイフ形石器	CC	F-24	Ⅶb	191.905	320	3.9	2.6	1.0	9.4	
	388		ナイフ形石器	SH1A	C-27	Ⅶb	191.212	35	3.3	2.1	1.0	6.1	
	389		ナイフ形石器	CC	F-23	Ⅶa	191.622	32	3.5	1.5	0.7	3.7	
	390		ナイフ形石器	FeQU	G-25	Ⅶa	—	10	2.1	1.3	0.4	0.9	
	391		ナイフ形石器	AN1	C-26	Ⅶa	190.718	21	2.5	2	0.7	3.36	
	392		台形石器	OB2	F-25	Ⅶb	192.719	1201	2.5	1.6	0.4	1.14	
120	393		台形石器	OB2	G-23	Ⅶa	191.475	5	2.6	1.9	0.7	3.2	
	394		尖頭器	OB2	D-25	Ⅶa	191.433	40	4.0	2.0	1.3	8.4	
	395		角錐状石器	OB1	E-24	Ⅶa	191.353	41	4.7	2.5	1.2	12.14	
	396		三稜尖頭器	SH1A	E-24	Ⅶa	191.485	43	3.7	2.2	1.9	11.15	
	397		掻器	OB2	D-26	Ⅶa	191.989	64	2.9	1.3	1.0	4.0	
	398		掻器	OB2	C-26	Ⅶa	190.768	35	2.1	1.9	0.7	3.5	
	399		石核	OB2	C-27	Ⅶa	191.092	36	2.0	1.8	1.5	5.9	
121	400	11	敲石	SA	E-26	Ⅶb	192.836	866	4.9	2.2	1.6	24.9	
	401	13	石斧未製品	SH1A	E-28	Ⅶb	193.941	600	12.6	3.7	2.6	187.1	
	402	11	二次加工石器	SH4	F-26	Ⅶb	193.043	860	8.5	5.9	2.1	95.7	
	403		剥片尖頭器	AN2	F-23	Ⅶb	190.336	1985	5.6	3.0	1.1	22.5	
	404	10	剥片尖頭器	SH3	F-24	Ⅶb	191.851	300	7.9	3.2	1.3	36.1	
122	405		石核	CC	F-23	Ⅶa	191.256	2110	6.2	4.4	4.5	129.75	

第Ⅶ章　第Ⅳ文化層の調査

第１節　調査の概要とブロック

旧石器時代第Ⅳ文化層はⅦａ層を主とする細石刃文化石器群である。

Ａ地区で２ヶ所，Ｂ地区で５ヶ所の石器群ブロックを認識した。出土した遺物は細石刃・細石刃核などが主体であった。使用されている石材は各ブロックにより違いがみられた。

石器群ブロックの認定とその特徴

細石刃と細石刃核を特徴とする石器群の，基本的な出土位置はⅦａ層であるが，Ⅶｂ層まで出土している。調査時において，Ⅶａ層として取り上げた遺物と，Ⅶｂ層として取り上げたものとを，それぞれ出土分布図を作成して検討した。その結果，出土区によってはⅦａ層だけが存在し，Ⅶｂ層がないものが認められ，加えて，一部の石器群はⅦａ層の同一石材，同一地区のものがⅦａ層とⅧ層が連続した状況もあることから，実際の層の変化と遺物取り上げ層が対応していない部分の存在も考慮する必要が生じた。そこで，Ⅶａ層とⅦｂ層の総合的な遺物分布と，取り上げた各Ⅶａ層とⅦｂ層の石器群の中で，細石刃と細石刃核のまとまりを基礎として第Ⅳ文化層のブロックを認識することとなった。以下は各ブロックの特徴である。石材別出土分布はⅦ層の全体図とした。

第１ブロック

Ａ地区Ｆ－17区付近で集中するブロックである。径は９×５ｍの楕円形の大きさであり，細石刃が集中する。

第２ブロック

Ａ地区Ｇ・Ｈ－19区に位置する。径は12×７ｍの楕円形の広がりをもつ。細石刃だけでなく，特に細石刃核が多く出土している。

第３ブロック

Ｂ地区のＥ・Ｆ－23区に所在する。径は８×６ｍであり，三船産黒曜石を石材とする遺物が集中して出土している。細石刃核より細石刃の数が多い。

第４ブロック

径14×12ｍに比較的散在したブロックである。細石刃・細石刃核のほか石鏃も１点出土している。主要石材は多種である。

第５ブロック

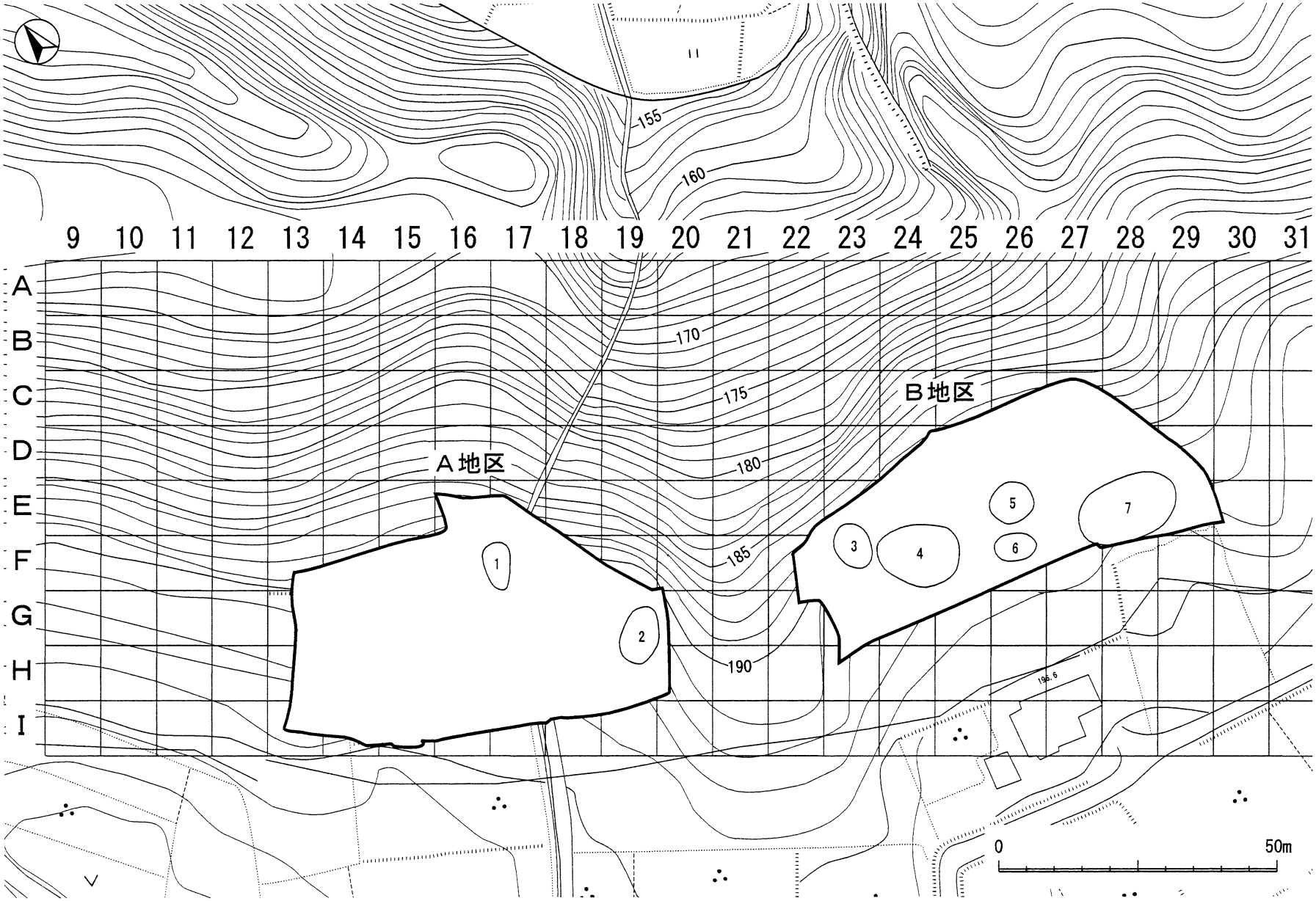
径約８ｍの円形に出土分布がみられる。三船産黒曜石と上牛鼻産黒曜石の石材が主であり，少量の細石刃・細石刃核が出土している。

第６ブロック

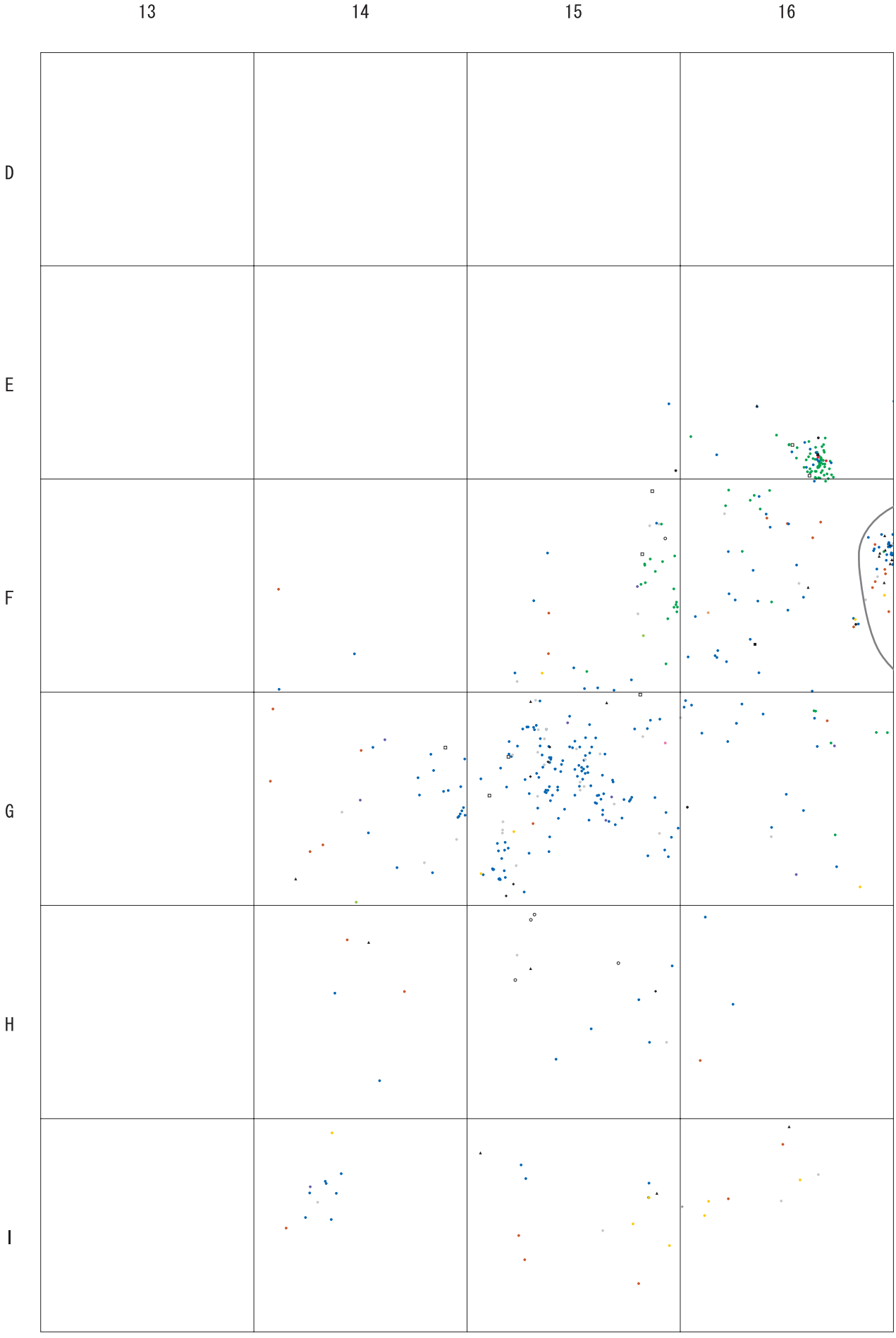
第５ブロックの西側に接しており，ブロックの広さも同程度である。細石刃が多く出土しており，細石刃核は出土していない。

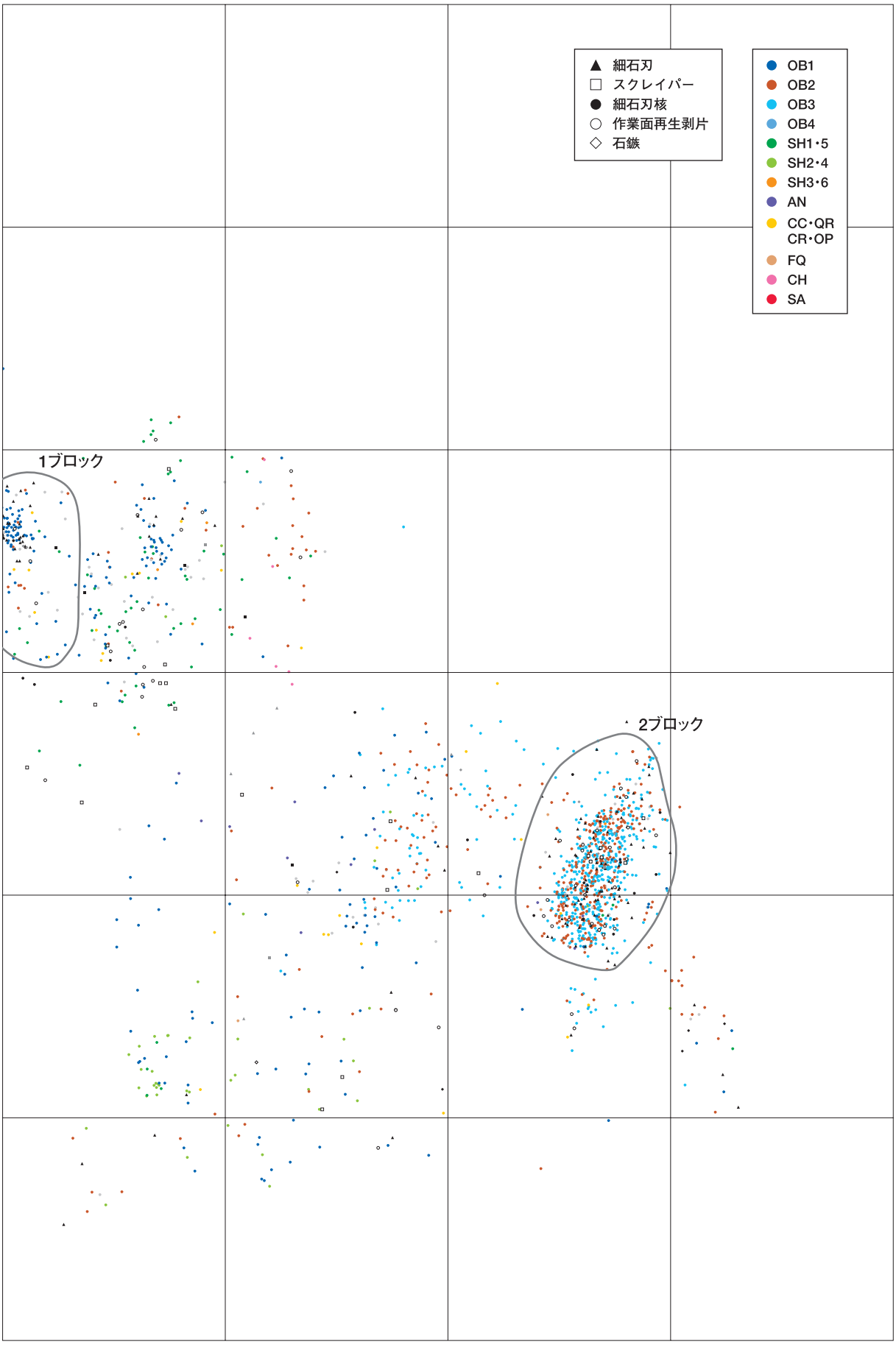
第７ブロック

Ｅ－28区を中心として，径18×12ｍの広さを有する。三船産黒曜石が多いブロックであり，特に細石刃核が集中して出土している。



第123図　第Ⅳ文化層のブロック位置図


13
14
15
16
D
E
F
G
H
I



第124図　第Ⅳ文化層Ａ地区遺物出土状況

第２節　第Ⅳ文化層Ａ地区の石器群

第１ブロック及びその周辺（第126図406～411）

細石刃

406～409は細石刃である。いずれも頭部が残るものであり，406・407は尾部のみ折断して除去したものである。408は完形，409は尾部をわずかに欠損する。いずれも使用痕は確認できない。石材は上牛鼻産黒曜石（406）と桑ノ木津留・上青木系黒曜石（407・408）のほか，三船産黒曜石（409）が使用されている。

細石刃核

410は上牛鼻産黒曜石製の細石刃核である。平坦な打面から両側面に整形剥離を施したものであり，細石刃剥離前に打面調整は施されていない。船野型細石刃核である。作業面は急角度になっており，破損というより作業面再生剥片の可能性も考えられる。

石鏃

頁岩製で二等辺三角形を呈し，基部は平基で先端部が錐状に細く尖る特徴は，薩摩火山灰下位の特徴と一致している。縄文草創期該当のものである。

第２ブロック（第128図412～423）

細石刃

412～414は細石刃である。いずれも桑ノ木津留・上青木系の良質な黒曜石を使用している。412の打面は平坦な自然礫面が残る。このうち412・414の左側縁にはわずかな使用痕が観察される。

細石刃核

415～421は細石刃核であり，422・423は作業面再生剥片である。使用されている石材は全て同種のもので，黒色で平坦な自然礫面と小角礫が特徴的ないわゆる「霧島系」と呼ばれるものである。本報告では桑ノ木津留・上青木系と同一の分類で区分している。

415・416は小角礫の平坦な自然面を打面にして，そこから両側面に二次加工を施して整形し，作業面は小口面に一面設定している。船野型細石刃核である。

417は平坦な剥離面を打面としており，同様にそこから両側面の整形加工を行っている。作業面は前後二面設定され，両面で細石刃剥離が行われている。打面調整は施されない。船野型である。

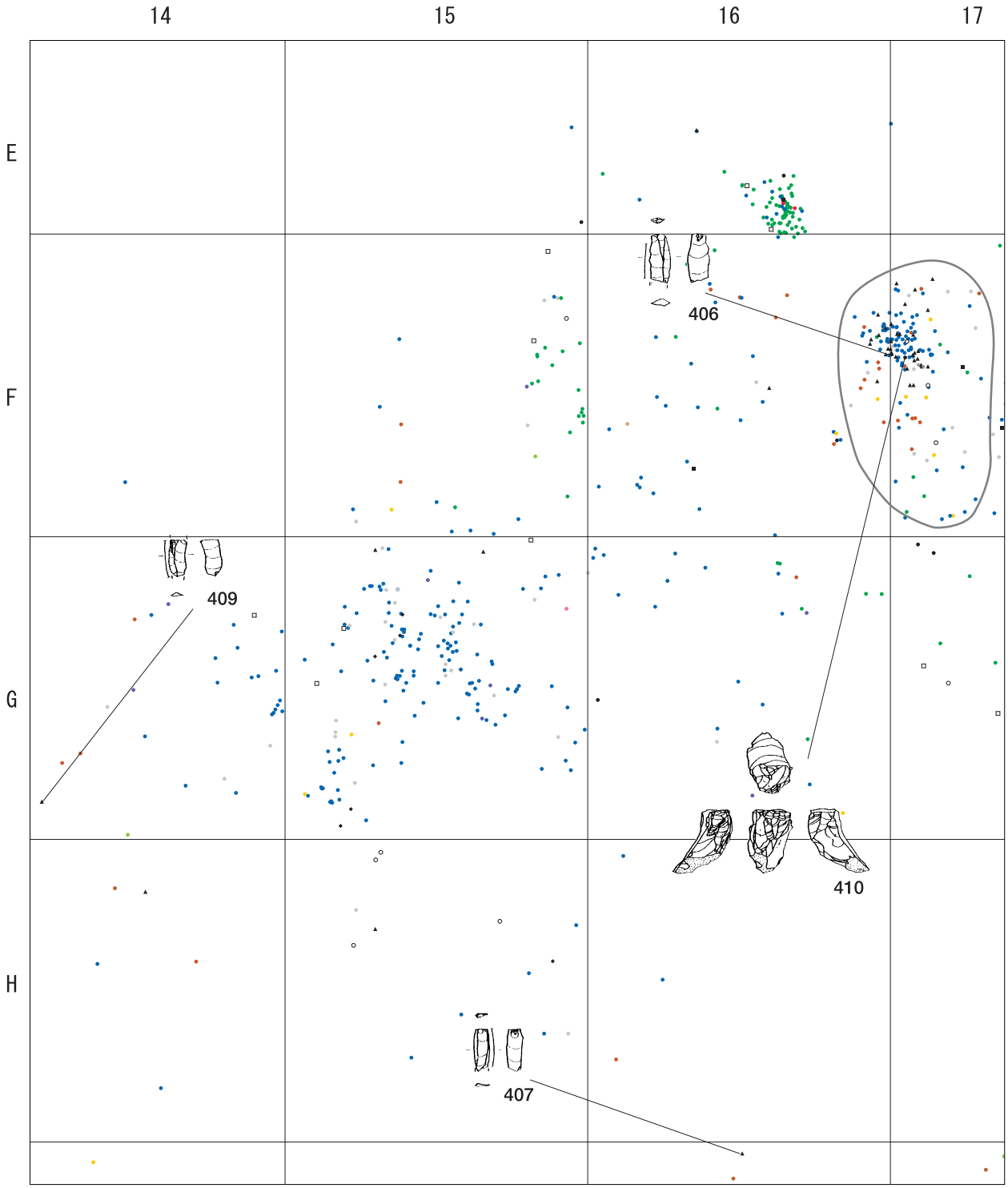
418も平坦な剥離面を打面とする同様の細石刃核であるが，下縁からの調整剥離が施されており正面形はＶ字形となっている。

419は後背面の平坦な自然礫面を打面にした厚みのある剥片を素材とし，その主要剥離面を打面にして両側面の整形剥離を施した船野型細石刃核である。打面中央のわずかに膨らんだ部分には擦痕が認められる。

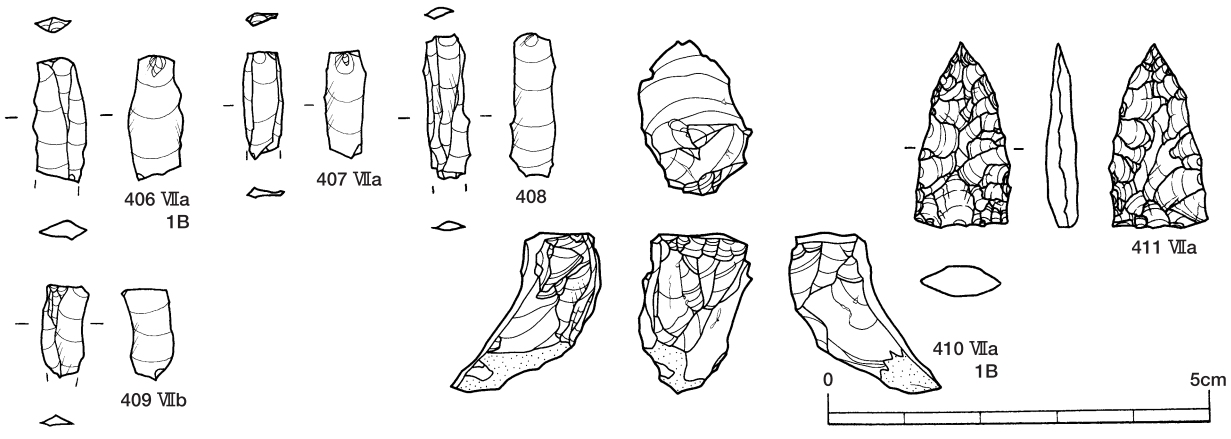
420は屈曲した各平坦な打面から両側面の整形加工を施したものであり，前後両面に作業面がある。打面には419と同様に擦痕が観察される。擦痕は各作業面に接した打面と，中央の屈曲した頂部に認められる。

421は打面に側面方向からの調整剥離が施されたものである。後背部を欠損している。

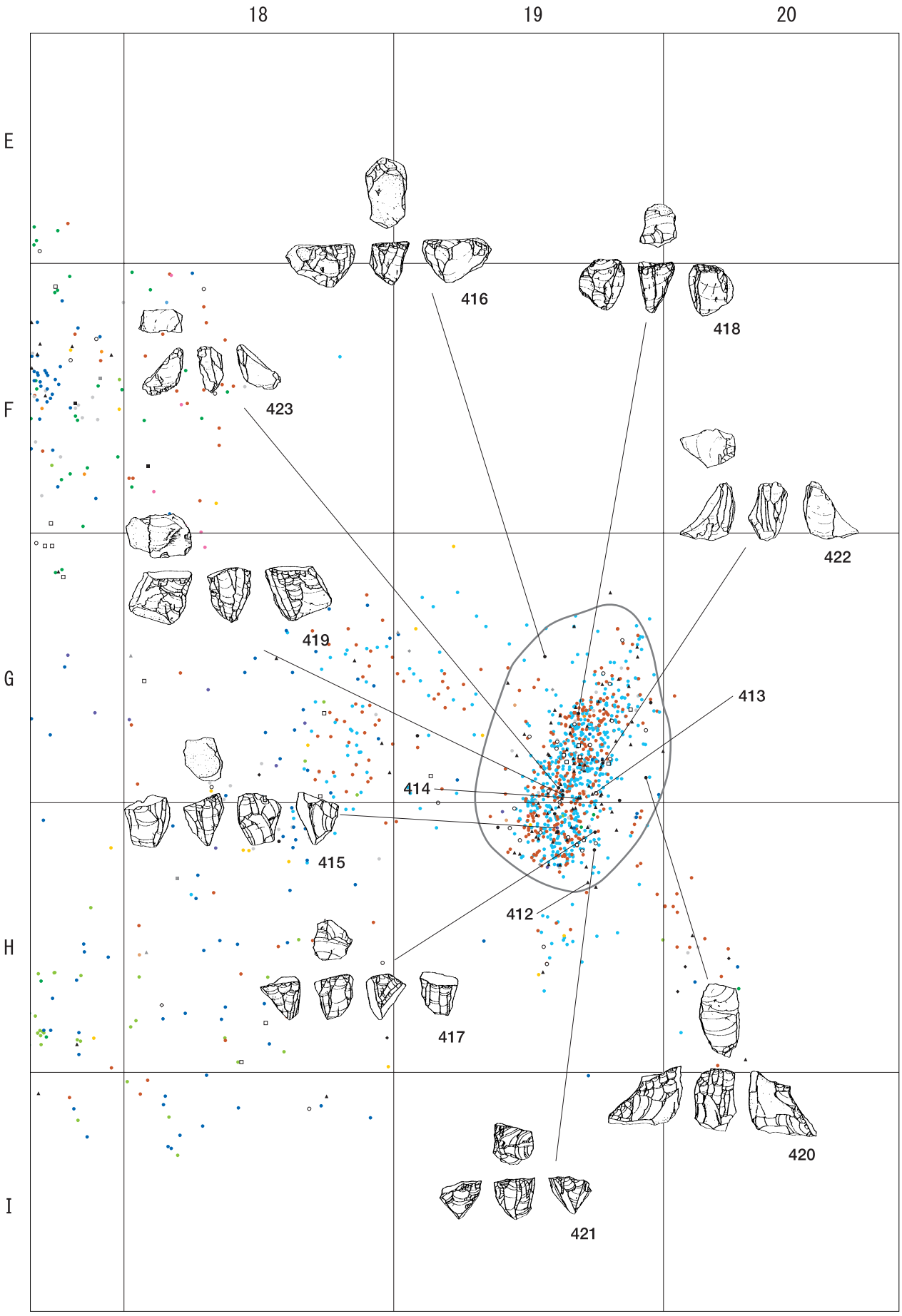
422・423は正面に作業面を有するが，打面からの剥離により剥がされた作業面再生剥片である。船野型細石刃核に特徴的なものである。



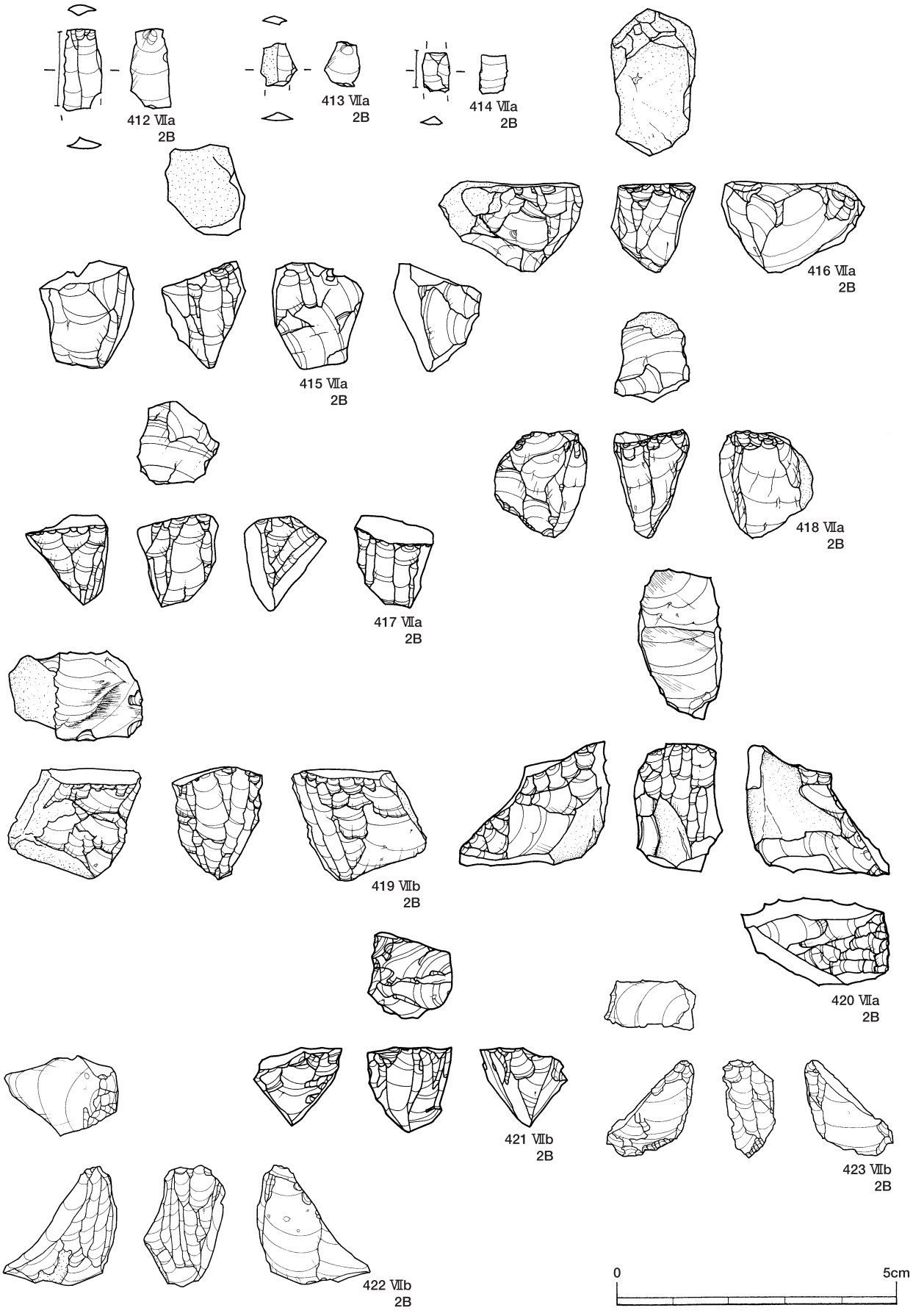
第125図　第Ⅳ文化層１ブロックとその周辺石器群出土分布図



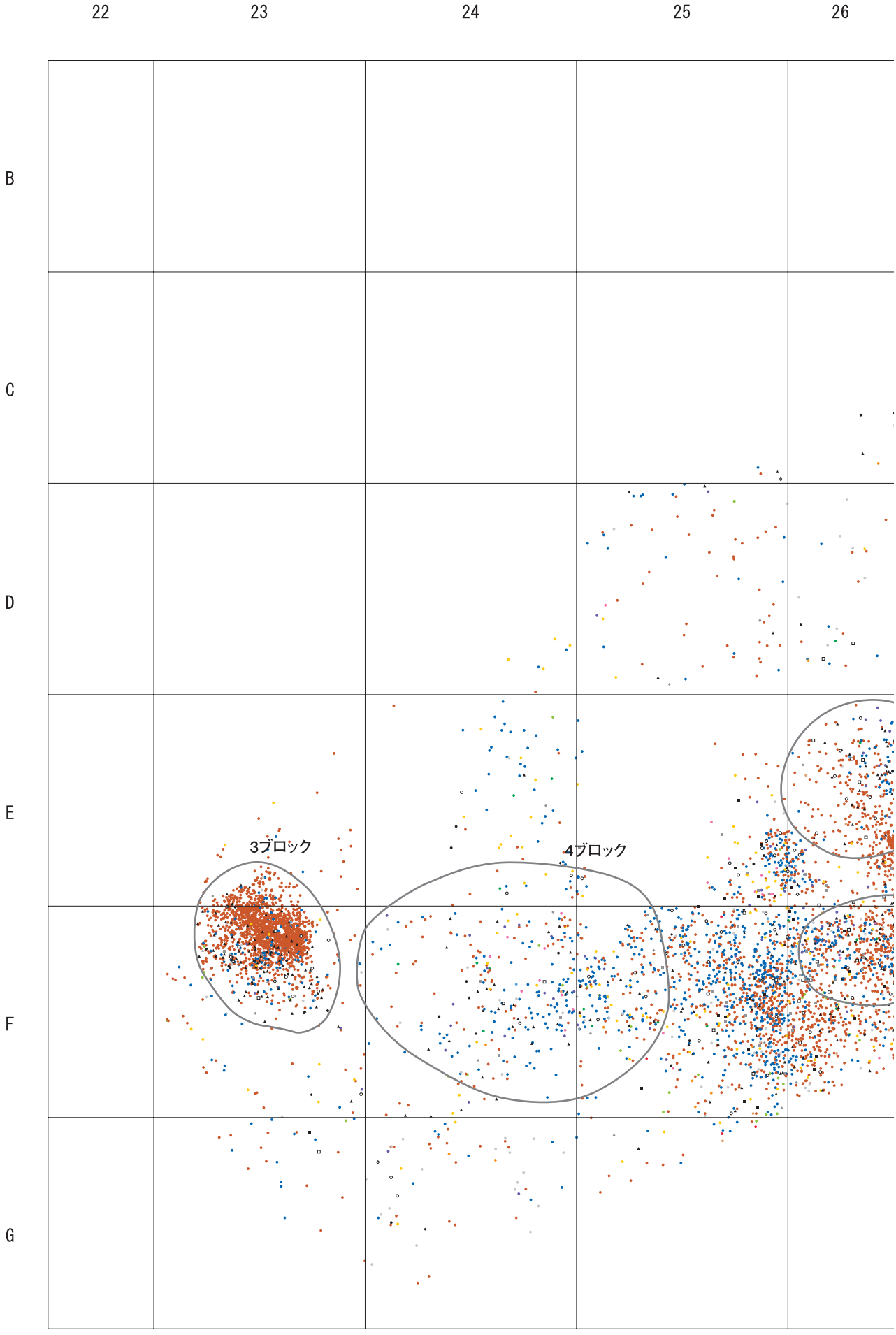
第126図　第Ⅳ文化層１ブロック及びその周辺出土石器

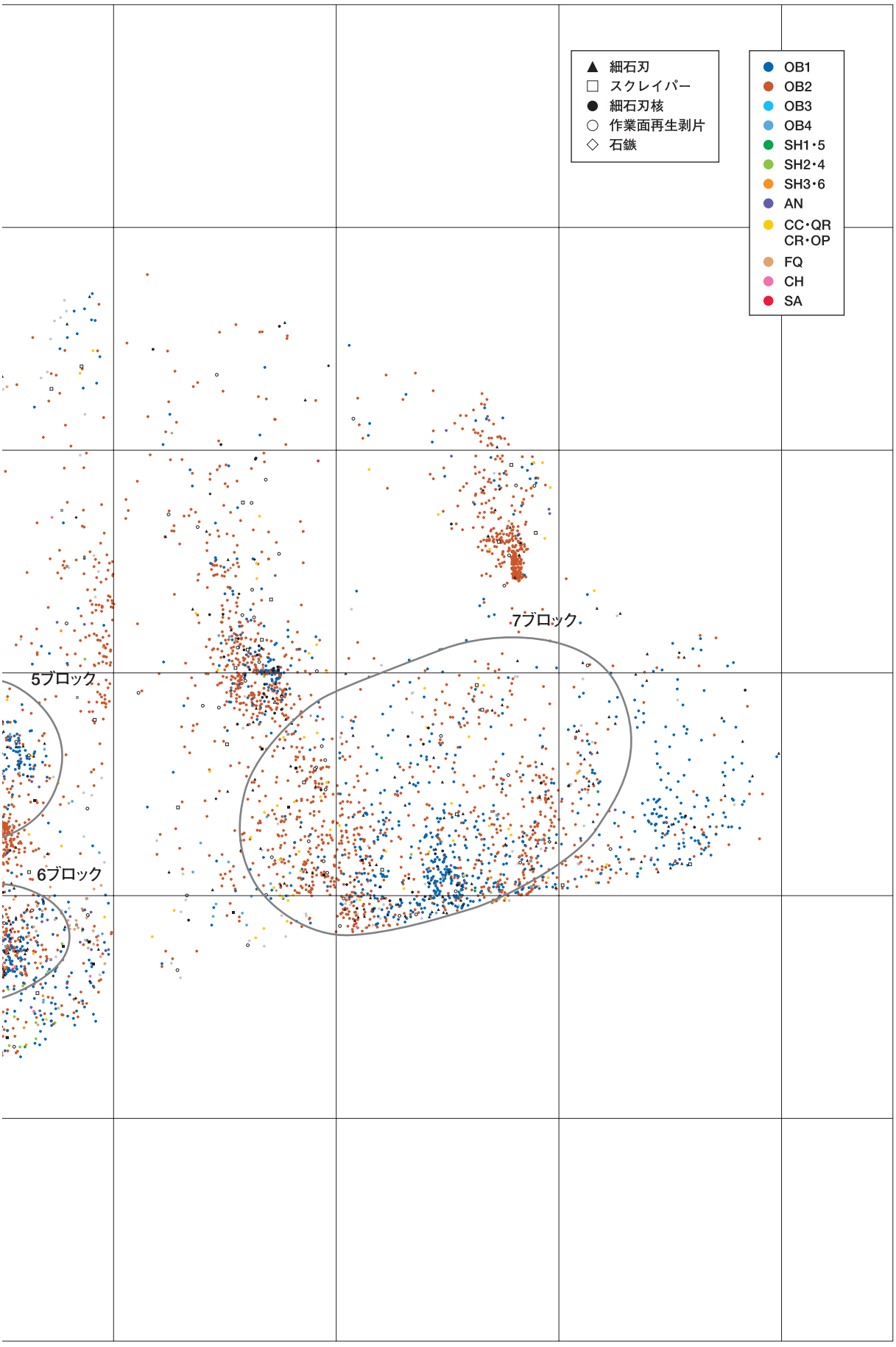


第127図　第Ⅳ文化層 2 ブロック主要石器



第128図　第Ⅳ文化層 2 ブロック出土石器


22
23
24
25
26
B
C
D
E
F
G
3ブロック
4ブロック



第129図　第Ⅳ文化層Ｂ地区遺物出土分布図

第 3 節　第Ⅳ文化層Ｂ地区の石器群

Ｂ地区では第 3 ～ 7 までの計 5 ヶ所のブロックが認識できた。

第 3 ブロック（第131図424～443）

三船産黒曜石製の遺物の集中度が高いブロックである。このほか上牛鼻産黒曜石が少量散在的に分類している。細石刃が多く出土している。

細石刃

424～439は細石刃である。使用されている石材は大部分が三船産黒曜石製（424・426～428・431～435・438～439）であり，一部桑ノ木津留・上青木系黒曜石（425・436）と，上牛鼻産黒曜石（429・430）が認められる。大部分は尾部を除却した頭部であり，中間部は433・436・438の 3 点というように少ない。片側縁辺に使用痕が認められるもの（431・432）もみられる。また，433の打面は調整打面である。

細石刃核

440は上牛鼻産黒曜石製であり，細石刃作業面とほぼ平行する後背面を有する扁平な細石刃核である。打面は後方に傾斜し，作業面長に比較して打面幅が広く，いわゆる野岳・休場型細石刃核である。片側面に自然礫面が残る。

441は三船産黒曜石を石材とするものである。打面から側面に行われる整形は施されず，逆に側面から打面の調整が施されている。また，細石刃剥離前に打面調整が行われており，これらの特徴から船野型ではなく，野岳・休場型細石刃核と考えられる。

442は上牛鼻産黒曜石製であり，作業面は正面と左側面にみられ，各打面には細石刃剥離前の打面調整が施されている。

石鏃

443は安山岩製の石鏃であり，基部は凹基である。ブロック外の出土である。

第 4 ブロック及びその周辺（第132図444～454）

第 4 ブロックは第 3 ブロックと異なり，出土遺物があまり集中せず散在する分布であり，また石材も上牛鼻産黒曜石が多いという違いがみられる。

細石刃

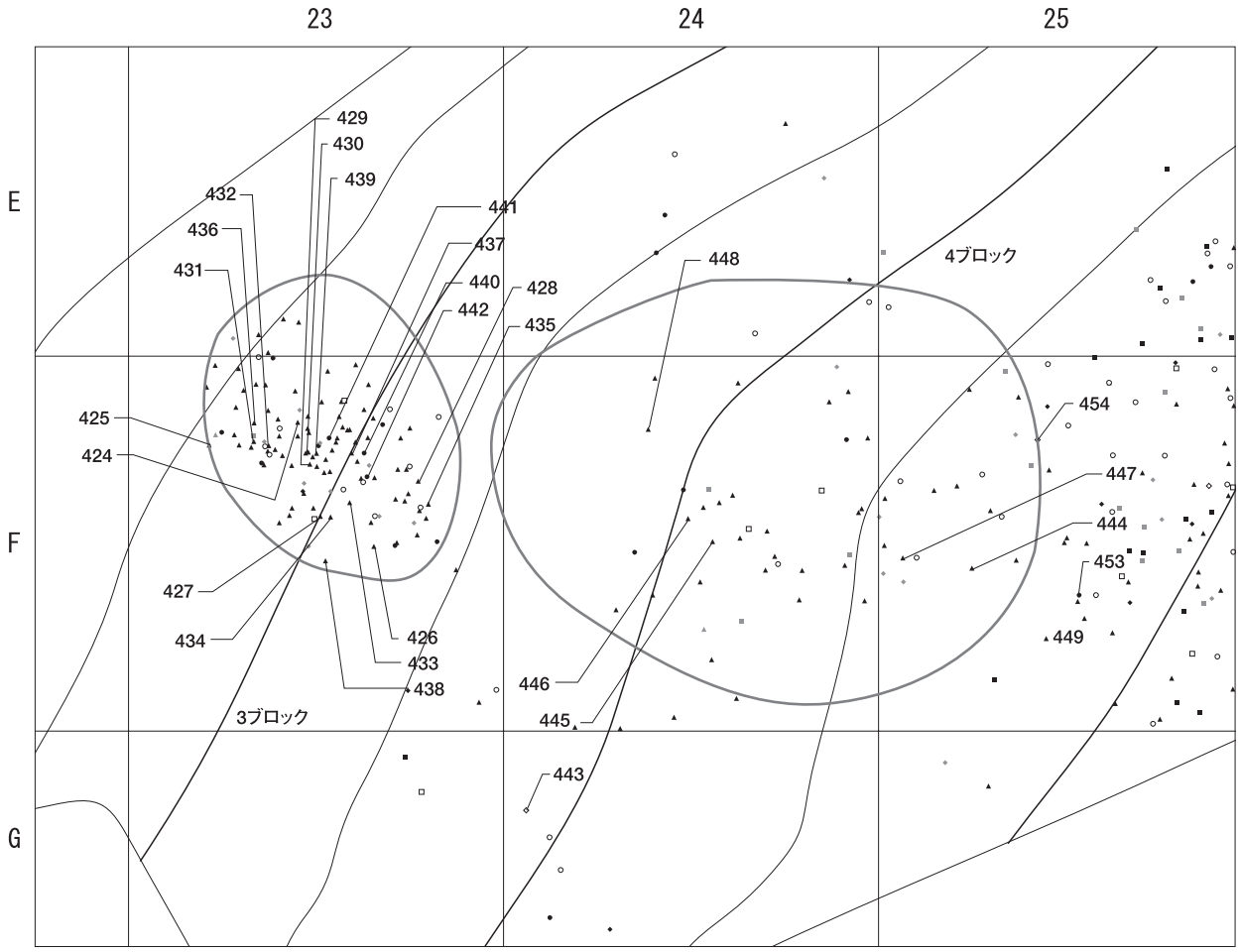
出土した細石刃は圧倒的に上牛鼻産黒曜石を石材とするものが多く（444～449），このほかに三船産黒曜石（450）や，肉眼的な観察ではあるが，腰岳産黒曜石と考えられるもの（451・452）がみられる。この中には縁辺に使用痕が認められるもの（444・445・448）がある。また，腰岳産と推定される 2 点の細石刃は幅が狭く，頭部調整が顕著に観察される。

細石刃核

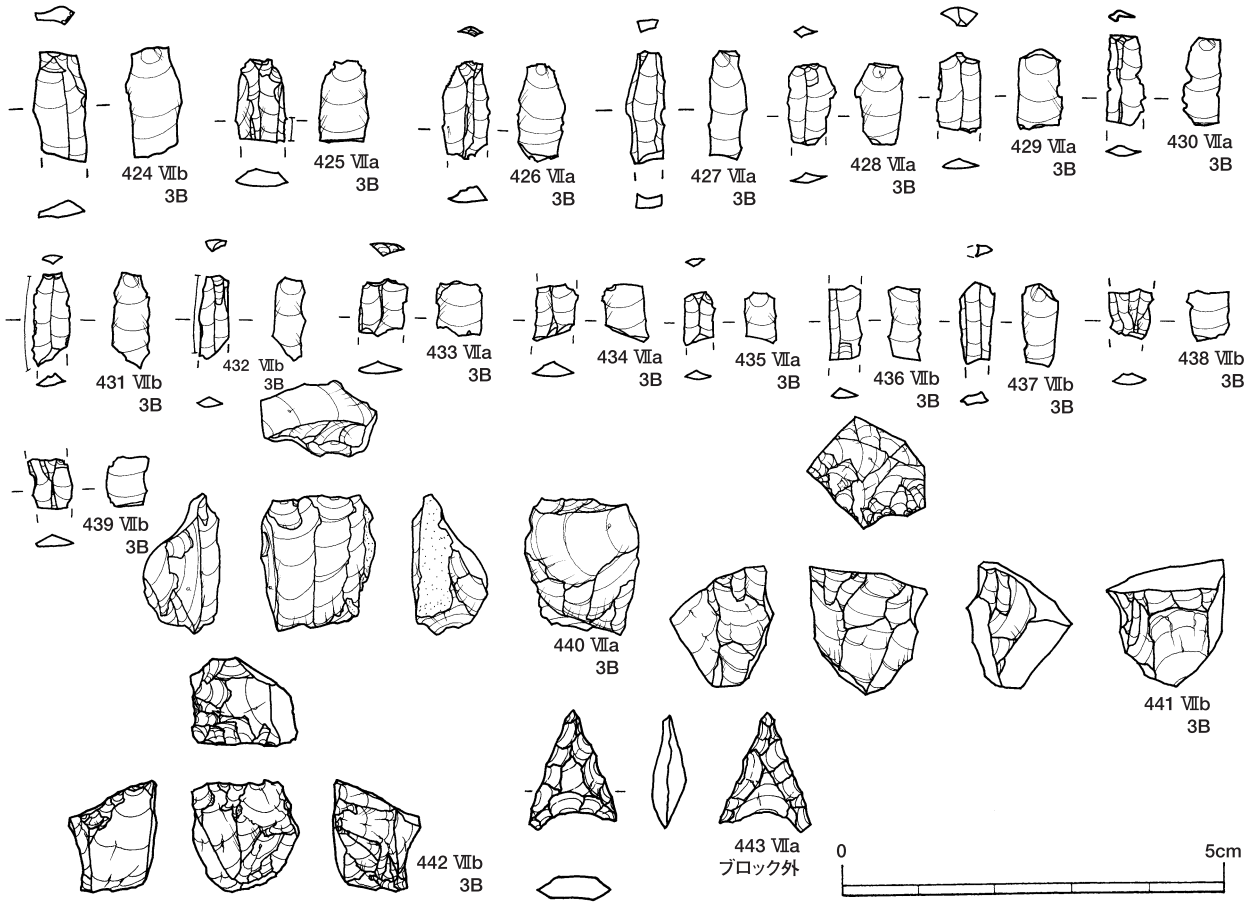
453は腰岳産黒曜石と推定される石材が使用されており，細石刃作業面と平行する後背面を有し後方に傾斜する打面である。作業面長に比較して打面幅が広い特徴も認められることから，野岳・休場型と考えられる。

石鏃

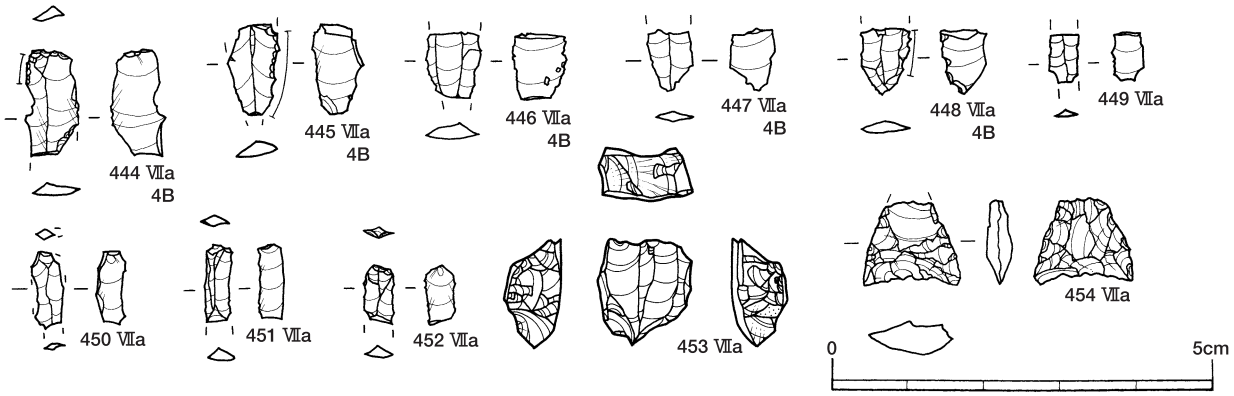
454は安山岩製で基部はわずかに凹む。先端部は使用による衝撃剥離が認められ，そこから欠損している。



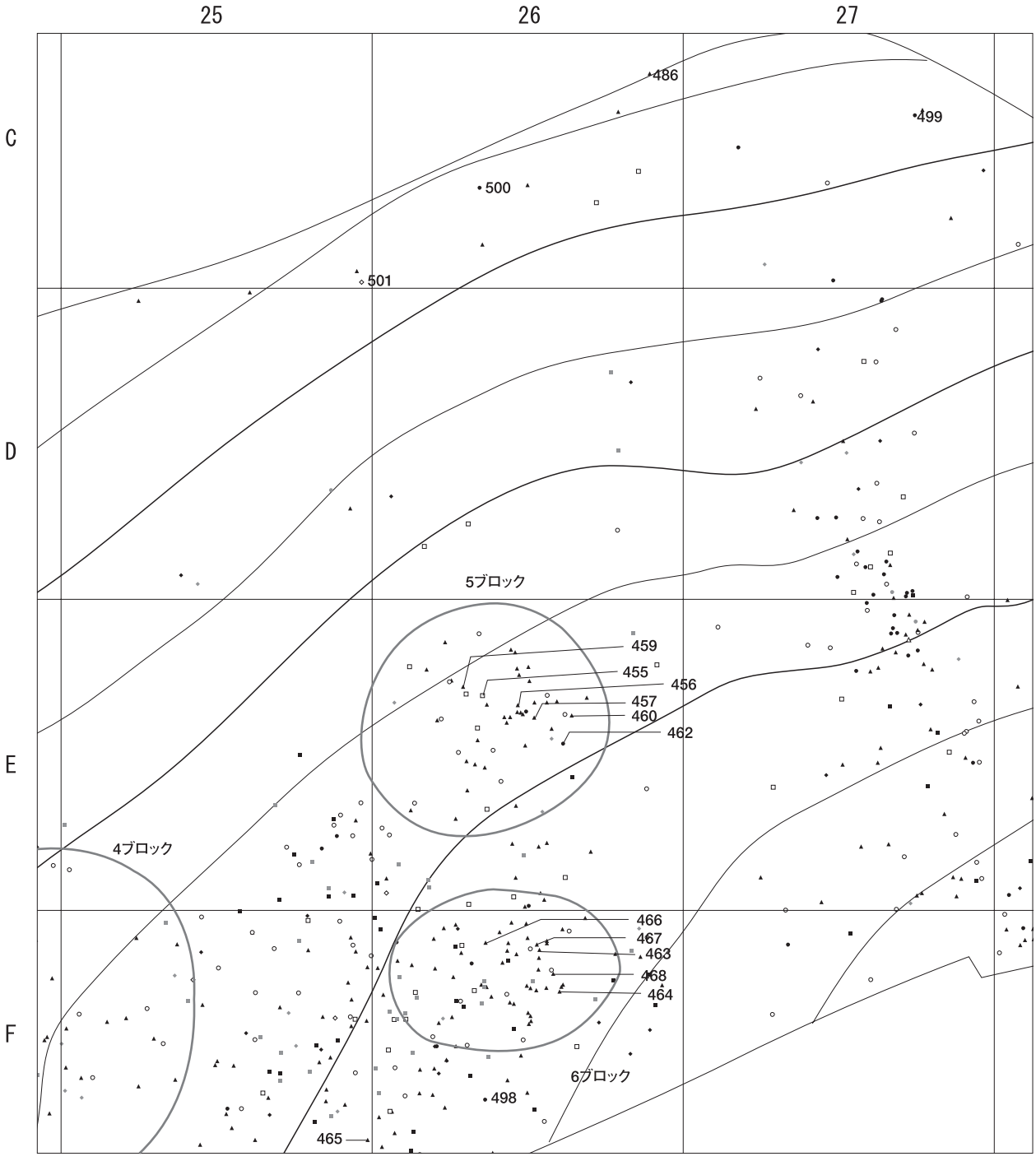
第130図　第Ⅳ文化層 3 ・ 4 ブロック石器群出土分布図



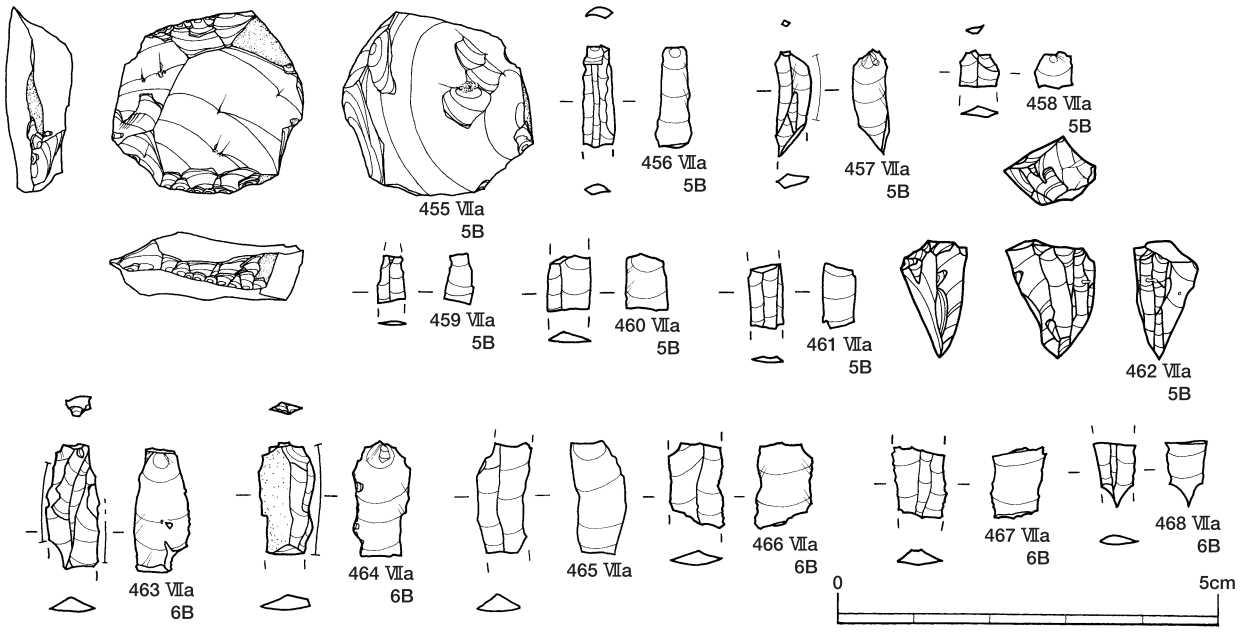
第131図　第Ⅳ文化層 3 ブロック出土石器



第132図　第Ⅳ文化層 4 ブロック出土石器



第133図　第Ⅳ文化層 5 ・ 6 ブロックとその周辺石器群出土分布図



第134図　第Ⅳ文化層５・６ブロック出土石器

第５ブロック（第134図455～462）

削器

455は縦長剥片を使用し，両側縁に二次加工を施して刃部を形成したものである。下半部欠損。

細石刃

456～461は457の桑ノ木津留・上青木系を除き，他は上牛鼻産製の細石刃である。457には使用痕が認められる。

細石刃核

462は左側面に平坦面が残るもので，作業面は小口部分である。後部を欠損する。石材は上牛鼻産黒曜石である。

第６ブロック（第134図463～468）

細石刃が比較的集中したブロックである。

細石刃

464は桑ノ木津留・上青木系黒曜石製で，調整打面であり，縁辺に使用痕が観察される。他は全て上牛鼻産黒曜石が使用されている。

第７ブロック（第137図469～第138図496）

出土層はⅦａ層からⅦｂ層にかけてのもので，多くの細石刃・細石刃核が出土している。

細石刃

469～486は細石刃である。使用されている石材は上牛鼻産黒曜石（469～471，478，481～483，486）と桑ノ木津留・上青木系黒曜石（472～477，479，480，484，485）に区別できる。このうち縁辺に使用痕が認められるもの（469，473，479）は少ない。細石刃は尾部を除却した頭部や，打面と尾部を折断した中間部などであり，幅や長さなど多様である。

細石刃核

487～496は細石刃核である。487は後背面に平坦な自然礫面が残り，また左側面も自然礫面であ

り，小角礫が使用されている。右側面は平坦な剥離面で，打面は打面調整が施されている。打面幅に比較して作業面は長い。石材は桑ノ木津留・上青木系黒曜石である。

488は487と同質の桑ノ木津留・上青木系黒曜石製である。打面は後方に傾斜し，打面調整が顕著に施されている。作業面と平行する後背面を有し，平坦化する二次加工が施されている。全体にローリングを受けている。

489は上牛鼻産黒曜石製でかなり小型の細石刃核であるが，同様に後方に傾斜する打面には打面調整が顕著に施されている。

490も極めて小さな細石刃核である。側面などに自然礫面が残る霧島系黒曜石の小角礫を使用したものであり，打面調整も行われている。

491は片側面に平坦面が残り，その平坦面から下縁の調整剥離が施されている。打面には作業面方向からの細石刃剥離面に類似する剥離面が認められ，旧作業面の可能性も考えられる。使用されている石材は上牛鼻産黒曜石である。

492も上牛鼻産黒曜石を使用したものである。片側面に平坦な自然礫面が残る剥片を素材としており，尾縁にはブランク成形二次加工が施されている。打面は作業面方向からの剥離によって形成されている。楔形を呈する。

493も上牛鼻産黒曜石が使用され，自然礫面が残る剥片が素材となり，その小口部分から細石刃剥離を行ったものである。打面は作業面方向からの１回の剥離により形成されている。

494は両側面に打面方向からの調整剥離が行われているが，各剥離面で打点はなく，最後に作業面方向からの１回の打面形成剥離により打面が得られているものである。船底形の形態を呈し，石材は上牛鼻産黒曜石である。

495も剥片素材であり片側面に平坦面が残る。下縁にはブランク成形と考えられる剥離が行われており，打面は作業面方向から剥離により形成されている。石材は上牛鼻産黒曜石である。打面には細石刃剥離前の打面調整が施されている。

496は両側面に自然礫面が残るものであり，打面は横方向からの１回の分割で形成されている。下縁には整形剥離が行われている。石材は桑ノ木津留・上青木系黒曜石が使用されている。

ブロック外の遺物（第138図497～501）

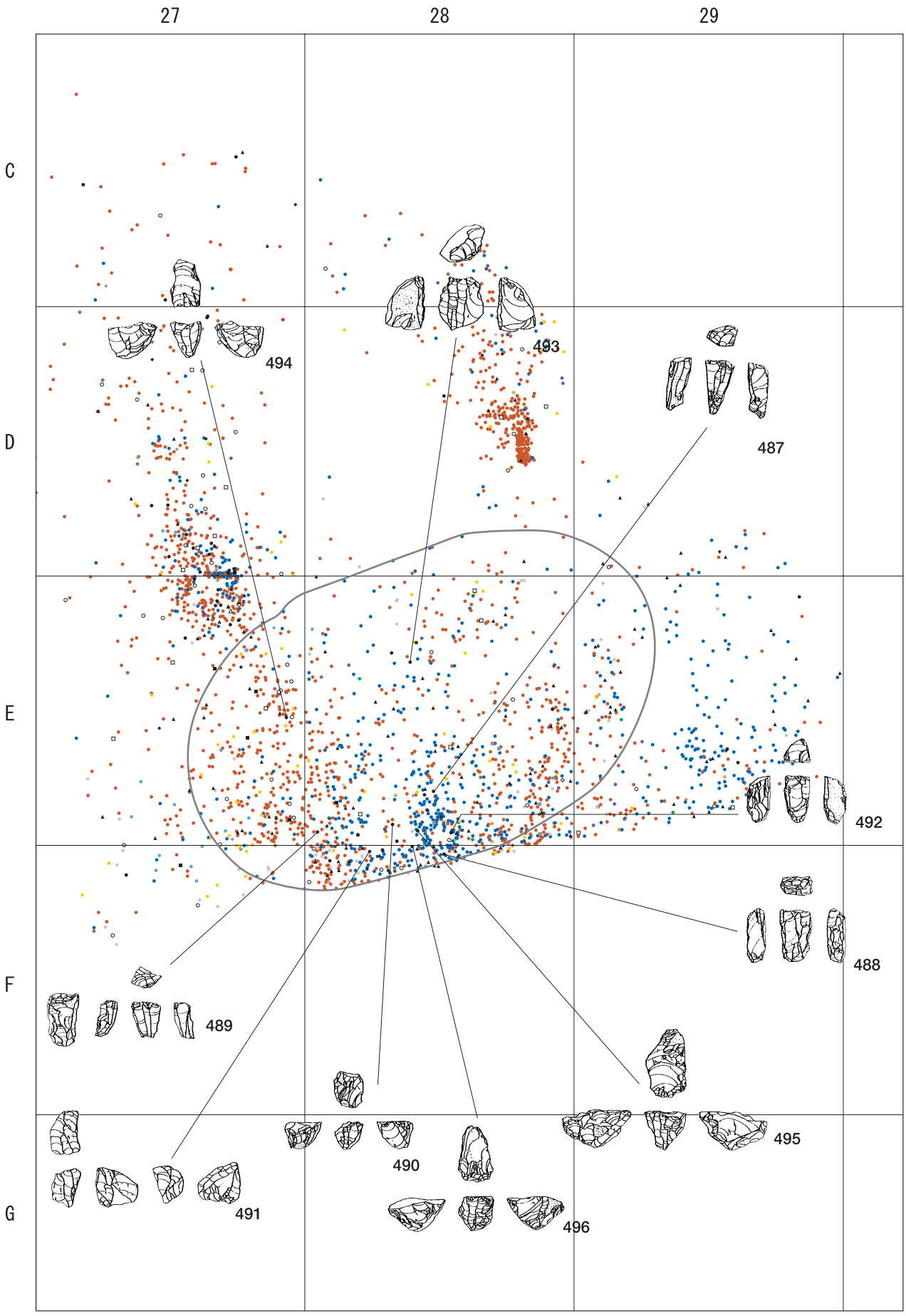
497～500は細石刃核である。497は霧島系黒曜石を使用したもので，平坦な剥離面を打面とし，そこから側面整形を施している。打面と剥離面のなす角は鋭角である。

498は上牛鼻産黒曜石を使用したもので，作業面と平行する後背面をもつ扁平な形態を呈する。打面は後方に傾斜し，打面調整も行われている。細石刃剥離は底面からも行われ，また，図の底面にも細石刃剥離作業面がみられる。

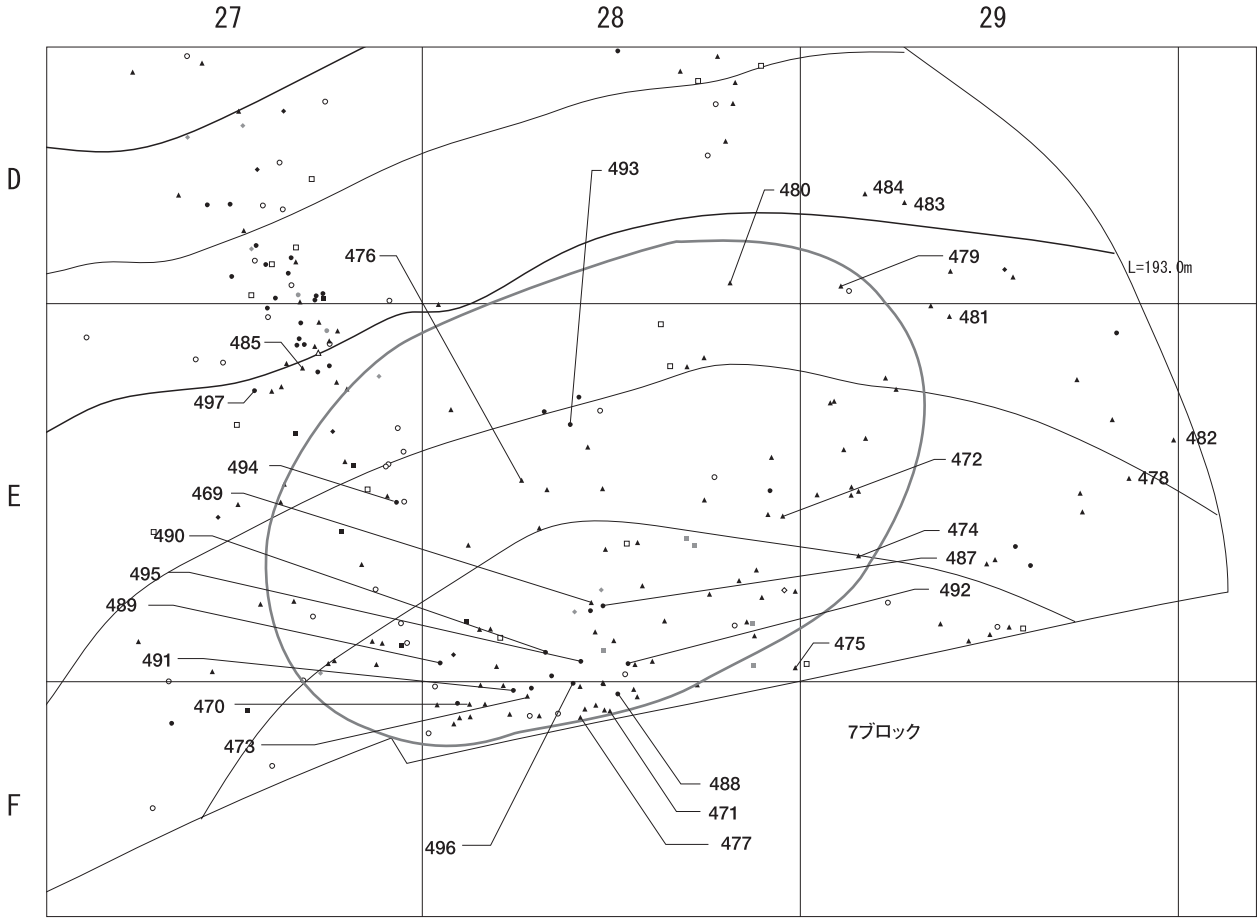
499・500は作業面が側面から正面まで回して広く取っているものである。いずれも打面調整が行われている。石材は499が被熱を受けており明確でなく，500は上牛鼻産黒曜石である。

石鏃

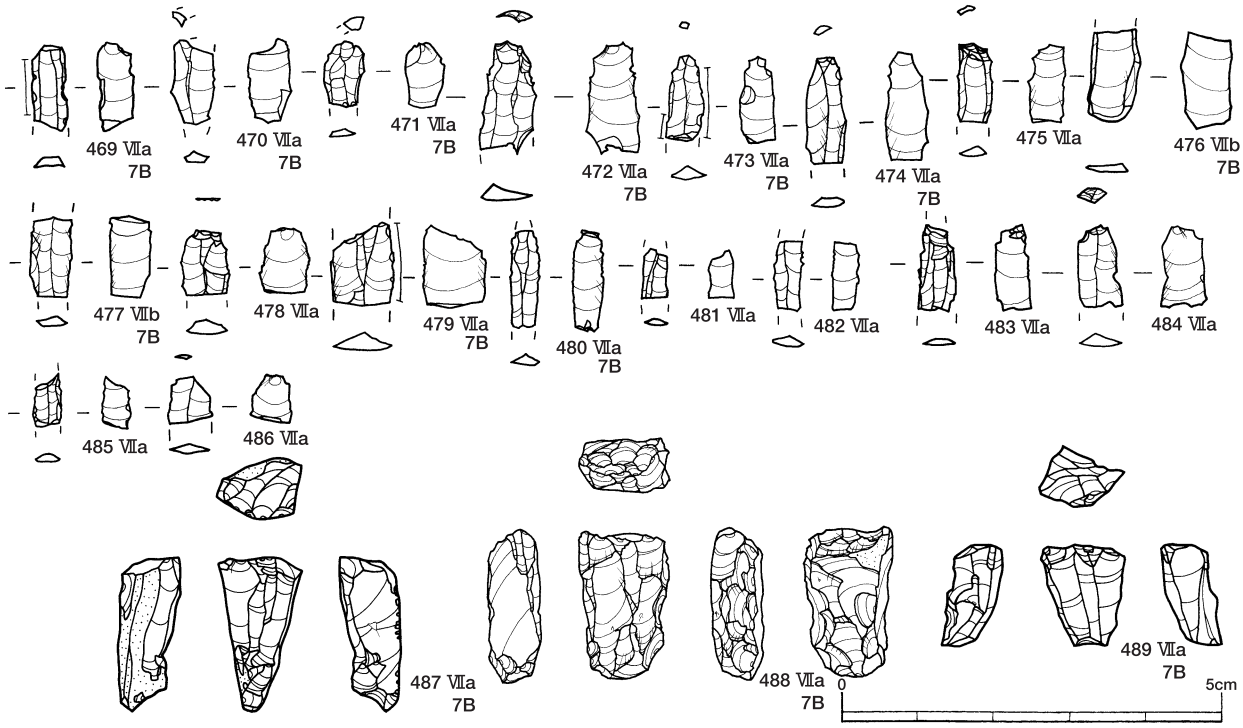
501は三船産黒曜石を石材とした小型石鏃である。



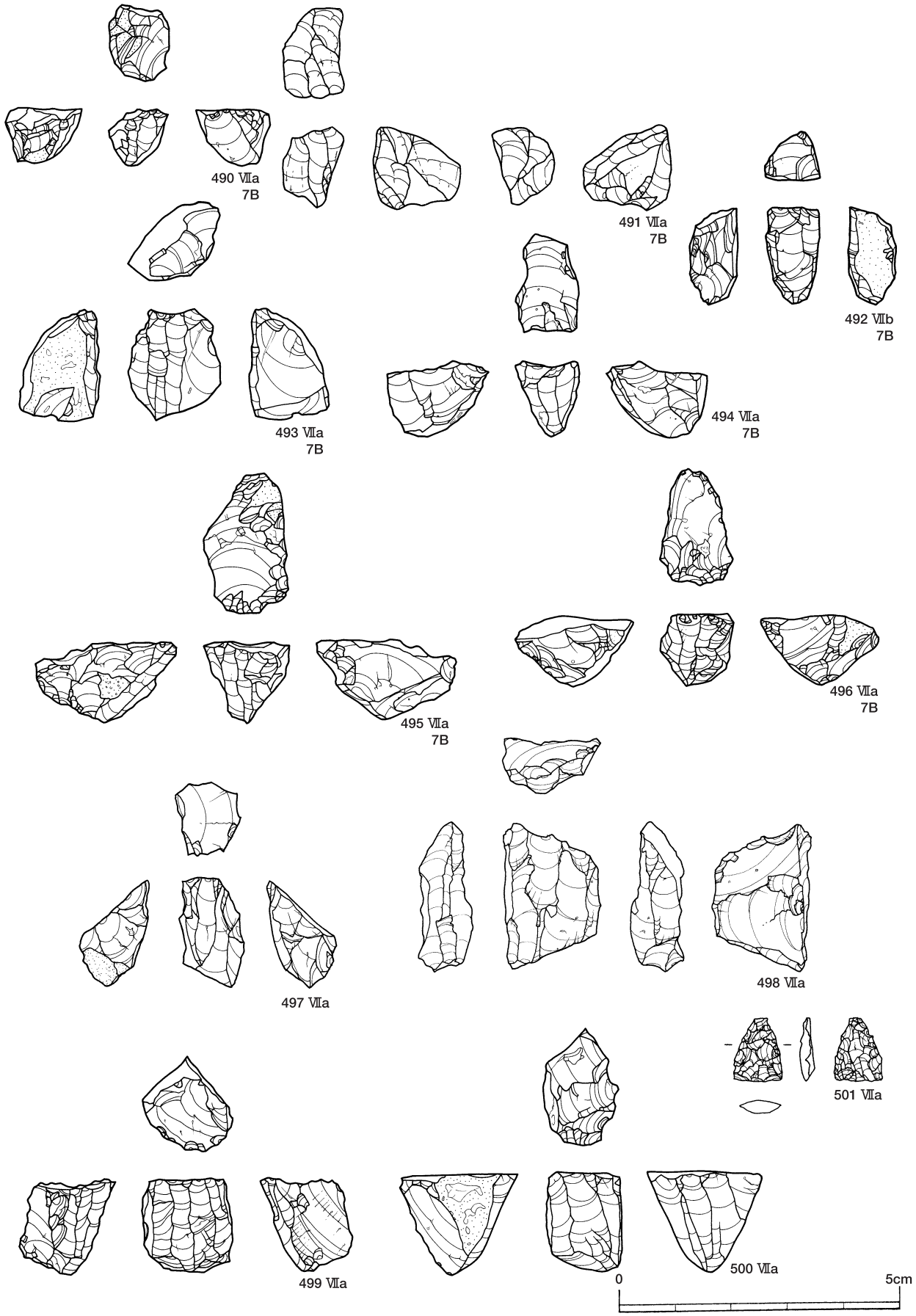
第135図　第Ⅳ文化層７ブロック主要石器



第136図　第Ⅳ文化層 7 ブロック石器群出土分布図



第137図　第Ⅳ文化層 7 ブロック，ブロック外出土石器（1）



第138図　第Ⅳ文化層７ブロック，ブロック外出土石器（2）

第10表　第Ⅳ文化層石器観察表（1）

挿図番号	番号	ブロック	器　種	石材	区	層	標高	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
126	406	1	細石刃	OB1	F-17	Ⅶa	190.902	98	1.5	0.7	0.2	0.3	
	407		細石刃	OB2	I-16	Ⅶa	193.067	5	1.4	0.5	0.1	0.1	
	408		細石刃	OB2	I-16	—	—	表層	1.8	0.5	0.2	0.2	
	409		細石刃	OB2	G-14	Ⅶb	190.907	15	1.2	0.6	0.2	0.1	
	410	1	細石刃核	OB1	F-17	Ⅶa	190.952	52	2.6	1.5	0.9	3.4	
	411		石鏃	SH1A	F-16	Ⅶa	—	不明	2.4	1.3	0.4	1.12	
128	412	2	細石刃	OB2	H-19	Ⅶa	192.164	4	1.4	0.7	0.2	0.2	
	413	2	細石刃	OB2	G-19	Ⅶa	191.779	227	0.74	0.55	0.16	0.06	
	414	2	細石刃	OB2	G-19	Ⅶa	191.825	225	0.67	0.45	0.15	0.05	
	415	2	細石刃核	OB3	H-19	Ⅶa	191.918	36	1.9	1.5	0.8	4.18	
	416	2	細石刃核	OB3	G-19	Ⅶa	191.300	37	2.5	1.7	1.3	6.6	
	417	2	細石刃核	OB3	H-19	Ⅶa	191.894	49	1.7	1.4	0.5	2.94	
	418	2	細石刃核	OB3	G-19	Ⅶa	191.467	127	1.9	1.3	0.4	3.58	
	419	2	細石刃核	OB3	G-19	Ⅶb	191.720	540	1.95	2.4	1.6	7.91	
	420	2	細石刃核	OB3	G-19	Ⅶa	191.632	258	2.3	1.6	1.6	8.74	
	421	2	細石刃核	OB3	H-19	Ⅶb	191.905	184	1.8	1.6	1.3	2.6	
	422	2	細石刃核	OB3	G-19	Ⅶb	191.527	561	2.1	2.0	1.5	3.72	
	423	2	細石刃核	OB3	G-19	Ⅶb	191.725	345	1.0	2.1	0.9	1.93	
131	424	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶb	190.622	1537	1.4	0.7	0.2	0.2	
	425	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶa	190.448	380	1.04	0.62	0.19	0.15	
	426	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶa	191.126	605	1.26	0.57	0.2	0.14	
	427	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶa	190.890	586	1.44	0.47	0.18	0.15	
	428	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶa	191.229	559	1.05	0.61	0.14	0.08	
	429	3	細石刃	OB1	F-23	Ⅶa	190.837	1238	1.01	0.56	0.22	0.1	
	430	3	細石刃	OB1	F-23	Ⅶa	190.863	435	1.13	0.48	0.14	0.09	
	431	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶb	190.522	1221	1.19	0.45	0.17	0.1	
	432	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶb	190.511	1530	1.03	0.37	0.15	0.06	
	433	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶa	191.085	496	0.74	0.6	0.2	0.08	
	434	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶa	190.996	588	0.73	0.52	0.14	0.07	
	435	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶa	191.181	614	0.63	0.38	0.08	0.04	
	436	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶb	190.493	1287	0.9	0.4	0.1	0.04	
	437	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶb	190.841	1556	1.0	0.4	0.2	0.1	
	438	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶb	190.857	619	0.61	0.53	0.12	0.05	
	439	3	細石刃	OB2	F-23	Ⅶb	190.795	968	0.63	0.51	0.11	0.05	
	440	3	細石刃核	OB1	F-23	Ⅶa	191.005	529	1.8	1.5	1.4	2.83	
	441	3	細石刃核	OB2	F-23	Ⅶb	190.784	1546	1.7	1.5	0.4	2.62	
	442	3	細石刃核	OB1	F-23	Ⅶb	190.902	1582	1.4	1.4	1.15	2.38	
	443		石鏃	AN1	G-24	Ⅶa	191.836	20	1.5	1.1	0.5	0.47	
132	444	4	細石刃	OB1	F-25	Ⅶa	192.639	381	1.19	0.69	0.17	0.17	
	445	4	細石刃	OB1	F-24	Ⅶa	192.011	77	1.16	0.64	0.16	0.14	
	446	4	細石刃	OB1	F-24	Ⅶa	191.975	74	0.84	0.7	0.16	0.12	
	447	4	細石刃	OB1	F-25	Ⅶa	192.491	371	0.76	0.57	0.11	0.05	
	448	4	細石刃	OB1	F-24	Ⅶa	191.761	12	0.83	0.59	0.11	0.07	
	449		細石刃	OB1	F-25	Ⅶa	192.820	794	0.62	0.37	0.05	0.02	
	450		細石刃	OB2	F-25	Ⅶa	193.037	533	0.97	0.35	0.11	0.04	
	451		細石刃	OB3	G-25	Ⅶa	—	2	0.99	0.34	0.1	0.04	
	452		細石刃	OB3	G-25	Ⅶa	—	17	0.72	0.38	0.09	0.03	
	453		細石刃核	OB3	F-25	Ⅶa	192.809	799	1.3	1.2	0.6	1.1	
	454		石鏃	AN1	F-25	Ⅶa	192.647	335	1.1	1.3	0.4	0.54	
134	455	5	ラウンドスクレイパー	OB1	E-26	Ⅶa	192.628	67	2.4	2.5	0.9	5.41	
	456	5	細石刃	OB1	E-26	Ⅶa	192.671	87	1.2	0.4	0.1	0.1	
	457	5	細石刃	OB2	E-26	Ⅶa	192.845	86	1.33	0.43	0.15	0.07	
	458	5	細石刃	OB1	E-26	Ⅶa	—	510	0.44	0.49	0.17	0.03	
	459	5	細石刃	OB1	E-26	Ⅶa	192.553	59	0.64	0.37	0.09	0.02	
	460	5	細石刃	OB1	E-26	Ⅶa	192.848	142	0.71	0.55	0.16	0.08	
	461	5	細石刃	OB1	E-26	Ⅶa	—	327	0.85	0.42	0.11	0.06	
	462	5	細石刃核	OB1	E-26	Ⅶa	192.918	244	1.6	0.8	0.9	1.2	
	463	6	細石刃	OB1	F-26	Ⅶa	193.293	102	1.61	0.7	0.32	0.35	
	464	6	細石刃	OB2	F-26	Ⅶa	193.279	258	1.4	0.7	0.2	0.2	
	465		細石刃	OB1	F-25	Ⅶa	193.107	559	1.4	0.6	0.2	0.2	
	466	6	細石刃	OB1	F-26	Ⅶa	193.085	64	1.1	0.7	0.12	0.12	
	467	6	細石刃	OB1	F-26	Ⅶa	193.216	105	0.89	0.67	0.21	0.13	
	468	6	細石刃	OB1	F-26	Ⅶa	193.253	263	0.85	0.54	0.13	0.07	

第11表　第Ⅳ文化層石器観察表（2）

挿図番号	番号	ブロック	器　種	石材	区	層	標高	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
137	469	7	細石刃	OB1	E-28	Ⅶa	194.081	420	1.16	0.48	0.12	0.1	
	470	7	細石刃	OB1	F-28	Ⅶa	194.307	32	1.08	0.53	0.21	0.13	
	471	7	細石刃	OB1	F-28	Ⅶa	194.257	134	0.85	0.49	0.19	0.08	
	472	7	細石刃	OB3	E-28	Ⅶa	193.925	498	1.42	0.64	0.16	0.15	
	473	7	細石刃	OB3	F-28	Ⅶa	194.284	105	1.1	0.4	0.15	0.07	
	474	7	細石刃	OB3	E-29	Ⅶa	194.024	72	0.38	0.5	0.13	0.08	
	475		細石刃	OB2	E-28	Ⅶa	194.189	404	1.0	0.43	0.16	0.05	
	476	7	細石刃	OB3	E-28	Ⅶb	193.648	250	1.2	0.6	0.2	0.2	
	477	7	細石刃	OB2	F-28	Ⅶb	194.208	193	1.1	0.4	0.1	0.09	
	478		細石刃	OB1	E-29	Ⅶa	193.497	236	0.83	0.59	0.24	0.11	
	479	7	細石刃	OB2	D-29	Ⅶa	193.186	10	1.09	0.82	0.17	0.15	
	480	7	細石刃	OB3	D-28	Ⅶa	193.114	2	1.29	0.37	0.11	0.06	
	481		細石刃	OB1	E-29	Ⅶa	193.192	7	0.65	0.34	0.1	0.02	
	482		細石刃	OB1	E-29	Ⅶa	193.391	204	0.88	0.33	0.09	0.03	
	483		細石刃	OB1	D-29	Ⅶa	192.495	12	1.09	0.46	0.12	0.08	
	484		細石刃	OB2	D-29	Ⅶa	192.870	5	1.05	0.53	0.19	0.09	
	485		細石刃	OB2	E-27	Ⅶa	193.022	15	0.67	0.35	0.08	0.03	
	486		細石刃	OB1	C-26	Ⅶa	190.304	43	0.58	0.56	0.16	0.05	
	487	7	細石刃核	OB3	E-28	Ⅶa	194.154	849	2.1	1.8	0.6	1.3	
	488	7	細石刃核	OB3	F-28	Ⅶa	194.263	142	1.9	1.2	0.7	2.32	
	489	7	細石刃核	OB1	E-28	Ⅶa	194.089	641	1.4	1.1	0.6	0.9	
138	490	7	細石刃核	OB3	E-28	Ⅶa	194.194	294	1.4	1.1	0.8	1.4	
	491	7	細石刃核	OB1	F-28	Ⅶa	194.311	41	1.6	1.5	0.7	2.6	
	492	7	細石刃核	OB1	E-28	Ⅶb	194.186	684	1.1	0.9	0.8	1.4	
	493	7	細石刃核	OB1	E-28	Ⅶa	193.613	58	2.0	1.9	1.1	4.2	
	494	7	細石刃核	OB1	E-27	Ⅶa	193.662	94	1.8	1.2	1.0	2.4	
	495	7	細石刃核	OB1	E-28	Ⅶa	194.220	336	2.6	1.8	1.3	4.5	
	496	7	細石刃核	OB3	F-28	Ⅶa	194.240	212	2.1	1.3	1.1	2.5	
	497		細石刃核	OB4	E-27	Ⅶa	193.062	30	2.0	1.2	1.1	1.97	
	498		細石刃核	OB1	F-26	Ⅶa	193.326	461	2.7	1.7	1.0	4.64	
	499		細石刃核	OB2	C-27	Ⅶa	190.760	10	1.9	1.6	1.3	4.0	
	500		細石刃核	OB1	C-26	Ⅶa	190.546	20	2.0	1.8	1.4	4.6	
	501		石鏃	OB2	C-25	Ⅶa	190.672	1	1.2	0.8	0.3	0.21	

第12表　細石刃計測表（1）

番号	区	層	遺物番号	レイアウト番号	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	部位	打面
1	F-16	Ⅶa	28		OB1	0.8	0.52	0.12	0.06	尾部	
2	F-16	Ⅶa	33		OB2	0.67	0.47	0.15	0.05	中間	
3	F-16	Ⅶa	40		OB2	0.8	0.58	0.21	0.1	尾部	
4	F-16	Ⅶa	43		OB2	0.53	0.51	0.12	0.05	中間	
5	F-16	Ⅶa	44		OB1	1.42	0.67	0.17	0.18	中間	
6	F-16	Ⅶb	292		OB2	0.12	0.65	0.13	0.09	中間尾部	
7	F-17	Ⅶa	1		OB2	0.92	0.68	0.18	0.13	頭部	平
8	F-17	Ⅶa	5		OB2	0.68	0.65	0.15	0.07	中間	
9	F-17	Ⅶa	6		OB1	1.02	0.62	0.21	0.14	中間	
10	F-17	Ⅶa	7		OB1	0.75	0.54	0.07	0.03	中間尾部	
11	F-17	Ⅶa	23		OB1	1.3	0.85	0.13	0.18	中間尾部	
12	F-17	Ⅶa	33		OB2	1.23	0.35	0.17	0.07	中間	
13	F-17	Ⅶa	38		OB1	1.46	0.64	0.22	0.23	中間	
14	F-17	Ⅶa	40		OB1	0.71	0.47	0.11	0.05	尾部	
15	F-17	Ⅶa	58		OB2	0.07	0.04	0.11	0.04	頭部	平
16	F-17	Ⅶa	60		OB1	0.85	0.5	0.16	0.08	中間	
17	F-17	Ⅶa	61		OB1	0.77	0.48	0.09	0.04	中間	
18	F-17	Ⅶa	63		OB1	0.87	0.58	0.1	0.05	中間尾部	
19	F-17	Ⅶa	66		OB1	1.32	0.58	0.12	0.12	頭部	平
20	F-17	Ⅶa	68		OB1	0.68	0.42	0.08	0.03	尾部	
21	F-17	Ⅶa	74		OB2	1.01	0.65	0.22	0.13	頭部	平
22	F-17	Ⅶa	75		OB2	0.08	0.05	0.14	0.05	尾部	
23	F-17	Ⅶa	98	406	OB1	1.6	0.68	0.24	0.27	頭部	
24	F-17	Ⅶa	100		OB2	1.05	1.68	0.2	0.13	中間	
25	F-17	Ⅶa	102		OB2	0.91	0.55	0.11	0.11	中間	
26	F-17	Ⅶa	171		OB1	1.75	0.98	0.25	0.38	頭部	平
27	F-17	Ⅶa	173		OB1	0.86	0.63	0.19	0.1	頭部	平
28	F-17	Ⅶa	177		OB1	0.09	0.59	0.15	0.09	尾部	

第13表　細石刃計測表（2）

番号	区	層	遺物番号	レイアウト番号	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	部位	打面
29	F-17	Ⅶa	235		OB1	1.3	0.77	0.22	0.17	頭部	平
30	F-17	Ⅶb	341		OB1	1.03	0.74	0.15	0.1	中間	
31	F-17	Ⅶb	362		OB2	1.01	0.73	0.19	0.15	頭部	平
32	F-17	Ⅶb	364		OB1	1.24	0.66	0.19	0.14	中間尾部	
33	F-17	Ⅶa	395		OB1	0.75	0.56	0.16	0.08	中間	
34	G-14	Ⅶb	15	409	OB2	1.2	0.57	0.2	0.1	中間	
35	G-15	Ⅶa	66		OB1	1.05	0.74	0.2	0.14	頭部	平
36	G-18	Ⅶa	10		OB3	0.67	0.66	0.18	0.08	中間	
37	G-18	Ⅶa	54		OB3	1.17	0.57	0.16	0.1	頭部中間	平
38	G-18	Ⅶa	76		OB2	0.95	0.41	0.19	0.07	尾部	
39	G-19	Ⅶa	12		OB3	0.79	0.63	0.16	0.09	頭部	平
40	G-19	Ⅶa	32		OB3	0.81	0.35	0.1	0.02	中間尾部	
41	G-19	Ⅶa	42		OB3	0.83	0.62	0.16	0.07	中間	
42	G-19	Ⅶa	71		OB3	0.52	0.52	0.12	0.04	尾部	
43	G-19	Ⅶa	82		OB3	0.8	0.36	0.19	0.04	中間	
44	G-19	Ⅶa	91		OB3	1.51	0.59	0.5	0.25	尾部	
45	G-19	Ⅶa	149		OB3	0.72	0.49	0.11	0.03	中間	
46	G-19	Ⅶa	201		OB3	0.71	0.48	0.17	0.06	頭部	平
47	G-19	Ⅶa	225	414	OB2	0.67	0.45	0.15	0.05	中間	
48	G-19	Ⅶa	227	413	OB2	0.74	0.55	0.16	0.06	頭部	平
49	G-19	Ⅶa	247		OB3	1.21	0.57	0.19	0.1	尾部	
50	G-19	Ⅶa	266		OB3	0.65	0.65	0.13	0.05	頭部	平
51	G-19	Ⅶa	271		OB3	1.01	0.49	0.15	0.06	中間	
52	G-19	Ⅶb	317		OB3	1.76	0.44	0.2	0.1	頭部中間	平
53	G-19	Ⅶb	347		OB3	0.79	0.64	0.15	0.05	頭部	平
54	G-19	Ⅶb	453		OB3	1.07	0.45	0.16	0.07	中間	
55	G-19	Ⅶb	490		OB3	0.61	0.46	0.13	0.03	尾部	
56	G-19	Ⅶa	300		OB3	0.87	0.85	0.2	0.14	頭部	平
57	G-19	Ⅶb	655		OB3	0.88	0.42	0.14	0.05	尾部	
58	G-19	Ⅶb	672		OB3	1.03	0.63	0.25	0.14	頭部	平
59	H-15	Ⅶa	12		OB2	0.56	0.41	0.13	0.03	中間	
60	H-19	Ⅶa	4	412	OB2	1.4	0.67	0.22	0.17	頭部	平
61	H-19	Ⅶb	203		OB3	1.37	0.69	0.26	0.18	頭部	平
62	H-19	Ⅶb	228		OB3	0.78	0.27	0.13	0.03	中間	
63	H-19	Ⅶb	234		OB3	1.12	0.37	0.17	0.1	頭部	平
64	H-19	Ⅶb	220		OB3	0.62	0.7	0.14	0.06	頭部	点
65	H-19	Ⅶb	287		OB3	0.71	0.39	0.05	0.03	尾部	
66	H-19	Ⅶb	295		OB3	1.08	0.47	0.15	0.08	頭部	平
67	H-19	Ⅶ	364		OB3	0.64	0.27	0.1	0.02	頭部	平
68	H-20	Ⅶa	21		OB1	0.73	0.44	0.07	0.03	中間	
69	H-20	Ⅶa	23		OB2	0.8	0.44	0.19	0.05	頭部	平
70	I-15	Ⅶa	9		CC	0.97	0.76	0.18	0.15	中間	
71	I-16	Ⅶa	5	407	OB2	1.38	0.46	0.15	0.1	頭部	平
72	I-16	—	表層	408	OB2	1.82	0.54	0.2	0.16	完形	平
73	I-17	Ⅶa	4		OB2	1.11	0.42	0.16	0.05	中間	
74	C-25	Ⅶa	2		OB2	0.74	0.4	0.14	0.05	中間	
75	C-26	Ⅶa	8		OB1	1.26	0.77	0.32	0.23	尾部	
76	C-26	Ⅶa	39		OB1	0.66	0.65	0.12	0.07	中間	
77	C-26	Ⅶa	43	486	OB1	0.58	0.56	0.16	0.05	頭部	平
78	C-28	Ⅶa	26		OB1	1.24	0.69	0.19	0.14	頭部	平
79	D-25	Ⅶa	38		OB2	0.75	0.64	0.14	0.07	頭部	平
80	D-25	Ⅶa	54		OB1	1.43	0.85	0.27	0.37	中間	
81	D-27	Ⅶa	23		OB2	0.91	0.59	0.14	0.06	中間	
82	D-27	Ⅶa	33		OB1	0.93	0.52	0.2	0.07	尾部	
83	D-27	Ⅶa	52		OB1	0.48	0.65	0.25	0.09	頭部	平
84	C-27	Ⅶb	33		OB2	0.74	0.58	0.16	0.07	頭部	平
85	D-27	Ⅶb	131		OB2	1.27	0.65	0.3	0.2	頭部	平
86	D-27	Ⅶb	277		OB2	1.22	0.63	0.25	0.16	中間	
87	D-27	Ⅶb	283		OB2	1.22	0.63	0.16	0.08	頭部	平
88	D-27	Ⅶa	319		OB2	0.63	0.68	0.25	0.09	中間	
89	D-28	Ⅶa	2	480	OB2	1.29	0.37	0.11	0.06	頭部中間	平
90	D-29	Ⅶa	5	484	OB2	1.05	0.53	0.19	0.09	頭部	平
91	D-29	Ⅶa	10	479	OB2	1.09	0.82	0.17	0.15	中間	
92	D-29	Ⅶa	12	483	OB1	1.09	0.46	0.12	0.08	中間	
93	D-29	Ⅶa	15		OB2	1.34	0.71	0.26	0.22	頭部中間	平
94	D-29	Ⅶa	18		OB1	0.91	0.35	0.11	0.04	中間尾部	
95	E-23	Ⅶb	203		OB2	0.84	0.54	0.17	0.1	中間	
96	D-29	Ⅶa	25		OB2	1.0	0.54	0.19	0.07	中間	
97	E-23	Ⅶa	28		OB2	1.0	0.48	0.17	0.08	中間	
98	E-23	Ⅶa	48		OB2	0.95	0.65	0.2	0.11	中間	
99	E-23	Ⅶb	138		OB1	1.27	0.71	0.16	0.14	中間	
100	E-24	Ⅶa	19		OB1	1.25	0.73	0.18	0.14	中間	
101	E-26	Ⅶa	9		OB1	0.81	0.7	0.15	0.09	中間	
102	E-26	Ⅶa	10		OB1	0.91	0.43	0.22	0.09	頭部	平
103	E-26	Ⅶa	38		OB1	1.48	0.72	0.32	0.21	頭部	平
104	E-26	Ⅶa	59	459	OB1	0.64	0.37	0.09	0.02	中間	
105	E-26	Ⅶa	65		OB1	1.04	0.52	0.14	0.07	中間	
106	E-26	Ⅶa	77		OB1	0.68	0.32	0.13	0.03	頭部	平
107	E-26	Ⅶa	78		OB1	0.57	0.34	0.1	0.02	頭部	平
108	E-26	Ⅶa	81		OB1	0.57	0.4	0.15	0.04	中間	
109	E-26	Ⅶa	82		OB1	1.13	0.42	0.19	0.08	中間	
110	E-26	Ⅶa	83		OB1	1.0	0.52	0.11	0.05	頭部	平
111	E-26	Ⅶa	86	457	OB2	1.33	0.43	0.15	0.07	頭部中間	平

第14表　細石刃計測表（3）

番号	区	層	遺物番号	レイアウト番号	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	部位	打面
112	E-26	Ⅶa	87	456	OB1	1.26	0.41	0.13	0.08	頭部中間	平
113	E-26	Ⅶa	98		OB1	1.06	0.49	0.11	0.06	頭部	平
114	E-26	Ⅶa	100		OB1	0.74	0.37	0.22	0.07	中間	
115	E-26	Ⅶa	103		OB1	0.93	0.54	0.33	0.12	尾部	
116	E-26	Ⅶa	121		OB1	0.5	0.38	0.1	0.03	中間	
117	E-26	Ⅶa	132		OB1	1.0	0.49	0.2	0.09	中間	
118	E-26	Ⅶa	142	460	OB1	0.71	0.55	0.16	0.08	頭部	平
119	E-26	Ⅶb	674		OB2	0.59	0.42	0.14	0.03	中間	
120	E-26	Ⅶa	176		OB1	1.25	0.48	0.2	0.13	尾部	
121	E-26	Ⅶa	186		OB2	1.08	0.58	0.22	0.08	中間	
122	E-26	Ⅶa	189		OB2	0.08	0.77	0.16	0.08	頭部	平
123	E-26	Ⅶa	190		OB2	0.06	0.44	0.14	0.04	頭部	平
124	E-26	Ⅶa	222		OB2	0.52	0.55	0.14	0.03	頭部	平
125	E-26	Ⅶa	224		OB1	0.7	0.39	0.12	0.04	頭部	平
126	E-26	Ⅶa	276		OB2	1.09	0.51	0.3	0.14	頭部	点
127	E-26	Ⅶa	283		OB2	0.84	0.57	0.11	0.05	中間	
128	E-26	Ⅶa	297		OB2	1.29	0.62	0.27	0.11	中間尾部	
129	E-26	Ⅶa	301		OB2	1.06	0.68	0.18	0.09	頭部	平
130	E-26	Ⅶa	327	461	OB1	0.85	0.42	0.11	0.06	中間	
131	E-26	Ⅶa	367		OB1	1.22	0.64	0.22	0.16	中間	
132	E-26	Ⅶa	393		OB1	1.31	0.92	0.24	0.23	頭部	平
133	E-26	Ⅶa	408		OB1	1.04	0.39	0.19	0.08	頭部中間	平
134	E-26	Ⅶa	410		OB1	1.26	0.78	0.25	0.18	中間	
135	F-17	Ⅶa	390		—	1.46	0.53	0.21	0.13	尾部	
136	E-26	Ⅶa	422		OB2	0.84	0.66	0.19	0.08	頭部	平
137	E-26	Ⅶa	424		OB1	1.1	0.55	0.15	0.09	頭部中間	平
138	E-26	Ⅶa	429		OB1	0.83	0.44	0.11	0.03	尾部	
139	E-26	Ⅶa	435		OB2	0.85	0.54	0.15	0.04	中間	
140	E-26	Ⅶa	464		OB1	1.56	0.74	0.21	0.26	頭部	平
141	E-26	Ⅶa	485		OB2	0.66	0.16	0.16	0.05	頭部	平
142	E-26	Ⅶa	510	458	OB1	0.44	0.49	0.17	0.03	頭部	平
143	E-26	Ⅶb	649		OB1	1.15	0.69	0.21	0.17	中間尾部	
144	E-26	Ⅶb	846		OB1	0.97	0.58	0.12	0.09	中間	
145	E-26	Ⅶb	847		OB1	0.9	0.73	0.12	0.09	頭部	平
146	E-26	Ⅶb	867		OB1	0.67	0.43	0.06	0.02	中間	
147	E-26	Ⅶb	923		OB1	1.08	0.4	0.18	0.07	頭部中間	平
148	E-26	Ⅶb	927		OB1	1.02	0.46	0.19	0.05	中間	
149	E-26	Ⅶb	994		OB1	0.83	0.43	0.13	0.05	中間	
150	E-26	Ⅶb	1100		OB2	0.79	0.51	0.18	0.08	頭部	平
151	E-26	Ⅶa	1282		OB2	0.71	0.51	0.11	0.04	中間	
152	E-27	Ⅶa	11		OB2	0.65	0.44	0.11	0.04	中間	
153	E-27	Ⅶa	15	485	OB2	0.67	0.35	0.08	0.03	中間	
154	H-19	Ⅶb	284		—	—	—	—	—	—	
155	E-27	Ⅶa	35		OB2	0.81	0.92	0.16	0.09	中間	
156	E-27	Ⅶa	63		OB2	0.68	0.32	0.09	0.02	中間	
157	E-27	Ⅶa	68		OB2	0.85	0.53	0.13	0.06	中間	
158	E-27	Ⅶa	74		OB2	0.69	0.51	0.18	0.08	中間	
159	E-27	Ⅶa	90		OB1	0.74	0.63	0.15	0.1	中間	
160	E-27	Ⅶa	132		OB2	0.71	0.56	0.18	0.06	中間	
161	E-27	Ⅶa	151		OB2	0.54	0.28	0.04	0.02	頭部	平
162	E-27	Ⅶa	177		OB2	0.89	0.62	0.16	0.08	中間	
163	E-27	Ⅶa	178		OB2	0.98	1.0	0.1	0.03	中間尾部	
164	E-27	Ⅶa	194		OB2	1.33	0.62	0.36	0.22	頭部	平
165	E-27	Ⅶa	235		OB2	0.94	0.43	0.09	0.04	頭部	平
166	E-27	Ⅶa	241		OB2	1.04	0.68	0.22	0.12	頭部	平
167	E-27	Ⅶa	242		OB2	0.6	0.43	0.12	0.04	頭部	平
168	E-27	Ⅶb	503		OB1	1.12	0.52	0.3	0.14	中間	
169	E-28	Ⅶa	41		OB2	0.96	0.97	0.18	0.21	中間	
170	E-28	Ⅶa	50		AN1	1.03	0.39	0.12	0.06	中間	
171	E-28	Ⅶa	62		OB1	0.98	0.39	0.13	0.06	中間	
172	E-28	Ⅶa	100		OB2	0.99	0.23	0.07	0.03	頭部	平
173	E-28	Ⅶa	105		OB2	1.12	0.42	0.15	0.08	頭部	平
174	E-28	Ⅶa	117		OB1	0.94	0.4	0.22	0.08	中間	
175	E-28	Ⅶa	135		OB2	0.65	0.34	0.12	0.02	頭部	平
176	E-28	Ⅶb	250	476	OB3	1.24	0.63	0.2	0.15	中間	
177	E-28	Ⅶa	347		OB2	1.27	0.71	0.27	0.19	頭部	平
178	E-28	Ⅶa	368		OB1	0.95	0.58	0.13	0.08	頭部	平
179	E-28	Ⅶa	404	475	OB2	1.0	0.43	0.16	0.05	頭部	平
180	E-28	Ⅶa	420	469	OB1	1.16	0.48	0.12	0.1	頭部	平
181	E-28	Ⅶa	437		OB1	1.2	0.47	0.2	0.08	頭部中間	平
182	E-28	Ⅶa	453		OB2	0.9	0.41	0.23	0.07	中間	
183	E-28	Ⅶa	460		OB2	1.0	0.36	0.17	0.05	中間	
184	E-28	Ⅶa	466		OB2	0.84	0.69	0.14	0.07	中間	
185	E-28	Ⅶa	472		OB1	1.04	0.57	0.12	0.06	中間	
186	E-28	Ⅶa	483		OB2	1.2	0.89	0.22	0.2	頭部	平
187	E-28	Ⅶa	498	472	OB2	1.42	0.64	0.16	0.15	頭部	平
188	E-28	Ⅶa	548		OB2	1.21	0.33	0.12	0.06	中間	
189	E-28	Ⅶa	559		OB2	1.15	0.55	0.22	0.09	尾部	
190	E-28	Ⅶa	624		OB2	1.47	0.89	0.15	0.2	頭部	平
191	E-28	Ⅶa	669		OB2	1.44	0.41	0.29	0.09	頭部	平
192	E-28	Ⅶa	833		OB2	0.82	0.56	0.2	0.07	中間	
193	E-28	Ⅶa	860		OB1	0.85	0.61	0.15	0.1	中間	
194	E-29	Ⅶa	7	481	OB1	0.65	0.34	0.1	0.02	中間	

第15表　細石刃計測表（4）

番号	区	層	遺物番号	レイアウト番号	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	部位	打面
195	E-29	Ⅶa	10		OB2	1.39	0.37	0.25	0.09	尾部	
196	E-29	Ⅶa	18		OB2	0.58	0.46	0.09	0.03	中間	
197	E-29	Ⅶa	31		OB2	1.06	0.49	0.18	0.07	頭部	平
198	E-29	Ⅶa	36		OB2	1.17	0.57	0.28	0.1	頭部中間	平
199	E-29	Ⅶa	72	474	OB2	0.38	0.5	0.13	0.08	頭部中間	平
200	E-29	Ⅶa	91		OB1	1.05	0.56	0.2	0.07	尾部	
201	E-29	Ⅶa	151		OB2	0.45	0.53	0.19	0.05	中間	
202	E-29	Ⅶa	158		OB1	0.61	0.48	0.14	0.03	頭部	平
203	E-29	Ⅶa	159		OB1	0.82	0.47	0.24	0.09	中間	
204	E-29	Ⅶb	174		OB2	0.82	0.45	0.14	0.06	頭部	平
205	E-29	Ⅶa	180		OB2	1.52	0.69	0.19	0.15	頭部中間	平
206	E-29	Ⅶb	181		OB1	0.86	0.34	0.11	0.03	中間	
207	E-29	Ⅶa	188		OB2	0.57	0.36	0.1	0.02	頭部	平
208	E-29	Ⅶa	201		OB2	0.7	0.37	0.16	0.03	頭部	平
209	E-29	Ⅶa	204	482	OB1	0.88	0.33	0.09	0.03	中間	
210	E-29	Ⅶa	211		OB1	1.31	0.44	0.31	0.12	中間尾部	
211	E-29	Ⅶa	214		OB2	1.34	0.49	0.3	0.12	頭部中間	平
212	E-29	Ⅶa	223		OB1	0.98	0.44	0.2	0.1	中間	
213	E-29	Ⅶb	227		OB1	1.28	0.43	0.26	0.1	頭部	平
214	E-29	Ⅶa	236	478	OB1	0.83	0.59	0.24	0.11	頭部	平
215	E-29	Ⅶb	238		OB2	1.05	0.45	0.15	0.03	頭部	平
216	E-29	Ⅶb	270		OB1	0.77	0.56	0.19	0.08	尾部	
217	E-29	Ⅶa	322		OB1	1.14	0.49	0.14	0.09	中間	
218	F-23	Ⅶa	27		OB1	1.01	0.61	0.17	0.12	中間	
219	F-23	Ⅶa	61		OB1	0.96	0.6	0.15	0.07	頭部	平
220	F-23	Ⅶa	72		OB2	1.01	0.52	0.22	0.13	頭部中間	平
221	F-23	Ⅶa	75		OB2	0.71	0.64	0.21	0.09	頭部	平
222	F-23	Ⅶa	129		OB2	1.06	0.48	0.12	0.05	尾部	
223	F-23	Ⅶa	200		OB2	1.19	0.44	0.24	0.09	頭部中間	平
224	F-23	Ⅶa	265		OB2	0.49	0.7	0.13	0.05	中間	
225	F-23	Ⅶa	273		OB2	0.61	0.61	0.12	0.05	中間	
226	F-23	Ⅶa	274		OB2	0.65	0.61	0.15	0.05	頭部	平
227	F-23	Ⅶa	294		OB2	1.13	0.48	0.16	0.07	頭部中間	平
228	F-23	Ⅶa	309		OB2	0.93	0.63	0.12	0.06	頭部	平
229	F-23	Ⅶa	344		OB1	0.74	0.51	0.13	0.05	中間	
230	F-23	Ⅶa	380	425	OB2	1.04	0.62	0.19	0.15	頭部	平
231	F-23	Ⅶa	394		OB1	1.02	0.63	0.26	0.14	中間	
232	F-23	Ⅶa	406		OB2	0.97	0.63	0.28	0.18	中間	
233	F-23	Ⅶa	422		OB2	1.16	0.36	0.23	0.1	頭部中間	平
234	F-23	Ⅶa	425		OB1	0.46	0.67	0.19	0.06	尾部	
235	F-23	Ⅶa	435	430	OB1	1.13	0.48	0.14	0.09	頭部	平
236	F-23	Ⅶa	448		OB2	0.93	0.62	0.22	0.15	中間	
237	F-23	Ⅶa	478		OB2	0.76	0.59	0.17	0.07	頭部	平
238	F-23	Ⅶa	480		OB2	0.9	0.93	0.3	0.28	頭部	平
239	F-23	Ⅶa	496	433	OB2	0.74	0.6	0.2	0.08	頭部	平
240	F-23	Ⅶa	507		OB2	1.5	0.58	0.35	0.21	頭部中間	平
241	F-23	Ⅶa	511		OB2	0.97	0.65	0.21	0.14	頭部	平
242	F-23	Ⅶa	522		OB2	0.64	0.49	0.15	0.04	中間	
243	F-23	Ⅶa	542		OB2	0.61	0.61	0.18	0.06	頭部	平
244	F-23	Ⅶa	549		OB2	0.84	0.51	0.16	0.06	中間	
245	F-23	Ⅶa	555		OB2	0.54	0.59	0.14	0.04	中間	
246	F-23	Ⅶa	556		OB2	1.01	0.57	0.16	0.06	頭部	平
247	F-23	Ⅶa	559	428	OB2	1.05	0.61	0.14	0.08	頭部	平
248	F-23	Ⅶa	569		OB2	0.99	0.37	0.16	0.04	中間尾部	
249	F-23	Ⅶa	580		OB2	0.73	0.41	0.07	0.01	中間	
250	F-23	Ⅶa	581		OB2	1.18	0.68	0.2	0.12	頭部中間	平
251	F-23	Ⅶa	586	427	OB2	1.44	0.47	0.18	0.15	中間	
252	F-23	Ⅶa	588	434	OB2	0.73	0.52	0.14	0.07	中間	
253	F-23	Ⅶa	600		OB2	0.87	0.62	0.24	0.09	中間	
254	F-23	Ⅶa	605	426	OB2	1.26	0.57	0.2	0.14	頭部	平
255	F-23	Ⅶa	614	435	OB2	0.63	0.38	0.08	0.04	頭部	平
256	F-23	Ⅶa	616		OB2	0.86	0.45	0.16	0.07	頭部	平
257	F-23	Ⅶb	619	438	OB2	0.61	0.53	0.12	0.05	中間	
258	F-23	Ⅶa	623		OB1	0.97	0.46	0.13	0.04	尾部	
259	F-23	Ⅶa	632		OB2	0.42	0.47	0.22	0.05	中間	
260	F-23	Ⅶb	647		OB2	0.81	0.35	0.26	0.06	尾部	
261	F-23	Ⅶa	682		OB2	0.71	0.47	0.12	0.07	頭部	平
262	F-23	Ⅶa	715		OB2	0.44	0.66	0.15	0.04	中間	
263	F-23	Ⅶb	859		OB2	1.19	0.77	0.29	0.18	頭部	平
264	F-23	Ⅶa	898		OB2	0.65	0.43	0.13	0.03	頭部	平
265	F-23	Ⅶa	954		OB2	0.7	0.4	0.06	0.05	頭部	平
266	F-23	Ⅶb	968	439	OB2	0.63	0.51	0.11	0.05	中間	
267	F-23	Ⅶb	1001		OB1	0.88	0.41	0.12	0.04	中間	
268	F-23	Ⅶa	1003		OB2	1.08	0.61	0.15	0.1	頭部	平
269	F-23	Ⅶa	1009		OB2	1.99	0.66	0.35	0.22	頭部中間	平
270	F-23	Ⅶb	1221	431	OB2	1.19	0.45	0.17	0.1	頭部	平
271	F-23	Ⅶb	1225		OB2	0.75	0.44	0.2	0.06	頭部	平
272	F-23	Ⅶb	1236		OB2	1.19	0.56	0.18	0.11	中間	平
273	F-23	Ⅶa	1238	429	OB1	1.01	0.56	0.22	0.1	頭部	平
274	F-23	Ⅶb	1245		OB1	0.9	0.7	0.16	0.15	頭部	平
275	F-23	Ⅶb	1247		OB2	1.2	0.54	0.26	0.13	中間	
276	F-23	Ⅶb	1287	436	OB2	0.96	0.44	0.1	0.04	中間	
277	F-23	Ⅶb	1360		OB2	0.58	0.59	0.16	0.05	頭部	平

第16表　細石刃計測表（5）

番号	区	層	遺物番号	レイアウト番号	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	部位	打面
278	F-23	Ⅶb	1418		OB2	0.54	0.52	0.15	0.05	中間	
279	F-23	Ⅶb	1520		OB2	1.56	0.78	0.28	0.31	頭部中間	平
280	F-23	Ⅶb	1530	432	OB2	1.03	0.37	0.15	0.06	頭部中間	平
281	F-23	Ⅶb	1533		OB2	0.68	0.57	0.24	0.06	中間	
282	F-23	Ⅶb	1537	424	OB2	1.39	0.69	0.24	0.21	頭部	平
283	F-23	Ⅶb	1549		OB2	1.56	0.42	0.35	0.15	中間尾部	
284	F-23	Ⅶb	1551		OB1	0.96	0.61	0.22	0.13	尾部	
285	F-23	Ⅶb	1556	437	OB2	1.01	0.44	0.18	0.07	頭部	平
286	F-23	Ⅶb	1580		OB2	1.41	0.55	0.21	0.1	中間	
287	F-23	Ⅶb	1652		OB2	0.66	0.48	0.12	0.04	頭部	平
288	F-23	Ⅶb	1863		OB1	0.83	0.48	0.1	0.03	尾部	
289	F-23	Ⅶb	1880		OB1	1.01	0.46	0.16	0.07	中間	
290	F-23	Ⅶb	1988		OB2	0.56	0.7	0.19	0.03	中間	
291	F-24	Ⅶa	12	448	OB1	0.83	0.59	0.11	0.07	尾部	
292	F-24	Ⅶa	20		OB1	1.44	0.93	0.31	0.34	中間	
293	F-24	Ⅶa	38		OB2	0.85	0.84	0.16	0.11	頭部	平
294	F-24	Ⅶa	51		OB1	1.28	0.66	0.2	0.13	頭部	平
295	F-24	Ⅶa	74	446	OB1	0.84	0.7	0.16	0.12	中間	
296	F-24	Ⅶa	77	445	OB1	1.16	0.64	0.16	0.14	尾部	
297	F-24	Ⅶa	92		OB1	0.82	0.77	0.28	0.18	中間	
298	F-24	Ⅶa	95		OB1	1.02	0.57	0.15	0.09	中間	
299	F-24	Ⅶa	98		OB1	0.86	0.59	0.16	0.06	中間	
300	F-24	Ⅶa	102		OB1	0.83	0.74	0.15	0.07	頭部	平
301	F-24	Ⅶa	113		OB1	0.99	0.82	0.16	0.13	中間	
302	F-24	Ⅶb	131		OB1	0.96	0.65	0.21	0.13	中間	
303	F-24	Ⅶa	136		OB1	0.43	0.76	0.18	0.07	中間	
304	F-24	Ⅶa	139		OB1	1.37	0.86	0.23	0.23	中間	
305	F-24	Ⅶa	149		OB1	1.17	0.63	0.28	0.14	中間	
306	F-24	Ⅶa	157		OB1	1.34	0.78	0.15	0.16	頭部	平
307	F-24	Ⅶa	165		OB2	0.95	0.72	0.27	0.17	頭部	平
308	F-24	Ⅶa	168		OB2	0.84	0.91	0.23	0.13	頭部	平
309	F-24	Ⅶa	183		OB2	0.72	0.71	0.25	0.11	尾部	
310	F-24	Ⅶa	196		OB1	1.11	0.56	0.17	0.11	中間	
311	F-24	Ⅶb	270		OB2	1.31	0.64	0.18	0.12	中間	
312	F-24	Ⅶb	282		OB2	0.8	0.48	0.18	0.05	中間	
313	F-24	Ⅶa	319		OB2	0.68	0.52	0.19	0.05	頭部	平
314	F-24	Ⅶb	329		OB1	1.51	0.55	0.19	0.11	尾部	
315	F-25	Ⅶa	45		OB1	0.88	0.52	0.18	0.07	中間	
316	F-25	Ⅶa	212		OB1	1.33	1.32	0.19	0.14	中間	
317	F-25	Ⅶa	371	447	OB1	0.76	0.57	0.11	0.05	頭部	平
318	F-25	Ⅶa	381	444	OB1	1.19	0.69	0.17	0.17	頭部	平
319	F-25	Ⅶa	408		OB2	1.06	0.75	0.19	0.13	頭部	平
320	F-25	Ⅶa	409		OB2	0.78	0.44	0.13	0.03	頭部中間	平
321	F-25	Ⅶa	414		OB2	1.03	0.47	0.12	0.05	頭部	平
322	F-25	Ⅶa	533	450	OB2	0.97	0.35	0.11	0.04	頭部	平
323	F-25	Ⅶa	559	465	OB1	1.4	0.65	0.25	0.21	中間	
324	F-25	Ⅶa	640		OB2	0.93	0.45	0.18	0.07	中間	
325	F-25	Ⅶa	656		OB2	0.98	0.5	0.12	0.06	頭部	平
326	F-25	Ⅶa	794	449	OB1	0.62	0.37	0.05	0.02	中間	
327	F-25	Ⅶb	801		OB1	1.25	0.57	0.21	0.16	中間	
328	F-25	Ⅶb	807		OB1	1.1	0.49	0.2	0.1	頭部	平
329	F-25	Ⅶb	821		OB4	1.83	0.91	0.35	0.49	中間	
330	F-25	Ⅶb	844		OB4	0.68	0.44	0.11	0.04	中間	
331	F-25	Ⅶb	868		OB1	0.1	0.48	0.22	0.23	中間	
332	F-25	Ⅶb	886		OB1	1.48	0.62	0.22	0.2	中間	
333	F-25	Ⅶb	932		OB1	1.46	0.71	0.39	0.42	中間	
334	F-25	Ⅶb	963		OB2	1.17	0.58	0.2	0.11	頭部	平
335	F-25	Ⅶb	953		OB1	1.16	0.59	0.23	0.12	中間	
336	F-25	Ⅶb	988		OB1	1.15	0.64	0.22	0.15	中間	
337	F-25	Ⅶb	1005		OB1	1.05	0.56	0.19	0.1	中間尾部	
338	F-25	Ⅶb	1030		OB1	1.96	1.72	0.3	0.32	中間	
339	F-25	Ⅶb	1118		OB1	0.12	0.75	0.16	0.11	中間	
340	F-25	Ⅶb	1172		OB1	0.99	0.75	0.22	0.15	中間	
341	F-25	Ⅶb	1220		OB1	1.01	0.35	0.15	0.05	中間	
342	F-25	Ⅶb	1317		OB2	0.61	0.39	0.13	0.04	中間	
343	F-25	Ⅶb	1304		OB4	1.34	0.94	0.22	0.25	中間	
344	F-25	Ⅶb	1324		OB1	0.88	0.66	0.22	0.11	中間	
345	F-25	Ⅶb	1329		OB1	0.71	0.38	0.11	0.03	頭部	
346	F-25	Ⅶb	1452		OB1	1.04	0.54	0.22	0.11	中間	
347	F-25	Ⅶa	1573		OB4	0.83	0.41	0.11	0.04	頭部	平
348	F-25	Ⅶb	1796		OB1	0.96	0.71	0.17	0.12	頭部	平
349	F-25	Ⅶb	1801		OB1	1.14	0.53	0.28	0.13	中間	
350	F-26	Ⅶa	14		OB2	1.14	0.53	0.2	0.09	頭部	平
351	F-26	Ⅶa	27		OB2	0.9	0.71	0.14	0.09	中間	
352	F-26	Ⅶa	64	466	OB1	1.1	0.7	0.12	0.12	中間	
353	F-26	Ⅶa	69		OB1	0.93	0.74	0.15	0.1	中間	
354	F-26	Ⅶa	81		OB1	1.67	0.72	0.3	0.37	中間	
355	F-26	Ⅶa	83		OB1	0.85	0.62	0.22	0.1	尾部	
356	F-26	Ⅶa	89		OB2	0.47	0.57	0.12	0.03	頭部	平
357	F-26	Ⅶa	102	463	OB1	1.61	0.7	0.32	0.35	頭部	平
358	F-26	Ⅶa	105	467	OB1	0.89	0.67	0.21	0.13	中間	
359	F-26	Ⅶa	110		OB1	0.93	0.69	0.19	0.12	中間	
360	F-26	Ⅶa	117		OB1	2.1	0.85	0.37	0.6	中間	

第17表　細石刃計測表（6）

番号	区	層	遺物番号	レイアウト番号	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	部位	打面
361	F-26	Ⅶa	134		OB1	1.26	0.56	0.21	0.15	中間	
362	F-26	Ⅶa	178		OB1	1.37	0.74	0.34	0.23	頭部	平
363	F-26	Ⅶa	217		OB1	1.64	0.81	0.21	0.25	中間	
364	F-26	Ⅶa	225		OB1	1.11	0.79	0.27	0.28	中間	
365	F-26	Ⅶa	243		OB1	0.81	0.52	0.16	0.06	中間	
366	F-26	Ⅶa	251		OB1	0.97	0.81	0.17	0.11	中間	
367	F-26	Ⅶa	258	464	OB2	0.44	0.7	0.2	0.22	頭部	平
368	F-26	Ⅶa	263	468	OB1	0.85	0.54	0.13	0.07	尾部	
369	F-26	Ⅶa	282		OB1	0.51	0.71	0.18	0.07	中間	
370	F-26	Ⅶa	283		OB1	0.52	0.55	0.19	0.06	中間	
371	F-26	Ⅶa	306		OB1	1.56	0.89	0.32	0.31	頭部中間	平
372	F-26	Ⅶa	422		OB2	0.91	0.81	0.14	0.09	頭部	平
373	F-26	Ⅶb	523		OB1	1.07	0.87	0.24	0.19	頭部	平
374	F-26	Ⅶb	524		OB2	0.46	0.57	0.11	0.03	尾部	
375	F-26	Ⅶb	551		OB1	1.48	0.62	0.24	0.24	中間	
376	F-26	Ⅶb	569		OB1	1.0	0.79	0.24	0.19	中間	
377	F-26	Ⅶb	570		OB1	1.04	0.76	0.26	0.21	頭部	平
378	F-26	Ⅶb	573		OB1	0.86	0.53	0.13	0.09	中間	
379	F-26	Ⅶb	582		OB1	1.75	0.68	0.28	0.22	頭部中間	平
380	F-26	Ⅶb	651		OB1	0.71	0.54	0.14	0.05	頭部	平
381	F-26	Ⅶb	678		OB1	1.55	0.83	0.44	0.41	頭部	
382	F-26	Ⅶb	688		OB1	1.38	0.73	0.15	0.17	中間	
383	F-26	Ⅶb	719		OB1	1.44	0.35	0.1	0.05	中間尾部	
384	F-26	Ⅶb	829		OB2	1.17	1.15	0.3	0.4	頭部	平
385	F-26	Ⅶb	888		OB1	1.05	0.94	0.29	0.27	頭部	平
386	F-26	Ⅶb	912		OB2	2.37	0.71	0.28	0.35	尾部	
387	F-26	Ⅶb	918		OB2	0.8	0.48	0.16	0.06	頭部	平
388	F-26	Ⅶb	956		OB1	1.59	0.81	0.31	0.35	頭部中間	平
389	F-26	Ⅶb	970		OB1	0.83	0.54	0.16	0.07	中間	
390	F-26	Ⅶb	978		OB1	1.09	0.64	0.14	0.12	頭部	平
391	H-19	—	284		OB3	0.97	0.45	0.15	0.05	頭部	
392	F-26	Ⅶb	1008		OB1	1.14	0.59	0.16	0.1	頭部	平
393	F-26	Ⅶb	1029		OB2	0.74	0.55	0.15	0.06	中間	
394	F-26	Ⅶb	1720		OB2	1.32	0.69	0.25	0.19	中間	
395	F-27	Ⅶa	65		OB2	0.9	0.66	0.14	0.07	頭部	平
396	F-28	Ⅶa	16		OB1	0.61	0.47	0.16	0.04	中間	
397	F-28	Ⅶa	32	470	OB1	1.08	0.53	0.21	0.13	頭部	平
398	F-28	Ⅶa	51		OB1	0.92	0.51	0.21	0.11	頭部	平
399	F-28	Ⅶa	68		OB1	0.79	0.52	0.09	0.06	中間	
400	F-28	Ⅶa	83		OB2	1.35	0.5	0.1	0.12	完形	
401	F-28	Ⅶa	105	473	OB2	1.1	0.4	0.15	0.07	頭部	点
402	F-28	Ⅶa	123		OB2	0.96	0.39	0.07	0.03	頭部	平
403	F-28	Ⅶa	130		OB1	0.86	0.5	0.13	0.07	中間	
404	F-28	Ⅶa	132		OB2	1.23	0.67	0.21	0.2	頭部	平
405	F-28	Ⅶa	133		OB2	1.08	0.34	0.08	0.04	完形	
406	F-28	Ⅶa	134	471	OB1	0.85	0.49	0.19	0.08	頭部	平
407	F-28	Ⅶa	140		OB2	0.69	0.27	0.02	0.01	頭部	点
408	F-28	Ⅶa	164		OB2	0.82	0.34	0.12	0.04	頭部	平
409	F-28	Ⅶb	187		OB1	1.21	0.71	0.25	0.23	頭部	平
410	F-28	Ⅶb	193	477	OB2	1.1	0.4	0.1	0.09	—	
411	D-25	Ⅶb	50		OB2	0.92	0.63	0.15	0.09	中間	
412	F-28	Ⅶb	195		OB1	0.92	0.78	0.28	0.18	尾部	
413	E-26	Ⅶb	622		OB2	0.66	0.6	0.12	0.05	頭部	平
414	F-28	Ⅶb	204		OB4	0.8	0.34	0.06	0.02	頭部	平
415	F-28	Ⅶa	207		OB4	0.81	0.48	0.19	0.09	中間	
416	F-28	Ⅶa	213		OB2	1.1	0.41	0.13	0.07	中間尾部	
417	F-28	Ⅶb	218		OB1	1.55	0.61	0.42	0.42	頭部	平
418	G-25	Ⅶa	2	451	OB2	0.99	0.34	0.1	0.04	頭部	平
419	G-25	Ⅶa	17	452	OB2	0.72	0.38	0.09	0.03	頭部	平
420	G-25	Ⅶa	20		OB1	1.54	0.64	0.15	0.15	頭部中間	平
421	G-25	Ⅶa	21		OB1	0.9	0.58	0.07	0.04	中間	
422	G-25	Ⅶb	33		OB2	0.96	0.34	0.03	0.02	中間	
423	E-26	Ⅶa	542		OB2	0.79	0.5	0.12	0.05	頭部	平
424	E-26	Ⅶa	395		OB2	0.75	0.58	0.13	0.06	頭部	平
425	E-26	Ⅶa	265		OB2	0.71	0.71	0.15	0.08	頭部	平
426	F-26	Ⅷ	1499		OB1	1.49	0.74	0.16	0.22	中間	
427	G-19	Ⅶb	399		—	1.03	0.65	0.12	0.1	頭部	平
428	G-19	Ⅶb	554		—	0.94	0.66	0.17	0.12	頭部	平
429	G-19	Ⅶb	410		—	0.91	0.6	0.12	0.08	頭部	平
430	G-19	Ⅶb	557		—	0.9	0.4	0.07	0.04	頭部	平
431	G-19	Ⅶb	330		—	0.82	0.43	0.08	0.04	頭部	平
432	G-19	Ⅶb	492		—	0.85	0.47	0.1	0.05	頭部	平
433	G-19	Ⅶb	524		—	1.3	0.5	0.12	0.1	中間	
434	G-19	Ⅶb	516		—	0.56	0.57	0.09	0.05	中間	
435	G-19	Ⅶb	395		—	1.31	0.6	0.1	0.09	頭部中間	平
436	G-19	Ⅶb	541		—	0.87	0.82	0.15	0.13	頭部	平
437	G-19	Ⅶb	664		—	0.81	0.38	0.08	0.04	頭部	平
438	G-19	Ⅶa	57		OB3	0.72	0.65	0.12	0.06	中間	
439	G-19	Ⅶa	80		OB3	0.8	0.69	0.17	0.12	頭部	平
440	G-19	Ⅶa	105		OB3	1.09	0.54	0.22	0.09	頭部	平
441	G-19	Ⅶa	181		OB3	0.95	0.65	0.08	0.08	中間	平
442	G-19	Ⅶa	203		OB3	1.24	0.9	0.11	0.14	頭部	平
443	G-19	Ⅶa	216		OB3	0.51	0.61	0.19	0.04	尾部	

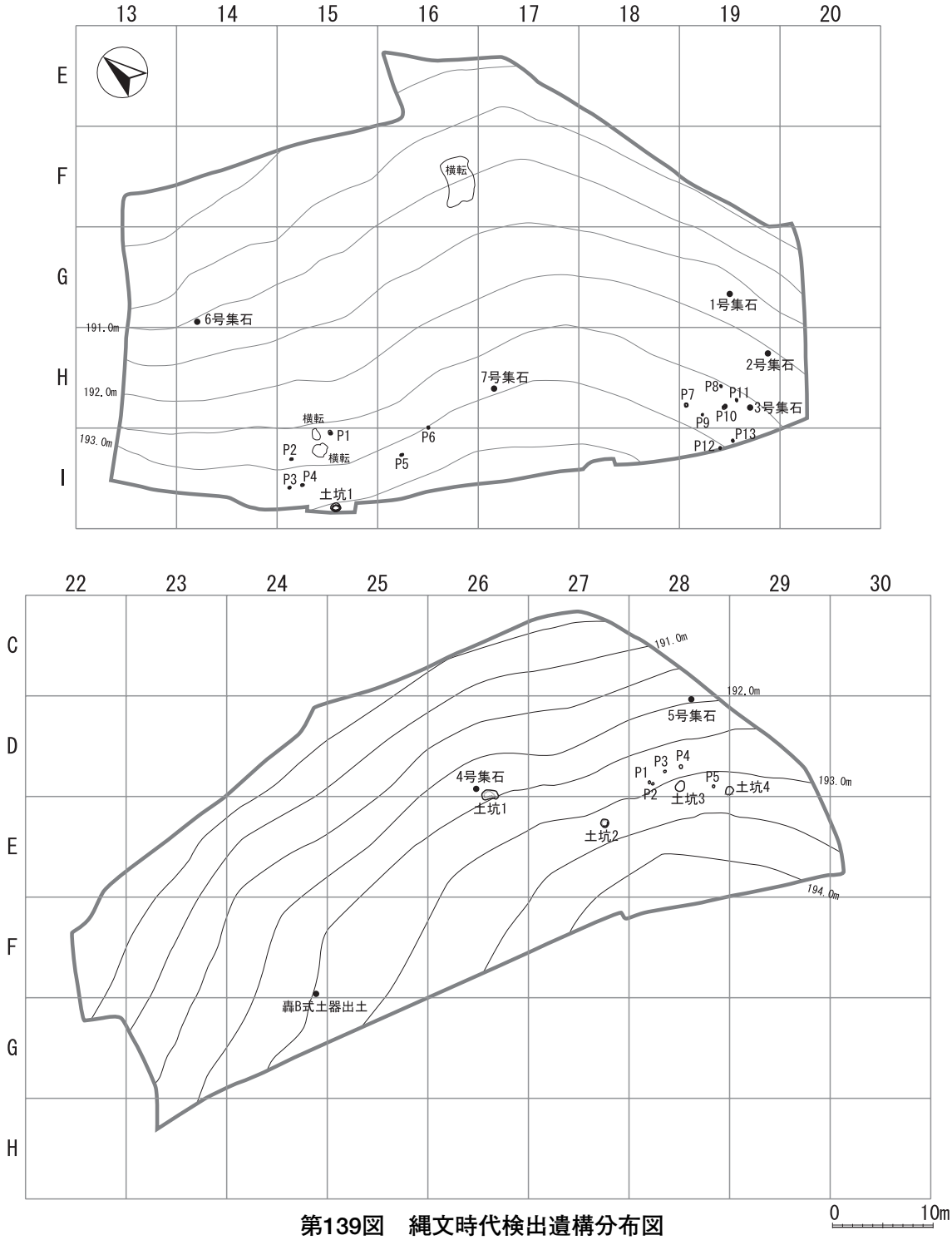
第18表　細石刃計測表（7）

番号	区	層	遺物番号	レイアウト番号	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	部位	打面
444	G-19	Ⅶa	230		OB3	0.85	0.71	0.2	0.08	中間	
445	G-19	Ⅶa	241		OB3	1.32	0.59	0.22	0.09	頭部	点
446	G-19	Ⅶa	251		OB3	1.07	0.55	1.0	0.04	中間	
447	G-19	Ⅶa	265		OB3	1.7	1.04	0.25	0.3	中間	
448	G-19	Ⅶa	293		OB3	1.06	0.92	0.25	0.2	頭部	平
449	G-19	Ⅶa	297		OB3	0.92	0.59	0.15	0.05	頭部	平
450	G-19	Ⅶb	339		OB3	1.3	0.43	0.15	0.07	頭部	平
451	G-19	Ⅶb	382		OB3	0.98	0.45	0.2	0.06	尾部	
452	G-19	Ⅶb	428		OB3	0.75	0.4	0.14	0.04	中間	
453	G-19	Ⅶb	489		OB3	1.03	0.48	0.19	0.08	頭部	平
454	G-19	Ⅶb	572		OB3	0.9	0.43	0.12	0.04	尾部	
455	F-16	Ⅶa	24		OB1	0.47	0.4	0.07	0.02	中間	
456	F-16	Ⅶa	52		OB1	1.13	0.67	0.25	0.12	中間	
457	F-17	Ⅶa	4		OB1	0.66	0.64	0.17	0.06	頭部	平
458	F-17	Ⅶa	15		OB1	0.53	0.55	0.19	0.06	中間	
459	F-17	Ⅶa	48		OB1	0.99	0.73	0.21	0.14	頭部	平
460	F-17	Ⅶa	64		OB1	0.99	0.68	0.2	0.15	中間	
461	F-17	Ⅶa	180		OB1	0.69	0.53	0.17	0.07	頭部	平
462	F-17	Ⅶa	186		OB1	1.42	0.54	0.21	0.15	頭部	平
463	G-18	Ⅶa	17		OB2	1.09	0.42	0.12	0.07	頭部	平
464	G-18	Ⅶa	84		OB2	1.16	0.8	0.18	0.16	頭部	平
465	H-14	Ⅶa	3		OB2	0.62	0.36	0.13	0.03	頭部	平
466	H-19	Ⅶa	16		OB3	1.26	0.68	0.15	0.11	尾部	
467	H-19	Ⅶa	18		OB2	1.15	0.46	0.18	0.07	頭部	平
468	H-19	Ⅶa	46		OB3	0.62	0.68	0.15	0.06	頭部	平
469	H-19	Ⅶa	51		OB3	0.79	0.61	0.19	0.09	頭部	平
470	H-19	Ⅶb	99		OB3	0.92	0.47	0.19	0.07	頭部	平
471	H-19	Ⅶb	149		OB3	0.63	0.48	0.15	0.05	頭部	平
472	H-19	Ⅶb	151		OB3	0.79	0.44	0.2	0.04	頭部	平
473	H-19	Ⅶb	155		OB3	0.97	0.56	0.17	0.07	頭部	平
474	H-19	Ⅶb	166		OB2	0.95	0.55	0.15	0.07	頭部	平
475	H-19	Ⅶb	192		OB3	0.79	0.57	0.17	0.06	頭部	平
476	H-19	Ⅶb	207		OB2	1.03	0.58	0.15	0.08	頭部	平
477	H-19	Ⅶb	208		OB3	0.76	0.45	0.12	0.04	頭部	平
478	H-19	Ⅶb	235		OB3	0.85	0.43	0.17	0.05	中間	
479	H-19	Ⅶb	246		OB3	0.54	0.55	0.2	0.04	中間	
480	H-19	Ⅶb	278		OB3	0.93	0.48	0.15	0.06	頭部	平
481	H-19	Ⅶb	283		OB3	0.82	0.47	0.14	0.06	頭部	平
482	H-19	Ⅶb	297		OB3	0.89	0.6	0.14	0.02	頭部	平
483	H-19	Ⅶb	319		OB3	0.1	0.44	0.21	0.09	頭部	平
484	H-19	Ⅶb	339		OB3	0.6	0.37	0.16	0.03	中間	
485	I-15	Ⅶa	2		OB2	0.95	0.26	0.15	0.03	中間	
486	I-17	Ⅶb	1		OB2	0.64	0.63	0.09	0.02	頭部	平
487	D-28	Ⅶb	203		OB2	0.64	0.55	0.14	0.04	中間	
488	D-28	Ⅶb	271		OB2	0.61	0.71	0.11	0.05	中間	
489	D-28	Ⅶb	360		OB2	0.68	0.65	0.15	0.08	頭部	平
490	D-28	Ⅶb	367		OB2	0.74	0.62	0.14	0.08	尾部	
491	D-28	Ⅶb	379		OB2	0.67	0.69	0.2	0.09	中間	
492	D-28	Ⅶb	406		OB2	1.14	0.3	0.22	0.04	中間尾部	
493	E-27	Ⅶb	527		OB2	0.72	0.57	0.14	0.05	尾部	
494	E-27	Ⅶb	711		OB2	0.67	0.68	0.12	0.06	尾部	
495	E-28	Ⅶb	185		OB2	0.94	0.33	0.1	0.03	頭部	平
496	E-28	Ⅶb	625		OB2	0.83	0.5	0.16	0.05	頭部	平
497	E-28	Ⅶb	761		OB2	0.97	0.45	0.25	0.08	頭部	平
498	E-28	Ⅶb	782		OB2	1.3	0.66	0.29	0.2	頭部	平
499	F-23	Ⅶa	99		OB2	0.63	0.82	0.21	0.1	頭部	平
500	F-23	Ⅶa	168		OB2	0.99	0.44	0.21	0.1	頭部	平
501	F-23	Ⅶa	276		OB2	0.94	0.56	0.2	0.13	頭部	平
502	F-23	Ⅶa	388		OB2	1.0	0.62	0.62	0.11	頭部	平
503	F-23	Ⅶa	438		OB2	0.95	0.65	0.12	0.06	尾部	
504	F-23	Ⅶa	486		OB2	0.68	0.42	0.16	0.05	尾部	
505	F-23	Ⅶa	570		OB2	0.65	0.64	0.21	0.06	頭部	平
506	F-23	Ⅶa	617		OB2	0.73	0.73	0.23	0.1	頭部	平
507	F-23	Ⅶa	976		OB2	0.59	0.42	0.13	0.03	中間	
508	F-24	Ⅶb	226		OB2	0.57	0.5	0.17	0.05	中間	平
509	F-25	Ⅶa	399		OB2	0.36	0.37	0.1	0.02	中間	
510	F-25	Ⅶa	619		OB2	1.38	0.38	0.25	0.1	頭部中間	平
511	F-25	Ⅶa	628		OB2	0.57	0.53	0.08	0.03	中間	
512	F-25	Ⅶa	655		OB2	0.75	0.51	0.12	0.04	中間	
513	F-25	Ⅶa	798		OB2	0.58	0.53	0.09	0.04	中間	
514	F-25	Ⅶb	833		OB1	0.68	0.47	0.12	0.04	中間	
515	F-25	Ⅶb	846		OB2	0.97	0.41	0.11	0.04	頭部中間	平
516	F-26	Ⅶa	279		OB1	1.41	0.89	0.16	0.21	中間	
517	F-26	Ⅶb	549		OB2	0.67	0.39	0.14	0.03	頭部	平
518	F-26	Ⅶb	690		OB1	0.83	0.56	0.12	0.07	中間	
519	F-26	Ⅶb	708		OB1	0.53	0.66	0.21	0.07	中間	
520	F-26	Ⅶb	788		OB2	0.95	0.4	0.14	0.05	尾部	
521	F-26	Ⅶb	883		OB1	0.8	0.63	0.2	0.08	尾部	
522	F-26	Ⅶb	898		OB2	0.81	0.44	0.11	0.05	頭部	平
523	F-26	Ⅶb	972		OB2	1.47	0.58	0.18	0.15	中間	
524	F-26	Ⅶb	1027		OB2	0.58	0.44	0.15	0.03	頭部	平
525	F-26	Ⅶb	1098		OB4	1.34	0.45	0.15	0.08	頭部	平
526	F-26	Ⅶb	1603		OB2	1.01	0.67	0.17	0.09	頭部	平

第Ⅷ章　縄文時代の調査

第１節　調査の概要と遺構

縄文時代の遺物は，主にＦ－26・27区周辺のⅣ層下部～Ⅴ層上部にかけては縄文時代早期の貝殻文系土器が出土し，Ｆ－23～25区周辺のⅢａ層では前期前葉の時期の土器が出土している。また，遺構はＡ地区では５基，Ｂ地区では２基の集石が検出されている。その他の遺構としては，Ｈ・Ｉ－19区，Ｈ・Ｉ－15・16区，Ｄ－28区のⅣ層で検出されたピット群がある。またⅣ・Ⅴ層で検出された土坑が，Ａ地区Ｉ－15区で１基，Ｂ地区Ｄ・Ｅ－26～28区に４基みられる。



第139図　縄文時代検出遺構分布図

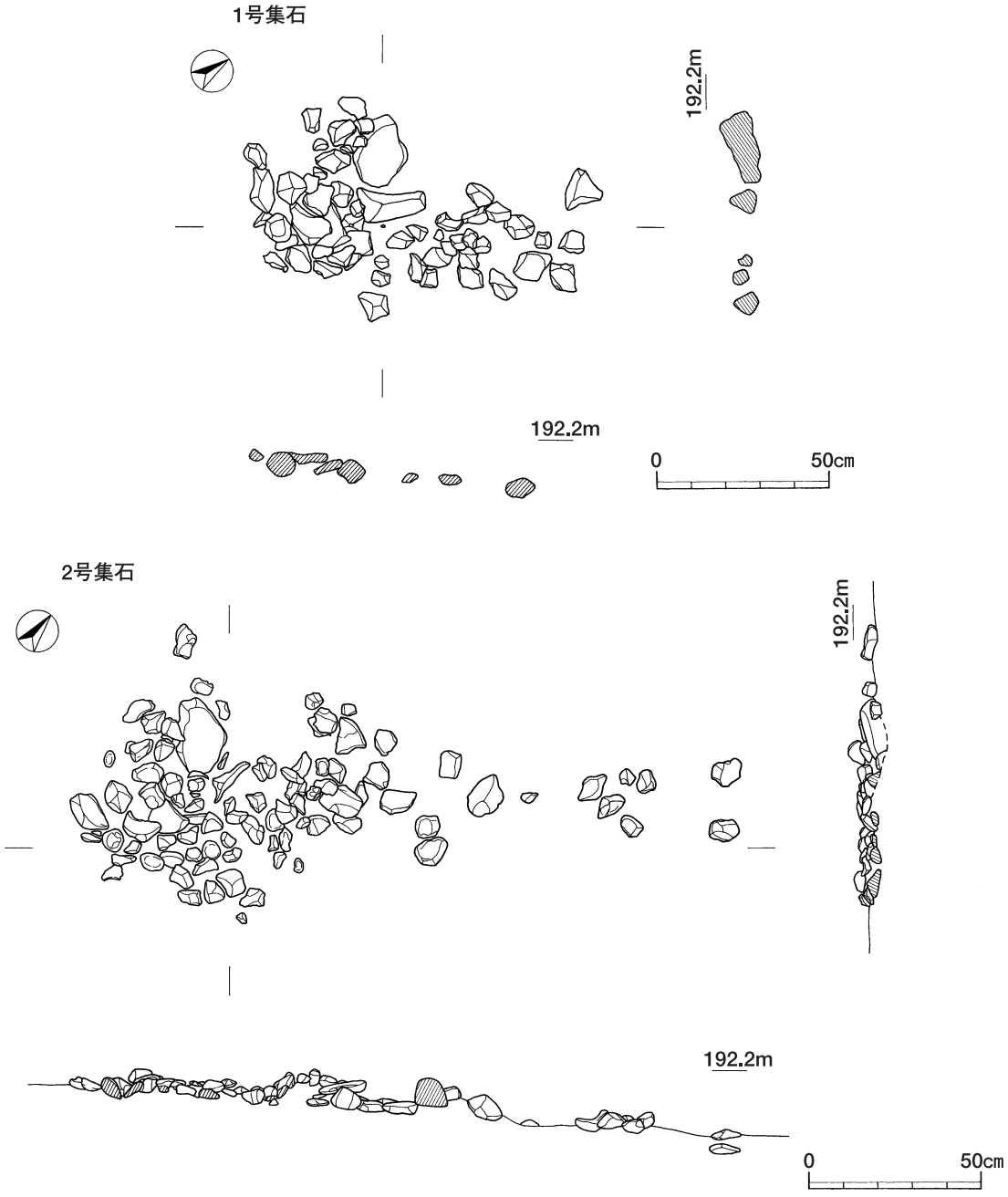
１．集石（第140～142図）

１号集石

Ｇ－19区Ⅴ層下面で検出された集石である。径１×0.6ｍの範囲に広がり，傾斜に沿って北東方向に長く分布する。礫総数は62個で，約半数が熱を受けている。石材は，ほとんどが安山岩である。

２号集石

平成３年度確認調査の際に，Ｈ－19区Ⅴ層で検出された集石である。礫総数は約100個で，径５～10㎝前後の大きさのものが多い。南北に２ｍ，東西に約0.8ｍの範囲に広がっており，南側に密集部があり，北側の傾斜に沿って礫が散在している。



第140図　縄文時代１・２号集石

3号集石

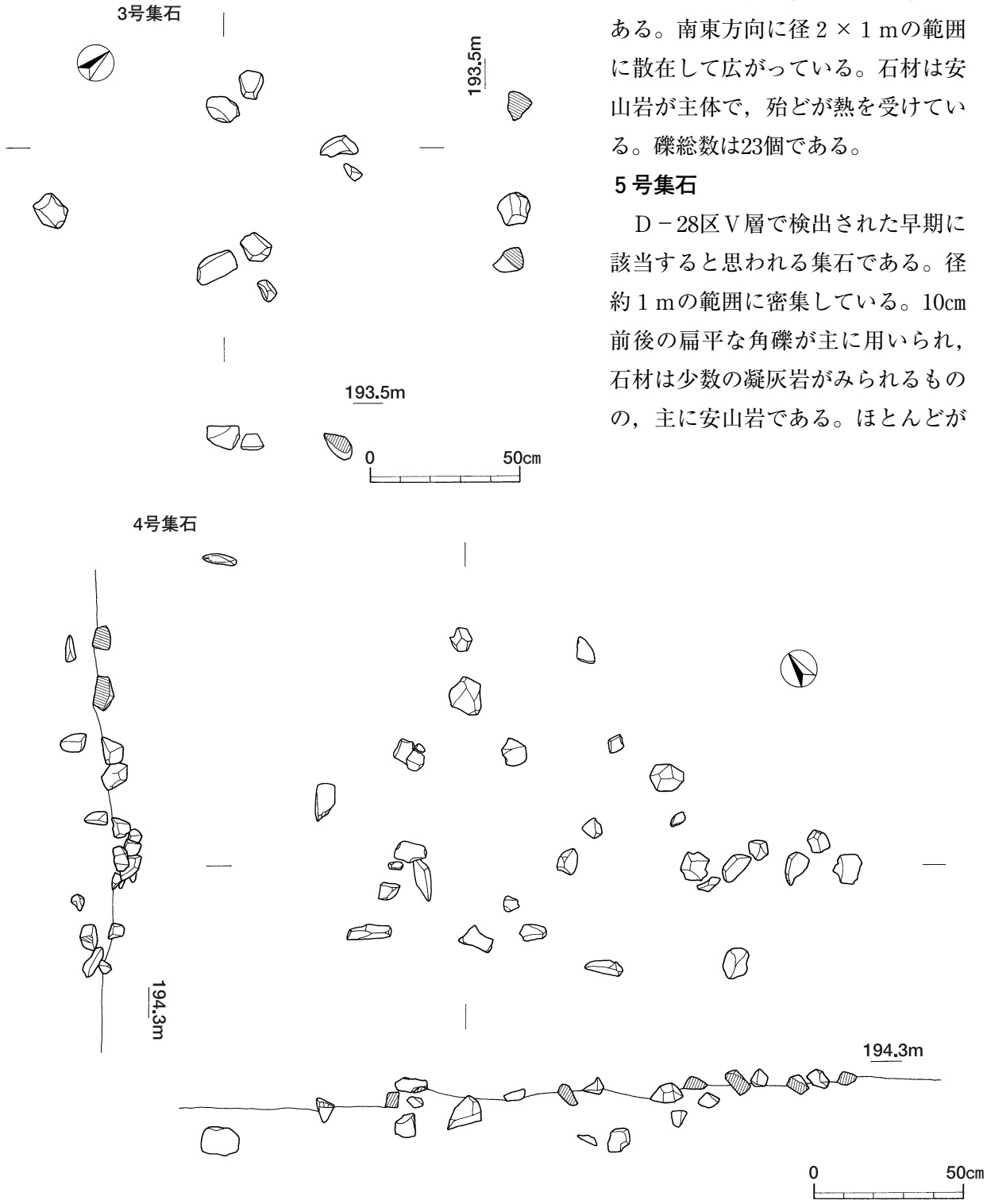
H－19区で検出された集石である。早期～アカホヤ火山降灰時期該当のものと思われるが，検出面では層位が安定していない。径10㎝前後の安山岩８個の礫で構成され，熱を受けている。掘り込みはみられない。

4号集石

D－26区Ⅳ層で検出された集石である。南東方向に径２×１ｍの範囲に散在して広がっている。石材は安山岩が主体で，殆どが熱を受けている。礫総数は23個である。

5号集石

D－28区Ⅴ層で検出された早期に該当すると思われる集石である。径約１ｍの範囲に密集している。10㎝前後の扁平な角礫が主に用いられ，石材は少数の凝灰岩がみられるものの，主に安山岩である。ほとんどが



第141図　縄文時代３・４号集石

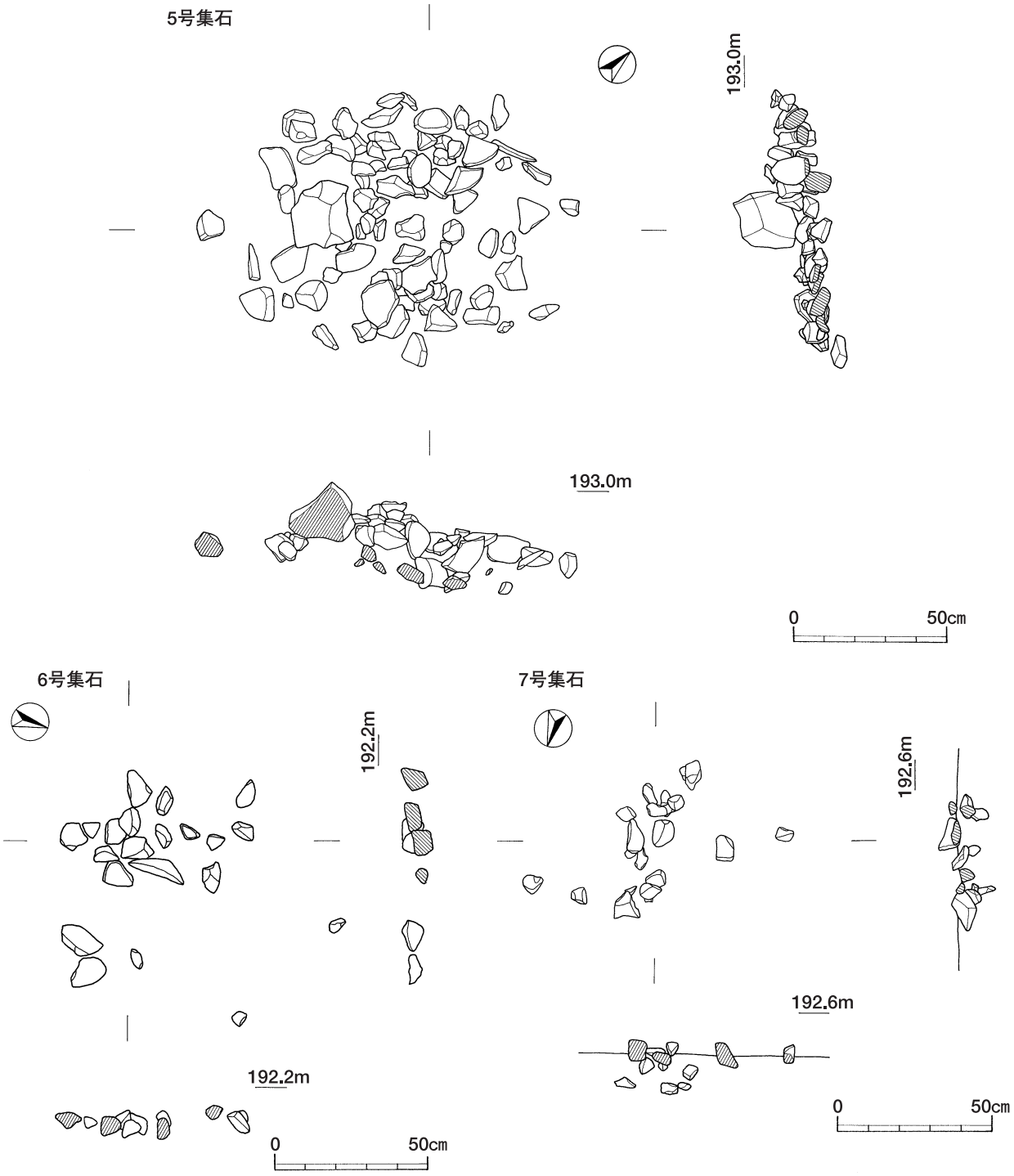
熱を受けている。特に掘り込みはみられない。礫の総数は94個である。

6号集石

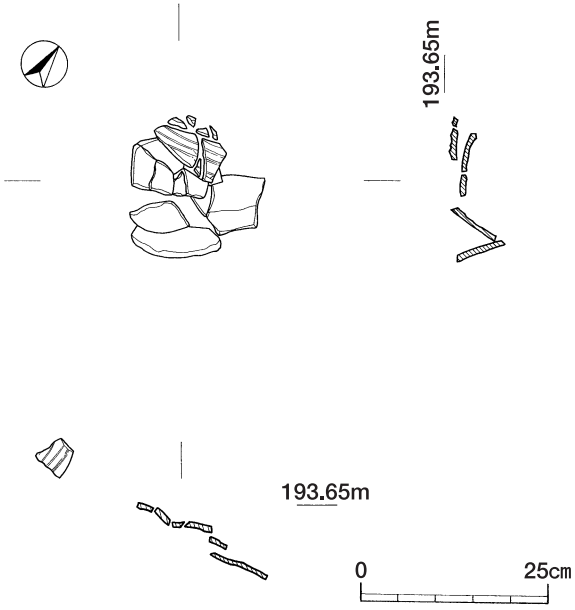
G－14区Ⅲa層で検出された集石である。礫は径10㎝大前後の円礫がほとんどで，総数は22個である。すべて熱を受けている。径60×40㎝の範囲に密集しており，散在している礫が数個みられる。

7号集石

H－17区Ⅲa層で検出された集石である。径80×50㎝の範囲で中央部にやや密集している。径10



第142図　縄文時代5～7号集石



第143図　土器一括出土状況

cm前後の大きさの礫が21個みられ，殆どのものが熱を受けている。

2．土器一括出土（第143図）

Ｆ－24区Ⅲａ層でまとまって土器が出土した。胴部内外面には横位・斜位の貝殻条痕，そして外面胴部上位には微隆起突帯が施されている。後述するⅥｂ類土器である。

第2節　縄文時代の土器

縄文時代の土器は早期～後期にかけてのものが出土しており，Ⅳ層下部～Ⅴ層上部にかけて早期土器が，Ⅲａ層では前期以降の土器が主に出土している。形態・文様などからⅠ～Ⅸ類に分類した。

Ⅰ類土器（第145図　502～506）

貝殻条痕文を施した後異なる文様を施す，二重施文の手法をもつ土器群である。内面はケズリ調整が行われる。

502～504は角筒土器と考えられ，角部片である。貝殻条痕文を横位に施した後斜位に施す。角部には棒状工具による縦位の短沈線文を施す。505は貝殻条痕文を横位に施した後，綾杉状に施す。

506は円筒土器の平底である。胎土や色調が502～505に類似していることから，この類に含めた。外面に横位の貝殻条痕文が認められる。内面・底面ともにナデ調整が行われる。

Ⅱ類土器（第145・146図　507～523）

口縁部に貝殻刺突文を施し，胴部には貝殻押引文を施す土器群である。胎土と色調から，507・509～512・518～520と508・513～517・521～523の2個体の存在が考えられる。これらは胎土に白色・透明の石英・長石類や金色の雲母を多く含む。

器形は円筒形を呈し，やや外反する口縁部からそのまま平底となる底部に至る。口唇部には刻みを施す。内面は横位・斜位のナデ調整が行われ，擦痕がみられる。なお，514には調整工具の始点と考えられる縦位の浅い刻み（凹み）がみられる。

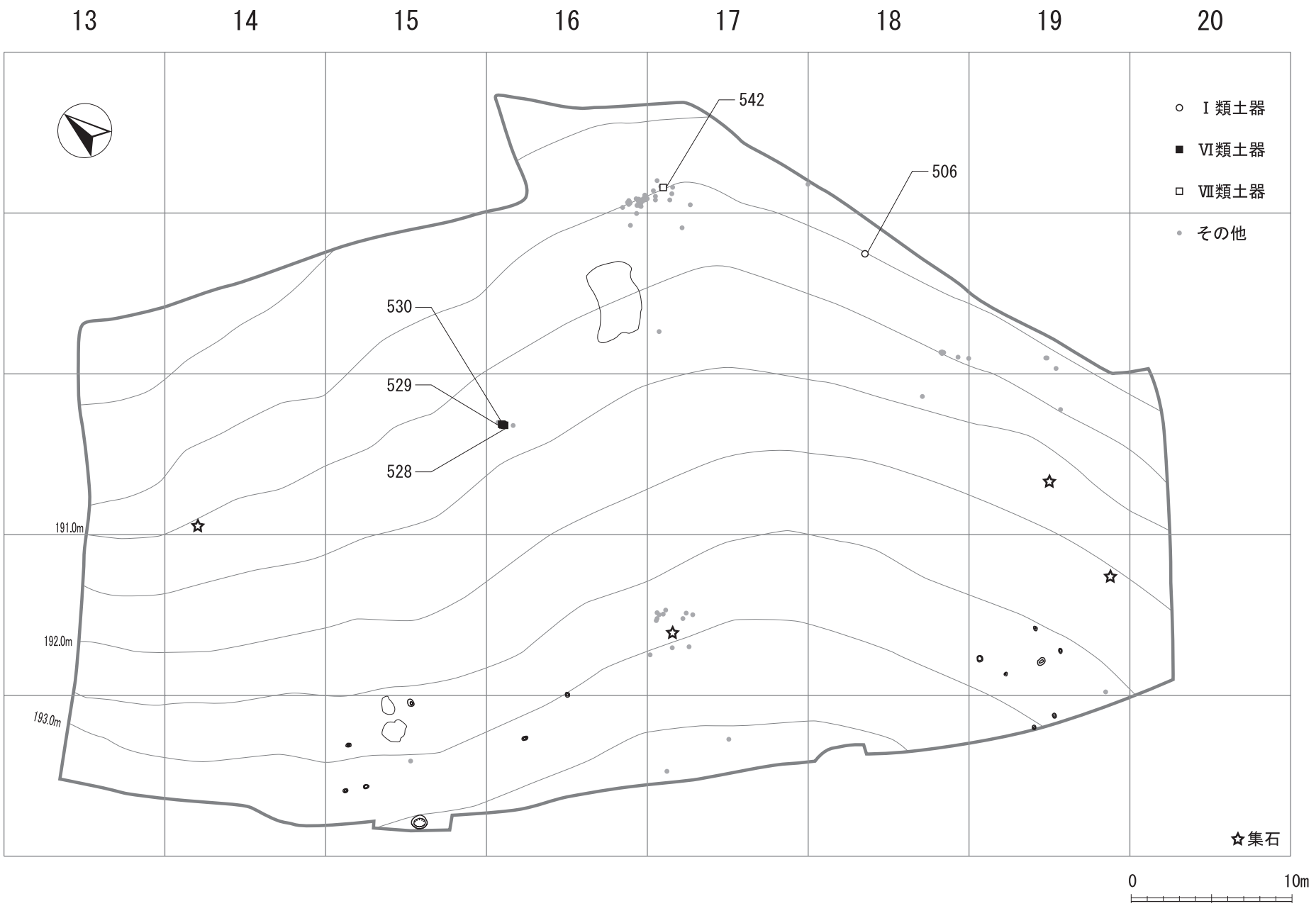
507～509は口縁部または口縁～胴部片である。横位の貝殻刺突文を3条施し，貝殻刺突文下位には貝殻押引文が施される。

518～523は胴下半～底部片で，518～522は接合痕で剥離している。底部外面には縦位の刻みを施す。

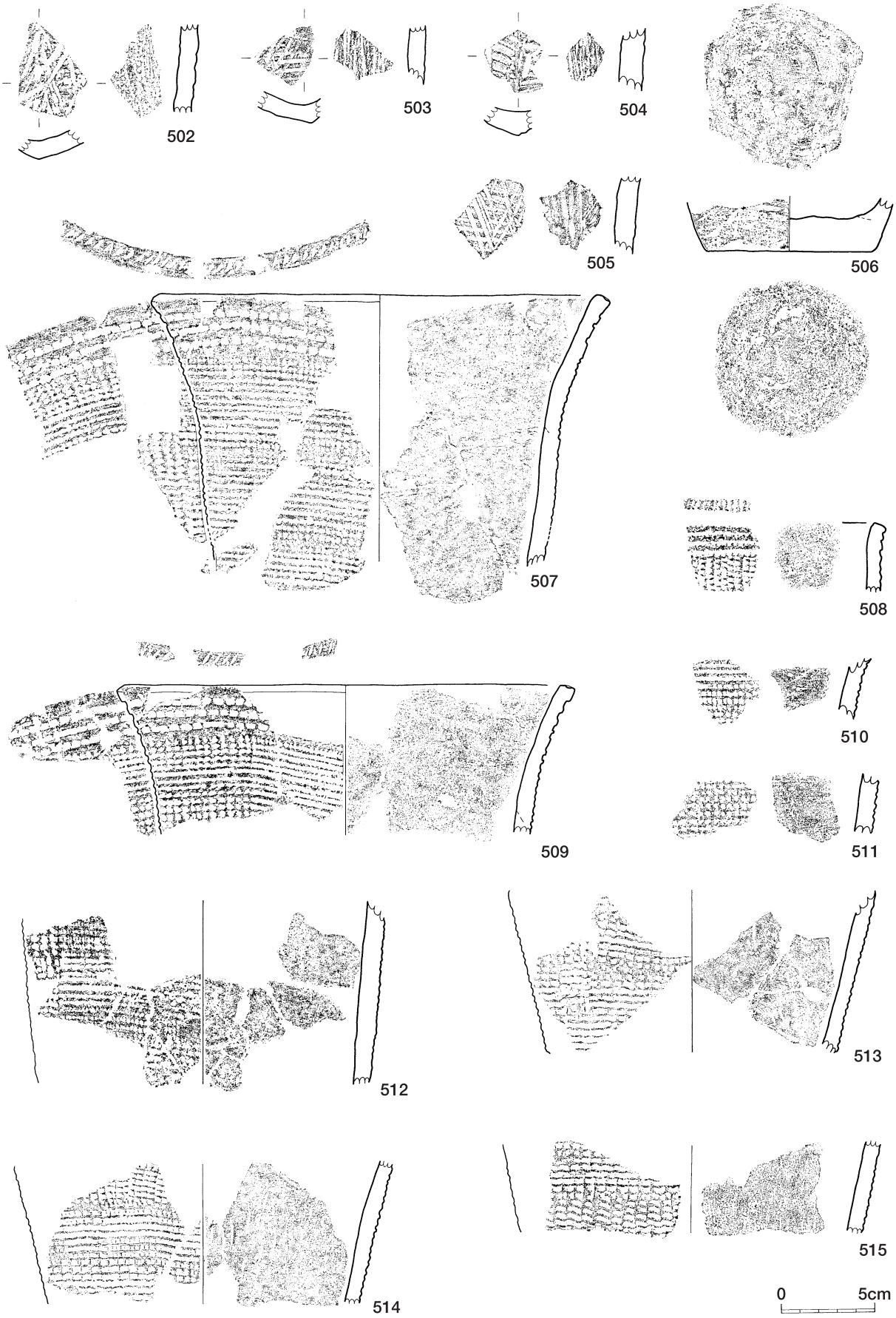
Ⅲ類土器（第146図　524）

横位の貝殻条線文を施す土器である。内外面ともにナデ調整が行われ，胎土には黒色の輝石・角閃石類や小礫を多く含む。

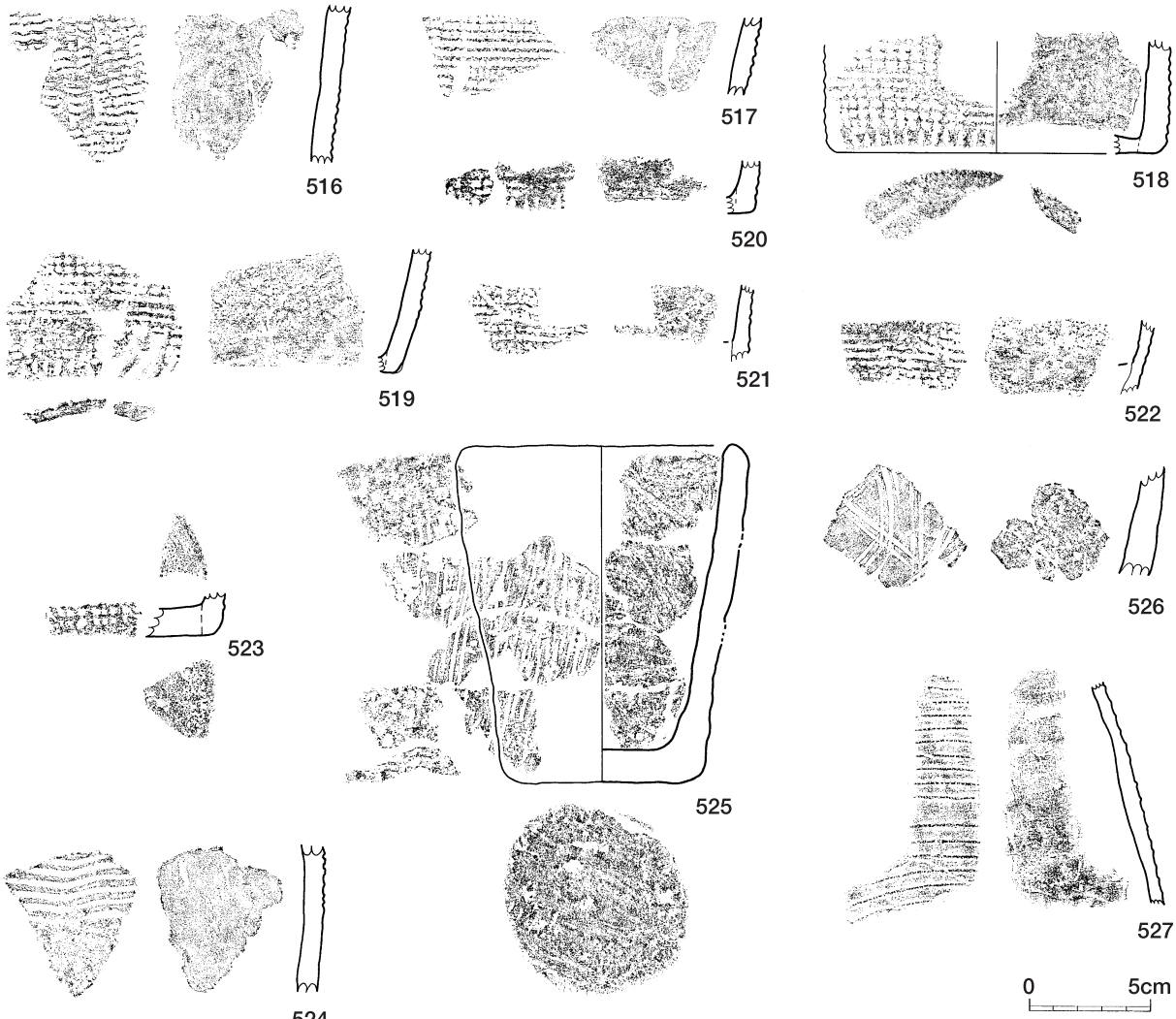
524は端部を欠くが口縁部片と考えられ，6＋α条の貝殻条線文が施される。



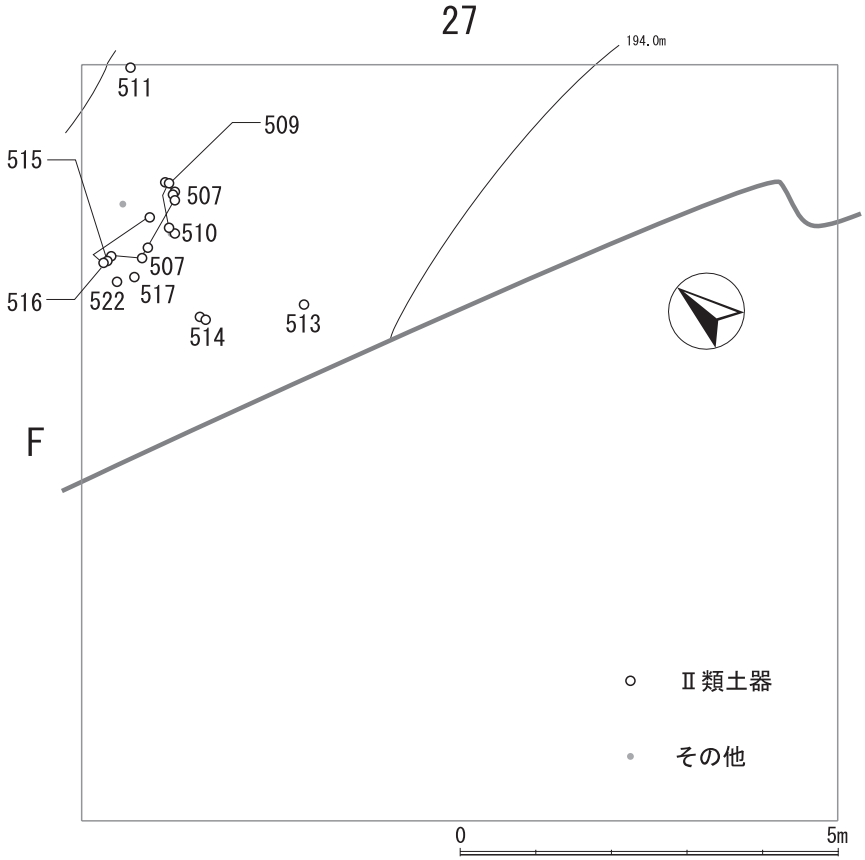
第144図　縄文時代土器出土分布図



第145図　縄文土器Ⅰ・Ⅱ類



第146図　縄文土器Ⅱ～Ⅴ類



第147図
Ｆ－27区縄文時代土器出土分布図

Ⅳ類土器（第146図　525・526）

貝殻腹縁による条線文を施す土器群である。口縁部が直行するもので，いわゆるバケツ形を呈する。内面は底部から口縁部方向へのケズリ調整が行われる。胎土は粗く，小礫を多く含む。

525は完形に復元できるもので，縦位の貝殻条線文を不規則に施す。底面には白色物質が付着する。526は２条１単位の貝殻条線文を不規則に施す。

第148図　縄文土器Ⅵ類

Ⅴ類土器（第146図　527）

壺形土器の頸部片と考えられる土器で，微隆起突帯文を横位に巡らせるものである。12＋α条の微隆起突帯文を巡らせており，突帯上には刻みを施す。

Ⅵ類土器（第148・149図　528～541）

口縁部に突帯を施し，器面には貝殻条痕を施す土器群である。突帯や条痕の違いにより，2類に細分した。

Ⅵａ類（第148図　528～530）

いわゆるミミズバレ状突帯を巡らせるものである。器面に粗い条痕を施す。

528～530は同一個体であり，3条のミミズバレ状突帯を巡らせる。波状口縁を呈すると考えられる。条痕は外面には口縁部上面からみて時計回り，内面には反時計回りに施している。

Ⅵｂ類（第148・149図　531～541）

微隆起突帯を巡らせる物である。突帯間はナデている。器面に目の細かい貝殻条痕を施す。

531～541は同一個体である。534は口縁～胴部で，外傾する口縁部からそのまま底部へ至るものである。12条の微隆起突帯を巡らせる。

Ⅶ類土器（第149図　542）

沈線文を幾何学的に施す土器である。沈線文を縦位に施した後，横位に施している。内外面ともにナデ調整を行う。

Ⅷ類土器（第149図　543～548）

凹線文や沈線文を施す土器群である。

543は外面に横位の凹線文を，内面には縦位の凹線文を施す。内外面ともにナデ調整を行う。

544は先端が「]」状の工具による凹線文を横位に施す。外面はヨコナデ調整が行われ，内面は横位の貝殻条痕を施す。凹線内にススが付着する。

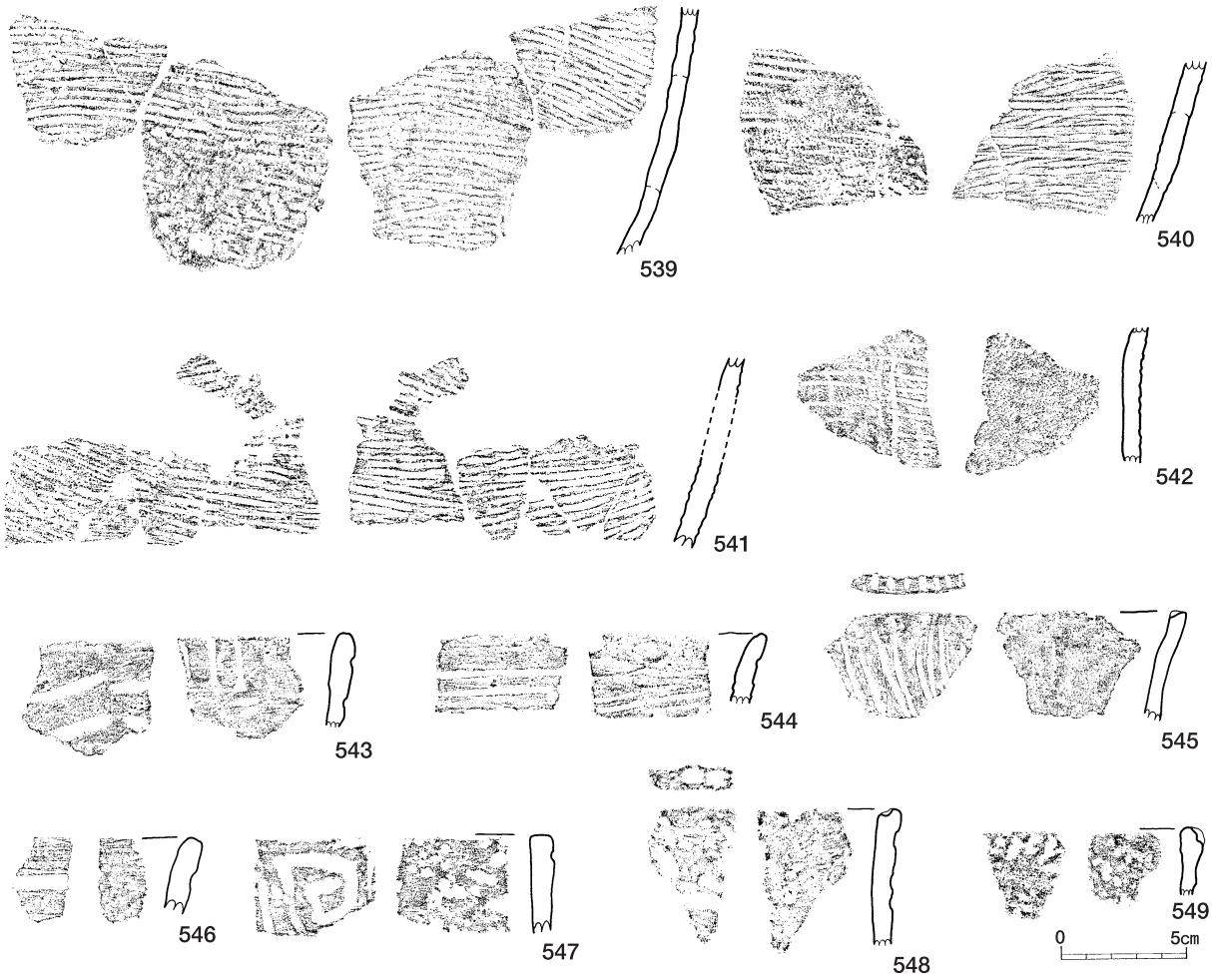
545は縦位の浅い凹線文を施す。口唇部には刻みを施す。内外面ともにナデ調整を行う。凹線内にススが付着する。

546は横位の凹線文を施す。内外面ともにナデ調整を行う。

547・548は同一個体である。凹線文を渦巻状に施す。口唇部には三叉状工具による刻みを施す。内外面ともにヨコナデ調整を行う。

Ⅸ類土器（第149図　549）

口縁端部外面に貝殻腹縁による刺突文を施す土器である。内外面ともにナデ調整を行う。



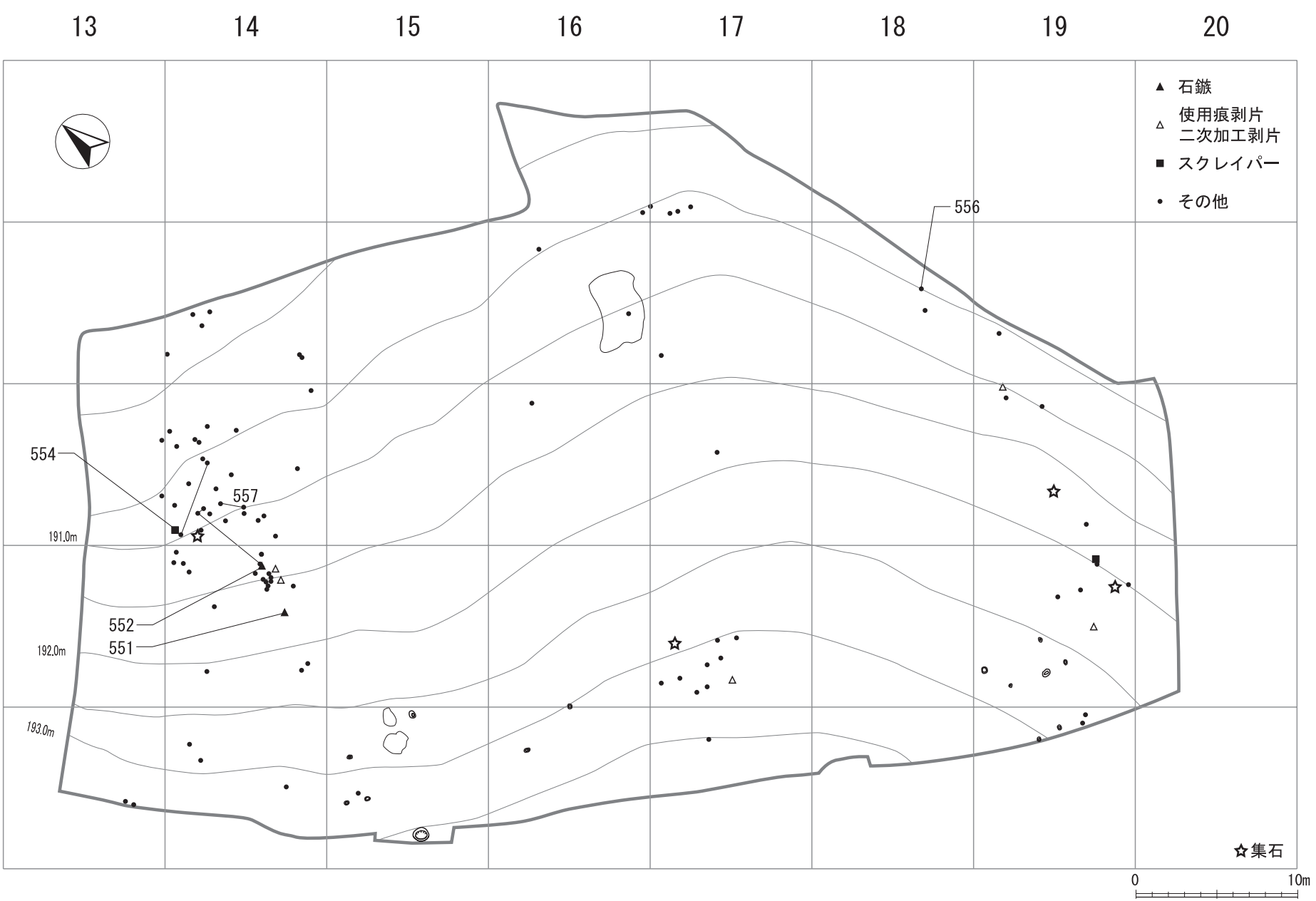
第149図　縄文土器Ⅵ～Ⅸ類

第19表　縄文土器観察表（1）

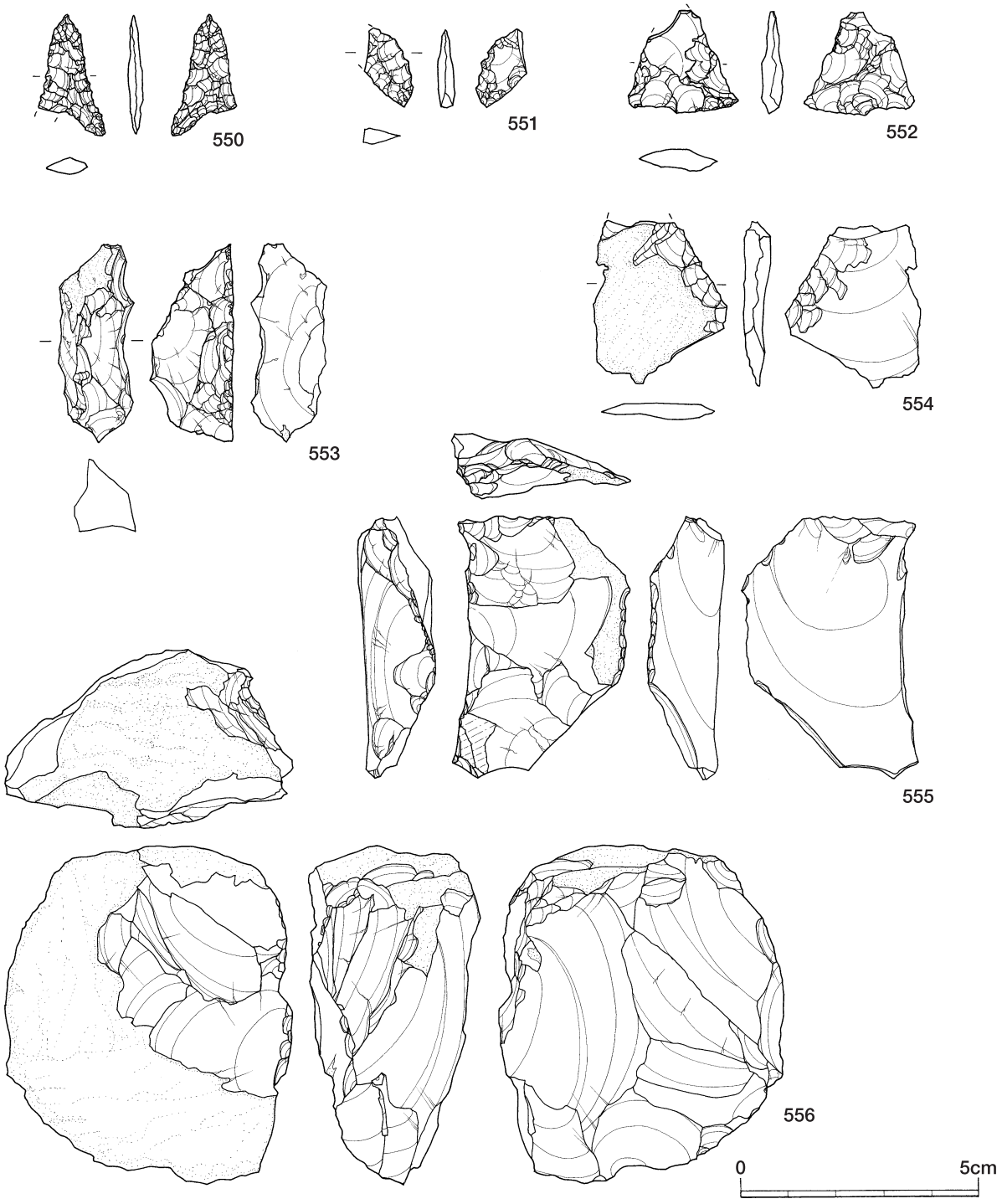
挿図	番号	分類	型式等	出土区	層	取上番号	調整		色調		胎土			
							内面	外面	内面	外面	石英長石	角閃輝石	火山ガラス	砂礫ほか
145	502	Ⅰ	志風頭式	E26	Ⅳ	一括	タテケズリ	貝殻条痕文	にぶい黄褐10YR5/4	にぶい黄褐10YR5/3	△	○	白△	白色粗砂△
	503	Ⅰ	志風頭式	F27	Ⅳ	一括	タテケズリ	貝殻条痕文	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白△	白色粗砂・砂礫○
	504	Ⅰ	志風頭式	F26	Ⅴ	一括	タテケズリ	貝殻条痕文	にぶい黄褐10YR5/3	暗灰黄2.5Y4/2	○	△	白△	○
	505	Ⅰ	志風頭式	F26	Ⅴ	一括	タテケズリ	貝殻条痕文	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白△	白色粗砂・砂礫○
	506	Ⅰ	志風頭式	F18	Ⅲb	213	ナデ	貝殻条痕文	にぶい黄2.5Y6/3	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白黒○	白色粗砂・砂礫○
	507	Ⅱ	吉田式	F26 F27	Ⅳ Ⅴ	一括 291 292 289 283 281 294 285	丁寧なナデ	貝殻押引文	にぶい褐7.5YR5/3	にぶい橙7.5YR6/4	○	○	白△	白色粗砂・砂礫○ 金色雲母○
	508	Ⅱ	吉田式	F26	Ⅳ	一括	ナデ	貝殻押引文	褐10YR4/6	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白△	白色粗砂◎ 砂礫・金色雲母○
	509	Ⅱ	吉田式	F27	Ⅳ Ⅴ	282 288 一括	丁寧なナデ	貝殻押引文	にぶい褐7.5YR5/3	にぶい橙7.5YR6/4	○	○	白△	白色粗砂・砂礫○ 金色雲母○
	510	Ⅱ	吉田式	F27	Ⅳ	6	丁寧なナデ	貝殻押引文	灰黄褐10YR4/2	灰黄褐10YR4/2	○	○	白△	白色粗砂・砂礫○ 金色雲母○
	511	Ⅱ	吉田式	F27	Ⅳ	20	丁寧なナデ	貝殻押引文	灰黄褐10YR4/2	褐7.5YR4/6	○	○	白△	白色粗砂◎ 砂礫・金色雲母○
	512	Ⅱ	吉田式	F26	Ⅱa Ⅲa Ⅳ Ⅴ	一括	丁寧なナデ	貝殻押引文	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白△	白色粗砂◎ 砂礫・金色雲母○
	513	Ⅱ	吉田式	F27	Ⅴ	299	丁寧なナデ	貝殻押引文	にぶい黄褐10YR4/3	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白△	白色粗砂・金色雲母○
	514	Ⅱ	吉田式	F27	Ⅳ	297 298	丁寧なナデ	貝殻押引文	にぶい黄褐10YR5/4	にぶい黄褐10YR4/3	○	○	白△	白色粗砂・金色雲母○
	515	Ⅱ	吉田式	F27	Ⅳ	293	丁寧なナデ	貝殻押引文	にぶい黄褐10YR4/3	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白△	白色粗砂・金色雲母○

第20表　縄文土器観察表（2）

挿図	番号	分類	型式等	出土区	層	取上番号	調整		色調		胎土			
							内面	外面	内面	外面	石英長石	角閃輝石	火山ガラス	砂礫ほか
146	516	Ⅱ	吉田式	F27	Ⅳ	284 295	ナデ	貝殻押引文	灰黄褐10YR4/2	にぶい黄褐10YR5/3	○	○	白△	白色粗砂・金色雲母○
	517	Ⅱ	吉田式	—	Ⅳ	21	ナデ	貝殻押引文	にぶい黄褐10YR4/3	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白△	白色粗砂・金色雲母○
	518	Ⅱ	吉田式	F26	Ⅴ	一括	ナデ	貝殻押引文	黒褐2.5Y3/2	にぶい黄褐10YR4/3	○	○	白△	白色粗砂◎ 砂礫・金色雲母○
	519	Ⅱ	吉田式	F26	Ⅴ	一括	ナデ	貝殻押引文	にぶい黄褐10YR5/3	明赤褐5YR5/6	○	○	白△	白色粗砂・砂礫○ 金色雲母○
	520	Ⅱ	吉田式	F26	Ⅴ	一括	ナデ	貝殻押引文	黒褐2.5Y3/1	明褐7.5YR5/6	○	○	白△	白色粗砂・砂礫○ 金色雲母○
	521	Ⅱ	吉田式	F27	Ⅴ	—	ナデ	貝殻押引文	灰黄褐10YR4/2	にぶい黄褐10YR5/3	○	△	白黒△	粗砂・金色雲母○
	522	Ⅱ	吉田式	F27	Ⅳ	296	ナデ	貝殻押引文	灰黄褐10YR4/2	にぶい黄褐10YR5/3	○	△	白黒△	粗砂・金色雲母○
	523	Ⅱ	吉田式	F26	Ⅳ	一括	ナデ	貝殻押引文	明褐7.5YR5/6	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白△	白色粗砂・砂礫◎
	524	Ⅲ	中原式	H19	Ⅲa	277	丁寧なナデ	ナデ	黄褐2.5Y5/3	にぶい黄橙10YR6/4	○	◎	白黒△	白色粗砂・砂礫△
	525	Ⅳ	桑ノ丸式	F26 F27	Ⅳ Ⅴ	一括	ケズリ	ナデ	黄灰2.5Y4/1	灰5Y4/1	○	○	白黒△	砂礫○
	526	Ⅳ	桑ノ丸式	F26	Ⅳ	一括	ナデ	ナデ	灰黄褐10YR4/2	にぶい黄橙10YR6/4	○	○	白黒△	白色粗砂△
	527	Ⅴ		—	表	一括	—	—	—	—	—	—	—	—
148	528	Ⅵa	轟B式	G16	Ⅲ	95	粗い条痕	粗い条痕	にぶい褐7.5YR5/4	黒褐2.5Y3/2	○	○	白○	白色粗砂・砂礫○ 軽石△
	529	Ⅵa	轟B式	G17	Ⅲa	114	粗い条痕	粗い条痕	褐7.5YR4/4	褐10YR4/4	○	○	白○	白色粗砂・砂礫○ 軽石△
	530	Ⅵa	轟B式	G18	Ⅲa	113	粗い条痕	粗い条痕	明褐7.5YR5/6	灰黄褐10YR4/2	○	○	白○	白色粗砂・砂礫○ 軽石△
	531	Ⅵb	轟B式	F23	Ⅲa 表	一括	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐10YR5/3	黒褐2.5Y3/2	△	○	白黒△	粗砂△
	532	Ⅵb	轟B式	F25･24	—	一括	貝殻条痕	貝殻条痕	褐10YR4/6	暗灰黄2.5Y4/2	△	○	白黒△	粗砂△
	533	Ⅵb	轟B式	F23	Ⅲa	一括	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐10YR5/3	暗灰黄2.5Y4/2	○	○	白黒△	粗砂△
	534	Ⅵb	轟B式	F23 F24	表・Ⅲa	一括・土器集中	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	△	○	白黒△	粗砂△
	535	Ⅵb	轟B式	F25･24	—	一括	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐7.5YR5/4	黒褐10YR3/2	△	○	白黒△	粗砂△
	536	Ⅵb	轟B式	F24	Ⅲa	土器集中	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐10YR5/4	黒褐10YR3/3	△	○	白黒△	粗砂△
	537	Ⅵb	轟B式	F23	Ⅲa	一括	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐10YR4/3	にぶい黄褐10YR4/3	△	○	白黒△	粗砂△
	538	Ⅵb	轟B式	F25･24	— Ⅲa	一括 集一括	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄褐10YR5/3	○	○	白黒△	粗砂○
149	539	Ⅵb	轟B式	F25･24	—	一括	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白黒△	粗砂△
	540	Ⅵb	轟B式	F24 F23	Ⅲa	土器集中	貝殻条痕	貝殻条痕	灰黄褐10YR4/2	にぶい褐7.5YR5/4	△	○	白黒△	白色粗砂○
	541	Ⅵb	轟B式	F23 F24 F25	表 Ⅲa	一括	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐10YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白黒△	白色粗砂○
	542	Ⅶ	曽畑式	E17	Ⅲa	39	ナデ	ナデ	暗灰黄2.5Y4/2	にぶい黄橙10YR6/4	◎	○	白○	白色粗砂・砂礫○
	543	Ⅷ	中～後期	—	—	—	ヨコナデ	ナデ	黒褐2.5Y3/1	にぶい黄褐10YR5/3	○	○	白○	白色粗砂・金色雲母△
	544	Ⅷ	中～後期	—	—	—	貝殻条痕	ヨコナデ	灰黄褐10YR4/2	にぶい橙7.5YR6/4	○	△	白黒△	白色粗砂○
	545	Ⅷ	中～後期	—	—	—	ヨコナデ	ナデ	黒褐10YR3/1	灰黄褐10YR4/2	○	○	白○	白色粗砂○・軽石△
	546	Ⅷ	中～後期	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐7.5YR5/4	黒褐2.5Y3/1	△	△	白△	白色粗砂○
	547	Ⅷ	中～後期	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄褐10YR5/4	○	○	白黒○	白色粗砂・砂礫◎
	548	Ⅷ	中～後期	—	—	—	ナデ	ヨコナデ	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	○	○	白黒△	白色粗砂・赤色粗砂○ 軽石△
	549	Ⅸ	中～後期	—	—	—	ナデ	ナデ	黒褐2.5Y3/1	黄褐2.5Y5/3	△	△	—	白色粗砂△



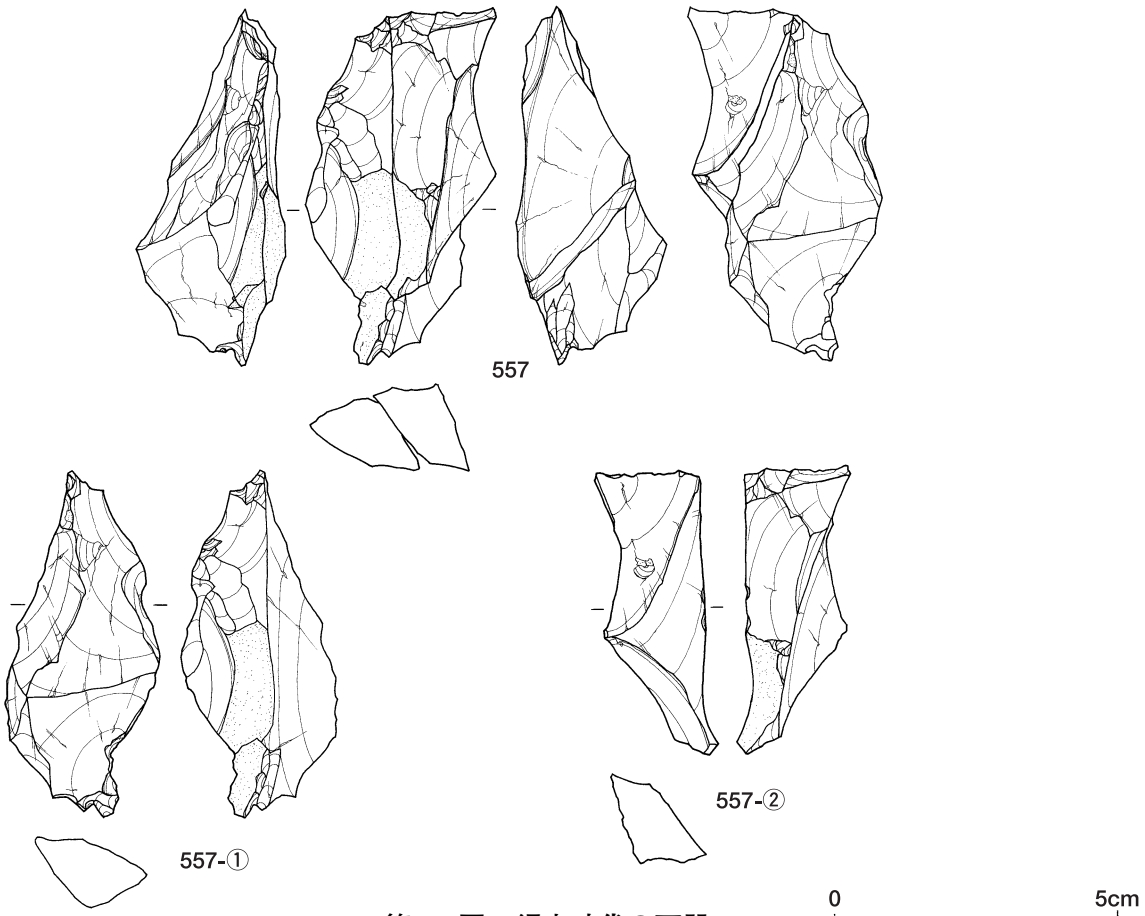
第150図　縄文時代石器出土分布図



第151図　縄文時代の石器１

第21表　縄文時代石器観察表

挿図番号	番号	器　種	石材	区	層	遺物番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
151	550	石鏃	FeQU	—	—	表採	2.5	1.4	0.3	0.7	
	551	石鏃	OB4	H14	Ⅲa	3	1.7	1.1	0.4	0.44	
	552	石鏃未製品	OB1	H14	Ⅲa	24	2.2	2.3	0.4	1.97	
	553	スクレイパー	OB1	E17	Ⅲb	表採	4.1	1.6	1.7	10.27	
	554	スクレイパー	OB1	G14	Ⅲa	26	3.4	2.8	0.6	4.64	
	555	スクレイパー	SH4	D28	Ⅲa	—	5.5	3.7	1.6	25.93	
	556	石核	AN2	F18	Ⅱ	230	7.2	6.0	3.6	143.26	
152	557	接合資料	OB2	G14	Ⅲa・Ⅳ	9・59	6.2	3.4	2.6	32.1	
	557-①	剥片	OB1	G14	Ⅲa	9	6.1	2.7	1.3	19.06	
	557-②	剥片	OB1	G14	Ⅳ	59	5.1	2.1	1.6	13.02	



第152図　縄文時代の石器 2

第 3 節　縄文時代の石器

石鏃（第151図550～552）

550は鉄石英製であり，脚部は短く開き体部は比較的長い。丁寧な押圧剥離により整形されている。片脚部を欠損する。551は針尾系の黒曜石を石材とするものである。片脚部のみの欠損品であるが，550と類似する形態と思われる。552は上牛鼻産黒曜石製で粗い整形剥離が施されている。

スクレイパー（第151図553～555）

上牛鼻産黒曜石の厚みのある剥片が使用され，平坦な主要剥離面から連続する二次加工を急角度に施し刃部を形成している。554は薄い剥片の一端に表裏両面から二次加工を施したものである。上牛鼻産黒曜石製であるが，風化が激しいことから旧石器時代の可能性もある。555は頁岩製で剥片の鋭利な片側縁辺と残存する下端部に細かい二次加工が認められる。刃部下半を欠損する。

石核（第151図556）

肉眼的判断ではあるが多久産と推定される安山岩（サヌカイト）製である。自然礫皮面の裏面には打点とバルブが残ることから，厚手の剥片を利用した石核である。主要剥離面側に周囲から求心状に剥離を行い，またその剥離面を打面にして自然礫皮面側も剥片をとっている。

接合資料（第152図557）

上牛鼻産黒曜石を石材とする剥片の接合資料である。山形の頂部を打点にして底面が残る横長剥片が剥がされている。②の背面には同様の形状の剥片が前にも剥離されていることがわかる。

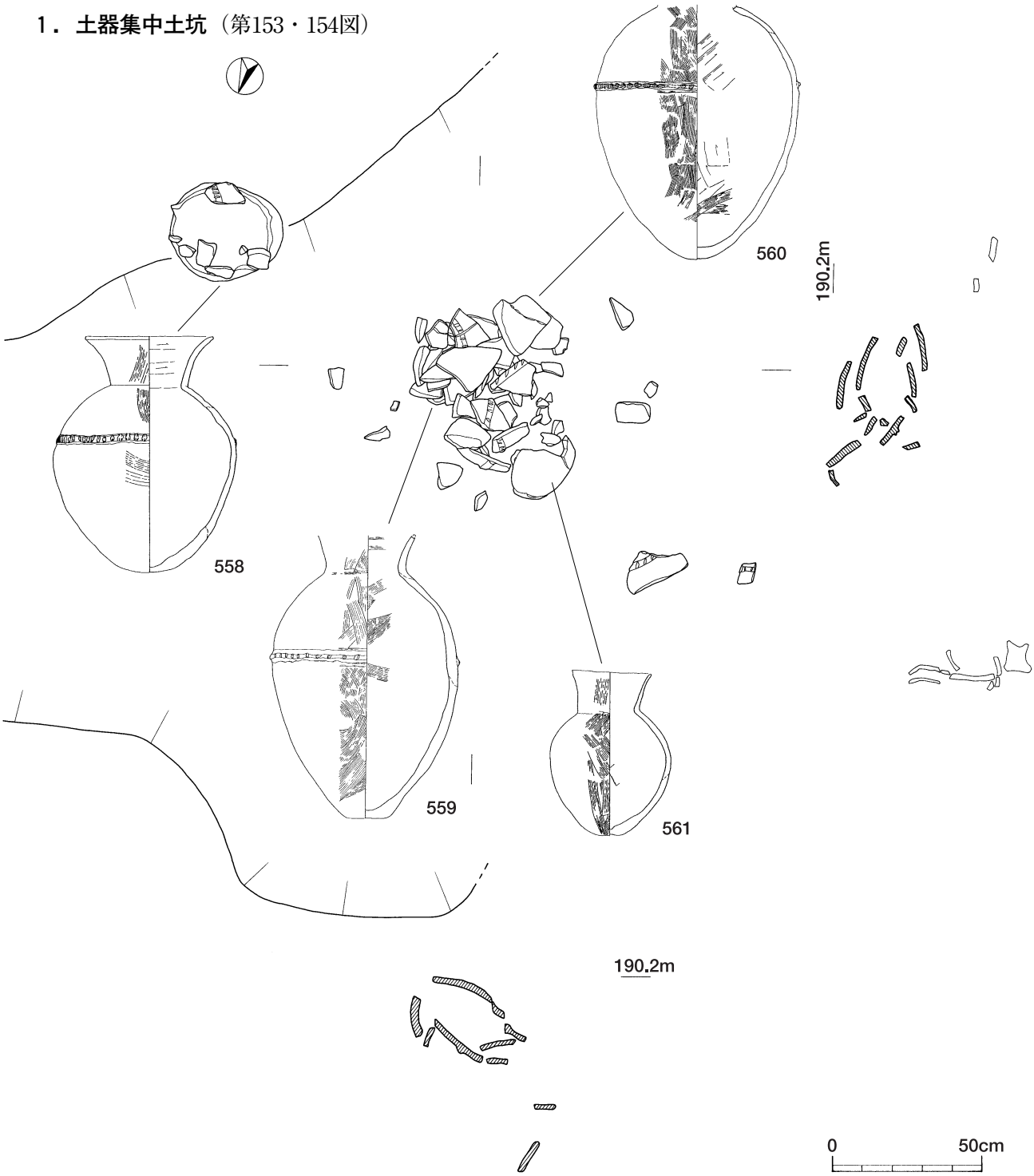
第Ⅸ章　古墳時代の調査

第１節　調査の概要

古墳時代の遺構・遺物は，主にＡ地区Ⅲａ層で検出・出土している。遺構は，Ｅ－17区で壺５点・甕１点を出土した土坑が検出された。また，Ｇ－16区Ⅲａ層上面では，焼土域が検出された。

第２節　遺構

１．土器集中土坑（第153・154図）

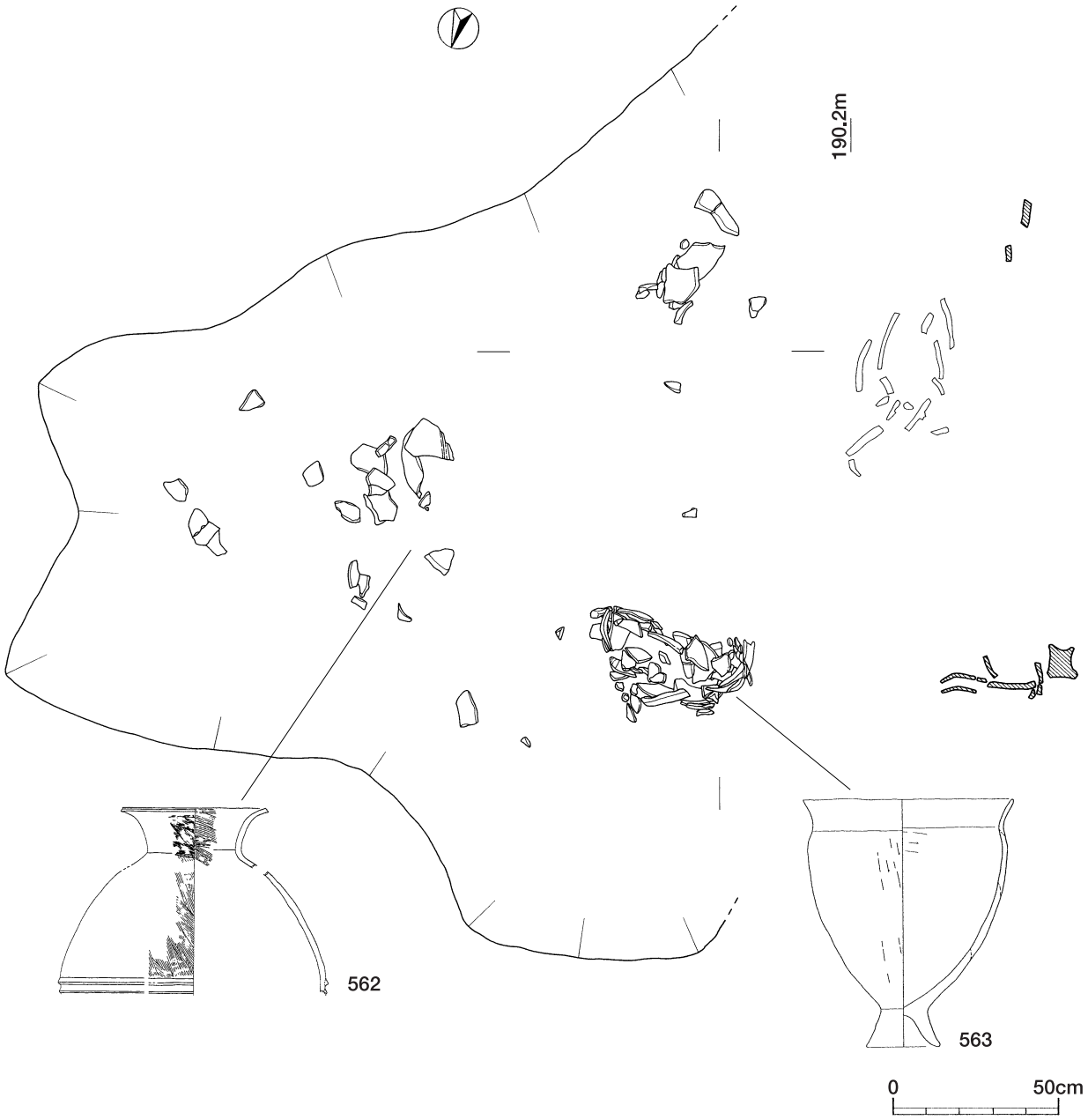


第153図　古墳時代の遺構・土坑（1）

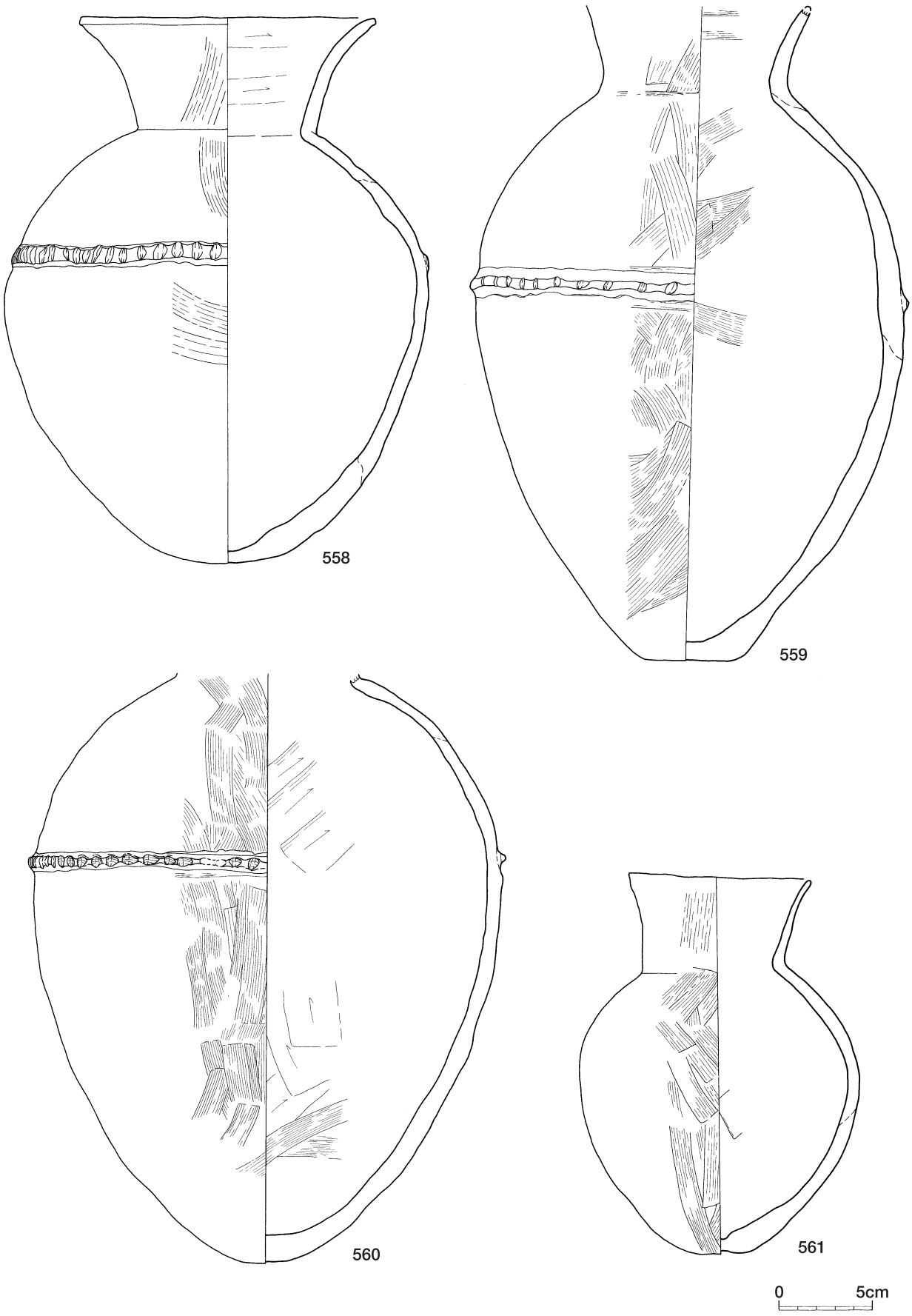
Ｅ－17区で壺５点と甕１点が出土する土坑が検出されている。土坑の径は1.5ｍを超えると思われ，竪穴状遺構もしくは住居跡の可能性もある。558の壺は土坑中央部にまとまって出土した３個体の壺より約30㎝東方，レベルは５㎝程上位で出土し，横転した状況である。また，559・560・561の壺はまとまって出土しているが，そのうち560の土器片がやや上位で検出されている。壺３個体の集中部から北方40㎝に，口縁部を上位にして563の甕が出土している。形態的に壺３個体よりやや新しい可能性がある。また，土坑東方部にも562の壺が出土している。

２．焼土域

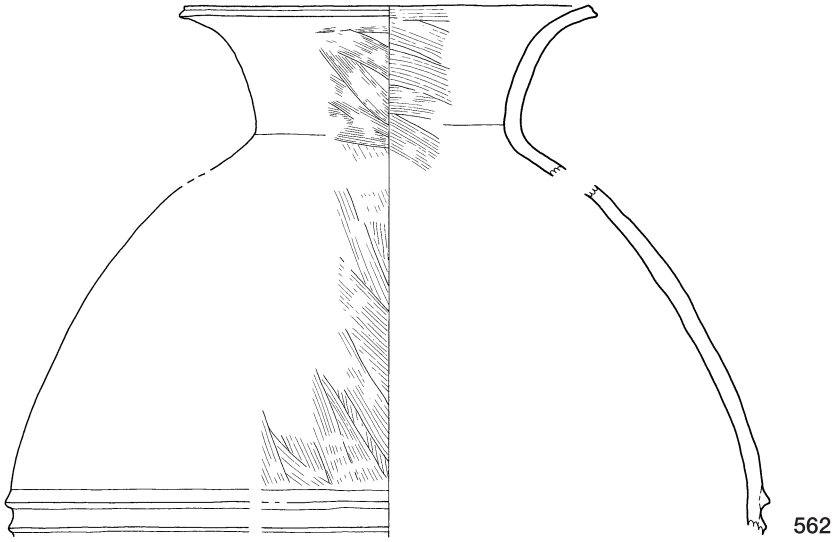
Ｇ－16区Ⅲａ層上面で，径約50㎝の焼土域が検出された。炭化木を含み，その上位からは成川式土器片が出土した。

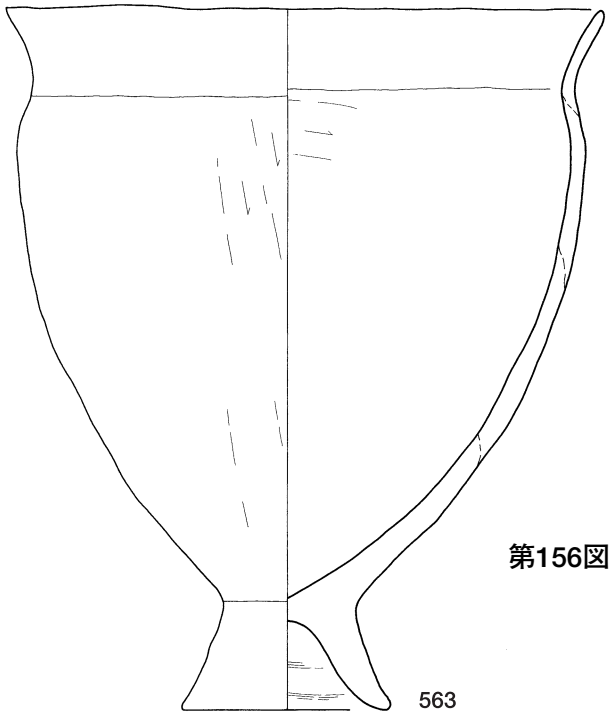


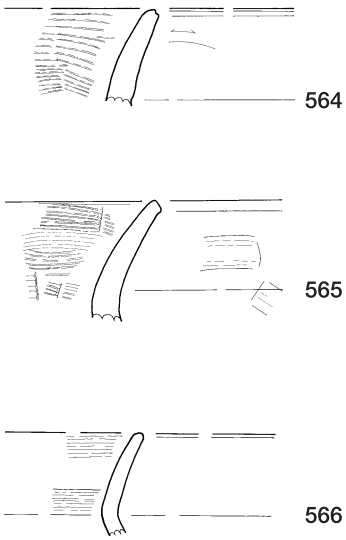
第154図　古墳時代の遺構・土坑（2）



第155図　土坑内出土遺物１

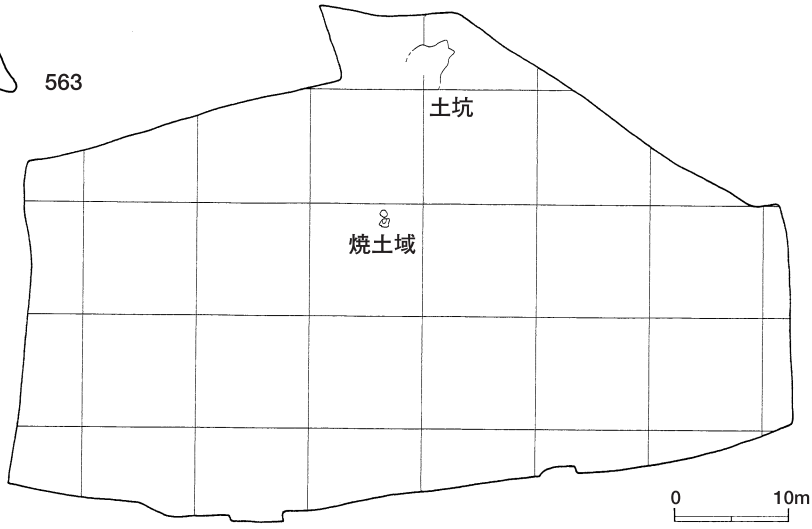






0 5cm

第156図　土坑内出土遺物 2



第157図　古墳時代の遺構分布図

第３節　出土遺物

１．土坑内遺物（第155・156図　558～566）

558～562・564・565は壺形土器，563・566は甕形土器である。

558は完形に復元できる資料である。口縁部は大きく外へ開き，球形を呈する胴部から，丸底を呈する底部へ至る。口唇部は平坦面をもつ。最大径が胴部中央にあり，その上位に断面かまぼこ状の突帯を一条巡らせる。突帯にはハケメ工具による幅広の刻みを施す。

器面は摩滅・剥脱が目立つが，外面において口縁部は斜位の，胴部上位には縦位の，胴部下位には横位のハケメ調整が確認できる。なお，突帯の両側はヨコナデ調整を行っている。口縁部内面はヨコナデ調整が確認できる。胎土に，赤色を呈する直径２～３㎜のくさり礫を含む。

559は口縁端部が欠損している資料である。頸部から「く」字状に外反する口縁部で，頸部の屈曲は弱く，胴部は倒卵形を呈し，底部は立ち上がりが丸みを帯びた平底となる。最大径は胴部のやや上位に位置し，そこに突帯を一条巡らせる。突帯上にはヘラ状工具による刻みを不規則に施す。突帯の両側はヨコナデ調整を行うが，接合痕が残る。外面調整は，口縁部は縦位のハケメ調整が行われ，頸部には始点と考えられる工具痕（幅約３㎝）がみられる。胴部は縦位・斜位のハケメのちナデ調整が行われる。内面は横位・斜位のハケメのちナデ調整が行われる。また，胴部の突帯上位にはススが付着する。

560は口縁部が欠損する資料である。胴部は倒卵形を呈し，底部は丸底を呈する。最大径は胴部のやや上位に位置し，そこに断面三角突帯を一条巡らせる。突帯上にはハケメ工具による刻みを施す。突帯の両側はヨコナデ調整を行い，接合痕をナデ消している。外面は縦位のハケメのち一部ナデ調整が行われる。内面はハケメのちナデ調整が，下位には横位のハケメ調整が行われる。

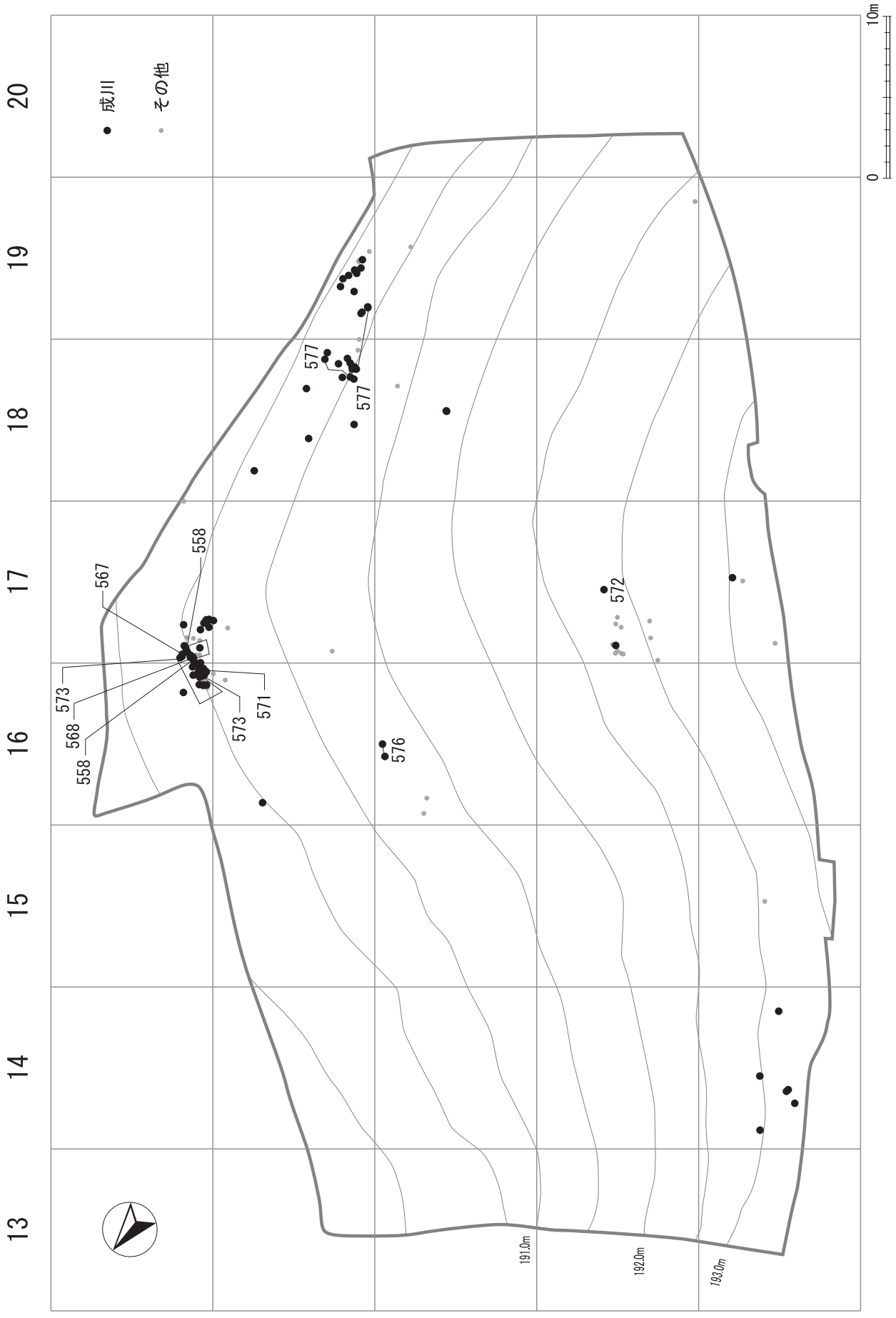
561は完形に復元できる資料である。口縁部は頸部から直線的に斜め上方に向かって外傾し，先端でやや外反する。胴部は球形を呈し，底部は丸平底を呈する。なお，底部中央部に凹みが認められる。突帯は貼付されない。外面調整は，口縁部は縦位のハケメのちナデ調整が行われ，胴部は縦位・斜位のハケメのちナデ調整が行われる。内面調整は，口縁部にはヨコナデ調整が，胴部には工具によるナデ調整が行われる。胎土にくさり礫を含む。

562は胴部下半を欠損する資料である。口縁部は「く」字状に外反し，上位でさらに外反する。口唇部には凹みをもつ。胴部には断面三角突帯を２＋α条巡らせる。外面は斜位のハケメ調整が行われる。内面調整は，口縁部に横位のハケメ調整が行われるが，胴部は器面の摩滅・剥脱が著しく不明である。

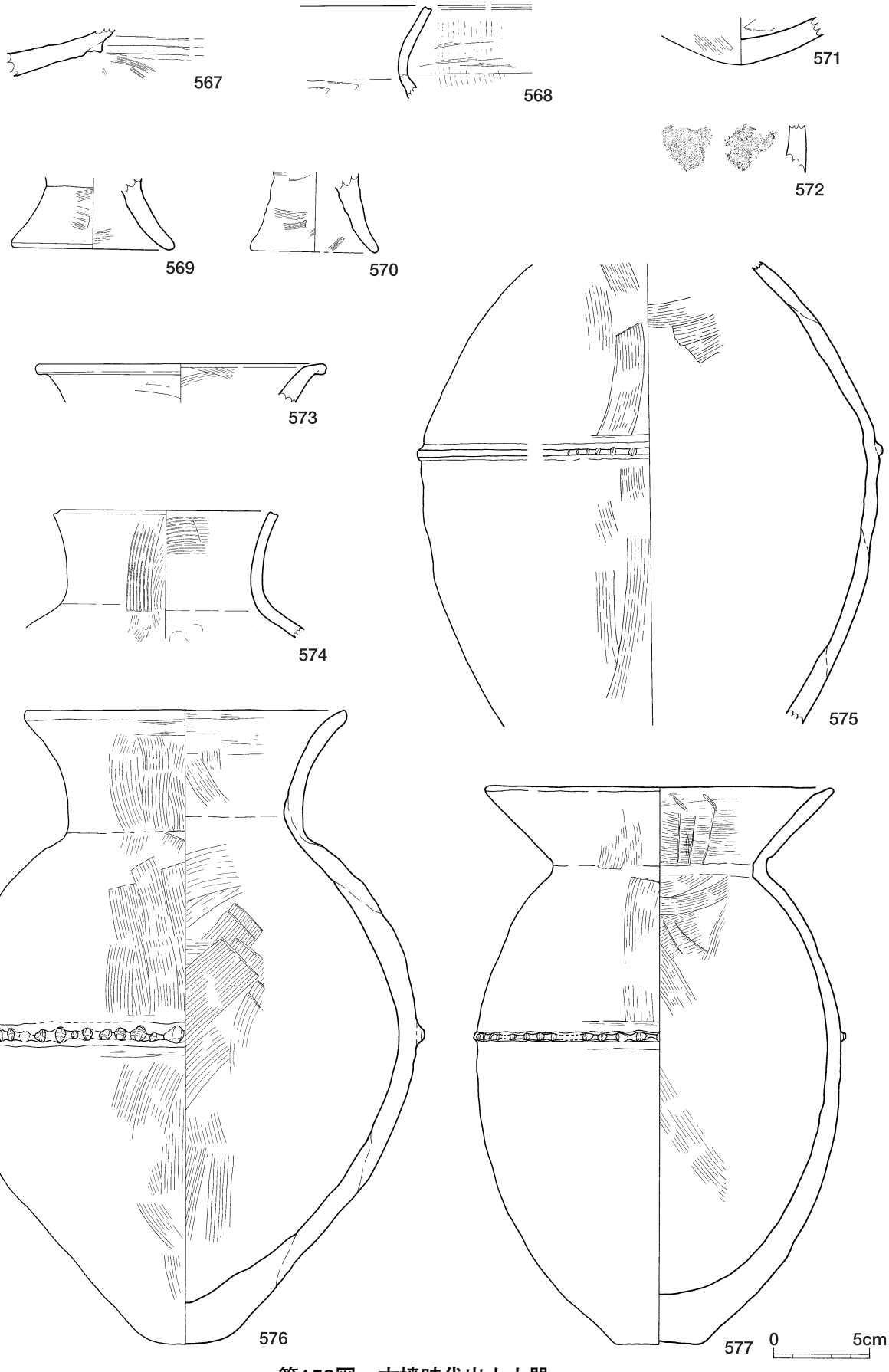
563は完形に復元できる資料である。口縁部が緩やかに外反し，胴部はわずかに膨らみ，底部に向かってすぼまる。脚台は器壁が厚く，端部は丸くおさめる。脚台内面天井部はドーム状を呈する。器面の摩滅・剥脱が目立つが，外面は縦位のナデ調整が行われ，擦痕が認められる。内面は横位のナデ調整が行われる。

564・565は壺形土器の口縁部である。564は口唇部に凹みをもつ。外面は縦位のハケメのちナデ調整が行われ，内面は横位のハケメ調整が行われる。また，口縁部外面下位に段をもつ。

565は緩やかに外反するもので，口唇部は平坦面をもつ。外面はヨコナデ調整が，内面は横位のハケメのちナデ調整が行われる。



第158図　古墳時代遺物出土状況図



第159図　古墳時代出土土器

566は甕形土器の口縁部である。直立ぎみに外反するもので，端部を丸くおさめる。内外面ともにヨコナデ調整を行う。

２．包含層出土遺物（第159図　567～577）

567は高坏形土器の坏部で，おそらく屈曲部から口縁部が直立すると思われる。外面はナデ調整が行われるが，部分的にハケメ調整が認められる。内面調整は摩滅のため不明である。

568は甕形土器の口縁部で，「く」字状に外反する。口唇部はわずかに凹む。外面は縦位のハケメのちヨコナデ調整が行われる。内面調整は，口縁部にはヨコナデ調整が，胴部には工具ナデ調整が行われる。外面にはススが付着する。

569・570は甕もしくは鉢形土器の脚部で，端部を丸くおさめる。569は内外面ともにヨコナデ調整が行われる。570は外面にヨコナデ調整が，内面にナデ調整が行われる。

571・573～577は壺形土器である。571は底部で，丸底を呈する。内面は工具によるナデ調整が行われ，工具痕が残る。

573は外傾する口縁部で，端部で外反する。外面はヨコナデ調整が行われる。内面は横位のハケメ調整後に端部のみヨコナデ調整が行われ，擦痕が明瞭に残る。

574は口縁～頸部片である。緩やかに屈曲し，直立ぎみに外反する。口唇部は凹みをもつ。外面はいわゆるカキアゲ状のハケメ調整が行われる。口縁部内面は横位のハケメ調整が行われ，頸部内面にはユビオサエ痕が残る。

575は胴部片である。長胴形を呈し，中央部に胴部最大径をもち，そこに断面三角突帯を一条巡らせる。突帯上には刻みを施す。外面はハケメのちナデ調整が行われ，突帯の両側はヨコナデ調整を行うが，接合痕は残る。内面は摩滅・剥脱が著しいが，横位のハケメ調整が確認できる。胎土にくさり礫を含む。

576は完形に復元できるものである。頸部から緩やかに外反する口縁部で，口唇部は明瞭な平坦面をもつ。胴部は球形に近い形状を呈するが，底部はやや尖り気味の丸みを帯びた凸レンズ状を呈する。胴部中央に最大径をもち，そこに断面三角突帯を一条巡らせる。突帯上にはハケメ工具により，刻みを施す。外面調整は，口縁部には縦位のハケメ調整後，端部のみヨコナデ調整を行う。胴部は縦位のハケメ調整を行い，突帯の両側はヨコナデ調整を行う。内面調整は，口縁部にはハケメ調整後に上位にヨコナデ調整を行う。胴部には斜位・縦位のハケメ調整を行う。なお，幅約２㎝程のハケメ工具の始点が明瞭に残る。

577は頸部から「く」字状に大きく外傾する口縁部で，口唇部を丸くおさめる。頸部内面には平坦面をもつ。胴部は長胴形を呈し，底部は平底である。底部から胴部への立ち上がりには比較的はっきりとした角がみられる。胴部は最大径を中央にもち，そこに幅狭の断面三角突帯を一条巡らせる。突帯上にはヘラ状工具による刻みを施す。胎土にくさり礫を含む。外面調整は，口縁部には縦位のハケメのちナデ調整を，胴部上半には縦位のハケメのちナデ調整を，下半にはナデ調整を行う。突帯の両側はヨコナデ調整を行うが，接合痕が明瞭に残る。内面調整は，口縁部には横位のハケメ調整が行われ，刻みのような工具痕も確認できる。胴部は斜位のハケメ調整が行われる。

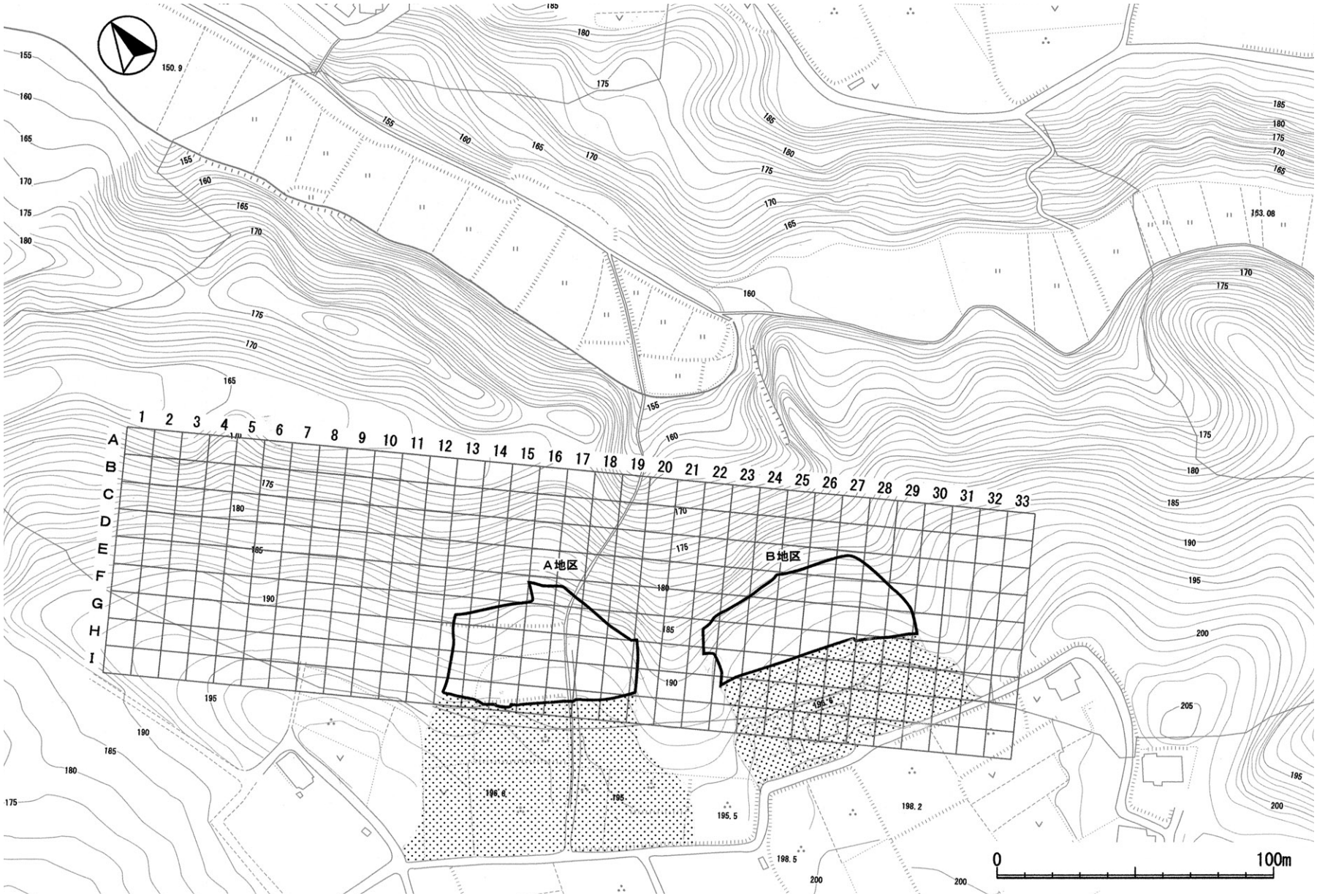
572は器種不明の胴部片である。外面には目の細かい布組織痕が認められる。胎土や色調が成川式土器に類似しているため，古墳時代の遺物に含めた。

第22表　古墳時代遺構内出土土器観察表

挿図	番号	型式等	器種	調整		色調		胎土	備考
				内面	外面	内面	外面		
155	558	成川式	壺	ヨコナデ	ハケメ	橙5YR6/6	橙5YR6/6	粗砂：石英・白・黒・赤色粒 細砂：白・黒・赤色粒	
	559	成川式	壺	ハケメのちナデ	口縁：ハケメ 胴：ハケメのちナデ	にぶい褐7.5YR5/4	明赤褐2.5YR5/6	粗砂：白・黒色粒 細砂：白・黒色粒	スス付着
	560	成川式	壺	ハケメのちナデ	ハケメのち一部ナデ	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6	白色礫 粗砂：白色粒 細砂：白・黒色粒	
	561	成川式	壺	口縁：ヨコナデ 胴：工具ナデ	ハケメのちナデ	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	粗砂：白・赤色粒 細砂：白・黒・赤色粒	
156	562	成川式	壺	摩滅により不明	ハケメ	明黄褐10YR7/6	橙7.5YR7/6	粗砂：石英・角閃石・白・赤色粒 細砂：白・黒・赤色粒	
	563	成川式	甕	ヨコナデ	ナデ	褐7.5YR4/3	にぶい褐7.5YR5/4	礫：軽石 粗砂：石英・角閃石・白・黒色粒 細砂：白・黒・赤色粒	
	564	成川式	壺	ハケメ	ハケメのちナデ	にぶい褐7.5YR5/4	明赤褐5YR5/6	粗砂：石英・角閃石・白色粒 細砂：白・黒色粒	
	565	成川式	壺	ハケメのちナデ	ヨコナデ	橙7.5YR6/6	にぶい褐7.5YR5/4	白色礫　粗砂：白色粒 細砂：白・黒色粒	
	566	成川式	甕	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい褐7.5YR5/4	粗砂：石英・白色粒 細砂：白・黒・透明粒	

第23表　古墳時代包含層出土土器観察表

挿図	番号	型式等	器種	出土区	層	取上番号	調整		色調		胎土	備考
							内面	外面	内面	外面		
159	567	成川式	壺	E17	Ⅲa	151	摩滅により不明	ナデ一部ハケメ	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6	白・赤色礫 粗砂：白・黒・赤色粒 細砂：白・黒色粒	
	568	成川式	甕	E17	Ⅲa	173	口縁：ヨコナデ 胴：工具ナデ	ハケメ後ヨコナデ	にぶい黄褐10YR5/3	明褐7.5YR5/6	粗砂：白色粒 細砂：白・黒・透明粒	スス付着
	569	成川式	甕	—	表	—	ヨコナデ	ヨコナデ	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	粗砂：石英・白・黒色粒 細砂：白色粒	
	570	成川式	甕	—	表	—	ナデ	ヨコナデ	にぶい褐7.5YR5/4	明褐7.5YR5/6	粗砂：石英・白・赤色粒 細砂：白・黒色粒	
	571	成川式	壺	E16	Ⅲa	141	工具ナデ	ナデ	にぶい黄褐10YR5/4	明赤褐5YR5/6	白色礫 粗砂：白・黒色粒 細砂：白・黒・赤色粒	
	572	—	—	H17	Ⅲa	203	ナデ	布目圧痕	明褐7.5YR5/6	にぶい褐7.5YR5/4	粗砂：石英・白色粒 細砂：白・黒・透明粒	
	573	成川式	壺	E16 E17	Ⅲa	117 28	ハケメのちヨコナデ	ヨコナデ	明褐7.5YR5/6	にぶい黄褐10YR4/3	粗砂：白色粒 細砂：白・黒・透明粒	
	574	成川式	壺	E16	表	—	口縁：ヨコハケメ 頸：指オサエ	ハケメ	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6	粗砂：石英・角閃石・白色粒 細砂：白・黒・赤色粒	
	575	成川式	壺	C26	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	粗砂：石英・白・黒・赤色粒 細砂：白・黒色粒	
	576	成川式	壺	G16	Ⅲ	98 99	口縁端：ヨコナデ 口～底：ハケメ	口縁端：ヨコナデ 口～底：ハケメ	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい橙7.5YR6/4	粗砂：白色粒 細砂：白・黒色粒	
	577	成川式	壺	F18	Ⅲb	259 221 217 231 227 258	ハケメ	口縁～胴上半 ：ハケメ後ナデ 胴下半：ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	粗砂：白・黒色粒 細砂：白・黒・赤色粒	



第160図　前山遺跡調査範囲と残存部分

第Ⅹ章　分析・同定

株式会社　古環境研究所

第１節　土層とテフラの分析

１．はじめに

前山遺跡Ａ地点の発掘調査では，複数の層準から旧石器時代の石器や縄文時代遺構の土器などが検出されている。そこで微化石分析によるこれらの時代の古環境復元に先立って，地質調査とテフラ検出分析を行って示標テフラの層序と遺物との層位関係について分析を行うことにした。調査分析の対象とした地点は，Ⅰ－15区南断面である。

２．土層の層序

Ⅰ－15区南断面地点では，下位より亜角礫混じり褐色粘質土（層厚12cm，礫の最大径51mm，Ⅸ層），褐色土（層厚24cm，Ⅷ層），暗褐色粘質土（層厚20cm，Ⅶｂ層），暗褐色粘質土（層厚６cm，Ⅶａ層），成層したテフラ層（Ⅵ層），黒灰色土（層厚27cm，Ⅴ層），灰褐色土（層厚33cm，Ⅳ層），成層したテフラ層（Ⅲｂ層），褐色土（層厚29cm，Ⅲａ層），黒褐色土（層厚25cm）の連続が認められた（図161）。

これらの土層のうち，下位の成層したテフラ層（Ⅳ層）は，下位より正の級化構造の認められる黄色軽石層（層厚27cm，軽石の最大径56mm，石質岩片の最大径19mm），黄色軽石混じり赤橙色細粒火山灰層（層厚12cm，軽石の最大径18mm，石質岩片の最大径７mm），黄橙色軽石層（層厚18cm，軽石の最大径18cm，石質岩片の最大径5mm），灰色粗粒火山灰層（層厚１cm），黄橙色軽石層（層厚５cm，軽石の最大径13mm，石質岩片の最大径３mm），暗灰色粗粒火山灰層（層厚６cm）から構成されている。このテフラ層は，層相から約1.1万年前に桜島火山から噴出した桜島薩摩テフラ（Sz−S，小林，1986，町田・新井，1992）に同定される。

一方上位の成層したテフラ層は，下位より褐色火山豆石層（層厚３cm），橙色細粒軽石層（層厚３cm，軽石の最大径３mm），橙色細粒火山灰層（層厚４cm）からなる。このテフラ層は，層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K−Ah，町田・新井，1978）に同定される。

発掘調査では，Ⅸ層からナイフ形石器が，Ⅷ層から角錐状石器や剥片尖頭器さらにナイフ形石器などが検出されている。またⅦｂ層およびⅦａ層からは細石器が検出されている。さらにⅤ層およびⅣ層からは縄文時代早期の，Ⅲａ層からは縄文時代から古墳時代にかけての土器が検出されている。

３．テフラ検出分析

⑴ 分析試料と分析方法

肉眼で検出されない示標テフラを検出するために，Sz−Sの下位の土層を対象にテフラ検出分析を行うことにした。分析試料は５cmごとに採取されたうち，５cmおきの６点の試料である。分析の手順は次の通りである。

1）試料10ｇを秤量。
2）超音波洗浄装置により泥分を除去。
3）80℃で恒温乾燥。
4）実態顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。
(2) 分析結果

テフラ検出分析結果を24表に示す。試料番号11を除くいずれの試料でも火山ガラスが認められた。火山ガラスは平板状のいわゆるバブル型である。色調では透明のものが圧倒的に多く，ほかに褐色のガラスも認められる。これらの火山ガラスは，その特徴から約2.2－2.5万年前に姶良カルデラから噴出した姶良入戸火砕流堆積物（A−Ito，荒牧，1969，町田・新井，1976，1992）に由来すると考えられる。その産状からA−Itoの堆積層準は試料番号７（Ⅷ層）付近の可能性も考えられるが，Ⅷ層の試料全体にA−Ito起源の火山ガラスが含まれること，また火山ガラスの量がとくに多くないことなどからⅧ層がA−Itoの風成再堆積層の可能性が大きいものと思われる。したがって，ここではA−Itoの堆積層準をⅧ層基底付近と考えることにする。以上のことからⅨ層の石器はA−Itoの下位，またⅧ層の石器はA−Itoより上位の可能性が考えられる。

４．小結

前山遺跡において地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った。その結果，下位より姶良入戸火砕流堆積物（A−Ito，約2.2－2.5万年前）起源の火山ガラス，桜島薩摩テフラ（Sz−S，約1.1万年前），鬼界アカホヤ火山灰（K−Ah，約6,300年前）が検出された。

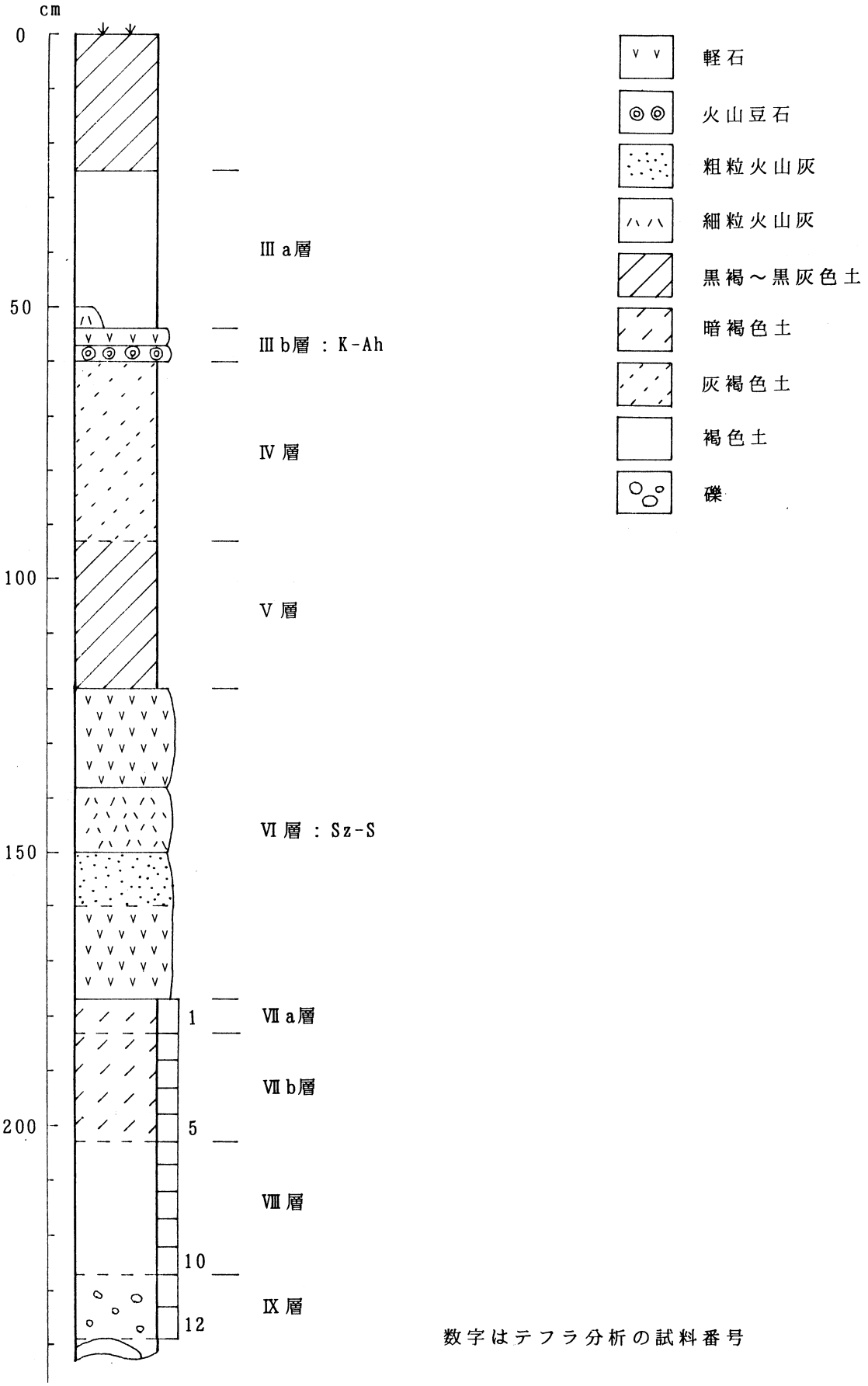
文献

荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物．地質学雑誌，75，ｐ．425－442.
小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流．文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者　荒牧重雄），ｐ．137－163.
町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－Ｔｎ火山灰の発見とその意義．科学，46，ｐ．339－347.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276ｐ．

第24表　前山遺跡のテフラ検出分析結果

試料番号	軽石			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	形態	色調
1	—	—	—	＋＋	bw	透明＞褐
3	—	—	—	＋＋＋	bw	透明＞褐
5	—	—	—	＋＋	bw	透明＞褐
7	—	—	—	＋＋	bw	透明＞褐
9	—	—	—	＋	bw	透明＞褐
11	—	—	—	—	—	—

＋＋＋＋：とくに多い，　＋＋＋：多い，　＋＋：中程度，　＋：少ない，—：認められない，bw：バブル型



第161図　Ⅰ－15区南壁土層柱状図

第２節　放射性炭素年代測定結果

１．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№１	F－17区，Ⅶa層礫群	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
№２	F－16区，Ⅶ層礫群	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法

２．測定結果

試料名	^{14}Ｃ年代 （年BP）	δ^{13}Ｃ （‰）	補正^{14}Ｃ年代 （年BP）	暦年代	測定№ （Beta−）
№１	22330±100	−25.3	22330±100	―	90972
№２	22380±90	−26.2	22380±90	―	90977

１）14Ｃ年代測定値

試料の14Ｃ/12Ｃ比から，単純に現在（1950年ＡＤ）から何年前（ＢＰ）かを計算した値。14Ｃの半減期は5,568年を用いた。

２）δ13Ｃ測定値

試料の測定14Ｃ/12Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（13Ｃ/12Ｃ）。この値は標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正14Ｃ年代値

δ13Ｃ測定値からの試料の炭素の同位体分別を知り，14Ｃ/12Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14Ｃ濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の14Ｃの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年ＢＰより古い資料には適用できない。

第３節　植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO2）が蓄積したものであり，植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

前山Ａ遺跡の発掘調査では，複数の層準から旧石器時代の石器や縄文時代の土器などが検出された。そこで当時の古環境復元を目的として植物珪酸体分析を行った。

２．試料

調査地点は，Ｉ－15区の南断面である。分析試料は，現表土からⅨ層までの層準から採取された21点のうち，№１，３，５，６，７，９，11，12，13，15，18，21の12点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに，次の手順で行った。

１）試料の絶乾（105℃・24時間）

２）試料約１ｇを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μｍ・約0.02ｇ）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

５）沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去，乾燥

６）封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は，イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10－５ｇ）をかけて，単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94，ヒエ属型（ヒエ）は8.40，ヨシ属（ヨシ）は6.31，ススキ属型（ススキ）は1.24，ネザサ節は0.48，クマザサ属は0.75である。

４．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を26表および162図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

［イネ科］

機動細胞由来：イネ，キビ族型，ススキ属型（ススキ属など），ウシクサ族，シバ属，ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），クマザサ属型（おもにクマザサ属），メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），マダケ属型（マダケ属，ホウライチク属），タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

［樹木］

ブナ科（シイ属），クスノキ科（バリバリノキ？），Aタイプ，その他

A−Ito直下のⅨ層（試料21）では，クマザサ属型や棒状珪酸体などが検出されたが，いずれも比較的少量である。Ⅷ層（試料18）ではクマザサ属型が増加しており，Ⅶｂ層（試料15）でも比較的多く検出された。Sz−S直下のⅦａ層（試料13）では，クマザサ属型が6万個/ｇ以上と多量に検出され，棒状珪酸体も多量に検出された。また，ウシクサ族やススキ属型，キビ属型なども検出された。

Sz−S直上のⅤ層下部（試料9，11）では，クマザサ属型やウシクサ族などが検出されたが，いずれも比較的少量である。Ⅴ層上部（試料9）では，これらの分類群に加えてススキ属型やキビ族型が検出され，ブナ科（シイ属）やクスノキ科（バリバリノキ？）などの樹木（照葉樹）も検出された。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから，植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には，他の分類群よりも過大に評価する必要がある。なお，すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく，落葉樹では形成されないものも多い。

K−Ah直下のⅣ層（試料6，7）では，ブナ科（シイ属）やクスノキ科などの樹木が増加しており，イネ科は減少している。K−Ah直上のⅢａ層（試料3，5）でもおおむね同様の結果である。現表土（試料1）では，ウシクサ族やナザサ節型，メダケ節型が比較的多く検出され，イネやススキ属型，シバ属，マダケ属型なども検出された。イネの密度は1,400個/ｇと比較的低い値である。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると，Sz−Sより下位ではクマザサ属型が優勢であり，とくにSz−S直下のⅦａ層では圧倒的に卓越していることが分かる。

5．植物珪酸体分析から推定される植生・環境

以上の結果から，前山A遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

始良入戸火砕流堆積物（A−Ito，約2.2−2.5万年前）直下のⅨ層から桜島薩摩テフラ（Sz−S，約1.1万年前）直下のⅦａ層にかけては，クマザサ属を主体とするイネ科植生が継続され，とくにⅦａ層ではクマザサ属が繁茂する状況であったと推定される。クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており，雪の中でも緑を保っていることから，大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカの重要な食物となっている。気候条件の厳しい氷期〜晩氷期にクマザサ属が豊富に存在したことは，当時の動物相を考える上で重要である。桜島薩摩テフラ直下のⅦａ層では，クマザサ属に加えて少量ながらススキ属やチガヤ属も見られたものと推定される。クマザサ属は落葉樹の林床でも生育が可能であるが，ススキ属やチガヤ属は日当たりの悪い林床では生育が困難である。このことから，当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく，比較的開かれた環境であったと推定される。

桜島薩摩テフラ直上のⅤ層の堆積当時は，ウシクサ族やクマザサ属などが生育するイネ科植生であり，周辺ではシイ属やクスノキ科などの照葉樹も見られたものと推定される。鹿児島県内の沿岸部では，桜島薩摩テフラ直下層で照葉樹が出現しているところもあるが，本遺跡では照葉樹林の拡大が若干遅れたものと考えられる。

鬼界アカホヤ火山灰（K−Ah，約6,300年前）直下のⅣ層では，シイ属やクスノキ科などの照葉樹林が優勢となり，イネ科植物はあまり見られなくなったものと推定される。鬼界アカホヤ火山灰直上のⅢａ層でも，このような状況が継続されたものと考えられる。

現表土の堆積当時は，ススキ属やチガヤ属，ネザサ節，メダケ節，マダケ属などが見られるイネ科植生であり，調査地点もしくはその周辺では稲作が行われていたものと推定される。ここで行われた稲作は，遺跡の立地や周辺の植生から，畑作の系統（陸稲）であったと考えられる。タケ亜科植物のうち，メダケ節（メダケ）は高さ７ｍ，直径３㎝にもなり，建築用材や竹細工の材料などとして有用である（室井，1969)。また，マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く，建築材や生活用具，食用などとしての利用価値が高い。

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点，植生史研究，第2号，ｐ．27－37.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，ｐ．70－83.

高槻成紀（1992）北に生きるシカたち―シカ，ササそして雪をめぐる生態学―．どうぶつ社.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，９，ｐ．15－29.

室井綽（1969）竹・笹の話―よみもの植物記―，北隆館.

第25表　Ⅰ－15区南壁断面の植物珪酸体分析結果

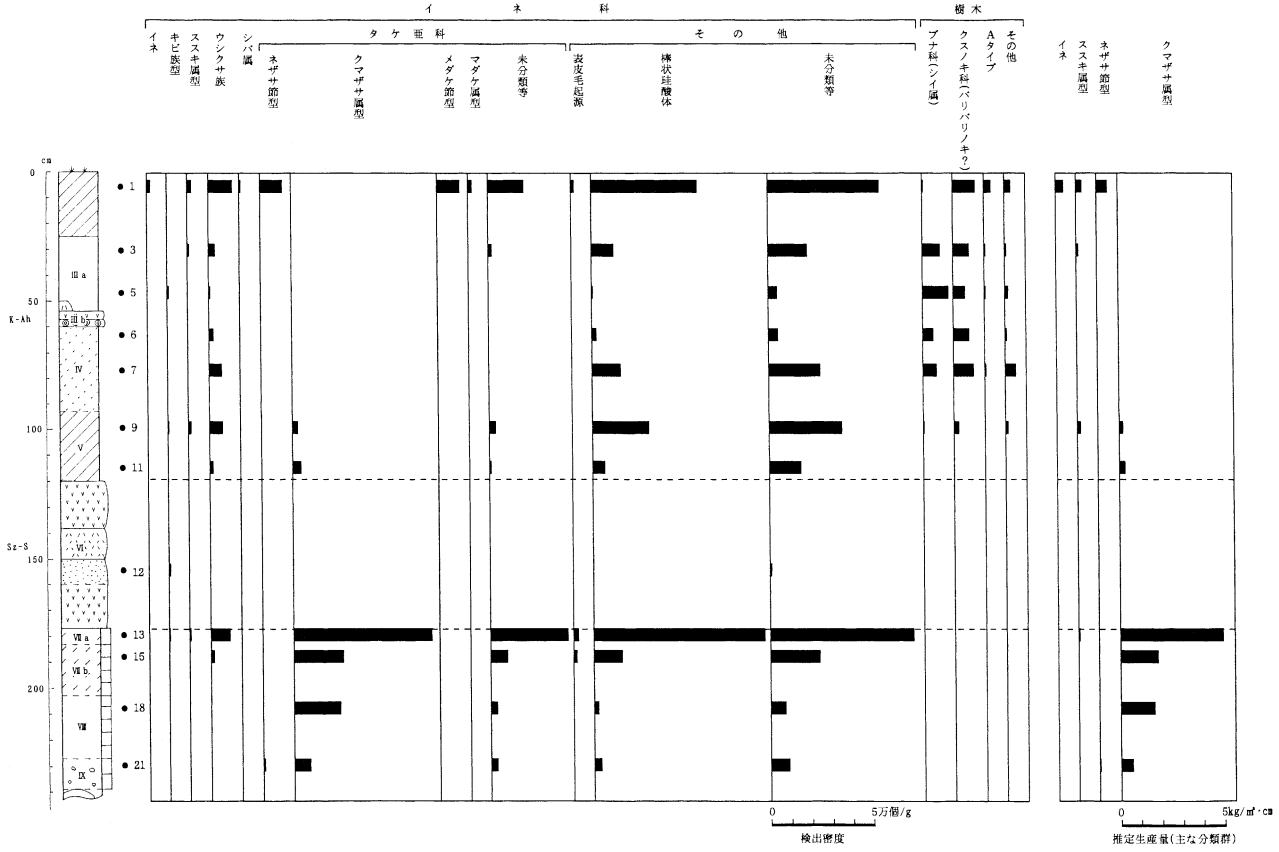
検出密度（単位：100個/ｇ）

分類群／試料	1	3	5	6	7	9	11	12	13	15	18	21
イネ科												
イネ	14											
キビ族型			8			6		8	6			
ススキ属型	22	7				13			6			
ウシクサ族	115	28	8	23	60	63	16		94	15		
シバ属	7											
タケ亜科												
ネザサ節型	108											8
クマザサ属型						25	40		663	239	222	76
メダケ節型	108											
マダケ属型	22											
未分類等	172	21				32	8		375	77	31	30
その他のイネ科												
表皮毛起源	14								25	15		
棒状珪酸体	510	107	8	23	143	272	64		825	139	23	38
未分類等	546	192	45	47	248	354	151	8	700	239	76	91
樹木起源												
ブナ科（シイ属）	7	92	128	55	68	6						
クスノキ科（バリバリノキ？）	108	78	60	78	98	25						
Ａタイプ	36	7	8		8							
その他	29	7	15	8	53	13						
植物珪酸体総数	1818	540	278	234	675	810	278	16	2695	724	352	243

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	0.42											
ススキ属型	0.27	0.09				0.16			0.08			
ネザサ節型	0.52											0.04
クマザサ属型						0.19	0.3		4.97	1.79	1.66	0.57

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

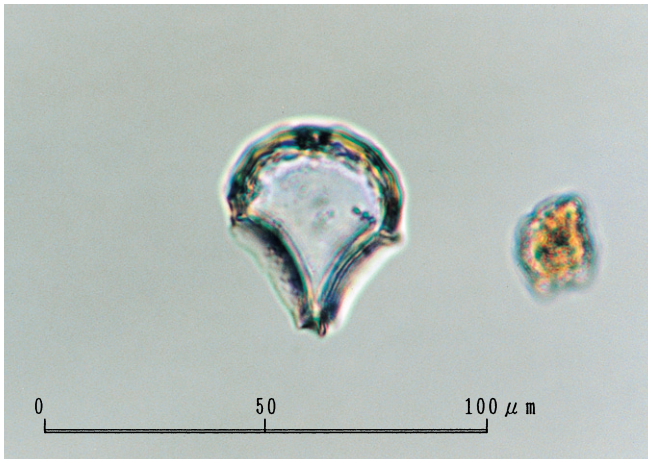


第162図　Ⅰ－15区南断面の植物珪酸体分析結果

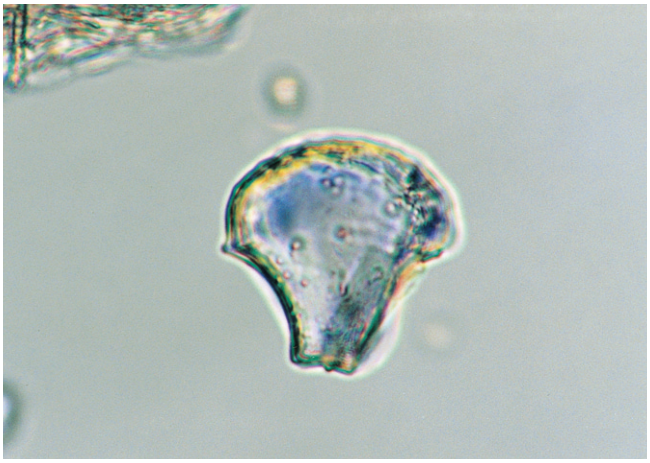
植物珪酸体の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

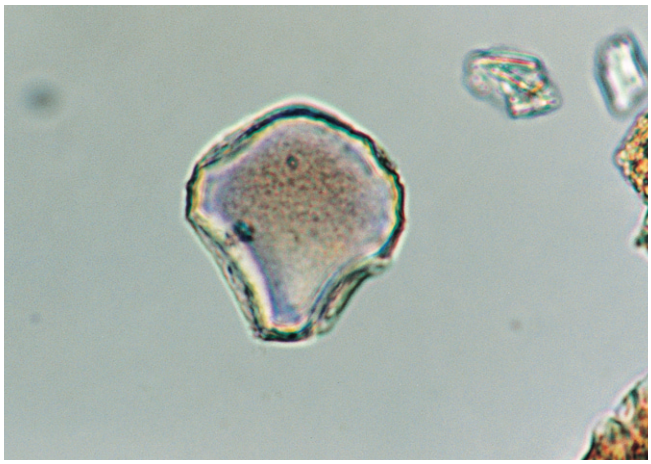
No.	分類群	試料名
1	イネ	1
2	イネ	1
3	ススキ属型	1
4	シバ属	1
5	ネザサ節型	1
6	クマザサ属型	13
7	メダケ節型	1
8	表皮毛起源	1
9	棒状珪酸体	13
10	ブナ科（シイ属）	3
11	クスノキ科（バリバリノキ？）	1
12	樹木Aタイプ	5



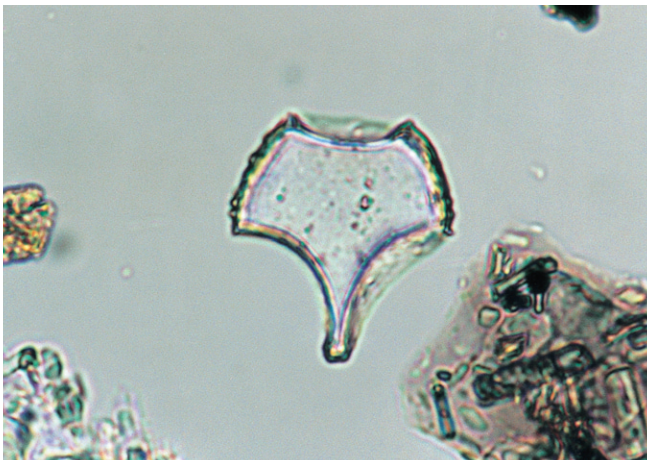
1



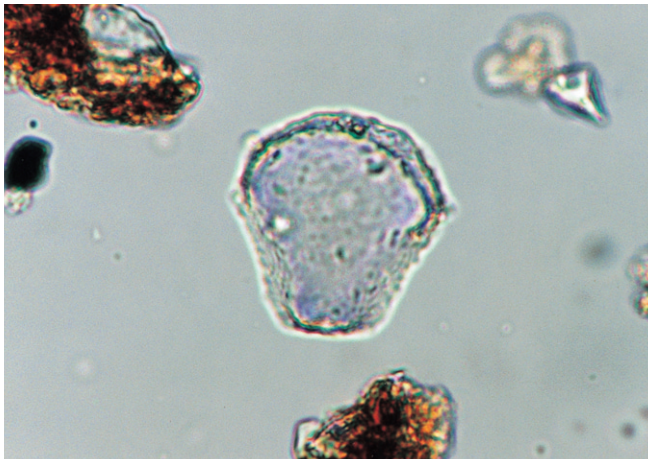
2



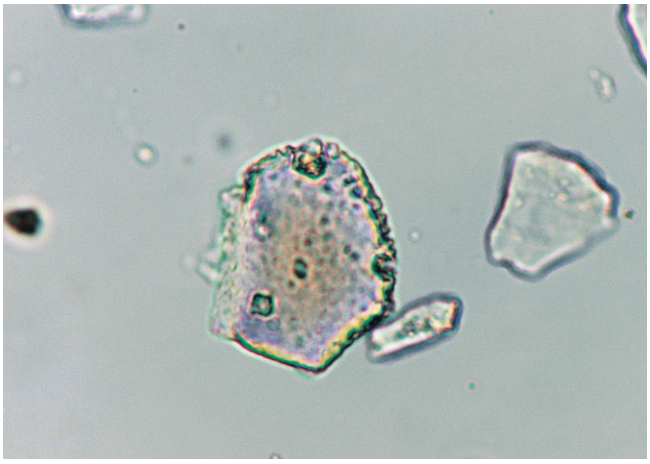
3



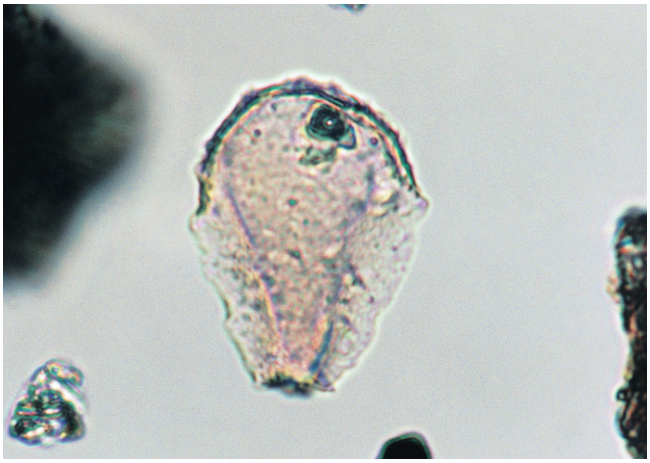
4



5



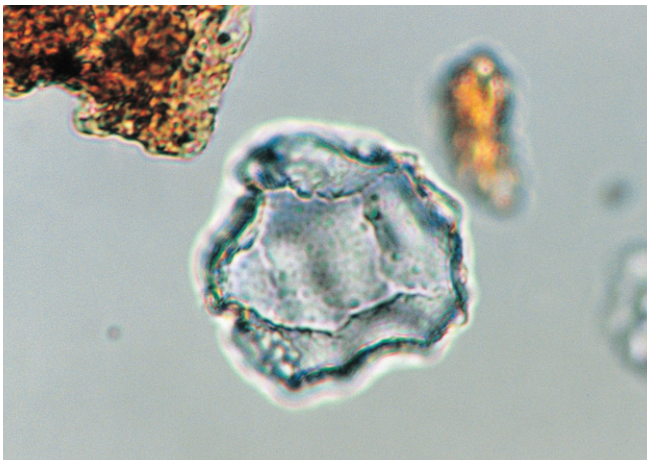
6



7

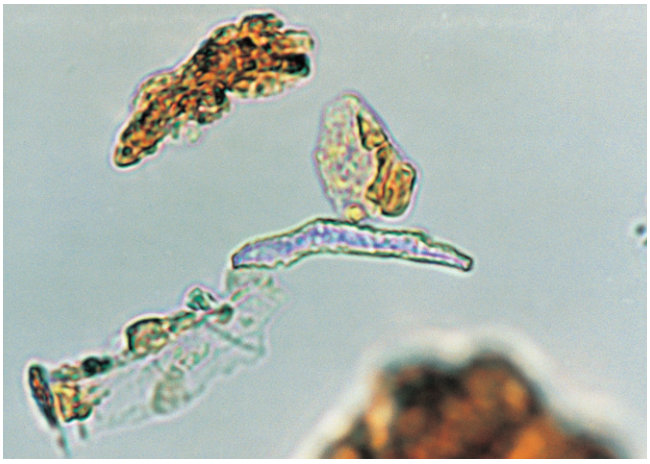
8

9



10

11



12

第Ⅺ章　発掘調査のまとめ

第１節　旧石器時代各文化層の石器群

１．第Ⅰ文化層とその出土石器群について

第Ⅰ文化層はＡＴ下位に位置するものであり，合計12ヶ所のブロックを認識した。石器群ブロックを形成する各ブロックの石材は同一ではなく，ブロックにより差異が認められ，良質の頁岩を主体とするものと，玉髄質の石材を主体とするものに大きく区別できた。このようなブロックを形成する石材に明確な差異が認められることは，ブロック形成に関連することも予想され，慎重に検討する必要がある。

次に各ブロックごとの主な器種構成と石材との関係を概観すると，１ブロックが台形様石器と掻器，５ブロックと８ブロックで台形様石器が出土している。台形様石器は良質頁岩，三船産黒曜石，上牛鼻産黒曜石が使用されている。他の玉髄が主体となる２，３，４，９，10，12ブロックでは玉髄製で一部に使用痕が認められる石器のみであった。しかし，７ブロックは上牛鼻産黒曜石が主となるブロックであり，上層であるⅧ層ブロックの落ち込みである可能性が高く，出土石器も剥片尖頭器に近いものであることから，ここでは取り扱わない。また，11ブロックについても上牛鼻産黒曜石が主体であり，上層文化の可能性が高い。

そして，出土層位的には玉髄系石材の石器群は岩盤に近い比較的下位から出土しているが，沈み込みや浮き上がりも考慮する必要があるため一概に断定しにくい。

以上の石材別構成，器種構成，出土層位などから検討すると，次のような可能性が考えられよう。第一の可能性は，全て同一時期の石器群であり，それぞれの器種が石材選択により製作された。つまり，台形様石器は頁岩，黒曜石を使用し，その他の使用痕が認められる石器などの定形石器以外のものは玉髄を使用したという考えである。玉髄は硬い石材であるため，台形様石器や削器に使用されなかったとするものである。

第二の可能性としては，頁岩，黒曜石を使用した台形様石器などの石器群と玉髄を利用した石器群の時期が異なるという考え方である。硬い玉髄でも，第Ⅱ文化層や第Ⅲ文化層ではナイフ形石器や台形石器として使用されており，ブランティングが不向きな石材ではないため，器種ごとの石材選択は可能性が少ないという考えである。検討の結果，玉髄製石器群は小型品が多く，素材剥片の形状や使用痕の位置，そして二次加工による刃部形成が見られないことを総合的に考え合わせると，第Ⅸ層の第Ⅰ文化層は時期の異なる二時期の石器群として評価できる可能性が高いと考えられる。玉髄系の石器群をⅠａ文化，台形様石器をもつ石器群をⅠｂ文化としておく。

Ⅰａ文化

玉髄系を石材とするものであり，石質は乳白色を呈し，蛋白石に近いものや薄青色で半透明に近いものなど多様であり，石材的に節理面が発達するために自然破砕と人為的な剥離や分割との区別が困難なものもある。しかし，第７図で判断できるように各ブロック（２・３・４・９・12）では細かいチップなどが多く出土し，集中してそれらが小範囲に明確なブロックを形成する。このような集中ブロックの形成は，これらが人為的な石器群としての認識を強くする。出土した石器は定形的なものはなく，縁辺に使用痕が観察される石器が特徴的である。これらの使用痕が観察される石

器はかなり小型であることも特徴と言える。

石器の特徴は最大長２㎝程度の小型石器が多く，以下のように分類できる。

① 尖った端部に使用痕が観察される石器（第18図19・21，第22図37）

② 縁辺の一部に使用痕が観察される石器（第18図16・18，第22図35・36・40，第27図49・50・51）

③ 細かい使用痕状の二次加工がある石器（第18図13・14・20，第27図48）

これらの石器に共通するのは，得られた不定形剥片の形状をそのまま利用しており，その後に折断や整形のための二次加工がなく，すなわち整形の意図が認められないことである。また使用痕は，微細剥離が特徴的に認められるものであり，剥片の縁辺全体ではなく，一部にのみ観察されるものが多い。使用痕は旧石器時代石器によくみられる使用痕剥片と異なり，予想し得ない位置に認められるという特異性が指摘できる。

出土している石核は，平坦な自然礫面や節理面を打面にして，打面を変えずに剥離するもの（第29図66・68）のほか，打面と作業面を交替させながら打面を転移して剥片剥離を行うもの（第27図54）がみられる。いずれも不定形な剥片が得られている。ただし，第29図68は縦長剥片状の整った形状の剥片が連続して剥離されている。

以上のような石器の特徴はこれまで九州で出土例がない。小型の剥片を使用したもので，形態や尖端部の使用痕などの状況が類似するものとして，神奈川県吉岡遺跡群Ｂ５層該当の出土石器があげられよう。

編年的位置付けに関しては，九州で類別がなく困難であるが，極めて硬い玉髄系石材のみを使用するということ，台形様石器以後の通常性に乏しいこと，折断などの剥片の整形が認められず，連続する二次加工による刃部形成が認められないことから，台形様石器出現前に位置付けられる可能性が示唆されよう。南九州旧石器時代石器群編年（宮田2006）のⅠ期に先行する古い時期の可能性が高いことが推定される。

Ⅰｂ文化

第１ブロック出土石器群が特徴的である。良質なシルト質頁岩が使用され，幅広剥片を素材とした台形様石器が出土している。石器組成としては，掻器や使用痕剥片が認められる程度で器種は少ない。第１ブロックでは典型的な石核と剥片の接合資料も出土した。

また，第８ブロックでは三船産黒曜石を使用し，折断と平坦剥離により整形した台形様石器が出土している。

これらのブロックでは，器種として台形様石器が認められるが，他の器種は極めて少なく，またナイフ形石器は認められない。台形様石器は折断が行われ，その後平坦剥離が主となるが，急角度のブランティングも認められる。このような特徴はすでに熊本県曲野遺跡でも認められている。

編年的位置付けに関しては，南九州旧石器時代石器群編年のⅡ期として考えられよう。

２．第Ⅱ文化層について

第Ⅷ層出土の石器は剥片尖頭器，大型三稜尖頭器，中型三稜尖頭器，粘板岩製両面加工尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，掻器，削器などであった。これらの各器種の石器が全て同一時期の共伴石器であるかの検証を最初に行う必要があろう。

第Ⅱ文化層はＡ地区とＢ地区の両地区で出土したが，各々の石材別出土分布図でも明らかなように，Ａ地区とＢ地区では各ブロック及びブロックのまとまりとしてのブロック群の主要な石材の差異が明確である。Ａ地区では上牛鼻産黒曜石と頁岩が主体であり，Ｂ地区では三船産黒曜石が圧倒的に多く出土しているという際立った違いがあった。さらにＡ地区の石材分布においても上牛鼻産黒曜石と頁岩主体の１～３ブロックと頁岩主体の４～13ブロック，そして上牛鼻産黒曜石が優位な14～25ブロックという明らかな違いがみられた。

Ａ地区の各ブロック群の違いは石材だけでなく，主要な器種の差異にも現れている。１～３ブロックでは剥片尖頭器が多く出土した。４～13ブロックは石材的に頁岩が主体という特徴が共通していることから２ユニットとしたが，ここでは中型から小型の三稜尖頭器と台形石器が主要な石器となっている。特に５ブロックと10ブロックの小型三稜尖頭器の石材は，Ⅶ層の三稜尖頭器と共通する良質の頁岩であることから，第Ⅲ文化層に帰属する可能性が高い。

一方，14～25ブロックは上牛鼻産黒曜石が小範囲に多数集中する共通の特徴を有することから３ユニットとしてとらえたものであり，ここでは大型の三稜尖頭器が際立っていた。

以上のようなブロックとユニットの石材差と主要器種の差異については，大きく時期差を反映するものとしてとらえられる可能性が高いと考えられる。頁岩を主石材とする中型～小型の三稜尖頭器と台形石器からなる２ユニットは，その石器群構成がⅦｂ層に近いものであり，最も新しい時期として考えられる。

それでは，１～３ブロックの剥片尖頭器を主体とするブロックと，３ユニットの大型三稜尖頭器との関係はどう理解すべきであろうか。

２・３ブロックの集中する石材は上牛鼻産黒曜石であり，その中に安山岩や砂岩製の剥片尖頭器が多く認められており，また３ユニットの14～24ブロックも集中する石材は同様に上牛鼻産黒曜石であり，その中に頁岩製・安山岩製・上牛鼻産黒曜石製の大型三稜尖頭器が多く出土している。この大型三稜尖頭器に使用されている頁岩（ＳＨ４）は，２ユニットの中～小型三稜尖頭器に使用されている頁岩（ＳＨ１）とは全く異質なものである。

また，これらのブロックではブロックの周囲に剥片尖頭器も出土している。

まず，３ユニットの大型三稜尖頭器と剥片尖頭器の共伴もしくは同時性について検討しておきたい。３ユニットの大型尖頭器が出土しているブロックは，14，17，19，20，21ブロックであり，そして剥片尖頭器は15，17，22ブロックで出土している。この中で両者が共存している15・17ブロックの剥片尖頭器は，中心から最も離れた地点となっており，ブロック外ともとらえられる境界付近といえる。22ブロックでは剥片尖頭器のみの出土である。このように，大型三稜尖頭器と剥片尖頭器の同時期共伴関係は疑わしいと言えよう。さらに剥片尖頭器が多い２・３ブロックでは，大型三稜尖頭器は全く出土していないことも，これを補強する。

以上のことから大型三稜尖頭器と剥片尖頭器は共伴しない可能性が高いと考えておきたい。つまり，石材的に３ユニットとした14～25ブロックは全てが相関関係のあるものではなく，時期別ブロックの集合と言える。つまり，わずかに時期が異なる剥片尖頭器のブロックと大型三稜尖頭器の時期的に異なるブロックが空間的に近接していると理解される。

ところで，剥片尖頭器の石器群と大型三稜尖頭器石器群との時期的前後関係については，近年の

大隈半島北部に位置する桐木・耳取遺跡や城ヶ尾遺跡などの層位的出土状況を総合的に検討した南九州旧石器時代石器群編年（宮田2006）に照らせば，剥片尖頭器石器群が三稜尖頭器石器群より古く位置づけられる。

Ａ地区第Ⅱ文化層出土石器の中で特筆すべき遺物として瀬戸内技法による剥片の接合資料も挙げておきたい。小型で軟質の頁岩を使用したものであるが，山形の頂部を打面にして連続して剥離されたもので，素材剥片の主要剥離面が底面となる典型的な瀬戸内技法と言える。出土ブロックは3ブロックと識別したが，石材分布でこのブロックは東西で異なっており，３ブロックの全ての遺物が同時期と考えられる可能性は少なく，剥片尖頭器との共伴関係については慎重に検討する必要がある。第Ⅱ文化層のなかでの時期的な長さの幅の中で位置付けておきたい。

次にＢ地区の第Ⅱ文化層では，先に述べたように三船産黒曜石が主体となるものであり。近接するブロックのまとまりとして４ユニットと５ユニットを設定した。

出土した石器は，剥片尖頭器，三稜尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，削器などである。ブロックごとに具体的に示すと26ブロックは基部加工ナイフ形石器と台形石器，27・28ブロックは台形石器主体，31ブロックは台形石器主体，32ブロックは三稜尖頭器と剥片尖頭器，34ブロックは基部加工ナイフ主体となっている。

Ａ地区の石器群と異なるのは，中型の先細り剥片を素材とした基部加工ナイフ形石器の存在と，台形石器主体のブロックの存在である。基部加工ナイフ形石器（167，217）は剥片尖頭器の退化形態と理解され，剥片尖頭器としたものの中にも，基部加工がノッチ状ではなく直線的に施されたもの（32ブロックの205）や，打面も加工して剥片尖頭器の定義から外れるもの（33ブロックの212）も認められ，基部加工ナイフとして分類するものもある。このような基部加工ナイフや台形石器石器群は，剥片尖頭器を主体とする石器群の直後に位置づけられるものである（宮田2006）ことが最近明らかとなった。

以上のことから第Ⅱ文化層全てが同一時期ではなく，細かな時期差をもつ変遷が推定される。

Ａ地区　１～３ブロックの剥片尖頭器を主体とする石器群　→　Ａ地区　14～25ブロックの大型三稜尖頭器を含む石器群　→　Ａ地区　４～13ブロックの中型～小型三稜尖頭器を主体とする石器群という時期変遷が推定できよう。

そして，Ｂ地区の基部加工ナイフと台形石器の石器群と，台形石器を主体とする石器群は剥片尖頭器の次の段階の南九州旧石器編年のＶｃ期１群及びＶｃ期２群の石器群として位置付けられるものである。それでは，この石器群はＡ地区のどの段階に相当するかが課題となる。基部加工ナイフの位置から判断して，大型三稜尖頭器の前に位置付けておきたい。

以上のように第Ⅱ文化層は，細かな複数の時期に細分可能である。

３．第Ⅲ文化層について

第Ⅲ文化層はⅦｂ層を主体として，一部Ⅶａ層で取上げたものも含む。Ａ・Ｂ両地区とも出土している。

出土した石器の器種は，小型の三稜尖頭器と小型ナイフ，小型台形石器，掻器，削器などが主体となっている。

第Ⅳ章第１節で記したように，調査直後の調査担当者の見解は，Ⅶａ～Ⅶｂ層の小型ナイフと小型台形石器を主体とする石器群と，Ⅶｂ層の小型三稜尖頭器を主体とする石器として理解されていたが，本報告書の事実記載ではⅦａ～Ⅶｂ層とⅦｂ層を層位的に区別不可能であったために，両方を合わせて第Ⅲ文化層として取り扱った。

出土した石器群はＡ・Ｂ両地区で合計15ブロックを識別できた。この中で11ブロックは小型ナイフ形石器と小型台形石器が多量に出土している。小型ナイフ形石器は，小型の縦長剥片を素材としブランティングを基部や片側先端部近くに施したもので，打面を残置するものも少なくない。台形石器は，縦長剥片を折断して両側縁に細かいブランティングを施したものである。このブロックでは，縦長剥片を折断した剥片の打面が残る部分や末端部が多く出土している。このことは，剥片の中間部が台形石器として多く利用されたことがうかがわれる。また，小型台形石器が多量に出土したことは，細石器的な植刃器としての利用法のためと考えられる。

そして，12ブロックは小型の三稜尖頭器が多数出土したもので，小型ナイフが１点認められるものの，基本的に三稜尖頭器石器群ブロックである。

このような器種構成が異なるブロックの存在は，これらが別の異なる時期に属するものとして考えて差し支えない。本遺跡では，両石器群の層位的な上下関係を区別するのは困難であるが，近年の桐木・耳取遺跡や城ヶ尾遺跡などの層位的成果（宮田2006）を考慮すると，三稜尖頭器石器群が古く，小型ナイフと小型台形石器石器群はより新しく位置づけられる。

以上のことより，前山遺跡第Ⅲ文化層は，第Ⅲａ文化層として三稜尖頭器を主体とする石器群と，第Ⅲｂ文化層の小型ナイフと小型台形石器を主体とする石器群に区別しておきたい。

なお，他のブロックについては混在していると考えられ，一部のブロックではⅧ層の石器群の一部が浮き上がったものも含んでいる。

４．第Ⅳ文化層について

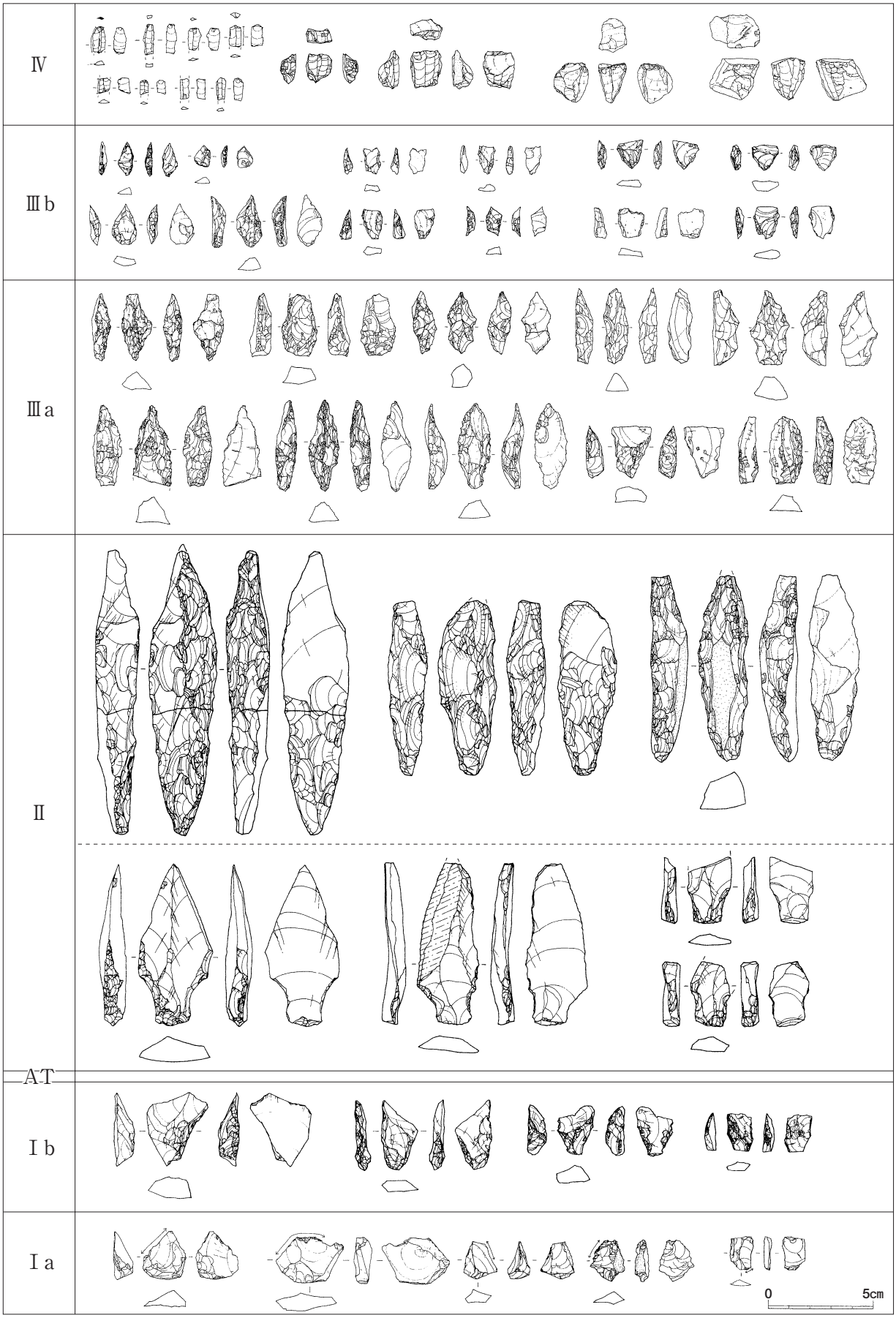
第Ⅶａ層を基本層位とするが，一部Ⅶｂ層として取り上げたものも含む。

Ａ地区で２ヶ所，Ｂ地区で５ヶ所のブロックを識別した。いずれも細石刃と細石刃核を主とする。出土した細石刃核の型式は，船野型細石刃核を主体とするブロックと，野岳・休場型細石刃核を主体とするものに区別できることから，時期的にも区別できるものである。

Ａ地区２ブロックは，霧島系黒曜石を石材とする船野型細石刃核によるものである。

この中で419，420の細石刃核は平坦な打面から側面調整が施されたもので，船野型細石刃核として分類されるものであるが，打面には擦痕が認められるものである。420は山形に屈曲した打面で，細石刃剥離作業面は前後二面あるが，各々の打面とも擦痕が施されている。船野型の形態の細石刃核で打面に擦痕が認められる例は，佐賀県竹木場前田遺跡で１点と長崎県重篭遺跡で２点出土している。細石刃核打面の擦痕は，湧別技法白滝型に特徴的な技術であるが，短絡的に関連付けるのは控えておきたい。

Ｂ地区の３・４ブロックは野岳・休場型細石刃核であり，７ブロックは野岳・休場型と船野型が出土している。また，３・４ブロックは野岳・休場型細石刃核であり，一方４ブロックは上牛鼻産黒曜石が多いという差異がみられた。



第163図　前山遺跡旧石器時代石器群の編年

第２節　旧石器時代における石器石材の層位的変化

今回の報告書作成作業にあたり，出土した石器・剥片・チップ等全ての出土遺物について，その重量を計測した。そして，各層ごとに出土石材重量一覧表を作成したのが第26表である。このなかで主要な石材を選別して，各層ごとに出土石材別グラフを作成したのが第164図である。

まず最初に，各文化層ごとの差異をみよう。

ＡＴの下位であるⅨ層，つまり第Ⅰ文化層では最も重量があったのが玉髄系石材であった。次に上牛鼻産黒曜石，そして台形様石器や石核の接合資料となっていた頁岩（ＳＨ２）であった。

Ⅷ層第Ⅱ文化層では，１位が上牛鼻産黒曜石（ＯＢ１）で，２位が三船産黒曜石（ＯＢ２），３位がＳＨ３と区別した頁岩（ホルンフェルス）であった。第Ⅱ文化層では，新たにＳＨ３が認められるようになる。これは剥片尖頭器に特徴的に使用される石材である。また，中型三稜尖頭器に特徴的に使用される頁岩（ＳＨ１）も認められるようになる。

Ⅶｂ層の第Ⅲ文化層は，小型三稜尖頭器石器群のⅢａ文化と小型ナイフ形石器及び小型台形石器が特徴となるⅢｂ文化層に区分できるがこの表では細別できない。１位が三船産黒曜石，２位が上牛鼻産黒曜石，３位が玉髄系石材となる。ここでは黒曜石の１位・２位の順序が，第Ⅱ文化層と逆転している。

Ⅶａ層の第Ⅳ文化層になると，１位が三船産黒曜石，２位が上牛鼻産黒曜石，３位が玉髄系石材であり，Ⅶｂ層の石材と順位は変わらないことが理解される。

では次に，石材ごとの層位的な増減を概観してみよう。

黒曜石は，上牛鼻産，三船産ともにⅨ層から認められる。両者を比較すると，Ⅸ層では上牛鼻産黒曜石の方が多い。Ⅷ層になると，全石材のなかで圧倒的に黒曜石の量が増加しており，そのなかで上牛鼻産黒曜石は総重量４kgを超すほどになる。また三船産黒曜石も増加しており，1.8kgを超える。ここで両黒曜石の差は倍以上となっているが，Ａ地点とＢ地点では出土量が大きく異なり，Ａ地区では３倍の開きが認められる。つまり，比較的古い時期に上牛鼻産黒曜石の使用度が高いということを示している。

しかし，Ⅶｂ層では上牛鼻産黒曜石と三船産黒曜石の順位が逆転しており，その現象はⅦａ層まで続く。石器器種と黒曜石の違いによる指向化は認められず，集団と集団の関係，あるいは行動領域などを含めて，改めてその要因を検討する必要がある。

また，Ⅶｂ層から新たに桑ノ木津留・上青木系黒曜石が使用されるようになる。これは小型ナイフ形石器や小型台形石器の製作と関連すると考えられ，そしてⅦａ層の細石刃製作に多用されることからくる特徴と言えそうである。

安山岩はⅧ層からⅦａ層まで量的には多くはないが，一定量出土しているという特徴がみられる。

玉髄系石材はⅨ層が圧倒的に多く，約２kgを超すほど出土している。この硬い石材を使用した背景は何なのか明確ではないが，黒曜石が使用される以前の石材指向という解釈も成り立つかもしれない。その後，Ⅷ層からⅦａ層までは一定量の比較的多い比率で使用され続けている。このことは産地が近い可能性を示しているとも考えられる。

頁岩系の石材については大きく５区分した。ＳＨ１は中～小型三稜尖頭器に多く使用される石材であり，Ⅷ層とⅦｂ層に多い。Ⅸ層出土のものは沈み込みであろう。ＳＨ２はＡＴ下位の台形様石

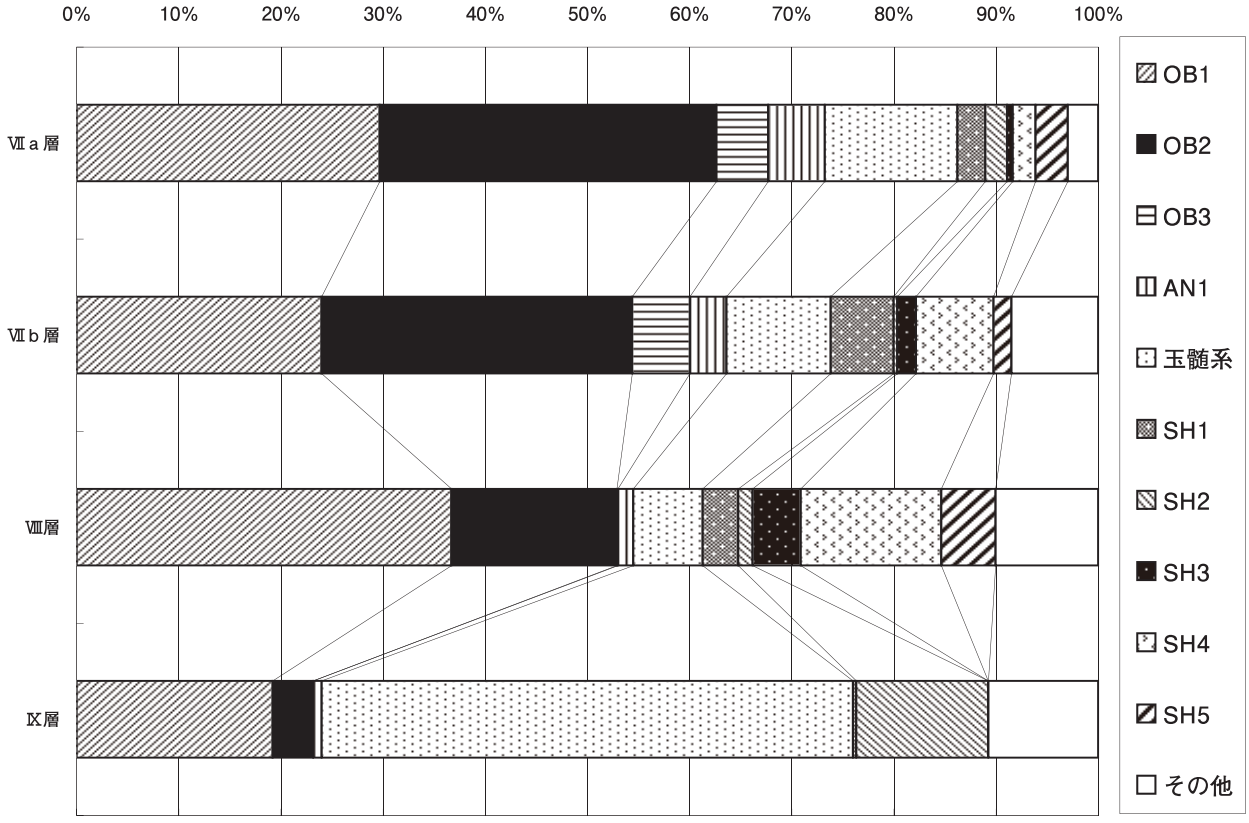
器に使用された石材で，Ⅸ層に圧倒的に集中している。ＳＨ３は剥片尖頭器に特徴的に使用される石材であり，Ⅷ層にほぼ集中した使用がみられる。ＳＨ４とした風化したホルンフェルスは大型三稜尖頭器などに使用されるもので，Ⅷ層に著しく出土量が集中している。ＳＨ５は粘板岩であり，Ⅷ層に出土量の集中度が高い。これはⅧ層に特徴的な両面加工尖頭器として利用されるからである。

頁岩類は特定の器種と密接に結び付いており，出土量の特徴的な増加と減少は，石器群のなかでのそれらの器種の存在のみでなく，石器群の位置付けにも反映している。

以上のように，前山遺跡の旧石器時代石器群について，出土した石材とその重量及び石材のなかでの出土比率を検討することにより，石器群とそれを製作した集団の消費石材に関する実態の一端が浮かび上がってくる。

第26表　旧石器時代各層の石材別重量表

石　材　名		Ⅶａ層	Ⅶｂ層	Ⅷ層	Ⅸ層	計(g)
上牛鼻産黒曜石	OB1	1527.76	1061.62	4267.99	845.25	7702.62
三船産黒曜石	OB2	1697.99	1347.74	1889.3	175.01	5110.04
桑ノ木津留・上青木系黒曜石	OB3	261.27	249.95	12.2	0	523.42
安山岩	AN1	284.76	158.35	174.52	35.95	653.58
玉髄系石材	—	669.72	452.13	790.41	2291.3	4203.56
頁岩１	SH1	140.68	273.54	405.43	14.54	834.19
頁岩２	SH2	109.14	15.45	164.61	569.2	858.4
頁岩３	SH3	28.97	80.92	546.76	0	656.65
頁岩４	SH4	115.01	336.3	1604.34	0	2055.65
頁岩５	SH5	162.26	77.51	616.71	1.03	857.51
その他	—	153.61	376.52	1170.94	473.54	2174.61
合計（ｇ）		5151.17	4430.03	11643.21	4405.82	25630.23



第164図　旧石器時代各層の石材別重量比グラフ

第３節　三稜尖頭器の変遷と小型化

前山遺跡では，Ⅷ層の第Ⅱ文化層とⅦｂ層の第Ⅲ文化層から三稜尖頭器が出土したことにより，その器種の時期的変遷を具体的にうかがい知ることが可能であった。ここでは，その概要を簡単に示すことにする。

Ａ地区第Ⅱ文化層で出土した大型三稜尖頭器は，長さ13㎝を超すものも認められ，いわゆる三面加工の三稜尖頭器や基部三面加工という特徴を有するものである。三面加工のものは素材剥片が明確でないが，基部三面加工のものは縦長剥片に近い剥片や横長剥片両方が使用されている。前節で触れたように，剥片尖頭器との共伴関係については慎重でありたい。大型三稜尖頭器と剥片尖頭器との共伴関係は，近接して出土した例もあり完全に否定しえないが，逆にこのような例を基本として考えると，全ての石器群が共伴することとなり注意を要する。

Ｂ地区第Ⅱ文化層の三稜尖頭器は，Ａ地区のものよりわずかに小さいが，長さ約８～９㎝程度と中型である。整形加工は，三面加工や基部三面加工が認められ，技術的にはＡ地区と同様である。使用される石材は，縦長剥片及び縦長剥片に近いものが利用されている。

次にⅦｂ層の第Ⅲｂ文化として理解された三稜尖頭器を主体とする石器群は，Ｂ地区12ブロックでほぼ純粋な石器群として確認された。器長は約３～４㎝を測る小型三稜尖頭器であり，使用されている石材は上牛鼻産黒曜石及び三船産黒曜石が主体であった。素材は基本的に横長剥片であり，第Ⅱ文化層とは全く異なるものであった。

またＡ地区のⅦｂ層から出土した三稜尖頭器は，長さ４～５㎝を測るものが多いが，それは使用される石材が頁岩系（ＳＨ１）である違いと考えられる。素材剥片は基本的に横長剥片であり，二面加工のほか基部三面加工も認められる。

以上のような三稜尖頭器の層位的出土例は，三稜尖頭器が時期が新しくなると小型化していくことを明確にとらえることができる事例となる。

三稜尖頭器については，これまでの岩谷史記（1997）や萩原博文（1994）などの分類及び小型のものは地域性とする議論や使用石材による検討を踏まえて，近年の桑波田武士による出土資料の統計的分析（桑波田2003）や，松本茂の「大型利器需要低減説」（2005）などで小型化が指摘されているが，本遺跡での層位的出土により具体的に明らかになった。

第４節　前山遺跡と南九州の旧石器時代

前山遺跡は調査直後から九州内外の研究者により注目されていた。それは，シラスが厚く堆積した鹿児島県では希少なＡＴ下位石器群の検出と，ＡＴ上位石器群の多彩な器種構成及び層位的な出土によるものであった。特に剥片尖頭器と大型三稜尖頭器，そして瀬戸内技法関連の接合資料などの同一層での出土例は，調査当時の南九州旧石器時代研究にとって画期的なものであり，またⅧ層からⅦｂ層，そしてⅦａ層へと各石器の小型化が明瞭な層位的出土によって示されたことは大きな成果であった。

ところが，近年の大隅半島北部に所在する城ヶ尾・桐木耳取遺跡などの一連の調査では，厚く堆積した土層と，その間にＰ15やＰ17などのローカルテフラが堆積しており，それまで同一時期の共伴関係としてとらえられていた各種の石器が，テフラにより分断され上下の層から出土し，石器群

について再検討を余儀なくされることとなった。

すなわち，Ｐ17の下位から剥片尖頭器が出土し，Ｐ17付近では今峠型ナイフ形石器と先細りの剥片を使用した基部加工ナイフが認められ，そして上位に位置するＰ15の上層から三稜尖頭器が多量に出土するという事実である。

つまり，薩摩半島での薄い堆積のなかでの石器共伴関係については，混在の可能性も含めて慎重に検討する必要があることが明らかとなった（宮田2006）。

そこで，今回報告書作成を実施するにあたり，同一層出土をそのまま共伴とする単純な理解ではなく，ブロックの認定から慎重に行い，各種石器石材の出土分布を基本として，さらに遺物の浮き上がりや沈み込みなどの状況などを考慮して，基本的な文化層の検討を行った。

しかし，整理期間的な制約により接合作業に時間をかけることができず，ブロック内及びブロック間の共伴関係については深く検討できず残念であった。

本報告書では，以上のような経緯を踏まえて慎重に検討を行った結果，第Ⅱ文化層の剥片尖頭器を主体とする石器群から第Ⅲａ文化層の小型三稜尖頭器を主体とする石器群へ，そして第Ⅲｂ文化層の小型ナイフと小型台形石器への変遷を具体的に示す良好な遺跡であることが明らかにできた。これらの変遷は，九州内でもすでに研究者の一致した見解となっている。

また第Ⅱ文化層については，剥片尖頭器を主体とするブロックと，大型三稜尖頭器石器群のブロックとがそれぞれ異なる空間を形成しており，そのまま共伴と言うより時期的な差異を有する可能性が指摘できたことは大きな成果と言えよう。ただしこれは整理担当者の見解であり，今後の再検討が必要であることは言うまでもない。また瀬戸内技法との関係については，三稜尖頭器と共伴するⅢａ文化層でも認められたが，第Ⅱ文化層のものについては石材の違いもあり，明確な位置付けは困難であった。

最後に，調査終了時から性格や位置付けを保留していたＡＴ下位の玉髄製小型石器群については，自然破砕片ではなく，人為的な剥片及び石器として積極的に評価することにした。それは個別剥片や石器の細かな観察を根拠にするものであり，またブロックの形成という点もそれを補強している。これに関しては言い古された言葉であるが，類例を待ちたい。

【参考文献】

阿部　敬　2005　「“剥片尖頭器”はなぜ消えたか？－後期旧石器時代後半期前葉から中葉の東南九州における技術構造の変容－」『物質文化』79

岩谷史記　1997　「九州尖頭器石器群の中に見る三稜尖頭器の位置」『九州旧石器』第3号

桑波田武士　2003　「鹿児島県のナイフ形石器文化後半期の研究」『縄文の森から』創刊号

杉原敏之　2005　「列島西端における角錐状石器の出現」『地域と文化の考古学Ⅰ』

田島龍太　1997　「佐賀県域の細石器文化研究の現状について」『九州の細石器文化』

萩原博文　1994　「九州における角錐状石器の編年と地域的特徴」『古代文化』第46巻第９号

萩原博文　1996　「西南日本後期旧石器時代後半期における石器群の構造変容」『考古学研究』第43巻第３号

馬籠亮道・長野眞一　2006　「城ヶ尾遺跡の再検討」『縄文の森から』第４号

松本　茂　2005　「九州地方のナイフ形石器終末期とその前後」『石器文化研究』12

宮下雅史　1999　「長崎市重篭遺跡の採集資料」『西海考古』創刊号

宮田栄二　1996　「南九州における細石刃文化終末期の様相」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集

宮田栄二　2004　「九州地方－九州細石刃石器群の東西対極構造と集団－」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器文化談話会20周年記念論集

宮田栄二　2006　「九州東南部の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』

宮田栄二　2006　「剥片尖頭器石器群とその前後の石器群について」『縄文の森から』第４号

村崎孝宏　2003　「姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の石器群に関する基礎的研究－耳切遺跡Ａ地点第Ⅰ石器文化石器群を中心として－」『先史学・考古学論究Ⅳ』考古学研究室創設30周年記念論文集

第５節　縄文時代以降の土器について

１．縄文時代の土器について

Ⅰ類土器は貝殻条痕文を施した後，異なる文様を施す二重施文の手法をもつ特徴から，前平式や志風頭式（上杉2000）に比定できる。

Ⅱ類土器は胴部に貝殻押引文を施す特徴から吉田式に比定できる。2個体分の存在が考えられる。また，胎土に白色透明の石英・長石類や金色雲母を多く含む。これらの鉱物は花崗岩起源であり，本遺跡の位置する地質とは異なっていることから，この2個体は搬入品の可能性が高い。

Ⅲ類土器は横位の貝殻条線文を施す特徴から，従来「円筒形条痕文土器」と呼称されてきたもので，中原Ⅲ・Ⅳ式（木崎1996）や一野式（水ノ江1998）に比定できる。

Ⅳ類土器はバケツ形を呈し，貝殻腹縁による条線文を施す特徴から，桑ノ丸式に比定できる。

Ⅴ類土器は壺形土器の頸部と考えられ，「椈ノ原式」（新東1988）に比定できる。

Ⅵ類土器は轟Ｂ式に比定でき，突帯と条痕の違いにより2類に細分した。Ⅵａ類は「単純形」轟Ｂ式に相当する。Ⅵｂ類は「屈曲形」轟Ｂ式の中でも新しく位置づけられるものである。

Ⅶ類土器は沈線文を幾何学的に施すことから，曽畑式に比定できる。

Ⅷ類土器は縄文時代後期前半に位置づけられると考えられる土器を一括したものである。

Ⅸ類土器は型式不明の土器である。

【参考文献】
上杉彰紀2000「調整技法からみた縄文早期貝殻文土器」『南九州縄文通信』14
木崎康弘1996「第Ⅴ章総括」『蒲生・上の原遺跡』熊本県埋蔵文化財発掘調査報告書（158）
新東晃一1988「塞ノ神式土器再考」『日本民族・文化の生成』
水ノ江和同1998「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器－論攷編－』

２．弥生～古墳時代の遺物について

該期の遺物の総数はそれほど多くはないが，全形の分かる資料がまとまっている。特に土坑内からは全形の分かる資料が，壺形土器5点，甕形土器1点出土しており，貴重な一括資料となる。
そのうち，甕は中津野式に比定できる。一方，壺は底部形態にヴァリエーションが見られる。それは平底と丸底である。丸底は中津野式の特徴として捉えられるが，平底は松木薗式の特徴である。従って，土坑内出土遺物は松木薗式の新しい段階から中津野式の時期に位置づけられる。

また，包含層出土の遺物に関しては小破片が多く，時期比定は難しいが，甕の67・壺の73は中津野式に比定できる。また，壺の75は丸平底であり，76は平底を呈しており，松木薗式に比定できる。以上をまとめると，土坑内出土遺物も含めて，本遺跡の土器は松木薗式の新しい段階から中津野式に位置づけられよう。

なお，使用に関する特徴として注目できるのは，壺の58にススが付着していることである。ススは外面の突帯上位に付着している。最近，ススが付着している壺形土器が確認されることが多くなっており（中村2005ほか），今後注意したい。

【参考文献】
中村直子2005「5.2古墳時代の遺物について」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』19

写　真　図　版

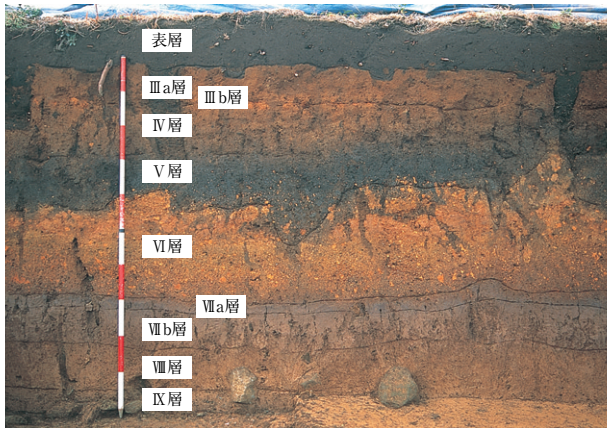
①

②

①調査区周辺（調査前・南東より）　②調査区全景（北より）

図版2

①



②

③

④

⑤

①Ⅰ－15・16区南壁
②Ⅰ－15区地質調査地点土層
③北東部より調査区を仰ぐ
④発掘調査風景
⑤A地区西部岩盤露出状況